

博士論文

正岡子規自筆『竹乃里歌』の語彙研究

東京女子大学大学院人間科学研究科

石井 翔子



博士論文

正岡子規自筆『竹乃里歌』の語彙研究

*A Study of the Vocabulary in Masaoka Shiki's Take no Satouta*

二〇一四年十一月二十八日

東京女子大学大学院人間科学研究科

石井 翔子

# 目次

## 序章 本稿の目的と方法

## 第一節 研究目的

## 第二節 研究資料と方法

### 第三節 先行研究

第一部 語彙分類論

## 第一章 子規の語彙分類について

## 第一節 はじめに

## 第二節 子規短歌の名詞の意味分野

### 第三節 意味分野ごとの語彙の推移

第一項 「器物語彙」「宮室語彙」「服装語彙」について

第二項 「人事語彙」について

### 第三項 「自然物語彙」について

第四項 「動物語彙」について

[illegible][illegible]



第四節	まとめ	62
第二部	外来語論	
第一章	漢語について	
第一節	はじめに	84
第二節	漢語の使用実態	86
第一項	意味分野	
第二項	古典和歌との重複	
第三項	多字漢語	
第三節	まとめ	141
第二章	欧米語について	
第一節	はじめに	153
第二節	欧米語の使用実態	154
第三節	まとめ	160
第三章	近代歌人との比較	
第一節	落合直文の外来語	163

	第一項	漢語について	.
	第二項	欧米語について	.
	第三項	外来語のまとめ	.
第二節	与謝野鉄幹の外来語		.
第一項	漢語について		.
第二項	欧米語について		.
第三項	外来語のまとめ		.
第三節	与謝野晶子の外来語		.
第一項	漢語について		.
第二項	欧米語について		.
第三項	外来語のまとめ		.
第三部	自然語彙論		.
第一章	植物語彙について		.
第一節	はじめに		.
第二節	植物語彙の使用実態		.
198			198
185			185
168			168

第一項	植物の種類	
第二項	植物の部位	
第三項	植物の集合	
第四項	植物による空間（陰）	
第五項	まとめ	
第三節	植物語彙の表現方法	・
第四節	与謝野鉄幹との比較	・
第一項	植物語彙の内容	・
第二項	植物語彙の表現方法	・
第五節	まとめ	・
第二章	天文語彙について	
第一節	はじめに	・
第二節	天文語彙の使用実態	・
第一項	気象の種類	・
第二項	天体の種類	・
第三項	古典和歌との対応	・

第三節	天文語彙の表現方法	・	428
第一項	気象の感覚表現	・	
第二項	天体の感覚表現	・	
第四節	与謝野鉄幹との比較	・	485
第一項	気象語彙の使用実態	・	
第二項	天体語彙の使用実態	・	
第三項	気象語彙と天体語彙の表現方法	・	
第五節	まとめ	・	505
第三章	地名語彙について	・	
第一節	はじめに	・	512
第二節	地名語彙の使用実態	・	512
第一項	地名の属する地域	・	
第二項	紀行文との差異	・	
第三節	地名語彙の表現方法	・	548
第四節	与謝野鉄幹との比較	・	554
第一項	鉄幹短歌の地名語彙	・	

第二章	地名語彙の表現方法	
第五節	まとめ	574
第四部	人間語彙論	
第一章	人物語彙について	
第一節	人物語彙の使用実態	585
第一項	はじめに	
第二項	意味分野ごとの分類	
第二節	人物語彙の表現方法	622
第三節	与謝野鉄幹との比較	639
第一項	鉄幹の人物語彙の使用実態	
第二項	鉄幹の人物語彙の表現方法	
第四節	まとめ	662
結章		
附章	子規の分類語彙一覧	673

## 序章 本稿の目的と方法

### 第一節 研究目的

正岡子規の短歌作品は、自筆稿本「竹乃里歌」で最も古い作品は明治十五年の次の作品である。

隅田川堤の櫻さくころよ花のにしきをきて歸るらん

(一・十五年)

本格的な作歌活動は明治十八年に井出真棹に師事した時からであり、子規も「古今集崇拜」<sup>注1</sup>の立場であった。法政大学付属図書館子規文庫に所蔵されている書物に、子規所蔵の古典籍が多くあるが和歌に関するものには次のものがある<sup>注2</sup>。

『日本歌学全書』第一～七、九～十二編

(大橋新太郎編 博文館)

『賀茂真淵翁全集』上・下

(佐々木信綱編 博文館 一八九七、一八九八年(続日本歌学全書))

『本居宣長翁全集』

(佐々木信綱編 博文館 一八九八年四月(続日本歌学全書))

『香川景樹翁全集』上巻・下巻

(佐々木信綱編 博文館 一八九八年六、八月(続日本歌学全書 佐々木信綱編纂 第四、五編))

『小澤蘆庵翁全集』

(佐々木信綱編 博文館 一八九八年十月(続日本歌学全書))

『近世名家歌集』上・下

(佐々木信綱編 博文館 一八九八、一八九九年(続日本歌学全書))

『金塊和歌集』1・2・3

(源実朝著 河内屋茂兵衛[ほか十軒] 一六八七年五月)

- 『井蛙抄』 1～6巻  
 (頓阿編 村上清三郎[ほか一軒] 一七〇九年八月)
- 『あずまうた』 上・中・下  
 (加藤枝直著 加藤千蔭編 瑞玉堂 一八〇二年三月)
- 『絵本通宝志』 3・4  
 (橘守国画 出版者不明 一七二九年)
- 『明題和歌全集』 秋部下  
 (今川了俊編 出版者不明 出版年不明)
- 『当世百歌仙』  
 (多田清興撰 阪本屋丈二郎[ほか七軒] 一八五五年序・跋刊)
- 『夢窓国師御詠』  
 (夢窓疎石 天竜寺 出版年不明)
- 『和歌集』  
 (著者不明 製作者不明 制作年不明)
- 『柳園家集』  
 (海野幸典 海野 一八五〇年十二月)
- 『袖珍歌枕』  
 (著者不明 出雲寺和泉 一七〇八年五月)
- 『古今和歌集一首撰』  
 (大森盛顕 岡村屋庄助[ほか五軒] 一八五三年一月)
- 『勝地吐懷編』 上・下  
 (契沖著 平安書林[ほか七軒] 一九七二年十一月)
- 『言靈舎広吟万玉集』 上・中・下  
 (源保之著 言靈舎社中 一八三九年)
- 『戴恩記』  
 (松永貞徳著 永田長兵衛 一六八二年)
- 『庚子道の記』  
 (白拍子武女著 清水浜臣編 英平吉[ほか一軒] 一八〇九年)
- 『竹園抄』  
 (藤原為顕 出版者不明 一六四四年九月)
- 『和漢朗詠集』 卷上・卷下  
 (藤原公任編 村上平樂寺 一六五七年十一月)

- 『古今和歌集』上・下 (紀貫之編 新版 松会開板 一六七四年一月)
- 『古今和歌集』上・下 (紀貫之編 出版者不明 一六六三年十月)
- 『詠歌大概抄』1・2・3 (細川幽斎 風月庄左衛門尉 一六六八年十月)
- 『三玉和歌集類題』春部・夏部・秋部・冬部・恋部・雑部上・雑部下 (松井幸隆編 河南四郎右衛門、吉田四郎右衛門 一六九六年二月)
- 『藏笥百首』 (藤井懶斎、真鍋忠庵 出版者不明 出版年不明)
- 『桂園一枝拾遺』 (香川景樹詠 合刻 出雲寺文治郎[ほか三軒] 一八五一年三月)
- 『和歌八重垣』1・7 (有賀長伯著 若山市郎兵衛[ほか一軒] 一七六八年五月)
- 『橘千蔭翁歌集』上・下 (加藤千蔭(橘千蔭) 須原屋佐助 一八五一年)
- 『列女百人一首』 (緑亭川柳輯 完 山口屋藤兵衛 一八四七年一月)
- 『草庵和歌集類題』 (蜂谷又玄編 出版者不明 一六九五年)
- 『定家卿未来記雨中吟他五書』 (伝藤原定家 製作者不明 製作年不明)
- 『和漢朗詠集』 (藤原公任撰 松尾芭蕉真跡 竹心りう和 一八六六年十月)
- 『万葉集略解』第三編 (橘千蔭著 図書出版会社 一八九一年十月)
- 『梶の葉』上巻・下巻 (徳山梶子著 平安書舎 一七〇七年)
- 『万葉考』1・6巻 (賀茂真淵著 黒生 一七六八年十一月)



『貞操節義古今名婦百首』全

『類題明治和歌集』上・下

『万葉集代匠紀』卷1～4・卷6

『万葉集代匠紀忽积』

『いほへなみ』

『訂正増評金塊集』

『手向け草』

『改訂増補麓の塵』1～4

『狂歌集』[下]

『堀河院艶書合』上・下

『鳴羽搔』

『絵本鶯宿梅』

『兼好法師家集』上・下

『和歌題林愚抄』春・夏・秋・冬・恋・雑

『狂歌扶桑集』

『七十一番職人歌合』

(児玉永成編 大倉書房 一八八一年十二月)

(朝比奈泰吉撰 江島喜兵衛[ほか七軒] 一八八〇年五月)

(三好仲雄編 四海堂 一九〇〇年八月・一九〇一年八月)

(三好仲雄編 四海堂 一九〇〇年八月)

(本間游清撰 伊勢屋忠右衛門 一八一九年二月成立)

(森与重編 森与重 一八九九年五月)

(本居宣長編 田中道麻呂 一七八二年)

(有賀長伯編 柳原喜兵衛 一八八一年一月)

(六樹園撰 出版者不明 出版年不明)

(藤原公実、周防内侍ほか 洛陽書林 一六六一年六月)

(著者不明 出版者不明 出版年不明)

(橘守国画 出版者不明 一七四〇年)

(吉田兼好著 洛陽今出川 一六六四年)

(山科言緒編 村上平林寺 一六九二年十月)

(西来居未仏編 出版者不明 天保年間)

(伝東坊城和長書 土佐光信画 野田藤八郎 一七四四年)

- 『芍藥亭文集』初編  
 (芍藥亭長根 栗花園総長 一八三四年六月)
- 『千紅万紫』全  
 (蜀山人著 岡田屋嘉七 一八一七年春成立)
- 『江戸職人歌合』上・下  
 (石原正明著 永樂屋東四郎 一八〇八年五月序)
- 『狂歌吉原形四季細見』  
 (六樹園、浅草庵〔ほか〕花笠連 一八二五年冬)
- 『狂歌集まさきのつな』  
 (六樹園〔ほか〕撰 蘭溪亭泉〔ほか〕輯 出版者不明 一八二〇年序)
- 『狂歌集江戸砂子』  
 (六樹園〔ほか〕撰 出版者不明 出版年不明)
- 『狂歌作者部類』  
 (著者不明 出版者不明 出版年不明)
- 『古今狂歌狂句集』全  
 (蜃気楼主人撰 博文館 一八九一年七月(東洋文芸全書))
- 『連歌至要鈔』  
 (著者不明 金屋平兵衛 一六九九年一月)
- 『菟玖婆廼山口』  
 (阪昌功 出版者不明 一八三三年九月下旬自跋)
- 『三籟集』  
 (西山昌林編 西山昌林 一七三四年十一月)
- 『連歌雨夜記』  
 (宗長著 三ヶ屋五郎兵衛 一六九七年九月)
- 『連歌大発句帳』春部上・春部中・春部下・夏部上・夏部下・秋部上・秋部中・秋部下・冬部上・冬部下  
 (長尾平兵衛 一六六六年八月)
- 『連歌百談』  
 (白雲堂無相著 全 出版者不明 一八二〇年一月)
- 『連歌茶談』前編全・後編全・続編全・残編全  
 (白雲堂無相著 出版者不明 一八二一―一八二四年刊)

『老い葉』上ノ本・上ノ末・下の本・下の末

(老葉／宗祇著 自註宗長註、觀明軒能順編 唐本屋八郎兵衛一七〇四年四月)

『新撰菟玖波集』1・2 (一条冬良、宗祇、兼載「ほか」編 長谷川庄右衛門 一七四三年)

『連歌新式追加并新式今案等』 (二條良基著 出版者不明 一七一四年十一月)

『歌俳百人撰』1・4 (海寿翁編 出版者不明 出版年不明)

『狂歌集』 (六樹園撰 出版者不明 出版年不明)

『狂歌集』「上」 (六樹園撰 出版者不明 出版年不明)

『僧良寛歌集』 (村山恒二郎編 小林二郎 一八七九年三月)

右の蔵書の他に、子規は古典和歌の和歌を抄出し「古今選」にまとめている。

このように子規は古典和歌を学んでいたが、明治三十一年に短歌革新を発表し、その主張の一つには次のものがある<sup>注3</sup>。引用文中の( )は私に補ったものである。

…此腐敗(和歌の腐敗)と申すは趣向の變化せざるが原因にて、又趣向の變化せざるは用語の少きが原因と被存候。故に趣向の變化を望まば是非とも用語の區域を廣くせざるべからず、用語多くなれば従つて趣向も變化可致候。…文學にても馬、梅、蝶、菊、文等の語をはじめ一切の漢語を除き候はゞ如何なる者が出來候べき。…漢語にても洋語にても文學的に用ゐられなば皆歌の詞と可申候。

子規は和歌の「腐敗」の原因に「趣向の變化せざる」ことを挙げている。そして「趣向の變化」の為に、「用語

の區域」の拡大の必要を唱えている。「用語の區域」の拡大について、「六たび歌よみに與ふる書」<sup>注4</sup>で、「雅語俗語漢語洋語必要次第用うる積りに候。」と述べている。

子規が、右のような理論とともにその実践を試みていることは、既に先行研究で指摘されている。<sup>注5</sup>そこで本稿では、正岡子規自筆短歌に使用された語彙を対象にし、その実態と特色を研究する。

まず、短歌に使用された語彙全体を把握し、どのような内容を表す語彙が多いのか少ないのか、増加するのか減少するのかに注目し、子規の短歌に詠む材料の取捨選択の過程を探る。

また、他の同時期に短歌革新をそれぞれ実践した歌人の落合直文、与謝野鉄幹、与謝野晶子の作品と比較する。同時代の歌人との比較を通して、子規短歌で使用する語彙の特徴は、当時の近代短歌作品の中でどのような位置づけにあるか、独特のものであるのか検証する。

## 第二節 研究資料と方法

本稿では正岡子規の自筆短歌を研究対象とする。

正岡子規は慶応三年（一八六七年）に松山市に生まれる。父は松山藩士（後に廃藩置県により禄を失う）の正岡常尚、母は漢学者の大原観山（松山藩儒者）の長女、八重である。明治三年に妹の律が生まれ、明治五年に父が亡くなる。子規が正岡家の当主となったのは、父が隠居を決めた、明治五年一月二四日である。

子規は明治五年に佐伯政房（父方の叔父）から書法を学び、明治六年には大原観山から素読を習う。観山が病

床に臥した後は土屋久明に漢学を習う。明治十六年の上京まで、松山で生活をし学問をおこなっている。

明治十六年に上京し、共立学校、東京大学予備門へ進学する。明治十八年に帰郷の際に、井出真棹に師事し和歌の手ほどきを受ける。明治二三年に帝国大学文科大学哲学科に入学し、明治二四年に国文学科へ転科、明治二六年に帝国大学文科大学を中退する。

子規が日本新聞社に入社したのは明治二五年である。明治二八年に従軍記者として金州へ行くも、帰国の途中で咯血がひどくなり、明治二九年以降は旅行をすることが不可能になる。明治二九年から明治三三年までの期間の外出は人力車での範囲となる。

子規の短歌革新について、明治三年に日本新聞社「日本」に「歌よみに與ふる書」を発表し、またその理論の実践を同時に行っている。この短歌革新は、明治二八年発表の「俳諧大要」での俳句革新を基にしたものされている。晩年の明治三四年には、子規の興味が短歌から絵画など他の分野に移るが、没年の明治三五年まで自身の短歌観を変化させつつ、作歌を続けている。

子規短歌の調査対象の資料は次の通りである。自筆本と講談社版全集の一部を次頁に挙げる。

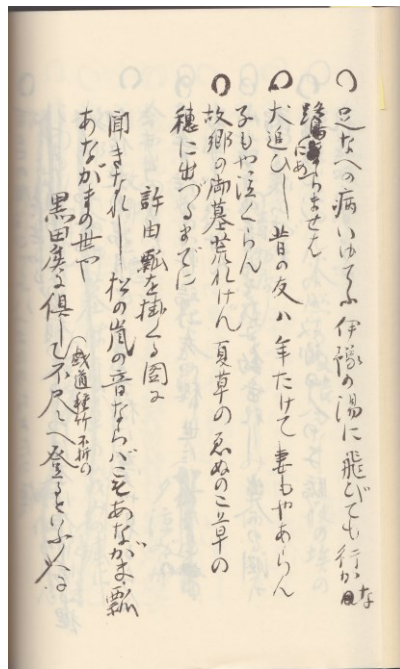
自筆本「竹乃里歌」の複製本

講談社版『子規全集』第六巻収録「竹乃里歌」と「竹乃里歌」拾遺

(正岡忠三郎編集代表 講談社一九七七年五月)

自筆本「竹乃里歌」には、「足なへの病いゆてふ伊豫の湯に飛びても行かな驚にあらませは」をはじめとした四首が記載されている。自筆本の例の下に、「足なへの」「犬追ひし」「故郷の」の三首に該当する講談社版『子規全集』の例を挙げる。

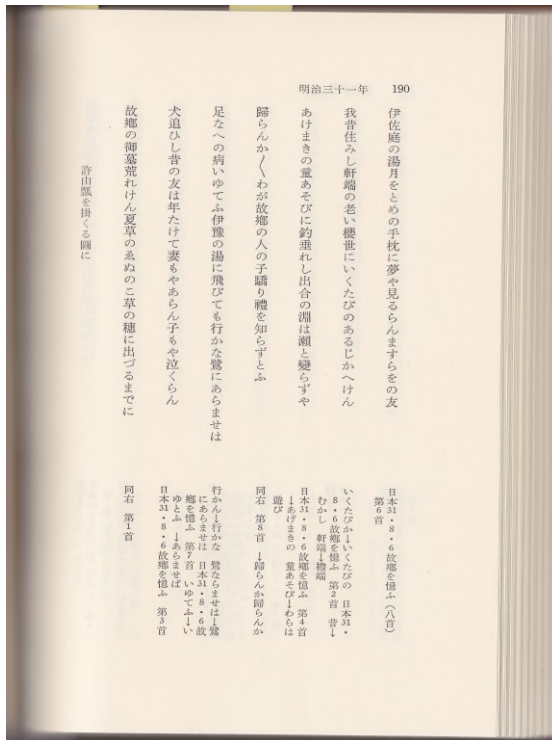
自筆本「竹乃里歌」



正岡子規『竹乃里歌』

(講談社 一九七六年九月)

講談社版『子規全集』



講談社版『子規全集』第六巻 一九〇頁

自筆本「竹乃里歌」の複製本とは、正岡子規の自筆稿本「竹乃里歌」を忠実に再現したものであり、講談社より出版されたものである。

蒲地文雄氏の講談社版『子規全集』第六巻の解題によると、自筆稿本「竹乃里歌」とは子規が明治十五年から明治三十三年までの和歌を年ごとに書きとめたものであり、「明治三十年以前の部分は、大まかにいって、旧作を整理記録した趣が強いのに対し、三十一年以後は、そのような面を存しながらも、本歌稿を創作のためのノートとして用いる趣がきわめて強くなっている」<sup>注6</sup>という性質を持っているものである。

自筆本には前頁に挙げたように、短歌作品の上に○などの記号が付されている例が見られる。また作品の脇に別案を示したり、作品全体を上から墨で塗りつぶすなどの推敲の跡も見られる。また文字の表記について、次の例のように漢字と片仮名によるものが明治三十三年の作品から見られる。

我顔ヲ鏡ニ寫シ其顔ヲ土ニカタドリ土ノ坊主成ル

(一五九〇・三三年)

「竹乃里歌」拾遺に収録されている作品では、明治三二年の短歌に漢字と片仮名による例を見ることができる。

十四日、才晝スギヨリ、歌ヲヨミニ、ワタクシ内へ、オイデクダサレ

(拾遺二四八・三二年)

講談社版『子規全集』について、『子規全集』第六巻に収録されている「竹乃里歌」とは、自筆稿本「竹乃里歌」を翻刻したものであり、「竹乃里歌」拾遺とは、自筆稿本に収められなかった和歌作品を翻刻したものである。

但し、別案については脚注に挙げられ、作品全体が上から墨で消されている歌（抹消歌）は一字下げの八ポで組まれている。

表記について、子規短歌にはルビが付されている作品があり、講談社版『子規全集』でもルビを打っている。例えば、次の作品では、自筆稿本「竹乃里歌」でルビが付され、全集にもルビが打たれている。歌中の《》と傍線は私に附したものである。

大き硯小さ硯を打ち並べ日ぶみ書く《人》疾書き徐書く  
(一九〇二・三三年)

収録されている作品数について、講談社版『子規全集』第六巻収録「竹乃里歌」には短歌は一九二一首、「竹乃里歌」拾遺には短歌は五三二首収められている。子規短歌は「竹乃里歌」と「竹乃里歌」拾遺を合わせて二四五三首が講談社版『子規全集』第六巻に収録されており、その中の作歌年が明らかなもの二四三二首を本稿での研究対象とする。

講談社版『子規全集』第六巻の解題で、明治三十一年に十二首、三十三年に二首の重出が指摘されている。本稿では次の二点より、重出の作品の数を子規短歌の作品数に含めている<sup>注7</sup>。

- ①重出の際に推敲がなされ、短歌の表現が同一でなくなっているため。
- ②同一の作品であるが、それぞれの作品が記載されている箇所が異なっているため。

鉄幹短歌の作品数の数え方についても、同一歌集、または複数の歌集に重複する作品が見られるが、子規と同様に考え重複した作品それぞれを一首ずつ数えている。

子規短歌に使用された語彙の全体を把握するため、次の語彙総索引を作成した。

「正岡子規自筆『竹乃里歌』「竹乃里歌拾遺」語彙総索引稿」（金子彰・石井翔子共編 私家版）



語彙総索引は次のような構成となっている。索引の一部を次頁に挙げる。

上に語彙総索引稿の一部を挙げる。列の左から、見出し語、出現形、短歌作品の通し番号、作品となっている。

語彙総索引稿では複合語を積極的に採録している。例えば上の例では「足の下」「蘆の花」「蘆の伏葉」「蘆の水海」を複合語に認定している。

あしなへ(足癢)	足なへ	830 陸を行き雲居をかける夜半の夢のさむればもとの《足なへ》にして
	足なへ	893 《足なへ》の病いゆてふ伊豫の湯に飛びても行かな驚にあらませは
	足なへ	1084 雲雀鳴く春になりけり《足なへ》の我にあらずば旅行くへきを
	足なへ	1300 新しき庭なつかしみ《足なへ》のわれ人の背に負はれつゝ来ぬ
	足なへ	1426 常伏に伏せる《足なへ》わがためにガラス戸張りし人よさちあれ
	足なへ	1912 我庭にさける黄菊の一枝を折らまぐへと《足なへ》われは
あしなへをどこ(寢男)	足なへ男	1165 いたく瘦せし人の姿よ今更になんちを憐む《足なへ男》
あしのした(足下)	足の下	235 むれあそふ《足の下》より氷るらん水鳥さむく不忍のいけ
あしのはな(蘆花)	蘆の花	525 風吹けば《蘆の花》散る難波潟夕沙滿ちて鶴低く飛ぶ
	蘆の花	952 都路を思へば猿の聲すなり《蘆の花》散る古城の月
あしのふしば(蘆伏葉)	蘆のふし葉	527 夕されは波うちこゆる荒磯の《蘆のふし葉》に秋風ぞ吹く
あしのみづうみ(蘆ノ水海・蘆ノ湖)	蘆の水海	458 玉くしけ二子の山を立ちいて雲飛ひわたる《蘆の水海》

# 正岡子規自筆『竹乃里歌』語彙総索引稿

(金子彰・石井翔子共編 私家版)

本研究では、右の語彙総索引稿を使用して、研究対象とする語彙を、子規短歌の名詞から抄出する。その際、「音を鳴く」や「花咲く」といった、名詞を含んだ複合語で品詞が名詞ではないものについて次の基準を設ける。

①助詞を介しての複合語（例「音を鳴く」）の場合、複合語内の名詞を抽出する。

②助詞を介していない複合語は原則として、複合語内の名詞は抽出しない。但し「花咲く」のように、他の例で「花」と「散る」といった類似の表現が複合語となっていない例が複数見られる場合は、複合語内の名詞を抽出する。

自然語彙の抄出には、子規の編集した語彙集「たね本」<sup>注8</sup>を使用した。本稿では、「たね本」の項目の「獸類」「鳥類」「爬虫類 其他」「蟲類」「魚類」「植物」「天文」「地理」に分類される内容の語彙を、自然語彙と認定した。人間語彙の抄出も「たね本」を使用して行った。本稿では「たね本」の項目の「人倫」「女流」「人名」を人間語彙と認定する。「器物」「宮室」「服装」に分類される内容の語彙は人工物語彙と認定する。

子規と比較する歌人と、使用する資料は次の通りである。

落合直文 …『落合直文集』

（明治書院 一九二七年十一月七日）

与謝野鉄幹…『東西南北』・『天地玄黄』・『鉄幹子』・『紫』・『新派和歌大要』・『うもれ木』

与謝野晶子…『新派和歌大要』・『みだれ髪』

与謝野鉄幹と晶子の調査資料は次の収録のものである。

『鉄幹晶子全集』 1

(逸見久美編集代表 勉誠出版 二〇〇一年十二月十日)

『鉄幹晶子全集』 2

(逸見久美編集代表 勉誠出版 二〇〇二年八月五日)

与謝野鉄幹と与謝野晶子の調査資料は、子規生前に刊行されたものを対象とする。但し、鉄幹の歌集『うもれ木』は子規没後の刊行であるが、収録された作品の殆どが子規生前のものであるので調査対象とする。

『新派和歌大要』に収録された短歌作品には、鉄幹と晶子以外の歌人の作品があるが、鉄幹と晶子の作品のみを調査対象とし、それぞれの作品として分類する。

勉誠出版『鉄幹晶子全集』では初版のものを底本とし、漢字の字体を常用漢字表にあるものへの改めが行われている。また鉄幹の短歌には句読点が鉄幹によって付けられており、鉄幹と晶子の短歌には鉄幹と晶子自身によるルビが付けられている。また、全集でのルビには編集の際に、難解と判断される漢字に（ ）内にルビを加えている。本稿での両者の作品の引用では、編集によって付されたルビを除き、作品の表記を全集通りに挙げる。直文、鉄幹、晶子の短歌の語彙の抽出について、子規短歌での語彙の抽出を参考に行う。

短歌に使用されている外来語（漢語・欧米語）の比較（本稿第二部）について、落合直文と与謝野鉄幹、与謝野晶子の三者を、子規との比較対象としている。外来語での調査の結果、直文短歌での語彙は古典和歌の影響が色濃く見られ、晶子短歌での語彙は鉄幹短歌でのものと重複する例が多く見られる。その為、子規との比較には与謝野鉄幹が適しているとご助言を頂き、以降の第三部「自然語彙論」、第四部「人間語彙論」では子規と鉄幹の両者の比較を行う。

外来語の認定には、次の資料を用いる。

『新潮国語辞典―現代語・古語―第二版』

(山田俊雄、築島裕、小林芳規、白藤禮幸編 新潮社 一九九五年十一月)

本稿では日本の地名や人名(琵琶湖、伊佐庭、左千夫など)は漢語の調査から外している。またアイヌ語について、右の資料の見出し語には他の外来語と同様に片仮名表記されているが、アイヌ語を外来語とするか否かについては保留とし調査対象から外している。

自然語彙、人間語彙、外来語を抄出し、語彙が使用された作品の作歌時期と語彙の意味分野ごとに分類する。

子規短歌の作歌時期について、本稿では次の六期に分類した。六期としたのは、明治三十一年の短歌革新前と革新後では子規の歌風が大きく異なること、革新以降も歌風の変化が見られる為である。

明治三十年以前…調査対象五七六首

明治三十一年…調査対象六九一首

明治三十二年…調査対象三六八首

明治三十三年…調査対象六四五首

明治三十四年…調査対象八九首

明治三十五年…調査対象六三首

直文短歌は作品の初出年が不明であるので、作歌時期の分類を行わなかった。鉄幹短歌と晶子短歌の作歌時期

については、勉強出版版『鉄幹晶子全集』<sup>注9</sup>の脚注を参考にした初出年を基準にして、子規短歌での六期に当てはめて分類を行った。

語彙の意味内容ごとの分類では、「たね本」の項目を参考にし、次の独自の項目を立てた。項目に挙げた語彙例は子規短歌に見られるものである。なお「たね本」と子規短歌の語彙は必ずしも一致していない。

人物…人間を表すものを分類する。神仏や、架空の人物、職業名を表すものも含む。

「妹」「翁」「市人」「鬼」「海人」「ガリバー」「貴人」「藝者」「左千夫」「佐保姫」「少女」等

器物…衣服や建築物を除いた人工物を分類する。

「白帆」「筆」「文」「硯の水」等

服装…衣服や帽子、靴といった身につけるものや衣服の部位を分類する。

「衣」「冠」「下駄」「袖」等

宮室…建築物やその一部を表すものを分類する。

「寺」「五重の塔」「障子」等

人事…人間の精神やその状態、活動や活動によって生まれたものを分類する。

「魂」「怒」「別れ」「世の中」「詩」等

但し、人間の活動によって生まれたものについて、物体としての意味が強いと判断したもの（例「繪」）は、人事に分類しない。

動物…人間以外の動物、動物によって作られたものを分類する。架空の生物も含む。

「鮎」「青蛙」「犬」「海豚」「魚」「牡鹿」「蚊」「龜」「巢」「雀」「蟬」「鶴群」「泥鰌」「百足」「龍」等

但し、次の例のように食材となっているものは分類しない。

蓬生の病の床に《鶴》をくひ牡丹をなめわが富貴足る  
(一六八二・三三年)

植物…植物や植物の集まり、植物の部位を分類する。

「梅」「森」「柳の枝」等

但し、次の例のように食材となっているもの(米)や大きく加工されているもの(板塀)は分類しない。

《米》洗ふ賤か門邊のいさゝ川瘦せてぞ咲ける花杜若  
(二八八・二七年)

《板塀》に立枝ぞ見ゆる門構誰か思ひ者か梅に琴をひく  
(三六二・三一年)

天文…気象や天体を表すものを分類する。

「雨」「雷」「白雲」「月」等

地理…自然物や地形を表すもの、行政上の区画を表すものや地名などを分類する。

「海」「川水」「富士山」「森」「山」「上野」「富士山」「都」「里」等

時令…時間そのものや特定の時点や期間を示すものを分類する。

「時」「五月五日」「夏」等

但し、次の歌の「五十年」のように特定の期間を表していないと判断したものは時令に分類しない。

瓜を種糸經を講する《五十年》子孫おろかに我老いんとす

(八五七・三一年)

飲食…飲食物や食材となるものを分類する。

「朝餉」「牛」「柿」「柏葉」「酒」「菓」等

肢體…人間を含めた動物の体や体の部位、構成要素、分泌物、又は体の調子を表すものを分類する。

「身」「手」「鬣」「血」「涙」「熱」「病」等

無形…位置など概念的なものや形の定まっていないもの、視覚で捉えられないものを分類する。

「上」「山中」「共に」「陰」「聲」等

また、次の例（「狐の大王」の「大王」）のように、人間以外の精神やその状態、活動や活動によって生まれたものも分類する。

青空にむら雨すぐる馬時《狐の大王》妻めすらんか

(拾遺三四九・三三年)

數字…数字や数量が表されているものを分類する。

「二つ」「再び」「二十年」等

色彩…色を表しているもの、色の表現が見られるものを分類する。

「紅」「赤薔薇」等

但し、次の例のように色彩として明確に表されていないものは分類しない。

北うけて《雪》また残る竹藪の藪陰寒し梅五六本

(五九六・三一年)

名詞以外…名詞以外のものを分類する。また形容動詞など「たね本」の項目にない名詞以外の語彙も分類する。

「委蛇くたり」「涼し」「畫く」等

「たね本」の項目と本稿の項目の対応は次の表の通りである。「たね本」の列の項目名の順序は「たね本」に挙げられた通りではない。

「たね本」	本稿の項目
人倫	人物
女流	
人名	
器物	器物
服装	服装
宮室	宮室
人事	人事
獸類	動物
鳥類	
爬虫類 其他	
蟲類	
魚類	
植物	植物
天文	天文
地理	自然物
	区画・地名
時令	時令
飲食	飲食
肢体	肢体
無形名詞	無形
数字	数字
色彩	色彩
形容詞	名詞以外
副詞	
自動詞	
助詞	
他動詞	

短歌に使用された語彙の性格を判断するために、本稿では古歌（本稿では江戸時代までの和歌とする）に多く使用されているかを確認する。その際に次の資料を用いる。

古来頻繁に使用されているものかについては、次の資料を使用する。

『歌ことば歌枕大辞典』

（久保田淳、馬場あき子編 角川書店 一九九九年）

地名については、次の資料を併用する。

『和歌の歌枕・地名大辞典』

（吉原栄徳 おうふう 二〇〇八年五月）



古歌の使用例の有無についての確認は、次の資料を使用する。

『新編国歌大観DVD-ROM』

（『新編国歌大観』編集委員会監修 角川学芸出版）

短歌に使用された語彙の表現方法の調査では、語彙にどのような感覚表現が使用されているのかを視点とする。感覚表現の判断基準として次の資料を使用する。

『感覚表現辞典』

（中村明編 東京堂出版 一九九五年）

『感覚表現辞典』に挙げられている感覚表現の分類を基に、独自に項目を設ける。分類項目は次の通りである。なお子規短歌の引用では、講談社版『子規全集』第六巻での表記に従っている。歌中《》と傍線は私に附したものである。以降の引用も同様である。

## 1、視覚表現とするもの

① 「光影」を表すもの・・・「朝日」「木陰」など光源や陰・影をあらわすもの

「明し」「暗し」など明暗をあらわすもの

「光る」「明る」など光のある様子を表すもの

② 「色彩」を表すもの・・・「色」「紅」など色を表すもの。但し「雪」など色彩の名称が明示されていないものは除く

「色づく」など色がある様子を表すもの

\*『感覚表現辞典』に紫色の項目が見られないが、本研究では「色彩」に分類する。

③ 対象物の「動き」を表すもの・・・「盆踊」「飛ぶ」など動きを表すもの。但し子規自身によるものは除く

④ 対象物の「状態」を表すもの・・・「やれ衣」「涸れ盡す」「良し」など状態が表されているもの

\* 次の歌のように対象物の存在する場所が明らかであるものも、その場所に存在している状態であると判断し、「状態」を表すものとする。

西晴れて白帆群れ行く海原の《入目》にそゝぐ夕立の雨

(三四三・三一年)

① から④までの『感覚表現辞典』で挙げられた視覚表現の他に、独自に次の三つも視覚表現とする。

⑤ ものに映った影を表現したもの

⑥ 視覚行為が明らかであるもの・・・「見る」「眺む」等

## 2、聴覚表現とするもの

⑦ 「音声」を表すもの・・・「聲」など音声を表すもの

「呼ぶ」など音声を伴う行動を表すもの

⑧ 「音響」を表すもの・・・「音」など音を表すもの

「共擦れ」など音が立つことを表すもの

「騒ぐ」「静かなり」等の、音の有無を表すもの

## 3、嗅覚表現とするもの

⑨ 匂いを表現するもの・・・「匂ひ」など香りを表すもの

#### 4、味覚表現とするもの

「かぐはし」など香りの状態を表すもの

⑩ 味を表現するもの：「甘し」「渋し」など味を表すもの

「うま乳」など味の様子が分かるもの

#### 5、触覚表現とするもの

⑪ 「触感」を表現するもの：「薄衾」など厚さを表すもの

「堅し」など硬軟を表すもの

「揺る」など体感できる動きを表すもの

⑩ 「痛痒」を表現するもの：「痛む」など痛みを表すもの

\* なお痒みを表す語は子規の短歌に見られない。

⑪ 「湿度」を表現するもの：「濡る」「乾く」など乾湿を表すもの

\* 「濡る」といった対象物が何かを濡らしているという表現も含む

⑫ 「温度」を表現するもの：「暑し」「冷ややか」など寒暖・温冷を表すもの

\* 「温泉」のように温度の状態が分かるものも分類する。

⑨ から⑫の『感覚表現辞典』で挙げられた触覚表現の他に、独自に次の例も触覚表現とする。

⑬ 触覚行為が明らかであるもの・・・「踏む」「踏みわく」等

## 6、複合感覚表現とするもの

一つの対象物が複数の感覚によつて捉えられていると考えられる例は、複合感覚とする。例えば次の歌の「月」は、触覚表現（「涼しき」）と視覚表現（「月」「見る」）の複合感覚表現である。視覚表現には一重線、触覚表現には点線を附す。

信濃路や人の到らぬ山の上にひとり涼しき《月》を見るかな

（二二三〇・三二年）

以上の分類項目に従い、感覚表現を表す語彙や表現の有無、対象物に対する感覚表現が読み取れる語彙や表現の有無で、感覚表現を分類する。

例えば次の歌の「秋の初風」は、涼しさを想起させるが、その根拠となる語彙や表現が見られないので、「秋の初風」の触覚表現はなしとする。

月更けて人は歸りぬ鴨河や四條河原の《秋の初風》

（七五六・三二年）

## 第三節 先行研究

管見の限り、子規短歌に関する先行研究では次の内容のものを多く見ることができる。

- 一、歌風や歌論の内容、またはその変化について論じているもの
- 二、短歌作品と俳句・漢詩などの関連について指摘したもの
- 三、短歌作品や歌論に表されている子規像について論じているもの

一について、子規の歌論の内容を俳論などと関連させて論じているものや、子規の短歌観や歌風の変化等を指摘した研究が多く見られる。

二について、主に明治三一年の短歌革新直後の短歌の題材の拡大として、俳句や漢詩などを用いていることを指摘し、その元となっている俳句や漢詩を提示している。

三について、例えば岡井隆氏『正岡子規』（岡井隆 筑摩書房 一九八二年四月）で、明治三三年の「桜花三十首」の一部の作品に子規の負ったナショナリズムの思想が表現されていることが指摘されている。

一の内容を論じた先行研究の中に、子規短歌に使用された語彙・題材についての述べているものが見られる。次に具体的な語彙や題材例を挙げている先行研究の一例を挙げる。

子規の「用語の區域」の拡大の実践について、藤川忠治氏『正岡子規』明治文学研究2（藤川忠治 山海堂出版 一九三三年九月）で、子規短歌の漢語や洋語等が「日常語」であること、従来の歌よりも漢語や口語の使用が非常に多く子規短歌の特徴とも言えること、後年になるほど古語の使用が多くなること等、子規の用語使用の増減や多寡についての指摘がなされている。また、明治三一年の「百中十首」で詠まれた題材が「甚だ雑多」<sup>注10</sup>であることを、具体的に動物、植物、漢語、俗語の例を挙げて示している。

しかし、藤川氏の挙げた例は一部の例であり、外来語をはじめとした用語全体の提示や、子規短歌全体の用語の中で外来語や口語がどの位の比重であるのかの指摘はなされていない。

子規は短歌を詠む方法として「写生」を提唱し、その「写生」の対象として「天然（自然）」を選ぶ傾向があ

ることについて、坪内稔典氏『正岡子規 創造の共同性』（坪内稔典 リブポート 一九九一年八月）では、子規の「草花好きの性向」の指摘があり、「小園の記」より「萩」「鶏頭」などの具体的な「ありふれた平凡な花」の例を挙げている<sup>注11</sup>。

また「写生」の対象として詠まれた「想像と空想」の例を挙げた先行研究には、長谷川孝士氏『表現に生きる正岡子規』（長谷川孝士 新樹社 二〇〇七年九月）があり、桃太郎の例を示している<sup>注12</sup>。

歌の材料の配合について、子規短歌の「絵画的表現」として題材の組み合わせを取り上げた研究も見られる。

実際に配合の例を挙げているものには、次の研究がある。岡井隆氏『正岡子規』では、「商人」対「武士」、「鷹」対「諸鳥」、「立つ二人」対「すわる一人」、「仏」対「象蛇ども」などを挙げている<sup>注13</sup>。梶木剛氏の『正岡子規』

（梶木剛 勁草書房 一九九六年一月）では、「芭蕉」対「手水鉢」、「月」対「雄鹿」、「死の予感」対「蕾や芽な

ど成長が約束されているもの」などを挙げている<sup>注14</sup>。長谷川孝士氏は『表現に生きる正岡子規』で、赤色と白

色の対比を挙げている<sup>注15</sup>。

岡井隆『正岡子規』では、子規短歌の「櫻」の詠まれ方に着目して、子規のナシヨナリズムの現れ方を指摘したものの<sup>注16</sup>が見られる。片山武「子規短歌の文末表現―助動詞―」（『正岡子規研究 子規研究の会発足二十周年記念』（子規研究の会 二〇〇八年六月）での、明治三一、三二年の作品に見られる『万葉集』で使用されている助動詞（「けり」「なり」「らん」「つ」「ず」「ぬ」「めり」「たり」）の用いられ方に注目して、子規の『万葉集』への意識について論じられたもの<sup>注17</sup>も見られる。

しかし、何れの先行研究も挙げられた例は部分的なものであり、子規の生涯を通して調査したものは見られない。子規短歌に使用された具体的な語彙についての研究も見られるが、特定の語を扱ったものであり、子規短歌の用語全体についての言及はなされていない。

このように管見の限り、子規短歌に使用された語彙全体を提示し、その中でどの語彙が短歌革新後に詠まれるようになり、または詠まれなくなるのか、歌風や歌論の変化によつて使用語彙にどのような変化が見られるのかの具体的に示されることはなされていない。また子規の用語と当時の他の歌人の用語を比較したものも見られず、子規短歌の用語が当時の短歌ではどのような性格をもつものであったのかも明らかにされておらず、この点に調査考察の余地が残されていると言える。

#### 【先行研究一覧】

管見の限り、正岡子規の短歌に関する先行研究には次のものがある。

『明治文学研究 2 正岡子規』

(藤川忠治 山海堂出版 一九三三年九月八日)

『正岡子規の新研究』

(宮田戊子 叢文閣 一九三五年六月十四日)

『寫生派歌人の研究』

(北住敏夫 寶文館 一九五九年四月五日)

『子規といふ人』

(五味保義 白玉書房 一九六二年十一月三十日)

『正岡子規』

(楠本憲吉 明治書院 一九六六年三月十日)

『近代短歌の構造』

(久保田正文 永田書房 一九七〇年二月一日)

- 『正岡子規・その文学』  
 (久保田正文 講談社 一九七九年八月二十日)
- 『子規歌論の継承と発展』  
 (有田静昭 桜楓社 一九八〇年四月五日)
- 『子規歌論の展開』  
 (有田静昭 八木書店 一九八四年四月五日)
- 『正岡子規』近代日本詩人選3  
 (岡井隆 筑摩書房 一九八二年四月二五日)
- 『正岡子規と藤野古白』  
 (久保田正文 永田書房 一九八六年八月)
- 『正岡子規の研究 上』  
 (松井利彦 明治書院 一九七六年五月二五日)
- 『正岡子規の研究 下』  
 (松井利彦 明治書院 一九七六年六月二五日)
- 『正岡子規の短歌の世界―『竹乃里歌』の成立と本質―』  
 (今西幹一 有精堂出版 一九九〇年一月十日)
- 『正岡子規 創造の共同性』  
 (坪内稔典 リブロポート 一九九一年八月)
- 『正岡子規』  
 (桶谷秀昭 小沢書店 一九九三年八月)
- 『愛媛文化双書 36 子規と周辺の人々 増補版』  
 (和田茂樹編 愛媛文化双書刊行会 初版一九八三年八月十九日・  
 増補版一九九五年九月十九日)
- 『岩波セミナーブックス 56 正岡子規―五つの入口』  
 (大岡信 岩波書店 一九九五年九月二六日)
- 『正岡子規』  
 (梶木剛 勁草書房 一九九六年一月五日)
- 『子規漢詩の周辺』  
 (清水房雄 明治書院 一九九六年四月二十日)



- 『子規の近代―滑稽・メディア・日本語』  
 (秋尾敏 新曜社 一九九九年七月三十日)
- 『人麻呂、子規、文明のことなど』  
 (牧野博行 短歌新聞社 二〇〇〇年二月)
- 『子規と古典文学』  
 (田村憲治 創風社出版 二〇〇一年八月)
- 『写生の文学…正岡子規、伊藤左千夫、長塚節』  
 (梶木剛 短歌新聞社 二〇〇一年三月)
- 『子規との対話』  
 (復本一郎 邑書林 二〇〇三年九月五日)
- 『表現に生きる正岡子規』  
 (長谷川孝士 新樹社 二〇〇七年九月一日)
- 『新しい短歌鑑賞第二巻 正岡子規・斉藤茂吉』  
 (内藤明・安森敏隆 晃洋書房 二〇〇八年四月十日)
- 『正岡子規の〈楽しむ力〉』  
 (坪内稔典 日本放送出版協会 二〇〇九年十一月十日)
- 『正岡子規 言葉と生きる』  
 (坪内稔典 岩波書店 二〇一〇年十二月十七日)
- 『子規とその時代』  
 (復本一郎 三省堂 二〇一二年七月十五日)
- 『日本文学研究資料叢書 近代短歌』  
 (日本文学研究資料刊行会編 有精堂出版 一九七六年五月一日)
- 『和歌文学講座第九巻 近代の和歌』  
 (有吉保・稲村耕二他編 勉誠社 一九九四年一月二十日)
- 『子規の現在』  
 (粟津則雄編 増進会 二〇〇二年十二月二五日)
- 『正岡子規の世界』  
 (『俳句』編集部編 角川学芸出版 二〇一〇年六月三十日)
- 『正岡子規 俳句・短歌革新の日本近代』  
 (河出書房新社 二〇一〇年十月三十日)
- 和田茂樹「子規の口語的発想表現」  
 (『文学』 vol 52 岩波書店 一九八四年九月)

高野公彦「子規の自然観と趣向」

『國文學―解釈と教材の研究―』平成十六年三月号 學燈社 二〇〇四年三月十日

『松山市立子規記念博物館総合案内』

(松山市立子規記念博物館編 松山市立子規記念博物館友の会 二〇〇四年十一月)

『日本近代文学大事典』第一卷、第三卷、第四卷 (講談社 一九七七年十一月)

『増補改訂 新潮日本文学辞典』 (新潮社 一九八八年一月)

『明治・大正・昭和作家研究大事典』 (桜楓社 二〇〇四年九月)

『日本語研究事典』 (飛田良文(主幹)他編 明治書院 二〇〇七年一月)

## 注

注1 『子規全集』第七卷(正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年七月)収録「再び歌よみに與ふる書」に次の内容が

ある。全集二三頁より抜粋する。

…實は斯く申す生も數年前迄は古今集崇拜の一人にて候ひしかば今日世人が古今集を崇拜する氣味合は能く存申候。…

注2 法政大学子規文庫の目録より抜粋した。

注3 「七たび歌よみに與ふる書」(講談社版『子規全集』第七卷 三九〇四一頁収録)より抜粋した。

注4 講談社版『子規全集』第七卷 三五〇三八頁に収録されているものである

注5 子規が短歌革新の際の理論とともにに行った実践として、明治三二年の「百中十首」が挙げられる。「百中十首」について、坪内稔典氏の次の指摘を挙げる。『正岡子規 創造の共同性』(坪内稔典 リポート 一九九一年八月)二〇三頁より抜粋した。

…さて、「百中十首」には、議論ということに即して言えば、議論を実地のものにするというはつきりとした意図がまずあった。つまり具体的な新和歌を示して議論をすすめようとしたのである。…

注6 『子規全集』第六卷 (正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七七年五月) 七二七〇七二八頁より抜粋した。

注7 重出の作品をそれぞれ一作品として数える理由として、二点を挙げた。その具体例は次の通りである

①重出の際に推敲がなされ、短歌の表現が同一でなくなっていることの例

夕立のやがて来るべきけしきなり俄に騒ぐ風の音かな

(五三四・三二年)

夕立のやがて来るべきけしき也俄に騒く風の音かな

(七一四・三二年)

右の五三四番の歌と七一四番の歌では、表記の面で差異が見られる。

豊葦原の瑞穂の國と天つ神かのりたまひたる國は此國

(三八四・三二年)

豊葦原の瑞穂の國と天の神かのりたまひたる國は此國

(八〇一・三二年)

右の三八四の歌と八〇一の歌では語の選択が異なっている。

②同一の作品であるが、それぞれの作品が記載されている箇所が異なっていることの例

麥はみのり蠶はこもりぬとうち語る翁も去りぬ夏の日永さ

(八四四・三一年)

麥はみのり蠶はこもりぬとうち語る翁も去りぬ夏の日永さ

(八五四・三一年)

右の八四四番の歌は、自筆稿本『竹乃里歌』では「閑適」と題の附された作品群の一つであったと考えられる。八三五番の歌の前に「閑適」と題があり、八三五く八五二番までの作品の中の七首が「閑適（八首）」と新聞『日本』に発表されている。八四四の歌は「閑適」の題で新聞では発表されておらず、自筆稿本でも抹消されている。八五四の歌は自筆稿本で「村居」と題の附された作品群の中にあり、新聞『日本』でも「村居」の題で発表されている。

このことから、右の例では「閑適」の歌としての八三五番の歌と、「村居」としての八五四番の歌がそれぞれ自筆稿本『竹乃里歌』に確認できると判断する。

直文短歌、鉄幹短歌、晶子短歌の作品数の数え方についても、同一歌集、または複数の歌集に重複する作品が見られるが、子規と同様に考え重複した作品それぞれを一首ずつ数えている。

注8 『子規全集』第二十卷（講談社 一九七六年三月）に収録されたものを使用する。「たね本」とは二六項目に渡って、一種の俳諧語辞典の性格を有しているものである。「たね本」は俳諧語辞典であるが、子規独自の分類基準・配列が見られるものであると考えられる。

注9 『鉄幹晶子全集』1（逸見久美編集代表 勉誠出版 二〇〇一年十二月）

- 『鉄幹晶子全集』2（逸見久美編集代表 勉誠出版 二〇〇二年八月）
- 注 10 『正岡子規』明治文学研究2（藤川忠治 山海堂出版 一九三三年九月）三七六頁より抜粋した。
- 注 11 『正岡子規 創造の共同性』（坪内稔典 リポート 一九九一年八月）一五二～一五五頁
- 注 12 『表現に生きる正岡子規』（長谷川孝士 新樹社 二〇〇七年九月）一四一～一四三頁
- 注 13 『正岡子規』（岡井隆 筑摩書房 一九八二年四月二五日）一九六、二三三頁
- 注 14 『正岡子規』（梶木剛 勁草書房 一九九六年一月）二二四、三〇七頁
- 注 15 『表現に生きる正岡子規』（長谷川孝士 新樹社 二〇〇七年九月）一五四～一五七頁
- 注 16 岡井隆『正岡子規』「八 短歌とナシヨナリズム」
- 注 17 片山武「子規短歌の文末表現―助動詞―」（『正岡子規研究 子規研究の会発足二十周年記念』（子規研究の会 二〇〇八年六月）

## 第一部 分類語彙論

### 第一章 子規の分類語彙論

#### 第一節 はじめに

正岡子規自身の分類語彙の研究には次の三つが見られる。

「かさねこと葉」：「はるく」「ちく」など反復語をいろは順に分類している。

「たね本」：語（主に名詞）を意味分野別に分類している。

「韻さぐり」：「烟霞」「銀河」「月の中」などを語の最後の音に即して、a音・i音・u音・e音・o音の

順に分類している。

右の資料は次の資料に収録されている。

『子規全集』第二十卷

（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七六年三月）

本章では、「たね本」を参考に子規短歌の語彙を分類し、子規短歌の題材がどのような内容であるのかを見てゆく。

#### 第二節 子規短歌の名詞の意味分野

子規短歌に使用された名詞を各項目に分類したところ、それぞれの項目に分類される作品数は次頁の通りである。

	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計	割合
人物	110	313	163	257	29	23	895	36.8
器物	139	223	113	297	30	18	820	33.7
人事	206	198	136	193	22	12	767	31.5
服装	42	25	16	29	2	1	115	4.7
宮室	75	176	87	173	13	8	532	21.9
動物	109	185	90	106	13	3	506	20.8
植物	204	328	138	320	56	50	1096	45.1
地理	328	404	191	305	28	25	1281	52.7
天文	257	253	88	183	17	6	804	33.1
飲食	13	43	28	51	17	7	159	6.5
色彩	68	82	29	105	14	10	308	12.7
肢体	49	74	54	71	16	6	270	11.1
時令	192	204	88	161	35	17	697	28.7
数字	64	100	57	85	16	5	327	13.4
無形	344	319	162	262	38	26	1151	47.3

表の「30年以前」「31年」「32年」「33年」「34年」「35年」「計」の列の数値は、各項目に分類される語彙の詠まれている作品数である。「割合」の列の数値は、子規短歌全二四三三首に対する、各行の「計」の作品数の割合である。

例えば表では、「人物」に分類される語彙が詠まれている、明治三十年以前の子規短歌は一一〇首であることを表している。

また「人物」に分類される語彙を詠んだ子規短歌は全八九五首であり、子規短歌全二四三三首に対して36.8%を占めていることも表している。

子規短歌に詠まれている題材の期間ごとの変化について、次に挙げる。

明治三十年以前では、「地理」や「天文」といった自然に関する名詞を詠んだ作品の方が、「人事」や「器物」などの人間に関する名詞を詠んだ作品よりも、多く見られる傾向がある。

明治三十一年になると、「人物」や「宮室」を詠み込むことが特に増加し、人間に関する名詞を歌に詠み込むことが多くなっている。ただし「服装」と「人事」については、減少している。

明治三二年も、明治三十一年に見られる人間に関する名詞を多く詠み込む傾向が継続して見られる。また「地理」や「天文」に見られるように、自然に関する名詞については減少傾向が見られる。

明治三三年も、明治三十一年と明治三二年と同様に、人間に関する名詞を詠むことが多く見られる。前二期間と異なるのは、「人倫」と「女流」と「人名」の人間を表すものや、人間の精神や活動を表す「人事」に対して、人工物である「器物」に割合が偏っている点である。

明治三四年では、明治三二年から明治三三年の作品に見られる人間に関する名詞を多く詠み込む傾向が弱くなっている。「地理」や「天文」といった自然物や自然現象、「獣類」などの動物を表す名詞の使用は、前期間から続いて減少傾向が見られる。また、「植物」を詠み込むことが特に多くなり、その傾向は三五年により顕著になる。

以降、意味分野ごとに子規短歌に使用されている語彙の推移を見てゆく。

本稿では自然語彙と人間語彙について見てゆく。本稿第三部で「植物語彙」「天文語彙」「地名語彙」を、第四部で「人物語彙」を見てゆくの、次節では人工物を表す「器物語彙」「宮室語彙」「服装語彙」、人の精神や活動に関する



内容を表す「人事語彙」、自然物を表す「自然物語彙」（「地理語彙」の一分野）、人間以外の動物を表す「動物語彙」の四項目について、期間ごとの変化を見てゆく。

### 第三節 意味分野ごとの語彙の推移

#### 第一項 「器物語彙」「宮室語彙」「服装語彙」について

人工物を表す語彙である、「器物語彙」（例「舟」「筆」）と「宮室語彙」（例「家」「窓」）と「服装語彙」（例「服」「靴」）について見てゆく。以降、「器物語彙」と「宮室語彙」と「服装語彙」を合わせて、「人工物語彙」とする。

明治三十年以前の「人工物語彙」異なり語数は一八八語である。

その中で多く使用されている語彙には次のものが見られる。五首以上の作品に用いられているものを、使用例が多い順に挙げる（以降も同様とする）。

舟／船・窓・煙／烟・袖・文／書・白帆・玉梓／玉章・灯火

右の八語は全て古来頻繁に使用されているものである。但し次の「船」の例は蒸気船であり、古歌で見られる「舟／船」とは異なるものである。

小間物をさゝげし甲斐もありがたや金比羅丸と《船》も名のれり

（拾遺一五五・二三年）

明治三十一年の「人工物語彙」の異なり語数は三五八語である。

「人工物語彙」の使用が大きく増加している。明治三十一年で多く使用されている語彙は次のものである。

車・舟／船・家・宿・門・軒端／檐端・太鼓・文／書・白帆・灯火・庵・團扇・産湯

明治三一年では「車」「舟／船」「白帆」といった乗り物と、「家」「宿」「門」「軒端／檐端」「庵」といった建物に関する語が増加している。

またこの十三語の中で古来頻繁に使用されているものは、「舟／船」「家」「宿」「門」「軒端／檐端」「文／書」「白帆」「灯火」「庵」の九語である。「團扇」は『歌ことば歌枕大辞典』の「団扇」の項目に次のように指摘されていることから、古来頻繁に使用されているものとしていない。

…近世、俳諧で取り上げられることが多いが、和歌に詠まれることはまれである。…<sup>注1</sup>

「車」「太鼓」「團扇」「産湯」は、明治三十年以前の子規短歌には殆ど使用例が見られないものである。

**明治三二年**の「人工物語彙」の異なり語数は一九九語である。

明治三一年よりも語数が減少しているが、これは明治三二年の作品数が少ないことと関係している。

明治三二年で多く使用されている語彙は次のものである。

家・佛（仏像の意）・車・文／書・玉・病の床／病の牀

多く詠まれる「人工物語彙」の中で、乗り物を表すものは「車」のみとなる。また、古来頻繁に使用されているものは、「家」「文／書」「玉」の三語である。

明治三二年で使用数を大きく増加させている「佛」「病の床／病の牀」について、前年までの子規短歌では使用が少ない語彙である。

明治三三年で、「人工物語集」の異なり語数は三八八語である。

明治三二年での減少は作品数によるものと考えられ、明治三一年から「人工物語集」の使用は増加傾向と言える。

明治三三年で多く使用されている語彙は次のものである。

ガラス戸・人屋・玉・白玉・庵・舟／船・病の床／病の牀・笠・文／書・歌玉・鉄／黒金・煙／烟・畫／繪・  
灯火・ガラス・ビードロ・鳥籠・新聞・鉢・門・家

この二一語の中の「玉」「白玉」「庵」「舟／船」「笠」「文／書」「煙／烟」「畫／繪」「灯火」「門」「家」の十一語が、古来頻繁に使用されているものである。

明治三三年で初めて用いる「ガラス戸」「人屋」「歌玉」「ガラス」「ビードロ」は、古来頻繁に使用されている語彙ではないものである。

明治三三年に多く用いられている語彙を見ると、当時の子規にとって身近な人工物が多く用いられていることが分かる。例を抄出して挙げる。

うは玉の黒き小瓶に梅いけて《病の牀》に春立ちにけり (一四四八・三三年)

ある日君わが草の戸をおとつれて《人屋》に行くと告げて去りけり (一五七四・三三年)

《鳥籠》のかたへに置ける《鉢》に咲く薄紫のをだまきの花 (一六七〇・三三年)

夜ノ床ニ寐ナガラ見ユル《ガラス戸》ノ外アキラカニ月フケワタル (一七九二・三三年)

《歌玉》は色々あれど秀眞のは白く左千夫は黒くしありけり (一八二〇・三三年)

《ビードロ》ノ水ニ入レタル白玉ノ氷ノ屑ハシバラク解ケズ

(一八五六・三三年)

「病の牀」は当時の子規の状況を表している語彙である。「人屋」は鼠骨が「人屋」へ行き出てくることに際して用いられているものである。「鳥籠」「鉢」と「ビードロ」は子規の身近にある人工物である。「ガラス戸」は、子規の臥せている部屋に設置されているものである。「歌玉」は歌会での歌人の歌の評価として用いられている。

その一方で、「笠」や「舟／船」といった、当時の子規の状況に即した内容の語彙ではないものの使用も見られる。  
旅行くと都路さかり市川の笠賣る家に《笠》もとめ著つ

(一三四九・三三年)

川下る《舟》に乗る夜の風寒み萩の葉さやぎ月傾きぬ

(一七五三・三三年)

「旅行くと」の短歌は回想によるものであり、「川下る」の短歌は想像もしくは回想によるものである。

**明治三四年**の「人工物語彙」の異なり語数は三八語である。

これまでの期間よりも「人工物語彙」の語数が大きく減少している。これは、明治三四年の作品数全体が少ないことと関係していると考えられ、また「人工物語彙」を歌に詠む傾向が弱くなっていることも原因として挙げられる。  
明治三四年で多く使用されている「人工物語彙」は次の一語であり、これは古来頻繁に使用されている語彙ではないものである。

傘

「傘」は明治三三年までの作品では、次の二首のように外出先で使用されるものである。

都近く世を隠れたる人ならし《傘》歸る春雨の里

(五七一・三一年)

さみだれの篠つく雨に《傘》さして華嚴の瀧を見ざるを惜む

(拾遺三三六・三三年)

右の二首のように外出時に使用される「傘」の他に、次の例のように、自宅の庭の「牡丹」の雨除けとして用いられる「傘」の例も見られる。

さかりなる牡丹の花におほはまく雨のふる《傘》とりいてゝ見つ

(拾遺四三四・三四年)

明治三五年で、「人工物語彙」の全異なり語数は二九語である。前期間よりも更に減少している。明治三四年以降の子規短歌では、人工物を歌に詠む傾向が弱くなっていることと関係していると考えられる。明治三五年の子規短歌で的人工物語彙の中で、五首以上の作品に使用されている語彙は見られない。最も多い例数が「枕邊」、次いで「汽車」、三番目に「堤」である。他の語彙は明治三五年の子規短歌の中で一首に使用されているのみである。

「枕邊」の「枕」と「堤」が古来頻繁に使用されているものである。

明治三五年の子規短歌に見られる人工物語彙も、当時の子規の状態に即したものの、身近な出来事に起因して詠んだものが多く見られる。

わか病める《枕邊》近く咲く梅に驚なかばうれしけむかも

(拾遺四六〇・三五年)

赤羽根の《つゝみ》に生ふるつく／＼しのひにけらしもつむ人なしに

(拾遺四八二・三五年)

赤羽根の《汽車》行く路のつく／＼し又來む年も往きて摘まなむ

(拾遺四八七・三五年)

「枕邊」は子規の臥している枕辺である。「つゝみ」と「汽車」は碧梧桐の土筆摘みに起因しての語彙である。

## 第二項 「人事語彙」について

明治三十年以前の「人事語彙」の異なり語数は一六九語である。

この期間で多く使用されている「人事語彙」は次の十一語である。

夢・世／代・心・戀・思ひ・身・世の中・我が身・別れ・浮世／憂世・旅寢

右の十一語の全てが、古来頻繁に使用されている語彙である。

明治三十年以前の子規短歌に多く用いられ、以降の期間では使用数が見られないもの、または以降の期間で使用されるものが大きく減少する語彙は、「心」「戀」「思ひ」「身」「我身」「別れ」「浮世／憂世」「旅寢」である。これらの語彙は次の例のように、心情に関連するものと自らの境遇を示すものである。

祈りてもしるしはなしとしりなからもしやと思ふ《心》やさしな

(五〇・十八年)

うたゝねの夢さへものを思はせて憂をかさぬる《戀》もするかな

(五一・十八年)

明くれにこひぬ日もなし玉の緒のたえねはたえぬ《思ひ》なるらん

(六九・十八年)

花見めやけふを盛りのあすか山あすたのむまし變る《浮世》に

(一一二・二〇年)

あちきなき世をさけし《身》も都鳥都のたよりきかまほしけれ

(拾遺八六・二十一年)

ほとゝきすともに聞かんと契りけり血に啼く《わかれ》せんと知らねは

(拾遺一三六・二十二年)

《我身》だにしるしよしなきも花をしむ心は何のこゝろなるらん

(一五七・二十四年)

すまの浦に《旅寢》しをれは夏衣うら吹きかへす秋の初風

(三〇四・二十八年)

明治三四年以降の子規短歌では、子規自身の境遇を詠む場合に「我身」「身」を用いずに、次の歌のように季節や植物など自然物や自然現象に自身を投影させて表現している。

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

(拾遺三八三・三四年)

**明治三十一年**の「人事語彙」の異なり語数は一三七語である。

明治三十年以前よりも「人事語彙」の語数が減少している。明治三十一年を境に、子規短歌では「人事語彙」を歌の材料とすることが少なくなる傾向となる。

明治三十一年で多く使用されている「人事語彙」は次の十語である。「夢」「世／代」「聲」「世の中」「哀れ」「歌」「命」の七語が古来頻繁に使用されているものである。

夢・世／代・聲・世の中・哀れ・歌・命・軍・晝寢・ベースボール

明治三十一年では、「歌」「軍」「晝寢」「ベースボール」といった、人の活動によるものを表す「人事語彙」が増えている。

明治三十年以前とは詠み方の異なる例も見られる。例えば「世」について二首例を挙げる。

おしなへて《世》は悲みの中の郷中とつらき別なりけり

(拾遺一〇四・二十一年)

煤拂ふ伏家の庭にかりに置きし神も佛もむつまじの《世》や

(五二三・三十一年)

明治三十年以前では、「おしなへて」の短歌のように、平安時代の古典和歌に多く見られる「憂いもの、情けなく苦しいもの」<sup>注2</sup>としての「世」が詠まれる例が多く見られる。明治三十一年になると、「煤拂ふ」の短歌のように、

「憂いもの、情けなく苦しいもの」としての「世」ではない例も見ることが出来る。

明治三二年の「人事語彙」の異なり語数は一一七語である。

前期間よりも「人事語彙」の語数が、やや減少している。しかし、明治三二年の子規短歌全体の作歌数が少ないことを考えると、「人事語彙」の使用が減少しているとは言えない。明治三二年の全作品数に対する「人事語彙」の詠まれた作品数を見ると、「人事語彙」を歌に詠む傾向が一時的に強くなっている。

多く使用されている「人事語彙」は次の七語である。「歌」「哀れ」「夢」「世／代」の四語が古来頻繁に使用されている語彙である。

歌・哀れ・夢・世／代・病・病ひの床／病ひの牀・詩

明治三二年では、「歌」「病」「病ひの床／病ひの牀」「詩」といった、子規に身近な内容の「人事語彙」が多くなっている。次に歌の例を挙げる。

我庵に人集まりて《歌》詠めは鉢の莖に日は傾きぬ

(一〇七二・三二年)

晴るゝ日を《病の牀》にすわり居て文讀み居れば文面白き

(一〇九二・三二年)

世の中に妙なる君の《歌》をおきてあだし歌人善き歌はあらず

(一一四四・三二年)

友の來て君の《病》を告げゝらくけふも熱あり目いたく落ちぬと

(一一九二・三二年)

《詩》に名ある種竹山人支那に行くと歌もて送る竹の里人

(一二二〇・三二年)

幾年の長き《病》のなぐさめに蜜柑もらひて年暮れんとす

(拾遺二七七・三二年)



「我庵に」の短歌では歌会のことを詠んでおり、「晴るゝ日を」と「幾年の」の短歌では子規自身の病気を詠んでいる。「世の中に」の短歌では『金槐和歌集』の感想が詠まれ、「友の來て」の短歌では知人の病気が詠まれている。「詩に名ある」の短歌では知人が詩人であることを表している。

**明治三三年**の「人事語彙」の異なり語数は一八五語である。

明治三一年と明治三二年よりも「人事語彙」の語数は増加している。しかし「人事語彙」を詠んだ作品数を見ると、「人事語彙」を歌材とする傾向は小さくなっている。

多く使用されている「人事語彙」は次の通りである。「歌」「世／代」が古来頻繁に使用されている語彙である。

歌・病ひの床／病ひの牀・世／代・病

明治三三年で多く使用されている「人事語彙」は、明治三二年で多く用いられている語彙である。また、「歌」「病ひの床／病ひの牀」「病」といった、子規にとって身近な内容により偏っている。

**明治三四年**の「人事語彙」の異なり語数は二二語である。

前期間よりも、「人事語彙」の語数が減少している。これは明治三四年の作品数全体が少ないことと関係していると考えられ、また「人事語彙」を歌に詠む傾向が弱くなっていることも原因として考えられる。

五首以上の作品に使用例が見られる「人事語彙」は見られない為、二首以上の作品に使用例が見られる「人事語彙」を次に挙げる。

世の中・哀れ・歌・病・(いたづき)病・命・病ひの床／病ひの牀

「世の中」「命」「哀れ」が、古来頻繁に使用されている語彙である。また、この期間の子規短歌の「人事語彙」は、子規の病状に関する内容が多くなっている。

**明治三五年**の子規短歌での「人事語彙」の全異なり語数は十三語である。

「人事語彙」の語数が更に減少している。これも明治三四年の場合と同様に、明治三五年の作品数全体が少ないことと、「人事語彙」を歌に詠む傾向が弱くなっていることが関係していると言える。

五首以上の短歌に詠まれている「人事語彙」が無いため、二首以上の作品に使用例が見られるものを次に挙げる。

歌・題・鉢植ゑ・見らく

右の四語は、子規にとって身近な内容を表すものとなっている。「見らく」は二首に見られる「人事語彙」である。二首ともに子規の行動を表している。

鉢植の梅はいやしもしかれとも病の床に《見らく》飽かなく

(拾遺四六四・三五年)

やみてあれは庭さへ見ぬを花莖我手にとりて《見らく》うれしも

(拾遺四七二・三五年)

子規の行動を表す「人事語彙」について、外出行為を表すものは、明治三三年以降では次の一首のみに見られる。

水汲みに《往來》の袖の打ち觸れて散りはじめたる山吹の花

(拾遺三七五・三四年)

### 第三項 「自然物語彙」について

本項では「地理語彙」の一分野である、「自然物語彙」を扱う。子規の病状悪化に伴う行動範囲の狭まりと、短歌に

詠まれる「自然物語彙」の使用実態とに、関係を見ることが出来る。

「地理語彙」は、「自然物語彙」（例えば「海」「波」など）と「地名語彙」（例えば「東京」「フランス」など）と特定されない場所を表す語彙（例えば「庭」「故郷」など）の三分野に分けられる。「隅田川」など「自然物語彙」と「地名語彙」が重複する例も見られる。

**明治三十年以前**の「自然物語彙」の異なり語数は一七二語である。

多く使用されている「自然物語彙」の中で、「地名語彙」を除いたものには、次のものが挙げられる。左の九語は全て古来頻繁に使用されているものである。

山・水・海・波／浪・路／道・瀧・岩・森／杜・磯

**明治三十一年**の「自然物語彙」の異なり語数は二〇七語である。

「自然物語彙」の語数が増加している。

多く使用されている「自然物語彙」の中で、「地名語彙」を除いたものには、次の十語が挙げられる。左の十語は全て古来頻繁に使用されているものである。

山・波／浪・野・水・森／杜・路の邊・路／道・畑・峯／峰・小道／小路

明治三十一年の子規短歌に見られる「自然物語彙」は、陸のものが多くなっている。実際に海を旅したのは明治三十年以前であるので、子規の行動範囲の変化が現れていると言える。

**明治三十二年**の「自然物語彙」の異なり語数は一〇六語である。

明治三二年から「自然物語彙」の語数が大きく減少している。

多く使用されている「自然物語彙」の中で、「地名語彙」を除いたものには、次の二語が挙げられる。この二語は古来頻繁に使用されているものである。

山・森／杜

明治三二年に多く使用されている「自然物語彙」は、共に陸にあるものである。「海」も四首に見られるが、四首ともに想像もしくは回想によるものである。

借りて住む磯の家居は《海》見えて白帆行くなり葦垣の外に

(一〇五六・三二年)

來し方をかへりみすれはろくくと《海》の彼方に雁鳴きわたる

(一一一一・三二年)

荒磯邊の假屋の闇に涼み居れば大きな月《海》より出でけり

(一一五四・三二年)

《海》照す月の光の涼しさに向ひの島へ渡らんと思ふ

(一一五五・三二年)

三首もしくは四首の作品に見られる「自然物語彙」には「岡」「川」「坂／阪」「野」「川」などがあり、この期間の「自然物語彙」の内容も、陸上のものに偏っていると言える。

**明治三三年**の「自然物語彙」の異なり語数は一五六語である。

明治三一年と比べると、「自然語彙」の語数は減少している。

多く使用されている「自然物語彙」の中で、「地名語彙」を除いたものには、次の七語が挙げられる。「土」以外の六語が古来頻繁に使用されている語彙である。

森／杜・瀧・波／浪・水・山・野・土

明治三三年では、「森」を詠むことが増加し、「山」を詠むことが減少している。この期間で「森」を詠むことが大きく増加しているのは、「森」と題の付された三十首の作品群があるためである。この作品群の「森」は近所の森と遠方の森の両方が詠み込まれている。次に例を一首ずつ挙げる。

上野山タこえ來れば《森》暗みけだもの呖ゆるけだものゝ園

(一三七六・三三年)

とみ山の《森》の木陰の古寺に松島見んと我も訪ひ來し

(一三八九・三三年)

「山」は次の例のように遠方のものを詠んでいる例が多い。

足柄の《山》の櫻をねもころに見まく思へど汽車とゞまらず

(一六五四・三三年)

明治三四年の「自然物語集」の異なり語数は三語である。

「自然物語集」の語数が大きく減少している。この三語とも用いられている作品の数は一首であり、明治三三年までと比べると、「自然物語集」の使用が大きく減少している。

路／道・山・小田

明治三五年の「自然物語集」の異なり語数は八語である。

「自然物語集」八語の使用されている作品数は五首未満である。次に「地名語集」を除いた、明治三五年の「自然物語集」を挙げる。

水・路／道・山・海・潮／汐・土塊・野・野邊

この「海」「潮／汐」は、次の作品のものであり、お吸い物の比喩で用いられている。

麩の《海》に《汐》みちくれば茗荷子の葉末をこゆる眞玉白魚

(拾遺五一・三五年)

実際の自然物を表している「自然物語彙」の詠まれ方を見ると、次の歌のように知人など子規の身の出来事に起因しているものである。

かみふさの《山》の杉きりみやこべの茅場の町に茶室つくるも

(拾遺四五八・三五年)

おほやけのみことかしこみ牛の爲に建てし小屋はもけふの《水》の爲

(拾遺五〇六・三五年)

#### 第四項 「動物語彙」について

子規短歌の「動物語彙」には、次の内容の語彙を分類する。

次の項目、「魚類」「獸類」「鳥類」「爬虫類 其他」「蟲類」は子規による「たね本」の項目によるものであり、分類する語彙の内容は「たね本」に挙げられている語彙を参考に行っている。「動物によって作られたもの」について、「たね本」に「燕の巢」が「鳥類」に挙げられているので、それを参考に独自に設けた項目である。

左に挙げる項目ごとに示す「動物語彙」の例は、子規短歌に見られるものである。

魚類（「鮎」「貝」等）

梅咲きぬ《鮎》も上りぬ早く來と文書きてよこす多摩の里人

(三六三・三一年)

《貝》拾ふ子等も歸りぬ夕霞鶴飛びわたる住吉の方に

(五二四・三一年)

獸類（「犬」「海豚」等）

けものすら門をもるともしら浪のしらぬ心そ《犬》におとれる

（六六・十八年）

わが船は大海原に入りにけり舳に近く《いるか》群れて飛ぶ

（三七六・三一年）

鳥類（「鶯」「カナリア」等）

《鶯》のねくらやぬれんくれ竹の根岸の里に春雨そふる

（二二二・二五年）

わか如く晴を喜ぶ《カナリヤ》のちゝと啼きてははこべ喰ひけり

（一〇九六・三二年）

爬蟲類 其他（「蛙」「龜」「龍」等）

軒並ぶ賤が伏家の門川に山吹咲いて《蛙》鳴くなり

（五一四・三一年）

鳥ならば天翔るべし《龜》の身の泥に尾を引く御世を樂む

（一三四一・三二年）

《龍》ノ住ム青垣<sup>？</sup>ノ岩ノ上ニ高ワタシタル丹塗神橋

（一八三〇・三三年）

蟲類（「蟻」「蟬」等）

雲の峰空に立つ日は餌をはこぶ《蟻》のなりはひいそかしきかな

（七三七・三一年）

公園の坂を登れば《蟬》さわぐ高木の陰に氷店あり

（一一八一・三二年）

動物によつて作られたもの（「巢」「新桑繭」等）

《巢》なからに取りおろされて飛びもえず悲しけに鳴く雀の子あはれ

（六一七・三一年）

上つ毛の《新桑繭》の小衾にをし鳥ぬひて君を祝はん

（一四七八・三三年）

以降、各期間で多く使用されている「動物語彙」について見てゆく。

**明治三十年以前**の「動物語彙」の異なり語数は六三語である。

多く使用されている「動物語彙」は次のものである。左の四語は全て古来頻繁に使用されているものである。

時鳥／郭公／子規・駒・鶯・都鳥

「時鳥／郭公／子規」と「鶯」は、以降の期間の子規短歌にも多く用いられている。

明治三十年以前の子規短歌には、「駒」は明治三十年以前では七首に詠まれ、「都鳥」は五首に見られる「動物語彙」である。明治三十一年以降の子規短歌では、「駒」は明治三十二年、明治三十三年、明治三十三年での一首ずつに、「都鳥」は明治三十一年に一首詠まれるのみとなる。馬を詠んだ短歌は明治三十一年以降にも多く見られるが、次の例のように「駒」ではなく「馬」で表現している。

日は落ちぬ雨はふりいでぬ飯たきて妻待つらんぞ《馬》うちて行け

(四〇六・三十一年)

「駒」と「馬」の使い分けについて、『歌ことば歌枕大辞典』で次の指摘<sup>注3</sup>がされている。

…『古今集』では、詞書には「馬」、和歌本文には「駒」を用いるというように、「駒」はより雅びな言葉としての認識があった。…

子規は明治三十一年に発表した「十たび歌よみに與ふる書」で、古歌に用いられる語以外を用いることについて、次の主張<sup>注4</sup>を述べている。

…歌では「ぼたん」とは言はず「ふかみぐさ」と詠むが正當なりとか、此詞は斯うは言はず必ず斯ういふしきた



りの者ぞなど言はるゝ人有之候へどもそれは根本に於て已に愚考と異り居候。愚考は古人のいふた通りに言はんとするにても無く、しきたりに倣はんとするにても無く只自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本來の主意に御座候。：

このように子規は、古典では和歌本文に用いない語も短歌に詠み込み得るものとしており、その実践は明治三十一年以降の子規短歌に見ることが出来る。次に子規短歌での「駒」と「馬」の例を挙げる。

明治三十一年以降の子規短歌での「駒」の例を三首挙げる。

なまよみの甲斐の黒駒久方の月毛の《駒》とあひいはえつゝ

(五一・三一年)

うま人の裾濃のよそひ《駒》たてゝ遠くに人の琴弾くところ

(一〇二六・三二年)

ぬは玉の黒毛の《駒》の太腹に雪解の波のさかまき来る

(一七九九・三三年)

「なまよみの」と「ぬは玉の」の短歌は、古典的な和歌の技法（枕詞）が見られる作品である。「うま人の」の短歌は絵の内容が題材とし、「うま人」や「琴」といった雅びを想起させる語彙と共に詠まれている。「ぬは玉の」の短歌は『平家物語』が題材となっており、古典を思い起こさせる内容となっている。

明治三十一年以降の「馬」を詠んだ作品は、次の例のように雅びではない語彙と共に詠まれることが多い。

《馬》にして憐むべきは生臭きせ法師らの車引く《馬》

(一一一五・三二年)

《馬》のひくそれにもあらずエレクトルのそれにもあらず車やれこそ

(一二九六・三二年)

うま人が《馬》踏みはづし落ちにけんその跡どころしめ立てゝおけ

(一六七六・三三年)

宇治川の早瀬よこぎるいけじきの《馬》の立髪浪こえにけり

(一八〇一・三三年)

このように明治三一年以降の子規は、歌に詠み込む語彙として「馬」を積極的に使用するようになっていく。また「駒」は古歌の技法や雅びな内容の語彙と共に用いられ、「馬」は雅ではない内容の語彙と共に用いられるといった使い分けを見ることが出来る。

「都鳥」について、明治三十年以前では五首に詠み込まれている。次に例を二首挙げる。

《都鳥》 いざこととはん業平のこゝさまよひし昔いかにと

(八〇・十八年)

あちきなき世をさけし身も《都鳥》都のたよりきかまほしけれ

(拾遺八六・二十一年)

「都鳥」の詠まれ方について、『歌ことば歌枕大辞典』に次の指摘<sup>注5</sup>がなされている。

…その呼び名から都を思い出させる鳥として歌われることが多く、また齋宮女御や和泉式部の作のように業平の

「名にし負はば」の歌や『伊勢物語』の叙述を意識した歌い方が一般的である。…

明治三十年以前の子規短歌での「都鳥」は、右に指摘されている古典的な詠まれ方となっている。

明治三一年になると『伊勢物語』を下敷きにしている内容であるが、これまでの子規短歌と異なり、「業平の昔おもほゆる」と明記した作品となっている。次に明治三一年の作品を挙げる。

嘴と足と赤きといひし業平の昔おもほゆる《都鳥》かも

(四〇九・三一年)

このような古典の題材と類似した状況であることを歌中に示す方法は、次の歌にも見られる。

うは玉の闇に《梅か香》聞え來て躬恒か歌に似たる夜半かも

(一四五二・三三年)

「嘴と足と」と「うは玉の」の短歌で見られるように、古典と類似している状況であることを歌中で明示することで、古歌で多く詠まれる題材の表現を行う際に古典的な詠み方から外れるようにしていると考えられる。例えば、闇の中で梅が香っていることのみを表現すると、古典の題材そのまま用いることになり、子規の短歌革新の姿勢と反するものとなる。古典の題材が古典のものであると明示することで、題材は古歌を下敷きにしつつも、表現は古歌から脱却できるのではないだろうか。

**明治三十一年の「動物語彙」の異なり語数は一一三語である。**

多く使用されている「動物語彙」は次の通りある。「蠅」と「狼」以外の八語は、古来頻繁に使用されているものである。

雲雀・時鳥／郭公／子規・蠅・巢・鷹・鳥・螢・蟬・鶴・狼

右の十語の殆どが、明治三十年以前の作品に用いられていないもの、もしくは一首に詠まれているものである。短歌革新発表前の作品では殆ど歌材とされていない「動物語彙」の使用が多くなっており、子規の短歌の材料の拡大の実践を見ることが出来る。

「雲雀」「時鳥／郭公／子規」「蠅」「巢」「鷹」「螢」のそれぞれの「動物語彙」を詠んだ作品には、それぞれの動物がテーマとなっている作品群の多い。例えば、明治三十一年の「雲雀」を詠んだ全ての例は、「雲雀」又は「子雲雀」が題材となっている、『竹乃里歌』の通し番号五七九番から五九三番までの十五首の中の十四首である。残りの一首は「子雲雀」が詠まれている作品である。左に「雲雀」を詠んだ作品例を二首挙げる。

《雲雀》 鳴く空に星消え月落ちて一筋赤く日上らんとす

(五七九・三一年)

笠買ふて都出て行く人多し 《雲雀》 鳴く頃木瓜開く頃

(五八三・三一年)

右に挙げた二首の例のように、明治三十一年の「雲雀」を詠んだ作品群では、雲雀の鳴いていることが詠まれることが殆どである。これは明治三十年以前の「雲雀」を詠んだ作品(左の一首)と共通である。

高とのゝ三つは四つはのあととへば麥の二葉に 《雲雀》 なく也

(二四四・二六年)

明治三十一年の「雲雀」を詠んだ作品群では、雲雀が鳴いていることと組み合わせる内容が多様である。前に挙げた「雲雀鳴く」の短歌では「星」「月」「日」の動きと共に詠まれ、「笠買ふて」の短歌では「人」の動きと「木瓜」の様子が共に詠まれている。

このように、明治三十年以前から多く用いられる「時鳥／郭公／子規」を除き、明治三十一年に多く詠まれる「動物語彙」「雲雀」「蠅」「巢」「鷹」「螢」は、子規短歌の新しい題材として積極的に実作が行われている。また同一の題材を複数続けて詠む際には、様々な趣向となるような題材の組み合わせを見ることが出来る。

明治三十一年で多く詠まれている「動物語彙」の特徴として、「魚類」と「爬虫類 其他」と「蟲類」に分類される「動物語彙」の拡大が見られることも挙げられる。次に明治三十年以前と明治三十一年の子規短歌に用いられている、「魚類」「爬虫類 其他」「蟲類」の「動物語彙」を挙げる。複合語には「動物語彙」の箇所に傍線を付している。古来頻繁に使用されているものは太字としている<sup>注6</sup>。

魚類                      明治三十年以前    魚・鯉・鱗・河豚

明治三一年 鮎・鮎子・魚・貝・金魚・鯉・小鮒・白魚・泥鰌・目高  
爬蟲類 其他 明治三十年以前 龜・龍

明治三一年 青蛙・蛙・龍・家守・大蛇

蟲類 明治三十年以前 鈴蟲の音・蟬・蟬の音・蝶の夢・螢・蜈蚣・蟲・蟲の音

明治三一年 青蠅・蟻・蚊・蠶・蜻蛉・糞蠅・屎蟲・蟬・蝶・蠅・蛸・螢

明治三一年の子規短歌での「魚類」「爬蟲類 其他」「蟲類」の「動物語彙」は、「金魚」や「家守」、「蠅」といった古来頻繁に使用されるものではない内容が多くなっている。

また、詠み方も古典的な方法から脱却している例が見られる。例えば「蟲」について、歌ことばとしての意味は「秋に鳴く虫の総称」<sup>注7</sup>である。

明治三十年以前の子規短歌には、次の三首に「蟲」「蟲の音」が詠まれている。螢を指している「川の端の」の短歌での「むし」以外は、「秋に鳴く虫」が詠まれている。

川の端のをひしけりたる草の葉に夜しる《むし》の見えつかくれつ

(拾遺二・十五年以前)

ほにいてし尾花のもとに《蟲》そなく見るも聞さへ秋は淋しき

(五九・十八年)

《蟲の音》もよわり行きけり白露はいつしか霜とおきかはらん

(七五・十八年)

草まくら薄の本の露しげみ袂の上に《蟲》そなくなる

(二〇二・二十四年)

明治三一年以降になると、次の例のように「秋に鳴く虫」は詠まれていない。「屎蟲」と「蟲」が詠まれている子規

短歌を挙げる。

糞蠅は《屎蟲》を笑ひ《屎蟲》は糞蠅そしる世にこそありけれ

(九〇八・三一年)

《屎蟲》の臭きを笑ふ笑ふものは同じ厠の屎の上の蠅

(九一一・三一年)

人を刺す《蟲》をかしこみからへ行く君が首途に草はなむけす

(一二二五・三二年)

窓の外の《蟲》さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし

(一四二三・三三年)

「糞蠅は」と「屎蟲の」の短歌は、「獵官聲高くして炎熱いよ／＼加はる戯れに蒼蠅の歌を作る」と詞書のある作品群のものであり、ここでの「屎蟲」は実際の虫ではなく「獵官」の譬えである。他の二首の「蟲」は「秋に鳴く虫」として詠まれておらず、古典的な「虫」の詠み方から脱却しているといえる例である。

**明治三二年**の「動物語彙」の異なり語数は五六語である。

明治三一年と比べて「動物語彙」の語数が少ないのには、明治三二年の子規の作歌数が少ないことと、「動物語彙」を詠むことが減少傾向になっていることが関係している。

多く使用されている「動物語彙」は次の通りある。左の三語全てが古来頻繁に使用されているものである。

蟬・鳥・鹿

明治三二年に多く詠まれている「動物語彙」は、古来頻繁に使用されているものである。また、次の「象」「蛇共」「蝸牛」のような、子規短歌では明治三二年に初めて短歌に詠まれ、且つ古来頻繁に使用されていない「動物語彙」の例も見ることが出来る。

木のもとに臥せる佛をうちかこみ《象》《蛇とも》の泣き居るところ

(一〇二五・三二年)

むかばらの瘤の朝臣に物申す薬といふそ《かたつむり》喰へ

(一一一七・三二年)

この期間でも歌材としての「動物語彙」の内容を依然として広く求めていると言える。

明治三年の子規短歌の「動物語彙」は、異なり語数六八語である。明治三年と比べ「動物語彙」の語数は少なく、明治三年より見られる「動物語彙」を詠むことの減少傾向が更に進んだものとなっている。

多く使用されている「動物語彙」は次の通りある。左の五語は全て古来頻繁に使用されているものである。

鳥・時鳥／郭公／子規・牛・馬・鴉／鳥

明治三年の「動物語彙」も、多くの作品で詠まれているものは、古来頻繁に使用されているものである。また「蛭」や「孔雀」や「鸚鵡」などのような、子規短歌では明治三年に初めて詠まれており、且つ古来頻繁に使用されていない「動物語彙」の例も見られる。左に「蛭」「孔雀」「鸚鵡」を詠んだ例を一首ずつ挙げる。

《蛭》の住む森わけ入りて《蛭》に血を吸はれきといふ蛭物語

(一四〇二・三三年)

鳥見にと我來し時に玉かざる《孔雀》大鳥尾をひろけたり

(一五二一・三三年)

美人問へば《鸚鵡》答へず《鸚鵡》問へば美人答へず春の日暮れぬ

(一五四二・三三年)

また、身近な動物ではないものが詠まれなくなる例も見られる。例えば身近な鳥とは考えられない「鶴」が、明治三三年以降の作品に見られなくなることその例と言える。次の三首の例の「鶴」は、庭や近所に訪れる又は生息している鳥ではない。

親やしたふ子やしたふらん和歌の浦の蘆間かくれに《たづ》そなくなる

(一三三・一三三年)

貝拾ふ子等も歸りぬ夕霞《鶴》飛びわたる住吉の方に

(五二四・三一年)

野の川を踏み行く《鶴》は薄氷の碎けし穴に泥鰻をついはむ

(一三三八・三二年)

明治三三年でも、明治三一年の場合よりも歌材の拡大の実践は収まってきているが、短歌に詠む「動物語彙」の内容を広く求める子規の姿勢を見ることが出来る。

**明治三四年**の「動物語彙」の異なり語数は六語である。

「動物語彙」の語数が大きく減少しているのには、明治三四年の子規の全作歌数が八九首と非常に少なくなっていることと、明治三二年から見られる「動物語彙」を詠むことの減少傾向と関係している。

多く使用されている「動物語彙」は次の一語であり、古来頻繁に使用されているものである。

時鳥／郭公／子規

「時鳥／郭公／子規」は明治三十年以前から明治三四年までの全ての期間で、多く詠まれている題材である。明治三五年では「時鳥／郭公／子規」が詠まれる短歌が見られなくなる。

明治三四年の「動物語彙」は他にも次のものがある。「田雀」以外の四語が古来頻繁に使用されているものである。

牛・田雀・蝶・鳥・山時鳥／山郭公

明治三四年の「動物語彙」を詠んだ作品は、身近な物事に起因してのものである。次に例を六首挙げる。

下總の結城の小田の《田雀》は友うしなひてさふしらに啼く

(拾遺三六二・三四年)



《ほととぎす》つくれる《鳥》は目に飽けどまことの聲は耳に飽かぬかも

(拾遺四一九・三四年)

我病みていの寝らえぬに《ほととぎす》鳴きて過ぎぬか聲遠くとも

(拾遺四二二・三四年)

ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず《山ほととぎす》

(拾遺四二三・三四年)

足引の山のつとひに君來ずば《牛》てふ題のうしやさひしや

(拾遺四二八・三四年)

ガラス戸の外面に咲けるくれなゐの牡丹の花に《蝶》の飛ぶ見ゆ

(拾遺四四〇・三四年)

「下總の」の短歌は長塚節宛の書簡のものである。「ほととぎす」「我病みて」「ガラス戸に」の短歌は、子規に贈られた剥製の時鳥に向かって「思ふところを述」<sup>注8</sup>べた作品群（「竹乃里歌」拾遺通し番号、拾遺四一五番から拾遺四二四番までの十首）のものである。「足引の山の」の短歌では、山会の出来事が詠まれ、「ガラス戸の」の短歌では庭の様子が詠まれている。

明治三四年の「動物語彙」の多くが「田雀」「鳥」「時鳥／郭公／子規」「山時鳥／山郭公」と鳥である。これらの鳥の殆どに対して、次の例のように、鳴いている鳥や鳴き声といった聴覚による表現がされている。聴覚による表現と判断する箇所には傍線を付す。

下總の結城の小田の《田雀》は友うしなひてさふしらに啼く

(拾遺三六二・三四年)

《ほととぎす》聲も聞かぬは來馴れたる上野の松につかずなりけん

(拾遺四二一・三四年)

《ほととぎす》鳴くべき月はいたつきのまさるともへば苦しかりけり

(拾遺四二四・三四年)

本稿の第三部、第四部で見てゆくが、子規短歌では次の作品のように、視覚表現を用いた例が非常に多い。これは、

写生を短歌に用いるという子規短歌の方法に拠るところが大きいと考えられるものである。例えば左の作品の「梅」に対する表現は、「竹藪の藪陰」と「梅」のある場所が示され、「五六本」と「梅」の本数が詠まれている。「竹藪の藪陰」に「五六本」の「梅」があると、「梅」が視覚的に表現されている作品と言える。

北うけて雪また残る竹藪の藪陰寒し梅五六本

(五九六・三一年)

しかし、明治三四年以降の鳥の詠まれ方は、聴覚による表現が殆どである。明治三五年では鳥を詠んだ作品が二首見られるが、二首とも鳥に対する聴覚表現が用いられている。聴覚による表現と判断する箇所傍線を付す。

わか病める枕邊近く咲く梅に《鶯》なかばうれしけむかも

(拾遺四六〇・三五年)

そらみつ、やまとのいもは、《鶯のね》の、とろゝにすなる、つくいもなるらし

(拾遺五〇八・三五年)

**明治三五年**の「動物語彙」の異なり語数は三語である。

「動物語彙」の語数が更に減少している。これは、明治三五年の子規の作歌数が少ないことと、「動物語彙」を詠むことが減少傾向になっていることが関係している。

明治三五年の「動物語彙」は次の通りある。三語ともそれぞれ一首の作品に使用されている。「鶯」と「牛」が古来頻繁に使用されているものである。

鶯・牛・鶯の音

明治三五年の「動物語彙」を詠んだ子規短歌は次の三首である。

わか病める枕邊近く咲く梅に《鶯》なかばうれしけむかも

(拾遺四六〇・三五年)

おほやけのみことかしこみ《牛》の爲に建てし小屋はもけふの水の爲

(拾遺五〇六・三五年)

そらみつ、やまとのいもは、《鶯のね》の、とろゝにすなる、つくいもなるらし

(拾遺五〇八・三五年)

「おほやけの」の短歌は、「戯れに左千夫におくる(牛舎改築後洪水あり)」と詞書があり、左千夫に起きた出来事に基づいた作品である。「そらみつ、」の短歌には「一、やまべ(川魚)やまと芋は節より」と題が付されており、この作品も知人の行為に起因してのものである。

明治三五年の「動物語彙」は、子規の身近な物事に起因しての使用となっている。「動物語彙」の選択が身近なものになって行くのは明治三三年から見られ始め、晩年に強く現れるようになる。

#### 第四節 まとめ

以上、「器物語彙」と「宮室語彙」、「服装語彙」、「人事語彙」、「自然物語彙」、「動物語彙」について見て来た。

この六種類の語彙に共通して見られる特徴は、次の内容である。

- 一、明治三一年、明治三二年、明治三三年のそれぞれの期間で、初めて使用される語彙は古来頻繁に使用されるものではないものが多く見られること。また、このような語彙の多くが、複数の期間で詠まれることがないこと。
  - 二、明治三四年以降の晩年では歌材の選択が身近な物事に拠るものへと狭まること。
  - 三、多くの作品に詠まれる語彙は、古来頻繁に使用されているものである傾向が見られること。
- それぞれの語彙の特徴をまとめると、次の内容を指摘することが出来る。

「人工物語彙」（「器物語彙」「宮室語彙」「服装語彙」）について、次の語彙の使用実態の変化が見られる。

明治三十年以前の短歌にも次の一首のように、蒸気船の意味の「船」といった近代の乗り物を詠む例が見られるが、その例数は少ない。

小間物をさゝげし甲斐もありがたや金比羅丸と《船》も名のれり

（拾遺一五五・二三年）

明治三十年以前の子規短歌に多く詠まれている人工物（例「窓」「白帆」「玉梓／玉章」等）は、全て古来短歌に頻繁に使用されているものである。

明治三一年になると、「人工物語彙」の使用が増加する。この増加傾向は明治三三年まで見られる。明治三一年では、「車」などの乗り物を表す語彙（「器物語彙」の一分野）と、「家」「門」などの建物を表す語彙（「宮室語彙」）の増加を見ることが出来る。また、明治三十年以前の子規短歌では題材となることが殆ど無い人工物、「車」「太鼓」「團扇」「産湯」が積極的に詠まれている。

明治三二年では、明治三一年までは歌材とされることが少なかった、仏像の意味の「佛」と「病の床／病の牀」の積極的使用が見られる。特に、当時の子規の状態を表す語彙である「病の床／病の牀」が多く詠まれるようになることは、後の期間の特徴に繋がるものである。

明治三三年の「人工物語彙」には、次の「笠」と「舟／船」の例のような当時の子規の生活に即していないものの例も見られるが、「ガラス戸」や「鳥籠」など身近にある人工物を詠んでいる作品を多く見ることが出来る。

武藏野のこからししぬぎ旅行きし昔の《笠》を部屋に掛けたり

（一三五・三三年）

から國ゆ歸りし《船》の舳に立ちて須磨の濱松見ればうれしも

(一七四八・三三年)

明治三四年以降になると、人工物を短歌に詠み込む傾向が小さくなり、詠まれる「人工物語彙」の数も少なくなる。この晩年の子規短歌に用いられる「人工物語彙」は、当時の子規の状態に即したものの、身近な出来事に起因して詠んだものが多い。次に挙げる例は、根岸の子規庵の庭の牡丹の雨除け、子規の臥している部屋での行動、碧梧桐の土筆摘みに拠って選択された語彙である。

さかりなる牡丹の花におほはまく雨のふる《傘》とりいてゝ見つ

(拾遺四三四・三四年)

《枕へ》に友なき時は鉢植の梅に向ひて歌考へつゝ

(拾遺四六八・三五年)

赤羽根の《つゝみ》にみつるつく／＼し我妹と二人摘めと盡きぬかも

(拾遺四八五・三五年)

うちなけき物なおもひそ赤羽根の《汽車》行く路につく／＼しつめ

(拾遺四八八・三五年)

「人事語彙」について、最も特徴的と言えるのは、明治三一年を境にした歌材の拡大が見られないことである。

明治三十年以前では、「心」や「戀」といった心情に関連するものや、「我身」や「別れ」といった境遇を表すものが多く詠まれている。

明治三一年を境に心情や境遇を表す内容の「人事語彙」の使用が大きく減少する。この「人事語彙」の使用の減少は、次の子規の主張に拠るものと言える。

…人事を敘する者は散文に多く天然を敘する者は韻文に多し。蓋し人事は主觀的にて複雑なるを以て長篇に非ざれば之を盡し難く韻脚等のわづらひ多ければ之を述ぶるに難かり。天然は客觀的にして簡單なるを以て韻文能く

之を盡し而かも餘音を永うするを得。…散文にて人事を敘する者は小説を以て極度とす。言はゞ詩歌は天然の小説にして小説は人間の小説なり。…注<sup>9</sup>

…人事の複雑は小説にのみ言ひ得べくして和歌俳句に言ひ得べからざるのみ。…注<sup>10</sup>

「人事」の内容について、明治二七年発表の子規による「文學漫言」で、次のように説明されている。

…敘すべき人事にも種類あり離別哀傷戀愛祝賀等の如し。…注<sup>11</sup>

このように子規は「人事」を「複雑」なものとし、詩歌には「離別哀傷戀愛祝賀等」を題材にすることは適さないとしている。

**明治三二年**では、一時的に「人事語彙」の使用が多くなっている。この期間で多く詠まれている「人事語彙」は、「歌」「病」といった子規にとって身近な内容となっている。

**明治三三年**では、再び「人事語彙」の使用が減少している。またこの期間で多く使用されているものは、「歌」「病」の床／病ひの牀」「病」であり、明治三二年の内容とほぼ同様である。

**明治三四年**では更に「人事語彙」の使用が少なくなる。内容は、「病」など子規の病状に関するものが多い。

**明治三五年**でも「人事語彙」の使用が少なく、また子規の身近な物事に起因した語彙に偏っている。

**明治三四年以降**の子規短歌では、子規自身の境遇を詠む場合に「我身」「身」を用いずに、次の歌のように季節や植物など自然物や自然現象に自身を投影させて表現している。次の例は明治三四年に発表された『墨汁一滴』に記載されたものである。詞書に「しひて筆を取りて」とある十首の作品群の中のものである。

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

(拾遺三八三・三四年)

「しひて筆を取りて」の作品群について、今西幹一氏による次の指摘<sup>注12</sup>がある。

…子規が獲得してきた短歌の世界と方法の一の系譜である「庭前即景」と、自己の生の觀照、〈いのち〉の凝視の系譜とが、ここに一体となり、融合していること、そこに子規短歌の到達と完成を見るべきかと思われる。…

「我身」等の語彙を用いずに自らの境遇を詠む方法は、晩年の子規短歌に見られる特徴の一つである。しかし、今西幹一氏は「子規短歌の到達と完成を見るべきかと思われる。」としているが、子規自身は「しひて筆を取りて」の作品群が自身の短歌の「到達と完成」と意識はしていなかったのではないかと考える。

なぜなら、「しひて筆を取りて」以降の子規の短歌には「庭前即景」と「自己の生の觀照」と「いのち」の凝視が「融合」している作品は多くはない。確かに、次の例の親孝行を題材にしていることや、「千草ノ花」に注目していること、故郷のことを思い出していることは、「自己の生の觀照」「〈いのち〉の凝視」と関係している可能性がある。しかし、このような作品の数は多くはない。

たらちねの母の車をとりひかひ千里も行かん岩手の子あはれ

(拾遺三九三・三四年)

我庭ノ三モト松伐リアハレ深キ千草ノ花ニ日ノ照ルヲ見ン

(拾遺四四三・三四年)

くれなゐの梅ちるなへに故郷につくしつみにし春し思ほゆ

(拾遺四五九・三五年)

「しひて筆を取りて」以降の作品には、次のような自己の境遇を感じさせない、折に触れての作品が多く見られる。

椎の葉にもりにし昔おもほへてかしはのもちひ見ればなつかし

(拾遺四〇三・三四年)

雨ふると牡丹の上に蔽ひたる小傘かくれに赤き花見ゆ

(拾遺四三五・三四年)

大君のみことかしこみあら玉のとしのはしめに梅の花さく

(拾遺四四九・三五年)

近江のやいふきおろしにさらしたる米の粉たひし君し戀しも

(拾遺五〇〇・三五年)

また、明治三四年四月二八日に新聞「日本」に発表された次の文章<sup>注13</sup>より、当時の子規の短歌への興味が疎くなっていることが伺える。

…夕餉したゝめ了りて仰向に寝ながら左の方を見れば机の上に藤を活けたるとよく水をあげて花は今を盛りの有様なり。艶にもうつくしきかなとひとりごちつゝそぞろに物語の昔などしぬばるゝにつけてあやしくも歌心なん催されける。斯道には日頃うとくなりまさりたればおぼつかなくも筆を取りて…

このことから、「しひて筆を取りて」の作品群に見られる、今西幹一氏の指摘する「庭前即景」と「自己の生の観照」と「(いのち)の凝視」の「融合」、そして「我身」等の「人事語彙」を用いずに自らの境遇を詠む子規短歌の方は、ほぼ無意識に行われたものではないかと考える。

「自然物語彙」の使用実態について、子規の行動範囲の変化が語彙の使用に関わっている。

明治三十年以前の作品で多く詠まれる「自然物語彙」は「山」「海」等であり、全てが古来頻繁に使用されるものである。以降の期間でも、多く使用される「自然物語彙」の殆どが、古来頻繁に使用されているものである。「土」といった古来頻繁に使用されているものではない。「自然物語彙」も見られるが、そのような自然語彙の数は少ない。

明治三一年では、「自然物語彙」の使用の増加が見られ、特に「山」「野」など陸に関する内容が多くなっている。



明治三一年の子規の行動範囲は人力車での外出の範囲となる。子規の行動範囲の狭まりが現れていると言える。

**明治三二年**での「自然物語彙」の使用は減少している。内容は、明治三一年と同様に陸のものに偏っている。

**明治三三年**での「自然物語彙」の使用は、明治三一年と比べ減少している。この期間では「森／杜」といった近場にある「自然物語彙」の方が、「山」といった遠方にある「自然物語彙」よりも多く詠まれる傾向である。

**明治三四年以降**では、「自然物語彙」を詠むことが大きく減少する。この期間の子規は人力車の外出も不可能となっており、「自然物語彙」が用いられる作品は、次の例のように子規の身近な出来事に拠って詠まれる例が多い。

かみふさの《山》の杉きりみやこべの茅場の町に茶室つくるも

(拾遺四五八・三五年)

「動物語彙」について、次の内容を指摘することができる。

**明治三十年以前**で多く使用されている「動物語彙」の半分は、明治三一年以降に用いられることが少なくなる。「駒」と「都鳥」が明治三一年以降に使用例数が減少する語彙である。

「駒」について、明治三一年以降は、古歌中では詠まれない形である「馬」で詠まれることが多くなる。以降の期間の作品の「駒」を見ると、古典的な作品での使用となっている。

「都鳥」について、明治三十年以前での詠まれ方は古典的な方法であり、明治三一年以降は次の一首に詠まれるのみとなる。

嘴と足と赤きといひし業平の昔おもほゆる《都鳥》かも

(四〇九・三一年)

同様の趣向は、次の一首にも見られる。

うは玉の闇に《梅か香》聞え來て躬恒か歌に似たる夜半かも

(一四五二・三三年)

このような古典の題材と類似した状況であることを示す方法は、子規の古典的表現からの脱却の方法の一つと言えるが、例は殆ど見られない。この方法は多用することが出来ないものであったと考えられる。

**明治三十一年**の「動物語彙」について、歌材の拡大を見ることができ。また拡大した「動物語彙」を積極的に実作している。「動物語彙」の拡大について、特に「鮎」などの「魚類」と「蛙」などの「爬蟲類 其他」、「蠅」などの「蟲類」の増加が著しい。「蟲」について、明治三十年以前では古歌での用法通り、秋に鳴く虫を表現しているが、明治三一年以降では、次の例のように「屎蟲」や「刺す蟲」など秋の鳴く虫以外が詠まれている。

《屎蟲》の臭きを笑ふ笑ふものは同じ厠の屎の上の蠅

(九一一・三一年)

人を刺す《蟲》をかしこみからへ行く君が首途に草はなむけす

(一二二五・三二年)

**明治三十二年**になると、「動物語彙」の使用が減少し始める。

一方で「象」や「蝸牛」などの、古歌に頻繁に使用されているものではなく、且つ前の期間までの子規短歌でも詠まれていない「動物語彙」の使用が見られる。ここに短歌の材料とする「動物語彙」の内容を広く求める姿勢を見ることが出来る。

**明治三十三年**について、「動物語彙」を詠むことの減少傾向が更に進んでいる。短歌に詠む「動物語彙」の内容の多様さは少し収まってきており、例えば子規にとつて身近ではないと考えられる鳥、「鶴」を詠んだ作品が見られなくなる。この期間でも短歌に詠む「動物語彙」の内容を広く求める子規の姿勢を見ることが出来る。例えば、次の例のよう

に「蛭」「孔雀」など、古歌に頻繁に使用されているものではなく、且つ前の期間までの子規短歌でも詠まれていない「動物語彙」の使用を見ることが出来る。

《蛭》の住む森わけ入りて《蛭》に血を吸はれきといふ蛭物語

(一四〇二・三三年)

鳥見にと我來し時に玉かざる《孔雀》大鳥尾をひろけたり

(一五二一・三三年)

**明治三四年以降**では、「動物語彙」を詠む傾向が更に減少している。「動物語彙」の内容は、左の例のように、身近な物事に拠って選択されたものとなる。

我病みていの寝らえぬに《ほととぎす》鳴きて過ぎぬか聲遠くとも

(拾遺四二二・三四年)

おほやけのみことかしこみ《牛》の爲に建てし小屋はもけふの水の爲

(拾遺五〇六・三五年)

また、明治三四年以降の鳥の詠み方について、鳥の鳴き声や鳴いている鳥が詠まれることが多くなることも特徴的である。なぜなら子規短歌の多くに視覚的な表現が多く見られるためである。

子規の写生の方法に聴覚が関わっていることについて、長谷川孝士氏によって次の指摘<sup>注14</sup>がなされている。引用文での改行は私に行ったものである。

…「月照ス上野ノ森ヲ見ツ、アレバ家ユルガシテ汽車行キ返ル」

では、「見る」から「聞く」へと移っている。一カ月半前(四月二十一日)の

「汽車の音の走り過ぎたる垣の外の萌ゆる梢に煙うづまく」

では、逆の「耳から目へ」の方向であった。子規の写生表現は、確かな目だけでなく、耳＝聴覚の働きが大きく

かわっているのである。…特に鳥や虫の鳴き声には強い関心や期待を寄せていた。…

子規は特に「鳥や虫の鳴き声」に対する関心があつたことが指摘されている。しかし短歌では、「鳥や虫の鳴き声」に対する「強い関心や期待」が、そのまま作品の数として現れていない。明治三四年以降の「鳥」を詠んだ短歌では「鳴き声」を題材にしたものが殆どになるが、「鳥」を詠んだ作品数自体は少なくなる。また、「虫の鳴き声」については、短歌革新発表の明治三十一年を境に、詠まれることが少なくなる。「蟬」は明治三十二年まで蟬の声が詠まれることが多い題材であるが、明治三三年以降の短歌には使用されなくなる。

子規短歌において鳴き声を詠む傾向が強い鳥として、鶯や時鳥などが挙げられる。次に例を挙げる。

《時鳥》 鳴きて谷中や過ぎぬらし根岸の里にむら雨ぞふる

(四一四・三一年)

衣を干す庭にぞ來つる《鶯》の紅梅に鳴かず竹竿に鳴く

(四二七・三一年)

子規短歌において鳴き声が詠まれる傾向が弱い鳥には、鷹、鶴、燕、鳶などが挙げられる。次に例を挙げる。

岡の邊の松にや《鷹》の下りにけん鳥ひそみたる原の草むら

(三九一・三一年)

風吹けば蘆の花散る難波潟夕汐満ちて《鶴》低く飛ぶ

(五二五・三一年)

裏畑の梨散り庭の藤咲きてやがて《燕》の巢は成りにけり

(六二六・三一年)

緑立つ庭の小松の梢より上野の杉に《鳶》の居る見ゆ

(六四七・三一年)

子規の生涯に渡って身近であつた鳥として雀や燕なども考えられるが、鳴き声を表す傾向が強い鳥(時鳥)が、明治三四年以降の短歌の題材に多く選ばれている。雲雀や雁も鳴き声を詠む傾向が強い鳥であるが、次の例のように外

出先が題材となっている作品に用いられることが殆どである。そのため、歌の題材の選択が身近な物事に限られてゆく晩年に、短歌に詠まれなくなっていると考えられる。

麥の葉に風吹きわたる旅心菅笠の上に《雲雀》鳴くなり  
(五八七・三一年)

田舎路をわが乗る車とどろきて冬田の畔の《雁》さわくなり  
(一〇〇一・三一年)

明治三四年以降の晩年で、鳴き声を表現する傾向の強い鳥を短歌の材料とすることが多く、且つ鳥の鳴き声を詠む例が殆どとなっている点に、長谷川孝士氏の指摘する子規の鳥の鳴き声に対する強い関心をうかがうことが出来る。

その一方で、鳴き声を表現する傾向の強い鳥を詠む作品数の晩年での減少が見られる。これは、晩年の子規短歌に「動物語彙」を詠む傾向が小さくなっていることと、鶯や時鳥の鳴き声を歌に詠むことが古典的な方法であることが関係していると考えられる。

歌ことばとしての「鶯」の詠み方について、『歌ことば歌枕大辞典』に次の内容<sup>注15</sup>が指摘されている。引用文の改行は私に行ったものである。

や  
…「百済野の萩の古枝に春待つと居りしうぐひす鳴きにけむかも」(万葉集・卷八・一四三一・一四三五・赤人)

「鶯の谷より出づる声なくは春来ることをたれにか知らまし」(古今集・春上・一四・千里)

などになると、待望の春の訪れを告げる鳥として解して、迎春の喜びを詠む、この本意が定着してゆき、「春告げ鳥」(梵灯庵袖下集)の異名を生む。…

歌ことばとしての「時鳥／郭公／子規」の詠み方について、次の内容<sup>注16</sup>が指摘されている。

…『万葉集』の時代からその声を賞美され、夏歌にきわめて多く詠まれる。…勅撰集においては夏歌の巻の大半を構成する重要な季材である。季節の進行によって厳密に配列されており、待つほととぎすからはじまり、忍び音、初声を聞き、盛んに鳴く、五月雨のなかのほととぎすなど、季節の進行に沿って配列される。…

このように、「鶯」と「時鳥／郭公／子規」の表現には、鳴き声を用いることが古歌に多く見られる。子規が古歌に多く見られる表現の回避のために、鳴き声を詠む傾向の強い鳥を詠んだ作品数が少なくなったのではないだろうか。

以上、「器物語彙」、「宮室語彙」、「服装語彙」、「人事語彙」、「自然物語彙」、「動物語彙」について見て来た。語彙の種類ごとに違いがあるものの、概ね次のような語彙の使用実態の変化の傾向が見ることが出来る。

**明治三十年以前**の子規短歌の題材は古歌に多く用いられているものが多く見られる。

**明治三十一年**になると、短歌の題材の内容が多様になり、その内容は古歌に捉われないものが多く見られるようになる。このような歌材の拡大は明治三十三年まで見ることが出来る。

**明治三十三年頃**から子規の身近な物事に起因した語彙の選択が見られるようになり、明治三四年以降での短歌の題材の殆どが、身近な出来事や身近な物に拠るものとなる。

このような短歌に使用される語彙の変化は、以降で見てゆく植物語彙、天文語彙、地名語彙、人物語彙にも見るこ

とが出来る推移である。

これまで見て来た「器物語彙」、「宮室語彙」、「服装語彙」、「人事語彙」、「地理語彙」(「自然物語彙」はこの一分野)、「動物語彙」のそれぞれに分類される、子規短歌の語彙の一覧を、他の意味分野の語彙の一覧と併せて、本稿の附章に挙げている。

次の頁より、「器物語彙」、「宮室語彙」、「服装語彙」、「人事語彙」、「地理語彙」、「動物語彙」の一覧の一部を挙げる。一覧では語彙を五十音順に並べ、当該語彙が使用された作品数を挙げている。

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかがみ(赤紙)				1			1
あかだま(赤玉)				1			1
あさなは(麻縄)				1			1
あさのから(麻殻)		1					1
あしだかつくえ(足高机)				1			1
あじろぎ(網代木)	1						1
あじろのくるま(網代車)				1			1
あづさゆみ(梓弓)	2						2
あふぎ(扇)	2			2			4
あふぎのかぜ(扇風)	1						1
あぶら(油)				1			1
あぶらゑ(油畫)			1				1
あみ(網)		1	2				3
あやめ(菖蒲)…材料		2			1		3
あられがま(霰釜)				1			1
あをけぶり(青煙)				1			1
あをだたみ(青畳)				2			2
あをほこ(青鉢)				1			1
あんどん(行燈)				1			1
いかう(衣桁)				1			1
いかだ(筏)	3						3
いがた(鑄形)			3				3
いかのぼり(烏賊幟)		1					1
いくちまき(幾千巻)			1				1
いくよろづまき(幾万巻)			1				1
いさりび(漁火)	2			1			3
いしずり(石摺)				1			1
いしぶみ(石文)		1		1			2
いた(板)		1					1
いちりんざし(一輪挿)				1			1
いづもあをだま(出雲青玉)				1			1
いでぶね(出船)	1						1
いと(絲)	2	1		2			5
いとのを(絲緒)				2			2
いへのたから(家寶)			1				1
いへみやげ(家土産)	1						1
いははた(五百機)		1					1
いまどすゑもの(今度陶物)				1			1
いもの(鑄物)			2				2
いれもの(入物)		1					1
いん(印)		1					1
うす(臼)		2					2
うすのね(臼音)		1					1
うすぶすま(薄衾)			1				1
うすやうのへ(薄様上)		1					1
うたたま(歌玉)				7			7
うたぶくろ(歌袋)				1			1
うちは(團扇)		5					5



宮室	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかのゐ(閼迦井)				1			1
あきいへ(明家)		1					1
あきや(明家)			1				1
あけのいがき(朱忌垣)		1					1
あけのおばしま(朱欄)				1			1
あさどこ(朝牀)			1				1
あしがき(葦垣)			1				1
あづまばし(吾妻橋)	1			1			2
あづまや(東屋)		1					1
あつもりづか(敦盛塚)	1						1
あばらや(荒屋)	1						1
あまど(雨戸)		1	1	1			3
あをかき(青垣)				1			1
あをだたみ(青疊)				2			2
いがき(忌垣)			1				1
いけ(池)	1		2	3			6
いけがき(生垣)			1				1
いしがき(石垣)			1				1
いしのとりゐ(石鳥居)		1		1			2
いすずのみや(五十鈴宮)		2					2
いせのみやしろ(伊勢御社)		1					1
いそや(磯家)	1						1
いたど(板戸)	1						1
いたべい(板塀)		1					1
いちや(市屋)				1			1
いつきしまみや(厳島宮)		1					1
いなり(稻荷)		1		1			2
いへ(家)	3	12	11	5	1		32
いへいへ(家家)	1						1
いへごと(家毎)	1	1					2
いへつづき(家続)			1				1
いへのあと(家跡)				1			1
いへゐ(家居)		1	2				3
いほ(庵)	2	5	1	11	1	1	21
いほのあるじ(庵主)	1						1
いほり(庵)	1	2	2	1			6
いもや(芋屋)			1				1
いらか(薨)		1	2				3
うちぼり(内濠)		1					1
うてな(台・臺)		2	1	1			4
うぶや(産屋)		1					1
うまや(馬屋)		1					1
うらぐち(裏口)					1		1
うらど(裏戸)					1		1
うらとぐち(裏戸口)		1					1
えむ(檐)		1					1
えむのは(檐端)	1						1
えんがは(椽側)				1			1

服装	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかぞめ(赤染)				1			1
あかも(赤裳)			1				1
あきのにしき(秋錦)	1						1
あげまき(総角)		1					1
あまがつば(雨合羽)	1						1
い(衣)			1				1
いれずみ(入墨)			1				1
うすおり(薄織)				1			1
うすもの(薄物)		2					2
うぶぎ(産衣)		1					1
えり(襟)		1					1
おび(帯)	1						1
おほみもすそ(大御裳裾)			1				1
かがふり(冠)				2			2
かくしど(隠所)…ポケットか				1			1
かさ(笠)		2	1	8			11
かさのは(笠端)		1					1
かさのへ(笠上)				1			1
かすみのきぬ(霞衣)	1						1
かすみのころも(霞衣)	1						1
かぶと(兜)			1				1
かりぎぬすがた(狩衣姿)			1				1
きぬ(衣)	1	2		1			4
きぬ(絹)		1					1
きぬうら(衣裏)				1			1
きむらん(錦襦)				1			1
くつ(靴)	1						1
げた(下駄)				1			1
こがさ(小笠)				1			1
こぞめ(濃染)						1	1
ころも(衣)	1	3	1				5
ころもで(衣手)	1			1			2
ころものそで(衣袖)			1				1
さつまげた(薩摩下駄)					1		1
したぎ(下著)				1			1
しばみごろも(潮浴衣)		1					1
しやつ(襦衣)			1				1
しらも(白裳)		1					1
すげがさ(菅笠)				1			1
すげがさのへ(菅笠上)		1					1
すそ(裾濃)			1				1
すみぞめ(墨染)	1						1
すりごろも(摺衣)	1						1
そで(袖)	7	4			1		12
そでのつゆ(袖露)	1						1
そめもの(染物)		1					1
たび(足袋)				1			1
たびごろも(旅衣)	3						3

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あい(哀)	1						1
あい(愛)	1						1
あがきのおと(足掻音)				1			1
あく(惡)	1						1
あさげ(朝餉)		1					1
あさね(朝寝)				1			1
あしなへ(足痺)		2	3	2			7
あそび(遊)	1	1	1				3
あだ(仇)	1						1
あづまくだり(東下)		1					1
あなにく(憎)				1			1
あはれ(哀)	1	8	8	1	2		20
あふせ(逢瀬)	1						1
あまつつみ(雨障)				1			1
あまのいさり(海女漁)	1						1
あまやどり(雨宿)				1			1
あめがした(天下)	2						2
あめのした(天下)		1					1
あやにくに(生憎)	1						1
あらそひ(争)		1					1
ありがた(有難)	2						2
いかり(怒)			1				1
いぎりすことば(イギリス言葉)				1			1
いくさ(軍)	2	6	1	3			12
いくさのかみ(戦神)			1				1
いくさのきみ(軍君)			1	1			2
いくさのなか(戦中)			1				1
いけじき(生喰)				1			1
いさかひごと(諍事)			1				1
いさり(漁)	2						2
いさを(功・勲)				2			2
いさをし(勲)	1						1
いそぎよみ(急読)	1						1
いた(痛)			1				1
いたづき(病・労)	1	1	3	4	2		11
いちだいき(一代記)		1					1
いつかのせちゑ(五日節會)		1					1
いとうしやう(一等賞)	1						1
いつはりごと(偽事)				1			1
いこしへぶり(古振)		1					1
いねがて(寝)	1						1
いのち(命)	1	7	1	3	2		14
いのらく(祈)			1				1
いはく(曰)				2			2
いはひごと(祝言)				1			1
いはふらく(祝)		1					1
いびき(鼾)		2					2
いぶき(息吹)		1		1			2

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかぎのやま(赤城山)	1						1
あかさか(赤阪)		1					1
あかしのうみ(明石海)	1						1
あかしのうら(明石浦)	1						1
あかつち(赤土)			1				1
あかばね(赤羽根)						8	8
あき(安芸)	1						1
あきのた(秋田)		1					1
あきば(秋葉)	2						2
あげしほ(上汐)		2					2
あさくさ(浅草)	2	1		1			4
あさくさがは(浅草川)		1					1
あさせ(浅瀬)		1	1				2
あさちがはら(浅茅原)	1						1
あさやま(浅山)		1					1
あしがら(足柄)				1			1
あしのみづうみ(蘆ノ水海・蘆ノ湖)		1					1
あすか(飛鳥)		1					1
あすかやま(飛鳥山)	1						1
あぜ(畔)		2					2
あたごもり(愛宕森)				2			2
あだたら(安達太良)					1		1
あづまち(東路)				2			2
あつもりづか(敦盛塚)	1						1
あはぢ(淡路)		1					1
あはでのうら(栗手浦)	1						1
あはのくに(阿波國)				1			1
あふさか(逢坂)	1						1
あふさかやま(逢阪山)	1						1
あふみ(近江)						1	1
あふみがた(近江潟)	1						1
あふみぢ(近江路)		1					1
あまがさと(蟹里)		1					1
あまつかみ(天神)		1					1
あまつみかみ(天御神)		1					1
あまのかはら(天河原)	2						2
あむーる(アムール)				1			1
あめつち(天地)		1		4	1		6
あめのかみ(天神)		1					1
あめりか(アメリカ)			1				1
あやせがは(綾瀬川)	1						1
あらいそ(荒磯)		3		1			4
あらいそへた(荒磯端)				1			1
あらうみ(荒海)	1						1
あらかは(荒川)		1					1
あらさは(荒澤)	1						1
あらつち(粗土)			1				1
あらはた(荒畑)			1				1

動物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あうむ(鸚鵡)				1			1
あしたづ(蘆田鶴)	1						1
あひる(家鴨)				1			1
あゆ(鮎)		1					1
あゆこ(鮎子)		1					1
あらくま(荒熊)	1		1				2
あらたか(荒鷹)	1	1					2
あり(蟻)		2					2
あをがへる(青蛙)		1					1
あをどり(青鳥)				1			1
あをばへ(青蠅)		1					1
いなすずめ(稻雀)		1					1
いぬ(犬)	2	2	2				6
いるか(海豚)		1					1
うぐひす(鶯)	6	4	4	2		1	17
うさぎ(兎)		1		1			2
うし(牛)	1	3		8	1	1	14
うしのこ(牛子)				1			1
うしのしり(牛尻)		1					1
うしのち(牛乳)			1	1			2
うづら(鶉)		1	1	3			5
うま(馬)	1	2	4	5			12
うまのを(馬尾)		1					1
うろくづ(鱗)	1						1
うを(魚)	1	1					2
おほかみ(狼)		5					5
おほとり(大鳥)				1			1
おむま(御馬)		1					1
おもとのみやうぶ(御許命婦)			1				1
おやうし(親牛)				1			1
か(蚊)		2		1			3
かうもり(蝙蝠)		1					1
かげろふ(蜻蛉)		1		1			2
かささぎ(鵲)		2					2
かざりうま(飾馬)			1				1
かたつむり(蝸牛)			1				1
かなりあ(金糸雀)		1	3	1			5
かのこ(鹿の子)		1					1
かはづ(蛙)		1					1
かはほり(蝙蝠)				1			1
かひ(貝)		1					1
かひこ(蠶)		3	1				4
かひどり(飼鳥)				1			1
かめ(龜)	1		1	1			3
かもめ(鷗)				1			1
かもめのむれ(鷗群)				1			1
からす(鴉・烏)		3	2	3			8
からすのこ(烏子)		1					1

注

注1 『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳、馬場あき子編 角川書店 一九九九年）の「団扇」の項（一四六頁）より抜粋した。

注2 『歌ことば歌枕大辞典』の「世」の項目（九四五～九四六頁）より抜粋した。

注3 『歌ことば歌枕大辞典』の「駒」の項（三五五～三五六頁）より抜粋した。

注4 『子規全集』第七卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年七月）四八～五〇頁収録「十たび歌よみに與ふる書」より抜粋した。

注5 『歌ことば歌枕大辞典』の「都鳥」の項（八五三～八五四頁）より抜粋した。

なお引用文中の「斎宮女御」の作は「人をなほ恨みつるかな都鳥ありやとだにも問ふを聞かねば」（斎宮女御集・七〇）、「和泉式部」の作は「言問はばありのまにまに都鳥都のことをわれに聞かせよ」（後拾遺集・羈旅・五〇九）と「都鳥」の項目内に挙げられている。業平の「名にし負はば」の歌は『古今集』の「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（羈旅・四一一、伊勢物語・九段・一二三）を挙げている。

注6 「鱗」は魚の意味でとっているので「魚」として判断する。「鮎子」は「鮎」があるので、「白魚」は「魚」があるので判断する。「鯛」は『歌ことば歌枕大辞典』の「鯛」の項目（五二五頁）に次のように指摘されているので、古来頻繁に使用されているものではない。

…和歌では古い用例に乏しい。…

「青蛙」は『歌ことば歌枕大辞典』の「蛙」の項目（二四四～二四五頁）に次のように指摘されているので、古来頻繁に使

用されているものではない。

…和歌では「かはづ」しか用いないことはよく知られている。…

「蟲」は『歌ことば歌枕大辞典』の「虫」の項目（八六六～八六七頁）に次のように指摘されているので、古来頻繁に使用されているものではない。

…秋に鳴く虫の総称。…

注7 『歌ことば歌枕大辞典』の「虫」の項（八六六～八六七頁）より抜粋した。

注8 『子規全集』第七卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年七月）四八～五〇頁収録の「墨汁一滴」（明治三四年五月十一日に新聞「日本」で発表）に、次の詞書が付けられている。

根岸に移りてこのかた、殊に病の牀にうち臥してこのかた、年々春の暮より夏にかけてほととぎすといふ者の聲しばらく聞きたり。然るに今年はいかにしけん夏も立ちけるにまだおとづれず。剥製のほととぎすに向かひて我思ふところを述べ。此剥製の鳥といふは何がしの君が自ら鷹狩に行きて鷹に取らせたるを我ために斯く製して贈られたる者ぞ。

注9 『子規全集』第十四卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七六年一月）九〇～九二頁収録の、新聞「日本」（明治二十七年七月二四日発表）の「文學漫言」より抜粋した。

注10 講談社版『子規全集』第十四卷、九七～一〇〇頁収録の、新聞「日本」（明治二十七年七月二八日発表）の「文學漫言」より抜粋した。

注11 講談社版『子規全集』第十四卷、一〇〇～一〇三頁収録の、新聞「日本」（明治二十七年八月一日発表）の「文學漫言」より

抜粋した。

注 12 『正岡子規の短歌の世界―『竹乃里歌』の成立と本質―』（今西幹一 有精堂出版 一九九〇年一月）三〇〇頁より抜粋した。

注 13 『子規全集』第十一卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年四月）一七五―一七六頁収録の、明治三四年四月二八日に新聞「日本」発表された『墨汁一滴』より抜粋した。

注 14 『表現に生きる 正岡子規』（長谷川孝士 新樹社 二〇〇七年九月一日）一八六―一八七頁より抜粋した。引用文内の短歌のルビは長谷川孝士氏の本文に付されているものである。

注 15 『歌ことば歌枕大辞典』『鶯』の項（一三六―一三七頁）より抜粋した。

注 16 『歌ことば歌枕大辞典』『時鳥』の項（七九〇―七九一頁）より抜粋した。



## 第二部 外来語論

### 第一章 漢語について

#### 第一節 はじめに

子規の短歌革新の主張の一つに、「漢語にても洋語にても文學的に用ゐられなば皆歌の詞と可申候。」<sup>注1</sup>といった歌への漢語や洋語の使用が可能であるというものがある。また子規は短歌に用いる言葉について子規の主張に次のものが見られる<sup>注2</sup>。

愚考は古人のいふた通りに言はんとするにても無く、しきたりに倣はんとするにても無く只自己が美と感じたる  
趣味を成るべく善く分るやうに現すが本來の主意に御座候。

子規はこの主張の例として、従来之歌では牡丹を「深見草」と詠んでいるのに対し、「客觀的に牡丹の美」を表す際は「牡丹」と詠んだ方が良いとしている<sup>注3</sup>。

実際の子規短歌に漢語が使用された作品数が多いことについて、藤川忠治氏の次の指摘がある<sup>注4</sup>。

…漢語を取り入れた作は非常に多い。卅一年頃は少しそれが極端であつたので、非難する人もあり（愚庵の如きもその一人）自分でも多すぎると感じたらしく、徐々に露骨な漢語調は少くなつてゐる。…地名・人名乃至山河の名等を大膽に歌に詠みこんでゐる事等も、彼の歌の特色の一つに算へられよう。その地名・人名には所謂漢語

が多いのである。：

右の藤川忠治氏の指摘のように、漢語を使用した作品数は子規短歌に多く見られる。第二節に挙げるが子規短歌に使用されている漢語を抽出した結果、子規短歌の漢語の詠まれた作品数と漢語の異なり語数は次の通りである。

明治三十年以前	：	五一首／五七六首（当期間の 8.9 %）	異なり語数	八七語
明治三十一年	：	一九三首／六九一首（当期間の 27.9 %）	異なり語数	二二一語
明治三十二年	：	一四一首／三六八首（当期間の 38.3 %）	異なり語数	一五五語
明治三十三年	：	一九九首／六四五首（当期間の 30.8 %）	異なり語数	二一六語
明治三十四年	：	三〇首／八九首（当期間の 33.7 %）	異なり語数	十三語
明治三十五年	：	十五首／六三首（当期間の 23.8 %）	異なり語数	十一語

この結果は、古歌での漢語の使用実態<sup>注5</sup>と歌語には漢語が殆ど見られないこと<sup>注6</sup>、後述の直文短歌での漢語の使用した作品数（一二一首（直文短歌全一〇八八首の中の 11.1 %））や異なり語数（八七語）と比べると多いと考えられるものである。

本章では子規短歌に見られる漢語の全体を示すが、考察では漢語使用が大きく増加した明治三十一年の短歌に見られる漢語に視点を当てる。子規短歌の漢語の各期間の特徴が明らかにすることが出来る人物を表す分野の語彙、器物を表す分野の語彙に焦点を当てて考察し、後年の子規の作品に見られる影響を報告する。

## 第二節 漢語の使用実態

### 第一項 意味分野

子規短歌に使用されている漢語を期間ごとに挙げる。複合語には漢語の部分に傍線を附している。意味分野の項目は、「たね本」を参考に独自に設けたものである。序章で示した内容と異なるのは、「地理」に分類される内容を、ここでは「自然物」と「区画・地名」に分けたことである。

#### 明治三十年以前

人物：行脚・餓鬼・黄帝・化学者・金比羅様・師・書生・道祖神・紂王・兵・別品・連

器物：写し繪・汽車・金比羅丸・賽・珊瑚・四斗樽・丈鬼船・寫眞・茶碗・鉢・蒲團・盆・繪

宮室：柵橋

人事：愛・哀・惡・一等賞・易・縁・大損・改新・癩癩・歸・喜・狂歌・極樂・死・自由・酌・借金・腎虚・人爵・

生・政黨・世界・都合・天下・怒・博覽會・病氣・便・平穩・母音・滿腹・慾・樂

動物：蝶の夢

植物：款冬の花・白菊

自然物：海上・聞く地（菊池）・比巴湖・物質

区画・地名：萬國・渤・都地

飲食：牛肉・豆腐・葡萄酒

肢体：腎虚・男體・女體・病氣・滿腹・右手<sup>(メテ)</sup>

数字：一等賞・四十里・四斗樽・十八時間・千年・丈六・二<sup>(ヤウ)</sup>の聲・萬國

色彩：白菊

無形：海上・混沌・蝶の夢・二<sup>(ヤウ)</sup>の聲・敵・景色・様

名詞以外：降参す・首途す・分析す・畫<sup>(エガ)</sup>く

明治三十年以前では漢語使用が少ないことが特徴である。

人物の項目では、「金比羅様」といった神仏関係、「紂王」といった社会的立場の比較的高い人を表すもの、「黄帝」といった伝説上の人物を表すものに偏っている。

平穩と祈りしかひもあら海や《金比羅様》へあげし小間物

(拾遺一四九・二三年)

《紂王》の飲む無道酒は池をなし晝の牛肉はやしたるまゝ

(拾遺一五一・二三年)

《黄帝》が易に天下の理をこめて一ツのものが八ツとなりけり

(拾遺一八一・二三年)

器物では、「汽車」など乗り物など屋外の物、「写し繪」など室内の物、「茶碗」など生活に根差したものが見られる。

長橋で都の富士を見てあれば蜈蚣のやうに《氣車<sup>マイ</sup>》の行く也

(拾遺一六一・二三年)

唐大和昔も今もおしなへて一時に見るもの《うつしる》

(八五・十八年)

月を見る人さまぐの心哉盆皿《茶碗》あるは四斗樽

(拾遺八・十七年)

## 明治三十一年

人物…アメリカ人・筏師・寒山・菊作り・狂女・官人・傾城・小傾城・乞食・子順禮・胡人・御料・此畜生・

塞翁が馬・子孫・子弟・上人・聖靈・釈迦・順禮・少將の君・代官・殿・大臣・鷹匠・鎮守・天・同姓・納豆・賣・

賣卜先生・伯樂・美少年・豐干・不動明王・女餓鬼・李白・淵明・男餓鬼

器物…印・鐵棒・壁の畫・汽車・伽羅・金地・胡笳・碁盤・草紙・自轉車・菖蒲湯・翠簾・墨繪・錢・大佛・太鼓・

内裏・雛・提灯・圖・手水鉢・灯籠・炮烙・馬車・鉢・風鈴・富士の畫・水鉢の上・椀・繪・繪團扇・繪卷物

宮室…板塀・椽先・學校・關帝廟下・五重塔・小料理屋・十軒店・城下・城外・城中・庄屋・鐘樓・塔・茶店・茶屋・

天津橋下・天津橋上・南大門前・野茶屋・塀・寶塔・樓

人事…一代記・五日の節會・宴・縁日・経・櫻の宴・三昧・詩・眞如の月・楚歌・天上天下・入寂・如是我聞・念佛・

俳句・鉢植・繁華・武運長久・變化・奉捨・煩惱・盆踊・禮

動物…閑古鳥・金魚・塞翁が馬・獅子・四十雀・雀子・蝶・驢馬

植物…薄紅梅・海棠・海棠の花・柑子の花・芭蕉・核・寒竹・寒林・黄菊・桔梗・菊・菊苗畑・菊の根・桔梗の花・

鶏頭・紅梅・秋海棠・菖蒲・芍藥・芍藥の園・棕櫚・棕櫚の花・白菊・水仙・唐茄子・夏菊・白梅・葉鶏頭・

芭蕉・鉢植櫻・枇杷の小苗・百日草・木瓜・牡丹・牡丹の花・落花・落花流水・連翹

天文…紫雲・春風・眞如の月

自然物…寒林・菊苗畑・黄河・曠野・華山・三十六峰・春水・殺生石・落花流水・温泉

区画・地名…江東・漢・金州・黃河・華山・孤村・三崎・上海・晋・震旦・長安・天竺・普陀落・洛陽・遼東  
時令…五日の節會・縁日・後夜の鐘・歳歳年年・天長節・土用・年年歳歳・盆の月

飲食…豆腐・黍團子・供物・唐黍・茶・茶・茶・枇杷

数字…一代記・九十九・五十年・五尺・五畝・五反・五重塔・五萬匹・五六本・三十六峰・三寸・三千・三層・七人・

十軒店・十萬・千戸・二尺・百・百萬

色彩…薄紅梅・黃菊・金地・紅梅・白菊・紫雲・翠簾・青青(セイセイ)・茶・茶・白梅・緋

無形…椽先・關帝廟下・景色・坐・雌雄・城下・城外・城中・寂寞・刹那・天上天下・天津橋下・天津橋上・

南大門前・方・水鉢の上

名詞以外…講ず・吟ず・供奉す・觀ず・丁と・頭痛す・佚よ・分類す・向坐す・餘念無し・來迎す・委蛇委蛇たり・

畫(エガ)く

明治三一年では、漢語の使用の大きな増加が見られる。

人物について、「乞食」といった社会的身分の低い人や、「納豆賣」といった商人、「アメリカ人」といった欧米人が詠まれるようになっていく。

《乞食》の子汝に物問はん汝か宿は柳の下か蒲公英の野か

(四四六・三一年)

聞きなれし老いばれ聲の《納豆賣》此冬は來ずなりにけるかな

(四八九・三一年)

久方の《アメリカ人》のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも

(八〇八・三一年)

**器物**について、「自轉車」など乗り物の種類が増えているが、それ以上に、「墨繪」など基本的には子規の身の室  
内にある文学・芸術関係を表す語彙の種類が増加している。また「錢」など日常生活で接する商いに關わる器物も  
見られるようになる。

《自轉車》を茶屋の柱にたてかけて晝寐する人縦の下風

(九四八・三一年)

いにしへの故郷人のゑかきにし《墨繪》の竹に向ひ坐すわれは

(九三八・三一年)

讃岐なるあらふる神を祈りつゝ舟揺る波に《錢》投ぐる刹那

(七七八・三一年)

**植物**も「紅梅」など多様な種類が見られるようになり、語数も大きく増加している。

衣を干す庭にぞ來つる鶯の《紅梅》に鳴かず竹竿に鳴く

(四二七・三一年)

**地名**については、「金州」など明治二八年の従軍で訪れた地名が複数見られるようになる。

官人の驢馬に鞭うつ影もなし《金州》城外柳青々

(四四一・三一年)

**天文**を表す漢語の使用が見られるようになる。「春風」など天文を表す漢語の使用は、後述の直文、鉄幹、晶子の短  
歌には見られない。

三層の樓に上れば國廣し《春風》春水東より來る

(六一五・三一年)

後述するが、明治三年に新しく詠んだ漢語が多く見られるが、その中で晩年まで使用されているものは、「蝶」や  
「牡丹」といった子規の身近にあるものに限られている。蝶と牡丹（深見草）は左のように香川景樹の作品に詠まれ

ているものであり、短歌革新前でも子規にとって歌の材料となり得るものであると考えられる。

をとめ子がこがひの宮にちるはなはまゆを出でたる蝶かとぞ見る

(桂園一枝・四六八)

ふかみ草とめるまことはなのいろをうかべる雲とたれかまがへむ

(桂園一枝拾遺・六九〇)

短歌革新で歌の題材を和語以外に広げたことで、明治三十年以前に歌材としていなかったものも詠まれるようになっていく。特に「牡丹」については、「深見草」よりも「牡丹」の方が牡丹を表すのに適しているとの子規自身の主張があり、漢語で表現するのが一般的な材料を漢語の形で短歌に詠むことの実践が窺える。

この明治三十年の主張と実践によって、漢語で表すのが一般的な材料を短歌に詠み得るようにしたことが、晩年に歌の題材が身近なものに狭まった際にも、短歌の題材を確保することができたことに繋がるのではないか。

## 明治三二年

人物…惡魔・天津麻羅・阿彌陀・一の人・似非法師等・項羽・香取氏・御者・觀音菩薩・妻君・妻子等・師・將軍・  
釈迦・征夷大將軍・先生・大臣・敵・婆・伏・法師・法師等・藥王菩薩・耶蘇・山本君・劉邦・繪師・岡君  
器物…油畫・看板・汽車・金・銀泥・廣告の札・三味の音・笙・寫眞・車輪・銃・新聞・水盤・大佛・提灯・茶托・  
圖・馬車・鉢・古繪・風呂敷・本箱の上・繪・繪の具

服裝…衣・洋服

宮室…岳陽樓上・擬寶珠の上・經藏・障子・壇・茶店・茶屋・陣屋・海苔・鹿菜垣



人事…榮華物語・痛・金槐集・源氏物語・御稜威・三味・詩・詩の神・詩の囊・成佛・寫生・説法・撰歌・炊き様・

展覽會・南無阿弥陀・奈落の底・配合・美・平和の神・豫報・往來

動物…御元の命婦・金魚・胡蝶・象・獅子・蝶

植物…菊・鶏頭・鶏頭の花・山茶花・山茶花の花・秋海棠・秋海棠の花・菖蒲・茶皐・鐵線の花・冬瓜・枇杷の蕾・

緋桃・芙蓉・牡丹・牡丹の花・連翹

天文…天氣

自然物…伊豆の温泉・兀山・兀嶺・茶皐・薄氷・廬山

区画…地名…公園・國土・支那・秦淮・赤壁・廬山・路地

時令…午後・四年前・十四日・天平・彼岸

飲食…祇園坊・團子・茶・茶飯・葡萄の房・蜜柑

肢体…熱・鬢

數字…一字・一の人・一里・五枚・三階・四五人・四年・四年前・十萬・十四日・千萬・第一・二階・二三寸・二枚・

二輪・百萬

色彩…金・銀泥・緋桃・綠青

無形…御元の命婦・岳陽樓上・空氣・地下・王

名詞以外…吟ず・悉皆・題す・漫漫たり

明治三二年も子規短歌の漢語の使用が多い。

人物では、「香取氏」など敬称「君」「氏」が見られ始める。

空晴れしけふの日和に家を見に午後より行ん《香取氏》も行ん

(拾遺二六八・三二年)

器物では、「畫」といった子規の室内の物が中心であるが、「車輪」といった部品、「汽車」といった乗り物、「銃」といった武器なども見られる。また、子規の提唱した創作理論「寫生」が短歌に詠まれていた例も見られる。

壁たつる崖の細道行く《車輪》をどる毎に生けるこゝちせず

(一二四三・三二年)

《畫》にもならず歌にもならず武藏野は只はろく<sup>ママ</sup>に山なしにて

(一二四七・三二年)

青丹よし奈良の都の御佛を見に行く人に《汽車》で逢ひにけり

(一二七一・三二年)

狩人の《銃》の音響く武藏野はいくさの中にあるかと思ふ

(一三三六・三二年)

青丹よし奈良の佛もうまけれど《寫生》にますはあらじと思ふ

(拾遺二六二・三二年)

### 明治三三年

人物：阿彌陀・イギリス人・歌人・寒山・客・觀音・觀世音菩薩・藝者・權現の森・詩人・狸々・少女・少年・

善男善女・蘇氏・達磨・茶博士・女學生徒・女郎・陳元賛・天狗・日蓮大菩薩・俳人・坊主・半玉・美人・

豊干・法の王・武者・盧舍那佛・繪描き・繪師

器物：閼伽の水・行燈・衣桁・一輪挿し・写し繪・梅の鉢・香・歌書・唐の畫・汽車・汽車の音・伽羅・小鉢・像・

字書・寫眞・蛇の目唐傘・新聞・水盤・墨繪・石膏・錢・臺・臺の上・大佛・提灯・茶托・茶碗・圖・圖案・  
釣り香爐・德利・銅鑼・人形・俳書・鉢・花の繪・火鉢・蕪村の集・古鉢・古繪・棒・盆・繪・女人形  
服裝・錦襪・下駄・緞子

宮室・閼伽の井・椽側・格子・御殿・塔・團子屋・茶店・茶屋・碑・塀・塀の上・鴛鴦の小衾

人事・生喰・歌會・講義・歌學全書・學校・學課・樂の音・句・句意・會・火事・極樂淨土・國力・五位・詩・字・

十字・情・寫生・四位・代・體操・大事・大慈大悲・茶の湯・日本・日本新聞社・鉢植・富貴・文章・

發句の會・法の王・萬葉・面會の日・文字・厄・山形新聞・留守・園遊歌會

動物・鸚鵡・孔雀・四十雀・蝶・蝶の羽・子子・驢馬

植物・東菊・一輪薔薇・銀杏の老木・海棠・黃菊・菊・菊の花・臥龍梅の園・小櫻草・壽草・權現の森・山椒・菖蒲・

芍藥・壽星梅・白菊・水仙・水仙の花・沈丁の花・牡丹・牡丹の蕾・牡丹の花・藪柑子・落花水面・枇杷

天文・松露・雹・北斗・雪解

自然物・權現の森・七十二瀧・地・揚子の川・落花水面

区画・地名・高麗・明の人・揚子の川・路地

時令・五月五日・五月一日・十四日

飲食・朝茶・薄茶・菓子・軍馬・團子・茶・茶の歌・屠蘇・達磨

肢体・熱・鬢



## 明治三四年

人物…孝子・美人

器物…繪・繪の具

服装…薩摩下駄

人事…歌の會・孝の子・題

動物…蝶

植物…薔薇・牡丹・牡丹の花

肢体…熱

明治三四年の漢語が少ないのは、作品数の減少によるものである。

明治三四年の子規短歌の漢語の多くは次の例のように、人物と器物に限らず、子規の身近な物事、寝たきりの窓辺から見えるものの写生や、新聞記事などからの伝聞の情報に起因してのものである。

藤なみの花の紫《繪》にかゝばこき紫にかくべかりけり

(拾遺三六七・三四年)

《歌の會》開かんと思ふ日も過ぎて散りがたになる山吹の花

(拾遺三七七・三四年)

春雨はいたくなふりそみちのくの《孝子》の車引きがてぬかも

(拾遺三九八・三四年)

雨そぐ庭のかたへに傘さして立てる《牡丹》は《美人》の如し

(拾遺四三七・三四年)

ガラス戸の外面に咲けるくれなゐの牡丹の花に《蝶》の飛ぶ見ゆ

(拾遺四四〇・三四年)

### 明治三五年

人物…茶博士

器物…汽車・茶の椀・樂焼・繪

宮室…茶室

人事…題・直目・鉢植

区画・地名…異国

飲食…茶の椀・麩

肢体…直目

明治三五年の漢語の減少も作歌数の減少によるものである。

この期間の子規短歌に使用される漢語も次の例のように、人物と器物に限らず、子規にとって身近なものや身近な事に拠るものが大半となっている。

梅の花見るにし飽かず病めりとも手震はすは《畫》にかゝましを

(拾遺四六九・三五年)

つくくし又つみに來む赤羽根の《汽車》行く路と人に知らゆな

(拾遺四九二・三五年)

珍ラシキ草花モガト《茶博士》ノ左千夫ガクレシチンノレヤノ花

(拾遺四九九・三五年)

《樂燒》のすゑものやかば弓矢取る左千夫の朝臣か面かたを取れ

(拾遺五〇一・三五年)

小ふくろの中は我知る《茶の碗》と筆と硯と松しまの歌

(拾遺五〇九・三五年)

明治三四年、三五年の子規短歌の漢語の内容が身近なものを表すものへ収束していったことについて、次の点からも確認できる。

明治三年で初出の漢語の中で明治三四年以降に使用されているものは、「蝶」「鉢植」「牡丹」「牡丹の花」のみである。蝶と牡丹は庭で観察し得るものであり、晩年の子規にとっても身近なものであったといえる。「茶店」や「驢馬」など身近ではないものは晩年に使用されていない。

左に、明治三年に初めて使用され、後年にも使用例が見られる漢語を挙げる。太字は明治三四年以降に使用例が見られるものである。( )内は使用例が見られる年(明治三年は省略)であり、動詞は終止形で示している。

海棠(33)・寒山(33)・黄菊(33)・伽羅(33)・金魚(32)・吟ず(32)・鶏頭(32)・坐(33)・三千(33)・  
詩(32、33)・雌雄(33)・獅子(32)・秋海棠(32)・四十雀(33)・十萬(32)・釋迦(32)・菖蒲(32、33)・  
芍薬(33)・水仙(33)・墨繪(33)・錢(33)・大臣(32)・大佛(32、33)・塔(33)・提灯(32、33)・  
茶(32、33)・茶店(32、33)・茶屋(32、33)・圖(32、33)・蝶(32、33)・二尺(33)・馬車(32)・  
鉢植(33、35)・百萬(32)・豐干(33)・塀(33)・牡丹(32、33、34)・牡丹の花(32、33、34)・連翹(32)・

驢馬（33）

以上分類した漢語の各期間の異なり語数をまとめると、次頁の表の通りである。



表より各期間の漢語の使用について、次の内容を確認できる。

異なり語数	明治30年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年
人物	12	37	28	32	2	1
器物	13	31	24	45	2	4
服装			2	3	1	
宮室	1	22	9	12		1
人事	33	23	22	39	3	3
動物	1	8	6	7	1	
植物	2	38	17	25	3	
天文		3	1	4		
自然物	4	10	6	5		
区画・地名	3	15	7	4		1
時令		8	5	3		
飲食	3	7	6	9		2
肢体	6		2	2	1	1
無形	7	16	5	10		
数字	8	20	17	28		
色彩	1	11	4	3		
名詞以外	4	13	4	1		
計	98(87)	262(231)	165(155)	232(216)	13(13)	13(11)

表の「計」の行は各項目に分類された異なり語数の合計である。「白菊」(「植物」と「色彩」に分類)のように複数の項目に分類される例もあるので、この重複を除いた数値(各期間の漢語の異なり語数)は( )内に示した。

**明治三十年以前**にも漢語の使用が見られるが、明治三十一年から明治三十三年と比べると少ない。また使用される漢語は「人事」を表すものに少し偏っている。

**明治三十一年**になると漢語の異なり語数が大きく増加し、特に「人物」「器物」「宮室」「植物」を表す漢語の使用の増加が著しい。また、明治三十年以前では使用漢語が「人事」を表すものに少し偏っていたが、このようなある特定の意味項目に分類される漢語だけが多いといった偏りが、明治三十一年では最も小さくなっている。

**明治三十二年**では漢語の異なり語数が減少しているが、これは明治三十二年の作歌数の減少によるものと考えられる。

明治三十二年の使用漢語は、「人物」「器物」「人事」に少し偏っており、この三項目への偏りは以降の期間で徐々に顕著になってゆく。

**明治三十三年**では漢語の異なり語数が多いが、漢語が表す内容は「器物」や「人事」など人間に関するものへの偏りが、やや大きくなっている。

**明治三十四年**になると、漢語の異なり語数は大きく減少する。また、使用漢語の表す内容も限られており、明治三十一年から明治三十三年で多数例が見られる「無形」「数字」に分類される漢語使用が無くなっている。

**明治三十五年**も漢語の異なり語数は少なく、漢語の表す内容も「人物」「器物」「宮室」「人事」といった人間に関するものが大半となっている。

子規短歌に使用される漢語の意味分野を見てゆくと、六期間通して漢語の題材を使用される傾向が強いのは、人間に関するものである。短歌に詠む対象の「客観的美」を表すのに漢語が適していれば漢語を使用するという子規の主

張より、人間に関するものの方が自然物や自然現象よりも漢語が使用しやすい題材であったと考えられる。

## 第二項 古典和歌との重複

第一項で、子規短歌の漢語使用について異なり語数の変化を見てきた。

そこで、短歌革新を主張した明治三十一年に特に大きく使用が増加し、明治三四年以降で多く使用される傾向にあった「人物」「器物」「宮室」を表す漢語の古歌<sup>注7</sup>との対応を見てゆく。

二―二―一 「人物」を表す漢語について

### 明治三十年以前

明治三十年以前の漢語で表される人物（神仏名も含む）十二語を、次の三項目に分類して五十音順に挙げる。各項目に分類される漢語が使用された子規短歌一、二首の例を挙げる。

#### 古歌中に使用例が見られるもの

…二語

餓鬼・師

飯の出る山とも聞けばありがたや《餓鬼》も行脚も満ふくになる

（拾遺二三一・二六年）

あまりうまさに文書くことそわすれつる心あることな思ひ吾《師》

（拾遺二四一・三十年）

古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…一語

黄帝

《黄帝》が易に天下の理をこめて一ツのものが八ツとなりけり

(拾遺一八一・二三年)

古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの …九語

行脚<sup>注8</sup>・化学者・金比羅<sup>注9</sup>・書生・道祖神・紂王・兵・別品・連

足利の《兵》が新田に降参し二つのものが一つとぞなる

(拾遺一八四・二三年)

子規短歌の漢語「餓鬼」「師」「黄帝」は、古歌中や詞書に使用例が見られる。江戸時代までの作品から使用例を一例ずつ挙げる。該当箇所には傍線を附した。(以降も同様とする)

古歌中の例

アヒオモハヌ ヒトヲオモフハ オホテラノ ガキノシリヘニ ヌカツクガゴト  
不相念 人乎思者 大寺之 餓鬼之後尔 額衝如

(万葉集・六一一・大伴宿祢)

一乗のみのりをたもつ人のみぞ三世の仏の師とは成りける

(新続古今和歌集・八一五・上総介時重)

詞書での例

…黄帝、素女に五十絃の瑟をつくらせて、しらべをなすに、…

(百詠和歌集・源光行・二〇三)

また古歌中にも詞書にも使用例が見られない子規短歌の漢語に「兵(へい)」があるが、古歌では「つはもの」の読みで使用例が見られる。左に例を挙げる。

左 なぞ、おほぞらにつはものきたる

弓はりのかたどの月を山のはにそらつはもののいるかとぞみる

(小野宮右衛門督君達歌合・十七)

## 明治三十一年

明治三十一年の人物を表す漢語は三七語で、その全てが三十一年に初めて使用された漢語である。(複合語の漢語の部分に傍線を附す)

### 古歌中に使用例が見られるもの

#### …七語

筏師・御料・此畜生・釈迦・女餓鬼・男餓鬼・淵明

さしくたす棹を短み《筏師》の拳をひたす春の川水

(六一三・三十一年)

### 古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…十二語

寒山・官人・乞食・子孫・上人・少將の君・大臣・鎮守・天(「天帝」で使用例がある)・伯樂・不動明王・李白

《官人》の驢馬に鞭うつ影もなし金州城外柳青々

(四四一・三十一年)

《大臣》の櫻の宴やはてつらん霞か關を馬車歸るなり

(四七五・三十一年)

### 古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

#### …十八語

アメリカ人・菊作り・狂女・傾城・小傾城・子順禮・胡人・順禮<sup>注10</sup>・塞翁が馬・子弟・聖靈・代官殿・鷹匠・同姓・

納豆賣・美少年・賣卜先生<sup>注11</sup>・豊干

久方の《アメリカ人》のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも

(八〇八・三十一年)

古歌中の例

あさきせをこすい<sup>レ</sup>かだしのつなよわみなほこのくれもあやふかりけり

(後拾遺和歌集・九〇五・読人不知)

信濃なる木曾の御料に汁懸けて只一口に九郎義経

(源平盛衰記・一八〇)

めにみゆるちくしやうは猶美麗なり此世の人は餓鬼か地獄か

(拾玉集・四八八七・慈円)

靈山の釈迦のみまへにちぎりてし真如くちせずあひ見つるかな

(拾遺和歌集・一三四八・行基)

寺寺之<sup>テラテラノ</sup> 女餓鬼<sup>メガキマウサク</sup>申久<sup>オホウワノ</sup> 大神乃<sup>ヲガキタバリテ</sup> 男餓鬼<sup>ソノコヘラマム</sup>被給而<sup>メガキマウサク</sup> 其子將播

(万葉集・三八六二・池田朝臣)

りくすせいたう淵明<sup>ヲガキタバリテ</sup>やとひつらんかかるはしある山の住居は

(逍遊集・二四八四、松永貞徳)

詞書きの例

寒山<sup>サマノ</sup>拾得

(桂園一枝・八一八)

冬十一月大宰官人等奉<sup>レ</sup>拝<sup>二</sup>香椎廟<sup>一</sup>訖退帰之時馬駐<sup>二</sup>于香椎浦<sup>一</sup>各述<sup>レ</sup>懷作歌

(万葉集・帥大伴卿・九六二)

乞食<sup>キジキ</sup>者詠二首

(万葉集・三九〇七)

…ナムヂ子孫ヲカサネテ三公トナルベシト云ヒテサリヌ、

(蒙求和歌集片仮名本・四四)

性空上人のもとに、よみてつかはしける

(拾遺和歌集・一三四二・雅致女式部)

小少將の君きよみづにこもり給へるに、宮より

(御堂関白集・四二)

左大臣の家にて、かれこれ題をさぐりて歌よみけるに…

(後撰和歌集・一二八一・ふぢはらのたどくに)

天徳三年九月廿三日、召鎮守府將軍仲舒朝臣賜小祿及馬種、…

(清慎公集・九五)

…後ニ、我ハ天ノ織女ナリ、天帝、汝ガ孝養ノココロザシヲホメテ、…

(蒙求和歌集平仮名本・八〇)

…おろかなるおのがしも彼伯樂が馬の三世につたへては

(惺窩集・六二〜六四・藤原惺窩)

…不動明王の腰をうち給ければ、おどろきてみるに此少童なり、…

(安撰和歌集・四三七・法印隆雅)

李白が静夜思の心をといへばよめる

(三草集よもぎ・七〇・松平定信)

子規の漢語「官人(くわんじん)」は古歌の詞書に使用例が見られ、古歌中には使用例は見られない。しかし次のように「つかさびと」と読む例は古歌中に使用例が見られる。

…諸之モロモロノ 官人等ツカサヒトタチ 吹風爾フクカゼニ 往雲如ユククモナシテ 御跡先爾ミヲサキニ 随奉…  
(楫取魚彦歌集・十九・楫取魚彦)

また子規の漢語「大臣」は、江戸時代までの和歌に例は見られないが、「大臣」を「おほまへつぎみ」又は「おほおみ」と読む例は古歌中に見られる。

大夫之マスラヲノ 軻乃音為奈利トモノオトスナリ 物部乃モノノフノ 大臣オホマウチキミ 楯立良思母タテタツラシモ

(万葉集・七六)

かしこきや大路ねらして大臣の御供つかふるこれのいでまし

(八十浦之玉・五三六・大江千楯)

## 明治三二年

明治三二年の人物を表す漢語は二八語で、その中の次の二五語が明治三二年に初めて使用された漢語である。

### 古歌中に使用例が見られるもの

#### …十語

阿彌陀・一の人・似非法師等(「法師等」で例がある)・觀音菩薩(「觀世音」で例がある)・

妻子等（「妻子」で例がある）・將軍・法師・法師等・將軍・繪師

法の道に何か漏るべき我も人も釋迦も《阿彌陀》も皆これ佛

（一二六二・三二年）

古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…六語

項羽・（香取）氏・御者・征夷大將軍・先生・藥王菩薩

いそのかみ《項羽》劉邦文讀まず劔手に持ち世に立たん我が

（一二〇七・三二年）

古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの …九語

惡魔・天津麻羅・妻君・敵・伏・耶蘇・山本君・劉邦・岡君

紫陽花の花咲く山の山の奥に《惡魔》こめたる窟ありけり

（一一九八・三二年）

古歌中の例

ひとたびも南無阿彌陀仏といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし

（拾遺和歌集・一三四四・空也上人）

伊与さぬき左右の大将とりこめてよくの方には一人のうかな

（平家物語（延慶本）・五）

くるくるも人たのまなんずのをはながき世すくふくわんぜおんなり（新撰和歌六帖・一六八五・弁入道光俊）

ちちの実の父いまして五十年に妻あり子ありその妻子あり（楫取魚彦家集・一一三）

法師等之ホフシラガ 鬢乃剃杭ヒタノツリクヒニ 馬繫ウマツナギ 痛勿引曾イタクナヒキノ 僧半甘ホフシナカラカモ（万葉集・三八六八）

しれ物のよしなし事をする法師遂に人やにゐるところそきけ（続古事談・二四・二条の帥長実）

天雲の 棚引くかぎり 塩沫の 留る極み…源の 將軍の君は…（八十浦の玉・九〇九・石金音主）



…名にたたる 絵師にあとらへ…

(八十浦の玉・一〇五二・遠藤春足阿波石井里人字宇治右衛門)

#### 詞書の例

…楚漢代人、為項羽將、丁公、名ハ固、季布ガ母弟也、…

(蒙求和歌片仮名本・二)

藤氏のうぶやにまかりて

(拾遺和歌集・二六七・よしのぶ)

…みちのいはほのほとりにひとりの麗人をみる、御者をひきてとはしむるに…

(百詠和歌集・四〇)

十七日、いにしへは征夷大將軍家御弓はじめけふぞかしと思ひいでて

(孝範集・三)

…自称ニ倍俗先生<sup>一</sup>、…

(万葉集・八〇四・山上憶良)

藥王菩薩品…聞是藥王菩薩本事品、能受持者、尽是女身、後不復受

(発心和歌集・四七・選子内親王)

#### 明治三三年

明治三三年の人物を表す漢語は三一語で、その中の次の二五語は三三年で初めて使用されたものである。

#### 古歌中に使用例が見られるもの

…三語

達磨・天狗・武者

我ヲ睨ム《達磨》ノ像ヲタ、キワリ洲崎通ヘバ千鳥ナクナリ

(一六〇〇・三三年)

#### 古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…八語

客・權現の森・猩々・少女・少年・日蓮大菩薩(「大菩薩」で例がある)・坊主・美人

來ねば來ず來れば來て食ふ素話に食はずに歸る《客》はいやく

(拾遺三五五・三三年)

### 古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

…十四語

イギリス人・歌人・藝者・詩人・善男善女・茶博士・女學生徒・女郎・陳元贊・俳人・半玉・法の王・盧舍那佛・  
繪描き

《詩人》去れば《歌人》坐にあり《歌人》去れば《俳人》來り永き日暮れぬ

(一五八三・三三年)

### 古歌中の例

かくばかり達磨をしれる君なれば陀多謁多までぞいたるなりけり

(続千載和歌集・九二八・弘法大師)

天狗ともいはばいはなむいはずとて鼻ひくからぬ我が身ならねば

(吉野拾遺・37・実守公)

平茸はよき武者にこそにたりけれおそろしながらさすが見まほし

(古今著聞集・三一七・九条太政大臣)

### 詞書の例

臨時客をよめる

(後拾遺和歌集・十五・小弁)

…四月十五日に、かの山にあるそうのもとから権現の御かへりとて…

(相模集・三二〇)

猩猩といふ物のゑに

(鈴屋集・一五六四)

香伝少女風…樹上に少女の風ありといふ、…西方を少女とす、…

(百詠和歌集・五十)

…後ニ変ジテ黄衣少年ノ人トナリテ、白環一雙ヲモチテキタリテ、…

(蒙求和歌集片仮名本・四四)

大菩薩の御託宣の文を歌によりみ侍りける中に

(続古今和歌集・七〇五・平長時)

…雨の降り侍りしに坊主のもとより云ひつかはして侍りし

(頼政集・六六四)

為<sub>下</sub>向<sub>レ</sub>京之時見<sub>二</sub>貴人<sub>一</sub>及相<sub>二</sub>美人<sub>一</sub>飲宴之日<sub>上</sub>述<sub>レ</sub>懷儲作歌二首

(万葉集・四一四四・大伴宿祢家持)

子規短歌の漢語「歌人」は古歌中にも詞書にも使用例が見られないが、次のように「うたびと」と読む例は古歌中に使用されている。

天の河とわたる風も真帆にふけ船路ややすき棹の歌人

(慕景集異本・五八)

子規短歌の漢語「法の王」について、子規短歌では次のようにキリスト教の法王を指している。

日の本の陸奥の守より《法の王》パツパポウロに贈る玉つさ

(一五二八・三三年)

江戸時代までの題詞に、次の例のような「法王」の例が見られるが、仏教用語のものであり、右の子規の「法の王」とは異なる存在である。

春、花山に亭子法王御かうありて、とくかへらせたまひなむとせしときに

(遍照集・六)

## 明治三四年

明治三四年の人物を表す漢語は二語であり、次の一語が明治三四年に初めて使用されたものである。

古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

…一語

孝子

みちのくの岩手の《孝子》文に書き歌にもよみてよろづ代迄に

(拾遺三九九・三四年)

詞書の例

何がしの孝子の、まづしくておやにつかふることの…

(六帖詠草・一七四〇)

明治三五年

明治三五年の人物を表す漢語は「茶博士」の一語であり、明治三年に既に使用されているものである。

珍ラシキ草花モガト《茶博士》ノ左千夫ガクレシチンノレヤノ花

(拾遺四九九・三五年)

以上右をまとめると、明治三十年以前の子規短歌に使用された人物を表す漢語の殆どが、古歌に使用例の見られないものである。

明治三一年で漢語の使用の著しい増加が見られ、人物を表す漢語でも増加を見ることができ、革新直後で新しく使用した人物を表す漢語は、江戸時代までの和歌の中に使用されたものよりも、題詞や題詞にも使用例が見られないものが多い。子規は歌に詠む人物を表す漢語を増やす際、古歌に使用されたものの他に、題詞に使用されるも和歌に使用しない漢語も取り入れている。明治三三、三四、三五年でも同様である。

明治三二年で新しく使用する人物を表す漢語は、古歌中に例が見られるものが比較的多いが、古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないものとの差は僅かである。

二——二——「器物」を表す漢語

## 明治三十年以前

明治三十年以前の器物を表す漢語は次の十三語である。

### 古歌中に使用例が見られるもの

…四語

寫し繪・鉢（「鉢」と熟語で例がある）・盆・繪

唐大和昔も今もおしなへて一時に見るものゝの《うつしゑ》

（八五・十八年）

### 古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…一語

珊瑚

宮人の《さんご》の靴のあとをなみ大内山は苔むしにけり

（二三〇・二五年）

### 古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

…八語

汽車・金比羅丸・賽・四斗樽・丈鬼船・寫眞・茶碗・蒲團

長橋で都の富士を見てあれば蜈蚣マヤのやうに《氣車》の行く也

（拾遺一六一・二三年）

### 古歌の例

まことなきちぎりの末ようつしゑに心うごかすならひのみかは

（閑塵集・二七六）

薬師御前に 御誕生 心太にぞ 似たりける すりこ鉢に 指入れて 榎のまたにぞ 置きてけり

（沙石集・行基・一〇〇）

安氏川の そひの巖の…あまたたび くめる鮎子を 盆にみて…

(柿園詠草・一一〇七)

四面影を繪にかきとめて身にそへむまことすくなき形見なりとも

(新千載和歌集・権中納言公雄・一六〇四)

#### 詞書の例

珊瑚七宝装 漢の武帝の時、柏梁台のうへに珊瑚のゆかあり、…

(百詠和歌・一四二)

#### 明治三十一年

明治三十一年の器物を表す漢語は三二語で、その中の次の二九語が明治三十一年に初めて使用されたものである。

#### 古歌中に使用例が見られるもの

##### …五語

壁の繪<sup>注12</sup> (「絵」で例がある)・翠簾・墨繪・錢・富士の繪 (「絵」の形で例がある)

《壁の畫》を涼しき風の動かして林の雪の散るかとぞ思ふ

(九七五・三十一年)

#### 古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…八語

印・碁盤・草紙・大佛・圖・風鈴・椀・繪卷物 (「繪卷」で例がある)

《大佛》も鐘樓も花にうつもれて人聲こもる山の白雲

(四六〇・三十一年)

戈を取り《印》を帶ぶるは我老いたり風に吹かれてひとり森を行く

(八五二・三十一年)

#### 古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

##### …十七語

鐵棒<sup>カサ</sup>・汽車・伽羅・金地・胡笳・自轉車・菖蒲湯・太鼓・内裏雛・提灯・手水鉢・灯籠・焙烙・馬車・水鉢の上・

繪團扇

大臣の櫻の宴やはてつらん霞か關を《馬車》歸るなり

(四七五・三一年)

古歌中の例

翠簾巻きて月にぞみつる唐人のこよひをしらぬ心浅さを

(鳥之迹・山名玉山入道・三六一)

おもひきやすみにわれをかきなしてはなのすがたをけたるべしとは

(為忠家初度百首・仲正・七二七)

払ひあげぬ葎の下にかくせども金の錢の花はかくれず

(二言抄・仲正・四三)

「壁の繪」「富士の繪」の「繪」の例は、明治三十年以前に挙げたので省略する。

詞書の例

…サカヒニイリテ印ヲ鑄ルニ、…

(蒙求和歌集片仮名本・二三四)

…宮の御方より碁盤いださせたまひけるごいしけのふたに

(後撰和歌集・命婦いさぎよき子・一三八三)

…祝の心を草紙にかきつけよとおほせられければ

(寂蓮法師集・一二〇)

大仏くやうにあひ侍らぬことをなげきながら、…

(閑谷集・一〇〇)

…かの国のいつく島の図のいとくはしく書きたるをおくりけるを見てかへりごとに

(鈴屋集・一三四四)

風鈴に付けたる歌

(浦のしほ貝・一二〇一)

…一枚金櫛と一首詩とをそへて、…金櫛を偽りうらせて、…

(蒙求和歌集平仮名本・六八)

寂光院は西の山ぎはにあり、…絵巻ありとききて、こひいでて見る…

(六帖詠草・五九三)

子規短歌に漢語「印」<sup>(いん)</sup>の使用例が見られるが、古歌中では使用例は見られない。しかし「印」を「しめ」又は「しるし」と読む場合は古歌中に使用例が見られる。それぞれ一首ずつ例を挙げる。

ヒサカタノ アブノシルシト ミナセガハ ヘダテテオキシ カミヨノウラミ  
久方 天印等 水無河 隔而置之 神世之恨  
アサチガヘラ ヲノシメユフ ソラコトヲ イカナリトイヒテ キミヲバマタム  
朝茅原 小野印 空事 何在云 公待  
(万葉集・二〇一一)  
(万葉集・二四七〇)

子規短歌の漢語「大佛」<sup>(だいぶつ)</sup>も古歌では題詞のみに使用例が見られる。しかし「大佛」を「おほぼとけ」と読む場合古歌中での使用が見られる。

是体如は東大寺なる盧遮那仏げにあかがねの大仏<sup>(だいぶつ)</sup>かは  
(拾玉集・四二〇二)

子規短歌の漢語「馬車」<sup>(ばしや)</sup>を「うまぐるま」と読む場合、古歌中に使用例が見られる。

賀茂山やたつる使の馬車<sup>(ばしや)</sup>道もにぎはふけふの神事  
(為村集・五四一)

## 明治三二年

明治三二年の器物を表す漢語は二四語で、その中の次の十六語が明治三二年に初めて使用されたものである。

### 古歌中に使用例が見られるもの

#### …一語

笙

月照す狩衣姿ほの見えて春の夜深く《笙》を吹くなり

(二〇七八・三二年)



古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…二語

車輪・銃

壁たつる崖の細道行く《車輪》をどる毎に生けるこゝちせず

(一二四三・三二年)

狩人の《銃》の音響く武藏野はいくさの中にあるかとそ思ふ

(一三三六・三二年)

古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

…十三語

油畫・看板・金・銀泥・廣告の札・三味の音・新聞・水盤・茶托・古繪・風呂敷・本箱の上・繪の具

《金》取ると山堀りぬきて人の行く奈落の底の通ひ路あはれ

(一二一二・三二年)

古歌中の例

雲たえて帰らぬ笙の声をこそきかまほしけれなにみなせ鳥

(雲玉集・納叟・五七三)

詞書の例

猶如車輪無始終といへる文の心をよみ侍りける

(続門葉和歌集・法印頼瑜・九〇三)

鳥銃

(草徑集・一五三)

子規短歌の漢語「金」<sup>(きん)</sup>は古歌中にも詞書にも使用例が見られないが、「かね」「こがね」と読む例は古歌中に使用例が見られる。

イハガネノ  
磐金之  
コゴシキヤマヲ  
凝敷山乎

コエカネテ  
超不勝而  
ネニハナクトモ  
哭者泣友  
イロニイデメヤモ  
色尔将出八方

(万葉集・長屋王・三〇四)

シロカネモ  
銀母  
コガネモ  
金母玉母

ナニセムニ  
奈尔世武尔  
マサレル  
麻佐礼留多可良  
コニシカメヤモ  
古尔斯迦米夜母

(万葉集・山上憶良・八〇七)

## 明治三三年

明治三三年の器物を表す漢語は四五語で、その中の次の二七語が明治三三年に初めて使用されたものである。

### 古歌中に使用例が見られるもの

#### …九語

閼伽の水（「閼伽」の形で例がある）・梅の鉢（「鉢」の熟語で例がある）・唐の畫（「繪」で例がある）・

小鉢（「鉢」の熟語で例がある）・像・花の繪（「繪」で例がある）・火鉢・蕪村の集（「集」で例がある）・

古鉢（「鉢」の熟語で例がある）

閼迦の井の《閼迦の水》汲み朝な／＼庵の佛に茶をたてまつる

（一三七二・三三年）

### 古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…三語

歌書（「和歌書」の形で例がある）・釣り香爐（「香炉」の形で例がある）・人形

落の花うゑし小鉢のかたはらに取りみしたる俳書《歌書》字書

（一五三一・三三年）

### 古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

#### …十五語

行燈・衣桁・一輪挿し・香・汽車の音・字書・石膏・臺・臺の上・圖案・德利・銅鑼・俳書・棒・女人形

キノフワガ造リシモノハ人ガタヲ載セテ置クベク花彫リシ《臺タイ》

（一六一〇・三三年）

### 古歌中の例

密つみ閼伽の水とるわざならで此つれづれのなぐさめはなし

（他阿上人集・三四一）

みな人の寿像寿像といひけれど後にはつねになげしにぞすむ

（蓮如上人集・一一二）

風呂火鉢瓦灯ぬり桶みづこぼしよきあきなひとならの土かな

(三十二番職人歌合・五八)

…しらしし御代に あつめたる 万葉集の…

(八十浦之玉・村上影面・一五五)

「梅の鉢」「小鉢」「古鉢」の「鉢」と、「唐の畫」「花の繪」の「繪」の古歌の例は既に示したので省略する。

詞書の例

和歌書注事

(袋草紙・範永朝臣・九)

西行上人猫の香炉もて座したる

(桂園一枝・七九五)

…ちひさやかなる人形の夫婦いますを手づから送りて侍りしかば、…

(梶の葉・七)

子規短歌の漢語「臺(だい)」(ルビが付されている)を「うてな」と読む例は、古歌中に使用例が見られる。

ちかひおくおなじ蓮の台こそ残るうき身のたのみなりけれ

(新千載和歌集・法印定為・八九二)

## 明治三四年

明治三四年の器物を表す漢語は、「繪の具」と「繪」の二語で、明治三三年までの子規短歌に使用されている。

藤なみの花をし見れば紫の《繪の具》取り出で寫さんと思ふ

(拾遺三六六・三四年)

藤なみの花の紫《繪》にかゝばこき紫にかくべかりけり

(拾遺三六七・三四年)

## 明治三五年の

明治三五年の器物を表す漢語は五語である。その中で次の一語が明治三五年に初めて使用されたものである。

## 古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

…一語

樂燒

《樂燒》のすゑものやかば弓矢取る左千夫の朝臣か面かたを取れ

(拾遺五〇一・三五年)

明治三五年に見られる子規短歌の漢語「茶の椀」は、「茶碗」が明治三十年以前と三三年の作品に既に見られるので、三五年で初めて使用される漢語とは判断しない。

小ふくろの中は我知る《茶の碗》と筆と硯と松しまの歌

(拾遺五〇九・三五年)

以上右をまとめると、器物を表す漢語も人物を表す漢語と同様に明治三十一年に使用の増加が見られる。また使用を増加させた器物を表す漢語は、江戸時代までの和歌に見られないもの（詞書のみに見られるものと、詞書にも見られないもの）が多い点も共通している。明治三二年以降も同様である。

## 二―二―三 「宮室」を表す漢語

## 明治三十年以前

明治三十年以前の宮室を表す漢語は次の一語である。

古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

…一語

柵橋

《柵橋》に駒立てをれば薄月夜梅がゝ遠く匂ふ夕暮

(二七六・二七年)

詞書では「さく」で、和歌中では「しがらみ」と詠まれている例は、『和歌童蒙抄』に見られる。

柵

おほ井がはこころしがらみかみしもちどりしばなくよぞふけにける

(和歌童蒙抄・玄賓・二三八)

明治三十一年

明治三十一年の宮室を表す漢語は二二語であり、この全てが三十一年に初めて使用されたものである。

古歌中に使用例が見られるもの

…五語

椽先(「落縁」の例がある)・城外・塔・茶屋・樓

《椽先》に玉巻く芭蕉玉解けて五尺の縁手水鉢を掩ふ

(三五七・三十一年)

古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…七語

學校・城中・鐘樓・茶店・天津橋下・天津橋上・寶塔

朝風の吹きくるなへに君が代を歌ふ聲聞ゆ《學校》の方に

(一〇一六・三十一年)

古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

…十語

板堀・關帝廟下<sup>注13</sup>・五重塔・小料理屋・十軒店・城下・庄屋・南大門前<sup>注14</sup>・野茶屋・堀

賣れ残る雛やものを思ふらん《十軒店》の春の夜の雨

(五四七・三一年)

### 古歌中の例

落縁に如法に腰の折れたれば御歌の返しも不献なり

(行宗集・一七九)

すみよしのいり江の月やふるさとの姑蘇城外のあきのおも影

(七十一番職人歌合・一八二)

塔をくみ堂をつくるも人のなげき懺悔にまさるくどくやはある

(金槐和歌集・六五一)

やすまははこころなからむ茶屋のまへ花のしたゆく道のこしき

(三十二番職人歌合・二〇)

楼のうへにしらべあはする糸竹ををさまれる世のこゑときくなり

(通勝集・九五四)

### 詞書の例

…学校ヲタテ、人ヲススミチヲヒロメケルナリ

(蒙求和歌片仮名本・二三〇)

花落城中地、春深江上天

(拾玉集・一九一七)

法勝寺鐘楼前の花見に、ひとびとまかりてはべりしに

(行宗集・二七)

田谷村なる桜屋といふ茶店の壁にかいつく

(志濃夫廼舎歌集補遺・八三一)

…内裏にて漢朝の名所と故賢とを題にて人人に歌めしける時、天津橋

(卑懷集・六三九)

宝塔品

(続古今集・法性寺入道前関白太政大臣・七七二)

子規子規短歌の漢語「十軒店」は、古歌と詞書のどちらにも例が見られないが、「店」<sup>(みせ)</sup>の使用例は古歌の詞書で見

ることができる。左の例では詞書に「野店」、和歌中に「野原のいほ」と表現が変えられている。

野店月

なほざりの野原のいほの秋風にあれまくしらずめる月影

(白川殿七百首・侍従中納言・二八二)

## 明治三二年

明治三二年の宮室を表す漢語は九語であり、この中で次の七語が三二年に初めて使用されたものである。

古歌中に使用例が見られるもの

…一語

障子

たま／＼に《障子》をあけてなかむれば空うら／＼かに鳥飛びわたる

(一〇八九・三二年)

古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…三語

經藏・壇・陣屋

《經藏》のうしろの椿手折り來て佛の前に活けたてまつる

(一〇四六・三二年)

古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの…三語

岳陽樓上・擬宝珠の上・海苔餠朶垣

《岳陽樓上》長きかたみをとゞむらん日本本田種竹題すと

(一二二四・三二年)

古歌中の例

我が恋は障子の引手峰の松火打袋の鶯の声

(正徹物語・六三)

詞書の例

北野社経蔵、承元の比叢祖為蓮法師つくり侍りけるを、…

(続現葉和歌集・佐伯為助・七八〇)

住吉の堂の壇のいしとりに、きのくににまかりたりしに、…

(国基集・一五三)

六月庚申、於季光陣屋張行し侍る

(為広集・二四)

明治三三年

明治三三年の宮室を表す漢語は十二語であり、この中で次の七語が三三年に初めて使用されたものである。

古歌中に使用例が見られるもの

…四語

閼伽の井（「閼伽井」で例がある）・椽側（「落縁」の例がある）・格子・御殿

《閼迦の井》の閼迦の水汲み朝な／＼庵の佛に茶をたてまつる

(一三七二・三三年)

古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…一語

碑

いにしへのきくうの園の名をつぎし梅の林の壽星梅の《碑》

(一四六四・三三年)

古歌中と詞書のどちらにも使用例が見られないもの

…二語

團子屋・鴛鴦の小衾<sup>注15</sup>



曉の《鴛鴦》の小衾《靜かにて閨の外面は雪積りけり

(一四三〇・三三年)

君ガ庭ニ茶店《團子屋》コシラヘテ園遊歌會開カバヨケン

(一六三四・三三年)

#### 古歌中の例

絶えずくむあかみの水の底すみて心にはるる在明の月

(新千載集・二品法親王覚助・八六四)

あさぎよめ格子なあけそ行く春をわがねやのうちにしばしとどめん

(金槐和歌集・一二九)

みがき置きし玉の御殿の跡あるや水無瀬の雪の光なるらむ

(基綱集・一三六)

「縁側」の「縁」の古歌での例(「落縁」の例)は既に示したので省略する。

#### 詞書の例

…魏王曹操ガ主簿タリキ、江南ニ至リテ、曹娥碑ノ文ヲミルニ…

(蒙求和歌集片仮名本・四〇)

子規短歌の漢語「碑」を「いしづみ」と読む場合は、古歌に例が見られる。

みちのくの壺の碑かきたえてはるけき中となりにけるかな

(うたたね・五)

#### 明治三四年

「宮室」を表す漢語の使用例は見られない。

## 明治三五年

明治三五年の宮室を表す漢語は次の一語であり、三五年に初めて用いられたものである。

古歌中に使用例が見られず、詞書に使用例が見られるもの…一語

茶室

かみふさの山の杉きりみやこべの茅場の町に《茶室》つくるも

(拾遺四五八・三五年)

詞書の例

茶室

(柿園詠草・八三七)

以上をまとめると、宮室を表す漢語も人物、器物を表す漢語と同様に明治三年に使用の増加が見られる。また使用を増加させた宮室を表す漢語は、古歌中に見られないもの(詞書のみに見られるものと、詞書にも見られないもの)が多い点も共通している。明治三年で初めて使用される宮室を表す漢語の場合、古歌中に使用例が見られるものの方が多いが、古歌に見られないものとの差は殆ど無いと言える。

## 第三項 多字漢語

各期間の子規短歌に見られる漢語を字数ごとに分類し次にまとめる。(一)内には各語の延べ語数(述べ語数一の場合(省略))を挙げている。動詞は終止形の形で挙げている。以降同様である。

漢語の字数の認定について、次の方法を用いる。

「繪の具」のように、助詞「の」等で語が繋がっている場合、助詞の前後の各語の漢字数を数える。この場合は一字漢語「繪」と「具」の二語が見られると判断する。

「牡丹」と「牡丹の花」のように語の形が異なっている場合、該当する漢語が共通している場合（この場合は二字漢語「牡丹」で共通している）は、異なり語数は「牡丹」の一語とする。

混種語は漢語の部分のみを認定する。例えば「降参す」は漢語部分が「降参」であるので二字漢語とする。

## 明治三十年以前

一字漢語（異なり語数…二六語）

愛・哀・惡・易・えにし（縁）・歸（2）・喜・賽・師・死・酌・生・敵・怒・鉢・便・兵・渤・盆・様（2）・慾・

樂・連・晝

蝶の夢・二の聲

一字漢語（混種語）（異なり語数…八語）

寫し繪・大損・柵橋・白菊・都地・右手

聞く地

晝く

二字漢語（異なり語数：三九語）

行脚・海上・改新・餓鬼・癩癩・牛肉・氣車・狂歌・黃帝・景色（2）・極樂・渾沌・珊瑚・自由・借金・寫眞・書生・腎虚・人爵・政黨・世界・千年・紂王・丈六・茶碗・都合・天下・豆腐・男體・女體・萬國・病氣・物質・蒲團・平穩・別品・母音・滿腹

款冬の花

二字漢語（混種語）（異なり語数：四語）

四斗樽

降参す・首途す・分析す

三字漢語（異なり語数：七語）

一等賞・化學者・四十里・丈鬼船・道祖神・博覽會・無道酒

三字漢語（混種語）（異なり語数：二語）

金比羅様・金比羅丸

四字漢語（異なり語数：一語）

十八時間

明治三十年以前の子規短歌の漢語はその使用は少なく、四字漢語まで見られるが、四字漢語は「十八時間」の一語

である。短歌の五、七音の音数律に配慮して、五、七音を越える漢語の使用は少ないと言える。

## 明治三一年

一字漢語（異なり語数…二五語）

印・宴・核・漢・菊（4）・經（2）・坐・詩・晉・錢・塔・茶（3）・圖・蝶（2）・天・方・鉢（2）・緋・百・塀・禮・樓・椀・繪（4）

壁の畫・菊の根・五重の塔・櫻の宴・富士の畫・盆の月

一字漢語（混種語）（異なり語数…三七語）

筏師・板塀・椀先・笹菊・鐵棒<sup>カナ</sup>（鐵棒）・黃菊・菊作り・菊苗畑・黍團子・五畝・三崎<sup>（さむ）</sup>・庄屋・白菊・墨繪・唐黍・唐茄子・鷹匠・茶藁・茶店・茶屋・手水鉢・夏菊・野茶屋・鉢植・鉢栽櫻・盆踊・繪團扇・繪卷物

水鉢の上

アメリカ人

講す・吟ず・觀ず・丁と（2）・伏よ・向ひ坐す・

畫<sup>（エガ）</sup>く（3）

二字漢語（異なり語数…一二二語）

縁日・海棠（2）・江東・學校・寒山・寒竹・寒林・桔梗・瀧車（4）・狂女・伽羅・金魚・金州・金地・供物・

黄河・曠野・華山・官人・傾城（2）・鷄頭・景色（4）・紅梅（15）・胡笳・乞食（4）・五尺（2）・胡人・孤村・  
五反・碁盤・御料・草紙・三寸・三千（2）・三層・三昧・雌雄・紫雲・獅子（2）・子孫・七人・子弟・十萬・  
城下・城外・城中・上人・菖蒲（3）・聖靈（2）・釋迦・雀子・寂莫・芍藥・上海・棕櫚・春風・春水・順禮・  
鐘樓・震旦・水仙・翠簾・青青・剎那・千戸・楚歌・太鼓（6）・大臣・大佛・長安・提灯・鎮守・天竺（2）・  
同姓・豆腐・燈籠（2）・土用・二尺・入寂・念佛（2）・俳句・焙烙・白梅・伯樂・馬車・芭蕉（2）・繁華・枇杷・  
百萬・風鈴・豐干・變化・奉捨・寶塔・木瓜・牡丹（2）・煩惱・落花・洛陽・李白・遼東（2）・連翹・驢馬・  
淵明・温泉

五日の節會・海棠の花・柑子の花・桔梗の花・五重の塔・後夜の鐘・塞翁が馬・芍藥の園・棕櫚の花・眞如の月・  
少將の君・枇杷の小苗・牡丹の花

二字漢語（混種語）（異なり語数：二〇語）

薄紅梅・閑古鳥・小傾城・子順禮・小料理屋・此<sup>（こん）</sup>畜生・四十雀・十軒店・菖蒲湯・代官殿・内裏雛・納豆賣・  
葉鷄頭・女餓鬼・男餓鬼

供奉す・頭痛す・分類す・餘念なし・來迎す

三字漢語（異なり語数：十二語）

一代記・九十九・五十年・五萬匹・五六本・秋海棠・自轉車・殺生石・天長節・美少年・百日草・普陀落

三字漢語（混種語）（異なり語数：一語）

南大門前

四字漢語（異なり語数：十二語）

關帝廟下・歳と年と・三十六峰・天上天下・天津橋下・天津橋上・如是我聞・年と歳と・賣卜先生・武運長久・

不動明王・落花流水

四字漢語（混種語）（異なり語数：一語）

委蛇くたり

明治三十一年の短歌の漢語も、三十年以前と同様に四字漢語までが見られるが、漢詩文の句をそのまま使用した例が複数見られる点で変化している。特に多字漢語（四字漢語以上）では、清水房雄氏の『子規漢詩の周辺』<sup>注16</sup>で指摘されている原拠の句をそのまま使用している例、「歳と年と」「天津橋下」「天津橋上」「年と歳と」「落花流水」「委蛇く」の六語と多く見られる。左に清水房雄氏の指摘の一部（「天津橋下」「天津橋上」の例）を挙げる<sup>注17</sup>。（ ）は私に補ったものである。

○同年作（「同年」は明治三十一年を指している）

天津橋上繁華の子等の見えしより天津橋下春の水青し

影見えて

改造社版「子規全集」第七巻には「戯れに詩の句を取りて」と題する五首中の四首目に見えて居り、漢詩を原拠としてのこと明瞭である。昭和十二年十一月の雑誌「鳴沢」の特集「竹の里歌」研究号に於て、中村喜代志氏

の既に指摘して居るように、それは初唐の劉廷芝の七言古体詩「公子行」冒頭の句「天津橋下陽春水、天津橋上繁華子。馬声廻合青雲外、人影揺動緑波裏、」そのままの三十一音律である。

このような多字漢語の特徴は、明治三十一年に増大した漢語の中に見られるものである。

当期間は、漢詩を下敷きにした短歌の作成が試みられ<sup>注18</sup>、それに基づいた漢語の使用が見られる。清水氏によって例示された漢詩を下敷きにしたもの以外に、子規自身による漢詩の題材を短歌に使用した例も見られることも指摘されている。次に徐前氏によって例示されている例の一部を挙げる<sup>注19</sup>。

#### 金州城

旌旗十萬捲天來      旌旗十萬    天を捲いて来り

一戰國    枯骨堆      一戰    国亡んで    枯骨    堆し

犬吠空垣人寂寞      犬は空垣に吠えて    人    寂寞

滿城風雨杏花開      滿城の風雨    杏花開く

と明治二十九年作の

#### 金州城外

○亂後亡民不可求      乱後    亡民    求むべからず

杏花空屋燕兒愁      杏花の空屋に燕兒愁ふ

遼陽四月草猶短      遼陽の四月    草猶短く



不爲行人掩 體 行人のため髑髏を掩はず

という二首と同じ題で

○梨吹くや戦のあとの崩れ家 (明治二十八)

○なき人のむくろを隠せ春の草 (明治二十八)

○金州の南門見ゆる枯野哉 (明治三十一)

という俳句を作っているし、さらに短歌にも

金州

○人住まぬいくさのあとの崩れ家杏の花は咲きて散りけり

○城中の千株の杏花咲きて関帝廟下人市をなす

という明治三十一年の作が見える。：

この徐前氏の指摘以外に以下のものを示して見る。子規自身の漢詩の題材を短歌に取り入れた例には、次の例も見ることができる。

山東會館 在金州城内

戰餘城郭夕蕭森 殺氣未收驚鳥心 夜宿禪房春似夢 海棠花下月沈沈

右の漢詩<sup>注20</sup>を翻案したと考えられる短歌が明治三二年に見られる。漢詩と重複する語彙に傍線を附した。

遼東のたゝかひやみて日の本の春の夜に似る海棠の月

(五四〇・三一年)

右の歌の第一二句の別案は「金州に旅寐し居れば」であり、こちらの別案での「旅寐」の箇所も漢詩の「夢」と題材が類似していると言える。

明治三十一年での短歌への漢詩の題材の使用と漢語の使用について、藤川忠治氏の次の指摘がなされている<sup>注21</sup>。

…漢語の使用の目立つ彼の歌は非常に多く、例示する迄もない。漢詩や漢文の言葉を使用したものなど最初はかなり多かつた。…「石壕史」（讀杜詩）等は、言葉には漢語が非常に目立つといふ程ではないが、これは漢詩の翻譯の試みとして注意される。これとはやゝ異なるが、題材を漢にとつたものも多くて、それらは大部分、必然的に漢語が多いといふ結果を示してゐる。…

このように、明治三十一年の子規短歌の漢語は多字漢語に限らず、子規自身によるものを含めた漢詩文の題材を使用したことによるもの（例「天津橋下」「關帝廟下」等）と、中国を題材にしたことによるもの（例「上海」「李白」等）が多くみられる。特に多字漢語では漢詩文の句をそのまま使用したものが見られる。四字漢語の使用数が増加しているのには、漢詩文の句を歌の題材にしたことが影響している。

また、明治三十年以前では音数律から外れる漢語の使用が見られなかったが、明治三十一年になると八音の漢語を見ることができる。例えば四字漢語の「賣卜先生」「歳々年々」は八音である。音数律を重視する意識よりも漢語使用の意識が強く現れたと考えられる。

## 明治三二年

一字漢語（異なり語数…二四語）

衣・<sup>(1)</sup>癩・菊（5）・金・象（2）・師（2）・詩（5）・笙・銃（2）・壇・茶・圖・敵・蝶・熱（2）・婆・鉢（2）・美・鬢（2）・佚（2）・王・畫（3）

一の人・詩の神・詩の囊・繪の具

一字漢語（混種語）（異なり語数…十九語）

油畫・香取氏・四年・四年前・十四日・たきやう（炊様）・團子（3）・茶晶・茶店・茶飯・茶屋（2）・陣屋・緋桃・古畫・山本君・岡君

本箱の上

吟ず・題す

二字漢語（異なり語数…八二語）

惡魔・一字・一里・項羽・看板・汽車（2）・經藏・御者・金魚・銀泥・空氣・鷄頭・公園・國土・午後・<sup>(3)</sup>兀山・<sup>(3)</sup>兀嶺・胡蝶・五枚・妻君・三昧（2）・三階・獅子・支那・十萬・將軍・障子・菖蒲・成佛・釋迦・寫眞（2）・寫生（4）・車輪・新聞・秦淮・水盤・赤壁・說法・撰歌・先生（2）・千萬・第一・大臣・大佛・地下・提灯・茶托・天氣・天平・冬瓜・二階・二枚・二輪・配合・薄氷・馬車・彼岸・百萬・芙蓉・牡丹（2）・法師・蜜柑（2）・洋服・耶蘇・豫報・劉邦・連翹・綠青・廬山・路地・往來・繪師（2）

天津麻羅（<sup>あまろ</sup>2）・伊豆の温泉・御元の命婦・廣告の札・鶏頭の花・三味の音・鐵線の花・奈落の底・枇杷の蕾・葡萄の房・平和の神・牡丹の花（6）  
悉皆

二字漢語（混種語）（異なり語数…八語）

榮華物語・似非法師等・源氏物語・妻子等・海苔匳・風呂敷・法師等  
漫々たり

三字漢語（異なり語数…十語）

阿彌陀・祇園坊・金槐集・御料威・山茶花（2）・秋海棠・四五人・展覽會・二三寸  
擬寶珠の上・山茶花の花・秋海棠の花

四字漢語（異なり語数…三語）

岳陽樓上・觀音菩薩・藥王菩薩

五字漢語（異なり語数…二語）

征夷大將軍・南無阿彌陀

明治三二年の短歌に見られる漢語の語数は明治三一年よりも少なくなっているが、これは当期間の短歌作品の歌数が少ないことに影響している。

短歌への漢語使用の積極性は継続しているが、明治三二年に見られたような用語の拡大を意図しての、漢詩文の句のままを短歌に使用する例は少なくなっている。また中国を題材にしたことによる漢語の使用も減少している。この二点は明治三一年から変化した点といえる。明治三二年での多字漢語の傾向が見られるのは「観音菩薩」等といった神仏名である。

明治三二年の短歌の漢語は五字漢語まで見られる。「征夷大將軍」「南無阿弥陀」の二語と少ないが、これまで四字漢語までであったことと、後述の落合直文短歌では三字漢語までの使用であることから、漢語の字数を増やしたことは注目できる。

## 明治三三年

一字漢語（異なり語数：三八語）

解・香・菊（3）・客・句・會・坐・像（2）・詩（2）・字・情・錢・代・臺・塔・地・茶（8）・圖（4）・蝶・熱・

鉢（5）・碑・非・雹・鬢（2）・堀（2）・棒（2）・盆・厄・驢・繪（7）  
（うば）

梅の鉢・樂の音・唐の畫・菊の花（6）・臺の上・茶の歌・茶の湯・蝶の羽・蕪村の集・堀の上・發句の會・花の繪・  
法の王・明の人

一字漢語（混種語）（異なり語数：三二語）

朝茶・東菊・生喰・薄茶・歌會・寫し繪・椽側・黃菊（2）・小櫻草・寿草・小鉢・十四日・白菊・墨繪・團子（2）・

團子屋・茶店(2)・茶屋・二羽・鉢植(3)・一椀・火鉢・百余り・百許り・古鉢(2)・古繪・子子・雪解・

繪描き

蛇の目唐傘

繪(三)がく

イギリス人

二字漢語(異なり語数:九九語)

鸚鵡(2)・行燈・衣桁・位置・一輪(2)・海棠・講義・格子・學校・學課・歌書・歌人(2)・寒山(2)・

汽車(3)・伽羅・錦欄・句意・孔雀(4)・菓子・火事・觀音(3)・軍馬(2)・藝者・景色・下駄・國力(2)・

御殿・高麗(2)・五位(2)・渾沌・山椒・三千・雌雄・字書・詩人・十字・十把・猩々・菖蒲・芍藥・寫眞(2)・

寫生・松露(2)・四位・新聞(5)・水仙(2)・水盤・少女・少年・石膏・千里・體操・大事(2)・大佛・

達磨(2)・提灯・茶托(2)・茶碗(2)・女郎・圖案・天狗・德利・屠蘇(2)・途中・銅鑼・緞子・二騎・二尺・

日本・人形・俳書・俳人・坊主・白銀・半玉・美人(2)・枇杷・豐干・富貴・文章・方丈・北斗・牡丹(8)・

萬葉・武者・文字・模様・留守・六代・路次・繪師

閑迦の水・閑迦の井・銀杏の老木・瀛車の音・權現の森・水仙の花・沈丁の花・牡丹の蕾・牡丹の花(8)・

發句の會・面會の日・楊子の川・鴛鴦の小衾

二字漢語（混種語）（異なり語数…一一語）

一輪挿し・一輪薔薇・五月五日・五月一日・四十雀・釣香爐（3）・一文子・藪柑子・山形新聞・四千號・女人形

三字漢語（異なり語数…九語）

阿彌陀・三千號・三千日・三千文・四五枚・壽星梅・茶博士（4）・陳元賛

臥龍梅の園（臥龍梅園）・

三字漢語（混種語）（異なり語数…二語）

七十二瀧・日蓮大菩薩

四字漢語（異なり語数…九語）

歌學全書・極樂浄土・善男善女・大慈大悲・女學生徒・二丈五尺・落花水面・盧舍那佛・園遊歌會

五字漢語（異なり語数…二語）

觀世音菩薩・日本新聞社

明治三三年も多字漢語も使用されており、五字漢語まで見られる。内容は、明治三二年で神仏名の使用が継続される傾向が見られ、明治三三年になると「觀世音菩薩」といった神仏名の他に「極樂浄土」といった宗教特有の語も目立つようになっている。

また「觀世音菩薩」「日本新聞社」は八音と短歌の音数律から外れた漢語である。以降の期間では四字漢語以上を見

ることができないことを踏まえると、子規が漢字数の多い漢語、音数律に縛られない漢語を短歌に使用することは、明治三三年までであると言える。

#### 明治三四年

一字漢語（異なり語数：八語）

題・蝶・熱・繪（2）

歌の會・孝の子・繪の具

二字漢語（異なり語数：四語）

孝子（4）・薔薇・美人・牡丹（7）

牡丹の花（9）

二字漢語（混種語）（異なり語数：一語）

薩摩下駄

明治三四年の短歌に見られる漢語は少ないが、明治三二年と同様、当期間の短歌作品数が少ないことが影響している。明治三四年の短歌の漢語は二字漢語までと、三字漢語以上の多漢字の使用が見られなくなる。明治三一年から三三年まで見られた、短歌の音数律に縛られない漢語の使用が見られなくなる。



## 明治三五年

一字漢語（異なり語数…五語）

題（2）・麤・晝

茶の櫛

一字漢語（混種語）（異なり語数…三語）

直目・鉢植（2）・樂燒

二字漢語（異なり語数…三語）

異国・汽車（3）・茶室

三字漢語（異なり語数…一語）

茶博士

明治三五年も短歌作品数が少ないため、漢語の例数が少なくなっている。明治三五年の短歌に見られる漢語は三字漢語までであるが、三字漢語が「茶博士」の一語である。明治三四年と同様に短歌の音数律に縛られない漢語の使用が見られない。

### 第三節 まとめ

以上、子規短歌に使用されている漢語について見てきた。

子規短歌での漢語使用は、明治三十一年に積極的なものとなっている。明治三十年以前にも漢語使用が見られるが、その漢語の多くは次の歌のように『竹乃里歌』拾遺のものである。明治三十年以前の『竹乃里歌』拾遺の作品は、三年時点で自筆本『竹乃里歌』へ作品として記録されなかったものである。

《借金》で《人爵》買ふて《別品》の《酌》<sup>シヤク</sup>でをさめん胸の《癩癩》

(拾遺一八六・二三三年)

明治三十年以前の子規短歌に使用された漢語は、右のように言葉遊びがなされた作品に、多くの例が見られる。この時点では、記録に残る作品としての短歌への漢語の詠み方が確立していなかったと考えられる。

明治三十一年になると、短歌の題材の拡大を目的にした漢語の使用が行われている。短歌への漢語使用は、同時代の鉄幹や晶子と同様に、伝統的な和歌と比べて多いものである。また、明治三十一年に歌の題材を漢語で表されるものまで広げたことで、晩年に歌材が身近な物へ狭まった際でも歌の題材をある程度確保することができたと考えられる。意味分野、古歌との対応、多字漢語の三点より、子規短歌の漢語の特徴を以下にまとめる。

漢語で表す意味分野について、六期間での変化を見ると、生活に根差した身近なものへと題材を広げ、明治三四年になると子規の身近なものや身近なものに起因した内容へ狭まってゆくことが明らかになった。

生活に根差した内容について、例えば人物を表す漢語では、明治三十年以前では日常生活から離れた内容(紂王や黄帝など)を表すことが多かったのが、革新後では日常生活に即したような身近な内容(納豆賣・婆・香取氏・茶博

士など）も表すようになっていた。また器物を表す漢語では、明治三十一年に「錢」といった生活に密着した商い関係の語が明治三十一年に詠まれ始め、「墨繪」といった文学・芸術関係の内容も増加している。明治三十三年になると「歌書」など子規の身边にあるものが多くなる。

日常生活での商いに関する漢語が詠まれることは、子規短歌の特徴と言える。それは直文、鉄幹、晶子には殆ど商いに関する漢語を見ることが出来ないからである。例えば、四者に共通して使用される漢語の一つに「白菊」があるが、商品としての白菊（左の二首）を詠んでいるのは子規のみである。

市人にうられんものを《しら菊》の花ようらみそ我手折るとも

（二〇六・二六年）

賣れ残る黄菊《白菊》積みあげて歸る車や大路小路の霜

（一〇一〇・三十一年）

**晩年**に漢語の題材が子規の身近なものへ狭まることについて、明治三四年三五年の作品の漢語の大半が「牡丹」「繪」といった子規の身边のもの、「茶博士」といった子規の知人名、「孝子」といった伝聞に拠るものとなっている。また明治三十一年に新しく詠まれた漢語は非常に多いが、その中で晩年まで使用されているのは僅かであり、蝶や鉢植え、牡丹といった身近なもののみである。なお晩年の短歌の題材が身近なものに狭まることは漢語に限らない特徴である。例えば海に関する語は明治三三年までは詠まれるが、明治三四年以降は次の一首のみであり、その内容も自然物としての海ではなくお吸い物の比喻としての使用である。海に関する語彙に傍線を附している。

甦の海に洑みちくれば茗荷子の葉末をこゆる眞玉白魚

（拾遺五一・三五年）

短歌に使用されている漢語の意味分野の期間ごとの変化より、次のような子規の試行も窺うことができる。

子規は明治三一年で、「自己が美と感<sup>○</sup>じ<sup>○</sup>た<sup>○</sup>る<sup>○</sup>趣<sup>○</sup>味<sup>○</sup>を<sup>○</sup>成<sup>○</sup>る<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>く<sup>○</sup>善<sup>○</sup>く<sup>○</sup>分<sup>○</sup>る<sup>○</sup>や<sup>○</sup>う<sup>○</sup>に<sup>○</sup>現<sup>○</sup>す<sup>○</sup>」ことを主張している。子規は明治三一年に、自らの歌論の実践を行い様々な漢語を詠むのと同時に、どのような内容が漢語で表すのに適しているのか、どのような「自己が美と感<sup>○</sup>じ<sup>○</sup>た<sup>○</sup>る<sup>○</sup>趣<sup>○</sup>味<sup>○</sup>」が漢語表現に適しているのかを試みていたのではないだろうか。このような漢語使用の試行を行った結果、徐々に子規は次の傾向を得たのではないか。

一つに、人物又は人工物に関するもの（「人物」「器物」「宮室」「人事」）を漢語で詠みやすいこと、又は漢語で表される人物又は人工物に関するものは歌に詠みやすいことである。

子規短歌には漢語で表される人工物、例えば「寒暖計」を「寒さはかり」にするなど、必ずしもそのまま漢語の形で使用していると言えない<sup>注22</sup>が、漢語の題材が「人物」や「器物」、「宮室」、「人事」といったものに限られていたことは、子規にとって人物や人工物に関するものは漢語での表現に適していたのではないか。明治三四年以降の子規短歌の「人物」「器物」「宮室」「人事」を表す漢語を見ると、当時の子規にとって身近なものが多いと言える。左の四首は子規の身近なものや、出来事を受けての作品である。

足引の山のつとひに君來ずば牛てふ《題》のうしやさひしや

（拾遺四二八・三四年）

かみふさの山の杉きりみやこべの茅場の町に《茶室》つくるも

（拾遺四五八・三五年）

枕へに友なき時は《鉢植》の梅に向ひて歌考へつゝ

（拾遺四六八・三五年）

珍ラシキ草花モガト《茶博士》ノ左千夫ガクレシチンノレヤノ花

（拾遺四九九・三五年）

二つに、自然に関するもの（「動物」「植物」「天文」「自然物」）に関するものは漢語で表し難いこと、又は漢語で表

される自然に関するものは歌材に成り難いことである。

子規の家の庭にも秋海棠や木瓜、牡丹など漢語で表される種類の植物があり、子規にとって漢語で表される種類の植物は身近であったと言える。しかし明治三四年以降漢語で表される植物を詠むことが殆ど見られなくなり、「梅」「土筆」など和語で表される植物の例を多く見ることができ、また明治三十一年に多数詠まれた「紅梅」という表現が、次の二首のように和語での表現になっている。

紅のこそめと見しも梅の花さきの盛りは色薄かりけり

（拾遺四六五・三五年）

ふゝめりし梅咲にけりさけれども紅の色薄くしなりけり

（拾遺四六六・三五年）

このことから、子規は「植物」を始めとした自然物を、漢語の形での歌への表現にあまり適していないとしたのではないかと考える。

子規短歌の漢語の古歌との対応より、子規が短歌に使用する漢語は、江戸時代までの和歌に使用されたもの以外に、次の三つの範囲まで使用を広げていることが明らかになった。

一つに、古歌では作品の題材ではあるが和歌中では漢語で表されないものを、子規は短歌の中に使用している。ここに分類される漢語は、歌の題材となるが漢語の形で詠み得ないとされたものと考えられる。例えば「野店月」と題が付された和歌に次のものが見られた。次の和歌では「野店」が「野原のいほ」と表現が変わっている。

なほさりの野原のいほの秋風にあれましくらずめる月影

（白川殿七百首）

古歌では、このような詞書での表現と和歌中での表現が異なっている例が多数見られる。

二つに、古歌では作品の題材となるが和歌中には表されないものを、子規は短歌の中に表現するようになっていく。ここに分類される漢語は、歌を詠む又は読む際の前提となる情報で提供されるが、歌の材料にならないとされたものと考えられる。例えば「碁盤」が詞書にあるが、和歌では「をのえのくちむしらず君が世のつきんかぎりはこちらみよ」と「碁盤」を表す表現が見られない。歌材にはなるが、和歌中に歌材を表す語が見られない。子規は、このような漢語を短歌に使用しようとしている。

三つに「鐵棒」などのように、古歌中にも古歌の詞書にも使用例が見られない漢語、即ち和歌の題材になっていないものも、子規は短歌の中に表現するようになっていく。

子規が明治三十一年以降、新しく短歌に使用するようになった漢語の殆どが右の三つに分類できるものである。

古歌では漢語を歌中に詠むことは少なく、和語や雅語を歌中に使用することが多いのに対し、子規は和語や雅語に限定せずに漢語を始めとした外来語を歌に積極的に詠んでいる。ここに子規の近代人の一つの言語意識が表れている。

多字漢語について、明治三十年以前の作品にも使用例が見られるが一例のみであり、複数の使用例が見られるようになるのは明治三十一年から明治三十三年の間である。多字漢語で表される内容は、明治三十一年では漢詩文の句を短歌にそのまま題材にしたものが見られるが、明治三十二年と明治三十三年では神仏名など宗教関係のものが多くなる。また短歌の音数律から外れる、八音以上の漢語の使用も明治三十一年から明治三十三年までの期間の作品に見られる。

注

注1 『子規全集第七巻 歌論選歌』（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年七月）収録「七たび歌よみに與ふる書」より抜

粹した。

注2 講談社版『子規全集』第七巻（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年七月）四八〇頁収録「十たび歌よみに與ふる

書」より抜粹した。右傍の〇は、本文のままである。

注3 講談社版『子規全集』第七巻収録「十たび歌よみに與ふる書」に、次の内容が見られる。

…歌では「ぼたん」と言はず「ふかみぐさ」と詠むが正當なりとか、此詞は斯うは言はず必ず斯ういふしきたりの者ぞ  
 など言はるゝ人有之候へどもそれは根本に於て已に愚考と異り居り候。…牡丹と深見草との區別を申さんに生等には深  
 見草といふよりも牡丹といふ方が牡丹の幻影早く著く現れ申候。且つ「ぼたん」といふ音の方が強くして、實際の牡丹  
 の花の大きく凛としたる所に善く副ひ申候。故に客觀的に牡丹の美を現さんとすれば牡丹と詠むが善き場合多かるべく  
 候。…

注4 『明治文学研究2 正岡子規』（藤川忠治 山海堂出版 一九三三年九月）四二一〜四二五頁より抜粹した。

注5 古歌での漢語使用の実態について、散文と比べ『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』の漢語使用が少ないことは既に指摘  
 されている。

『古典対照語い表』（宮島達夫 笠間書院 一九七一年九月）三三六頁の「(3) 語種別統計」で、『万葉集』『古今和歌集』  
 『後撰和歌集』に使用された語彙の異なり語数が示されている。( ) 内は異なり語数の合計に対する割合(%)である。

『万葉集』 …… 和語六四七八 (99.6) ・ 漢語二十 (0.3) ・ 混種語七 (0.1) ・ 計六五〇五  
『古今和歌集』 …… 和語一九九一 (99.8) ・ 漢語二 (0.1) ・ 混種語一 (0.1) ・ 計一九九四  
『後撰和歌集』 …… 和語一九一六 (99.6) ・ 漢語六 (0.3) ・ 混種語一 (0.1) ・ 計一九二三  
同統計で示された散文のデータの一部は次の通りである。

『竹取物語』 …… 和語一二〇二 (91.7) ・ 漢語八八 (6.7) ・ 混種語二一 (1.6) ・ 計一三一一  
『伊勢物語』 …… 和語一五八六 (93.7) ・ 漢語八九 (5.3) ・ 混種語十七 (1.0) ・ 計一六九二  
『土佐日記』 …… 和語九二六 (94.1) ・ 漢語四四 (4.5) ・ 混種語十四 (1.4) ・ 計九八四  
『蜻蛉日記』 …… 和語三二七九 (91.1) ・ 漢語二三六 (6.6) ・ 混種語八三 (2.3) ・ 計三五九八

右の散文のデータと比較すると、和歌集の漢語と混種語の使用が少ない事が分かる。

注 6

『和歌大辞典』(犬養廉、井上宗雄、大久保正、小野寛、田中裕、橋本不美男、藤原春男編 明治書院 一九八六年三月)  
一六四頁「歌語」の項に、歌語の特性の一つとして次の指摘がなされている。

…… 実際の語彙の姿は、○イすべて和語で占められ、漢語は特殊な形でしか存在しない。ただし漢語を言い換える訓読語と和訳化した翻訳語が数多い。……

注 7

古歌の用例は勅撰集に見られるものは勅撰集より例を引用した。勅撰集に見られないものは原則として使用例の見られる歌集の中で成立の早いものから例を引用した。なお引用した古歌の収録されている歌集は次の通りである。

上代 『万葉集』(七七〇～七八五年成立か)



中古

『後撰和歌集』(九五一年勅命)・『遍照集』『後撰集』以降『拾遺集』前に成立か)・『清慎公集』(藤原実頼(九〇〇〜九七〇)の家集)・『小野宮右衛門督君達歌合』(九八一年の歌合のもの)・『拾遺和歌集』(一〇〇五〜一〇〇六年成立か)・『発心和歌集』(選子内親王(九六四〜一〇三二)の編)・『御堂関白集』(藤原道長(九六六〜一〇二七)の家集)・『相模集』(相模(一〇一八年頃的人物)の集)・『行宗集』(従三位大藏卿源行宗(一〇六四〜一一四三)の家集)・『後拾遺和歌集』(一〇八六年成立)・『国基集』(津守国基(一〇二三〜一一〇二)の家集)・『為忠家初度百首』(一一三四年頃成立)・『和歌童蒙抄』(藤原範兼作、一一四五〜一一五四頃成立か)・『袋草紙』(一一五九年に一旦成立)・『頼政集』(源頼政(一一〇四〜一一八〇)の家集)

中世

『寂蓮法師集』(寂蓮(一一三九〜一二〇二)の家集)・『蒙求和歌集片仮名本』(一二〇四年成立)・『蒙求和歌集平仮名本』(一二〇四年成立)・『百詠和歌集』(源光行の集、一二〇四年成立)・『閑谷集』(作者不詳、一二〇〇年頃的人物か)・『金槐和歌集』(源実朝の家集、一二一三年成立)・『続古事談』(一二一九年成立か)・『新撰和歌六帖』(一二四五年以降に成立)・『古今著聞集』(一二五四年成立)・『続古今和歌集』(一二六五年成立)・『うたたね』(阿仏作、一二五一年以前に成立か)・『白川殿七百首』(一二六五年の歌会のもの)・『沙石集』(一二八三年成立)・『続門葉和歌集』(一二三〇五年成立)・『平家物語(延慶本)』(一二三〇九年以前成立)・『他阿上人集』(他阿上人(一二三七〜一九九)の家集)・『続千載和歌集』(一二三八〜一二三〇年成立)・『続現葉和歌集』(一二三三年成立、一部翌年増補)・『拾玉集』(慈円の家集、一二四六年成立)・『源平盛衰記』(鎌倉末期〜南北朝初期に成立)・『吉野拾遺』(作者不明、一二五八年以降に成立)・『新千載和歌集』(一二五九年成立)・『安撰和歌集』(一二六九年成立)・『一言抄』(一四〇

三年成立)・『新続古今和歌集』(一四三九年成立)・『正徹物語』(一四四四〜一四五二年成立か)・『草根集』(正徹(一三八一〜一四五九)の家集、室町末期頃成立か)・『卑懷集』(基綱(一四四二〜一五〇四)の家集)・『慕景集異本』(太田道灌(一四三二〜一四八六年)の家集か)・『三十二番職人歌合』(一四九四年成立)・『蓮如上人集』(蓮如上(一四一五〜一四九九)の歌集)・『七十一番職人歌合』(一五〇〇年頃成立)・『孝範集』(木戸孝範(一四三四〜一五〇二以降)の家集)・『為広集』(上冷泉為広(一四五〇〜一五二六)の家集)・『基綱集』(基綱(一四四二〜不明)の家集)・『閑塵集』(猪苗代兼載の集、一五〇三〜一五一〇年成立)・『雲玉集』(納叟馴窓の家集、一五一四年頃成立)・『通勝集』(中院通勝(一五五六〜一六一〇)の家集)・『惺窩集』(藤原惺窩(一五六一〜一六一九)の家集)・『逍遊集』(松永貞徳の家集、一六七七年成立)・『鳥之迹和歌集』(二七〇二年刊)・『梶の葉』(梶女(一七〇四〜一七二一年頃の人物)の家集)・『為村集』(冷泉為村(一七一二〜一七七四年)の家集)・『楫取魚彦歌集』(楫取魚彦(一七二三〜一七八二)の歌集)・『六帖詠草』(小沢蘆庵(一七二三〜一八〇二)作)・『鈴屋集』(本居宣長(一七三〇〜一八〇二)の家集)・『琴後集』(村田春海の歌文集、一八一三〜一八一四年以降に刊行)・『桂園一枝』(香川景樹(一七六八〜一八四三)の家集)・『八十浦之玉集』(一八二九〜天保七 year 刊)・『三草集よもぎ』(松平定信の家集、一八〇七年成立)・『浦のしほ貝』(熊谷直好(一七八二〜一八六二)の歌集)・『柿園詠草』(加納諸平(一八〇六〜一八五七)の家集)・『草径集』(大隈言道(一七九八〜一八六八)の家集)・『志濃夫廼舎歌集補遺』(橘曙覧(一八一二〜一八六八)の作品、補遺は今滋の編)

#### 近世

『太平記』より例を挙げる。

注 8 人の動作としての「行脚」は、江戸時代までの詞書に使用例が見られる。『太平記』より例を挙げる。

光厳院禪定法皇行脚事

(太平記・一二三・光厳院禪定法皇)

注9 寺社名としての「金比羅」は、江戸時代までの詞書に使用例が見られる。『檜葉和歌集』(素俊法師選、一二三七年成立)より例を挙げる。

おなじ時、ならの金毘羅が歌

(檜葉和歌集・六七五)

注10 人の動作としての「順禮」は、江戸時代までの詞書に使用例が見られる。次に『松下集』(江戸中期成立)の例を挙げる。  
…其外人あまた友なひて三塔順礼し、…

(松下集・八三八)

注11 「賣卜」と「先生」はそれぞれ江戸時代までの詞書に使用例が見られる。

君平売卜…ヨヲウキモノニ思ヒトリテツカヘズ、売卜、…

(蒙求倭歌集片仮名本・一三三)

注12 子規短歌の漢語「壁の繪」について、「壁の繪」の形では江戸時代までの詞書に使用例が見られる。

…山水の景色を壁の絵にかけるあり、章孝標詠云、雨滴膠山斷、風吹消海秋也

(百詠和歌集・二二)

注13 子規短歌の漢語「關帝廟下」は古歌に見られないが、「廟」の例は『草根集』(室町末期頃までに成立か)に見られる。

古の風をあふがんしきしまや道のひじりの廟の松ばら

(草根集・一〇五六七)

注14 子規短歌の漢語「南大門前」は古歌に見られないが、「門」の例を『撰集抄』(一二六五～一二八二年前後に成立か)に見ることができる。詞書に「朱雀門」が用いられている。

朱雀門の鬼作詩の事

(撰集抄・五二)

注15 子規短歌の漢語「鴛鴦の小衾」の形では古歌に例は見られないが、「小衾」の例は古歌に複数見られる。

ニハニタツ アサデコブスマ コヨヒダニ ツマヨシコサネ アサデコブスマ  
ル波尔多都 安佐提古夫須麻 許余比太尔 都麻余之許西祢 安佐提古夫須麻

(万葉集・三四七三)

注 16 『子規漢詩の周辺』(清水房雄 明治書院、一九九六年四月)

注 17 『子規漢詩の周辺』二六頁より抜粋した。

注 18 明治三一年の子規短歌の中に、漢詩を下敷きにした作品が見られることについては、既に先行研究で指摘されている。例え

ば岡井隆氏の『近代日本詩人選3 正岡子規』(筑摩書房、一九八二年四月)では、明治三一年での子規短歌を六つのカテゴリーに分類できるとし、その一つに「漢詩や画を下敷とした歌。」を挙げている。

また清水房雄氏の『子規漢詩の周辺』(明治書院、一九九六年四月二十日)では次の指摘がされている。二二二頁より抜粋する。引用内の( )内は私に補ったものである。

…さて、既に見て来た所のように(注 明治十六年から二八年までの子規短歌二四首の原拠に漢詩文や古歌があるこ

とを指摘している)、子規短歌の一面の特徴として、漢詩文を原拠とするもののがかなりに見当るのであるが、この傾向

は明治三十一年に到って急激に増大濃化する。…

先行研究では、子規短歌で漢詩文を下敷きにすることは、短歌革新前からも行われているが、明治三二年が最も多くなっているとの指摘がなされている。

注 19 徐前氏『漱石と子規の漢詩―対比の視点から―』(明治書院、二〇〇七年九月二十五日)に子規の漢籍の素養が短歌や俳句に影響を与えていることを例示している。引用は『漱石と子規の漢詩―対比の視点から―』二二六～二二七頁より抜粋。

注 20 引用した漢詩は、明治二八年の「漢詩稿」『子規全集第八巻 漢詩新體詩』(講談社 一九七六年七月)収録)のものであ

る。全集二〇三頁より抜粋した。

注 21 『明治文學研究（2） 正岡子規』（藤川忠治 山海堂出版、一九二七年五月） 四二一～四二二頁より抜粋した。

注 22 『明治文學研究（2） 正岡子規』 四二六頁に既に指摘されている。他の例として「天文臺」を「空はるか臺」、「郵便配達夫」を「文くばり人」を挙げている。

本章は次の論文に基づいたものである。

「正岡子規自筆『竹乃里歌』短歌の漢語について―古歌との対応を視点として―」

（東京女子大学紀要『論集』第六十五卷一号）

「正岡子規自筆短歌の語彙について―外来語を視点として―」

（二〇一三年東京女子大学日本語史研究会 研究発表）

## 第二章 欧米語について

### 第一節 はじめに

子規短歌の洋語の使用について、藤川忠治氏は「洋語を使用したといふ例は多くはない。」<sup>注1</sup>と指摘している。しかし左に子規短歌に使用されている洋語（以降欧米語）の使用された作品数を見ると、漢語の使用された作品数より少ないものの、直文や鉄幹、晶子と比べ多い結果である。

明治三十年以前	：	四首／五七六首	（当期間の0.7％）	異なり語数	四語
明治三十一年	：	十五首／六九一首	（当期間の2.2％）	異なり語数	十四語
明治三十二年	：	十二首／三六八首	（当期間の3.3％）	異なり語数	十二語
明治三十三年	：	五三首／六四五首	（当期間の8.2％）	異なり語数	三三語
明治三十四年	：	五首／八九首	（当期間の5.6％）	異なり語数	二語
明治三十五年	：	二首／六三首	（当期間の3.2％）	異なり語数	二語

短歌への欧米語の積極的使用に、子規自身の短歌革新時の短歌の独自性が見られると言える。  
以降、子規短歌の欧米語の全体を示す。

## 第二節 欧米語の使用実態

各期間の子規短歌に使用されている欧米語を、意味分野ごとに分類して挙げる。

### 明治三十年以前

服装 …… 雨ガッパ・ラシヤ

自然物 …… ヒマラヤ

区画・地名 …… ヒマラヤ

飲食 …… パン

《ヒマラヤ》がやつてきたとまけぬ也敵にうしろを見せぬふし山

(拾遺一九五・二三年)

一つ家の石のまくらのそれならで《ばん》のかはりにくれ竹の杖

(拾遺一六〇・二三三年)

いかめしく身ごしらへした《雨合羽》篠つく雨は屁とも思はず

(拾遺二一八・二四年)

君が着る《羅紗》の衣手をさをあらみな吹きすすきそこから山風

(二八二・二七年)

明治三十年以前の子規短歌に見られる欧米語は四語と語数は少ないが、後述の直文や鉄幹の場合(晶子短歌の調査対象に明治三十年以前のものは見られない)と比較すると、決して少なくない使用状況である。

## 明治三十一年

人物 … アメリカ人・キャツチャー・フランス少女

器物 … カバン・ベース・ボール・ランプ

人事 … ベースボール

動物 … カナリヤ

自然物 … エヴェレスト・ヒマラヤ

区画・地名 … エヴェレスト・おロシヤ・北インヂヤ・ヒマラヤ

飲食 … バナナ

雨乾く薄紅梅の夕日影又照り返す《カナリヤ》の籠

(四三三・三一年)

久方の《アメリカ人》のはじめにし《ベースボール》は見れど飽かぬかも

(八〇八・三一年)

足たゝば《北インヂヤ》の《ヒマラヤ》の《エヴェレスト》なる雪くはましを

(九二一・三一年)

路の邊に車とゝめて櫻花折りげに見ゆる《ふらんす》をとめ》

(一〇〇六・三一年)

明治三十一年になると、語数も欧米語で表す内容も豊かになり、子規の短歌革新の実践の影響が見られ、欧米語の積極的使用が見られる。明治三十一年が欧米語使用の大きな頂点であることから、明治三十一年時点では欧米語を積極的に使用し始める時期であったと言え、子規自身の短歌革新の宣言の実践の例がここに見られる。



明治三十年以前の子規短歌の欧米語の意味別種類は、「服装」（雨ガッパ・ラシヤ）と「自然物」（ヒマラヤ）、「飲食」（パン）の三種類であるが、明治三十一年になると意味別種類が七種類（「人物」「器物」「人事」「動物」「自然物」「地名」「飲食」と多様になる。

内容は、右の作品例の「ふらんすをとめ」「あめりか人」「ベースボール」「北インヂヤ」「ヒマラヤ」「エヴェレスト」のような、知識の上で習得したものが多い。

### 明治三二年

人物 …… ガリバー・マドンナ・ミラー・ラフェル

器物 …… バイブルの上

服装 …… シヤツ

動物 …… カナリヤ

自然物 …… エレキトル

区画・地名 …… アメリカ・エデンの園・フランス・モンゴル

《もんごる》のつはもの三人二人立ちて一人すわりて楯つくところ

（一〇二二・三二年）

わか如く晴を喜ぶ《カナリヤ》のちゝと啼きてははこべ喰ひけり

（一〇九六・三二年）

暁の祈らんとすれは花いけの白き薔薇散りぬ《バイブルの上》に

（一二〇六・三二年）

正チヤンヲ誰ヤラニ似ルト思ヒシハ《ラフェル》ガカキシ《マドンナ》ノ耶蘇

(拾遺二七一・三二年)

明治三二年の欧米語は、明治三一年よりも多く使用される傾向である。また、「エレキトル」など身近なものや、「ラフェル」「バイブル(の上)」「エデン(の園)」のような知識として得た芸術・宗教に関するものが見られる。

子規短歌の宗教・芸術関係の欧米語には、右の歌例「正チヤンヲ」や「曉の」の歌のように、事実の提示の役割をするものが見られる。また外来語の使用された作品に強い宗教的、叙情的な雰囲気を与えるものは殆ど見られない。この点は後述の鉄幹や晶子の宗教・芸術関係の欧米語使用と異なる。左に鉄幹と晶子の例を挙げる。(一)内に歌集名とそれぞれの歌集での通し番号を示す。以降同様とする。

ふところに《ハイネ》の《詩》あり泣きながら《百尺》の巖に海の月みる

(『紫』・二九四)

西にしてはわかき《ダンテ》がやさまみに一たび沁<sup>し</sup>みしおもかげの君

(『うもれ木』・四)

これや昔わかき《マリヤ》とあらはれし<sup>れい</sup>霊のわかれか白百合の花

(『うもれ木』・三五)

やれ壁に《チチアン》が名はつらかりき湧く酒がめを夕に秘めな

(『みだれ髪』・二一二)

花にそむき《ダビデ》の歌を《誦せ》むにはあまりに若き我身とぞ思ふ

(『みだれ髪』・三六八)

## 明治三三年

人物

…イギリス人・パツパポウロ・パリス少女

器物

…ガラス・ガラスの板・ガラス張り・カン・テーブル・トパツツ・ビードロ・ビードロ皿・ブリキ・  
ラムプ・ルビー

宮室

…ガラス戸・ガラス張り窓・ガラス窓・ガラスの窓

人事

…イギリス言葉

動物

…カナリヤ

自然物

…アムール

区画・地名…アムール・シンガポール・スエス・スバニア・パリ・パリス・ヒリピン・フオルモサ・フランス

飲食…カステラ・バナナ・ビール

無形…ページ

にひ年の朝日さしける《ガラス窓》の《ガラス》透影紙薦上る見ゆ

(一三六一・三三年)

日の本の陸奥の守より法の王《パツパポウロ》に贈る玉つさ

(一五二八・三三年)

格堂は《ルビー》か巴子は《トパツツ》かあるじ麓は出雲青玉

(一八二一・三三年)

二荒ノ玉ノ宮居ヲタへタル《イギリス人》ノ《イギリス言葉》

(一八三一・三三年)

明治三三年では子規短歌での欧米語使用の傾向が最も高くなる。内容を見ると、これまで「アメリカ人」「ガリバー」「ベースボール」「ふらんす」といった、海外や架空のもの、当時の子規にとって身近でないもの等が非常に多くみら

れたのが、「ガラス」「カステラ」「テーブル」「カナリヤ」等身近な題材が増えている。特に「ガラス」については、明治三二年の冬に病床に伏せたままの子規に対して、弟子達が寄贈したもので、それによつて子規が寝たまま庭や空など外を見ることができるようになったものである。この年に延べ二四語ものガラス窓を表す語（「ガラス」「ガラス張窓」等）が詠まれるのは特筆すべきことである。

また、区画・地名の表す内容も豊かになっている。これらの欧米語自体は子規自身に身近なものではないが、次の歌のように子規の知人の行動に拠つての使用の多い。

《ふらんす》の《はり》に行く繪師送らんと畫をかきにけり牛くひにけり

（一三七三・三三年）

また区画・地名以外でも、前掲の歌例（「日の本の」「にひ年の」「格堂は」の歌）のような、身近な題材や身近な出来事に起因した欧米語が増えている。

## 明治三四年

器物…ガラス

宮室…ガラス戸

春の日の雨しき降れば《ガラス戸》の曇りて見えぬ山吹の花

（拾遺三八〇・三四年）

ほととぎす今年は聞かずけだしくも窓の《ガラス》の隔てつるかも

（拾遺四一六・三四年）

## 明治三五年

器物：ガラス器

植物：チンノレヤの花

玉透の《ガラスうつは》の水清み香ひ菫の花よみかへる

(拾遺四七四・三五年)

珍ラシキ草花モガト茶博士ノ左千夫ガクレシ《チンノレヤノ花》

(拾遺四九九・三五年)

明治三四年、三五年の子規短歌の欧米語は、子規の身辺のものを表すものである。また題材(ガラス関係)の殆どが明治三三年の継続である。

## 第三節 まとめ

子規短歌での欧米語使用が積極的になるのは明治三十一年からであり、明治三三年に欧米語の使用が最も多くなる。以降の欧米語使用は減少傾向となるが、直文や鉄幹、晶子よりも短歌へ欧米語を詠む傾向が強い。次に直文、鉄幹、晶子の欧米語使用の状況を示す。

直文短歌：異なり語数	三語	作品数	三首(全一〇八八首の中の0.3%)
鉄幹短歌：初出が明治三十年以前の作品	異なり語数	一語	作品数
	一語	作品数	一首(全四四九首の中の0.2%)
初出が明治三十一年の作品	異なり語数	一語	作品数
	一語	作品数	一首(全一七四首の中の0.6%)
初出が明治三二年の作品	異なり語数	二語	作品数
	二語	作品数	二首(全一二四首の中の1.6%)

初出が明治三三年の作品	：異なり語数	八語	作品数	八首（全二三二首の中の3.4％）
初出が明治三四年の作品	：異なり語数	一語	作品数	一首（全三五八首の中の0.3％）
初出が明治三五年の作品	：異なり語数	二語	作品数	二首（全一二五首の中の1.6％）
晶子短歌：初出が明治三三年の作品	：異なり語数	一語	作品数	一首（全七〇首の中の1.4％）
初出が明治三四年の作品	：異なり語数	一語	作品数	一首（全三五五首の中の0.3％）

子規の短歌への欧米語の積極的使用も、鉄幹や晶子よりも早く開始されており、当時での欧米語の短歌への使用の面では、子規短歌は急進的な位置にあったと考えられる。また欧米語の意味分野の面でも、子規の短歌への欧米語の使用の積極性を見ることができる。直文、鉄幹、晶子の欧米語の意味分野は、人名（ダンテなど）、器物（マツチなど）、自然物（ラインの河）と地名（ウラジオストクなど）のみであるが、子規にはこのほかに、宮室（ガラス窓など）、服装（シャツ）、動物（カナリヤ）、植物（チンノレアの花）、飲食（バナナなど）、無形（ページ）がある。

子規短歌の欧米語が表す内容について、明治三十一年に広がりを見ることができ、明治三十三年になると欧米語の使用が子規の身近なものや出来事に起因したものが多くなる。明治三四年になるとさらに身近なものへと狭まってゆくのは漢語の場合と同様である。

欧米語の区画・地名が積極的に詠まれるようになるのは、明治三二と明治三十三年である。漢語の区画・地名が積極的に詠まれるようになるのが明治三十一年であることよりも遅いものである。この欧米語と漢語の違いより、初めは漢語の地名を積極的に詠み、その後で、漢語の地名の使用と並行して、洋語の地名の積極的使用が見られるようになった。

たと考えられる。

欧米語の詠まれ方について、子規短歌では事実の提示や、写実的描写の一環として使用されることが多い。鉄幹や晶子短歌の欧米語の多くが、抒情的、空想的描写の一環として使用されていることと対照的である。

## 注

注1 『明治文学研究2 正岡子規』（藤川忠治 山海堂出版 一九三三年九月）四二三頁より抜粋した。

本章は次を基にしたものである。

「正岡子規の短歌革新の実践について―外来語の使用を視点として―」

（日本近代文学会二〇一四年度春季大会研究発表レジュメ）

### 第三章 近代歌人との比較

#### 第一節 落合直文の外来語

##### 第一項 漢語について

直文短歌で漢語を使用した作品数と、漢語の異なり語数は次の通りである。

一二一首（直文短歌全一〇八八首の中の11.1%） 異なり語数 八七語

直文短歌の漢語使用は、子規短歌や鉄幹短歌、晶子短歌と比べ少ないものである。

##### 一——一 意味分野ごとの分類

使用された漢語は次の通りである。子規の場合と同様の意味分野ごとに分類する。

人物…尼・尼君・筏師・衛士・更衣・狂女・観音・小式部・師・式部・順禮・鎮守・敵・法の師・佛師・老僧・羅漢  
器物…閼伽棚の上・閼伽の水・油畫・写し繪・香炉・汽車・碁・小屏風・寫眞・朱硯・簫・錢・卒塔婆・軸・地藏・

地図・日記・古反古・反古・繪葉書・繪筆・繪卷物

服装…友禪・駒下駄・被布

宮室…閼伽井・椽・掛茶屋・瓦・國分寺・書院・濡縁・古瓦・御堂・煉瓦

人事…縁・座禪・詩・十文字・奉納・禮



動物：鸚鵡・胡蝶・鵲・鴿・蝶

植物：銀杏・黄菊・桔梗・菊・菊の若苗・紅梅の花・白菊・白菊の花・野菊・芭蕉葉・牡丹・牡丹の花

自然物：地・温泉

区画・地名：五山

時令：昨夕

飲食：麩・蜜柑

肢体：脈

数字：幾日・一里・五山・十七

色彩：紅梅の花・朱硯・白菊・白菊の花・緋威

無形：景色・座

直文短歌の人物や人工物に関する内容の漢語は「更衣」といった王朝時代を連想させるもの、「卒塔婆」など宗教関係に係っている。左に例を挙げる。（一）内は通し番号である。（以降同様とする）

渡殿を通ふ《更衣》の衣の裾に雪と亂れて散るさくらかな

（六七）

亡き人の魂の行方か古塚の《卒都婆》のかげに螢飛ぶなり

（一〇四一）

植物は銀杏、菊、桔梗、紅梅、芭蕉、牡丹と限られた種類である。左に「銀杏」の例を挙げる。

庭松を離れし月のまた更に《銀杏》のかげに立ち隠れつつ

(四三九)

直文の漢語は次の「錢」の例は見られるが、人名や日常生活で接する商いに関連したものが殆ど見られない。

中川の橋守る爺が數へゐる《錢》の音さむし夜や更けぬらむ

(二六六)

## 一——二 多字漢語

直文短歌一〇八八首に使用された漢語の字数を次に見てゆく。字数の認定は子規短歌の場合と同様である。直文短歌に見られる漢語の全異なり語数は八四語である。

一字漢語（異なり語数：十九語）

尼（3）・えにし（縁）・縁（3）・瓦・菊（8）・碁・座・師（2）・詩・簫・錢（2）・地・軸・敵（2）・蝶（7）・  
麤・脈

菊の若苗（菊若苗）・法の師（法師）

一字漢語（混種語）（異なり語数：十七語）

油繪・尼君（2）・筏士・幾日・写し繪・掛茶屋・黄菊（2）・朱硯・白菊（2）・野菊・緋威・古瓦・御堂・  
繪葉書（2）・繪筆・繪卷物

濡れ縁（濡縁）

白菊の花（2）・

二字漢語（異なり語数：三六語）

鸚鵡（2）・友禪・一里（2）・銀杏・衛士・更衣・香爐・桔梗・汽車・狂女・觀音・景色（5）・五山・胡蝶（3）・座禪・式部・十七・寫眞・順禮（2）・書院・鵲鴿（2）・地藏・地圖・鎮守・日記（2）・被布・佛師・奉納・反古・牡丹・蜜柑・老僧・羅漢・煉瓦・

閼伽の水・紅梅の花（2）・牡丹の花

二字漢語（混種語）（異なり語数：八語）

閼伽棚の上（閼伽棚上）・閼伽井（2）・小式部（3）・小屏風・駒下駄・十文字・芭蕉葉（4）・古反古

三字漢語（異なり語数：二語）

國分寺・卒塔婆

漢語の漢字数について、一字漢語と二字漢語が多く、三字漢語は「國分寺」「卒塔婆」の二語である。多字漢語や明治三一年以降の子規短歌に見られた、短歌の音数律からはみ出す漢語の使用は見られない。

## 第二項 欧米語について

欧米語を使用した作品数と、欧米語の異なり語数は次の通りである。

三首（直文短歌全一〇八八首の中の0.3%） 異なり語数 三語

使用された欧米語は次の通りである。

地名：アジア・シベリヤ・フランス

欧米語は、作品数も語数も例数が少ない。また内容も「亞細亞」「しべりや」「ふらんす」の区画・地名のみである。

立ちまよふ《亞細亞》の空の黒雲よ雨にならむか風にならむか

(一〇七〇)

黒駒に賤鞍おきて《しべりや》の雪のけしきも見まほしきかな

(二七八)

君を思ふ涙とも知れかきくらし日を《ふらんす》の雨のゆふべは

(八八九)

### 第三項 外来語のまとめ

直文短歌の外来語使用は、子規短歌と比べると少ない。

子規短歌の場合と共通しているのは、短歌に使用される漢語の中で「人物」「器物」「植物」を表すものが特に多くみられる点である。しかし「人物」「器物」「植物」に分類される漢語を見ると、直文短歌の「人物」「器物」を表す漢語は、「更衣」といった王朝時代を連想させるもの、「卒塔婆」といった仏教関係に偏っている。また「植物」は銀杏、菊、桔梗、紅梅、芭蕉、牡丹と限られた種類の植物であり、これらの植物を複数の作品で使用している。

子規短歌の漢語も、「少將の君」や「鐘樓」など王朝を想起させるものや仏教関係の内容を見ることができが偏りはない。子規短歌には「伯樂」「納豆賣」といった人名や商人名や、「一輪挿し」「新聞」といった子規の持ち物も多く

見ることができる。また「植物」については、鐵線や木瓜など多くの種類が確認できる。

直文短歌に使用された欧米語は、「地名」(アジア・シベリヤ・フランス)である。使用程度と欧米語で表す語の内容は、共に少ないと言える。

## 第二節 与謝野鉄幹の外来語

### 第一項 漢語について

鉄幹短歌の漢語を使用した作品数と語数は次の通りである。調査対象の短歌を初出年<sup>注1</sup>に基づき、子規短歌と同様の六期に分ける。

明治三十年以前	五九首 (当期間全四四九首の中の13.1%)	異なり語数	五三語
明治三十一年	四九首 (当期間全一七四首の中の28.2%)	異なり語数	四八語
明治三十二年	五二首 (当期間全一二四首の中の41.9%)	異なり語数	六三語
明治三十三年	九一首 (当期間全二二三首の中の39.2%)	異なり語数	九五語
明治三十四年	一六九首 (当期間全三五八首の中の47.2%)	異なり語数	一五三語
明治三十五年	六三首 (当期間全一二五首の中の50.4%)	異なり語数	七二語

鉄幹の漢語の使用傾向は当時の中で高いものであったと考えられる。また漢語使用は大きく増加し続ける傾向である。

二—— 意味分野ごとの分類

使用された漢語は次の通りである。明治三十年以前に使用例が見られるものを太字にしている。

人物…尼・尼君・**阿弥陀仏**・**優婆塞**・妖・**餓鬼**・妓・客・玉瀾・義和団・郡守・王<sup>ワキ</sup>等・御僧・小督・金剛神・

三十男・**師**・始皇・詩人・七尺男・十六羅漢・上人・釈迦・釈迦牟尼・書生・神・尋常詩家・杉山書<sup>シキ</sup>記生・

禪師・僧・総督・賊・祖師・道士・陀羅尼・達磨・中尉・帝・敵・敵中・天狗・二十五菩薩・二尊・坊主・

博士・翡翠・**武士**・不動・**菩薩**・法師・魔・御僧・弥陀・御弟子・猛者・文殊・薬師・夜叉・老師・羅漢・

劉坤一・劉朗・劉玲・令・靈・王・王朗・若尼・繪師・怨女・和尚

器物…歌反古・おでん屋台・香・鞆鼓・牛車・**汽車**・金・供物・懷紙・劍・碁・古刀・珊瑚・山砲・詩集・紙燭・集・

十五弦・詩筆・笙・唱歌集・寫眞・書・燭・水車・水車が小屋・聖書・錢・卒塔婆・担架・軸・茶碗・敵砲・

手燭・鉄の矛・日記・馬<sup>ウマ</sup>盥・破裂弾・琵琶・譜・蒲團・反古・野砲・瑠璃・網蚊帳・繪・繪扇・繪絹・繪皿・

繪の具・繪筆・画枠

服装…學校服・**袈裟**・服・帽

宮室…奥の院・神樂堂・片櫓・瓦・後庭・小櫓・山門・堂・竹櫓・塔・長城・茶屋・東門・繞堂・碑・御堂・御廊・

門・廊・螺鈿・欄・樓

人事…意氣・因業・引接・有縁・運命・**榮華**・縁・艶・追分上手・開眼・項羽本紀・経・行・興・曲・句・功德・

紅蓮・懷古・芸・劇詩・快樂・才・草・三味・死・詩・浄土・呪・塾・呪詛・趣味・呪文・信・**新体**・宿世・

聖・禪・大学・題目・道心・謫居・多弁・樽念仏・定・智慧・点・奈落・任・寢相・念仏・派・破・花の宴・  
悲歌・賦・封じ・**風流**・**本意**・法華經・菩提・魔障・御經・御座・御題・微妙<sup>(ミメイ)</sup>・微妙<sup>(ミメウ)</sup>・**文字**・瘦せ様・理想・  
会釈

動物：鸚鵡・鷺鳥・孔雀・胡蝶・獅子・大蛇・蝶・蝶の片羽・天龍・龍・栗鼠・驢・驢馬

植物：銀杏の老木・桔梗・菊・菊の露・菊の花・芥子・紅梅・山茶花・紫竹・石楠・芍薬・白菊・白菊の花・水仙・

竹枝・丁子・沈・南天・白芙蓉・彼岸桜・葡萄・芙蓉・木瓜・牡丹・木犀・椰子・蘭・蓮・連翹・槐樹

自然物：地・地上・牧野・廬山

区画・地名：百濟野・黄河・吳・高麗・高麗野・崑崙・支那・秦・楚・蘇州・太沽・通州・天津・平壤・北京・名所・

蒙古・遼東・樓蘭・廬山・威海衛

時令：応政・元日・古代・十五日・太古・盆

飲食：毒・屠蘇・葡萄・林檎

肢体：有髮・鬢

数字：一里・一騎・一貫五百・一斗・五彩・五十・五十里・五百・五百年・五百里・五六尺・三十六・三十男・

三千年・三層・三頭・三椀・四十九・四十里・七尺・七尺男・十九・十五・十五弦・十五日・十二宮・十二欄・

十八・十六羅漢・千株・千首・七百里・二十一吉・二十九・二十五・二十五菩薩・二十四稜・二十八・

二十万年・二十里・二十六・二尺・二升・二世の夫・弑千尺・二尊・二万年・八里・半・百・百尺・百首・

百二十里・三十文字・四疊半・六里

色彩：臙脂・臙脂色・金・金の間・黄色無能・紅梅・五彩・紺青・紫金・白菊・白菊の花・七色瓔珞・白馬・白芙蓉・

瑠璃

無形：氣色・尺・逍遙・地上・不朽・風情・無用・例

名詞以外：愛す・愛らし・優なり・思ひ屈す・奇なり・興がる・期す・讚ず・趣有り・誦す・招ず・対する・点ず・

毒味す・封じ来・封ず・奉ず・藹たし・和す・怨ず

区画・地名について、「高麗野」や「百濟野」といったアジアの地名が詠まれることが子規よりも早く見られ、またその内容も多い。

なか／＼に、歌よむ旅も、つらかりき。《高麗野》の嵐、《百濟野》の雨。

『東西南北』二二〇

植物について、明治三十年以前では、鉄幹の方が子規と比べて漢語で表される植物の種類が僅かに多い。また「椰子」のように子規短歌に見られない種類も見られる。

むら雨の、露ちる《椰子》の、下かげに、鎧ほす夜や、涼しかるらむ。

『東西南北』一九一

人物を表す漢語は「上人」などのやや宗教家を表すものに偏っている。

月ごろを《上人》なが／＼定を出でず山のなつめはうみはてにけり

『鉄幹子』七

器物についても宗教関係（「聖書」など）や文芸関係（「詩集」など）の偏りがあり、加えて戦関係の内（「山砲」「野



砲」などに偏りがある。

小屋ごとに豆の花這はせ牛飼ひてひろき牧野に《聖書》よまん願ひ

『鉄幹子』二二六

おく霜をはらへばいまだくれなゐの血しほ手に染む《山砲》《野砲》

『鉄幹子』二六八

《詩集》手に豆の葉ならす人ふたり紀伊の霞は和泉より濃き

『新派和歌太陽』三九

このように鉄幹は、子規よりも早い時期に様々な内容の漢語を使用している。鉄幹の漢語には、子規に多かった身辺関連の商人などを表すものが見られず、「銭」といった日常生活で接する商いに関する内容も少ない。また、近代的な乗り物も非常に少なく「汽車」のみである。

世にまさばともにみやじま吉備津よとうれしき《汽車》の旅路ならまし

『鉄幹子』一七二

鉄幹に見られる、宗教・文芸関係の漢語には、感情を含んだ表現と共に使用される例が多く見られる。これは晶子短歌と共通しているが、子規短歌とは対照的である。例えば「縁」について見てゆく。「縁」を詠んだ作品は、情緒の強い雰囲気のものが多く、鉄幹と晶子は、作品に強い情緒性を持たせる「縁」を多く使用している。鉄幹と子規、直文、晶子の「縁」の出現数と使用例は次の通りである。

鉄幹：出現数 八

くやをの村われと幾生の《ゑにし》ありてこの夕風の身にはしむらん

『鉄幹子』二九

子規…出現数 一

同じ樹の陰にやとるもさきの世の《えにし》と思へはをしき別れよ

(拾遺九二・二一年)

直文…出現数 一

しばしとて腰かけたるも《えにし》なり歌しるし置かむ野の一つ石

(五六)

晶子…出現数 七

松かげにまたも相見る君とわれ《ゑにし》の神をにくしとおぼすな

(『みだれ髪』三二五)

## 二―一―二 多字漢語

鉄幹短歌の漢語の字数について、字数ごとにまとめる。『東西南北』『天地玄黄』『鉄幹子』『紫』『新派和歌大要』全  
ての作品を対象にして、初出の年ごとにまとめる。

## 明治三十年以前

一字漢語(異なり語数…十一語)

妖・瓦・菊・句・師(2)・詩(3)・笙・定・敵・蝶(5)・龍・絵

菊の露(菊露)・菊の花(菊花・2)・

一字漢語(混種語)(異なり語数…二語)

えにし(縁・3)

白菊の花（白菊花）

二字漢語（異なり語数：三十語）

一騎・一斗（2）・榮華・応制・餓鬼・汽車（2）・袈裟（2）・後庭・崑崙・上人・新体・千株・千首・道士・長城・  
天狗・二升・八里・琵琶（3）・風流・武士・蒲団・本意・反古・菩薩・牡丹・文字・椰子・驢馬（3）

二字漢語（混種語）（異なり語数：二語）

百濟野（2）・高麗野

三字漢語（異なり語数：四語）

優婆塞・五百年・十五絃・威海衛

四字漢語（異なり語数：一語）

阿弥陀仏

明治三十年以前の鉄幹短歌の漢語に多字漢語（阿弥陀仏）が次の作品に見られる。

《阿弥陀仏》と、十こゑ申さむ。亡き人を、しのぶ胸にも、ほとけ宿れり。

右の例の通り、この期間に使用される多字漢語は音数律に合ったものである。

（天地玄黄・二〇）

## 明治三一年

一字漢語（異なり語数…十五語）

菊（6）・客・劍・師・詩（2）・秦・禪・楚・僧・蝶（2）・碑・服・蘭・驢（3）・絵

一字漢語（混種語）（異なり語数…四語）

王<sup>（き）</sup>等・小督・白菊（2）・茶屋

二字漢語（異なり語数…二三語）

鸚鵡（2）・汽車・懷古・郡守・紅梅・胡蝶・高麗・三頭・三椀・紙燭・芍藥・書生・水仙・茶碗・天狗・百尺・  
百首・反古（3）・牡丹（3）・弥陀・無用・木犀・廬山・驢馬（2）

二字漢語（混種語）（異なり語数…一語）

彼岸桜

三字漢語（異なり語数…三語）

校服・山茶花（2）・三十六

四字漢語（異なり語数…一語）

二十四陵

この期間も「二十四稜」のような多字漢語の使用が見られるが、音数律に合ったものである。

なきのちの玉の床とて何かせん《二十四陵》はたゞ雨と風

(新派和歌大要・二五七)

## 明治三二年

一字漢語(異なり語数…十六語)

曲・劍・詩(2)・尺・燭・地(2)・蝶(2)・任・破・半・門・蘭・例・蓮・驢・絵

奥の院(奥院)

一字漢語(混種語)(異なり語数…五語)

おでん屋台・詩筆・白菊・御座(2)・若尼(2)

二字漢語(異なり語数…三四語)

因業・玉瀾・孔雀・懷紙・元日・袈裟・古刀・三味・山門・獅子・詩人・七尺(2)・釈迦・石楠(2)・水車・

総督・太古・大蛇・達摩(2)・東門・那落・二尊・葡萄・芙蓉(2)・木瓜・牡丹(5)・弥陀・劉玲・林檎・遼東・

楼蘭・王朗

鴨脚の老木

二字漢語(混種語)(異なり語数…二語)

三十男・四疊半

三字漢語（異なり語数…五語）

五六尺・十二宮・卒塔婆・二十五・白芙蓉

四字漢語（異なり語数…一語）

一貫五百

五字漢語（異なり語数…一語）

二十五菩薩

明治三二年では多字漢語は次の二例が見られる。

新坂しんさかの白馬しろうまうまし雪の日を《一貫五百》わが願ひ足る

ひるねにはあまりに伽の多きかな弥陀釈迦二尊《二十五菩薩》

この期間の多字漢語も音数律に合ったものである。

（鉄幹子・七〇）  
（鉄幹子・一二〇）

### 明治三三年

一字漢語（異なり語数…十八語）

香・妓（２）・興・才（２）・師（２）・詩（３）・集・銭（３）・地（２）・蝶・毒・派・百・蘭・王・画（２）

花の宴ゐ（花宴）・魔まの手（魔手）

一字漢語（混種語）（異なり語数…十語）

尼君・忽にし（縁）・敵中・寢相・御題・繪筆

誦す（2）・封じく・封ず・怨ず

二字漢語（異なり語数…四六語）

一里・鶯鳥・黃河・五十・崑崙・珊瑚（2）・山砲・支那（4）・釈迦（3）・呪文・聖書（2）・禪師・太沽・大学・担架・智慧・敵砲・天津・天龍・屠蘇・南天・日記・坊主・博士・白馬・翡翠（3）・不朽・葡萄・不動・芙蓉（6）・北京・牧野・反古・牡丹・法師・蒙古・夜叉・野砲・羅漢・劉朗・栗鼠・林檎・和尚

二世の夫

二字漢語（混種語）（異なり語数…五語）

三十男・七尺男・三十文字・御弟子

毒味す

三字漢語（異なり語数…八語）

義和団・五百里・四十里・十五日・唱歌集・二十八（2）・白芙蓉・破裂彈

三字漢語（混種語）（異なり語数…二語）

杉山書記生・劉坤一

四字漢語（異なり語数：六語）

黄色無能（2）・十六羅漢・釈迦牟尼・尋常詩家・二十一吉・百二十里（2）

明治三三年になると音数律に合わない多字漢語の使用が見られる。次の例では七音の漢語を三句に入れている。

泣いて叫ぶ《黄色無能》、かうしよくむのう《黄色無能》、アジア久しく語る児の鳴き

（鉄幹子・二六七）

## 明治三四年

一字漢語（異なり語数：三五語）

尼（2）・艶・菊（4）・行・興・金（2）・呉・才（4）・草（2）・師（7）・詩（二）・集・呪・塾・信・聖（3）・

僧（5）・賊（2）・堂・塔（2）・地（3）・軸・沈（2）・蝶（5）・点・鬢・譜（2）・帽（2）・魔・廊・欄（2）・

蘭・楼（3）・絵（4）

金の間（金間・2）・蝶の片羽（蝶片羽）・綯の具（3）

一字漢語（混種語）（異なり語数：二三語）

尼君・ゑにし（縁）・神楽堂（2）・片椽・小椽（2）・しら菊（白菊・2）・竹椽（2）・馬盥（3）・封じ（2）・

御経（2）・御僧（2）・御堂（2）・痩せやう（瘦様・2）・網蚊帳・絵絹（4）・絵皿

優なる（優なり・2）・奇なり・興がる・期せ（期す）・誦せ／ずする（誦す・2）・



奉じ(奉ず)・臍<sup>はら</sup>たき(臍<sup>はら</sup>たし)

二字漢語(異なり語数…七一語)

鸚鵡・意気・因接・有縁・有髪・運命・ゑんじ(臍脂)・牛車(2)・桔梗(8)・孔雀(2)・功德・供物・紅蓮・袈裟(2)・芥子・快樂・紅梅(2)・五彩(3)・御僧・崑崙・三層・始皇・紫金・詩集(2)・紙燭・紫竹(2)・十九(3)・十八・浄土・写真・趣味・宿世(4)・逍遙(2)・蘇州・題目・達磨・中尉・地上・丁子・智慧(3)・通州・日記(2)・二尺・繞堂・博士(2)・悲歌・翡翠・風情・不動・芙蓉(4)・平壤・北京・反古(2)・菩提(2)・牡丹(7)・微妙(3)・名所・木犀(2)・文字・文殊・老師(2)・螺鈿(2)・理想・瑠璃・連翹・驢馬・絵師・会釈・槐樹(3)

水車が小屋(水車小屋・2)

二字漢語(混種語)(異なり語数…六語)

歌反古・臍脂色・樽念仏・七色瓔珞・七百里・御弟子(2)

三字漢語(異なり語数…十二語)

五十里・五千里・金剛神(2)・三十六・四十九・十二欄・陀羅尼・二十九・二十五・二十里・二十六・二万年

四字漢語(異なり語数…三語)

項羽本紀・二十万年・百二十里(2)

明治三四年では作品数が増え、同時に漢語使用の作品数も大きく増加している。短歌に使用される漢語の異なり語数も合わせて増加している。ただし多字漢語の語数の増加は見られない。

また四例見られる多字漢語は、次の歌例のように音数律に合った用いられ方がされている。

秋かぜに胸いたき子は一人ならず《百二十里》を今おとづれん

『鉄幹子』・三〇七

酒をあげて地に問ふ誰か悲歌<sup>ひか</sup>の友ぞ《二十万年》この酒冷えぬ

『紫』・八

年立つ日そは誰なりし吉備の塾に《項羽本紀》を声たかく読みし

『紫』・六七

かへるさの《百二十里》は寒かりき箱根の雪のそののみか君

『紫』・九五

## 明治三五年

一字漢語（異なり語数：二七語）

尼・香・経・金・芸・剣・碁・才（2）・師・詩（8）・書・神・聖・銭・堂・塔・地（4）・帝・蝶・点・鬢・譜・

賦・盆・令・霊（2）

一字漢語（混種語）（異なり語数：十三語）

ゑにし（縁・3）・手燭・御題・御廊・画枠

思ひ屈す・興がる・讃ず・趣あり・招ず・点ず・封ず・和す

二字漢語（異なり語数…二六語）

一里・開眼・鞆鼓・鶯鳥・劇詩・紅梅（2）・古代（2）・五百・紺青・十五・呪詛・祖師・道心・謫居・多弁・達磨・竹枝・日記・念仏・菩薩・菩提・牡丹（2）・魔障・猛者・薬師・六里・怨女

二字漢語（混種語）（異なり語数…一語）

御弟子

三字漢語（異なり語数…四語）

三千年・二十六・二千尺・法華經

四字漢語（異なり語数…一語）

二十万年

明治三五年でも多字漢語が見られるが、次の例の通り音数律に合ったものである。

君を追ひて《二十万年》こゝに見るわびて瘦せては稀にこゝに見る

（『うもれ木』十二）

子規短歌での多字漢語では、多くの漢語が詠まれた時期である明治三一年から明治三三年のものの中には音数律に合わないものが見られる。しかし鉄幹短歌では明治三二年のみに見られ、明治三四年のような漢語を短歌に詠む傾向が高い時期でも、音数律から外れるような漢語の使用をほとんど行っていない。

また多字漢語の内容であるが、「二十一吉」といった数字や「十六羅漢」といった仏教関係や数字を用いたものが多い。この特徴は後述の晶子短歌と共通している。

## 第二項 欧米語について

鉄幹短歌で欧米語を使用した作品数と語数は次の通りである。

明治三十年以前	…	一首 (当期間全四四九首の中の0.2%)	異なり語数	一語
明治三十一年	…	一首 (当期間全一七四首の中の0.6%)	異なり語数	一語
明治三十二年	…	二首 (当期間全一二四首の中の1.6%)	異なり語数	二語
明治三十三年	…	八首 (当期間全二三二首の中の3.4%)	異なり語数	八語
明治三十四年	…	一首 (当期間全三五八首の中の0.3%)	異なり語数	一語
明治三十五年	…	二首 (当期間全一二五首の中の1.6%)	異なり語数	二語

落合直文と比べると比較的多い使用といえるが、子規と比べると少ない。

鉄幹が欧米語を積極的に詠み始めるのは、明治三十三年からである。欧米語の使用は子規よりもやや遅れている。

鉄幹短歌に使用された欧米語は次の通りである。

人物 … ダンテ・ハイネ・マリア  
 器物 … ジャミット・マツチ

自然物 ……ラインの河

区画・地名…アジア・ウラジホストク・シカゴ・シベリア・スエズ・ドイツ・フランス・ラインの河・ロシア

欧米語で表す内容も、子規短歌の場合ほど豊富ではないが、「らいんの河」や「蘇士」といった区画・地名や、「ハイン」など「芸術・宗教関連の語が使われている。漢語の場合と同様に、芸術・宗教関連の洋語が感情を含んだ表現を共に見られる例が多い。

おもへきみ霜をおぼゆる秋かぜに《蘇士》<sup>すえす</sup>をこえて更に西する

『鉄幹子』二八一

人ふたりそれいつの春酒を載せて《らいんの河》に長き歌成らむ

『紫』二四五

ふところに《ハイン》の詩あり泣きながら百尺の巖に海の月みる

『紫』二九四

### 第三項 外来語のまとめ

短歌への漢語使用は、明治三十年以前から見られ、漢語の内容も同時期の子規よりも豊富である。子規よりも漢語の短歌への積極的使用が早く開始されたと言える。

人物と器物の漢語の内容は、宗教的なもの（阿弥陀仏・聖書など）と芸術・文芸に関するもの（詩人・絵筆など）が多く見られる。また器物では武器を表すもの（野砲など）も複数見られる。武器を表すものは、子規では「銃」のみであり、直文と晶子には例が見られない。

子規短歌での多字漢語では、多くの漢語が詠まれた時期である明治三十一年から明治三十三年のものの中には音数律に合わないものが見られる。しかし鉄幹短歌では明治三二年のみに見られ、明治三四年のような漢語を短歌に詠む傾向が高い時期でも、音数律から外れるような漢語の使用をほとんど行っていない。

また多字漢語の内容であるが、「二十一吉」といった数字や「十六羅漢」といった仏教関係や数字を用いたものが多い。この特徴は後述の晶子短歌と共通している。

短歌への欧米語の使用は、直文や晶子よりも多く使用しているが、短歌への洋語の積極的な使用は子規よりも遅く、内容も限られている。

鉄幹の漢語や欧米語、特に宗教的なものや芸術・文芸的なものは、感情を含んだ表現と共に使用されることが多く、抒情的、空想的描写の一環として使用されており、子規の場合と対照的である。

### 第三節 与謝野晶子の外来語

#### 第一項 漢語について

晶子短歌の漢語を使用した作品数と語数は次の通りである。鉄幹の場合と同様に初出年ごとに挙げている。

明治三十三年…	二二首	(当期間全七〇首の中の 31.4 %)	異なり語数	六七語
明治三十四年…	一四三首	(当期間全三五五首の中の 40.3 %)	異なり語数	一〇一語
明治三十五年…	十三首	(当期間全十八首の中の 72.2 %)	異なり語数	十五語

短歌への漢語の使用は子規よりも多いが、調査対象の作品数が少なく、作品数や異なり語数は少ない。

### 三——意味分野ごとの分類

使用された漢語は次の通りである。

人物…尼・有心者・作者・師・詩人・僧・二十五菩薩・弁財天・魔・魔神・魔の手・御僧・弥勒・盧舍那佛・繪師・

#### 画工

器物…衣桁・香・金糸・供・供物・小屏風・胡粉・詩集・集・十三弦・十字架・聖書・袖屏風・帳・二十五弦・日記・琵琶・白檀・反古・卷繪・絹蚊帳・繪・繪の具・繪日傘・繪筆

服装…段だら染め・庭下駄

宮室…椽・奥の院・伽藍・庫裏・層塔・堂・御堂・欄

人事…縁・経・興・曲・紅蓮・果敢・下界・懸想・結願・下品・快樂・源氏・才・讚嘆・詩・詩歌・緇素別・上品・

定離・趣味・真善美・神秘・宿世・秀才・聖歌・智慧・智慧有り顔・拍子・無才・法華經・枕經・御經・御句・

微妙・文字・理想

動物…揚羽蝶・胡蝶・小蝶・蝶

植物…薄色牡丹・海棠・菊尽し・紅梅・三本樹・秋海棠・白菊・白菊の花・白桔梗・紫苑・梅花・貝多羅葉・白芙蓉・

葡萄・不斷の花・芙蓉・紅芙蓉・牡丹・木蓮・木蓮の花

自然物…地・巫山

区画・地名…五山・巫山

時令…逢魔が時・太古・通夜

飲食…毒・蜜

肢体…尼削ぎ・血の気・智慧有り顔・鬢・御相

数字…一里・九尺・五山・五十里・五尺・五枚・三尺・三本樹・三里・四季・四十八寺・七尺・十九・十三弦・十里・

二字・二十五弦・二十五菩薩・二十七段・二尺・二百里・二万年・百三十里・百二十里・百里

色彩…臙脂・臙脂色・金糸・紅梅・金色・紺青・白菊・白菊の花・白桔梗・白芙蓉・緋鯉・紅芙蓉

無形…永劫・自在・寸・不滅・無垢

名詞以外…要無し・興有り・興がる・誦す・奉ず・用無し

晶子短歌の漢語は「袖屏風」や「供物」「尼」など王朝時代を想起させるものや宗教関係、「詩」など文芸的なものの内容に偏っている。

人の里の残り香きけの《袖屏風》《供物》奉じの旅に用なき

『新派和歌大要』八)

紅梅にそぞろゆきたる京の山叔母の《尼》すむ寺は訪はざりし

『みだれ髪』二六八)

ここに三とせ人の名を見ずその《詩》よます過すはよわきよわき心なり

『みだれ髪』三三五)



晶子短歌での人物と器物を表す漢語は、鉄幹短歌の漢語で見られる宗教的、文芸的なものへの偏りが、より明確なものとなっている

また鉄幹短歌の漢語と重複する例が多く見られることも、特徴の一つである。晶子短歌の漢語の中で、鉄幹短歌の漢語と重複している異なり語数は次の通りである

**鉄幹短歌と重複している漢語…六七語** （晶子短歌の漢語全一五九語の42.1%）

鉄幹短歌との重複の多さは、次の子規短歌と直文短歌の漢語との重複の異なり語数と比べると顕著である。

**子規短歌と重複している漢語…二六語** （晶子短歌の漢語全一五九語の16.4%）

**直文短歌と重複している漢語…十八語** （晶子短歌の漢語全一五九語の11.3%）

晶子短歌の漢語が鉄幹短歌と重複しているものの多さは、他の三者の場合と比較しても明らかである。

子規短歌の漢語の他の歌人との重複は次の通りである。

直文短歌の漢語と重複するものは三一語（子規短歌の漢語全六一〇語の5.1%）

鉄幹短歌の漢語と重複するものは六九語（子規短歌の漢語全六一〇語の11.3%）

晶子短歌の漢語と重複するものは二六語（子規短歌の漢語全六一〇語の4.3%）

直文短歌の漢語の他の歌人との重複は次の通りである。

子規短歌の漢語と重複するものは三〇語（直文短歌の漢語全八七語の35.3%）

鉄幹短歌の漢語と重複するものは二八語（直文短歌の漢語全八七語の32.9%）

晶子短歌の漢語と重複するものは十八語（直文短歌の漢語全八七語の21.8%）

鉄幹短歌の漢語の他の歌人との重複は次の通りである。

子規短歌の漢語と重複するものは六八語（鉄幹短歌の漢語全三八七語の17.98%）

直文短歌の漢語と重複するものは二八語（鉄幹短歌の漢語全三八七語の7.4%）

晶子短歌の漢語と重複するものは六七語（鉄幹短歌の漢語全三八七語の17.7%）

晶子短歌の漢語の中で鉄幹短歌の漢語と重複しているものの例の一部挙げる。

人物：尼・師・詩人・僧・二十五菩薩・魔・御僧・繪師

器物：香・供物・詩集・集・聖書・日記・琵琶・反古・紹蚊帳・繪・繪の具・繪筆

晶子短歌に使用された漢語の初出年を比較すると、晶子よりも鉄幹が先に使用した漢語の異なり語数は三一語であり、初出が同年であるものは三〇語である。晶子短歌の漢語が鉄幹短歌の漢語との重複が多く見られるのは、同派の先輩である鉄幹の影響を受けて漢語を使用した為ではないかと考えられる。

鉄幹と重複した漢語の初出年を抄出して、次頁の表にまとめる。

		鉄幹	晶子
人物	尼	34年	34年
	師	30年以前	33年
	詩人	32年	34年
	僧	31年	34年
	二十五菩薩	32年	34年
	魔	33年	33年
	御僧	34年	34年
	繪師	34年	34年
器物	香	33年	33年
	供物	34年	34年
	詩集	34年	33年
	集	33年	33年
	聖書	33年	34年
	日記	33年	34年
	琵琶	30年以前	33年
	反古	30年以前	33年
	紹蚊帳	34年	33年
	繪	30年以前	33年
	繪の具	34年	33年
	繪筆	33年	33年

### 三――二 多字漢語

晶子短歌の漢語の字数について、字数ごとにまとめる。『みだれ髪』と『新派和歌大要』に収録されている晶子短歌を初出の年で分類し、漢語の字数ごとに次にまとめる。

### 明治三三年

一字漢語（異なり語数：八語）

香・才・詩・師（2）・毒・魔・蜜・絵

一字漢語（混種語）（異なり語数…六語）

白菊・枕<sup>まくらぎやう</sup>経<sup>みだう</sup>・御堂・多<sup>おほ</sup>にし（縁）

白菊の花（白菊花）・血の氣（血氣）

誦<sup>よみ</sup>せ（誦す）

二字漢語（異なり語数…七語）

胡蝶・作者・詩集・白檀<sup>びやくだん</sup>・反古<sup>ほんこ</sup>・無垢・文字

三字漢語（異なり語数…一語）

法華經

四字漢語

百二十里

明治三三年での晶子短歌の作品数は多くないものであり、漢語の語数も少なくなっている。その中で多字漢語「百二十里」が見られるが、音数律に当てはまるものである。

さびしさに《百二十里》をそぞろ来ぬと云ふ人あらばあらず如何ならむ

（みだれ髪・九三）

明治三四年

一字漢語

尼・經(7)・興・曲・供・才・師・詩・集(3)・寸・僧(7)・堂(3)・帳・蝶(2)・鬢(4)・魔(3)・欄・  
画

一字漢語(混種語)

揚羽蝶・尼削ぎ・忽にし(縁・6)・菊尽し・小蝶・段だら染・緋鯉・魔神・巻絵・御経・御句・御相(2)・

御僧・御堂・網蚊帳・画工・絵日傘・絵筆

逢魔が時・奥の院・血の氣・魔の手・絵の具(3)

要無し・興有り・興がる・誦す(3)・奉ず・用無し

二字漢語

永劫・衣桁・一里・海棠(4)・伽藍・金糸・九尺・供物・庫裏・紅蓮・下界・懸想・結願・下品・快樂・源氏・  
紅梅(4)・五山・五尺(2)・胡粉・五枚・金色・紺青・三尺(2)・讚嘆・三里・四季・自在・詩人・七尺・  
十九・十里・上品・定離・趣味(2)・紫苑・神秘・宿世・秀才・聖歌・聖書(2)・層塔・太古・智慧・通夜・日記・  
二字・二尺(2)・梅花・琵琶・拍子・百里・巫山・無才・葡萄・不滅・芙蓉(3)・牡丹(7)・美妙・弥勒・木蓮・  
文字(2)・理想(2)・絵師(4)・臘脂(2)

二字漢語（混種語）

薄色牡丹・小屏風・三本樹・白桔梗（2）・袖屏風・智慧有り顔・庭下駄・紅芙蓉・臙脂色  
木蓮の花（木蓮花）

三字漢語

有心者・五十里（3）・緇素別・十三絃・十字架・真善美・二百里・二万年

四字漢語（異なり語数：六語）

四十八寺・二十五絃・二十七段・貝多羅葉・百三十里・盧遮那仏

五字漢語

二十五菩薩

明治三四年での晶子短歌は作品数が多く、また短歌に漢語を詠み込む傾向が前年よりも高くなっている。この増加に伴い使用される漢語の語数も多く見られ、「四十八寺」「二十五菩薩」といった多字漢語も複数見られるようになる。

《四十八寺》そのひと寺の鐘なりぬ今し江の北雨雲ひくき

『みだれ髪』一四二

## 明治三五年

一字漢語

椽・興・才・僧・地・蝶・欄

二字漢語

果敢・詩歌・臙脂

二字漢語（混種語）

紅芙蓉・臙脂色

不斷の花

三字漢語（異なり語数…三語）

秋海棠・白芙蓉・弁才天

明治三五年の晶子短歌は作品数が少なく、漢語使用の傾向は高いが、漢語使用の作品数自体は少ない。その為、当年の漢語の語数が少なく、多字漢語の使用も見られない。

晶子短歌で使用された多字漢語の異なり語数は八語であり、鉄幹が十二語であったことから、多字漢語の使用頻度に鉄幹との間に大きな差は見られないと言える。子規短歌に使用された多字漢語の異なり語数は三十語であり、鉄幹

と晶子の場合よりも多くの例が確認できるが、これは調査対象の作品数が鉄幹と晶子の場合よりも多いことによるものであると考えられる。

晶子短歌の多字漢語を見ると、「二十五弦」といった数字を使用したものが非常に多い。「盧舎那仏」といった仏教に関するものと合わせると、多字漢語の殆ど（数字でも仏教関係の語でないものは「貝多羅葉」のみである）を占めている。この多字漢語の内容の特徴は鉄幹の場合と共通している。

## 第二項 欧米語について

晶子短歌の欧米語を使用した作品数と欧米語の異なり語数は次の通りである。

明治三三年	：	一首	（当期間全七〇首の中の1.4％）	異なり語数	一語
明治三四年	：	一首	（当期間全三五五首の中の0.3％）	異なり語数	一語
明治三五年	：	例なし			

使用された欧米語は次の二語である。

人物：ダビデ・チチアン

やれ壁に《チチアン》が名はつらかりき湧く酒がめを夕に秘めな

『みだれ髪』二二二

花にそむき《ダビデ》の歌を誦せむにはあまりに若き我身とぞ思ふ

『みだれ髪』三六八



晶子短歌では欧米語の使用は殆ど見られない。「聖歌」や「聖書」など欧米に由来すると考えられる語の使用は僅かに見られるが、漢語での表現である。

何となきただ一ひらの雲に見ぬみちびきさとし《聖歌<sup>せい</sup>》のほひ

『みだれ髪』二二三

淵の水になげし《聖書》を又もひろひ空仰<sup>そ</sup>ぎ泣くわれまどひの子

『みだれ髪』二二五

また晶子短歌の欧米語の意味分野は人物のみであり、その内容も宗教的、文芸的なものであり、作品に文芸的・宗教的な雰囲気強く現れている。子規短歌にも「パツパポウロ」といった宗教家の欧米人名の例が見られるが、宗教的な雰囲気は、晶子短歌よりも弱い。

日の本の陸奥の守より法の王《パツパポウロ》に贈る玉つさ

(一五二八・三三年)

### 第三項 外来語のまとめ

晶子短歌では漢語の使用が多く見られるが、洋語の使用は殆ど見られない。

使用された漢語には鉄幹の影響が強く見られ、鉄幹短歌の漢語に見られた宗教関係(僧・十字架など)、芸術・文芸関係(繪師・巻繪など)のものへの偏りを、さらに大きくした内容である。ただし、日常生活で見られる商いに関するもの、武器を表すもの、近代文明の機器を表す外来語使用は見られない。

多字漢語の面でも鉄幹短歌の多字漢語の特徴と一致している。晶子短歌でも「二十五弦」といった数字を使用したものが非常に多く、「盧舍那仏」といった仏教に関するものと合わせると、多字漢語の殆ど(数字でも仏教関係の語で

ないものは「貝多羅葉」のみである）を占めている。

欧米語は、使用例も内容も少なく、意味分野では人物のみである。

晶子の外来語でも鉄幹と同様に、特に宗教的なものや芸術・文芸的なものは、感情を含んだ表現と共に使用されることが多く、抒情的、空想的描写の一環として使用されている。

## 注

注1 初出年は、勉強出版版『鉄幹晶子全集』の脚注を参考にした。

本章は次を基にしたものである。

「正岡子規の短歌革新の実践について―外来語の使用を視点として―」

（日本近代文学会二〇一四年度春季大会研究発表レジュメ）

## 第三部 自然語彙論

### 第一章 植物語彙について

#### 第一節 はじめに

本章で植物語彙に注目するのは、子規の生涯を通しての特に身近な存在が、植物であったと考えられるからである。実際子規短歌の中で植物が詠まれた作品は一〇九六首であり、子規短歌全体（二四三二首）の45.1%を占めている。

植物語彙には多くの種類の植物（櫻など）や植物の部位（枝など）、植物の集まり（桑の田など）、植物によって作られた空間（木陰など）が見られる。また、明治三十一年の短歌革新直後の短歌には、古歌には殆ど使用されていない植物が詠まれるようになっていく。

以下、植物の種類、古歌に頻繁に使用例が見られる種類の多寡、植物の部位、植物の集まり、植物によって作られた空間の点から植物語彙の使用実態を明らかにする。

#### 第二節 植物語彙の使用実態

##### 第一項 植物の種類

子規短歌には多くの種類の植物が詠まれている。以降、短歌に詠まれる植物の種類の期間ごとの変化を見てゆく。

## 二——植物の種類認定

植物語彙を植物の種類ごとに分類<sup>注1</sup>する。次の植物語彙は、種類別に分類する対象から省いている。

総称のみを表す語

…「木」など

植物の一部のみを表す語

…「枝」など

植物の集合体のみを表す語

…「森」など

植物の香りのみを表す語

…「香」

植物によって生じた空間のみを表す語…「葉陰」など

種類ごとの分類には次の方法を用いる。

(一) 同じ植物の種類を表す語を含むもの同士を一つの種類とする。

例えば「蘆」と「蘆の花」、「蘆間隠」、「葦垣」、「蘆の葉」、「蘆辺」は、「蘆」とした。

志賀の浦や《あしへ》の宿の涼しきはひらの根おろし秋や立らん

(五三・十八年)

風そよく隅田の《あし》のふしの間に夏の夜あけて鷄やなくらん

(拾遺六三・二一年)

昨日まですゝしといひし《あしの葉》の風身にしみて秋やたつらむ

(拾遺六八・二一年)

親やしたふ子やしたふらん和歌の浦の《蘆間かくれ》にたづそなくなる

(一三一・二三年)

風吹けば《蘆の花》散る難波潟夕汐満ちて鶴低く飛ぶ

(五二五・三二年)

借りて住む磯の家居は海見えて白帆行くなり《葦垣》の外に

(一〇五六・三二年)

(二) 同じ植物の種類を表す語が含まれないもので、同じ種類の植物であれば一つの種類とする。

例えば「唐桃」には「杏」という語は含まれていないが、「杏」や「杏の花」と共に、「杏」とした。

人住まぬいくさのあとの崩れ家《杏の花》の咲きてけるかな (三四〇・三一年)

城中の千戸の《杏》花咲きて關帝廟下人市をなす (四四二・三一年)

《から桃》の花をいけたるかたはらに玉の小櫛をとりあはせし圖 (一五八六・三三年)

(三) 同じ植物の名前が含まれていても、異なる植物である場合はそれぞれの種類として分類する。

例えば「海棠」と「秋海棠」は異なる種類の植物であるので、それぞれ「海棠」と「秋海棠」に分類する。

住みわびし家の様こそたゞならね《海棠》咲ける寒竹の垣 (四九一・三一年)

口そぐねくたれ髪の小傾城《秋海棠》に赤き唾吐きつ (五三二・三一年)

(四) 植物の種類を表す総称がある場合、それに当てはまるものを同じ種類とする。

例えば、「瓜」は「ウリ科蔓性植物、その果実の総称」<sup>注2</sup>とあるので、「烏瓜」「唐茄子」「冬瓜」といった異なる植

物同士でも「瓜」に分類する。

神鳴のわつかに鳴れば《唐茄子》の臍とられじと葉隠れて居り (七一五・三一年)

をさまれる御代のためしに二抱え三抱えもある《冬瓜》なりいであつ (一二三八・三二年)

道の邊になる《烏瓜》又の名を玉つさといふときけばゆかしく (一二三九・三二年)

ただし、「茅」については例外とする。「茅」とは「茅(ちがや)、刈萱(かるかや)、芒(すすき)、笠萱(かさすげ)

などイネ科の草の総称」<sup>注3</sup>とあり、本来は「蘆」や「稻」、「荻」、「芝」、「薄」、「真菰」もイネ科の植物であるので、「茅」の中に分類される。しかし、子規が「稻」や「荻」などを「茅」として一括りに捉えていたとは考え難く、この六語と「茅」は同じ種類としない。

秋の夜は淋しさうたゝまさりけり水邊の《荻》のともすりのこゑ

(拾遺一・十五年以前)

風そよく隅田の《あし》のふしの間に夏の夜あけて鶏やなくらん

(拾遺六三・二十一年)

しきしまにさくやこの花さくや姫空に花さく富士の《芝山》

(二七六・二十四年)

草まくら《薄》の本の露しげみ袂の上に蟲そなくなる

(二〇二・二十四年)

八千歳のをろち栖むてふ古澤の五尺の《真菰》刈る人もなし

(六八一・三十一年)

《稻》の中に立ちましりおふるしこ草のとりすてられて世を送るかな

(八四六・三十一年)

赤羽根の《茅草》の中のつくくし老いほうけりはむ人なしに

(拾遺四八三・三十五年)

(五)「花」について、題や前後の作品との関係で花の種類が明らかであれば、植物の種類の方の分類の対象とする。

例えば、次の一六三八番の短歌は、「櫻花」と題の付された作品群の一首であり、「花(咲き)」が桜であることが明らかである。

さす竹のみ子のみことの大御女をめすらん年と《花咲き》さかゆ

(一六三八・三三年)

また、次の「心なき」の短歌での「花」が、後に詠まれた「久方の」の短歌によって、「花」が桜であると判断することが出来る。

法師看花

心なき身にたにかくもをしむらんいかなる《花》の心なれはや

(一五二・二四年)

神主見花

久方の鏡にうつる《さくら花》これや御神の姿なるらん

(一五三・二四年)

なお、次の歌のように「花」の種類が判断できそうなものでも、種類が作品中や題、前後の作品で明らかでないものは、分類対象から外している。

見わたせは霞たなひく隅田川《花》もてらせり月もかほれり<sup>マヤ</sup>

(一三三・二三年)

二―一―二 植物の種類を増減

子規短歌には一三三種類の植物が詠まれている。次に各期間の種類数と種類名、作品例を挙げる。また種類数の下【】内に、各期間の植物語彙の詠まれた作品数と、それに対する種類数の割合を合わせて示す。

種類について、明治三十一年以降の種類名の中で、それぞれの期間で初出となっているものを太字で表している。

作品例は、六期間通して使用された植物（「山吹」のみ）と、各期間で初めて詠まれた種類またはそれ以降の期間で詠まれなくなった種類を使用したものを挙げた。作品例の挙げ方は、「山吹」の例、各期間で初めて詠まれる種類の例、以降の期間で詠まれなくなった種類の例の順である。

明治三十年以前…三九種類 【二〇四首 19.1%】

朝顔・蘆・紫陽花・あやめ・卯の花・梅・萩・楓・杜若・檉・柏・菊・梔子・河骨・苔・榊・桜・笹・芝・杉・薄・菫・竹・菜・梨・撫子・菜の花・萩・蓮・柞・真菰・松・麦・藻・樅・桃・柳・山吹・夕顔

あやにくに枝のみたれて玉河の浪をりかへる岸の《山吹》 (一四五・二四年)

から山の風すさふなり故さとの隅田の《櫻》今か散るらん (二九一・二八年)

あるかと思へばありと見ゆる也月のひかりにまがふ《卯の花》 (九七・十九年)

明治三十一年…九二種類 【三二八首 28.04%】

葵・青桐・麻・朝顔・薊・蘆・あやめ・杏・犬子草・稻・芋・茨・梅・瓜・榎・白粉花・苧環・海棠・楓・杜若・柏・

要綱・桔梗・菊・茸・桐・橡・栗・桑・鶏頭・樺・げんげ・柑子・河骨・苔・桜・椎・忍草・芝・芍薬・秋海棠・

棕櫚・水仙・杉・薄・菫・石竹・芹・竹・橘・樗・蔦・躑躅・椿・菜・梨・棗・撫子・菜の花・檜・葱・萩・葉鶏頭・

芭蕉・蓮・バナナ・薔薇・榛・檜・百日草・昼顔・昼照草・枇杷・覆盆子・藤・木瓜・蒲公英・牡丹・真菰・松・豆・

麦・葎・藻・樅・桃・柳・山吹・夕顔・蓬・連翹・綿

軒並ぶ賤が伏家の門川に《山吹》咲いて蛙鳴くなり (五一四・三一年)

旅人の雉子追ひ行く野は盡きて《つゝじ》花咲く岩の下道 (四九八・三一年)

奥山に淋しく立てるくれなゐの《木の子》は人の命とるとふ (七六二・三一年)



明治三二年…五七種類【一三八首 41.3%】

葵・蘆・紫陽花・芋・茨・梅・瓜・白粉花・楓・柿・杜若・要褻・菊・臭木・桑・鶏頭・げんげ・河骨・苔・桜・

山茶花・百日紅・椎・秋海棠・しょうぶ・杉・菅・薄・葦・芹・竹・茶・躑躅・椿・露草・てっせん・梨・撫子・

合歓・萩・葉鶏頭・薔薇・檜扇・檜・昼照草・枇杷・芙蓉・牡丹・松・麦・桃・柳・山吹・百合・蓬・連翹・蕨

《山吹》の花の盛りを巢こもりて子をあたゝむるカナリヤあはれ

(拾遺二五四・三二年)

人も來ぬ奥山路の《百合の花》神や宿らん折らんと思へど

(一一七四・三二年)

しもつけやしめちか原に春暮れて《葉廣さわらひ》人も訪ひ來ず

(一〇八六・三二年)

明治三三年…六一種類【三二〇首 19.1%】

朝顔・薊・あやめ・杏・銀杏・茨・梅・萩・苧環・海棠・楓・杜若・榎・菊・梔子・げんげ・寿草・桜・桜草・山椒・

椎・芍薬・しょうぶ・沈丁花・水仙・杉・葦・芹・蕎麦・橙・竹・橘・躑躅・椿・妻紅・木賊・菜・梨・薺・撫子・

菜の花・檜・和草・葱・萩・薔薇・檜・枇杷・藪・藤・牡丹・松・豆・裸萩・麦・桃・柳・藪柑子・山吹・蓬・蕨

《山吹》は南垣根に菜の花は東堺に咲き向ひけり

(一六九四・三三年)

鎌倉の八幡の宮に今もある《銀杏の老木》人かくるべし

(一四九七・三三年)

富士のねに咲ける《薊》を吉備にある親に見せんと君思はずや

(拾遺三四一・三三年)

明治三四年…十三種類【五六首 23.2%】

あやめ・**鳶尾**・柏・菊・桜・椎・萩・薔薇・藤・牡丹・松・山吹・夕顔

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる《山吹の花》

《いちはつ》の花咲いでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

くれなゐの《薔薇》ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

(拾遺三七三・三四年)

(拾遺三八四・三四年)

(拾遺三八九・三四年)

明治三五年…十三種類【五〇首 26%】

芋・梅・苧環・**茅**・げんげ・杉・堇・**蓼**・**チンノレヤ**・**土筆**・椿・藻・山吹

赤椿黄色《山吹》紫ニムレテ咲ケルハタテノ花

《つくしこ》はうまなれや紅に染めたる梅を絹傘にせる

(拾遺四九六・三五年)

(拾遺四六一・三五年)

各期間に見られる、植物の種類数の増減は次の通りである。

明治三一年では、短歌に詠む植物の種類が大きく増加している。

明治三二年では植物の種類は減少するが、作品数に対する割合は高くなっている。

明治三三年になると種類数は再び増加するが、作品数に対する割合は大きく低くなっている。

明治三四年以降では種類数は減少しているが、作品数に対する割合は高くなっている。

作品数に対する種類数の割合より、革新後の植物の種類数の増減は、各期間の植物を詠み込んだ作品数の増減が大きく関わっていると考えられる。

明治三十年以前から明治三十一年の間の植物の種類数の大きな増加には、子規が短歌革新の実践として、「葵」や「犬子草」など、短歌に使用する植物の種類を積極的に増やしたことが現れている。

明治三十一年と明治三十二年での作品数に対する植物の種類数の割合が、明治三十年以前と明治三十三年の場合と比べて高くなっている。それは、特定の植物を複数回用いる傾向が、明治三十年以前と明治三十三年の二期間よりも低いということである。明治三十一年と明治三十二年では、様々な植物を歌に詠むことの試行が行われているのではないだろうか。

明治三十三年の作品数に対する植物の種類数の割合が、明治三十一年と明治三十二年よりも低くなっていることについては、次のことが考えられる。

明治三十一年の作品にも、「ベースボールの歌」（九首）などのような、同一の題で複数の作品を詠んだものは見られるが、明治三十三年になって「明かに連作的ともいはるべき歌を意識的に作り出し」<sup>注4</sup>と既に指摘されている。明治三十三年の作品では、これまでよりも同一の題で複数の作品を詠むことが多くなったと考えられ、その影響で作品数に対する植物の種類数の割合が低くなったのではないか。

明治三四年と明治三五年でも、明治三十三年の「五月廿一日朝雨中庭前の松を見て作る」（十首）と同様の、「連作的ともいはるべき歌」を多く作ったと考えられる。しかし明治三四年以降は全体の作品数が少ないために、作品数に対する植物の種類数の割合が高くなったと考えられる。

## 二―一―三 各期間の初出の種類

ここで、子規の増やした植物の種類に、どのようなものがあるのかについてみてゆく。

各期間の初出の植物の種類を、古来頻繁に使用されたものであるのか次に分類し挙げる。

### 明治三一年

古来頻繁に使用された植物

葵・稻・瓜・椎・忍草・芹・橘・樛・躑躅・椿・檜・榛・藤・牡丹・蓬

古来頻繁に使用された植物以外

青桐・麻・薊・杏・犬子草・芋・茨・榎・白粉花・苧環・海棠・要繭・桔梗・茸・桐・橡・栗・桑・鶏頭・櫟・  
げんげ・柑子・芍薬・秋海棠・棕櫚・水仙・石竹・薦・棗・葱・葉鶏頭・芭蕉・バナナ・薔薇・檜・百日草・  
昼顔・昼照草・枇杷・覆盆子・木瓜・蒲公英・豆・蓍・連翹・綿

明治三一年の初出の種類数は六一種類であり、同期間で使用された植物の種類数九二種類の<sup>66.3</sup>%を占めている。この六一種類の内、古来頻繁に使用された植物以外のものが四六種類である。明治三一年の作品では、これまで子規が詠んだことのない植物が積極的に多く詠まれるようになり、且つ積極的に増やした植物は、古来頻繁に使用されたもの以外が大半である。これは、子規の歌材の拡大と古来の題材に囚われない姿勢が強く現れたものと考えられる。

## 明治三二年

古来頻繁に使用された植物

しょうぶ・菅・百合・蕨

古来頻繁に使用された植物以外

柿・臭木・山茶花・百日紅・茶・露草・てっせん・合歓・檜扇・芙蓉

明治三二年の初出の種類数は十四種類であり、同期間で使用された植物の種類数五七種類の24.6%を占めている。この十四種類の中で、古来頻繁に使用された植物以外のものが十種類である。明治三二年の作品では、前期間までに詠まれていた植物の種類を多く引き継いでいることが分かる。この点が明治三一年と異なっている。

しかし明治三二年に増やした植物の種類のお半が、古来頻繁に使用された植物以外のものであるという点で、明治三一年と共通している。これは、前年までの歌材を引き継ぎつつも古来のものに囚われない子規の姿勢が現れていると考えられる。

## 明治三三年

古来頻繁に使用された植物

薺・藟

古来頻繁に使用された植物以外

銀杏・寿草・桜草・山椒・沈丁花・蕎麦・橙・妻紅・木賊・和草・襖萩・藪柑子

明治三年の初出の植物の種類数は十四種類であり、同期間で使用された植物の種類数六一種類の約22.95%を占めている。この中の十二種類が、古来頻繁に使用された植物以外のものである。明治三年の作品も、前期間までに詠まれていた植物の種類を多く引き継いでいるが、増やした植物の種類は古来頻繁に使用された植物以外のものが大半である。明治三年と同様に、前年までの歌材を引き継ぎつつも古来のものに囚われない子規の姿勢が現れていると考えられる。

## 明治三四年

古来頻繁に使用された植物

無し

古来頻繁に使用された植物以外

鳶尾

明治三四年の初出の植物の種類数は一種類であり、同期間の植物の種類数十三種類の7.7%を占めている。またこの

一種類は古来頻繁に使用された植物以外のものである。明治三四年の作品では、前期間までからの植物の種類の引き継ぎが他の期間の場合と比べ多い。しかし、増やした植物の種類が古来頻繁に使用されたもの以外であるという点はその期間の場合と共通している。

但し、明治三四年の場合は初出の植物の種類が一例と極めて少ないため、当期間の初出の植物の特徴を現時点で考察することはできない。

## 明治三五年

古来頻繁に使用された植物

茅・蓼

古来頻繁に使用された植物以外

チンノレヤ・土筆

明治三五年の初出の植物の種類数は四種類であり、同期間の植物の種類数十三種類の30.8%を占めている。この四種類の内、古来頻繁に使用された植物以外のものが二種類である。明治三五年の作品も、前期間までに詠まれていた植物の種類を多く引き継いでいるが、明治三二年、三三年の場合よりもその傾向はやや少ない。

但し、明治三五年も初出の植物の種類が四例と少ないため、その特徴を現時点で考察することはできない。

以上のように、明治三二年と三三年の二期間では、これまで子規が詠んだことのない種類を詠むことに消極的であったと考えられる結果が見られる。後年になるに従い前期間までに使用される種類の引き継ぎが多くなることが考えられるため、この結果は、明治三一年に歌材の拡大を大きく進めたことで、それ以上に歌材を拡大することが難しくなったために起きたことではないかと考える。

その一方で、明治三一年から三三年までの各期間での初出の植物の種類の大半は、古来頻繁に使用された植物ではなかった。これは、古来のものに囚われずに新しい題材を求めた子規の姿勢が現れていると考えられる。

明治三一年では、古来のものに囚われない新しい題材の拡大を積極的に行い、明治三二年では、新しい題材を広げつつ前期間までに使用された題材を引き継いだと考えられる。また明治三三年では三二年と同様であるが、一つの植物を連作の題材にすることが出来る程までに、題材の用法が多角的になったと考えられる。

## 二―一―四 庭の植物との対応

各期間の初出の植物の種類を、庭に植えられていた植物<sup>注5</sup>と対応させる。明治三一年以降の各期間の初出の植物の種類の中で、子規庵の庭にあったとされる植物を挙げる。

### 明治三一年

明治三一年には庭にあったとされるもの。

白粉花・桔梗・鶏頭・椎（病室からは視覚範囲外）・秋海棠（病室からは視覚範囲外、三三年以降は視覚範囲内に



なる）・葉鶏頭・薔薇・覆盆子・牡丹

植えられた時期が不明なもの

水仙（病室からは視界範囲外か）・百日草・木瓜（病室からは視界範囲外か）

### 明治三二年

初出の種類の植物の中で、庭にあったとされるものは見られない。

### 明治三三年

初出の種類の植物の中で、庭にあったとされるものは見られない。

### 明治三四年

明治三三年には庭にあったとされるもの。

鳶尾（病室からは視界範囲外、作品（拾遺三八四番）は視覚範囲外であることを窺わせないものである）

《いちのはつ》の花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

（拾遺三八四・三四年）

## 明治三五年

初出の種類の植物の中で、庭にあったとされるものは見られない。

なお、**明治三十年以前**から詠まれた植物の種類の途中で、明治二十九年には子規庵の庭にあった植物は次の七種類である。

朝顔・梅・薄・撫子・萩・松・山吹

また、いつから植えられているのか分からないものは次の三種類である。

菊・菜（小松菜のこと、病室からは視界範囲外か）・夕顔

明治三十年以前の子規短歌に「桃」が詠まれているが、「桃」が盆栽として庭にあった時期は明治三三年以降である。

各期間の新出の種類の内容について、次にまとめる。

(一) 子規庵には計二四種類の植物があったとされ、その内の「鶏頭」などの十二種類が明治三十一年に詠まれている。明治三二年までには、「鳶尾」以外の二三種類の植物が詠まれる。

(二) 明治三十年以前に詠まれた、「梅」など子規庵の庭にある植物は、古来頻繁に使用された植物である。それに対し、明治三十一年に詠まれた庭にあったとされる十二種類の植物のうち、古来頻繁に使用されたものは「椎」と「牡丹」の二種類のみである。

以上のことより、明治三十一年の植物の古来のものに囚われない歌材の拡大には、子規自身の知識だけでなく、庭の

植物もそれに関わったと考えられる。

また明治三二年と明治三三年での植物の種類が、前期間に詠まれた歌材の引継ぎが多い理由として、明治三一年に歌材の拡大を大きく進めたことの影響を述べたが、庭の植物を歌材にする様子にもその急進さが表れている。

## 二―一―五 各植物の詠まれる時期

各植物が詠まれる期間を次に挙げる。途中詠まれない期間があるものは、植物の種類名の後ろの（ ）内に詠まれない期間を挙げた。例えば「梅」が詠まれる期間は、明治三十年以前、明治三一年、明治三二年、明治三三年、明治三五年である。明治三四年以外の明治三十年以前から三五年の間に使用例が見られるとして、「明治三十年以前から三五年まで詠まれるもの」の項目に分類し「梅（三四）」と表記する。

明治三十年以前から三五年まで詠まれるもの・・・五種類

梅（三四）・杉（三四）・菫（三四）・山吹・藻（三一、三三、三四）

明治三十年以前から三四年まで詠まれるもの・・・七種類

あやめ（三二）・柏（三二、三三）・菊・桜・萩・松・夕顔（三二、三三）

明治三十年以前から三三年まで詠まれるもの・・・十四種類

朝顔（三二）・萩（三一、三二）・楓・杜若・檉（三一、三二）・梔子（三一、三二）・竹・菜（三二）・梨・

菜の花（三二）・撫子・麦・桃・柳

明治三十年以前から三十二年まで詠まれるもの・・・・・・・・五種類

蘆・紫陽花（三二）・苔・河骨・薄

明治三十年以前と三十一年で詠まれるもの・・・・・・・・四種類

芝・蓮・眞菰・樅

明治三十年以前のみに詠まれるもの・・・・・・・・四種類

卯の花・榊・笹・柞

明治三一年から三五年まで詠まれるもの・・・・・・・・四種類

芋（三三、三四）・芋環（三二、三四）・げんげ（三四）・椿（三四）

明治三一年から三四年まで詠まれるもの・・・・・・・・四種類

椎・薔薇・藤（三二）・牡丹

明治三一年から三三年まで詠まれるもの・・・・・・・・十五種類

薊（三二）・杏（三二）・茨・海棠（三二）・芍薬（三二）・水仙（三二）・芹・橘（三二）・躑躅・檜（三二）・

葱（三二）・檜・枇杷・豆（三二）・蓬

明治三一年から三二年まで詠まれるもの・・・・・・・・十種類

葵・瓜・白粉花・要褻・桑・鶏頭・秋海棠・昼照草・葉鶏頭・連翹

明治三十一年のみに詠まれるもの．．．．．二八種類

青桐・麻・犬子草・稻・榎・桔梗・茸・桐・橡・栗・櫟・柑子・忍草・棕櫚・石竹・樛・蔦・棗・芭蕉・バナナ・

榛・百日草・昼顔・覆盆子・木瓜・蒲公英・葎・綿

明治三十二年から三五年まで詠まれるもの．．．．．なし

明治三十二年から三四年まで詠まれるもの．．．．．なし

明治三十二年から三三年まで詠まれるもの．．．．．二種類

しょうぶ・蕨

明治三十二年のみに詠まれるもの．．．．．十二種類

柿・臭木・山茶花・菅・百日紅・茶・露草・てっせん・合歓・檜扇・芙蓉・百合

明治三三年から三五年まで詠まれるもの．．．．．なし

明治三三年と三四年に詠まれるもの．．．．．なし

明治三三年のみに詠まれるもの．．．．．十四種類

銀杏・寿草・桜草・山椒・沈丁花・蕎麦・橙・妻紅・木賊・薺・和草・蒔・禊萩・藪柑子

明治三四年と三五年で詠まれるもの．．．．．なし

明治三四年のみに詠まれるもの．．．．．一種類

鳶尾

明治三五年のみに詠まれるもの……四種類

茅・蓼・チンノレヤ・土筆

各植物の詠まれる期間について、次にまとめる。

**明治三十年以前**に詠まれた植物は、明治三十一年以降にも詠まれることが大半である。明治三十年以前の作品のみに使用される植物が四種類であるのに対し、それ以降の期間の作品に使用されるものは三五種類である。これは、明治三十一年に題材の拡大を行ったのと同時に、これまで使用した題材も引き継いでいたことを表している。

また、明治三十年以前に詠まれた植物のほとんどが古来頻繁に使用されたものであることより、子規には古来頻繁に使用された題材を避けることはしなかったと考えられる。子規は『古今集』の「糟粕を嘗めて居る」<sup>注6</sup>ことにより、趣向が陳腐なものになることに対して批判していることから、革新以降に古来頻繁に使用された題材を使用する際は、その題材を表現する方法を変化させていると考えられる。

例えば左に短歌革新前と革新後の作品を一首ずつ挙げる。革新前の「梅か枝に」の歌における「梅」は鶯と組み合わせられており、古典的な表現技法が用いられている。それが短歌革新発表後の作品である「門口に」の歌における「梅」は、景物の一つとして表現されている。

《梅か枝》に始めてきなく鶯の春をしらす法の一聲

門口に《梅》散り背戸に椿咲く里のけしきは見れとあかぬかも

(拾遺三・十五年前)

(六〇〇・三一年)

**明治三十一年**では、庭の植物など多くの種類の植物が新に詠まれたが、晩年まで使用されないものが大半である。

明治三十一年で初めて詠まれた植物は六一種類であり、その中から明治三四年以降に詠まれるものは八種類である。

**明治三十二年、明治三十三年**の作品で初めて使用された植物は、それぞれの期間のみの使用である場合がほとんどであることを踏まえると、明治三十一年から三十三年までの期間で多様な植物を詠むことの試行が行われたと考えられる。

晩年に詠まれなくなった植物に、「桔梗」や「覆盆子」など晩年の庭には無い植物、「百日草」や「樵」など庭にあっても病室で寝た状態で見るのは困難だと思われる植物が入っていることから、子規の置かれた環境の変化も影響を与えた可能性がある。

さらに、明治三十一年から三十三年で初めて使用された「栗」や「百日紅」など庭に無い植物が晩年使用されなくなる傾向と、明治三十年以前に使用された植物の内、「松」や「梅」など庭にある植物が晩年の子規短歌で多く使用される傾向がみられるのは、子規の晩年の歌風が「自己の深处の生命と触れ合った景情」<sup>注7</sup>を表すように変化したことが影響しているのではないか。「自己の深处の生命」と重なる対象としての自然は身近なものの方が、詠みやすかったと考えられる。

**明治三十五年**に詠まれている植物は、明治三四年に詠まれている植物と殆ど共通していない。明治三五年に詠まれている植物は十三種類あるが、明治三四年の子規短歌で詠まれているのは「山吹」だけである。

明治三五年で使用されている植物と子規の関係と、明治三四年で使用されている植物と子規の関係も、次のように異なる傾向が現れた。

明治三四年で多く詠まれていた植物には、「牡丹」「藤」「山吹」が挙げられる。左の例のように「牡丹」と「山吹」は庭に植えられている植物であり、病室の子規にとっては遠景である。その一方「藤」のように室内の植物は、子規にとって近景である。明治三四年は、庭の植物という子規にとって遠いものを対象とする方が多い傾向がみられた。

瓶にさす《藤》の花ぶさみじかければたゞみの上にとゞかざりけり

(拾遺三六三・三四年)

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる《山吹の花》

(拾遺三七三・三四年)

雨ふると《牡丹》の上に蔽ひたる小傘かくれに赤き花見ゆ

(拾遺四三五・三四年)

明治三五年で多く詠まれていた植物、「梅」「菫」「土筆」であり、庭にある植物を対象とするものもみられるが、下の「梅」「菫」の歌例のように室内の植物を対象とすることが以前よりも多いという傾向がみられた。また「土筆」の例のように想像（回想も含む）の中の植物も多く詠まれるという傾向もみられる。

鉢植の《梅》はいやしもしかれとも病の床に見らく飽かなく

(拾遺四六四・三五年)

玉透のガラスうつはの水清み《香ひ菫》の花よみかへる

(拾遺四七四・三五年)

《つく／＼し》故郷の野につみし事を思ひいてけり異國にして

(拾遺四九三・三五年)

このような明治三五年での明治三四年との違いは、子規の視界が遠景よりも近景を観察する方に適するようになったことと、子規自身は田園風景を見ることが不可能になっても明治三五年の歌風が「田園回帰」<sup>注8</sup>へ変化したことによるものではないだろうか。



## 第二項 植物の部位

植物語彙には「枝」や「葉」等といった植物の一部を表す語彙も分類しており、このような語彙は多く見られる。以降、子規短歌に見られる植物の部位を具体的に見てゆく。

### 二―二―一 植物の部位を表す語の認定

植物の部位を表す語とは「梅枝」「種」等のものであり、植物の一部を表している語とする。またそれ以外にも、「花莖」のように植物の一部を表す語が含まれる語や、「梢（木末）」のように語としての意味が植物の部位を指しているものも、植物の部位を表す語に入れる。

### 二―二―二 植物の部位を表す語を使用した作品数

植物の部位を表す語を使用した作品数は、次のとおりである。なお、以降はこの作品数を「部位歌数」とする。部位歌数の下に、各期間の植物語彙を使用した作品数と、それに対する部位歌数の割合を【 】内に示す。

明治三十年以前	…一〇五首	【二〇四首】	51.5 %
明治三一年	…一二四首	【三二八首】	37.8 %
明治三二年	…五六首	【一三八首】	40.6 %
明治三三年	…一五六首	【三二〇首】	48.8 %

明治三四年                   …四四首【五六首】       78.6%

明治三五年                   …二四首【五〇首】       48%

明治三十年以前よりも、明治三十一年から三十三年の期間で植物の部位を歌に詠み込む傾向が小さいのは、細かい対象物を描写する意識が減ったためではないかと考える。それは、次の二つのことが考えられるためである。

(一) 明治三十一年から三十三年での対象を印象明瞭に写生する方法が、対象の細かい部位を描写するのではなく、歌材の配合によっているのではないか。

歌材の配合について、長谷川孝士氏による次の指摘がある<sup>注9</sup>。

子規は俳句を作る上で大事なこととして写生、配合、客観描写の三点を強調したといわれるが、この短歌（砥部焼の乳の色なす花瓶に梅と椿と共に活けたり）においても、三点が達成されている。…随筆「赤」（明治三十二年五月）の文章で子規は、天然界における赤の必要性に言及している。そして家屋の装飾の場合も、すべて白との「配合」「対照」において赤が生きると述べている。この短歌の場合も「配合」が生きている。

明治三十一年の時点では、子規は「歌俳同一」<sup>注10</sup>の立場におり、「俳句を作る上で大事なこととして写生、配合、客観描写の三点を強調した」ように、明治三十一年の短歌にもその考えを取り入れることが多かったと考えられる。

また「既製の自己の俳句から短歌への焼き直し」が「百中十首」で行われていたことの指摘が、今西幹一氏

によつてなされている<sup>注11</sup>。例えば今西氏は「人住まぬいくさのあとの崩れ家杏の花の咲きてけるかな」<sup>注12</sup>の歌を作る前に、「梨咲くやいくさのあとの崩れ家」という俳句が作られていることを指摘している。

このように「焼き直し」された短歌には、俳句で扱われていた材料と新たに加えられた材料の配合がみられ、その配合によつて歌材の印象が明瞭なものになっているのではないか。そしてこのような「歌俳同一」の考えが明治三二年に改められたとされるが、複数の歌材の配合をもつ作品は、三二年と三三年にもみられる。次に例を二首挙げる。

門並に柳植ゑたる家つゞき春雨細く燕飛ぶなり

(一〇四五・三二年)

春雨をふくめる空の薄曇山吹の花の枝も動かず

(一七〇一・三三年)

このような歌材の配合による、写生の対象を印象明瞭にする方法が、明治三一年から明治三三年の期間で、他の期間より多く用いられたのではないか。

(二) 植物を観察する際の視線が、他の期間よりも上下していると考えられる。

子規が歌に詠み込んだ植物の部位の種類が、明治三一年から明治三三年の期間で多くなっており、後述の植物の根元の部位の使用もやや多く見られる。

## 二―二―三 植物の部位を表す語の実態

植物の部位について、子規の短歌作品に詠まれた部位は、「根」や「芽」、「花」などの十七種類見られる。それをそ

それぞれの部位の位置によって大きく次の四つに分類する。各部位に歌例を一首示す。

**部位（下）** … 地下の根の部分から地上の上部に存在する部位を分類する。ここには、次の二つの部位を分類する。

「根」

浅からぬ《根さし》も見する深緑思ましな池のあやめは

（拾遺三四・十八年）

「種」

菓物の《核》を小庭に蒔き置きて花咲き實のる年を待つわれは

（九四〇・三十一年）

**部位（中）** … 地上であり且つ植物の先端ではない植物の部位を分類する。次の四つの部位をここに分類する。

「棘」

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の《針》やはらかに春雨のふる

（一六九六・三十三年）

「葉1」 … 草の葉を分類する。

川の端のをひしけりたる《草の葉》に夜しるむしの見えつかくれつ

（拾遺二・十七年）

「節」

呉竹の《ふし》も直なる心もて葉分の風を雨とあさむく

（二一・十八年）

「芽1」 … 種から発芽したのではなく、草の芽を分類する。

霜おほひの藁とりすつる芍薬の《芽》の紅に春の雨ふる

（二五一九・三十三年）

**部位（上）** … 植物の先端にある部位を分類する。次の九つの部位をここに分類する。

「枝」

板塀に《立枝》ぞ見ゆる門構誰か思ひ者か梅に琴をひく

(三六二・三一年)

「葉2」…木の葉を分類する。

《松の葉》の細き《葉毎》に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず

(一七五六・三三年)

「萼」

花散りて葉はまだ萌えぬ小櫻の赤き《うてな》にふる雨やまず

(一六五七・三三年)

「穂」

かたみたに今はなつのゝしの薄まだ《穂》にいでぬ風の色哉

(二五二・二六年)

「蕾」

花いけにいけなんとする紅梅のあたらし《蒼》の玉をこぼしつ

(四三四・三一年)

「花」

手習の草紙干する寺子屋の庭の紅梅《花》咲きにけり

(四三六・三一年)

「花卉」

《花びら》をかきのつたなく影をなみ赤の染綿置けるにも似るか

(拾遺三五八・三三年)

「芽2」…木の芽を分類する。

日和風ソヨ吹き過ギテ若松ノムラ立ち《青芽》ムラ／＼動ク

(一八三九・三三年)

「実」

病みて臥す窓の橘花咲きて散りて《實》になりて猶病みて臥す

(四六二・三一年)

**落ち葉**：落ち葉など草や木に付いていない葉を分類する。ここに分類する部位の項目を「葉3」とする。

「葉3」

木枯の風吹きおろす大井川《紅葉》おしわけて筏さすなり

(拾遺二三三・二七年)

以上の植物の各部位が詠まれている作品数を、各期間でまとめたものが次の表である。

		明治 30年 以前	明治 31年	明治 32年	明治 33年	明治 34年	明治 35年
部位 (下)	根	2	2	1	1		
	種		1	1		1	
部位 (中)	棘				1		
	葉1	4	6	1	3		
	節	2					
	芽1		3	1	3	1	
部位 (上)	枝	13	12	3	19	3	
	葉2	19	19	11	18	2	
	萼				1		
	穂	2	3				
	蕾		3	1	1	1	1
	花	68	82	37	117	37	24
	花卉				2		
	芽2		2		2	1	
	実	1	2	2	3		
落ち葉	葉3	3	1	4		1	

表より、次の内容が明らかである。

明治三十一年から明治三十三年では、他の期間の場合と比べて多様な部位が詠まれている。そこに、子規の短歌に詠む題材を広く求める姿勢が現れている。また植物に対する観察の方法について、植物の根元から先端まで見る傾向が、他の期間よりも強く見られる。

明治三四年以降では、「花」を詠むことに大きく偏っている。これは、晩年の作品の多くが自己の死が意識されてい

ることと関係していると考え。次の「世の中は」の歌では「花」が散ることと無常を感じたり、「なくさもる」の歌では「花」の様子の変化で時間の推移を感じているのではないか。

世の中は常なきものと我愛づる《山吹の花》散りにけるかも

（拾遺三八六・三四年）

なくさもるすべもあれとか《花堇》色あせたれとすてまくをしも

（拾遺四七八・三五年）

このような「花」の変化は、同じ「部位（上）」であり明治三三年まで多く詠まれている「枝」「葉2」よりも、変化の様子は明確で且つ変化に必要な時間も短いのではないだろうか。このことが、より自己の死を子規に意識させることに繋がっているのではないだろうか。

また、次の指摘<sup>注13</sup>もあるが、晩年の子規は目の痛みを訴えていたことがあったことから、視覚能力の面でも、視覚で捉えやすい「花」を歌材にしやすかったのではないかと考える。

子規のからだのうちで、少年期からその死まで、人並み以上の働きに恵まれたのは、その目、正確に言えば、目のはたらき＝視力ではないかと思う。∴「多病才子」でも、目の病について述べたあとに、「併し眼力は非常に強く書生間に珍しき程なり」といつているように、子規の目は若い時から、眼力がきわめて強く、それは晩年に至ってもあまり衰えなかったのである。

以上のように、写生の対象を印象明瞭にする方法として歌材の配合によっていたことから、明治三一年から明治三三年の期間で、植物の部位を歌に詠み込む傾向が小さくなったのではないかと考える。子規は様々な植物の部位に目を向けているが、短歌に詠む際には次の例のように、「梅」や「椿」といった植物の種類を明示し、多様な植物を他の



題材と組み合わせる方法（この場合は「梅」と「椿」の配合）を用いている。

門口に《梅》散り背戸に《椿》咲く里のけしきは見れとあかぬかも

（六〇〇・三一年）

また右の短歌に見られるように、子規は植物語彙に対する表現に「散り」「咲く」といった状態を表すことが多い。このような「散り」「咲く」によって、梅の花や椿の花が詠まれていることが分かる。そのことも、短歌の中に植物の部位を明示しないことに関係していると言える。

明治三四年以降になると、自己の死の意識が短歌に反映される例が見られる。晩年の作品では、自己の境遇を投影するために「花」が題材であることを強調するようになったのではないか。また晩年の子規の視覚能力の限界によって、「芽」や「蕾」などと比べ大きい部位である「花」に注目することが多くなったとも考えられる。

### 第三項 植物の集合

第三項では、「竹群」や「森」といった植物の集合を表す語について見てゆく。子規は「上野の森」や「谷中の森」、「桑畑」、「茶畠」など様々な植物の集まりを詠んでいるが、明治三四年以降はその使用が大きく減少する。

以降、植物の集合を表す語の使用の変化を見てゆく。

#### 二―三―一 植物の集合を表す語の認定

植物の集合を表す語は、「要垣」「桑の田」等のものであり、生きた植物が集合して群生している様を表現している

ものとする。また、「百葦」や「諸枝」など植物や植物の部位が複数あると読み取れるものと、「草むら隠れ」のように語の一部に植物の集まりを表す語が含まれるものも、植物の集まりを表す語とする。

## 二―三―二 植物の集合を表す語の使用された作品数

植物の集合を表す語を使用した作品数に、「(桑の) 畑」のように一語では植物語彙としなかったものや、「(荻) 分けゆく」「(椿の花の) さわに (咲く國)」等のように、植物が複数存在することが読み取れる語を使用した作品数を加えると、次のようになる。

明治三十年以前	…五七首	【二〇四首】	27.9 %
明治三一年	…八八首	【三二八首】	26.8 %
明治三二年	…四二首	【一三八首】	30.4 %
明治三三年	…八八首	【三二〇首】	27.5 %
明治三四年	…四首	【五六首】	7.1 %
明治三五年	…二首	【五〇首】	4 %

晩年（明治三四、三五年）の作品では、植物の集まりを歌に詠む傾向が弱くなったことについて、晩年は外出が出来なかったことにより、「森」などの大きな植物の集まりを詠む機会が減少したことが影響していると考ええる。

二―三―三 植物の集合を表す語の実態

各期間の作品で詠まれている植物の集まりがどの位の規模のものであるのかを調査する。

大規模な植物の集合を表す語とするのは、次の内容のものとする。

一つに、「上野の森」や「木立」といった森林をはじめとした木の集まりである。

二つに、「夏野」「栗原」や「茂山」といった植物の茂った野や原や山である。

三つに、「麥畑」「青田」といった植物の茂った田畑である。

四つに、「梅園」といった植物園を表すものである。

また、大規模な植物の集まりを表す語が詠まれていなくても、次に該当するものも、大規模な植物の集合を表す語とする。

他の語から大規模な植物の集まりが詠まれていると判断できるもの

きのふこそ都いでしか山々は《青葉》なりけり白河の關 (二五〇・二六年)

蕈狩の秋も暮れけり大堰川《紅葉》の波にみ舟はや浮け (七六七・三一年)

足引の山の《しけみ》の迷ひ路に人より高き白百合の花 (一一七三・三二年)

題によってそのように判断できるもの

御佛のいとも尊とし紅の雲か櫻の《花のうてな》か (二七四・二七年)

「御佛の」の短歌は「上野公園」という題で発表されており、「櫻の花のうてな」は植物園に匹敵する規模のものである。

ると判断する。

同じ題を持つ作品によって、大規模な植物の集まりを表していると判断した例もある。次の「蟬の鳴く」の短歌での「木のくれしけ」の規模は、「ひくらしの」の短歌の「谷中の杜」と同じ規模であると判断できる。

ひくらしの《谷中の杜》の下陰を涼みところと茶屋立てにけり

(九四五・三一年)

蟬の鳴く《木のくれしけ》に小屋立てゝ腰掛置きて氷水賣る

(九四六・三一年)

大規模な植物の集合を表す語に該当しない例も見られる。主にここに分類されるのは「枝毎」等といった植物の部位の集まりや、庭や鉢等に植えられている植物の集合など、野山といった大きな地形に生えているものでない植物の集まりを表すものである。次に例を四首挙げる。

《杉垣》をめぐらす庭の狭けれと春も花咲く秋も花咲く

(一〇五八・三二年)

鉢植に二つ咲きたる《牡丹の花》くれない深く夏立ちにけり

(一七一六・三三年)

若松の立枝はひ枝の《枝毎》の《葉毎》に置ける露のしげく

(一七六四・三三年)

《つくくし》ひたと生ひける赤羽根にいさ君も往け道しるへせな

(拾遺四八六・三五年)

次の作品のように、大規模な植物の集まりかの判断ができなかったものは除いている。このような例は四一例見られる。

言さへくとつ國人のめづるてふ《椿の花》のさはに咲く國

(四一七・三一年)

大規模な植物の集まりを詠んでいる作品の数と、そこに分類されない規模の植物の集まりの作品数を、期間ごとにまとめ次の表に示す。

	大規模な集まり	その他
30年以前	34	11
31年	50	17
32年	29	10
33年	55	28
34年	0	4
35年	0	2

表より、次のような、大規模な植物の集まりの使用頻度の変化を見ることが出来る。

**明治三三年までの期間**の作品では、森林や野や原や山、田畑など大規模な植物の集まりの方が多く詠まれている。

**明治三四年以降**になると大規模な植物の集まりが詠まれなくなる。植物の集まりを表す語は、左の例に見られるような大規模ではない集まりを表すものである。

あら玉の年のはじめの《七草》を籠に植ゑて來し病めるわがため

(拾遺三六〇・三四年)

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる《山吹の花》

(拾遺三七三・三四年)

小繩もてたばねあげられ《諸枝》の垂れがてにする《山吹の花》

(拾遺三七四・三四年)

我庭ノ《三モト松》伐リアハレ深キ《千草ノ花》ニ日ノ照ルヲ見ン

(拾遺四四三・三四年)

君か手につみし《堇》の《百堇》《花》紫の一たはねはや

(拾遺四七一・三五年)

右の晩年の作品例での植物の集まりは、全てが子規の身辺である枕元や庭のものである。

明治三十三年から三十四年にかけての子規の短歌について、今西幹一氏によって次の指摘<sup>注14</sup>がされている。

明治三十三年の時点では、子規短歌の雑多とも言える多様性と、幅広さを見ればいいことである。：しかし、その多様性の中にも「庭前即景」と言う爾後の子規短歌の辿る一つの方途を探り当てていること、三十三年以後病状の篤さによって次第に作歌が減じていく中で、その秋の「菊」一連から翌三十四年歌にかけて、「病牀即時・即景」を取り入れつつこの「庭前即景」が子規短歌の軸になって純一化されてくること、：

また、明治三五年の短歌についても次の指摘<sup>注15</sup>もなされている。

明治三十五年の年頭歌「御題新年梅」は「御題」に促された制作であり、必ずしも即囑目、即経験に成るとは言いがたい。しかし、ともかくも歌材は庵庭の梅樹である。この《紅梅下土筆》と《香堇》は病床枕頭の鉢物が対象である。小庭とは言え、従前の子規が示したあれほどの《硝子戸の外》への執着、関心は衰え、歌においても次第にその世界が《病床六尺》へと更に限定されて来ているようである。

右の二つの指摘より、晩年の子規の短歌には「庭前即景」<sup>注16</sup>「病床六尺」<sup>注17</sup>の特徴が表れていると考えられる。

晩年に子規が大規模な植物の集まりを歌に詠まなかったのは、庭の景色をそのままに詠む「庭前即景」の歌風が確立したことで、子規が病気で寝たきりになったことで子規の世界の範囲が「病床六尺」へと限られてきたことが影響していると考えられる。そのため、晩年の作品で植物の集まりを歌に詠む傾向が弱くなったと考えられる。

#### 第四項 植物による空間（陰）

植物の部位や集合を表す語よりも使用例は少ないが、植物による空間（陰）とそこの中にあるものとの組み合わせに、晩年の子規の歌材の狭まりを見ることができる。

##### 二―四―一 植物による空間を表す語の認定

植物によって生まれた空間を表す語とは、「木陰」「葉隠れ」等のものであり、植物を原因の一つとして自然現象、陰の生起する場所を表すものとする。

##### 二―四―二 植物による空間（陰）を表す語を使用した作品数

植物による空間（陰）を表す語を使用した作品数と、「（葉廣柏の）陰」のように植物語彙に分類されないが、植物によって生じた陰を表していると読み取れる語（「葉廣柏の陰」であれば「葉廣柏の」が該当する）が詠み込まれている作品数を加えると、次のようになる。【】内に各期間の植物語彙を詠んだ全作品数と、それに対する植物による空間（陰）を詠んだ作品数の割合を示す。

明治三十年以前	十八首	【二〇四首	8.8%
明治三十一年	…二〇首	【三二八首	6.1%
明治三十二年	…一首	【一三八首	0.7%

明治三三年	…十四首【三二〇首】	4.4 %
明治三四年	…二首【五六首】	3.6 %
明治三五年	…〇首【五〇首】	0 %

期間が下って行くにつれ、植物による空間（陰）を詠むことが少なくなり、最晩年では全く詠まれない。

## 二―四―三 植物による空間を表す語の実態

植物による空間とは、左の例のように「陰」「隠れ」といった陰を表すものである。

人もなき《木の下かげ》の春深み花ちりかゝるかひの黒駒

（一四九・二四年）

遠近に菜の花咲きて朝日さす榛の《木かくれ》群れて畑を打つ

（五九五・三一年）

野の中の《竹むら陰》の葱畑に寒さ残りて梅散りにけり

（一四七九・三三年）

春雨のけならべ降れば《葉がくれ》に黄色乏しき山吹の花

（拾遺三八二・三四年）

子規の主張に「陰」に対して次のものがある。<sup>注18</sup>

…薄暗き恐ろしき森の中に一本の赤椿を見つければ非常にうつくしく且つ愉快な感じを起す。此時には椿を中心として書くに宜しけれど、椿を中心とするとは必ずしも椿を詳叙するの謂にあらず。森の薄暗き恐ろしき様を稍と詳に叙して後に赤き椿を點出せば一言にして著き感動を読者に与へ得べし。

右の引用文では「陰―椿」の対比が見られる。



子規短歌でも、陰が詠まれる際に、陰の中のものと一緒に詠まれることが多い。

例えば先ほどの例の、「人もなき」の短歌では「木の下かげ―花・黒駒」、「遠近に」の短歌では「榛の木かくれ―（人）」、「野の中の」の短歌では「竹むら陰―葱畑・梅」、「春雨の」の短歌では「葉がくれ―山吹の花」の対比が見られる。そこで、期間が下って行くにつれ、植物による空間（陰）を詠むことが少なくなり、最晩年では全く詠まれなくなることについて、陰の中のもの使用状態の変化より見ていく。

まず陰の中に存在するものを色の明るいとは判断できるものと、そうでないものの二つに分ける。なお次の作品のよ  
うな「陰」「光」は「陰の中に存在するもの」と考え難いとし除いている。

秋のよのさやけきほとは笹の葉のはかけにもるゝ宿の《月影》

（拾遺一六九・二三年）

靜なる北の家陰の《朝陰》に鶯來鳴く竹藪にして

（一〇三五・三二年）

色の明るいとするものは次の四つとする。「花」や「鯉」「螢」など明るい色や光を放つ動物、「玉」といった光を反射する人工物、「京の雛」など明るい色彩だと判断できる人工物である。

紫の一本やいづれむさし野の草むらかくれ《莖》咲く也

（二七七・二七年）

葉かくれにひれふる《鯉》の過つらん蓮の露のこほれぬる哉

（二四・十八年）

尋ね來し古きわたりの柳陰人無き舟に《螢》飛ぶなり

（六八七・三一年）

二荒の山來てみれば《玉》光り黄金かゝやく杉の下陰

（七九二・三一年）

《京の雛》《江戸の雛》と並べおきていづれこひしき桃の下陰

（五四六・三一年）

明るいものと判断しないものは、次の五つである。「藻」など花を表していない植物と「雀」といった明るい色ではない動物（「鶴」のように明るい色の動物であっても視覚ではなく聴覚による認知が主である場合もここに含めた）、「われ」「妹」などの着物の色が不明な人間（「茶をすする」など人の動作を表すものも「人間」とした）、「雨」といった自然物（「風」は自然現象とし自然物としなかった）、「氷店」「墓」といった色が不明な人工物である。

夏なから秋葉の杜の下かけにふきくる《風》そ涼しかりける

（拾遺六二・二一年）

親やしたふ子やしたふらん和歌の浦の蘆間かくれに《たづ》そなくなる

（一二一・二三三年）

故郷の梅の青葉の下陰に衣浣ふ《妹》の面影に立つ

（六三八・三一年）

古萩の若葉の陰に子をつれて《雀》のあさる晝中の園

（六四六・三一年）

三かゝえの縦の下陰坐を<sup>ママ</sup>しめて筑波の山に《われ》向ひ居り

（九五〇・三一年）

公園の坂を登れば蟬さわぐ高木の陰に《氷店》あり

（一一八一・三二年）

テーブルの足高机うち圍み緑の蔭に《茶をすゝる》夏

（一三六五・三三年）

谷中路の森の下闇我行けば花堆きうま人の《墓》

（一三七九・三三年）

《雨》そゝく櫻の陰のにはたつみよどむ花あり流るゝ花あり

（一六五〇・三三年）

植物による空間（陰）の中のを、明るいものかそうでないものかのどちらかに分類できる作品数四五首である。  
各期間の作品数は次の通りである。

明治三十年以前…十二首　明治三十一年…十八首　明治三十二年…一首　明治三十三年…十三首　明治三十四年…二首

次の作品の「人」は無人（視覚で捉えられない）であるため除いた。

月更くる忍が岡に犬吠えて櫻の影を踏む人もなし

（三七三・三二年）

永き日をさふらふ人もなかりけり忍か岡の松の下蔭

（六三五・三二年）

以上の基準に基づき、植物による空間（陰）の中のものを分類し、各作品数を期間ごとにまとめたものが、次の表である。

		30年 以前	31年	32年	33年	34年
明 る い	花	3	2	0	6	2
	動物	1	3	0	0	0
	人工物	0	2	0	1	0
他	植物	3	1	0	1	0
	動物	2	1	0	0	0
	人間	0	7	0	2	0
	自然物	4	1	0	0	0
	人工物	0	3	0	5	0

表の数値は作品数である。

項目の「明るい」は、明るい色であると判断できるものを表し、「他」は明るい色ではないものを表している。

上の行の「30年以前」は明治三十年以前を表す。例えば明治三十年以前の子規短歌で、植物による空間（陰）と花の組み合わせが詠まれている例は三首見られる。他の期間と項目についての見方も同様である。

表より、次の内容が考えられる。

明治三十年以前では、陰の中のものとは明るい色彩のものとそうでないものの両方が使用されている。また、「花」や「自然物」、「動物」といった自然のものを多く詠む傾向がみられる。

明治三十一年では、植物による空間（陰）の中のものが多い色彩でない例が多く見られる。また、「人間」や「人工物」について積極的に用いている。

明治三十三年では、人間のものを積極的に詠む姿勢（明治三十一年と共通）と、「花」を多く使用する姿勢（明治三十年以前と共通）の両方がみられる。

明治三四年では植物による空間（陰）と「花」という組み合わせに限られるようになる。

以上より、期間が下って行くにつれ、植物による陰を詠むことが少なくなる理由について、次のように考える。

明治三十年以前が最も植物の陰を読む傾向が高かったことについて、「植物の陰―陰の中のもの」という、組み合わせのない歌を詠むことがあったためではないかと考える。明治三十年以前の作品で、植物の陰の中のものがない作品は五首みられる。

《木陰》にもしのきかねたるあつさには扇の風も何ならぬかな

（二〇・一八年）

夏ながら秋葉の杜の《下かけ》にふきくる風ぞ涼しかりける

（拾遺六二・二二年）

同じ樹の《陰》にやとるもさきの世のえにしと思へはをしき別れよ

（拾遺九二・二二年）

はし鷹のにらみて居れば枯草の《葉かくれ》あへす飛ぶ小鳥かな

（三一九・二八年）

明治三一年以降になると、明治三一年の次の二首を除いて、全て「植物の陰―陰の中のもの」の配合が詠まれる。

月更くる忍が岡に犬吠えて櫻の《影》を踏む人もなし

(三七三・三一年)

永き日をさふらふ人もなかりけり忍か岡の《松の下蔭》

(六三五・三一年)

子規自身の「薄暗き恐ろしき森の中に一本の赤椿を見つければ非常にうつくしく且つ愉快な感じを起す」という言葉のように、「美」と感じる配合だけを詠もうとしただけ、明治三一年以降の植物の陰を讀む傾向が、明治三十年以前の場合よりも少なくなったのではないか。配合について、次の子規の主張を引用する<sup>注19</sup>。

文明の機械は多く不風流なる者にて歌に入り難く候へども若しこれを詠まんとならば他に趣味ある者を配合するの外無之候。それを何の配合物も無く「レールの上に風が吹く」などゝやられては殺風景の極に候。せめてはレールの傍に堇が咲いて居るとか、又は汽車の過ぎた後で罌粟が散るとか薄がそよぐとか言ふやうに他物を配合すればいくらか見よくなるべく候。

この主張のように、歌材の配合には「趣味ある」ような配合となるように、歌材の取捨選択を行う必要があった。

また、「趣味ある」配合を行い続けた結果、配合できる組み合わせに限界が訪れた可能性が考えられる。そのため晩年の作品で植物の陰が詠まれる傾向が少なくなったのではないか。

有田静昭氏の指摘にあるように、子規は「月並」を否定している<sup>注20</sup>。

何と何とでも配合出来るという子規の考は、「梅に鶯」「萩に露」式の月並を排して、新味を出そうというのである。『平凡だつていい歌はあるさ』<sup>注20</sup>というのは、新奇を銜うあまり嫌味に陥る事を戒めているのである。

晩年には「庭前即景」の歌風が確立したこと、子規が病気で寝たきりになったことで子規の世界の範囲が「病牀六尺」へと限られてきたため、歌材も限られていったと考えられる。歌材が限られるということは、配合の組み合わせに限界が生まれるということに繋がると考えられる。子規自身によって繰り返し使われた配合とは、子規にとつての「月並」の表現になる。子規にとつての「月並」の表現を使うことを避けるために、晩年に植物の陰を詠むことが少なくなったのではないかと考える。

晩年の作品で植物の陰が詠まれる傾向が少なくなったことについて、明治三十一年に人間のもの、特に「人工物」が積極的に詠まれるようになったのが、晩年に詠まれなくなったことが理由として考えられる。

ひくらしの谷中の杜の下陰を涼みところと《茶屋》立てにけり (九四五・三十一年)

公園の坂を登れば蟬さわぐ高木の陰に《氷店》あり (一一八一・三十二年)

公ノ園ノ木陰ニ旗カケテ氷アキナフ 《ヤスラヒ處》 (一八五四・三十三年)

明治三十一年から明治三十三年でこのような家を詠んだのは、子規が涼しさに対して「美」を感じていたからではないかと考えられる。それが晩年では病気によって涼しさに対する感覚が変化した為か、または涼しさを感じるだけの規模の木陰が庭になかった為か、そのような木陰の元に行くことが出来なかった為であるのか、このような作品はみられなくなる。

趣味ある配合になるよう歌材の取捨選択を行ったこと、晩年では「庭前即景」の歌風と子規の世界の範囲が「病牀六尺」へと限られたことによって配合を作ることが難しくなったこと、また病気のために明治三十三年までに詠まれて

いた「涼しさ」に対する「美」が詠まれなくなったことから、期間が下って行くにつれ、植物によって生起した自然現象が起きた空間を詠むことが少なくなり、最晩年には全く詠まれなくなるという結果が出たと考えられる。

なお、植物によって生起した空間（植物による陰）の他に、「山陰」など植物以外のものによって生起した陰を使用した作品は十五首見れる。その一部を抄出する。

夕されは妻やまつらんまつしまの《小嶋隠れ》にいそく釣舟

（二五三・二六年）

静なる北の《家陰》の《朝陰》に鶯來鳴く竹藪にして

（一〇三五・三二年）

夜清き《片山陰》の梅林月照り満ちて鶴啼きわたる

（一〇三七・三二年）

右の作品での「小嶋隠れ―釣舟」のように明治三〇年以前から陰の中にあるものとして人工物が詠まれていたり、「朝陰―鶯・竹藪」や「片山陰―梅林・鶴（啼きわたる）」のように明治三二年でも「明」に分類される「花」「動物」「他」に分類される「植物」「動物」の例が見られる点が、表（陰の中）と異なっている。

## 第五項 まとめ

子規短歌の植物語彙について、次のことが明らかになった。

植物の種類について、子規が短歌革新の実践として短歌に使用する植物の種類を積極的に増やした様子が、明治三十年以前の作品における植物の種類数と明治三十一年の作品における植物の種類数の差に現れていた。

明治三十一年では、古来のものに囚われない新しい題材の拡大を積極的に行ったこと、古来頻繁に使用された題材を

使用する際は、その題材を表現する方法を変化させて陳腐な趣向にならないようにした可能性があることを、明らかにした。

**明治三二年と明治三三年**では、明治三一年の急進的な題材の拡大の影響もあつてか、新しい題材を広げつつ前期間までに使用された題材を引き継ぐ傾向が強いという点で共通していた。明治三三年の作品では、題材の用法が多角的になっており、この点では明治三二年と異なっている。

このように、明治三一年から三三年の三つの期間の作品における植物語彙の変化に、子規の短歌に対する試行錯誤が窺えるものもみられたが、同時にそれぞれの期間の違いもみられた。

**明治三一年から明治三三年**の間に新しく詠み込んだ植物のうち、庭にないものなどが晩年にはほとんど使用されなくなったということも明らかにされた。これは、子規の歌風が「自己の深处の生命と触れ合った景情」を表すように変化したことによって、「自己の深处の生命」と重なる対象としては、身近な植物の方が適していたのではないかと考えられる。

**明治三五年**における明治三四年との違いもみられた。明治三五年では、子規の視界が遠景よりも近景を観察する方に適するようになった為か、庭の植物よりも枕元の植物を多く詠む傾向がみられた。さらに、三五年の歌風が「田園回帰」へ変化したことによって、想像上で植物を詠む傾向もみられた。

植物の部位、植物の集まり、植物によって作られた空間について、次の内容が明らかになった。



一つに、明治三十年以前の作品は植物の部位を詠み込む傾向が大きく、明治三十一年の革新直後の作品では植物の部位を詠み込むことが少なくなり、晩年の作品で再度植物の部位を多く詠み込むようになっていくこと。

二つに、明治三十年以前から三三年までの期間において植物の集まりを表す植物語彙を使用する傾向が強く、晩年（明治三四、三五年）では植物の集まりを表す植物語彙を使用する傾向が弱いこと。

三つに、革新前（明治三十年以前）から晩年へと年が下って行くに従って、植物によって生起した自然現象が起きた空間を詠むことが少なくなり、最晩年（明治三五年）では全く詠まれなくなっていること。

明治三十年以前の作品は植物の部位を詠み込む傾向が大きく、革新直後の作品では部位の種類は増えるが作品数が少なくなり、晩年の作品で再度植物の部位を多く詠み込むようになった理由に、次の四つが考えられる。

① 写生の対象を印象明瞭にする方法として歌材の配合によっていたこと

② 晩年では作品に自己の死が意識されていること

③ 晩年の子規の視覚能力の限界があったと考えられること

明治三十年以前から三三年までの期間において植物の集まりを表す植物語彙を使用する傾向が強く、大規模な植物の集まりが詠まれなくなった晩年（明治三四、三五年）では、植物の集まりを表す植物語彙を使用する傾向が弱くなった理由に、庭の景色をそのままに詠む「庭前即景」の歌風が確立したことと、子規が病気で寝たきりになったことで子規の世界の範囲が「病牀六尺」へと限られたことが考えられる。

革新前（明治三十年以前）から晩年へと年が下って行くに従って、植物によって生起した自然現象が起きた空間を

詠むことが少なくなり、最晩年では全く詠まれなくなった理由について、次の三つが考えられる。

一つは、趣味ある配合になるよう歌材の取捨選択を行ったこと

二つは、「庭前即景」の歌風と「病牀六尺」の世界になったことで配合を作ることが難しくなったこと

三つは、病気のため明治三三年までに詠まれていた「涼しさ」に対する「美」が詠まれなくなったこと

最後に本章での調査結果に基づき、植物語彙に対する短歌への写生について次にまとめる。

革新前（明治三十年以前）から革新後（明治三一〜三三年）の二つの期間での変化には、子規の短歌革新の実践に  
よるものが大きかった。

まず、明治三一年以降に、写生（俳句革新で既に俳句に取り入れられたもの）を短歌に取り入れたことで、歌材を  
印象明瞭にするために、「配合」という方法を用いていたということである。それは植物の部位を詳細に描く方法では  
なかったということから、植物の部位を歌に詠むことが減ったことに現れたと考えた。

また子規が短歌革新で主張したことの一つに「歌材の拡大」があるが、その影響から歌に詠まれる植物の部位の種  
類は増加した。また「植物による陰―陰の中にあるもの」の配合の内、「陰の中にあるもの」として人間や人工物につ  
いて積極的に用いる姿勢が三三年までみられるようになったことも、「歌材の拡大」の影響ではないか

革新後から晩年への変化には、子規の病状悪化によるところが大きかった。

まず歌に詠む植物の部位が「花」に偏ったことについて、晩年の作品の多くが自己の死が意識されていることと、  
晩年の子規の視覚能力の限界があったのではないか。

また、「庭前即景」の歌風が確立した後に、子規の世界が「病牀六尺」へと限られたことで、大規模な植物の集まりを歌に詠まなくなったり、「植物による陰—陰の中にあるもの」の配合を作ることが難しくなり、明治三三年までに詠まれていた「涼しさ」に対する「美」が詠まれなくなったのも、病気によるものではないかと考える。

### 第三節 植物語彙の表現方法

本節では、植物語彙が短歌に詠まれる際にどのような表現をされているのかについて見てゆく。

子規短歌の植物語彙の中で、植物の種類を表すものは非常に多く見られる。ここでは次の種類について扱う。

卯の花…明治三十年以前の作品で複数詠まれ、短歌革新後である明治三十一年以降に詠まれなくなる植物

山吹…明治三十年以前から最晩年までの六期間全てに詠まれている植物

牡丹…明治三十一年に初めて詠まれ、三十二年以降の期間で多く使用例の見られる庭にある植物。古来頻繁に使用されている植物。

藤…明治三十一年に初めて詠まれ、三十二年以降の期間で多く使用例の見られる庭にない植物。古来頻繁に使用されている植物。

薔薇…明治三十一年に初めて詠まれ、三十二年以降の期間で使用例が見られ、庭にある植物。古来頻繁に使用されている植物でないもの。

桑…明治三十一年に初めて詠まれ、三十二年以降の期間で使用例が見られ、庭にない植物。古来頻繁に使用されて

いる植物ではないもの。

稲 …明治三一年に初めて詠まれるが、以降の期間で使用例が見られない植物。古来頻繁に使用されているもの。

茸 …明治三一年に初めて詠まれるが、以降の期間で使用例が見られない植物。古来頻繁に使用されている植物ではないもの。

竹 …明治三三年までの四期間それぞれで複数例の使用があるが、明治三四年以降の晩年では使用例が見られない植物。

堇 …明治三四年以前にも使用例があり、晩年に使用例が多く見られる庭など身辺にある植物。

土筆 …明治三四年以前にも使用例がなく、晩年に使用例が多く見られる庭にない植物。

梅 …六期間通しての使用数が特に多く、庭にあり、花が鑑賞対象となる植物。古来頻繁に使用されているもの。

松 …六期間通しての使用数が特に多く、庭にあり、花が鑑賞対象ではない植物。古来頻繁に使用されているもの。

桜 …六期間通しての使用数が特に多く、庭になく、花が鑑賞対象となる植物。古来頻繁に使用されているもの。

杉 …六期間通しての使用数が特に多く、庭になく、花が鑑賞対象ではない植物。古来頻繁に使用されているもの。

## 卯の花

卯の花は明治三十年以前の作品にのみ見られる植物である。作品は次の六首である。植物語彙「卯の花」に対して使用された感覚表現ごとに例を挙げる。対象の感覚表現の箇所傍線を附す。

### 視覚表現 五首

あるかと思へばありと見ゆる也月のひかりにまがふ《卯の花》

(九七・十九年)

郭公おとづれにけり窓おせば月にゆらめく垣の《卯の花》

(一七〇・二四年)

ふみわけて上る山路の雪ならて駒のあかきにゆらく《卯の花》

(一九〇・二四年)

むらきえし山の白雪きてみれば駒のあかきにゆらく《卯の花》

(拾遺二二・二四年)

足引の山は緑に賤か家の《卯の花》白しなけ郭公

(二二四・二五年)

「卯の花」に対する視覚表現には、次のものが見られる。

「あるかとそ」の短歌では、「見ゆる」といった視覚行為と、「月のひかりにまがふ」といった卯の花の色（白色）の状態が表されている。

「郭公」の短歌では、「ゆらめく」といった動きと、「垣の（卯の花）」と垣に卯の花が存在する状態を表している。

「ふみわけて」の短歌では、「雪ならで」と卯の花の白さが雪と紛うほどである状態と、「ゆらく」といった動きが表されている。

「むらきえし」の短歌でも、「白雪（きてみれば）」と花の白さが雪のように見える状態、「ゆらく」といった動きが表されている。

「足引の」の短歌では、「賤が家の（卯の花）」と賤が家に咲いている状態と、「白し」と卯の花の色彩が表されている。

### 嗅覚表現 一首

くまもなきしづがいほりの庭もせに月の影のみかほる<sup>アヤ</sup>《卯の花》  
右の歌では、「かほる」と匂いが表現されている。

（一七一・二四年）

「卯の花」に対する感覚表現を見ると、六首に共通しているのは、卯の花を詠む際は花の白さを表現していることである。

明治十九年の作品では、卯の花を「月のひかりにまがふ」と、花の白さと月光の白さの繋がりを明示している。明治二十四年の作品（一七〇番、一七一番）では月と共に詠むことで、月光から卯の花の白さを読者に連想させると考えられる表現となっている。また同年の作品（一九〇番、拾遺二二二番）では、雪に紛うものとしての卯の花が詠まれている。

明治二五年の作品では、「白し」と卯の花の色が直接表現され、山の緑との対比となっている。

山吹

山吹を詠んだ作品は三一首である。その中で次の一首以外に「山吹」に対する視覚表現が詠まれている。

藤の歌《山吹のうた》歌又歌歌よみに我なりにけり

(拾遺四二九・三四年)

「山吹」に対する感覚表現の殆どは視覚表現であり、「動き」や「状態」などの視覚表現の内容は豊富である。次に期間ごとに、それぞれの視覚表現の例を抄出して挙げる。

明治三十年以前

視覚表現 七首

色を表すもの

そのいろにそみやしぬらん《山吹》の下行く水にさらす白ゆふ

(一四一・二四年)

かたりあふ友こそなけれ口なしの色にさくてふ《山吹の花》

(一四六・二四年)

動きを表すもの

水車ひゞく野川の夕寒みほろくとちる《款冬の花》

(一四二・二四年)

状態を表すもの

春駒のあゆみもおそし賤か家の垣根にさける《山ふきの花》

(一四四・二四年)

あやにくに枝のみたれて玉河の浪をりかへる岸の《山吹》

(一四五・二四年)

嗅覚表現 一首

《やまふき》のさきそめしより賤の女のやつれ衣にかほる春風

(一四三・二四年)

複合感覺表現（視覚＋嗅覚） 一首

《やまふき》のさきそめしより賤の女のやつれ衣にかほる春風

(一四三・二四年)

明治三十年以前の作品の「山吹」に対する視覚表現には、色を表すもの、動きを表すもの、状態を表すものとの三種類の内容が見られる。以降の期間では、状態を表す視覚表現に大きく偏ることから、この期間の視覚表現の内容は豊富であると言える。

「山吹」の香りが風によつて運ばれるといった嗅覚表現が見られるが、山吹の香りを詠んだ例はこの一首のみである。

明治三十一年

視覚表現 三首

動きを表すもの

人も來ず春行く庭の水の上にこほれてたまる《山吹の花》

(三六八・三十一年)



状態を表すもの

人も來ず春行く庭の水の上にこぼれてたまる《山吹の花》

(三六八・三一年)

里川の流にかけし水車汲みてはこぼす《山吹の花》

(四〇一・三一年)

軒並ぶ賤が伏家の門川に《山吹》咲いて蛙鳴くなり

(五一四・三一年)

明治三一年の「山吹」に対する視覚表現は、明治三十年以前の作品で見られた「色を表すもの」が用いられなくなっている。再び山吹の色を歌に明確に表現するのは、明治三四年以降まで見られない。

この期間での「山吹」の表現で特徴的であるのが、水の上に浮いている山吹の花が詠まれている点である。「人も來ず」の歌では「水の上に」と山吹の花のある場所が明示され、「こぼれてたまる」といった水面の花の動きが表現されている。

「里川の」の歌では「(水車) 汲みてはこぼす」と、川の水面に浮いている山吹の花が、水車に汲まれて水面にこぼされる状態を表している。

このような水面に浮いている山吹の花は、明治三十年以前の作品には見られない表現である。また明治三二年以降の作品にも用いられていない。

明治三二年

## 視覚表現 一首

状態を表すもの

《山吹》の花の盛りを巢こもりて子をあたゝむるカナリヤあはれ

(拾遺二五四・三二年)

明治三二年は右の一首のみである。この作品では「花の盛り」と山吹の花の状態が表されている。

この期間で「山吹」に対する視覚表現で新しく見られる内容は、次の二つである。

一つは、花の盛りを詠んだことである。

明治三一年までに詠まれている「山吹」の花の状態は、次の例のように、咲き始め、咲く、散る、散って水面にある状態である。

《やまふき》のさきそめしより賤の女のやつれ衣にかほる春風

(一四三・二四年)

春駒のあゆみもおそし賤か家の垣根にさける《山ふきの花》

(一四四・二四年)

さきいづる心もあやし草の家にこかね花ちる垣の《山ふき》

(一四七・二四年)

人も來ず春行く庭の水の上にこほれてたまる《山吹の花》

(三六八・三一年)

明治三二年に新しく見られる視覚表現は、花の状態を表すことで作品の時期を明確にしていることである。拾遺二五四番の歌では「山吹の花の盛り」と、カナリヤが巢籠っている時期を表している。

明治三三年

視覚表現 六首

動きを表すもの

春雨をふくめる空の薄曇《山吹の花》の枝も動かず

(一七〇一・三三年)

《山吹》は散り菜の花は實になりて五月一日われ厄に入る

(二七一・三三年)

状態を表すもの

我宿の《山吹》咲きて向つ家の一重櫻は葉となりにけり

(一六五一・三三年)

《山吹》は南垣根に菜の花は東堺に咲き向ひけり

(一六九四・三三年)

久方の曇り拂ひて朝日子のうらゝに照す《山吹の花》

(一七三五・三三年)

明治三三年の「山吹」に対する視覚表現の中で、この期間で初めて表されているものは、一七〇一番の歌での「動かず」といった動きの無いことの表現と、一七三五番の歌での「(朝日子のうらゝに)照す」といった日光に照らされている表現である。また、一六九四番の歌のように山吹が他の植物と同じ作品内に詠まれることも、明治三三年が初めてである。

明治三二年で見られた山吹の花の状態が作品の時期を表現したものは、明治三三年にも見ることが出来る。

前期間と異なるのは、明治三二年では山吹のみの状態で作品の時期を表現していたのが、明治三三年では、「菜の花」

と「一重櫻」の状態と共に詠まれていることである。また、菜の花と桜の状態は、「實になりて」「葉となりけり」と山吹の状態とは異なっており、表現の工夫が見られる。

明治三四年

## 視覚表現 十二首

色を表すもの

春雨のけならべ降れば葉がくれに黄色乏しき《山吹の花》

（拾遺三八二・三四年）

動きを表すもの

水汲みに往來の袖の打ち觸れて散りはじめたる《山吹の花》

（拾遺三七五・三四年）

状態を表すもの

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる《山吹の花》

（拾遺三七三・三四年）

雨のふる牡丹の花に傘すれば妬み顔なる垣の《山吹》

（拾遺四三一・三四年）

視覚行為を表すもの

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ《山吹の花》

（拾遺三八〇・三四年）

ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寐ながら見ゆる《山吹の花》

（拾遺三八一・三四年）

明治三四年の「山吹」に対する視覚表現には、色を表すもの、動きを表すもの、状態を表すもの、視覚行為を表すものの四種類の内容が見られる。

明治三四年で初めて見られる視覚表現は、「雨のふる」の歌での「妬み顔なる」といった山吹に擬人法を用いたものと、視覚行為を表すもの（「見えぬ」「見ゆる」）である。

明治三五年

### 視覚表現 一首

色を表すもの

赤椿黄色 《山吹》 紫ニムレテ咲ケルハタテノ花

（拾遺四九六・三五年）

明治三五年での「山吹」に対する視覚表現は、右の色を表すもののみである。

これまでの期間の作品と異なるのは、色の対比が、「赤」「黄」「紫」と三色であること、山吹が他の二種類の植物、椿と蓼と共に詠まれていることである。

山吹の色を他の色と共に詠んだ例は、明治三十年以前、明治三四年にも見られる。明治三十年以前の作品では白と、明治三四年の作品では暗色（葉陰）と共に詠まれている。

そのいろにそみやしぬらん 《山吹》 の下行く水にさらす白ゆふ

（一四一・二四年）

春雨のけなれば葉がくれに黄色乏しき《山吹の花》

(拾遺三八六・三四年)

山吹が他の植物と詠まれている例は明治三三年に見られ、右の例のように山吹と桜、山吹と菜の花と二種類での組み合わせである。

我宿の《山吹》咲きて向つ家の一重櫻は葉となりにけり

(一六五一・三三年)

《山吹》は南垣根に菜の花は東堺に咲き向ひけり

(一六九四・三三年)

以上より明治三五年の「山吹」に対する視覚表現は、これまでの期間の延長にあるものと言える。

#### 卵の花と山吹について

これまで「卵の花」と「山吹」について見てきた。「卵の花」も「山吹」も明治三十年以前の作品で詠まれている題材であるが、「卵の花」は短歌革新以降には詠まれず、「山吹」は以降の五期間全てに使用例が見られる唯一の種類の植物であり、この二つの植物は対照的と言える。

卵の花と山吹は、どちらも古来頻繁に使用されている植物である。子規にとつての両者の違いは、卵の花は庭に無く山吹は庭にあることであるが、明治三十一年から最晩年である明治三五年までの子規短歌には、庭や枕元に無い植物を詠んだ作品が多く見られる。次に庭にない植物の例を挙げる。

小山田の《稻》を逐はれか稻雀裾田の《稻》にむれ下る見ゆ

(七七三・三一年)

人も來ぬ奥山路の《百合の花》神や宿らん折らんと思へど

(一一七四・三二年)

龜井戸ノ《藤》ノサカリニ群レ遊ブ振袖少女ウツクシト見ズヤ

(一六〇四・三三年)

われひとり見てもたぬしき都べの《櫻の花》を親と二人見つ

(拾遺四〇二・三四年)

そらみつ、《やまとのいも》は、鶯のねの、とろゝにすなる、つくいもなるらし

(拾遺五〇八・三五年)

右より、庭への植物の有無が、子規短歌での「卯の花」と「山吹」の使用実態の差に直接結びついているとは考え難い。

卯の花と山吹の違いについて、卯の花が白色であり山吹が黄色であることが挙げられる。子規は色の「配合」について次のことを述べている。明治三二年の随筆「赤」<sup>注21</sup>より引用する。

…そこで余は一つの理想的の家屋を建築したいと思ふて居る。…例へば談話室は壁も天井も窓掛もテーブル掛も皆眞白な色を用ゐて、テーブルの上に紅の牡丹を三輪活けて置く。…

この子規の主張では白色は赤色を際立たせる役割を持つており、主となる色ではない。しかし子規短歌には白色の植物が他の色の植物と並列の関係で用いられたもの(例一七〇六番)や、白色の植物が題材の主となっているもの(例一一七三番)を複数見ることが出来る。

草枕旅ゆ歸れば我庭の赤薔薇散りて《白薔薇》咲きぬ

(一七〇六・三三年)

足引の山のしけみの迷ひ路に人より高き《白百合の花》

(一一七三・三二年)

左の歌のように、他の色(主に赤色)を際立たせる以外の用法として白色が用いられている例が複数見られることから、卯の花が子規短歌で歌材から外れたことは、色によるものではないと言える。

卯の花が明治三一年以降に詠まれないことについて、感覚表現の面から確認する。

明治三十年以前の作品の「卯の花」に対する感覚表現は全て、花の白さに注目したものである。白さの表現として他の白色の自然物（月、雪）を用いている。

卯の花の白さを詠んだもの、卯の花と共に月や雪など白色の自然物を詠んだ古歌の例は多く見られる。次に古歌の例を三首挙げる。例は『万葉集』と勅撰集より抄出した。

五月山

サツキヤマ  
ウノハナツキヨ

宇能花月夜

ホトトギス  
キヤドモアカズ

雖聞不飽

又鳴鴨

マタナカムカモ

（万葉集・一九五七）

ゆきとのみあやまたれつつ《うの花》にふゆこもれりとみゆるやまざと

（後拾遺和歌集・一七七・源道済）

《うのはな》のさけるさかりはしらなみのたつたのかはのみせきとぞみる

（後拾遺和歌集・一七六・伊勢大輔）

子規短歌には「卯の花」に対して嗅覚表現が一例見られるが、古歌にも類例を複数見ることが出来る。最も古い使用例を挙げる。

《うのはな》のにほふさつきの月きよみいねずきけとやなくほととぎす

（家持集・七〇）

このように明治三十年以前の子規短歌の「卯の花」に対する感覚表現は、「山吹」と比べ内容が限られており、古歌に類例が見られるものである。

子規短歌の「山吹」に対する感覚表現は、「卯の花」の場合と比べ、表現の内容の種類が豊富である。歌詞としての「山吹」の詠み方には次のものがある。左に『歌ことば歌枕大辞典』の「山吹」の項に挙げられている内容を、六つ



に分けて挙げる。<sup>注22</sup>

① 川が詠まれる

② 「井出」の山吹が「蛙」とともに詠まれる

③ 花が散りやすい特徴から、「移ろふ」（散る）と「映ろふ」を掛けて詠む

④ 女性に譬える

⑤ 梔子色と掛けて、返事のない恋人を「口無し」と表現する

明治三十年以前の子規短歌の「山吹」の感覚表現の中で、川辺に咲く山吹（①）や散る山吹（③）、梔子色の表現（⑤）が詠まれた例が見られる。次に子規短歌の例を抄出する。

水車ひゞく野川の夕寒みほろ／＼とちる《款冬の花》

（一四二・二四年）

かたりあふ友こそなけれ口なしの色にさくてふ《山吹の花》

（一四六・二四年）

子規短歌では「山吹」と共に川が詠まれる例、歌詞としての詠み方の①に該当する例は複数見られる。

しかし、歌詞としての詠み方③、⑤について、右の「水車」の歌のように、山吹の散る様子を詠む際には「散る」のみの表現であり、「うつろふ」の掛詞は見られず、また「かたりあふ」の歌では「梔子の色」と「口無し」が表現されているが、「口無し」の相手は「友」であり「恋人」ではない。

このように「山吹」の場合は、短歌革新前でも古典和歌の表現をそのまま用いていない例を見ることが出来る。なお「山吹」に対する嗅覚表現は古歌に複数例見ることが出来る。勅撰集の例を挙げる。

にほふよりはるはくれゆく《やまぶき》のはなこそはなのなかにつられ

（続古今和歌集・一六七・前中納言定家）

以上の「卯の花」と「山吹」に対する、明治三十年以前での詠み方の違いが、明治三十一年以降の使用実態の差に繋がったのではないだろうか。

明治三十年以前で「卯の花」を詠んでいた中で、「卯の花」を「陳腐な趣向」でない表現をし難いと判断し、明治三十一年以降に詠むことが無くなったのではないだろうか。

## 牡丹

子規短歌の「牡丹」に対する感覚表現の殆どが視覚表現である。その中で次の二首には「手折る」「手に持つ」といった触覚表現も使用されている。「牡丹」に対する触覚表現の箇所には傍線を附す。

赤き《牡丹》白き《牡丹》を手折けり赤きを君にいで贈らばや  
（三四二・三一年）

つくり花の《牡丹の花》を手にもちて踊りつれたる二むら少女  
（一五三五・三三年）

右の二首は、「牡丹」に対する感覚表現に「赤き」や「つくり花の」と「牡丹」の状態が表されているので、視覚表現と触覚表現の複合感覚表現である。

次の一首は「牡丹」に対する感覚表現が見られないとする。

出羽に行きし吾旅傘の柄はぬけて今か《牡丹》の雨ふせき傘  
（拾遺四三二・三四年）

「牡丹」に対する視覚表現について、各期間でまとめる。抄出した歌例の傍線は、「牡丹」に対してそれぞれ該当する視覚表現に附したものである。触覚表現と複合感覚表現については、右に挙げたので省略する。

明治三十一年

## 視覚表現 二首

色を表すもの

赤き《牡丹》白き《牡丹》を手折けり赤きを君にいで贈らばや

(三四二・三一年)

状態を表すもの

とばり垂れて閨より人は起き出でず《牡丹の花》に朝日さすなり

(三四一・三一年)

明治三十一年の作品の「牡丹」に対する視覚表現は、「赤き」「白き」といった色を表すもの(左の三四二番)と、「朝日さす」といった光が当たっている状態を表すもの(左の三四一番)の二種類が見られる。

赤き《牡丹》白き《牡丹》を手折けり赤きを君にいで贈らばや

(三四二・三一年)

とばり垂れて閨より人は起き出でず《牡丹の花》に朝日さすなり

(三四一・三一年)

牡丹の色の「配合」について、明治三十一年から使用例が見ることができ、右の三四二番の歌のような赤い牡丹と白い牡丹の組み合わせは明治三十三年の作品(左の一七二五番)にも見られ、赤い牡丹と紫色の藤の組み合わせは明治三十四年(左の拾遺三七〇番)に見られる。

くれなゐと眞白と並び咲く花の《牡丹》も君をことほぐが如し

(一七二五・三三年)

くれなゐの《牡丹の花》にさきだちて藤の紫咲きいでにけり

(拾遺三七〇・三四年)

左の例では「牡丹」の紅色が鮮やかであるために他の植物（千草）の色が霞んだという、「牡丹」と「千草」の対比が見られる。

くれなゐの《牡丹の花》の咲きしより庭の千草は色なかりけり

(一一二四・三二年)

「牡丹」の紅色と白色の組み合わせについて、俳句に類例が見られる。作句年より俳句から短歌への発想の取り入れを見ることができる。俳句例を挙げる。次に明治二年の子規の俳句を挙げる。この句では「雪」といった白いものが詠まれている。

雪よりも時雨にもろし冬牡丹

「冬牡丹」の色について、次の明治二六年に作られた句を挙げる。ここで「冬牡丹」の色が「赤色」であったと示されている。

花いけに一輪赤し冬牡丹

またこの句に近い状況を詠った作品が、明治三三年に見られる。次の短歌では「白」と「赤」の組み合わせが見られるが、この色の組み合わせは俳句から取り入れた発想と考えられる。

砥部焼の乳の色なす《花瓶》に梅と椿と共に活けたり

(一四三七・三三年)

明治三二年

視覚表現 八首

色を表すもの

おくり物《牡丹の花》の紅に草の庵は光立ちけり

(一一二一・三二年)

くれなゐの《牡丹の花》の咲きしより庭の千草は色なかりけり

(一二二四・三二年)

動きを表すもの

いちはやく《牡丹の花》は散りにけり我がいたつきのいまだいえなくに

(一二二六・三二年)

状態を表すもの

あらたての草のいほりをゆるがして鉢に植ゑたる《牡丹》もて來つ

(一二二〇・三二年)

こいまろふ病の床のくるしみの其側に《牡丹》咲くなり

(一二二二・三二年)

照りはゆる《牡丹の花》のかたはらにあはれに見ゆる鐵線の花

(一二二七・三二年)

視覚行為を表すもの

たく袞さわやが下のいたつきに《牡丹の花》を見れば悲しも

(一二二五・三二年)

明治三二年の作品の「牡丹」に対する視覚表現の中で、この期間で初めて見られる表現は次の通りである。

①「おくり物」の歌のように牡丹の色が映える様を「光立ちけり」と強調する表現

おくり物《牡丹の花》の紅に草の庵は光立ちけり

(一一二一・三二年)

②「いちはやく」と「こいまろふ」の歌での、「散る(散り)」(一二二六番)と「咲く」(一二二番)といった花の変化を表すもの

いちはやく《牡丹の花》は散りにけり我がいたつきのいまだいえなくに

(一二二六・三二年)

こいまろふ病の床のくるしみの其側に《牡丹》咲くなり

(一二二二・三二年)

③「あらたての」の歌のような鉢植えの状態であることを表すもの

あらたての草のいほりをゆるがして鉢に植ゑたる《牡丹》もて來つ

(一二二〇・三二年)

④「照りはゆる」の歌のように牡丹と一緒に他の植物(一二二七番では鉄線)を詠んだもの

照りはゆる《牡丹の花》のかたはらにあはれに見ゆる鐵線の花

(一二二七・三二年)

⑤「たく衾」の短歌の「見れは」といった、視覚行為を表すもの

たく衾さわが下のいたつきに《牡丹の花》を見れは悲しも

(一二二五・三二年)

明治三三年

## 視覚表現 十七首

光影を表すもの

くれないの光をはなつから草の《牡丹の花》は花の王

(二六八一・三三年)

色を表すもの

高瓶にさせる《牡丹》のこき花の一ひらちりて二ひらちりぬ

(一七〇五・三三年)

鉢植に二つ咲きたる《牡丹の花》くれなゐ深く夏立ちにけり

(一七一六・三三年)

動きを表すもの

病みふせるわが枕邊に運びくる鉢の《牡丹》の花ゆれやまず

(一六七九・三三年)

状態を表すもの

ともし火の光に照す窓の外の《牡丹》にそゞぐ春の夜の雨

(一五一五・三三年)

たて川のさちをがりより贈り來し《牡丹の花》にふみ結びあり

(一六八〇・三三年)

くれなゐの若菜アヤひろがる鉢植の《牡丹の蕾》いまだなかりけり

(一七〇〇・三三年)

高瓶にさせる《牡丹》のこき花の一ひらちりて二ひらちりぬ

(一七〇五・三三年)

はしきやし少女に似たるくれなゐの《牡丹》の陰にうつゝ眠る

(一七一七・三三年)

くれなゐと眞白と並び咲く花の《牡丹》も君をことほぐが如し

(一七二五・三三年)

視覚行為を表すもの

蓬生の病の床に鶴をくひ《牡丹》をななめわが富貴足る

(一六八二・三三年)

明治三三年では「牡丹」を詠んだ作品が多く、またその表現も多様になっている。

「くれなゐの光をはなつ」の短歌では「光をはなつ」といった光影を表す視覚表現が使用されている。この「牡丹」に対して光影を表現する例はこの一首のみである。

くれなゐの光をはなつから草の《牡丹の花》は花の王

(一六八一・三三年)

色を表すものについて、これまでの期間では「牡丹」の色が紅色であることや、色鮮やかであることを表すのみであったのが、「こき花」(一七〇五番)「くれなゐ深く」(一七一六番)ではより詳細な色の描写となっている。

高瓶にさせる《牡丹》のこき花の一ひらちりて二ひらちりぬ

(一七〇五・三三年)

鉢植に二つ咲きたる《牡丹の花》くれなゐ深く夏立ちにけり

(一七一六・三三年)

明治三四年以降は、左の例のように、再び「牡丹」の色は紅色と示されるのみとなる。

くれなゐの《牡丹の花》におほひたるやふれ小傘に雨のしきふる

(拾遺四三〇・三四年)

動きを表すものについて、これまでの「散る」以外に、「病みふせる」の歌の「ゆれやまず」といった、人の手で運ばれることによる花の揺れの表現が見られるようになる。

病みふせるわが枕邊に運びくる鉢の《牡丹》の花ゆれやまず

(一六七九・三三年)

右の短歌のような、「牡丹」の揺れる動きの表現は翌年以降の作品には見られなくなる。

状態を表すものについて、この期間では多様な状態の「牡丹」が詠まれている。特に明治三三年で初めて詠まれている雨中の「牡丹」(二五一五番)は、明治三四年に連作の題材になっている。

ともし火の光に照す窓の外の《牡丹》にそぐ春の夜の雨

(一五一五・三三年)



明治三四年

また次の「はしきやし」の短歌のように「牡丹」を女性に譬える表現も明治三四年にも例が見られる。

はしきやし少女に似たるくれなゐの《牡丹》の陰にうつゝ眠る

(一七一七・三三年)

右の歌のように歌中で「牡丹」を女性に譬える表現は歌詞としての用法には見られない。また子規短歌で見られる「牡丹」と「少女」を組み合わせる例は、古歌に見られないものであり、子規独自の表現と考えられる。

## 視覚表現 十五首

色を表すもの

雨ふると《牡丹》の上に蔽ひたる小傘かくれに赤き花見ゆ

(拾遺四三五・三四年)

くれなゐの《牡丹の花》にさきだちて藤の紫咲きいでにけり

(拾遺三七〇・三四年)

去年君がたひし《牡丹》も今日已につぼみやぶれて紅の見ゆ

(拾遺四二七・三四年)

動きを表すもの

今日明日に君來まさずば我庭の《牡丹の花》の散過むかも

(拾遺四二六・三四年)

状態を表すもの

病む我をなぐさめがほに開きたる《牡丹の花》を見れば悲しも

(拾遺三八五・三四年)

雨そゞぐ庭のかたへに傘さして立てる《牡丹》は美人の如し

(拾遺四三七・三四年)

賤か家の貧しき庭に濡れて立つ雨の《牡丹》よ傘まゐらせん

(拾遺四三八・三四年)

二つ咲く《牡丹の花》におほひたるかはほり傘のふちの雨だれ

(拾遺四三九・三四年)

視覚行為を表すもの

春雨の《牡丹》におほふ傘を低み一つの花は隠れて見え

(拾遺四三六・三四年)

ガラス戸の外面に咲けるくれなゐの《牡丹の花》に蝶の飛ぶ見ゆ

(拾遺四四〇・三四年)

明治三四年も「牡丹」を詠んだ作品は多いが、明治三年の「牡丹」を詠んだ作品よりも表現が限られている。

例えば、「牡丹」の動きの表現では「散る」のみとなり、状態の表現でも「雨そゞぐ」「賤か家の」「二つ咲く」の歌のような、雨の中で蔽いがなされている状態の「牡丹」の例が多く詠まれている。明治三四年に雨中の「牡丹」が多く詠まれているのは、「牡丹」と題の付された十一首の連作で雨中の「牡丹」が題材となっているためである。

また色を表すものでも、「牡丹」の紅色・赤色の詳細な説明がなくなっている。明治三四年では「牡丹」の詳細な色の説明ではなく、他のものとの組み合わせ(例 「小傘かくれ」「藤の紫」「蝶」(拾遺四四〇番)や「つばみやぶれて紅の見ゆ」(拾遺四二七番)といった紅色の見え方の表現となっている。

「牡丹」で色名として「赤」を用いられたのは拾遺四三五番が初めてであるが、「赤」と表現された植物は明治三一年に次の例が見られる。

赤き《牡丹》白き牡丹を手折けり赤きを君にいで贈らばや

(三四二・三一年)

視覚行為を表す例は他の期間と比べて多く、六首に使用例を見ることが出来る。この中で明治三四年で初めて表現されているものは、「春雨の」の短歌の「隠れて見えず」のように「牡丹」が見えないことである。しかし植物が見えないことを詠んだ例は既に明治三二年の次の例が見られる。

春浅き野川の氷《芹》も見えず目高も見えず北山風

(一〇三一・三二年)

# 藤

子規短歌の「藤」は、「藤」に対する感覚表現の見られない次の二首を除き、全て視覚表現が見られる。

《藤波》は花にしありけり波の花は皿にもりたる鹽にしありけり

(拾遺三一八・三三年)

《藤の歌》山吹のうた歌又歌歌よみ人に我なりにけり

(拾遺四二九・三四年)

「藤」に対する感覚表現は殆ど視覚表現のみであるが、次の一首に視覚表現と触覚表現の両方が見られる。視覚表現には一重の傍線、触覚表現には二重の傍線を附す。

廣前の池の水際にしだれたる《藤の末花》鬢にさやりぬ

(一七二八・三三年)

明治三一年

## 視覚表現 二首

状態を表すもの

裏畑の梨散り庭の《藤》咲きてやがて燕の巢は成りにけり  
夏ながら《藤》咲く山の山道を山郭公聞きつゝぞ行く

(六二六・三一年)  
(六五四・三一年)

明治三一年の「藤」に対する表現は、「咲く」といった状態を表すものと、「藤咲く」山の「(六五四番)の藤が山に咲いている状態を表すものである。

明治三三年

## 視覚表現 二五首

色を表すもの

《藤》さけるしきなか濱に風ふけは御船によする紫の浪

(一八〇六・三三年)

動きを表すもの

松か枝を折りてさくる御やつこの其手震へか《藤波》ゆらく

(一八一・三三年)

状態を表すもの

百花の千花を絲につらぬける《藤の花房》長く垂れたり

(一七二六・三三年)

廣前の池の水際にしだれたる《藤の末花》鬢にさやりぬ

(一七二八・三三年)

君かみゆきありともしらて吉備の國の荒磯へたに《藤》咲きにけん

(一八〇九・三三年)

みつかさの折りてさゝくる松か枝に長きみしかき《藤波の花》

(一八一三・三三年)

大君の御前にしほむ紫の《藤波の花》すてまくをしも

(一八一五・三三年)

御社の《藤の花房》長き日をはりこづくりの龜が首ふる

(拾遺三二六・三三年)

つゝみある身のさかしらに遠く来てそゞろに寒き《藤》の下風

(拾遺三一九・三三年)

視覚行為を表すもの

池の邊のさじきに垂るゝ《藤の花》見れば長けく折れば短し

(一七三〇・三三年)

触覚表現 一首

触覚行為を表すもの

廣前の池の水際にしだれたる《藤の末花》鬢にさやりぬ

(一七二八・三三年)

複合感覚表現（視覚表現と触覚表現） 一首

廣前の池の水際にしだれたる《藤の末花》鬢にさやりぬ

(一七二八・三三年)

明治三三年は「藤」を詠んだ作品が多く見られる。それは「藤花」と題の付された七首の連作と、「嚴島行幸」と題の付された十一首の連作（十一首に共通の題材が「藤」である）があるためである。

「藤」に対する表現は、明治三一年と比べ多様なものとなっている。「藤」に対する視覚表現の殆どが「藤」の状態

を表すものであり、その殆どが次の三つのいずれかの状態を表している。

①「(長く) 垂れたり」(一七二六番)「(水際に) しだれたる」(一七二八番)といった花房が垂れている状態

百花の千花を絲につらぬける《藤の花房》長く垂れたり (二七二六・三三年)

廣前の池の水際にしだれたる《藤の末花》鬢にさやりぬ (二七二八・三三年)

②「廣前の池の水際」(一七二八番)や「荒磯へた」(一八〇九番)のような水辺にある状態

廣前の池の水際にしだれたる《藤の末花》鬢にさやりぬ (二七二八・三三年)

君かみゆきありともしらて吉備の國の荒磯へたに《藤》咲きにけん (一八〇九・三三年)

③「長きみしかき(藤波の花)」(一八一三番)といった「藤」の長短の状態

みつかさの折りてさゝくる松か枝に長きみしかき《藤波の花》 (一八一三・三三年)

他の植物に多く見られる「咲く」や「散る」といった表現は少なく、特に「藤」の散る表現は、明治三三年に限らず六期間通して見ることができない。盛りを過ぎた「藤」の視覚表現は、「大君の」の短歌の「(大君の御前に) しばむ」の例と、明治三四年の左の短歌の「しをれたる」の例のみである。

大君の御前にしばむ紫の《藤波の花》すてまくをしも (一八一五・三三年)

八入折の酒にひたせばしをれたる《藤なみの花》よみがへり咲く (拾遺三七二・三四年)

歌詞としての「藤」の表現に次のものがある<sup>注22</sup>。

…松にかかる藤の花もその松にあやかって千歳の花となるとして、この藤と松の組み合わせは不動のものとなる

…

「藤」は「松」との組み合わせにより「千歳の花」の意味が付随されるが、次の子規の短歌では「松」との組み合わせなしに「藤」に「千歳の花」としての意味が含まれている。左の短歌は「東宮御婚儀を祝する歌」と題の付されている長歌の反歌三首の二首目の作品である。

さす竹の宮人祝ふ今日の日に《藤》をかざして民もよろこぶ

(一七二四・三三年)

このように子規には「藤」を「千歳の花」とする意識があると言え、そのために盛りの過ぎた「藤」が詠まれることが、他の花と比べ少ないと考えられる。

「藤」の長短を表す表現は明治三四年の作品にも見られるが、「御社の」の「藤の花房長き日を」のように、花房の長さや日の長さを掛けた表現は、この一首のみである。

御社の《藤の花房》長き日はりこづくりの龜が首ふる

(拾遺三一六・三三年)

明治三三年では外出先(屋外)での「藤」を詠んでおり、次の「つゝみある」の歌では「藤」が風に吹かれている状態を表している例が見られる。

つゝみある身のさかしらに遠く来てそぞろに寒き《藤》の下風

(拾遺三一九・三三年)

このような風に吹かれるといった気象現象を受ける「藤」が詠まれることは、明治三四年では使用例が見られない。明治三四年の「藤」の殆どが室内のものであることが影響していると考えられる。

明治三四年

視覚表現 十一首

色を表すもの

《藤なみ》の花の紫繪にかゝばこき紫にかくべかりけり

(拾遺三六七・三四年)

くれなゐの牡丹の花にさきだちて《藤》の紫咲きいでにけり

(拾遺三七〇・三四年)

状態を表すもの

瓶にさす《藤の花ぶさ》みじかければたゞみの上にとどかざりけり

(拾遺三六三・三四年)

瓶にさす《藤の花ぶさ》花垂れて病の牀に春暮れんとす

(拾遺三六八・三四年)

この《藤》は早く咲きたり龜井戸の《藤》咲かまくは十日まり後

(拾遺三七一・三四年)

視覚行為を表すもの

《藤なみ》の花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも

(拾遺三六五・三四年)

明治三四年の「藤」に対する感覚表現は、明治三年の表現よりもやや限られたものとなっている。視覚表現の内の動きを表すものと触覚表現が見られなくなっている。

明治三四年で新しく見られる表現に、左の「藤なみの」の短歌のような「藤」を写生（絵画）の対象とする表現が見られる。



《藤なみ》の花の紫繪にかゝばこき紫にかくべかりけり

(拾遺三六七・三四年)

また明治三三年で多く見られた水辺の「藤」が殆ど詠まれなくなり、代わりに「瓶にさす藤の花ぶさ」(拾遺三六三番、拾遺三六八番)といった室内の「藤」が詠まれるようになる。

瓶にさす《藤の花ぶさ》みじかければたゞみの上にとどかざりけり

(拾遺三六三・三四年)

瓶にさす《藤の花ぶさ》花垂れて病の牀に春暮れんとす

(拾遺三六八・三四年)

視覚行為を表すものについて、「牡丹」の場合と同様に「藤」の視覚表現でも、明治三四年に使用例がやや多くなっている。

## 薔薇

「薔薇」に対する感覚表現は次の一首を除き全てに視覚表現が用いられている。

くれなゐのとばり垂れたる窓の内に《薔薇の香》満ちてひとり寐る少女

(一五四〇・三三年)

右の「薔薇の香」に対する感覚表現は嗅覚表現であり、「満ちて」と香りがある状態を表している。また「薔薇の香」の語彙自体に「香」と嗅覚表現が見られる。

「薔薇」に対する嗅覚表現の例には、次のものも見られる。この作品では嗅覚表現(二重傍線)の他に、視覚表現(一重傍線)と触覚表現(波線)が見られる。

紅の薄色匂ふ《薔薇の花》を折りて手にもちて香を嗅く少女

(一五四一・三三年)

触覚表現について、右の一首の他に次の一例を見ることができる。次の二首は視覚表現（一重傍線）と触覚表現（波線）の複合感覚表現である。

たま／＼に窓を開けば五月雨にぬれても咲ける《薔薇の赤花》

（六九三・三一年）

明治三一年

### 視覚表現 三首

動きを表すもの

うたゝ寐のうたゝ苦しき夢さめて汗ふき居れば《薔薇の花》散る

（八三三・三一年）

状態を表すもの

わが庭の垣根に生ふる《薔薇の芽》の蒼ふくれて夏は來にけり

（六四一・三一年）

たま／＼に窓を開けば五月雨にぬれても咲ける《薔薇の赤花》

（六九三・三一年）

### 触覚表現 一首

湿度を表すもの

たま／＼に窓を開けば五月雨にぬれても咲ける《薔薇の赤花》

（六九三・三一年）

複合感覚表現（視覚表現・触覚表現） 一首

たま／＼に窓を開けば五月雨にぬれても咲ける《薔薇の赤花》

（六九三・三一年）

明治三一年の「薔薇」に対する感覚表現は殆ど視覚表現である。触覚表現が一例見られるが、以降の期間の作品に「薔薇」に対する触覚表現が一例のみであることから、左の六九三番の歌で見られる濡れている「薔薇」が題材として確立することはなかったと言える。

たま／＼に窓を開けば五月雨にぬれても咲ける《薔薇の赤花》

（六九三・三一年）

視覚表現について、「散る」（八三三番）、「荅ふくれて」（六四一番）、「咲ける」（六九三番）のような「薔薇」の成長に即した動きや状態を表すもの、「垣根に生ふる」（六四一番）といった「薔薇」のある場所を示すものが見られる。

うたゝ寐のうたゝ苦しき夢さめて汗ふき居れば《薔薇の花》散る

（八三三・三一年）

わが庭の垣根に生ふる《薔薇の芽》の荅ふくれて夏は來にけり

（六四一・三一年）

たま／＼に窓を開けば五月雨にぬれても咲ける《薔薇の赤花》

（六九三・三一年）

また他の植物に複数見られる視覚表現である色を表すものについては、「薔薇の赤花」（六九三番）の語彙自体に色を表す表現が含まれている。

たま／＼に窓を開けば五月雨にぬれても咲ける《薔薇の赤花》

（六九三・三一年）

明治三二年

視覚表現 二首

色を表すもの

暁の祈らんとすれは花いけの白き《薔薇》散りぬバイブルの上に

(一二〇六・三二年)

動きを表すもの

暁の祈らんとすれは花いけの白き《薔薇》散りぬバイブルの上に

(一二〇六・三二年)

状態を表すもの

鯉節紙に包みて水引に松と《薔薇》とをくゝりそへて遣る

(一二二九・三二年)

暁の祈らんとすれは花いけの白き《薔薇》散りぬバイブルの上に

(一二〇六・三二年)

明治三二年の「薔薇」に対する視覚表現は、明治三一年の内容とほぼ重複していると言える。「薔薇」が松と一緒に水引に使用されている状態(一二九番)と、花瓶に活けてある状態(一二〇六番)を表現している点は、明治三一年に見られない表現である。

鯉節紙に包みて水引に松と《薔薇》とをくゝりそへて遣る

(一二二九・三二年)

暁の祈らんとすれは花いけの白き《薔薇》散りぬバイブルの上に

(一二〇六・三二年)

明治三三年

視覚表現 六首

色を表すもの

くれなゐの二尺伸びたる《薔薇の芽》の針やはらかに春雨のふる  
動きを表すもの

(一六九六・三三年)

サ庭ベノ草木動カシ吹き過グル風シヅマリテ《薔薇ノ花》散ル  
状態を表すもの

(一八四二・三三年)

冬こもり茶をのみをれは活けて置きし《一輪薔薇》の花散りにけり  
草枕旅ゆ歸れば我庭の《赤薔薇》散りて《白薔薇》咲きぬ  
船長の船部屋狭み姿見の鏡の前に《薔薇》の鉢置けり

(一三六二・三三年)

(一七〇六・三三年)

(一七五二・三三年)

嗅覚表現 二首

くれなゐのとばり垂れたる窓の内に《薔薇の香》満ちてひとり寐る少女  
紅の薄色匂ふ《薔薇の花》を折りて手にもちて香を嗅く少女

(一五四〇・三三年)

(一五四一・三三年)

触覚表現 一首

紅の薄色匂ふ《薔薇の花》を折りて手にもちて香を嗅く少女

(一五四一・三三年)

複合感覺表現(視覚表現・嗅覚表現・触覚表現) 一首

紅の薄色匂ふ《薔薇の花》を折りて手にもちて香を嗅く少女

(一五四一・三三年)

明治三三年の「薔薇」に対する視覚表現の内容は、「薔薇」の紅色を表すもの、「薔薇」が散る動きを表すもの、「薔薇」が咲いている状態を表すもの、「薔薇」が鉢植えの状態であることを表すものが見られる。これらの視覚表現の内容は明治三十一年、三十二年と類似している。

「薔薇」に対する嗅覚表現が二例見られるが、二例ともに「艶麗體」と題の付された十一首の作品群に属しており、また以降の期間に使用例が見られないことから、「薔薇」の香りが歌の題材として確立していないと言える。

明治三四年

視覚表現 一首

色を表すもの・状態を表すもの

くれなゐの《薔薇》ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

(拾遺三八九・三四年)

明治三四年の「薔薇」に対する視覚表現の内容に、明治三三年までの作品に見られない表現の使用例はない。  
「薔薇ふゝみぬ」といった植物の成長に即した状態と季節の推移を対応させている作品は、左の例のように以前の作品にも見られる。

わが庭の垣根に生ふる《薔薇の芽》の蒼ふくれて夏は來にけり  
(六四一・三一年)

右の例では「夏は來にけり」と一般的な季節の推移を表しているが、明治三四年の作品では「我病いやまさるべき時のしるしに」といった個人的な季節の推移の表現となっている。

## 桑

「桑」に対する感覚表現は全て視覚表現のみである。

明治三一年

### 視覚表現 五首

状態を表すもの

山里に蠶飼ふなる五畝の宅麥はつくらず《桑》を多く植う  
(三六四・三一年)

《桑の田》は青海原となりぬべし末の松山波は越えじな  
(四六九・三一年)

《夏桑》の畑に雪ふりわたらひのいすゝの宮に火は飛びにけり  
(八二二・三一年)

病みて臥す軀をはるかにとふらへは《桑の林》に日は落ちんとす  
(八四五・三一年)

病みて臥すうばが家遠くとふらへは《桑の林》に日はかたふきぬ

(八五五・三二年)

明治三一年の「桑」に対する視覚表現には、次のものが見られる。

① 次の短歌の「多く植う」といった「桑」が多い様子

山里に蠶飼ふなる五畝の宅麥はつくらず《桑》を多く植う

(三六四・三一年)

② 「青海原となりぬ」といった成長に即した「桑」の状態の表現

《桑の田》は青海原となりぬべし末の松山波は越えじな

(四六九・三二年)

③ 「(夏桑の畑に) 雪ふり」といった「桑」に雪が降っている状態

《夏桑》の畑に雪ふりわたらひのいすゝの宮に火は飛びにけり

(八二二・三二年)

④ 「日は落ちんとす」と「日はかたふきぬ」といった「桑(の林)」の近くに日がある状態

病みて臥す軀をはるかにとふらへは《桑の林》に日は落ちんとす

(八四五・三一年)

病みて臥すうばが家遠くとふらへは《桑の林》に日はかたふきぬ

(八五五・三二年)

特に「桑」が多く存在する表現について、「桑の田」「桑の林」といった語彙にも「桑」が多く植えられていることを示す表現(「田」「林」が含まれており、「桑」に対する視覚表現は「桑」の集合を表す例が殆どであると言える。



明治三二年

視覚表現 三首

色を表すもの

蠶飼する木曾の山里五月來て《桑の實》赤し鳴くほとゝきす

(一〇九九・三二年)

状態を表すもの

山里は蠶飼《桑》つみいとまなみつけの小櫛もとらて日を経つ

(一〇五二・三二年)

山陰の《桑畑》遠み日は暮れぬ蠶や飢ゑつらん我も飢ゑたる

(一〇五三・三二年)

明治三二年の「桑」に対する視覚表現は、「赤し」(一〇九九番)といった色を表すもの、摘まれている状態を表すもの(一〇五二番)、「山陰」に「桑(畑)」が存在することを表すものの三つが見られ、いずれも明治三二年には見られない内容である。

明治三一年の作品では「桑」が多数あることが表現されており、明治三二年の「桑」も多数存在することが表現されている。次の「蠶飼する」の歌と「山里は」の歌での「桑」は養蚕によるものであり、多数植えられているものと判断できる。

蠶飼する木曾の山里五月來て《桑の實》赤し鳴くほとゝきす

(一〇九九・三二年)

山里は蠶飼《桑》つみいとまなみつけの小櫛もとらて日を経つ

(一〇五二・三二年)

また次の「山陰の」の歌では「桑畑」とあるので「桑」は多いと言える。

山陰の《桑畑》遠み日は暮れぬ蠶や飢ゑつらん我も飢ゑたる

(一〇五三・三二年)

# 稲

「稲」を詠んだ作品は明治三十一年のみである。「稲」に対する感覚表現は視覚表現のみであり、全て状態を表す表現である。

明治三十一年

## 視覚表現 六首

状態を表すもの

五月雨の片山陰に只一人おくれて《早苗》とるはやもめか

(六九六・三二年)

小山田の《稲》を逐はれか稲雀裾田の《稲》にむれ下る見ゆ

(七七三・三二年)

《稲》の中に立ちましろおふるしこ草のとりすてられて世を送るかな

(八四六・三二年)

《稲》の中に立ちましろおふるあた草のとりすてられて世を送るかな

(八五三・三二年)

村つゞき《青田》を走る瀧車見えて諏訪の茶店はすゞしかりけり

(九四三・三二年)

山里に《稲》刈る男けふの日を天長節と知らぬ顔なる

(二〇一八・三二年)

明治三十一年のみに「稲」を詠んだ作品が見られる。

「片山陰」(六九六番)や「小山田」「裾田」(七七三番)、「山里」(一〇一八番)に稲がある状態を表すものが見られる。

五月雨の片山陰に只一人おくれて《早苗》とるはやもめか (六九六・三二年)

小山田の《稲》を逐はれか稲雀裾田の《稲》にむれ下る見ゆ (七七三・三二年)

また、次の三つの内容も見られる。

「稲」の中に「稲雀」(七七三番)、「しこ草」(八四六番)、「あた草」(八五三番)が存在している表現

小山田の《稲》を逐はれか稲雀裾田の《稲》にむれ下る見ゆ (七七三・三二年)

《稲》の中に立ちましろおふるしこ草のとりすてられて世を送るかな (八四六・三二年)

《稲》の中に立ちましろおふるあた草のとりすてられて世を送るかな (八五三・三二年)

「村つゞき」の歌での「青田(稲の集合体)」が村続きに存在し、田の間を汽車が走っている状態の表現

村つゞき《青田》を走る瀧車見えて諏訪の茶店はすゞしかりけり (九四三・三二年)

「山里に」の歌での「稲」が刈られている状態の表現

山里に《稲》刈る男けふの日を天長節と知らぬ顔なる (一〇一八・三二年)

子規短歌での「稲」に対する表現の殆どが古歌に拠らないものであり、次の「五月雨の」の歌では古歌によく見られる組み合わせ<sup>注23</sup>（「早苗」と「五月雨」と「とる」）が見られるが、「早苗」が「<sup>やもめ</sup>嬢」と詠まれる例は古歌に例が

見られない。

五月雨の片山陰に只一人おくれて《早苗》とるはやもめか

(六九六・三一年)

# 茸

「茸」に対する感覚表現は全て視覚表現が使用されている。視覚表現に加えて、「茸」を「狩る」「とる」「踏みわく」といった触覚行為を表す触覚表現は三首見られる。触覚表現の例を三首挙げる。いずれも視覚表現との複合感覚表現である。

紅の裾をうはらに引かれつゝ都をとめの《木の子》かるらん

(七六一・三一年)

誰が叫ぶ聲の木玉に鳥鳴きて奥山淋し《木の子》狩る頃

(七六五・三一年)

浅山の《いくち》《紅蕈》踏みわけて黒子の《木の子》とるもうれしく

(七七〇・三一年)

明治三一年

## 視覚表現 六首

色を表すもの

奥山に淋しく立てるくれなゐの《木の子》は人の命とるとふ

(七六二・三一年)

浅山の《いくち》《紅蕈》踏みわけて黒子の《木の子》とるもうれしく

(七七〇・三一年)

状態を表すもの

紅の裾をうはらに引かれつゝ都をとめの《木の子》かるらん

(七六一・三二年)

奥山に淋しく立てるくれなゐの《木の子》は人の命とるとふ

(七六五・三二年)

しばし住むめのとの宿は山近みともしくもあらず《茶藨》《黒藨》

(七六八・三二年)

浅山の《いくち》《紅藨》踏みわけて黒子の《木の子》とるもうれしく

(七七〇・三二年)

視覚行為を表すもの

草わけてしめちを取るとうれしくも《大松茸》を見いでたる哉

(四七八・三二年)

「茸」に対する感覚表現は視覚表現が主である点は他の植物と同様である。次の歌の「踏みわけ」「とる」といった「茸」に対する触覚表現は、他の植物よりも比較的多く見られる。

浅山の《いくち》《紅藨》踏みわけて黒子の《木の子》とるもうれしく

(七七〇・三二年)

視覚表現の内容について、「くれなゐ」(七六二番)や「黒子」(七七〇番)といった色を表すものについて、他の植物と大きな違いは見られない。

奥山に淋しく立てるくれなゐの《木の子》は人の命とるとふ

(七六二・三二年)

浅山の《いくち》《紅藨》踏みわけて黒子の《木の子》とるもうれしく

(七七〇・三二年)

状態を表すものについては、「茸」の生えている場所(「奥山」(左の七六五番)や「浅山」(左の七七〇番))を表す

ものや、「茸」の多少（淋しく立てる」（左の七六五番）や「ともしくもあらず」（左の七六八番）を表すものである。

奥山に淋しく立てるくれなゐの《木の子》は人の命とるとふ

（七六五・三二年）

浅山の《いくち》《紅葦》蹈みわけて黒子の《木の子》とるもうれしく

（七七〇・三二年）

奥山に淋しく立てるくれなゐの《木の子》は人の命とるとふ

（七六五・三二年）

しばし住むめのとの宿は山近みともしくもあらず《茶葦》《黒葦》

（七六八・三二年）

他の草木の植物のように「咲く」など植物の成長の過程を示す表現が見られない。例えば「牡丹」では次の例のように「牡丹」の成長を表す表現が多く見られる。次に短歌に詠まれた「牡丹」に見られる成長過程の例を挙げる。

くれなゐの若菜（ヤ）ひろがる鉢植の《牡丹の蕾》いまだなかりけり

（一七〇〇・三三年）

去年君がたひし《牡丹》も今日已につぼみやぶれて紅の見ゆ

（拾遺四二七・三四年）

こいまろふ病の床のくるしみの其側に《牡丹》咲くなり

（一一二二・三二年）

高瓶にさせる《牡丹》のこき花の一ひらちりて二ひらちりぬ

（一七〇五・三三年）

今日明日に君來まさずば我庭の《牡丹の花》の散過むかも

（拾遺四二六・三四年）

また視覚行為についても、他の植物では「見る」といった対象物の観察が読み取れる表現であるのが、「茸」では「見いでたる」の一例であり、この語彙には対象物への観察の視点は見られない。子規の「茸」に対する観察の意識が薄いと見られ、「茸」の色の描写は見られても形や大きさの描写が見られないのではないか。

草わけてしめちを取るとうれしくも《大松茸》を見いでたる哉

（四七八・三二年）

「茸」や「稻」は、「牡丹」や「藤」などと比べて、歌材として確立することのなかった題材である。子規は、「茸」と「稻」に対して、明治三二年での歌材の拡大の一つの試みで用いたものの、それを歌の材料に適さないとしたのではないか。

**牡丹・藤・薔薇・桑・稻・茸について**

「牡丹」と「藤」、「薔薇」、「桑」、「稻」、「茸」は、明治三十一年に初めて詠まれた題材である。その中で「牡丹」と「藤」と「薔薇」と「桑」は明治三二年以降にも使用例が見られる題材であり、「稻」と「茸」は明治三十一年のみの作品に使用されている題材である。

明治三二年以降にも使用されている「牡丹」「藤」「薔薇」「桑」の中で、根岸の子規庵の庭にある植物は「牡丹」と「薔薇」である。また古来頻繁に使用されているものは「牡丹」と「藤」である。

明治三二年以降に使用されない「稻」と「茸」について、いずれも根岸の子規庵の庭にない植物である。また古来頻繁に使用されているものは「稻」である。

「牡丹」と「藤」について比べると、庭にない「藤」の方が歌詞の用法に影響を受けた使用が多く見られる。例えば「藤」の視覚表現の中の状態を表すものについて見ると、子規短歌の「藤」に対する表現の多くは次の三つに分類される。

①花房が垂れている状態

瓶にさす《藤の花ぶさ》花垂れて病の牀に春暮れんとす

(拾遺三六八・三四年)

②水辺にある状態

池の邊のさじきに垂るゝ《藤の花》見れば長けく折れば短し

(一七三〇・三三年)

③花房の長短の状態

百花の千花を絲につらぬける《藤の花房》長く垂れたり

(一七二六・三三年)

右の三項目の中の②の用法は古典和歌に多くの用例が見られるものである<sup>注24</sup>。

明治三四年では、水辺の「藤」よりも室内での囑目の「藤」を多く詠むようになり、「藤」に対する視覚表現は②が殆どなくなり、次のような①花房が垂れている状態（左の拾遺三六八番）と③花房の長短の状態（左の拾遺三六三番）の表現が多くなる。

瓶にさす《藤の花ぶさ》花垂れて病の牀に春暮れんとす

(拾遺三六八・三四年)

瓶にさす《藤の花ぶさ》みじかければたゝみの上にとゞかざりけり

(拾遺三六三・三四年)

また子規短歌の中で例数は多くないが、次の例のように「藤」と「松」の組み合わせも見られる。この組み合わせも古典和歌に多くの例が見られるものである。

よろづ代をいはひて折りし松か枝に二房垂るゝ《藤波の花》

(一八一〇・三三年)

「藤」を「千歳の花」とすることは「藤」の歌詞の用法に見られ、それを前提とした作品も子規短歌に見られる。左の短歌もその例の一つである。



さす竹の宮人祝ふ今日の日に《藤》をかざして民もよろこぶ

(一七二四・三三年)

対して子規短歌での「牡丹」は、歌詞の用法の影響は殆ど見られない。「牡丹」の歌詞としての用法には次のものが見られる<sup>注25</sup>。次のⅠ、Ⅱ、Ⅲに『歌ことば歌枕大辞典』に挙げられた作品例を抄出して挙げる。

Ⅰ「深見草」「ぼうたん」の語を用いる

Ⅱ花の王とされる

Ⅲ牡丹の鑑賞に熱狂するありさまを詠う(『白氏文集』の詩句に基づくもの)

子規短歌では右の三項目の内容は見られない。特にⅠについて、子規は「牡丹」のみを使用している。これは、古典和歌で「藤」よりも「藤波」の例が多く<sup>注26</sup>、子規短歌でも「藤」を詠む際に「藤波」を用いていることと対照的である。

「薔薇」と「桑」について、どちらも視覚表現の使用が殆ど(「桑」は全て視覚表現)であったが、庭にある「薔薇」の方が視覚表現の内容は多様である。

「桑」の視覚表現は「桑」が多く存在することを表す内容が多いのに対し、左の三首のように「薔薇」の視覚表現には色を表すもの(「白き薔薇」(一二〇六番)や、動きを表すもの(「白き薔薇散りぬ」(一二〇六番)、「薔薇ノ花散ル」(二八四二番)、「赤薔薇散りて」(一七〇六番)、植物の成長を表すもの(「白薔薇咲きぬ」(一七〇六番))が見られる。

暁の祈らんとすれば花いけの白き《薔薇》散りぬバイブルの上に

(一二〇六・三二年)

サ庭ベノ草木動カシ吹き過グル風シヅマリテ《薔薇ノ花》散ル

(一八四二・三三年)

草枕旅ゆ歸れば我庭の《赤薔薇》散りて《白薔薇》咲きぬ

(一七〇六・三三年)

「稲」と「葺」について、古歌に頻繁に使用されている「稲」もそうでない「葺」も、明治三二年以降に使用例が見られない。

「稲」と「葺」の両者に共通しているのは、次の二首のように「稲」も「葺」も存在する場所が田や山といった広い空間であることと、「牡丹」や「薔薇」のように花を觀賞する植物でないことである。

小山田の《稲》を逐はれか稻雀堀田の《稲》にむれ下る見ゆ

(七七三・三一年)

奥山に淋しく立てるくれなゐの《木の子》は人の命とるとふ

(七六二・三一年)

この「稲」と「葺」の特徴は、次の歌のように「桑」とも共通である。「桑」も「桑の田」「桑畑」とあるように広い場所で栽培される植物である。

山陰の《桑畑》遠み日は暮れぬ蠶や飢ゑつらん我も飢ゑたる

(一〇五三・三二年)

また「桑」が詠まれる部位は、次の歌のように「實」が詠まれており、それ以外の例では「桑」の部位の描写はなされていない。

蠶飼する木曾の山里五月來て《桑の實》赤し鳴くほととぎす

(一〇九九・三二年)

「稲」と「葺」は明治三二年以降に詠まれておらず、「桑」は明治三四年以降に詠まれていない。「桑」「稲」「葺」が晩年に詠まれなくなるのは、晩年の子規短歌に田畑など広い植物の集まりが詠まれなくなっていることと繋がっている。

ると言える。

## 竹

「竹」を詠んだ作品は全部で二八首見られ、その殆どが「竹」に対する感覚表現に視覚表現を用いている作品である。

聴覚表現のみの使用である作品は次の二首である。二首とも「竹藪」に鶯の鳴き声が聞こえることを表現している。

静なる北の家陰の朝陰に鶯來鳴く《竹藪》にして

(一〇三五・三二年)

朝な／＼《竹藪》になく鶯の庭の木迄はいまだ來ずけり

(一〇三六・三二年)

触覚表現は複数見ることが出来る。左に例を一首挙げる。

十ばかり椿の花をつらぬきし《竹》の小枝をもちて遊びつ

(四一六・三二年)

以降、各期間に見られる「竹」に対する感覚表現を挙げる。例は抄出したものである。

明治三十年以前

## 視覚表現 八首

動きを表すもの

むさしのゝ《しのゝをすゝき》かたよりになびけは残る有明の月

(一九四・二四年)

状態を表すもの

むら雨窓をあくれば我庵の園生の《竹》に風わたる也

(二二・一八年)

かたみたに今はなつの《しの薄》まだ穂にいでぬ風の色哉

(二五・二六年)

## 聴覚表現 四首

音響を表すもの

路もなき《淺茅か原》をわけかねつ鈴蟲の音をふむ心地して

(六・十七年)

霜枯の庭に残りし《竹の葉》をちからにさわく玉霰かな

(七二・十八年)

《呉竹》のともすれもせぬ夜をこめて音たてゝふるは霰なるらん

(七三・十八年)

《呉竹》に風吹き入るゝ音す也はつかの月の今か出つらん

(三〇・二八年)

## 触覚表現 一首

触覚行為を表すもの

路もなき《淺茅か原》をわけかねつ鈴蟲の音をふむ心地して

(六・十七年)

複合感覺表現（視覚表現・触覚表現・聴覚表現）

一首

（視覚表現には一重傍線、触覚表現には二重傍線、聴覚表現には波線を付す）

路もなき《淺茅か原》をわけかねつ鈴蟲の音をふむ心地して

（六・十七年）

複合感覺表現（視覚表現・聴覚表現）

三首

（視覚表現には一重傍線、聴覚表現には波線を付す）

霜枯の庭に残りし《竹の葉》をちからにさわく玉霰かな

（七二・十八年）

《吳竹》のともすれもせぬ夜をこめて音たてゝふるは霰なるらん

（七三・十八年）

《吳竹》に風吹き入るゝ音す也はつかの月の今か出つらん

（三〇八・二十八年）

明治三十年以前の「竹」に対する感覺表現は、以降の期間と比べて多様であり、また複合感覺表現となる例が多い。視覚表現について、「むら雨」の歌のように「竹」の存在する場所（左の二二番の歌では「園生」を表すもの、「竹」のある場所で氣象現象（左の二二番の歌では「風」）が起きている状態を表すものが多く見られる。

むら雨窓をあくれば我庵の園生の《竹》に風わたる也

（二二・一八年）

次の「かたみたに」の歌では、「まだ穂にいでぬ」といった「竹」の成長による状態が詠まれるが、「竹」の成長による変化を表現する例は以降の期間を含め殆ど見られない。

かたみたに今はなつのゝ《しの薄》まだ穂にいでぬ風の色哉

（二五二・二六年）

聴覚表現について、明治三十年以前での「竹」に対する聴覚表現は、次の二首のように霰や風といった気象現象によつて生じた音響を表している。

霜枯の庭に残りし《竹の葉》をちからにさわく玉霰かな  
(七二・十八年)

《呉竹》に風吹き入るゝ音す也はつかの月の今か出つらん  
(三〇八・二八年)

以降の期間にも聴覚表現が見られるが、次の例のような鶯による音響を表したものであり、気象現象と「竹」による音響は殆ど詠まれなくなる。

静なる北の家陰の朝陰に鶯來鳴く《竹藪》にして  
(一〇三五・三二年)

触覚表現について、明治三十年以前での「竹」に対する触覚表現は、「わけかねつ」(六番)といった足による触覚行為を表すものであるが、以降の期間に見られる触覚表現には足による触覚行為の表現は見られない。

路もなき《淺茅か原》をわけかねつ鈴蟲の音をふむ心地して  
(六・十七年)

明治三一年

## 視覚表現 八首

状態を表すもの

霜防ぐ菜畑の《葉竹》はや立てぬ筑波根風雁を吹く頃  
(三四六・三一年)

住みわびし家の様こそたゞならね海棠咲ける《寒竹》の垣  
(四九一・三二年)

寐靜まる里のともし火皆消えて天の川白し《竹藪の上》に  
(五一六・三二年)  
侘びて住む根岸の伏屋野を近み螢飛ぶなり庭の《くれ竹》  
(六八二・三二年)  
いにしへの故郷人のゑかきにし墨繪の《竹》に向ひ坐すわれは  
(九三八・三二年)

### 触覚表現 二首

触覚行為を表すもの

十ばかり椿の花をつらぬきし《竹》の小枝をもちて遊びつ  
(四一六・三二年)

温度を表すもの

北うけて雪また残る《竹藪》の藪陰寒し梅五六本  
(五九六・三二年)

### 複合感覚表現（視覚表現・触覚表現） 二首 （視覚表現には一重傍線、触覚表現には二重傍線を付す）

十ばかり椿の花をつらぬきし《竹》の小枝をもちて遊びつ  
(四一六・三二年)

北うけて雪また残る《竹藪》の藪陰寒し梅五六本  
(五九六・三二年)

明治三一年になると、「竹」に対する感覚表現の種類が限られるようになる。

視覚表現の他に触覚表現が見られるが例数は二例見られるが、次の一例は「竹」の陰の「寒さ」の表現であり、実

際の「竹」に対する触覚表現と言えないものである。

北うけて雪また残る《竹藪》の藪陰寒し梅五六本

(五九六・三二年)

視覚表現では、明治三十年以前と比べ、状態を表すものの内容が多用になっている。明治三十年以前に見られた「竹」に気象現象が起きている表現は見られないが、「竹」が人によって「立て」られたという表現(三四六番)や、「竹」の付近に「海棠」(四九一番)や「天の川」(五一六番)、「螢」(六八二番)、「われ」(九三八番)が存在することの表現が見られる。

霜防ぐ菜畑の《葉竹》はや立てぬ筑波根風雁を吹く頃

(三四六・三二年)

住みわびし家の様こそたゞならね海棠咲ける《寒竹》の垣

(四九一・三二年)

寐静まる里のともし火皆消えて天の川白し《竹藪の上》に

(五一六・三二年)

侘びて住む根岸の伏屋野を近み螢飛ぶなり庭の《くれ竹》

(六八二・三二年)

いにしへの故郷人のゑかきにし墨繪の《竹》に向ひ坐すわれは

(九三八・三二年)

また「いにしへの」の短歌では「竹」が「墨絵」のものであることを表している。絵画による「竹」は明治三三年にも例(左の一四五四番)が見られる。

墨さびし墨繪の《竹》の茂り葉の垂葉の下に梅いけにけり

(一四五四・三三年)



明治三二年

視覚表現 一首

状態を表すもの

人の衣に佛のひだをつけん事は《竹》に櫻をつけらんが如し

(一一〇六・三二年)

聴覚表現 二首

音響を表すもの

靜なる北の家陰の朝陰に鶯來鳴く《竹藪》にして

(一〇三五・三二年)

朝な／＼《竹藪》になく鶯の庭の木迄はいまだ來ずけり

(一〇三六・三二年)

明治三二年では、これまでの期間で見られた複合感覺表現の例が見られなくなる。

視覚表現では「竹」そのものを描写したものではなく、「櫻」との組み合わせ(右の一一〇六番)で、アンバランスなものとしての譬えとして用いられている。このような比喩としての「竹」の表現はこの一例のみである。

明治三三年

視覚表現 九首

状態を表すもの

墨さびし墨繪の《竹》の茂り葉の垂葉の下に梅いけにけり

(一四五四・三三年)

折にふれて思ひぞいづる君が庵の《竹》安ケキカ釜恙ナキカ

(一四七二・三三年)

山の池の水際におふる《篠の群》の死ぬとも君に逢はんとそ思ふ

(一五四五・三三年)

《竹むら》にかくれて生ふる山椒の芽のからくも君にこひわたるかも

(拾遺三一〇・三三年)

視覚行為を表すもの

杉垣ノ垣外ニ見ユル《若竹》ノ末葉マバラニ風吹キワタル

(一八四三・三三年)

触覚表現 二首

温度を表すもの

野の中の《竹むら陰》の葱畑に寒さ残りて梅散りにけり

(一四七九・三三年)

神知らぬほこらを祭る庭の隅に《篠の群》寒く梅の花散る

(一五四四・三三年)

複合感覚表現（視覚表現・触覚表現）二首（視覚表現には一重傍線、触覚表現には二重傍線を付す）

野の中の《竹むら陰》の葱畑に寒さ残りて梅散りにけり

（一四七九・三三年）

神知らぬほこらを祭る庭の隅に《篠の群》寒く梅の花散る

（一五四四・三三年）

明治三年の「竹」に対する感覚表現には、触覚表現が二例見られる。右の一四七九番と一五四四番の短歌に見られる触覚表現の通り、いずれの例も「竹」そのものの温度を表すものではなく、「竹」によって生まれた陰に対するものであると考えられる。よって、明治三年の「竹」そのものに対する感覚表現は、視覚表現のみと言える。

視覚表現について、ほとんどの例が、明治三二年までの作品の視覚表現の類似の内容である。例えば次の類似例が見られる。

根岸に「竹」がある状態を表すもの

《くれ竹》の根岸の里にかくれたる人を訪ふ日の薄花曇

（一六六五・三三年）

人知らぬ《竹》の根岸の奥深く我すむ宿は鶯に聞け

（五一七・三二年）

墨絵の「竹」を表すもの

墨さびし墨繪の《竹》の茂り葉の垂葉の下に梅いけにけり

（一四五四・三三年）

いにしへの故郷人のゑかきにし墨繪の《竹》に向ひ坐すわれは

（九三八・三二年）

庵の「竹」を表すもの

折にふれて思ひぞいづる君が庵の《竹》安ケキカ釜恙ナキカ

(一四七二・三三年)

むら雨窓をあくれば我庵の園生の《竹》に風わたる也

(二二・十八年)

「竹」による陰が寒いこと・「竹」による陰の中に梅があること

野の中の《竹むら陰》の葱畑に寒さ残りて梅散りにけり

(一四七九・三三年)

北うけて雪また残る《竹藪》の藪陰寒し梅五六本

(五九六・三一年)

「竹」に風が吹いていること

杉垣ノ垣外ニ見ユル《若竹》ノ末葉マバラニ風吹キワタル

(一八四三・三三年)

むら雨窓をあくれば我庵の園生の《竹》に風わたる也

(二二・十八年)

その中で明治三二年までと異なる例は、左の二首での「折にふれて」の歌で「竹」の状態を「安ケキカ」と尋ねている表現と、「山の池の」の歌で「篠の群」の「篠」と「死ぬ」を掛けた表現である。

折にふれて思ひぞいづる君が庵の《竹》安ケキカ釜恙ナキカ

(一四七二・三三年)

山の池の水際におふる《篠<sup>シノ</sup>の群<sup>グン</sup>》の死ぬ<sup>シヌ</sup>とも君に逢はんとそ思ふ

(一五四五・三三年)

しかしこれらの例はそれぞれ一例であり、明治三三年の「竹」に対する感覚表現の特徴に数えることはできない。

明治三一年から三三年までの間で、「竹」と「梅」を組み合わせる例が複数見られ、子規短歌では、「竹」の組み合わせとして「梅」を選択する傾向が見られると言える。「竹」と「梅」の組み合わせは「竹」の歌詞としての用法には

見られないが、左の例のように古歌に多くの例を見ることが出来る。

烏梅<sup>ウメノハナ</sup>乃波奈<sup>ナ</sup> 知良<sup>チラ</sup>麻久<sup>マク</sup>怨之<sup>ヲシミ</sup>美<sup>ミ</sup> 和我<sup>ワガ</sup>曾乃<sup>ソノノ</sup>乃<sup>ノ</sup> 多氣<sup>タケ</sup>乃波<sup>ノハ</sup>也之<sup>ヤシニ</sup>尔<sup>ニ</sup> 宇具<sup>ウツヒス</sup>比須<sup>ヒス</sup>奈久<sup>ナク</sup>母<sup>モ</sup>

(万葉集・八三三・小監阿氏奥嶋)

たけのはにちりかからなむむめのはな雪のなかのものはるとみゆべく

(伊勢集・六三)

以上、「竹」に対する感覚表現を見てきた。

「竹」は古来頻繁に使用されている植物であり、この点で後述の「葦」と共通であるが、「竹」は子規庵の庭に無い植物であり、「葦(香葦)」は明治三五年に贈られて枕元にあつた植物である。

枕元にある「葦(香葦)」よりも、実際身近に見られない「竹」の方が古歌の用例に影響を受けている傾向が強い。

## 葦

「葦」に対する感覚表現について、殆どが視覚表現である点は他の植物と同じであるが、嗅覚表現と触覚表現の使用が比較的多く見られる。

「葦」に対する嗅覚表現は、次の例のように明治三五年以降の作品のみに見られ、対象となる「葦」は贈り物の「葦(香ひ葦)」である。

わかやとの《葦の花》も香はあれと君か《葦》の花に及ばぬ

(拾遺四七五・三五年)

「葦」に対する触覚表現も、次の例のように明治三五年以降の作品のみに使用され、「葦」を子規に贈った「君」が「葦」を摘んだことよるもの(例 拾遺四七一番)と、子規が「葦」を手を持ったことよるもの(拾遺四七二番)の二種類である。

君か手につみし《葦》の《百葦》花紫の一たはねはや

(拾遺四七一・三五年)

やみてあれは庭さへ見ぬを《花葦》我手にとりて見らくうれしも

(拾遺四七二・三五年)

「葦」に対する感覚表現が見られない作品は次の一首である。

赤人か野をなつかしみねしといふ《葦の花》はげんげなるべし

(拾遺二五八・三二年)

以降、各期間の「葦」に対する感覚表現を挙げる。

明治三十年以前

### 視覚表現 一首

色を表すもの・状態を表すもの

紫の一本やいづれむさし野の草むらかくれ《葦》咲く也

(二七七・二七年)

明治三十年以前の「葦」を詠んだ作品は右の一首である。

「葦」に対する視覚表現は、「葦」が紫色であること、「葦」が「一本」であること、「葦」が「むさし野の草むらかくれ」にあること、「葦」が咲いた状態であることを表しており、一首の中に多様な視覚表現が用いられている。

明治三十一年

#### 視覚表現 四首

色を表すもの

日のさゝぬおどろがもとの《花葦》薄紫に咲きにけるかな

(五〇二・三二年)

状態を表すもの

ものゝふの屍をさむる人もなし《葦》花さく春の山陰

(三三七・三二年)

日のさゝぬおどろがもとの《花葦》薄紫に咲きにけるかな

(五〇二・三二年)

うつら／＼病の床を出づる魂の《葦》咲く野をたちめぐりつゝ

(五〇九・三二年)

牛かひは《葦》の小路歸りけり菜摘むをとめはたんほゝの畔

(五三七・三二年)

明治三十一年の「葦」に対する感覚表現は視覚表現のみであり、内容は色と状態を表すものが見られる。

状態を表すものについて、明治三十年以前では「葦」の生えている場所が陰になっている所であったのが、明治三一年では「野」(五〇九番)や「小路」(五三七番)といった陰になっていない所の例も見られる。

明治三二年

視覚表現 一首

状態を表すもの

我庵に人集まりて歌詠めは鉢の《堇》に日は傾きぬ

(一〇七二・三二年)

明治三二年では「堇」の生えている場所が地面ではなく「鉢」となっている。また「堇」の近くに「日」があることが表されている。「堇」が「鉢」に植えられている状態や、「堇」の近くに「日」が見える状態を表す例はこの一首のみである。

明治三三年

視覚表現 二首

状態を表すもの

草枕旅路さふしくふる雨に《堇》咲く野を行きし時の蓑

(一五三〇・三三年)

雲雀鳴き《堇》咲く野を過がてに笠着てありく旅は面白

(拾遺二八八・三三年)

明治三三年の短歌に詠まれている「堇」は、二例とも「野」といった屋外の広い空間に生えている状態が表されて



いる。

明治三二年までの短歌でも次の例のように、広い空間の中の「堇」が詠まれているものが殆どである。

紫の一本やいづれむさし野の草むらかくれ《堇》咲く也

(二七七・二七年)

ものゝふの屍をさむる人もなし《堇》花さく春の山陰

(三三七・三一年)

牛かひは《堇》の小路歸りけり菜摘むをとめはたんほゝの畔

(五三七・三一年)

赤人か野をなつかしみねしといふ《堇の花》はげんげなるべし

(拾遺二五八・三二年)

＊赤人の歌を左に挙げる。

春野尔 ハルノノニ スミレツミニト 須美礼採尔等 コシワレゾ 来師吾曾 ノヲナツカシミ 野乎奈都可之美 ヒトヨネニケル 一夜宿二来

(万葉集・一四二八・山部宿祢赤人)

明治三五年

## 視覚表現 十一首

色を表すもの

玉つさの君の使は紫の《堇の花》を持ちて来しかも

(拾遺四七〇・三五年)

なくさもるすべもあれとか《花堇》色あせたれとすてまくをしも

(拾遺四七八・三五年)

状態を表すもの

うち日さす都の君の送り來し《堇の花》はしをれてつきぬ

(拾遺四七三・三五年)

玉透のガラスうつはの水清み《香ひ菫》の花よみかへる

(拾遺四七四・三五年)

小包を開きて見れば《花菫》その香にほひてしをれてもあらず

(拾遺四七九・三五年)

まそ鏡直目に見ねと《花菫》つみておくりし人し戀しも

(拾遺四八一・三五年)

視覚行為を表すもの

小包を開きて見れば《花菫》その香にほひてしをれてもあらず

(拾遺四七九・三五年)

#### 嗅覚表現 四首

わかやとの《菫の花》も香はあれと君か《菫》の花に及ばぬ

(拾遺四七五・三五年)

言さへくとつ國種の《花菫》其香を清み嗅けとあかぬかも

(拾遺四八〇・三五年)

#### 触覚表現 四首

触覚行為を表すもの

一たひもいまた見なくにわかために《すみれの花》をつみし君かも

(拾遺四七七・三五年)

まそ鏡直目に見ねと《花菫》つみておくりし人し戀しも

(拾遺四八一・三五年)

複合感覚表現（視覚表現・嗅覚表現）

三首

（視覚表現には一重傍線Ⅰ、嗅覚表現には二重傍線Ⅱを付した）

土かひし君が《堇》は色に香に野への《堇》に立ちまさりけり

（拾遺四七六・三五年）

小包を開きて見れば《花堇》その香にほひてしをれてもあらず

（拾遺四七九・三五年）

複合感覚表現（視覚表現・触覚表現）

四首

（視覚表現には一重傍線Ⅰ、触覚表現には波線〰を付した）

君か手につみし《堇》の《百堇》花紫の一たはねはや

（拾遺四七一・三五年）

やみてあれば庭さへ見ぬを《花堇》我手にとりて見らくうれしも

（拾遺四七二・三五年）

明治三五年になると、明治三三年までの作品に見られるような広い屋外の空間（野など）の中の「堇」を詠んだ短歌が見られなくなる。この期間の作品での「堇」の殆どは贈り物の「堇」であり、室内にあるものである。そのため次の短歌のような摘まれた状態の「堇」が多く詠まれるようになっていく。

まそ鏡直目に見ねと《花堇》つみておくりし人し戀しも

（拾遺四八一・三五年）

「堇」に対する感覚表現について、明治三五年はこれまでの期間と比べ多様な表現が見られる。

一つには、視覚表現以外（嗅覚表現（左の拾遺四七五番）と触覚表現（左の拾遺四七七番））が用いられていることが挙げられる。

わかやとの《堇の花》も香はあれと君か《堇》の花に及ばぬ

（拾遺四七五・三五年）

一たひもいまた見なくにわかために《すみれの花》をつみし君かも

(拾遺四七七・三五年)

二つに、視覚表現も多様になっていることである。視覚行為を表すもの(左の拾遺四七九番)や、「咲く」表現が無くなり「色褪す(色あせ)」(左の拾遺四七八番)や「萎る(しをれ)」(左の拾遺四七三番)といった花の盛りを過ぎた表現が見られる。

小包を開きて見れば《花菫》その香にほひてしをれてもあらず

(拾遺四七九・三五年)

なくさもるすべもあれとか《花菫》色あせたれとすてまくをしも

(拾遺四七八・三五年)

うち日さす都の君の送り來し《菫の花》はしをれてつきぬ

(拾遺四七三・三五年)

明治三五年の「菫」を詠んだ作品は全て「仰臥漫録」のものであり、「京の人より香菫の一束を贈り來しけるを」と詞書のある作品群のものである。左に「仰臥漫録」<sup>注27</sup>に記載されている順に作品を挙げる。

玉つさの君の使は紫の《菫の花》を持ちて來しかも

(拾遺四七〇・三五年)

君か手につみし《菫》の《百菫》花紫の一たはねはや

(拾遺四七一・三五年)

やみてあれは庭さへ見ぬを《花菫》我手にとりて見らくうれしも

(拾遺四七二・三五年)

うち日さす都の君の送り來し《菫の花》はしをれてつきぬ

(拾遺四七三・三五年)

玉透のガラスうつはの水清み《香ひ菫》の花よみかへる

(拾遺四七四・三五年)

わかやとの《菫の花》も香はあれと君か《菫》の花に及ばぬ

(拾遺四七五・三五年)

土かひし君が《菫》は色に香に野への《菫》に立ちまさりけり

(拾遺四七六・三五年)

一たひもいまた見なくにわかために《すみれの花》をつみし君かも

(拾遺四七七・三五年)

なくさもるすべもあれとか《花堇》色あせたれとすてまくをしも

(拾遺四七八・三五年)

小包を開きて見れは《花堇》その香にほひてしをれてもあらず

(拾遺四七九・三五年)

言さへくつつ國種の《花堇》其香を清み嗅けとあかぬかも

(拾遺四八〇・三五年)

まそ鏡直目に見ねと《花堇》つみておくりし人し戀しも

(拾遺四八一・三五年)

この一連の「堇」の作品の前半(拾遺四七〇番く拾遺四七四番)は、「堇」を贈られた状況と贈られた後の「堇」の状態の記録と言える内容(右の短歌の傍線)となっている。後半の作品(拾遺四七五番く拾遺四八一番)は、主に贈られた「<sup>(にほひ)</sup>香 堇」の香りへの称賛と送り主「君」への感謝が表現されている。

明治三五年の作品の「堇」に対する感覚表現が、他の期間と比べ多様であったのは、明治三五年に子規の「堇」の捉え方や表現の仕方が変化したのではなく、「京の人より香堇の一束を贈り來しけるを」の題を付した作品群の内容によるものと言える。

この期間で「堇」に対する感覚表現に嗅覚表現が用いられるようになったのは、贈られた「堇」の品種がニオイスマイレである為と、子規と枕元の「堇」の距離が近く匂いを嗅ぎやすかった為と考えられる。

「堇」に対する触覚表現が詠まれるようになったのは、「堇」が「君」が摘んだものであることを示した為ではないだろうか。

また、盛りを過ぎた状態の「堇」が詠まれるようになったのは、贈られた「堇」の状態の変化を短歌で記録したた

めと考えられる。

**土筆**

「土筆」に対する感覚表現は全て視覚表現が使用されている。またその中の殆どが「摘む」といった触覚表現も併せて使用されている。

「土筆」が詠まれている十三首の中の十一首が「碧梧桐赤羽根につくしつみにと再び出てゆくに」と題の付された連作であり、赤羽根にある状態の「土筆」や摘まれている状態の「土筆」の表現が多く見られる。

明治三五年

**視覚表現 十三首**

状態を表すもの

《つくしこ》はうまなれや紅に染めたる梅を絹傘にせる

(拾遺四六一・三五年)

赤羽根の茅草の中の《つくし》老いほうけりはむ人なしに

(拾遺四八三・三五年)

《つくし》ひたと生ひける赤羽根にいさ君も往け道しるへせな

(拾遺四八六・三五年)

赤羽根の汽車行く路の《つくし》又來む年も往きて摘まなむ

(拾遺四八七・三五年)

## 触覚表現 十一首

触覚行為を表すもの

くれなゐの梅ちるなへに故郷に《つくし》つみにし春し思ほゆ

(拾遺四五九・三五年)

赤羽根の茅草の中の《つくくし》老いほうけゝりはむ人なしに

(拾遺四八三・三五年)

複合感覚表現（視覚表現・触覚表現） 十一首 （視覚表現に一重傍線、触覚表現に波線を付す）

日のくれてつみ残したる《つくくし》再び往きてつみて來にけり

(拾遺四八四・三五年)

子規は明治三五年で初めて短歌に「土筆」を詠んでいる。明治三一年での短歌に詠む植物の種類を大きく増加させた中に「土筆」が含まれないことから、子規は「土筆」を歌材として意識することが殆ど無かったといえる。

明治三五年に「土筆」が詠まれたのは、次の二つの詞書の通り、他者の行動によって「土筆」に注目したためと考えられる。

「紅梅の下に土筆など植ゑたる盆栽一つ左千夫の贈り來しをながめて朝な夕なに作れりし歌の中に」

右の詞書について、「仰臥漫録」で一連の作品群（拾遺四五九番く拾遺四六九番）の作品の中の六首が、右の詞書を付した状態で新聞「日本」（明治三五年三月二十六日）に発表されている。「仰臥漫録」には詞書はない。

「碧梧桐赤羽根につくしつみにと再び出てゆくに」

右の題について、この題は「仰臥漫録」でのものである。

右の題詞の「紅梅の下に…」では紅梅と土筆などの植物の組み合わせが明示されているが、この作品群の中で「土筆」が詠まれているのは次の二首のみであり、他の作品での植物は梅のみが詠まれている。

くれなゐの梅ちるなへに故郷に《つくし》つみにし春し思ほゆ

（拾遺四五九・三五年）

《つくしこ》はうまなれや紅に染めたる梅を絹傘にせる

（拾遺四六一・三五年）

このことから子規にとって「土筆」が短歌の材料となりづらいものであったと言える。また、「土筆」に対する感覚表現に感覚表現が多いのは、子規にとって「土筆」は短歌の材料として鑑賞する対象ではなく、食料として「摘む」対象であったためと考えられる。食料としての「土筆」を詠んだ作品に次の二首がある。

《つくし》つみて歸りぬ煮てやくはんひしほと酢とにひてゝやくはん

（拾遺四九〇・三五年）

《つくし》長き短き何もかも老いし老いざる何もかもうまき

（拾遺四九一・三五年）

「土筆」に対する感覚表現を見ると、次のように類似した表現が繰り返し使用されているものが多く見られる。故郷での「土筆」を摘んだことを回想するもの

くれなゐの梅ちるなへに故郷に《つくし》つみにし春し思ほゆ

（拾遺四五九・三五年）

《つくし》故郷の野につみし事を思ひいてけり異國にして

（拾遺四九三・三五年）

赤羽根の堤に生えている「土筆」の成長しきっている状態を表しているもの



赤羽根のつゝみに生ふる《つくくし》のひにけらしもつむ人なしに

(拾遺四八二・三五年)

赤羽根の茅草の中の《つくくし》老いほうけりはむ人なしに

(拾遺四八三・三五年)

赤羽根の堤に多くの「土筆」が生えている状態を表しているもの

赤羽根のつゝみにみつる《つくくし》我妹と二人摘めと盡きぬかも

(拾遺四八五・三五年)

《つくくし》ひたと生ひける赤羽根にいき君も往け道しるへせな

(拾遺四八六・三五年)

「土筆」の生えている堤の近くを汽車が通っていることを表しているもの

赤羽根の汽車行く路の《つくくし》又來む年も往きて摘まなむ

(拾遺四八七・三五年)

うちなけき物なおもひそ赤羽根の汽車行く路に《つくくし》つめ

(拾遺四八八・三五年)

《つくくし》又つみに來む赤羽根の汽車行く路と人に知らゆな

(拾遺四九二・三五年)

このように一連の作品群の中で類似した感覚表現が繰り返し使用されるのは、同年の「葦」を詠んだ一連の作品群では様々な視覚表現が見られることと対照的である。

### 竹・葦・土筆について

「竹」を詠んだ作品は明治三三年までに多くの例が見られるが、明治三四年以降では例が見られない。それに対し、「葦」と「土筆」は明治三三年までよりも明治三四年以降の方が多く詠まれている植物である。

「葦」と「土筆」について、「葦」は明治三三年までの作品に使用例が見られるが、「土筆」は明治三五年の作品の

みに使用例が見られるものである。

「竹」「葦」「土筆」は「子規庵配置図」（根岸子規庵で配布されたもので、内容は松山市立子規記念博物館の冊子より転載されたもの）に記載されていない植物であるが、「葦」と「土筆」は「仰臥漫録」の記述より、贈られて一時的に枕元にあつた植物であると言える。

前述の「藤」と「薔薇」の比較の通り、庭にない「竹」も枕元にある「葦」（「土筆」は古歌に例が少なく『歌ことば歌枕大辞典』の見出しにない植物である）と比べ、歌詞の用法と類似した表現を見ることが出来る。

歌詞としての「竹」の詠み方に次の内容<sup>注28</sup>がある。子規短歌に見られる内容を抄出し挙げる。歌例は『歌ことば歌枕大辞典』で挙げられているものの中で一首を挙げている。

① 鶯との取り合わせで詠まれる

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林に鶯鳴くも

（万葉集・卷五・八二四・八二八・家持）

② 閑寂な環境を描き出す場合に取り上げられる

夜をこめて竹の編み戸に立つ霧の晴ればやがてや明けんとすらん

（山家集・四二八・西行）

③ 露・霜・雪などとともに詠まれる。霰の音が恋の想いを覚醒させたり、風にすさぶ葉音が眠りを覚ますというようににも詠まれる。

竹の葉にあられ降るなりさらさらにひとり寝べき心ちこそせね

（詞花集・恋下・二五四・和泉式部）

また『王朝文化辞典―万葉から江戸まで―』<sup>注29</sup>での「竹」の表現に次のものが指摘されている。

④竹に吹く繊細な風の音に注目する 次の例は『王朝文化辞典―万葉から江戸まで―』で挙げられている例である。  
わが宿のいさき群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも  
(万葉集・四二九一・大伴家持)

子規短歌では①の鶯の取り合わせと②の閑寂な環境の表現は短歌革新後の作品にも見られる。

静なる北の家陰の朝陰に鶯來鳴く《竹藪》にして  
(一〇三五・三二年)

住みわびし家の様こそたゞならね海棠咲ける《寒竹》の垣  
(四九一・三一年)

③の雪や霰、風とともに詠む例は主に短歌革新前の作品に見られる。雪や風を詠む例は短歌革新後にも見られるが、例数は少ない。

むら雨窓をあくれば我庵の園生の《竹》に風わたる也  
(二二・十八年)

霜枯の庭に残りし《竹の葉》をちからにさわく玉霰かな  
(七二・十八年)

北うけて雪また残る《竹藪》の藪陰寒し梅五六本  
(五九六・三一年)

杉垣ノ垣外ニ見ユル《若竹》ノ末葉マバラニ風吹キワタル  
(一八四三・三三年)

③の「霰」による聴覚表現と、④の「風」による聴覚表現については、子規短歌に僅かに例が見られる。

《呉竹》のともすれもせぬ夜をこめて音たてゝふるは霰なるらん  
(七三・十八年)

《呉竹》に風吹き入るゝ音す也はつかの月の今か出つらん  
(三〇八・二八年)

このように「竹」を詠んだ子規短歌の表現が、古歌の表現と類似している例が複数見られるのに対し、「葦」と「土筆」は子規の実生活に即した表現が多く見られる。それは、明治三四年以降の子規短歌の題材が、伝聞を含めて身近な出

来事によって選択される傾向が強く、その時期に堇が子規の身近にあり、子規の知人が土筆摘みに出かけたことと抛るところが大きい。

## 梅

「梅」を詠んだ作品は全部で一〇二首見られ、その殆どに「梅」に対する視覚表現が用いられている。「梅」を詠んだ作品の中で、「梅」に対する視覚表現が見られないものは次の三首である。

「梅」に対する感覚表現が、嗅覚表現のみであるもの（嗅覚表現の箇所傍線―を付す）

柵橋に駒立てをれば薄月夜《梅が》遠く匂ふ夕暮

（二七六・二七年）

うは玉の闇に《梅か香》聞え來て躬恒か歌に似たる夜半かも

（一四五二・三三年）

「梅」に対する感覚表現が見られないもの

《紅梅》の花そめ産衣うち著せて神田の神に千代をこそ祈れ

（六三四・三一年）

子規短歌の「梅」について、古歌で多く使用される表現と新しい表現の両方が見られる題材である。

以降、各期間に見られる「梅」に対する感覚表現を挙げる。例は抄出したものである。

明治三十年以前

視覚表現 十二首

動きを表すもの

まり歌をうたふ聲のみのとかにてひらくや《梅》の二ツ三ツよつ

風にたに匂ひを残せ《梅の花》ちりての後も人かとはなん

状態を表すもの

夕されは東の峯に月いてゝ窓にうつれる庭の《白梅》

さらぬたに月日は早く立ものを春をうなかく《梅》の初花

年の内になとかはさかぬさけりとも雪にやうつむ庭の《梅か枝》

まづ伐りて火に焚く鉢の《梅》よりや春の心の動きそめけん

視覚行為を表すもの

《白梅》の花はそれとも見えわかで月の光りの匂ふ夜半かな

名にしおふ《小梅の里》にかくはしき名をや聞つゝ見すもこふらむ

嗅覚表現 五首

《白梅》の花はそれとも見えわかで月の光りの匂ふ夜半かな

(二二一・二五年)

(二三三・二五年)

(拾遺四・十五年以前)

(七一・十八年)

(二二二・二五年)

(三一八・二八年)

(二一七・二十年)

(拾遺一〇三・二一年)

(二一七・二十年)

名にしおふ《小梅の里》にかくはしき名をや聞つゝ見すもこふらむ

(拾遺一〇三・二二年)

風にたに匂ひを残せ《梅の花》ちりての後も人かとはなん

(二三三・二五年)

いつのよの庭のかたみそ賤か家の垣ねつゝきに匂ふ《梅か》

(二四五・二六年)

柵橋に駒立てをれば薄月夜《梅が》遠く匂ふ夕暮

(二七六・二七年)

### 複合感覚表現(視覚表現・嗅覚表現)

#### 四首

(視覚表現には一重傍線、嗅覚表現には二重傍線を付す)

《白梅》の花はそれとも見えわかで月の光りの匂ふ夜半かな

(一一七・二十年)

名にしおふ《小梅の里》にかくはしき名をや聞つゝ見すもこふらむ

(拾遺一〇三・二二年)

風にたに匂ひを残せ《梅の花》ちりての後も人かとはなん

(二三三・二五年)

いつのよの庭のかたみそ賤か家の垣ねつゝきに匂ふ《梅か》

(二四五・二六年)

明治三十年以前の「梅」に対する感覚表現について、嗅覚表現の使用が複数見られることが、明治三一年以降の作品と大きく異なっている。明治三一年以降の「梅」に対する嗅覚表現の例は次の一首のみであり、内容も古歌を踏まえているものの、「梅か香」そのものは主題となっていない。

うは玉の闇に《梅か香》聞え來て躬恒か歌に似たる夜半かも

(一四五二・三三年)

明治三十年以前の「梅」の香りを詠んだ作品の多くは、古典的な内容であると考えられるものである。

《白梅》の花はそれとも見えわかで月の光りの匂ふ夜半かな

(一一七・二十年)

柵橋に駒立てをれば薄月夜《梅が》遠く匂ふ夕暮

(二七六・二七年)

右の作品では闇の中の梅の香りが詠まれている<sup>注30</sup>。闇の中の梅の香りを詠むことについて、明治三十一年発表の「五たび歌よみに與ふる書」で子規は次のように批判している。

：「花の匂」などいふも大方は嘘なり、櫻などには格別の匂は無之、「梅の匂」でも古今以後の歌よみの詠むやうに匂ひ不申候。

春の夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やは隠るゝ

「梅闇に匂ふ」とこれだけで済む事を三十一文字に引きのばしたるご苦勞加減は恐れ入つた者なれどこれも此頃には珍らしき者として許すべく候はんに、あはれ歌人よ「闇に梅匂ふ」の趣向は最早打どめに被成ては如何や。

闇の梅に限らず普通の梅の香も古今集だけにて十餘りもありそれより今日迄の代々の歌よみがよみし梅の香はおびたゞしく數へられもせぬ程なるにこれも善い加減に打ちとめて香水香料に御用ひ被成<sup>なされ</sup>候は格別其外歌には一切之を入れぬ事とし鼻つまりの歌人と嘲らるゝ程に御遠ざけ被成ては如何や。：

また歌ことばとしての「梅」には、次の詠まれ方が指摘されている<sup>注31</sup>。

：「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」(春上・三三・よみ人しらず)、「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」(同・四一・躬恒)、「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひ

ける」(同・四二・貫之、詞書に「…梅の花を折りて詠める」)など、イメージ喚起力の強い香り(嗅覚)を通して人との結び付き、特に異性への思いを呼び起こす内容になっている。…

次の子規の二首には、梅の香りを通した「人との結びつき」が詠まれている。

風にたに匂ひを残せ《梅の花》ちりての後も人かとはなん

(二三三・二五年)

いつのよの庭のかたみそ賤か家の垣ねつゝきに匂ふ《梅か》

(二四五・二六年)

次の作品では「梅」の語より「かくはしき」を導いている例であり、実際の香りを詠んだものではない。

名にしおふ《小梅の里》にかくはしき名をや聞つゝ見すもこふらむ

(拾遺一〇三・二二年)

このように「梅」という語を「芳し」と結びつける例は古歌に例が少ないが、江戸時代の『うけらが花』に次の例が見られる。

あすよりは千里のよそにかぐはしき名をのみきかん梅の宮人

(うけらが花・一二五八)

「梅」の語より「芳し」などの「梅」の特徴を連想する作品は、以降の期間には見られない。明治三年に「小梅の里」を詠んだ作品が一首あるが、左の短歌の「小梅の里」では「梅」の特徴を連想していない。

葛しかの《小梅の里》の小田そひに春雨小傘行くは誰か妹

(一五一・三三年)

明治三十年以前の子規短歌の「梅」に対する視覚表現では、次の二つの特徴が見られる。

一つは「早春の花」としての「梅」の表現が、他の期間の作品での「梅」と比べ多く見られることである。

歌ことばとしての「梅」の表現の一つに次の内容が指摘されている<sup>注32</sup>。



…梅と桜はおよそ一〇世紀を境として春の花の主役を交替したが、梅は他に先駆けて咲く早春の花として人々に愛され、また勅撰集その他の歌集においても確固たる地位を占めつづけた。…

明治三十年以前の、「早春の花」としての「梅」が詠まれた子規短歌を左に挙げる。

さらぬたに月日は早く立ものを春をうなかず《梅》の初花

(七一・十八年)

また次の短歌のように、「梅」が「他に先駆けて咲く早春の花」であることを前提とした作品も複数見られる。「他に先駆けて咲く早春の花」であることを示す箇所は傍線を付す。

《梅か枝》に始めてきなく驚の春をしらす法の一聲

(拾遺三・十五年以前)

春たゝはおのか色香も老んとや年のこなたに《梅》は咲くらん

(七〇・十八年)

年の内になとかはさかぬさけりとも雪にやうつむ庭の《梅か枝》

(一二二・二五年)

まづ伐りて火に焚く鉢の《梅》よりや春の心の動きそめけん

(三二八・二八年)

明治三十年以前の子規短歌の「梅」に対する視覚表現の特徴の二つ目は、「梅」が「霞」「月」「雪」といった白色のものと一緒に詠まれている例が、他の期間の作品よりやや多く見られることである。左に一首ずつ例を挙げる。

《白梅》にかゝるけふりは我宿の庭に春たつ霞なるらん

(一二三・二十年)

《白梅》の花はそれとも見えわかで月の光りの匂ふ夜半かな

(一二七・二十年)

年の内になとかはさかぬさけりとも雪にやうつむ庭の《梅か枝》

(一二二・二五年)

「梅」を「霞」「月」「雪」と共に詠む例は、次の例のように古歌に多く見られる。「梅」「霞」「月」「雪」に当たる語

に傍線を付す。

梅がえをかりにきてをる人やあるとのべの霞はたちかくすかも  
月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける  
雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし

(拾遺和歌集・一〇一四・源順)  
(古今和歌集・四〇・躬恒)  
(古今和歌集・三三七・紀友則)

明治三十一年

### 視覚表現 三〇首

色を表すもの

劔うつ小鍛冶か槌の音冴えて稻荷の《梅》の眞白に散る

(四二三・三二年)

丁とうてば丁とうつ槌音冴えて鍛冶屋の《梅》の眞白に散る

(四二四・三二年)

文寫す窓の《紅梅》咲きそめて紅うつる薄様の上に

(四三二・三二年)

動きを表すもの

花いけにいけなんとする《紅梅》のあたら荅の玉をこぼしつ

(四三四・三二年)

門口に《梅》散り背戸に椿咲く里のけしきは見れとあかぬかも

(六〇〇・三二年)

状態を表すもの

野の道に咲ける《白梅》善き人のあたり見まはして枝折りて行く

(三四八・三二年)

《紅梅》に來居る鶯鳴きやめてやがてぞ下りぬ水鉢の上に

(四三〇・三二年)

墓原の《梅》吹き散らす夕風に柩を送る笛の音ぞする

(五四三・三二年)

《紅梅》の蒼に似たる唇に乳を求めてやきや／＼と泣く

(六三〇・三二年)

故郷の《梅の青葉》の下陰に衣浣ふ妹の面影に立つ

(六三八・三二年)

視覚行為を表すもの

板塀に立枝ぞ見ゆる門構誰か思ひ者か《梅》に琴をひく

(六三二・三二年)

太刀佩きていくさに行くと《梅の花》見てし年より病みし我かも

(六三三・三二年)

触覚表現 一首

雨乾く《薄紅梅》の夕日影又照り返すカナリヤの籠

(四三三・三二年)

複合感覚表現（視覚表現・触覚表現）一首（視覚表現に傍線―、触覚表現に波線〰を付す）

雨乾く《薄紅梅》の日影又照り返すカナリヤの籠

(四三三・三二年)

明治三十一年の子規短歌の「梅」に対する感覚表現には触覚表現が一例見られるが、以降の期間の作品では触覚表現は見られない。また、明治三十年以前の作品に見られる「梅」に対する嗅覚表現は見られない。

「梅」に対する視覚表現では、色を表すものが新たに見られるようになる。明治三十年以前の作品でも「白梅」と梅の色を表している熟語の使用が見られるが、次の歌のように「眞白に散る」「紅うつる」といった句で「梅」の色を表す例は、明治三一年が最初である。

劔うつ小鍛冶か槌の音冴えて稻荷の《梅》の眞白に散る  
(四二三・三二年)

文寫す窓の《紅梅》咲きそめて紅うつる薄様の上に  
(四三二・三二年)

このような「梅」の色の表し方は、以降の期間の作品にも見られる。特に明治三五年では、紅梅を「紅梅」と熟語を用いておらず、右のような方法で「梅」の色が赤いことを表す例が複数見られる。次の作品では紅梅を「くれなゐの梅」「紅に染めたる梅」と表現している。

年のはの北風さむくれなゐの《梅》のつぼみのちひさきろかも  
(拾遺四五七・三五年)

つくしこはうまなれや紅に染めたる《梅》を絹傘にせる  
(拾遺四六一・三五年)

また明治三一年の作品での「梅」は、「月」「雪」などの白色のものと詠まれることが少なくなり、「赤」など他の色と一緒に詠まれることが増えている。明治三十年以前では白色以外のものでは「鶯」が一例見られるのみであるが、明治三一年では次の色のものが「梅」と共に詠まれる。一例ずつ例を挙げる。

緑色（鶯）

《紅梅》に來居る鶯鳴きやめてやがてぞ下りぬ水鉢の上に  
(四三〇・三二年)

紅色（夕日）

雨乾く《薄紅梅》の夕日影又照り返すカナリヤの籠

（四三三・三一年）

茶色（早春の柳）

市中に小料理屋の庭狭み柳おしわけて《紅梅》の咲く

（四三五・三一年）

桃色（桃）

東京は春まだ寒き雛祭《梅》のさかりに桃の花を賣る

（五五六・三一年）

暗色（陰）

北うけて雪また残る竹藪の藪陰寒し《梅》五六本

（五九六・三一年）

このような「梅」と一緒に白色以外のものを積極的に詠む例は、明治三三年にも見ることができる。

明治三十年以前から変化した表現には、次の点も挙げられる。

明治三十年以前の「梅」の視覚表現では、「梅」を「早春の花」であることを前提とした表現が複数見られるが、明治三一年ではそのような「梅」の表現は少なくなっている。

明治三十年以前では、次の二首の「梅」のように、「早春の花」であることを念頭に置いた状態で「梅」が咲いているのを捉え表現している例が、他の期間の作品と比べ多い。

春たゝはおのか色香も老んとや年のこなたに《梅》は咲くらん

（七〇・十八年）

さらぬたに月日は早く立ものを春をうなかく《梅》の初花

（七一・十八年）

「春たゝは」の短歌では年内に「梅」が咲いたことに対して、「梅」が早春に咲くものであるという考えから外れているために、「春たゝはおのか色香も老んとや」と早咲きの理由を推測している。「さらぬたに」の歌では、「梅」が「早春の花」であることから、「梅」が「春をうなかつ」ものであると「梅」の性質を發展させている。

このような、春になったので「梅」が咲く又は「梅」によつて春が来るといった、「梅」の開花と春の到来の關係を表現した例は明治三十一年のには見られない。次の作品のように、「梅」の状態をそのまま描写した表現が殆どである。

《紅梅》の咲く門とこそ聞きて來し根岸の里に人尋ねわびつ

(四二九・三一年)

右の短歌では、「梅」が「咲く」とあることで季節が早春であることが分かるが、歌中では「梅」の状態をそのままに描写している。

明治三十一年の子規短歌では「早春の花」ではない状態の「梅」を詠んだ例も見られる。例えば次の作品は、自筆稿本で夏の部に入れられているものである。「梅の青葉」に対する視覚表現(例の傍線部)は、青葉が陰を作るくらい茂っている状態を表している。

故郷の《梅の青葉》の下陰に衣浣ふ妹の面影に立つ

(六三八・三一年)

明治三二年

視覚表現 六首

動きを表すもの

わか友はこよひの月に月が瀬や《梅》散る山に詩を吟ずらん

(一〇三八・三二年)

状態を表すもの

春早き多摩のわたりに舟待てば梅見の人の《梅》折りて來し

(一〇三二・三二年)

夜清き片山陰の《梅林》月照り満ちて鶴啼きわたる

(一〇三七・三二年)

《梅》残り椿つほめる賤か家の垣根にそひて曲りゝ行く

(一〇六四・三二年)

明治三二年では、「梅」に対する感覚表現は視覚表現のみである。

明治三二年の「梅」に対する視覚表現について、明治三一年と同様に「梅」の状態をそのまま描写した表現のみである。

明治三一年と異なるのは、「梅」と共に「月」が詠まれている例がやや多く見られる点である。明治三二年に「梅」を詠んだ作品は六首見られるが、その中の二首に「月」が詠み込まれている。

夜清き片山陰の《梅林》月照り満ちて鶴啼きわたる

(一〇三七・三二年)

わか友はこよひの月に月が瀬や《梅》散る山に詩を吟ずらん

(一〇三八・三二年)

右の二首は、明治三年に「夜梅」と題が付されて、次の三首とともに「日本」に発表されている。

月てらす《梅の木の間》にイめばわが衣手の上に影あり

(一四五〇・三三年)

初春の朧月夜をなつかしみ折らんとしたる道のへの《梅》

(一四五一・三三年)

うは玉の闇に《梅か香》聞え來て躬恒か歌に似たる夜半かも

(一四五二・三三年)

自筆稿本では右の三首に加え、「夜梅」の作品群に次の一首が記載されている。

鎖したる園の外面の薄月夜《梅の林》を見て過ぎにけり

(一四五三・三三年)

右の「夜梅」を詠んだ短歌六首の殆どに「月」が詠み込まれている。夜の「梅」に「月」を組み合わせる表現は古歌に多く見られ、子規短歌に古歌の影響が見られる例である。子規は短歌革新で古歌の表現や雅語からの脱却を唱えているが、古典和歌を学ぶ中で得たと考えられる感性は、その感性に基づいた歌材の選択の際に影響を与えているのではない。例えば、後述の「松」や「菊」は賀としてのイメージがあり、その為病状がより悪化した晩年には歌材になり難くなっている。

夜の「梅」を詠んだ作品では、「梅」の姿よりも香りが詠まれることが多く、一四五二番の短歌の「うは玉の闇に梅か香聞え來て」の表現は古歌の影響が強く現れていると言える。

古歌の影響が見られる一方で、古典的な表現と外れる例も見られる。一〇三七番の短歌に見られる組み合わせ「梅」と「鶴」は、古歌に殆ど例が見られないものである。また月夜の中の梅の香りを詠んだ作品が殆ど見られず、六首の中で唯一「梅か香」を詠んでいる一四五二番の短歌での、「躬恒か歌に似たる夜半かも」と闇の中で梅の香りがある状



況を表現することは新しい趣向と言える。

明治三十三年

### 視覚表現 三一首

色を表すもの

草の戸にまつる阿彌陀の御佛に薄紅の《梅》奉る

(一四五七・三三年)

動きを表すもの

瓶にさす《梅》はちれゝど庭にある《梅の木》咲かず風寒みかも

(一四五六・三三年)

野の中の竹むら陰の葱畑に寒さ残りて《梅》散りにけり

(一四七九・三三年)

状態を表すもの

月てらす《梅の木の間》にゝめばわが衣手の上に影あり

(一四五〇・三三年)

瓶にさす《梅》はちれゝど庭にある《梅の木》咲かず風寒みかも

(一四五六・三三年)

日の本の國のはじめを思ひいでゝ其日忘れず《梅》咲きにけり

(一四五九・三三年)

いたつきの長き病はいえねとも年の始とさける《梅》かも

(一九二〇・三三年)

視覚行為を表すもの

鎖したる園の外面の薄月夜《梅の林》を見て過ぎにけり

(一四五三・三三年)

小車の車ゆらゝに見て過ぐる垣内の《梅》の實豆の如し

(拾遺三一・三三年)

### 嗅覚表現 一首

うは玉の闇に《梅か香》聞え來て躬恒か歌に似たる夜半かも

(一四五二・三三年)

明治三三年の作品で「梅」に対する感覚表現は、嗅覚表現が見られる一首(一四五二番)を除き、全て視覚表現が用いられている。

この期間の「梅」を詠んだ作品の中で、「梅」を「早春の花」であることを前提にした表現を見られる。該当する表現に傍線を付して例を二首挙げる。

うは玉の黒き小瓶に《梅》いけて病の牀に春立ちにけり

(一四四八・三三年)

瓶にさす《梅》はちれゝど庭にある《梅の木》咲かず風寒みかも

(一四五六・三三年)

「うは玉の」の短歌では、「梅」を室内に活けたことによって、「病の牀」に春が訪れたという発想が詠まれている。「瓶にさす」の短歌は明治三三年二月十一日に「日本」に発表されているものであり、早春にも拘らず又室内の「梅」が散つたのにも拘らず、庭の「梅」が咲いていないことに注目して、その理由を「風寒みかも」としている。

「梅」が咲いたことの理由を表現している例も見られる。次の「日の本の」の短歌では、紀元節を忘れていない為に、「いたつきの」の短歌では年始の為としている。

日の本の國のはじめを思ひいでゝ其日忘れず《梅》咲きにけり

(一四五九・三三年)

いたつきの長き病はいえねとも年の始とさける《梅》かも

(一九二〇・三三年)

右の二首はそれぞれ紀元節と年始を祝う作品群の中のものである。紀元節や年始がきた為に「梅」が咲いたと表現する例は古歌に殆ど見られない。古歌では、次の作品のように、春が訪れたことによつて「梅」が咲いたとする表現が多く見られる。

春くればやどにまづさく梅花君がちとせのかざしとぞ見る

(古今和歌集・三五二・紀貫之)

明治三年の「梅」を詠んだ作品でも、「梅」が「早春の花」であることを踏まえた表現が数例見られるが、その作品では古歌には殆ど見られない表現も使用されている。右に挙げた紀元節や年始を理由に「梅」が開花することを表現する例の他に次のものが見られる。該当する表現に傍線を付す。

うは玉の黒き小瓶に《梅》いけて病の牀に春立ちにけり

(一四四八・三三年)

瓶にさす《梅》はちれゝど庭にある《梅の木》咲かず風寒みかも

(一四五六・三三年)

この二首には「瓶」が詠み込まれており、古歌では「梅」と「瓶」が共に詠まれている例は僅かである。左に古歌の例を一首挙げる。

むめの花たをりてかめにさす春はありかやさしき墨染の袖

(拾玉集・六〇五)

また「うは玉の」の短歌のように「病」が「梅」と共に詠まれている例は、古歌に見られない表現である。

明治三年の子規短歌の「梅」は、「月」といった白いものと一緒に詠まれている例が見られるが、明治三一年と同

様に白色以外のものが「梅」と詠み込まれる例も複数見られる。左に各色の例を挙げる。

緑色（疊）

いたつきの枕べ近く《梅》いけて疊にちりし花も掃はず

（一四四九・三三年）

黒色（墨絵）

墨さびし墨繪の竹の茂り葉の垂葉の下に《梅》いけにけり

（一四五四・三三年）

青色（海）

大森の汽車を下りて門を入れれば海を南に《梅》咲ける岡

（一四六六・三三年）

渋色（小瓶）

から酒に蟹ひてありし澁色の低き小瓶に《梅》を活けたり

（一五五三・三三年）

「梅」と詠まれる白色のもの（例「月」「霞」など）について、これまでの期間の作品では「月」などの自然物のみであるのが、明治三三年では次の二首のように白色の人工物の例も少し見られる。

砥部焼の乳の色なす花瓶に《梅》と椿と共に活けたり

（一四三七・三三年）

木下川の流を近み《梅園》の垣の外面に白帆行くなり

（一四六五・三三年）

次の明治三三年の作品では、花以外の状態の「梅」が歌材になっている。このような花ではない状態の「梅」が詠まれるのは、明治三十一年以降からであり例数は少ない。

小車の車ゆらゝに見て過ぐる垣内の《梅》の實豆の如し

（拾遺三一・三三年）

明治三五年

視覚表現 二〇首

色を表すもの

紅のこそめと見しも《梅の花》さきの盛りは色薄かりけり

(拾遺四六五・三五年)

ふゝめりし《梅》咲にけりさけれども紅の色薄くしなりけり

(拾遺四六六・三五年)

動きを表すもの

家の内に風は吹かねとことわりに争ひかねて《梅》の散るかも

(拾遺四六三・三五年)

状態を表すもの

年のはの北風さむくれなゐの《梅》のつぼみのちひさきろかも

(拾遺四五七・三五年)

わか病める枕邊近く咲く《梅》に驚なかばうれしけむかも

(拾遺四六〇・三五年)

春されば《梅の花》咲く日にうとき我枕への《梅》も花咲く

(拾遺四六七・三五年)

枕へに友なき時は鉢植の《梅》に向ひて歌考へつゝ

(拾遺四六八・三五年)

視覚行為を表すもの

鉢植の《梅》はいやしもしかれとも病の床に見らく飽かなく

(拾遺四六四・三五年)

《梅の花》見るにし飽かず病めりとも手震はすは晝にかゝましを

(拾遺四六九・三五年)

明治三五年の子規短歌の「梅」に対する感覚表現は、視覚表現のみである。明治三五年で「梅」が詠まれているのは、「御題 新年梅」の題の付された作品群と、子規の日記である『仰臥漫録』に記載されている（この中の六首が明治三五年三月二六日に「日本」に発表されている）ものである。

明治三五年の子規短歌に見られる「新年梅」という題は、古典和歌の題に見られない。年の始めが訪れることと「梅」の開花を関連付ける表現がなされている古歌は殆ど見られない。右のような新年と「梅」の開花を関連させる古歌の例は僅かである。

あたらしき年のはじめを待ちかねてふるえに咲けるうめのはつ花

（浦のしほ貝・九八五）

また「梅」が咲いていない状況を、次の子規短歌のように「つぼみ」であることで表現する方法も、古歌には例が少ない。古歌では「咲かず」「咲かぬ」と表現することが多い。

年のはの北風さむみくれなゐの《梅》のつぼみのちひさきろかも

（拾遺四五七・三五年）

このように古歌での例が少ない表現が用いられる中、次の二首では「雪霜」や「雪」といった白色のものが「梅」と詠まれている。

みうたよみよみたまはくの《梅の花》雪霜しぬぎ年のはにさく

（拾遺四五一・三五年）

わか庭にさく《梅の花》雪なから折りてかさゝん人もあらなくに

（拾遺四五三・三五年）

「梅」と共によむものの色として、次の二首では白色以外の例（「鶯」と「つくしこ」）が見られるが、どちらも「仰臥漫録」に記載された作品である。

わか病める枕邊近く咲く《梅》に鶯なかばうれしけむかも

(拾遺四六〇・三五年)

つくしこはうまなれや紅に染めたる《梅》を絹傘にせる

(拾遺四六一・三五年)

明治三三年の新年や紀元節を祝う「梅」の歌での表現と併せると、「梅」を歌材にした賀の短歌を詠む際は、「梅」を写生する場合よりも、表現が古典的になる傾向が見られると言える。

「梅」と「鶯」の組み合わせも古歌に多く見られるものである。この組み合わせは、短歌革新前から明治三五年までの期間で見られる。子規短歌での「梅」と「鶯」の組み合わせは、次の四首に見られる。

《梅か枝》に始めてきなく鶯の春をしらす法の一聲

(拾遺三・明治十五年以前)

衣を干す庭にぞ來つる鶯の《紅梅》に鳴かず竹竿に鳴く

(四二七・三一年)

《紅梅》に來居る鶯鳴きやめてやがてぞ下りぬ水鉢の上に

(四三〇・三一年)

わか病める枕邊近く咲く《梅》に鶯なかばうれしけむかも

(拾遺四六〇・三五年)

右の四首を見ると、短歌革新前の作品である「梅か枝」の短歌では「梅」と「鶯」の組み合わせが素直に表現されているのが、明治三一年になると「鶯」が「梅」以外のもの(「竹竿」と「水鉢」)にも組み合わせられうることを表現している。明治三五年の作品は、実際には「鶯」と「梅」の組み合わせが成立していないが、「梅」との組み合わせに「鶯」を求めている。

明治三五年の「梅」を詠んだ作品の中の「仰臥漫録」に記載されているものについて、これらの作品の「梅」は枕元にあるものである。子規短歌での枕元の「梅」は、次の例のように「梅」の姿が表現されている。

春されば《梅の花》咲く日にうとき我枕への《梅》も花咲く

(拾遺四六七・三五年)

枕元の「梅」の表現について、古歌では次の短歌のように「梅」の香りが詠まれることが多い。例は『風雅和歌集』より一首を挙げる。歌の番号は『新編国歌大観』のものである。

梅がかは枕にみちてうぐひすの声よりあくる窓のしのめ

(風雅和歌集・八四・前大納言為兼)

このように、「梅」を詠んだ子規短歌には、古歌で多く使用される表現と新しい表現の両方が見られる。左の「月てらす」の短歌のように古歌で多く見られる組み合わせを詠んだものと、「から酒に」の歌のように古歌で多く見られる組み合わせから外れたものが見られる。

月てらす《梅の木の間》にゝめばわが衣手の上に影あり

(一四五〇・三三年)

から酒に蟹ひてありし澁色の低き小瓶に《梅》を活けたり

(一五五三・三三年)

# 松

「松」を詠んだ作品は全部で八〇首である。その中で次の六首に「松」に対する感覚表現が見られない。

琴の音は《松のこすゑ》にのこりけり月はむかしの面影にして

(一四〇・二三年)

あへきつゝ行きかふ人をよそにみてこゝは涼しき《松の下風》

(一八三・二四年)

野を過ぎて《松の下道》わけ入れは蟬の聲さへ耳に涼しき

(一九二・二四年)

高砂の浦の眞砂を相生の《松の齡》の數取りにせん

(二四六・二六年)



うつゝとも夢とも知らず聞きて書きし《松の木末》のたづ物語

(拾遺二八七・三二年)

鎌倉の《松葉が谷》の道の邊に法を説きたる日蓮大菩薩

(一四九二・三三年)

右の「あへきつゝ」の短歌では植物語彙「松の下風」に「涼しき」と触覚表現が用いられているが、涼しいのは「下風」であるので「松」に対する触覚表現としない。「高砂の」の短歌での「松の齡」の「松」は、相生に生えている状態（視覚表現）であるが、植物語彙「松の齡」に対する感覚表現は見られない。よってこの作品では「松」に対する感覚表現は見られないと判断する。「鎌倉の」の短歌では「松葉が谷」が鎌倉にあることを示しており、「松葉」が鎌倉にある状態であるとせず、この作品も「松」に対する感覚表現が見られないとする。

聞きなれし《松の嵐》の音ならばこそあながま瓢あながまの世や

(八九六・三二年)

この作品の「松の嵐」に対して聴覚表現（「聞きなれし」「松の嵐」の音）が見られる。この短歌で詠まれている音は、風と松の両方によって生じたものと判断し、「松」に対する聴覚表現とする。

「松」に対する感覚表現について、各期間でまとめる。抄出した歌例の傍線は、「松」に対してそれぞれ該当する感覚表現に附したものである。

明治三十年以前

視覚表現 十六首

色を表すもの

色だにもかはらぬものを山風のふくともしらでおれし《老松》

(九〇・十九年)

いつまでもつきせぬ御代にくらへては千代のみとりの《松》ものかは

(拾遺一二九・三二年)

状態を表すもの

しはしとて《松の根》泉くみなからすゝしき夢をむすひつるかな

(四・十七年)

雪にをれす霜にもくちぬ高砂の《松》は榮へん千代も八千代

(十八・十八年)

木枯らしの吹きくるからに《磯馴松》千もとも同じ片なひき哉

(二四三・二六年)

すまの浦やいそうつ波のおと絶て《松の木末》に白帆行見ゆ

(三二二・二八年)

聴覚表現 一首

音響を表すもの

《松》にふく夜半の嵐の音たえて梢にのこる有明の月

(二六三・二六年)

触覚表現 一首

温度を表すもの

《松蔭》にわきて流るゝ眞清水の藻にすむ魚は夏をしらしな

(十四・十八年)

複合感覚表現（視覚表現・聴覚表現）

一首（視覚表現には傍線―、聴覚表現には二重傍線＝を付す）

《松》にふく夜半の嵐の音たえて梢にのこる有明の月

(二六三・二六年)

複合感覚表現（視覚表現・触覚表現）

一首（視覚表現には傍線―、触覚表現には二重傍線＝を付す）

《松蔭》にわきて流るゝ眞清水の藻にすむ魚は夏をしらしな

(十四・十八年)

明治三十年以前の子規短歌での「松」に対する感覚表現について、次の特徴を見ることができる。

「松」と涼しさを関連付ける表現が見られることと、樹齢の長い常緑樹である「松」の性質を詠んだ作品が比較的多く見られることである。

一つ目の特徴の「松」と涼しさを関連付けることについて、古歌でも松の下の方や風などに涼しさを感じ表現している作品が多く見られる。

夏衣ゆく手もすずしあづさゆみいそべの山の松のした風

(新勅撰和歌集・一八九・正三位家隆)

松陰にむせぶいづみの音きけば夏なき年とあやまたれつつ

(百首歌合・一二六一・二位中将)

このように「松」と涼しさを関連させる表現は、子規短歌では明治三十年以前の作品のみに見られる。「松」に対する触覚表現が用いられている作品以外にも、次の二首のように「松」と涼しさが関連付けられているものが見られる。

しはしとて《松の根》剃くみなからすゝしき夢をむすひつるかな

(四・十七年)

あへきつゝ行きかふ人をよそにみてこゝは涼しき《松の下風》

(一八三・二十四年)

二つ目の特徴である、樹齢の長い常緑樹であることをそのまま詠む例は、以降の期間の子規短歌には殆ど見られない。歌ことばとしての「松」の表現に次のものが挙げられている<sup>注33</sup>。

…落葉せず、また樹齢の長いことから、長寿の象徴となる。あるいは治世は世の繁栄が長く永遠に続くことを祈る場合にも用いられる。

右のような表現はこの期間の子規短歌に見られないが、次の作品では「松」の樹齢が長いことを用いて、「御代」の長さが強調されている。

いつまでもつきせぬ御代にくらへては千代のみとりの《松》ものかは

(拾遺一二九・三二年)

また次の二首では、樹齢の長い「松」が砕けたり、折れたりする様が詠まれているが、このような以降の期間の作品に殆ど見られず、また古歌の例も多くはないものである。

なやむまでふりぞまされる白雪に《常盤の松》も今やくたけん

(八八・十九年)

色だにもかはらぬものを山風のふくともしらでおれし《老松》

(九〇・十九年)

明治三十一年

視覚表現 十二首

色を表すもの

須磨の浦は砂うつくしく《松》青し南をうけし潮あみところ

(七三三・三二年)

動きを表すもの

寒山も豊干も虎も眠りけり四つの軒に《松葉》散る山

(七九一・三二年)

白砂に《松葉》吹き散る水無月の風緑なり住吉の宮

(八七二・三二年)

状態を表すもの

岡の邊の《松》にや鷹の下りにけん鳥ひそみたる原の草むら

(三九一・三二年)

北風の絶えず吹けばや《磯馴松》片側はかり枝のさすらん

(四五九・三二年)

五百枝さす御園の《松》の枝毎に千代こめて君か代を祝ふかな

(七七九・三二年)

聴覚表現 一首

聞きなれし《松の風》の音ならばこそあながま瓢あながまの世や

(八九六・三二年)

明治三一年の子規短歌での「松」に対する感覚表現の特徴は、「松」の近くに鳥が見える状態であることを表現する例が多くなることと、松葉を題材にした作品が見られるようになることである。

明治三一年の子規短歌で、「松」と共に詠まれている鳥は次の通りである。

鷹

岡の邊の《松》にや鷹の下りにけん鳥ひそみたる原の草むら

(三九一・三一年)

鶴

古園の《松》に巢をくふ鶴の親の夜をこめて鳴く雨かふるらし

(六一八・三一年)

鳶

緑立つ庭の《小松》の梢より上野の杉に鳶の居る見ゆ

(六四七・三一年)

時鳥

飛ふ鳥のあすかに行くか時鳥上野の《松》よ鳴きて過ぎけり

(六五八・三一年)

「松」と詠まれる鳥について、鶴と時鳥は古歌に多く見られるが、鷹と鳶は古歌に例は少ない。

また、この期間の作品で、初めて松葉が歌材になっており、「松葉」が散る様子が詠まれている。「松葉」を詠む例は古歌に多く見られるが、散る「松葉」を表現している例は見られない。「松葉」と共に動詞「散る」を詠んだ短歌は古歌には少ない。また古歌に見られる表現は、次の作品のように「松葉」が散らないことの表現である。

まつの葉のちらぬかげにやしき島のわかのうら人玉ひろふらん

(延文百首・八九三・前大僧正賢俊)

明治三二年

視覚表現 十一首

動きを表すもの

蝉の鳴く森の梢に風過ぎて《松葉》杉葉のはら／＼と落つ

(一一八七・三二年)

状態を表すもの

陵の《松の梢》の春霞再び鶴は歸らざりけり

(一〇三四・三二年)

鯉節紙に包みて水引に《松》と薔薇とをく／＼りそへて遣る

(一一二九・三二年)

高砂の《尾上の松》は枯るゝとも君が契は久しかれと思ふ

(一一三一・三二年)

天さかる鄙の小庭はつくろはず《松》に並びて百合の花あり

(一一七五・三二年)

《松》を摧く嵐の夜半を妻こふる鹿の思ひよ命なりけり

(一二八六・三二年)

すめろぎの御子のみことも御園生の《小松》も我も共に千代經ん

(拾遺二八一・三二年)

明治三二年の子規短歌での「松」に対する感覚表現の特徴は、明治三二年では「松」と鳥の組み合わせが多く見られるのが、この期間では鳥に限らない動物や植物との組み合わせが見られるようになることである。「松」を共に詠まれている動植物は次の通りである。作品例は一首ずつ挙げる。

鶴

陵の《松の梢》の春霞再び鶴は歸らざりけり

(一〇三四・三二年)

雉

ところ／＼つゝじ花咲く《小松原》岡の日向にきゞす居る見ゆ

(一〇四九・三二年)

薔薇

鯉節紙に包みて水引に《松》と薔薇とをくゝりそへて遣る

(一二二九・三二年)

百合

天さかる鄙の小庭はつくろはず《松》に並びて百合の花あり

(一二七五・三二年)

杉

蟬の鳴く森の梢に風過ぎて《松葉》杉葉のはらゝと落つ

(一二八七・三二年)

鹿

《松》を摧く嵐の夜半を妻こふる鹿の思ひよ命なりけり

(一二八六・三二年)

楓

《松》楓畫しつかなる庭の奥にこは清元の三味のね聞ゆ

(一三〇三・三二年)

鶴や杉、鹿を「松」と共に詠む例は古歌に多い。例えば次の例が見られる。

住の江の松ほどひさになりぬればあしたづのねになかぬ日はなし（古今和歌集・七七九・かねみのおほきみ）



よはの嵐はらひかねけり今朝みれば雪のうづまぬ松杉もなし（玉葉和歌集・九七三／九七四・前僧正仁澄）  
たかさごのをのへの鹿はつれもなき松をためしに妻や恋ふらん（続千載和歌集・四〇三／四〇五・法印定為）  
次の二首のように雉、楓を「松」と共に詠む例は、古歌には多くは見られない。

みかりするかた野のみのを今朝みればひとつ松ねに雉鳴くなり

（永久百首・一〇七・仲実）

夏木立秋より後は色は見ず松もかへでも緑なりけり

（他阿上人集・六四三）

薔薇、百合が「松」と詠まれる例は古歌に見られない。

明治三二年も、左の短歌のように、「松」でもって長寿や世の繁栄を表す例の見られる作品は少ない。

すめろぎの御子のみことも御園生の《小松》も我も共に千代經ん

（拾遺二八一・三二年）

左の明治三一年の一首と併せて、明治三一年と三二年の間には二首に見られるのみである。

五百枝さす御園の《松》の枝毎に千代こめて君か代を祝ふかな

（七七九・三一年）

## 明治三三年

### 視覚表現 三十首

色を表すもの

家主の植ゑておきたる我庭の背低《若松》若緑立つ

（一七〇二・三三年）

緑立つ《小松か枝》にふる雨の雫こぼれて下草に落つ

（一七五八・三三年）

動きを表すもの

日和風ソヨ吹き過ギテ《若松》ノムラ立ち青芽ムラ／＼動ク

(一八三九・三三年)

状態を表すもの

夜をこめて驛路行けは荒磯の《松の木の間》に波のよる見ゆ

(一四〇四・三三年)

《松の葉》の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず

(一七五六・三三年)

よろづ代をいはひて折りし《松か枝》に二房垂るゝ藤波の花

(一八一〇・三三年)

住吉ノ神ノソリ橋タサレハ《松ノ木ノ間》ニ細キ月見ユ

(一八七七・三三年)

視覚行為を表すもの

から國ゆ歸りし船の舳に立ちて須磨の《濱松》見ればうれしも

(一七四八・三三年)

明治三三年の子規短歌の「松」に対する感覚表現について、次の特徴が挙げられる。

「藤と共に詠むことで賀を表現する歌が複数見られること。但し、子規が「松」を賀のものとして扱っているものではない。

これまでの期間で「松」を賀の象徴として表現した短歌は少ないが、明治三三年では三首見られる。自筆稿本での題は「嚴島行幸」であり、新聞に発表した際は「募集歌『讀平家物語』に就きて」と題が付されている。

また次の歌は「藤花」と題の付された作品群の一首である。

廣庭の《松の木末》にさく藤の花もろ向けて夕風吹くも

(一七二七・三三年)

この作品と同一作品群の短歌には次のものがある。これらの例より、右の作品での「松」と「藤」を組み合わせる行為は、子規自身、または子規の身近な人によるものではないといえる。

公達がうたげの庭の藤波を折りてかざゝば地に垂れんかも

(一七二九・三三年)

## Ⅱ 「松葉」と「露」の組み合わせを詠んだ連作を作っていること。

明治三三年に子規は、「五月廿一日朝雨中庭前の松を見て作る」と題を付した連作を作っている。次の短歌はその中の一首である。

《松の葉》の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず

(一七五六・三三年)

「松葉」と「露」の組み合わせは、次のように子規にとって自賛の対象となっているものである。『墨汁一滴』の記事(明治三四年四月二六日発表)<sup>注34</sup>より抜粋する。

…ある人に向ひて短歌の趣向材料などに就きて話すついでにいふ、「松葉の露」といふ趣向と「桜花の露」といふ趣向とを同じやうに見られたるは口惜し。余が去夏松葉の露の歌十首をものしたるは古人の見つけざりし場所、或は見つけても歌化せざりし場所を見つけ得たる者として誇りしなり。若し花の露ならば古歌にも多くあり、又旧派の歌人も自称新派の歌人も皆喜んで取る所の趣向にして陳腐中の陳腐、厭味中の厭味なる者なり。…

この「松葉の露」の趣向について、明治三一年から「松葉」が詠まれているが、その表現は「散る」といったものである。明治三一年に歌材を「松」から「松葉」まで拡大したのが、明治三三年に「松葉の露」として実を結んだと

言える。

### 目 「松」に対する視覚行為が見られること。

明治三三年に初めて「松」に対しての視覚行為を詠んだ例が見られ、その作品数も一首と少ない。これは、前述の「五月廿一日朝雨中庭前の松を見て作る」の連作は例外となるが、子規にとって「松」は意識して見る対象の植物ではなかったのではないか。

後述するが「松」と同様に花が鑑賞対象でない「杉」も、視覚行為を表す例が次の二首のみである。

右に檜左に櫻眞日向きに上野の《杉》の見ゆるガラス戸

(拾遺三〇四・三三年)

浅き夜ノ月影清ミ森ヲナス《杉ノ梢》ノ高キ低キ見ユ

(一七九六・三三年)

また「松」と「杉」は、花が鑑賞の対象となる「梅」や「櫻」と比べ、次の例のように、他のものや行動の場所や位置を示す役割であり、且つ「松」「杉」自体の状態の表現が見られない作品が多く見られる。

岡の邊の《松》にや鷹の下りにけん鳥ひそみたる原の草むら

(三九一・三二年)

旅人の往來も絶えて又六が門の《杉葉》に吹雪散るなり

(七七七・三二年)

明治三三年の「松」に対する感覚表現について、次のことも特徴として挙げられる。

「松」の近くに見えるものの内容に、波、月、藤といった古歌でも多く見られる組み合わせの例が新しく見られる。しかしこれは、子規の短歌が古典へ回帰したとは考えられないものである。

波

夜をこめて驛路行けは荒磯の《松の木の間》に波のよる見ゆ

(一四〇四・三三年)

月

住吉ノ神ノソリ橋タサレハ《松ノ木ノ間》ニ細キ月見ユ

(一八七七・三三年)

藤

よろづ代をいはひて折りし《松か枝》に二房垂るゝ藤波の花

(一八一〇・三三年)

「松」と波・月・藤の組み合わせは古典的なものであると言えるが、波と月を詠んだ例は右に挙げた一首ずつである。藤を詠んだ例は四首見られるが、その中の三首が新聞「日本」で「募集歌『讀平家物語』に就きて」と題の付された作品群の中のもの（自筆稿本「竹乃里歌」では「嚴島行幸」の題となっている）である。

また、この期間の作品も「松」と共に詠むものの種類が豊富であり、次の短歌のように、四十雀や菜の花など古歌に多く見られない例も見られる。

杉垣をあさり青菜の花をふみ《松》へ飛びたる四十雀二羽

(一六九八・三三年)

百草の萌えいづる庭のかたはらの《松の木陰》に菜の花咲きぬ

(一七〇三・三三年)

明治三四年

視覚表現 四首

色を表すもの

《若松》の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

(拾遺三九一・三四年)

状態を表すもの

我庭ノ《三モト松》伐リアハレ深キ千草ノ花ニ日ノ照ルヲ見ン

(拾遺四四三・三四年)

下蔭ノ草花惜ミ日ヲ蔽フ《松ガ枝》伐ラン家主怒ルトモ

(拾遺四四二・三四年)

サ庭ベニハビコル《松》ノ枝伐ラバ家主怒ランサモアラバアレ

(拾遺四四一・三四年)

ほととぎす聲も聞かぬは來馴れたる上野の《松》につかずなりけん

(拾遺四二一・三四年)

明治三四年の子規短歌の「松」に対する感覚表現について、「松」を伐る対象として詠んでいることと、「松」の「緑」と自身の病状を対比させている点が、これまでの期間と異なっている。

前年までは次の二首のように、「松」は庭などの景物の一つとして表現されることが殆どである。そこには「松」に対して邪魔なものとする意識や、「松」の長寿としての象徴と自らの境涯の対比する姿は見られない。

家主の植ゑておきたる我庭の背低《若松》若緑立つ

(一七〇二・三三年)

緑立つ《小松か枝》にふる雨の雫こぼれて下草に落つ

(一七五八・三三年)

明治三五年になると、次の歌のように「松」は「千草」を阻むものとして表現されている。

我庭ノ《三モト松》伐リアハレ深キ千草ノ花二日ノ照ルヲ見ン

(拾遺四四三・三四年)

また、「松」の成長と自身の病状の悪化を並べること、で、「松」は自身の境涯と隔たっているものとして表現されている。

《若松》の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

(拾遺三九一・三四年)

## 桜

「桜」を詠んだ作品（歌中で「花」と表記されている桜を含む）は全部で一一四首である。歌中で「花」と表記されているもので「桜」か「梅」かの判断に、次の三点の基準を設ける。

Ⅰ 題で明確に「桜」か「梅」など種類が分かるもの

Ⅱ 前後の短歌が同様の題材の作品であり、前後の歌中で種類が明らかなもの

Ⅲ 表現で推測できるもの。例えば桜の名所と共に詠まれている場合は「桜」と判断する。

以上の三つの基準により、子規短歌での「花」が「梅」を表す例は見られない。

「桜」を意味する「花」を含んだ子規短歌の「桜」を詠んだ作品一一四首の中で次の六首に「桜」に対する感覚表現が見られない。

かりそめに人になとひそ眞心を《花》にとふともふみにとふとも

(八七・十九年)

雪の中にさくもみさほや梅若は名のみ《櫻》を君やこふらむ

(拾遺一一四・二二年)

心なき身にたにかくもをしむらんいかなる《花》の心なれはや

(一五二・二四年)

我身だにしろしよしなきも《花》をしむ心は何のこゝろなるらん

(一五七・二四年)

大臣の《櫻の宴》やはてつらん霞か關を馬車歸るなり

(四七五・三二年)

《小櫻》の君が時間ふ聲ぼけて鐵棒の音に夜は更けにけり

(四七九・三一年)

「桜」に対して用いられている感覚表現の殆どが視覚表現である。僅かに聴覚表現、嗅覚表現、触覚表現の例を見ることができる。

次に「桜」に対する聴覚表現、嗅覚表現、触覚表現が見られる作品を挙げる。視覚表現以外の感覚表現の箇所に傍線を付す。

### 聴覚表現

ものいふといはぬ花とのだてくらべいはぬはいふにまさる《夜櫻》

(拾遺一八八・二三年)

### 嗅覚表現

《花》かとは見れと吹く風かほりなし遠山の端にかゝる白雲

(一三二・二三年)

見わたせは霞たなひく隅田川《花》もてらせり月もかほれり

(一三三・二三年)

### 触覚表現

春雨のしのふか岡にぬれてさく《櫻》をいつる傘の上の花

(一五一〇・三三年)



ガラス戸の外さびしくふる雨に隣の《櫻》ぬれはえて見ゆ

(一五八八・三三年)

「桜」に対する視覚表現について、各期間でまとめる。抄出した歌例の傍線は、「桜」に対してそれぞれ該当する感覚表現に附したものである。

明治三十年以前

### 視覚表現 三一首

色を表すもの

二十年のむかしかにと忍はれぬ飛びかふ《花》を血の雨と

(一一八・二十年)

葉ばかりを黒髪と見て《姥櫻》かしらにかざる花の白雪

(拾遺一八五・二三三年)

朝な／＼霞の底に色そへて《遠山櫻》今やさくらん

(二四二・二六年)

動きを表すもの

思ふことなくてぞくらす身の上に又ちりかゝる《さくら花》哉

(一五一・二四年)

おのれひとり心いそぎのせられてや嵐もまたてちる《櫻》かな

(一六一・二四年)

から山の風すさふなり故さとの隅田の《櫻》今か散るらん

(二九一・二八年)

状態を表すもの

隅田川堤の《櫻》さくころよ花のにしきをきて歸るらん

(一・十五年)

《花》 見めやけふを盛り<sup>レ</sup>のあすか山あすたのむまし變る浮世に

(一一二・十九年)

君來ぬと見し手枕のゆめさめて《櫻》に残る有明の月

(二七九・二七年)

視覚行為を表すもの

ちらはちれながむる程そおもしろき散らてすきなん《花》ならばこそ

(一五九・二四年)

《櫻花》 さくと見え<sup>レ</sup>しは夏山の若葉かもとの夢にそありける

(二七九・二四年)

### 聴覚表現 一首

ものいふといはぬ花とのだてくらべいはぬはいふにまさる《夜櫻》

(一八八・二三三)

### 嗅覚表現 二首

《花》 かとは見れと吹く風かほりなし遠山の端にかゝる白雲

(二三二・二三三)

見わたせは霞たなひく隅田川 《花》 もてらせり月もかほれり

(二三三・二三三)

### 複合感覺表現（視覚表現・嗅覚表現） 二首

（視覚表現には傍線―、嗅覚表現には二重傍線＝を付す）

《花》 かとは見れと吹く風かほりなし遠山の端にかゝる白雲

(二三二・二三三)

見わたせは霞たなひく隅田川 《花》 もてらせり月もかほれり

(二三三・二三三)

明治三十年以前の子規短歌の「桜」について、次の岡井隆氏の指摘がある<sup>注35</sup>。( )内は私に補ったものである。(明治二三年までの)桜花は古歌の範例に従って、因習的な概念の範囲で、ごく慣用的に歌われているにすぎない。明治二十四年になると、「法師看花」「神主見花」「儒者花を見る」「耶蘇教信者花を見る」「歌人はなをみる」「哲学者見花」のような、一種の新題和歌風の試作が、遊戯のように並べられている。…まだ、この時点では、桜花を見る人のこころは相対的なものとしてとらえられていた。…そして、明治二十八年の従軍体験をこえて、子規の歌に、ようやく、ナショナルなもの象徴としての桜花が、芽をふきはじめる。

右の指摘のように、子規の作歌活動の初期である明治二三年までの「桜」に対する表現は、古歌の影響が強く現れている。例えば次の子規短歌で見られる「桜」を「花のにしき」と表現する例は、古歌に多く見られる。

隅田川堤の《櫻》さくころよ花のにしきをきて歸るらん

(一・十五年)

また古歌の「桜」の表現について、次の手法が挙げられている<sup>注36</sup>。

…紀貫之は空に舞い上がる落花を「空の浪」と見立て、絵画的で動的な表現に巧緻さを見せた。ほかにも多くの歌人達は遠景の桜を白雲に、水に浮く桜を白浪に、落花を雪に見立てるなどの表現の工夫を生み、それはたちまち一般化をとげて桜の美を表現する慣用の手法となった。…

子規短歌にも、「桜」を他の物に見立てている作品がある。特に明治三十年以前では次の四首に見られ、他の期間よりも「桜」の見立てが詠まれた歌数が多い。見立てられたものに傍線を付す。

《花》さける木の下陰をながむれば小雨も雪とふりかはりけり

(一一四・二十年)

二十年のむかしいかにと忍はれぬ飛びかふ《花》を血の雨と見て

(一一八・二十年)

《花》かとは見れと吹く風かほりなし遠山の端にかゝる白雲

(一三二・二三年)

葉ばかりを黒髪と見て《姥櫻》かしらにかざる花の白雪

(拾遺一八五・二三年)

また次の短歌での「桜」は「空の浪」に見立てられていないが、古歌に類似した内容となっている。子規短歌の初期の作品と古歌の例を併せて挙げる。

ちる《花》をまたふきあぐる春風はむかしの枝にかへすとすらん

(一五〇・二四年)

ちる花をふきあげのはまの風ならば又も木ずゑにかへりさかせよ

(太皇太后宮小侍従集・二三)

明治二四年から明治二七年の子規短歌での「桜」の表現も、古典の影響を受けたものが多い。

久方の鏡にうつる《さくら花》これや御神の姿なるらん

(一五三・二四年)

言だまのさはふ國のしるしとて咲きやいでけん《山さくら花》

(一五六・二四年)

おのれひとり心いそきのせられてや嵐もまたてちる《櫻》かな

(一六一・二四年)

水鳥のうきねのとけき春の日に《櫻》ちる也しのわつのいけ

(二二三・二五年)

「久方の」の短歌での「さくら花」は『古事記』に登場する木花之佐久夜毘売を想起させるものである。

「言だまの」の短歌での「山さくら花」は栄えを感じさせ、「おのれひとり」の短歌での「櫻」は風雨によって散ることへの嘆きが詠まれている。この栄えの象徴としての「桜」と、散ることへの嘆きが詠まれる「桜」の表現は、歌ことばとしての「桜」の表現である。

「水鳥の」の短歌は、次の古歌を本歌取りしたものと考えられる。

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

（古今和歌集・八四・紀友則）

左の子規短歌では、「櫻の花のうてな」と「紅の雲」とが類似している様子が表現されている。この表現は、「桜」が「雲」に見立てられる表現が一般的であることが前提となっている。

御佛のいとも尊とし紅の雲か《櫻》の花のうてなか

（二七四・二七年）

明治三十年以前の作品では「桜」の傍に見えるもので共に詠まれるものに、「月」や「霞」といった白色のものが、他の色のものと比べやや多く見られる。左に各色の例を挙げる。

白色（月）

君來ぬと見し手枕のゆめさめて《櫻》に残る有明の月

（二七九・二七年）

暗色（隅田川）

名にしあふすみたの川は濁れども濁らぬ御代の《花》ぞかふばし

（八一・十八年）

緑色（葉）

葉ばかりを黒髪と見て《姥櫻》かしらにかざる花の白雪

（拾遺一八五・二三年）

古歌でも、次の例のように「桜」と一緒に「月」や「霞」が詠まれる例を多く見ることが出来る。

春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

（古今和歌集・六九・詠み人知らず）

あたら夜のまやのあまりにながむれば桜にくもるありあけの月

（後撰和歌集・一〇四・後鳥羽院）

明治三十年以前の「桜」に対する色の表現は、白色としての表現と紅色としての表現が見られ、どちらかに統一して「桜」の色を表していない。「桜」の色を白色として詠む例と紅色として詠む例の両方が見られるのは、後の期間の作品にも見られる。左の短歌では、「桜」をどちらの色で表現するか統一しかねる子規の考えが伺える。

白きにはえ赤きにほふ遠里の《櫻》の色に繪かきは惑ふ

(一六六〇・三三年)

古歌では、左の作品のように「桜」を紅色で表現する例が見られるが、「桜」を白色で表現するよりもずっと少ない例数である。紅色の表現の箇所傍線を付す。

くれなゐにふかくにほへるさくらばなめさへいろをふりぞししめにける

(一条大納言家歌合・二・少将源つねたか)

「桜」に対する聴覚表現について、次の子規短歌のように植物に対して「もの言ふ」を用いる聴覚表現は、古歌に殆ど例を見ることが出来ない。

ものいふといはぬ花とのだてくらべいはぬはいふにまさる《夜櫻》

(一八八・二三年)

「桜」に対する嗅覚表現について、子規短歌では明治三十年以前の作品のみに使用例が見られる。古歌でも次の短歌のように「桜」の香りを表現する例が多く見られる

遠近のさくらは雲にうづもれて風のみ花の香に匂ひつつ

(新拾遺和歌集・九三・民部卿為明)

このような「桜」の香りの表現は、明治三十一年発表の「五たび歌よみに與ふる書」で左のように否定されており注37、明治三十一年以降の作品では「桜」に対する嗅覚表現が見られない。

…「花の匂」などいふも大方は嘘なり、櫻などには格別の匂は無之、…

このように、明治三十年以前の子規短歌での「櫻」の表現は、古歌の表現の影響が強く見られる。その一方で、「櫻」を「雨」「雲」に見立てる際に、その色を赤色としている点で新しい趣向も見られる。

明治三十一年

## 視覚表現 十九首

色を表すもの

《櫻》 白く桃紅の垣つゞき同姓の家に雛祭るなり

(五五二・三二年)

動きを表すもの

縁日の市に買ひ得し早咲の《鉢栽櫻》散りぬ歌無し

(四五六・三二年)

状態を表すもの

故郷の老木の《櫻》朽ちにけり我見しよりも三十年ぞ經し

(四二一・三二年)

松山の城下きつての《大櫻》其《櫻》咲く下ぞ吾家

(四九七・三二年)

我昔住みにし跡を尋ねれば《櫻》茂りて人老いにけり

(八八〇・三二年)

視覚行為を表すもの

いたつきに三年こもりて死にもせず又命ありて見る《櫻》かな

(六〇二・三二年)

路の邊に車とゝめて《櫻花》折りげに見ゆるふらんすをとめ

(一〇〇六・三二年)

明治三一年の「桜」に対する視覚表現は、明治三十年以前と比べ、次の三点が異なっている。

## Ⅰ 「桜」の近くで視覚できるものの色の種類がやや増えていること。

白色以外のものの例を一首ずつ挙げる。

紅色(桃)

《櫻》 白く桃紅の垣つゞき同姓の家に雛祭るなり

(五五二・三二年)

綠色(海)

たひらかに緑きたる海の上に《櫻花》咲く八つの島山

(七九九・三二年)

暗色(硯の水)

一枝の《櫻》を瓶にさしておけば硯の水に花ぞ散りける

(六一六・三二年)

この期間でも「月」など白色のものの例が見られるが、白色のものと「桜」と詠まれる例は少なくなっている。

## Ⅱ 様々な状態の「桜」が詠まれていること。

「咲く」「散る」以外の状態の「桜」が、他の期間の作品と比べ多く見られる。

例えば前出の「老木の櫻」(四二一番)や、「(櫻) 茂りて」(八八〇番)といった表現が見られる。

## Ⅲ 古歌の表現から外れた詠み方や、「桜」を写實的に描写したものも見られること。



大佛も鐘樓も《花》にうつもれて人聲こもる山の白雲

(四八〇・三二年)

車をないたくはせそ道の邊の《櫻の花》の散るがおもしろ

(九九八・三二年)

太鼓打つ雛は桃にぞ隠れける笛吹雛に《櫻》散るなり

(五五〇・三二年)

右の「大佛も」の短歌では、「花」が「白雲」に見立てられており、古典的な表現と言える。しかし同一歌内に「大佛」「鐘樓」といった漢語が使用されており、歌材の点では古歌のものから外れている。

「車をな」の短歌では「桜」が散るのに対して「おもしろ」とし、多くの古歌で見られる「桜」が散ることを嘆く表現と対照的である。

「太鼓打つ」の歌では「桜」が散ることをそのまま描写している表現である。

明治三十一年の「桜」に対する表現は、古典的なものとそこから外れるものの両方が見られる。

明治三二年

#### 視覚表現 四首

御魂祭る四月はじめの三日の日を時とかしこみ《櫻》咲きけり

(一一〇一・三二年)

人の衣に佛のひだをつけん事は竹に《櫻》をつげらんが如し

(一一〇六・三二年)

葉の落ちし《櫻》を見れば春花の咲きのさかりに來さりしも惜し

(一三四五・三二年)

人去りて上野の山は暮れにけり茶店の旗に《櫻》ちる鐘

(拾遺二五七・三二年)

この期間の「桜」に対する表現で、これまでの表現と異なるのは、「葉の落ちし」の短歌では「桜」の見頃を逃したことに對して、「桜」の散りやすい性質を嘆くのではなく、自身の行動に對して「惜し」としていることである。

明治三三年

## 視覚表現 四七首

色を表すもの

白きにはえ赤きににほふ遠里の《櫻》の色に繪かきは惑ふ

(一六六〇・三三年)

動きを表すもの

君が倚る朱のおはしま小夜更けて雪洞の火に《櫻》散るなり

(一五三六・三三年)

状態を表すもの

人も來ぬ櫻か岡に咲きをゝる《櫻の雨》に鴉なくなり

(二五一八・三三年)

ガラス戸の外に植ゑおける《櫻花》ふゝむさくちる目もかれず見き

(一六五六・三三年)

病む我を寫す寫眞に床のへの瓶にさしたる《櫻》寫りぬ

(一六五八・三三年)

視覚行為を表すもの

小金井の《櫻》はいまだ見えなくに腰骨いたし馬しましとめ

(一六七四・三三年)

明治三年の「桜」に対する表現は、明治三年のものとはほぼ類似している。

「桜」と共に詠まれるものの色は、紅色(「雪洞の火」一五三六番)、緑色(「柳」左の一六四三番)、暗色(「林の陰」左の一六四二番)である。

《櫻》さく上野の岡ゆ見おろせは根岸の里に柳垂れたり

(一六四三・三三年)

御魂屋の杉の林の陰にさく《老い朽ち櫻》花の乏しき

(一六四二・三三年)

また、様々な状態の「桜」(右の「花の乏しき」や、「桜」の写実的な描写(左の一六五四番)、榮華の象徴としての「桜」が見られる。

ガラス戸の外に植ゑおける《櫻花》ふゝむさくちる目もかれず見き

(一六五六・三三年)

さす竹のみ子のみことの大御女をめすらん年と《花》咲きさかゆ

(一六三八・三三年)

明治三年と異なる点は、古歌の影響を受けた「桜」の表現が少なくなっていることである。

明治三年の子規短歌にも見立ての手法が用いられている作品が二首見られる。

岡の上に天凌き立つ御佛の御肩にかゝる《花》の白雲

(一六四五・三三年)

咲く《花》の薄色雲は吾妻橋ゆ梅若丸の塚になひけり

(一六四七・三三年)

右の二首は「櫻花」と題の付された三一首の作品群の内の二首であり、同一作品群の他の短歌では写生的、国家と

しての意識、繁榮のイメージの作品が見られる。この二首で「櫻」を雲に見立てる表現を用いたのは、一つの題材を様々な趣向で詠んだためと言える。

明治三四年

### 視覚表現 三首

世の中は悔いてかへらずたらちねのいのちの内に《花》も見るべく

(拾遺四〇〇・三四年)

うちひさす都の《花》をたらちねと二人し見ればたぬしきろかも

(拾遺四〇一・三四年)

われひとり見てもたぬしき都べの《櫻の花》を親と二人見つ

(拾遺四〇二・三四年)

明治三四年の「櫻」は、事実の描写として用いられている。

明治三四年は子規の没年の前年であるが、「櫻」の散りやすい性質と子規自らの境遇を重ねる例は見られない。

杉

「杉」を詠んだ作品は全部で三八首である。その中の次の二首以外に視覚表現が用いられている。

聴覚表現のみ、感情表現が見られる (聴覚表現の箇所傍線を付す)

釘打ちし恨や長く残るらん夜な〜《杉》の泣くと人のいふ

(五六一・三一年)

感覚表現が見られない

檜の木山《杉山》越えて蔦の這ふ木曾のかけ橋今見つるかも

(七五一・三一年)

「杉」に対する視覚表現について、各期間でまとめる。聴覚表現は右に挙げたので省略する。抄出した歌例の傍線は、「杉」に対してそれぞれ該当する感覚表現に附したものである。

明治三十年以前

## 視覚表現 一首

状態を表すもの

有明の廿日の月のはら／＼としぐれて消ゆる《杉》のむら立

(三二七・二八年)

古歌での「杉」の詠まれ方について、『歌ことば歌枕大辞典』の「杉」の項より次の内容が挙げられている<sup>注38</sup>。引用の傍線と改行は私に付したものである。

『万葉集』には

「味酒を三輪の祝が<sup>うまを</sup>齊<sup>は</sup>ふ杉手触れし罪か君に逢ひ難き」(巻四・七一二・七一五・丹波大女娘子)  
…とすでに神木として詠出される。杉を詠じた著名な歌は『古今集』の

「初瀬川古川のへに二本ある杉年をへてまたもあひ見む二本ある杉」(旋頭歌・一〇〇九・よみ人しらず)

という、初瀬川に二本並んで立つ杉と、

「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらへ来ませ杉立てる門」(雑下・九八二・よみ人しらず)

という三輪明神の御歌と伝えられるもので、二首とも杉を歌材とした以後の歌に大きな影響を与えた。  
右で挙げられている「杉」の表現の影響は、明治三十年以前の作品には見られない。

明治三十一年

## 視覚表現 十五首

状態を表すもの

野社にはやらぬ神を祭りけり《杉》ほの暗く梅の花咲く

(六二八・三二年)

日をうけて覆盆子花咲く《杉垣根》そのかたはらよ物ほしどころ

(六四二・三二年)

さくゝしろいすゞの宮の《神杉》を焼きぬと聞くもかしこきものを

(八一八・三二年)

ひむかしの京の丑寅《杉》茂る上野の陰に晝寐すわれは

(九三四・三二年)

其陰に茶屋の釜を据ゑにけり注連引きはへし諏訪の《神杉》

(九四九・三二年)

明治三十一年の「杉」に対する視覚表現は、全て状態を表すものである。また大半(九首)が、「日をうけて」の短歌のように、「杉」自体の様子の描写はなく、「杉」は他のもの(この作品では「覆盆子」「物ほしどころ」)の場所を示

す役割となっている。

明治三十年以前の子規短歌では「神木として詠出」される例は見られないが、明治三十一年では数首に神木としての「杉」が詠まれている。左に例を二首挙げる。

さくゝしろいすゞの宮の《神杉》を焼きぬと聞くもかしこきものを

(八一八・三十一年)

其陰に茶屋の釜を据ゑにけり注連引きはへし諏訪の《神杉》

(九四九・三十一年)

右の二首の中の「其陰に」の短歌では、古くから詠まれている「神杉」が題材であるが、同時に「茶屋」といった漢語や「茶屋の釜」といった商いの道具が詠まれている。題材は古典的なものであるが、聖（神杉）と俗（茶屋の釜）を並べており、子規の新しい趣向の作品であると言える。

次の二首のような、「杉」を生活に即したものととして詠んでいる例も複数見られる。

日をうけて覆盆子花咲く《杉垣根》そのかたはらよ物ほしどころ

(六四二・三十一年)

ひむかしの京の丑寅《杉》茂る上野の陰に晝寐すわれは

(九三四・三十一年)

明治三二年

## 視覚表現 五首

状態を表すもの

《杉垣》をめぐらす庭の狭けれと春も花咲く秋も花咲く

(一〇五八・三二年)

《杉垣》を右に曲りて左せよ桃さくところ先生の家

(一〇五九・三二年)

庭中に稻荷を祭る古家の《杉垣》低く幟立つ見ゆ

(一〇六三・三二年)

蟬の鳴く森の梢に風過ぎて松葉《杉葉》のはら／＼と落つ

(一一八七・三二年)

世の中の元嶺元山後のために《杉の林》を植ゑんとぞ思ふ

(一一九五・三二年)

明治三一年の子規短歌の「杉」の多くは、「杉」自体の様子の描写がなく他の歌材の場所や位置を表す表現であるが、明治三二年ではそのような「杉」の表現は、「杉垣を右に曲りて」の短歌の一首に見られるのみである。

またこの期間でも、「杉」を生活に即した植物として詠んでいる例が見られる。例えば右の「杉垣をめくらす庭の」の短歌では、庭の「杉(垣)」が詠まれている。

明治三三年

### 視覚表現 十四首

状態を表すもの

《杉むら》に白き幟のほの見えて天狗を祭る社ありけり

(一三九一・三三年)

君ガ庭ニ老木ノ《杉》ヲナミ植エテ奥ニ稻荷ヲ祭ラバヨケン

(一六三三・三三年)

御魂屋の《杉の林》の陰にさく老朽ち櫻花の乏しき

(一六四二・三三年)



視覚行為を表すもの

右に極左に櫻眞日向きに上野の《杉》の見ゆるガラス戸

(拾遺三〇四・三三年)

浅き夜ノ月影清ミ森ヲナス《杉ノ梢》ノ高キ低キ見ユ

(一七九六・三三年)

明治三年の「杉」に対する視覚表現は、右の視覚行為を表すものに挙げた二首以外が、全て「杉」の状態を表すものの表現となっている。「杉」の状態を表す表現の大半(九首)が、「杉むらに」の短歌のように、「杉」自体の様子の描写がなく他のもの(この作品では「白き幟」)の場所を示している。

《杉むら》に白き幟のほの見えて天狗を祭る社ありけり

(一三九一・三三年)

この期間の子規短歌の「杉」にも「神木」として詠まれている例が見られる。次の二首を挙げる。

いにしへの黄金の殿の残りたる二荒山の《杉のむら立》

(一三八三・三三年)

二荒ノ玉ノ宮居ヲカクミタル《杉ノ林》モ三百年経ヌ

(一八二九・三三年)

右の二首では、二荒山神社の杉(神木)を詠んでいる。二荒山の「杉」を詠んでいる作品は、明治三十一年にも見られる。

二荒の山来てみれば玉光り黄金かゝやく《杉の下陰》

(七九二・三二年)

子規短歌で、同じ場所の「杉」が複数作品詠まれる例は、二荒山の「杉」のみである。前掲の『万葉集』の例では三輪の「杉」を「神木」として詠まれているが、明治期の歌人である子規にとって最も身近な神杉の一つが、実際に

旅行した場所でもある日光（二荒山）の杉であったと考えられる。

「神木」としての「杉」以外に、次の三首のような生活に即した「杉」の作品も見られる。

右に櫨左に櫻眞日向きに上野の《杉》の見ゆるガラス戸

（拾遺三〇四・三三年）

浅き夜ノ月影清ミ森ヲナス《杉ノ梢》ノ高キ低キ見ユ

（一七九六・三三年）

向ツ尾ノ上野ノ《杉》ヲ吹ク風ノシバシユトリテ庭ノ木ヲ吹ク

（一八四四・三三年）

「杉」に対しての視覚表現「見ゆ」が使用されているのは、生活に即した「杉」に対してである。

明治三五年

## 視覚表現 一首

状態を表すもの

かみふさの山の《杉》きりみやこべの茅場の町に茶室つくるも

（拾遺四五八・三五年）

明治三五年の作品の「杉」は他のものの場所を示すものではないが、「杉」は伐られる対象であり、鑑賞の対象とはなっていない。

この杉は「神木」としてではなく、材木として伐られるものであり、生活に即した「杉」と言えるものである。次の歌より、「杉」は室内から見える植物と考えられるが、「杉」を見て表現することがなくなっている。

右に檜左に櫻眞日向きに上野の《杉》の見ゆるガラス戸

(拾遺三〇四・三三年)

明治三五年の子規短歌の植物は「梅」を除き、丈の低いものが主となっている。これは晩年の子規の植物に対する嗜好及び対象物の観察の視点が、草花など木に比べ大振りでなく小さい存在の植物へ向いた為ではないかと考えられる。例えば次の歌では「松」に対して「草花」の視点から「ハビコル」と評価し、伐る対象としている。「松」と「千草」「草花」への評価が見られる箇所には傍線を付す。

サ庭ベニハビコル《松》ノ枝伐ラバ家主怒ランサモアラバアレ

(拾遺四四一・三四年)

下蔭ノ草花惜ミ日ヲ蔽フ《松ガ枝》伐ラン家主怒ルトモ

(拾遺四四二・三四年)

我庭ノ《三モト松》伐リアハレ深キ千草ノ花ニ日ノ照ルヲ見ン

(拾遺四四三・三四年)

このような木よりも草花に意識を向けていることが読み取れる表現は、明治三三年から見られる。次の二首では木(松)の陰にある花に目を向けている。

百草の萌えいづる庭のかたはらの《松の木陰》に菜の花咲きぬ

(一七〇三・三三年)

我庭の《松の木陰》に菊さけば昔の人し思ほゆるかも

(一九一一・三三年)

晩年での子規にとって、右に挙げた嗜好の他に視points点でも、大きく頑丈な木よりも小さく見える草花の方が、自身の状態に投影しやすく歌材とする傾向があったのではないか。

## 菊

「菊」を詠んだ子規短歌は二六首であり、その全ての作品の「菊」に対する感覚表現は視覚表現のみである。

「菊」に対する視覚表現について、各期間でまとめる。抄出した歌例の傍線は、「菊」に対してそれぞれ該当する視覚表現に附したものである。

明治三十年以前

### 視覚表現 一首

市人にうられんものを《しら菊》の花ようらみそ我手折るとも

(二〇六・二四年)

明治三十年以前の子規短歌で「菊」が詠まれている作品は、右の一首のみである。

「菊」を売り物として詠む表現や「菊」が恨みを持つという表現は、古歌に例が少ないものである。

また、以降の期間の子規短歌に「白菊」の形で「菊」が詠まれている例は、次の二首を除き見られない。

賣れ残る黄菊《白菊》積みあげて歸る車や大路小路の霜

(一〇一〇・三一年)

我心いふせき時はさ庭への黄菊《白菊》我をなくさむ

(一九一三・三三年)

右の明治三一年以降の「白菊」を詠んだ作品では、「黄菊」が共に詠まれており、白色と黄色の色の組み合わせが見られる。次の古歌のような「霜」などの白いものにより「白菊」の白さを強調する表現は見られない。

心あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊の花

(古今和歌集・二七七・凡河内みつね)

右の凡河内躬恒の短歌について、子規は次のように批評している<sup>注39</sup>。

…此歌は嘘の趣向なり、初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣無之候。…

この躬恒の短歌への批評の実践が、次の作品に現れている。

賣れ残る黄菊《白菊》積みあげて歸る車や大路小路の霜

(一〇一〇・三一年)

明治三一年の短歌で「白菊」を詠んだ作品は右の一首である。この作品では「霜」も共に詠まれているが、「白菊」の白さを強調する役割のものではない。

子規は短歌の表現としての「嘘」について、先の引用に続き次のように述べている<sup>注40</sup>。引用の傍線と改行は私に行ったものである。

…趣向嘘なれば趣も絲瓜も有之不申、蓋しそれはつまらぬ嘘なるからにつまらぬにて、上手な嘘は面白く候。例  
えば

「鵲のわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」

面白く候。躬恒のは瑣細な事を矢鱈に仰山に述べたのみなれば無趣味なれども家持のは全く無い事を空想で現はして見せたる故面白く被感候。嘘を詠むなら全く無い事とてつものなき嘘を詠むべし、然らざれば有りの儘に正直に詠むが宜しく候。…

このように、子規は短歌に「嘘」を詠み込むことは、「上手な嘘」「とてつものなき嘘」に限り面白い趣向としている。

しかし子規は、明治三十一年の「白菊」を詠んだ作品（二〇一〇番）の歌のように、「白菊」を「有りの儘に正直に詠む」方法で表現している。「白菊」に限らず、子規短歌での「菊」に対する表現は、「嘘」は用いられていない。

明治三十一年

## 視覚表現 九首

色を表すもの

《芭菊》の黄も緋も白も眞盛りに咲ける君か代まさきくありません

（二〇一四・三二年）

状態を表すもの

《夏菊》の枯るゝ側より葉雞頭の紅深く伸ひ立ちにけり

（九三〇・三一）

草の戸に御姿掛けて《菊》いけてわが祝ふらくは千代いませとぞ

（二〇一七・三二年）

明治三十一年の子規短歌の「菊」に対する視覚表現の特徴に、様々な色の「菊」が表現されていることが挙げられる。右の一〇一四番の短歌では黄色、緋色、白色の三色が表現されている。明治三十一年以降の子規短歌で「菊」の色が明示されている例は少しであるが、白色以外の「菊」を詠んだのは明治三十一年が初めてである。黄色と緋色（紅色）の「菊」について、古歌では黄色と緋色（紅色）を明示した作品は少ない。左に古歌の例を一首ずつ挙げる。色を表す箇所傍線を付す。

黄色

河水の黄なる花さく菊のうへに千年すむてふ秋契るらし

(称名院集・七四三)

紅色

まがきこす日影も菊もくれなゐに匂ふが上の露のしら玉

(草根集・四七五六)

明治三一年の子規短歌の「菊」の表現には、次の作品のように、視覚表現が見られる「菊」が他の植物と共に詠む例が複数見られる。左に「菊」と他の植物が詠まれている明治三一年の作品を挙げる。他の植物を表す箇所には傍線を付す。

薄との組み合わせ

風わたる一むら薄芽はのびて《菊苗畑》に垂れんとすらん

(六四三・三一年)

葉鶏頭との組み合わせ

《夏菊》の枯るゝ側より葉鶏頭の紅深く伸び立ちにけり

(九三〇・三一年)

楓との組み合わせ

旅枕《菊》さき楓衰へてをちこち城に衣擣つ也

(九五一・三二年)

以降の期間の子規短歌では、このような「菊」と他の植物との組み合わせは少ない。また古歌でも「菊」が「葉鶏頭」や「楓」と共に詠まれている例は無い。「菊」と「薄」の組み合わせが見られる古歌の例は少ない。左に古歌の例

を一首挙げる。

花すすきまねくまがきの秋かぜにまたそでみせてさけるしら菊

(柳葉和歌集・七四四)

感覚表現ではないが、「菊」を祝い事に用いている表現が三首見られ、他の期間と比べ多く詠まれている。次にその三首を挙げる。これらの三首は「天長節」と題の付された作品群八首の中のものである。

《笹菊》の黄も緋も白も眞盛りに咲ける君か代まさきくありませ

(一〇一四・三一年)

御園生の《菊》折かさし百敷の大宮人はけふ遊ぶらん

(一〇一五・三一年)

草の戸に御姿掛けて《菊》いけてわが祝ふらくは千代いませとぞ

(一〇一七・三一年)

このような「菊」を祝い事に用いている例は古歌に多く見られる。子規短歌では皇室に対する天長節で「菊」を用いる作品が見られるが、古歌の殆どは次の作品のように、季節に関連し、長寿を願う重陽節を祝うものとして詠まれている。

君が代をなが月にしもしら菊のさくや千とせのしるしなるらん

(千載和歌集・六一九／六一八・法性寺入道前太政大臣)



明治三二年

## 視覚表現 四首

動きを表すもの

久堅の天とこしへにあらかねの土うるほひて《菊》開く國

(一二九七・三二年)

状態を表すもの

壇をなしてつくりし《菊》のかたはらにつくらぬ《菊》のこのもしきかな

(一二九三・三二年)

銀泥のさひてかゝやく三日月の古畫の下に《菊》只二輪

(一三〇五・三二年)

佛立つ道のべ柳落葉してそなへし《菊》にしぐれふるなり

(一三一五・三二年)

明治三二年の子規短歌の「菊」に対する視覚表現では、「菊」の色の表現が見られないが、明治三三年では再びその例が見られる。

「菊」が他の植物と詠まれる例は次の一首に見られる。「菊」と「柳」の組み合わせは古歌に例が見られない。

佛立つ道のべ柳落葉してそなへし《菊》にしぐれふるなり

(一三一五・三二年)

祝い事の短歌に「菊」を詠み込む例は、次の一首に見られる。この作品も「天長節」という題が付いている。

久堅の天とこしへにあらかねの土うるほひて《菊》開く國

(一二九七・三二年)

明治三一年の子規短歌で、祝い事に「菊」が詠まれる例が全て「天長節」の作品であることを踏まえると、子規は「菊」に対して、天長節を祝う花としての意識があったと言える。子規の「菊」を「天長節」を祝う作品に詠まれて

いることについて、当時の天皇（明治天皇）の天長節は九月二二日であるので、行事と秋の菊の時期が重なっている。

明治三三年

## 視覚表現 十二首

色を表すもの

我庭に咲くくれなゐの《菊の花》折りて來にけり繪に寫すべく

（一九〇九・三三年）

冬寒き風松か枝を吹くなへに木陰の《菊》は色あせにけり

（一九一五・三三年）

状態を表すもの

年々にながめことなる我庭の今年の秋は《菊》多かりき

（一九〇八・三三年）

《菊の花》咲けらく見れは草つゝみ病める心のさふしくもあらず

（一九一七・三三年）

視覚行為を表すもの

カラス戸の外に咲きたる《菊の花》雨に風にも我見つるかも

（一九一〇・三三年）

我うさをなこめてさける《菊の花》繪にし寫して壁にかけてん

（一九一四・三三年）

明治三三年の子規短歌の「菊」に対する視覚表現について、色を表すものについては明治三二年と同様に紅色が見られる。また「黄菊」「白菊」が詠まれている例も見られ、明治三三年の子規短歌でも「菊」の色（紅色・黄色・白色）

を明示する例が見られる。左に作品例を挙げる。

紅色

我庭に咲くくれなゐの《菊の花》折りて來にけり繪に寫すべく

(一九〇九・三三年)

黄色

我庭にさける《黄菊》の一枝を折らまくもへと足なへわれは

(一九一二・三三年)

黄色・白色

我心いふせき時はさ庭への《黄菊》《白菊》我をなくさむ

(一九一三・三三年)

「菊」を他の植物と詠む例は「菊」と「松」の組み合わせが二首見られるのみである。次に「菊」と「松」の組み合わせが見られる二首を挙げる。

我庭の松の木陰に《菊》さけば昔の人し思ほゆるかも

(一九一一・三三年)

冬寒き風松か枝を吹くなへに木陰の《菊》は色あせにけり

(一九一五・三三年)

明治三一年の場合より組み合わせが限られている。「菊」と「松」の組み合わせは古歌に多く見られ、次の作品のように賀のものとしての「松」と「菊」が詠まれている例は複数見られる。

みどりなるまつのよはひをあらそふはみぎはににほふしらぎくの花 (万寿元年高陽院行幸和歌・一・関白殿)

「菊」を賀のものとして詠む例は、子規短歌では明治三一年から詠まれるが、明治三三年では詠まれなくなる。

明治三三年の子規短歌では、次の二つの詠み方が殆どである。

1 「年々に」の短歌のように「菊」を実景そのままに表現しているもの

年々にながめことなる我庭の今年の秋は《菊》多かりき

(一九〇八・三三年)

2 「菊の花」の短歌のように「菊」を病に臥せる憂さを慰める植物としているもの

《菊の花》咲けらく見れば草つゝみ病める心のさふしくもあらず

(一九一七・三三年)

明治三四年以降の子規短歌には「菊」を詠んだ作品は無い。明治三四年の子規短歌は、身边の人々の言動などに契機にした生活に即した歌材の選択や、自己の境遇と重ね合わせさせる題材の選択が明確に見られる作品が多い。この晩年の短歌の特徴に基づき、明治三四年以降の短歌に「菊」が詠まれない理由として、次の二点を挙げる。

一 左の二首のような「贈り物である「葦」や、知人の言動による題材「土筆」と異なり、他の周囲の人や環境によつて、歌材として選択されることが「菊」に見られないため。

うち日さす都の君の送り來し《葦の花》はしをれてつきぬ

(拾遺四七三・三五年)

日のくれてつみ残したる《つく／＼し》再び往きてつみて來にけり

(拾遺四八四・三五年)

二 次の作品に見られるような「菊」の長寿のイメージが、自己の病状が反しているため。

草の戸に御姿掛けて《菊》いけてわが祝ふらくは千代いませとぞ

(一〇一七・三一年)

また「菊」は、他の花と異なり子規短歌では「散る」表現が見られないことも影響していると考えられる。子規短歌での盛りを過ぎた「菊」の表現は、次の二首のように「枯る」と「色褪す」である。

《夏菊》の枯るゝ側より葉雞頭の紅深く伸び立ちにけり

(九三〇・三一年)

冬寒き風松か枝を吹くなへに木陰の《菊》は色あせにけり

(一九一五・三三年)

「散る」の歌ことばとしての用法の一つに次のものがある<sup>注41</sup>。(引用の傍線と改行は私に行ったものである。)

…無常の表象として「散る」が機能する例も見られる。

「はかなさをほかにもいはじ桜花咲きては散りぬあはれ世の中」(新古今集・春下・一四一・実定)など。

「花と見し人はほどなく散りにけり我が身も風を待つと知らなむ」(千載集・哀傷・五七〇・匡房)のように、「散る」が亡くなる意として用いられることもある。…

死期の近づいている明治三四年以降に、次の古歌に表現されているように「散る」性質を持たず、且つ賀の役割を持つ「菊」は歌材から外れたのではないか。

咲くかぎりちらではてぬる菊の花むべしも千世の齡のぶらむ

(貫之集・四二)

「梅」「松」「櫻」「杉」「菊」について

子規短歌で多く詠まれている植物の種類である、「梅」「松」「桜」「杉」と、「梅」「松」「桜」と同様に賀のイメージを持つ「菊」の感覚表現より次のことが言える。

子規は植物を短歌に詠む際は、その植物に対して視覚表現を用いる傾向が非常に強い。嗅覚表現については、明治三十一年の「五たび歌よみに與ふる書」では、次のように「梅」や「桜」の匂いを歌材にすることについて批判してい

…「花の匂」などいふも大方は嘘なり、櫻などには格別の匂は無之、「梅の匂」でも古今以後の歌よみの詠むやうに匂ひ不申候。…

このように「花の匂」について、古歌や旧派歌人に対する批判の実践もあり、子規は短歌革新以降では殆ど「花」に対する嗅覚を詠んでいない。

「梅」「松」「桜」「杉」の視覚表現を見ると、次の特徴を指摘することが出来る。

「梅」「桜」といった花が鑑賞の対象となる植物と比べ、「松」「杉」は主の歌材とならず、他の題材の位置を明らかにする役割を持たされる傾向が見られる。花が主の鑑賞対象となることは、晩年により顕著に現れている。これは、子規短歌に詠まれる植物の部位の各期間での変化と対応している。明治三三年までは枝葉を表す植物語彙の詠まれる例も多く見られるが、明治三四年以降は花を詠むことにより大きく偏っている。

感覚表現から外れるが、「梅」「松」「桜」「菊」は明治三三年までは賀の象徴として詠まれているが、明治三四年以降はそのような表現が見られなくなる。これは子規の病状悪化と、「梅」などが持つ賀のイメージが一致しないためと言える。また「菊」は「散る」花として詠まれず、「散る」ことと命の儚さの対応を見ることのできない植物と言える。この花の性質からも「菊」は晩年の歌材から外れたと考えられる。

#### 第四節 与謝野鉄幹との比較

子規と同様に旧派に対する新派の歌人で短歌革新の立場である、落合直文、与謝野鉄幹、与謝野晶子の短歌について前項で論じたが、以降は子規と鉄幹との比較のみを論じる。先に見た短歌への外来語の使用状態では、直文短歌は古歌の影響が強く見られ、晶子短歌は鉄幹短歌と語彙の特徴が類似している為である。

鉄幹短歌の全一四六二首の中、五四六首に植物語彙が詠み込まれており、鉄幹短歌全体の中の約<sup>37.3</sup>%を占めている。子規短歌での植物語彙を詠んだ作品が一〇九六首であり、子規短歌全二四三二首に対して約<sup>45.1</sup>%であるので、子規は植物を歌材にする傾向が他の歌人と比べやや強いと言える。

鉄幹短歌に見られる植物の種類は八四種類見られ、子規短歌では一三五種類が詠まれている。短歌に詠む植物の種類の中でも、同時代の新派の歌人と比べて、子規が積極的に短歌の材料を様々な植物に求めていることが明らかである。

短歌に詠み込む植物の部位について、鉄幹は特に「葉」と「花」を詠むことが多い。明治三二年以降は「花」に偏っていく。「花」を詠むことに偏る点は子規短歌と共通している。

子規短歌では「枝」を詠むことが明治三三年まで多く見られるが、鉄幹短歌では「枝」を詠む例は多くない。鉄幹短歌では、植物を詠んだ作品数が多い場合に、多様な部位が詠まれている例が見られるが、作品数が百首未満の期間では詠まれる部位の種類は「枝」「葉」「花」など三、四種類に限られる。

植物の集まりを表す植物語彙と、植物による空間（陰）を表す植物語彙について、鉄幹短歌では使用されることが少ない。特に植物によって生じた陰を表す植物語彙を詠んだ作品は殆ど見られない。

以降、鉄幹短歌に見られる植物の種類、植物の部位を表す植物語彙、植物による空間（陰）を表す植物語彙を具体的に見てゆく。

植物の部位について、子規短歌での部位の分類では植物に対する視点の上下に注目した分類を行っているが、鉄幹短歌では「枝」「茎」「蕾」「蔓」「根」「葉」「花」「穂」「実」「芽」に分類する。例えば子規短歌では「葉」を草の葉と木の葉と落ち葉の三種類に分けているが、鉄幹短歌での分類では「葉」として一つの部位としている。

## 第一項 植物語彙の内容

鉄幹短歌を初出年に基づき、子規短歌での期間（明治三十年以前、明治三十一年、明治三二年、明治三三年、明治三四年、明治三五年）に合わせて分類する。各期間の鉄幹短歌に見られる、植物の種類、部位、集まり、植物による陰を表すものを挙げる。（ ）内は作品数である。作品数が一首の場合は数値を省略する。

明治三十年以前 植物が詠まれた作品数：一六七首

**種類** 四一種類の植物が詠まれている。

左に種類名を挙げる。太字の種類名は古来頻繁に使用されていると判断する種類名である。以降の期間も同様である。



杏・稻(2)・梅(15)・梅もどき・萩・柿・榎(3)・菊(5)・桐(3)・葛(2)・橡・河骨(2)・苔・こなき・  
桜(28)・椎(3)・柴・芝・杉(2)・薄(5)・萱・竹(2)・蓼・蔦・椿・菜・棗・菜の花・萩(2)・蓮・  
柞(2)・薔薇・牡丹・松(24)・耳(みみ)無草・紫・桃(2)・椰子・柳(8)・山吹(3)・夕顔  
梅を意味する「花」(一例)は梅の作品数へ、桜を意味する「花」(九例)は桜の作品数へ分類する。

明治三十年以前の子規短歌での植物を詠んだ作品数は二〇四首であり、植物の種類数は三九種類である。この子規短歌の結果と比べると、鉄幹短歌では明治三十年以前で既に多様な植物を詠んでいると言える。

古来頻繁に詠まれている植物の種類は二六種類見られ、半数以上を占めており、古典的な題材とそこから外れる題材の両方が見られる。

明治三十年以前の鉄幹短歌に詠まれている植物の種類を見ると、杏・稻・桐・橡・椎・蔦・椿・棗・薔薇・牡丹は子規短歌では明治三一年で初めて詠まれる種類である。鉄幹短歌での杏・稻・桐・橡・椎・蔦・椿・棗・薔薇・牡丹を詠んだ作品の例を挙げる。

《梧の葉》を、けさ吹く風も、君がます、西としきけば、嬉しかりけり。

(東西南北・四〇)

霜ばしら、朝日にをれて、《稻ぐき》の、立てるもさむし。岡崎の里

(東西南北・七四)

《ばら》ひとえ一枝、あかきは君が、なみだにて、しろきは君が、まことなるらむ。

(東西南北・一四五)

後庭の、《牡丹》の葉のみに、なりはてて、けさはきこえぬ、玉沓たまぐさの音。

(東西南北・一七九)

風きよき、小松まじりの、《くぬぎ原》、月さへ涼む、ところなりけり。

(天地玄黄・六三)

夏くれば、そともの岡の、《椎がもと》、妹の家より、したしまれけり。

(天地玄黄・八六)

《蔦の葉》の、しづくはらひて、飯<sup>いひ</sup>もらむ。夕立はるる、宇津の山ごえ。

(天地玄黄・一〇六)

梅さくら、さきちる花の、あらそひに、ひとりもたれる、《玉つばき》哉

(天地玄黄・一〇七)

《から桃》の花はさかりのおぼろ夜をあるじ物申す笛はあらずや

(鉄幹子・四)

月ごろを上人<sup>ちやう</sup>ながく定を出でず山の《なつめ》はうみはてにけり

(鉄幹子・七)

### 部位

八種類の植物の部位が詠まれている。左に部位名を挙げる。以降の期間も同様である。

枝(5)・茎・葉(24)・花(45)・穂(3)・根(3)・実(2)・芽

明治三十年以前の鉄幹短歌で詠まれている植物の部位の種類は、同期間の子規短歌よりもやや豊富である。芽を詠む例は子規短歌では明治三一年からであり、茎を詠む例は全期間通して子規短歌には見られないものである。芽と茎の例を挙げる。

霜ばしら、朝日にをれて、《稲ぐき》の、立てるもさむし。岡崎の里

(東西南北・七四)

《木の芽》さく、うしろの畑に、霜見えて、けさは身にしむ、山鳩のこゑ。

(東西南北・八五)

集まり

左に挙げた語彙は鉄幹短歌に見られる、植物の集まりを表すものである。以降の期間も同様である。

門田・橡原・杉の群立・松原（3）・小松原・柴垣・芝生・那須の篠原・山田

植物の集まりを表す植物語彙の使用は、子規短歌と比べ少ない。明治三十年以前の子規短歌では五七首（二〇四首中）見られるが、鉄幹短歌では十一首である。内容は、次の例のような「門田」や「松原」など規模の大きい植物の集まりを詠む方が、「柴垣」などよりも多く見られる点は、子規短歌と共通している。

夕立の、雲は沖より、めぐりきて、汐の雨ふる、磯の《松原》。

（東西南北・二四年）

守りすてて、朽ちし《門田》の、鳴子縄、春ひく糸は、柳なりけり。

（天地玄黄・七四）

植物による空間（陰）

植物によって生じた陰を詠む例は、鉄幹短歌に見られない。

明治三二年 植物が詠まれた作品数：六三首

種類

二八種類の種類の植物が詠まれている。

青桐・蘆（2）・杏・稻・梅（5）・柿・菊（7）・桐・鶏頭・苔（2）・桜（4）・笹・山茶花（2）・芍薬・水仙・杉（2）・堇・竹・萩（2）・榛・藤袴・牡丹（3）・松（4）・藻・木犀・柳（2）・山吹・蘭

右の分類について、「桜」を表す「花」（一例）は「桜」の作品数に分類している。

明治三十一年の鉄幹短歌に詠まれている植物の大半（十八種類）が、古来頻繁に使用されている植物である。

鉄幹短歌の中の明治三十一年が初出年の作品で、初めて使用されている植物の種類は次の十二種類であり、大半の植物が、前期間の種類と重複している。

青桐・蘆・鶏頭・笹・山茶花・芍薬・水仙・榛・藤袴・藻・木犀・蘭

右の十二種類を詠んだ作品を一首ずつ挙げる。

夕月に船つなぎをれば雁なきてたけ一丈の《葦の花》ちる

（鉄幹子・三〇）

《山茶花》も妹が垣根にさきてより身にしむ花の忘れぬ花

（鉄幹子・三五）

《水仙》は石の上にも咲きにけり心の花はいつひらくらん

（鉄幹子・三七）

《笹の葉》の霜うちらはらひ紀の山にわびねする身となりにける哉

（鉄幹子・五六）

ほのぼのと山の《榛原》はりはらかすむ日を鶯なきて小雨そぼふる

（紫・一九五）

《藻の花》をわけてむすべ巖間より昼の月しろく浮きて流るる

（紫・二二三）

すみわたる秋のころにあくがれて木犀もくせいの香はにほひ出づらむ

（新派和歌大要・一二四）

君まちて立ちつる驢馬やいさみけむ庭にちりしく《芍薬の花》

（新派和歌大要・一四九）

右の手をとどめて見れば《青桐》にあま蛙なきて雨横に降る

（新派和歌大要・一七八）

風ふけば秋さく《蘭》のぬけ出でて高きにほひをいかがつつまむ

（新派和歌大要・一八九）

みまくらに菊のきせわた打かさぬ《藤袴》してまもる夜半哉

（新派和歌大要・二二八）

湊川ちりしさくらもしのばれておなじ恨みの《から藍あゐの花》

（新派和歌大要・二六四）

**部位**

枝（2）・葉（15）・花（23）・実

右の分類について、「桜」を表す「花」（二例）は「桜」の作品数に分類し、部位の「花」には分類していない。

明治三一年では、「葉」を詠む例が以降の期間と比べ多く見られる。「葉」に分類されるものの中の九首が、次の例のように紅葉を表すものである。

《もみぢ葉》のこきひとえだを折りかざしてらしてぞ見る山の井の水

（紫・二六二）

**集まり**

青田・竹藪・花束・榛原・松原

明治三一年が初出の鉄幹短歌に見られる、植物の集まりを表す植物語彙は少ない。以降の期間も例が少ない。

「青田」など広い範囲の植物の集まりの中に、次の一例では「花束」が詠まれている。

《花束》の白きをとりて紅きをばなどかすてたる君は受けながら

（新派和歌大要・一三〇）

植物による空間（陰）

植物によって生じた陰を表す植物語彙は見られない。

明治三二年 植物が詠まれた作品数…七〇首

種類 三二種類の植物が詠まれている

朝顔（２）・銀杏・稲（３）・梅（７）・梅もどき・茅・菊・桐（３）・苔（３）・桜（２）・石楠花（２）・杉・堇（２）・  
李・竹（７）・蔦・露草・菜の花・萩・蓮（５）・薔薇・藤（２）・葡萄・芙蓉（２）・木瓜・牡丹（５）・松（８）・  
桃（２）・柳・山吹（２）・蘭

鉄幹短歌の中の明治三二年が初出年の作品で、初めて使用されている植物の種類は次の十種類である。

朝顔（２）・銀杏・茅・石楠花（２）・李・露草・藤（２）・葡萄・芙蓉（２）・木瓜

この十種類の植物の例を一首ずつ挙げる。

玉櫛にねくたれ髪ぞときて見ん羞しかるべき《朝顔の花》  
（鉄幹子・一三）

牛ひきて見かへる翁かみさびぬ星かげあわき《月草》の中  
（鉄幹子・四五）

林檎きッて《葡萄》つんで妹かへりきぬ月さす脊戸に竹をなでてをれば  
（鉄幹子・四九）

たかのやま《石楠》かをる有明にしだり尾しろき鳥のひと声  
（鉄幹子・六七）

部位

根・葉（6）・花（28）

右の分類について、「花影」（二例）は「花」に分類する。なお作品では「はなかげ」と平仮名表記であるが、内容（左二首）より「花影」と判断した。

更けし夜の火かげ《花かげ》霧に似て四条河原に犬のこゑする

（鉄幹子・七九）

しら蓮の《花かげ》昼の月みえて清しや妹が解き洗ひ髪

（鉄幹子・一二三）

明治三二年が初出の作品から、「花」を詠む作品により偏ってゆく。

馬の脊に春日うらうらねむけさす峠の道は《ぼけ》の花ざかり

（鉄幹子・八九）

菜の花のほへる里にひともの紅き《すもも》や妹が家のかど

（鉄幹子・九〇）

白き《芙蓉》あかき《芙蓉》とかさなりて児のゆく空に秋の雨ふる

（鉄幹子・一〇六）

をとめごのいかにしてまし賜りて立てば地にひく《しら藤の花》

（紫・二二五）

原町の《鴨脚いであの老木おいき》さむき夜に成りけむ君が明星あかほしの歌

（新派和歌大要・一七二）

田一枚すみれ《つばな》にうちまかせ蝶のうたよむ春雨のそら

（新派和歌大要・二一一）

集まり

大竹藪・田（3）・花束

明治三二年が初出の鉄幹短歌でも、「大竹藪」「田」といった広い範囲の植物の集まりを表す植物語彙の方が、左の例のような「花束」といった小さい大きさの集まりをあらわすものよりも多く使用されている。

永き目をつみてすてたる《花束》に二つ舞ひよる蝶うるはしき

（紫・一九六）

植物による空間（陰）

松陰・松の陰（2）

鉄幹短歌では明治三二年が初出の短歌より、次の例のような植物によつて生起した陰を表す植物語彙の使用例が見られる。

《松かげ》にみやこの人の名をかけばさざ波よせてやがて消えにけり

（紫・二八二）

あすよりは昔の友になりぬべし立たまく惜しき《松の蔭》かな

（新派和歌大要・一六四）

明治三三年 植物が詠まれた作品数…五一首

種類

二四種類の植物が詠まれている。

薊・蘆・あやめ・稲・梅（6）・葦（3）・竹（2）・蓼・蔦・南天・蓮（2）・薔薇・藟・藤・葡萄・芙蓉（5）・



牡丹・松（2）・豆・桃・柳・夕顔・百合（3）・蘭

鉄幹短歌の中の明治三三年が初出年の作品で、初めて使用されている植物の種類は次の六種類である。

薊・あやめ・南天・落・豆・百合

次に右の植物の種類を詠んだ鉄幹短歌の例を一首ずつ挙げる。

《山百合》の花をしとねに蛇一つ白きをだきて巖に眠る神

（鉄幹子・二〇四）

小屋ごとに《豆の花》這はせ牛飼ひてひろき牧野に聖書よまん願ひ

（鉄幹子・二二六）

おそろしき夜叉のすがたになるものか《あざみ》くはへてふりかへる時

（鉄幹子・二三八）

をとうとの雪のうさぎにまなこつくと《南天》とりし岡崎の庭

（紫・一三〇）

花売の小車涼しあさ靄に《菖蒲》ひと車載せて門行く

（紫・二二八）

事たがひ人おとろへぬ蚊遣火にほつれ毛うたて《落の葉》の雨

（紫・二三〇）

部位

蕾・葉（3）・花（18）

明治三年の鉄幹短歌では、植物の部位を表す植物語彙は、「花」に大きく偏っている。次の「御手洗の」の短歌のように写実的な例も見られるが、「かならずと」の短歌のように抒情的な感情表現をしている例が多く見られる。

御手洗のさぐれに下りし一むらの鳩の白羽に《花》ちりかゝる

（鉄幹子・一〇〇）

かならずと恋をちぎるは興あさし《花》の紅きに蝶はよりきぬ

(紫・七七)

集まり

田・柳原・百合の園生

明治三年の植物の集まりを表す植物語彙は、全て広い場所に植物が存在していることを表すものである。

植物による空間(陰)

花陰

この年が初出の鉄幹短歌での、植物によって生まれた陰を表す植物語彙は、次の一首に見られる。

《花かげ》に炭の火吹きて茶碗やきて詩をかき画をかく山田寒山

(鉄幹子・七七)

明治三四年 植物が詠まれた作品数…一四八首

種類

三七種類の植物が詠まれている。

朝顔・蘆(2)・卵の花・梅(15)・槐(えんじゅ)(3)・柿・桔梗(8)・菊(7)・桐(3)・芥子・苔・沈香(2)・薄・

菫(5)・竹(11)・蓼(4)・蔦・躑躅・梨・蓴(めなは)(2)・合歓(2)・萩(2)・蓮(3)・向日葵・覆盆子・

芙蓉(4)・牡丹(7)・松(3)・豆(2)・麦・紫(3)・藻・木犀(2)・柳(3)・百合(14)・蘭・連翹

鉄幹短歌の中の明治三四年が初出年の作品で、初めて使用されている植物の種類は次の十三種類である。

卯の花・槐<sup>(えんじゅ)</sup> (3)・桔梗 (8)・芥子・沈香 (2)・躑躅・梨・蓴<sup>(ぬなは)</sup> (2)・合歓 (2)・向日葵・覆盆子・麦・連翹

右の十三種類の植物を詠んだ鉄幹短歌の例を一首ずつ挙げる。

妹が手の京の扇にこぼれけり見あぐる崖<sup>きし</sup>の《岩つつじの花》  
手をたまへ《梨の花》ちる川づたひ夕の虹にまぎれていなむ

(鉄幹子・一一六)

(紫・十七)

わがおもひ鸚鵡に秘めてうぐひすにそぞろささやく《連翹<sup>れんげう</sup>》の雨

(紫・五〇)

河ぞひの《合歓<sup>ねむ</sup>花》の薄月わすれますな里のふた夜を御手に倚りし子  
森の秋に《沈の木》くちて香を見たりあゝただ人は闇に倒るゝ

(新派和歌大要・七)  
(新派和歌大要・十五)

火影わかう人《うの花》の挿頭<sup>かざし</sup>なり揉むや歌反古韓の紙あをき

(新派和歌大要・三一)

これ小さこれおぼつかなこれはかな《覆盆子<sup>ふすこ</sup>》のほこり梅の実の知恵

(新派和歌大要・三三)

武さし野に竹椽つけし片びさし《槐樹<sup>えんじゅ</sup>》ふたもと秋の富士濃き

(新派和歌大要・四九)

萩の神の桔梗に嫁ぐ夏の野を載せて送るか《黄金日車<sup>きんぎょ</sup>》

(新派和歌大要・七三)

われとこそ歌の硯に下り立ちし《蓴菜<sup>ぬなは</sup>》の水の手に寒き朝

(新派和歌大要・七八)

さびしみのあわたゞしさにこもらずや《芥子<sup>けし</sup>》紅うして散るを咎むな

(うもれ木・二五)

草の筆の優<sup>ゆう</sup>なるみだれわかき人や朝目<sup>あさひ</sup>すゞしき《桔梗<sup>ききやう</sup>》の小椽<sup>こゑん</sup>

(うもれ木・四五)

犬つれてみづいろのきぬ人うつくし 《麦の穂末》に遠き富士みる

(うもれ木・五二)

**部位**

枝・蔓(2)・葉(7)・花(32)・穂・実(2)

明治三四年の鉄幹短歌に詠まれている植物の部位を表す植物語彙は、作品数が多いことから、次の例のように「枝」や「蔓」など「花」や「葉」以外の部位の例が見られる。

《ひと枝》は伊賀山こえし秋の興と会釈にわかき夕船の僧

(新派和歌大要・一〇三)

わりなしや引くは紅<sup>あけ</sup>なる《蔓》とのみ果実<sup>このみ</sup>こぼれて染まりにし綾

(新派和歌大要・一〇六)

「蔓」は子規短歌には見られないものである。

**集まり**

森(4)・藪越し・百合の園生

明治三四年の鉄幹短歌は、他の期間と比べて植物を詠んだ作品が多いが、植物の集まりを表す植物語彙の例は少ない例数である。鉄幹短歌では「百合」が複数詠まれているが、「百合」が集まっている場所を示す植物語彙は、次の「百合の園生」の一例と明治三三年の一例を合わせ二例のみである。

親はありきむかし一人の親はありき<sup>ひとり</sup> 《百合の園生<sup>そのふ</sup>》にふとはぐれたり

(紫・五)

植物による空間（陰）

葉陰

植物によって生じた陰を表す植物語彙の使用は次の一例のみであり、子規短歌と比べ少ない例数である。

似のちずやこれ人にわかれし後のおもひ《葉かげ》の花の一つさびしき

（紫・二四二）

明治三五年 植物が詠まれた作品数…四七首

種類

十九種類の植物が詠まれている。

薊・蘆・梅（14）・苔・杉・薄・堇・竹・椿・菜種・撫子・（ぬなほ）蓴・向日葵・藤（5）・牡丹（2）・松・柳（4）・  
山吹（2）・百合（3）

右の分類について、左の作品の「菜種」は植物の種類名と判断し、植物の部位を表すものとしなない。

塔見ゆる《菜たね》の末は藤井寺と母がをしへし河内にや有らぬ

（うもれ木・七六）

鉄幹短歌の中の明治三五年が初出年の作品で、初めて使用されている植物の種類は次の二種類である。

菜種・撫子

塔見ゆる《菜たね》の末は藤井寺と母がをしへし河内にや有らぬ

（うもれ木・七六）

《なでしこ》のをがめ小瓶そへたるかけ鏡まへに瘦せては細き筆とる

（うもれ木・一二一）

部位

枝・葉・花（10）・芽

明治三五年の鉄幹短歌に詠まれる植物の部位を表す植物語彙は、「花」に大きく偏っている。殆どの「花」は次の短歌のように作品の雰囲気により抒情的にするものである。この作品では「美しい（美しい）」と直接的な表現と共に、「花」「虹」といった美しさを想像させる題材が詠まれている。

野には《花》そらにみちては虹と知る美しいし君か恋のためいき

（うもれ木・九）

集まり

草野・木立

明治三五年の鉄幹短歌で、植物の集まりを表す植物語彙を詠んだ作品は次の二首である。

今日見つれ《草野》を西へむつまじき二つの傘に母を泣く人

（新派和歌大要・二七七）

里古りて《木立》趣ある藤井村碁の書、琴の譜、牛の背の歌

（うもれ木・一五〇）

植物による空間（陰）

植物によって生じた陰を表す植物語彙の例は見られない。

六期間通して、植物語彙を詠んだ鉄幹短歌、五四七首に詠まれている**植物の種類**は八四種類である。植物語彙を詠んだ子規短歌、一〇九六首に見られる**植物の種類**数は一三五種類である。よって子規短歌で用いられる植物の種類は、子規と鉄幹二人の同期間の短歌の中でも豊富な種類数と言える。子規短歌と鉄幹短歌で詠まれた植物の種類で重複しているものは六六種類であり、子規の短歌革新の際に拡大した歌材としての植物の内容は、古歌や同時代の他の歌人の影響は強くないと言える。

古来頻繁に使用されている植物の影響について、子規短歌で見られる植物一三五種類の中の五四種類が古来頻繁に使用されているものであり、鉄幹短歌では八四種類中の四三種類とやや強く影響を受けていると言える。

短歌に詠み込む**植物の部位**について、鉄幹短歌では「枝」「茎」「蕾」など十種類の部位が見られる。この中で子規短歌に見られない部位は「茎」「蔓」のみである。子規短歌では、鉄幹短歌に見られない部位「萼」「種」「棘」「花卉」「節」「萼」があり、全部で十三種類の部位が見られる。子規短歌の方が短歌に詠む植物の部位が多い。子規短歌と鉄幹短歌で共通していることは、短歌に詠み込む植物の部位では「花」に偏る点である。但し「花」の表現の方法は、子規と鉄幹で異なる。子規短歌の「花」が写実的な描写をされることが多いのに対し、鉄幹短歌での「花」は抒情的な描写をされることが多い。次に鉄幹短歌と子規短歌の例を一首ずつ挙げる。

髪一つみださぬ君にわが手もてかざさむ花もあらぬ別れよ

(紫・一八五)

五月雨の川流れこす燕子花水隠れて咲く《花》もあるらん

(六九四・三一年)

また短歌に詠み込む**植物の部位**の種類が、特に明治三四年時点で子規短歌の方がやや多いことについて、子規の植

物に対する絵画での写生の方法が影響していると考えられる。植物を絵画で写生することについて、子規は次のことを述べている<sup>注43</sup>。

草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に寫生して居ると、造花の秘密が段々と分つて来るやうな氣がする。

このように晩年の子規は、絵画の際は植物の細部を観察する視線を持っている。子規は晩年の短歌では「花」を詠むことに偏っているが、絵画での観察方法が短歌にも関係していると考えられる。

植物の集まりを表す植物語彙と、植物による空間（陰）を表す植物語彙について、鉄幹短歌では使用されることが少ない。特に植物によって生じた陰を表す植物語彙を詠んだ作品は殆ど見られない。子規短歌に、植物の集まりや、植物による空間（陰）を表す語が多く見られることは、一つの特徴と言える。

## 第二項 植物語彙の表現方法

鉄幹短歌の植物語彙の表現方法について、子規短歌で多くの使用例が見られる「梅」「松」「桜」「杉」「菊」を中心に見てゆく。

子規短歌と大きく異なる点は、鉄幹短歌は花の香りを複数詠んでいることである。

子規が短歌に花の香りを詠むのは、明治三十一年の短歌革新発表前、特に古典和歌を習っていた時期と、ニオイスマリが贈られたことに契機を得た時が殆どである。

鉄幹短歌では、植物語彙に対する嗅覚表現が子規短歌と比べ多く見られる。例えば「梅」の香りが歌材になってい



る作品は、次の期間に見られる。

初出が明治三十年以前

そことなく、《梅が香》ぞする。亡き魂の、行方は春の、風や知るらむ。

(東西南北・二〇一)

初出が明治三二年

いつしかも鶴にまじりてくだりけり《梅が香》さむき月が瀬の山

(鉄幹子・八九)

初出が明治三三年

わすれても《梅が香》さむき夕月にあくれがれ出づな世はねたみあり

(紫・一八二)

初出が明治三四年

今すぎし小靴のおとも何となく身にしむ夜なり《梅が香》ぞする

(紫・三〇七)

初出が明治三五年

《梅が香》や名に慕ひよる蜷川劇詩のなかの小春に逢はぬ

(うもれ木・七二)

新派の歌人である鉄幹は、右の「梅が香や」の短歌で「劇詩」といった漢語と共に詠むといった、古歌の表現から脱した表現をとりつつも、「梅が香」を詠み続けている。一方子規は「梅」の香りをはじめとした「花」の香りを、「五たび歌よみに與ふる書」で次のように「大方は嘘なり」「格別の匂は之無」「古今以後の歌よみの詠むやうに匂ひ不申候」と批判している。

鉄幹短歌では、植物を詠んだ短歌に見られる色の組み合わせに、次の子規短歌に見られるような「藪陰」「松の木陰」

と「梅」「菜の花」といった暗色と明色（花の色）の組み合わせは少ない。

北うけて雪また残る竹藪の藪陰寒し梅五六本

（五九六・三二年）

百草の萌えいづる庭のかたはらの松の木陰に菜の花咲きぬ

（一七〇三・三三年）

右の二首のような「陰」という暗色と植物の明色の対比は、子規短歌の表現の特徴の一つと言える。

次の「草餅」と「柳」と「彼岸ざくら」のように明色同士の組み合わせが多く見られる。

草餅に柳をそへて文にいふ都は彼岸ざくらなるべし

（新派和歌大要・一四一）

鉄幹短歌では、植物によって生じた陰とその中の明色の植物との組み合わせは殆ど見られない。

鉄幹短歌と子規短歌の表現の違いについて、子規短歌では「松」を「待つ」とするなどの掛詞といった、植物名を利用した表現の例は、明治三一年以降の作品に見られないが、鉄幹短歌では数例見られる。次の例のように「しら梅」「しら（白）」と動詞の「知る」の未然形「知ら」が掛けられている例がある。左の例は明治三四年が初出の作品である。

春をわれ《しら梅》の花に恨ありなどか風情の君に及ばぬ

（紫・四三）

このように、植物名を利用した表現を明治三一年以降に使用しない、子規の自身の短歌革新の実践は、当時の中で特徴的であったと考えられる。

## 第五節 まとめ

子規短歌の植物語彙について、次のことが明らかになった。

植物の種類について、子規が短歌革新の実践として短歌に使用する植物の種類を積極的に増やした様子が、明治三十年以前の作品における植物の種類数と三十一年の作品における植物の種類数の差に現れていた。

さらに、明治三十一年では、古来のものに囚われない新しい題材の拡大を積極的に行ったこと、古来頻繁に使用された題材を使用する際は、その題材を表現する方法を変化させて陳腐な趣向にならないようにした可能性があることも分かった。

明治三二年と三三年では、三十一年の急進的な題材の拡大の影響もあつてか、新しい題材を広げつつ前期間までに使用された題材を引き継ぐ傾向が強いという点で共通していた。しかし、明治三二年と三三年には、三三年の作品では、題材の用法が多角的になったと考えられるといった違いもみられた。

このように、明治三十一年から三三年の三つの期間の作品における植物語彙の変化に、子規の短歌に対する試行錯誤が窺えるものもみられたが、同時にそれぞれの期間の違いもみられた。

明治三十一年から三三年の間に新しく詠み込んだ植物のうち、庭にないものなどが晩年にはほとんど使用されなくなったということも明らかになった。これは、子規の歌風が「自己の深处の生命と触れ合った景情」を表すように変化したことによって、「自己の深处の生命」と重なる対象としては、身近な植物の方が適していたのではないかと考えられる。

また、明治三五年における三四年との違いもみられた。明治三五年では、子規の視界が遠景よりも近景を観察する方に適するようになった為か、庭の植物よりも枕元の植物を多く詠む傾向がみられた。さらに、三五年の歌風が「田園回帰」へ変化したことによって、想像上で植物を詠む傾向もみられた。

植物の部位、植物の集まり、植物によって作られた空間について、次の内容が明らかになった。

一つに、明治三十年以前の作品は植物の部位を詠み込む傾向が大きく、明治三十一年の革新直後の作品では植物の部位を詠み込むことが少なくなり、晩年の作品で再度植物の部位を多く詠み込むようになってきていること。

二つに、明治三十年以前から三三年までの期間において植物の集まりを表す植物語彙を使用する傾向が強く、晩年（明治三四、三五年）では植物の集まりを表す植物語彙を使用する傾向が弱いこと。

三つに、革新前（明治三十年以前）から晩年へと年が下って行くに従って、植物によって生起した自然現象が起きた空間（陰）を詠むことが少なくなり、最晩年（明治三五年）では全く詠まれなくなっていること。

明治三十年以前の作品は植物の部位を詠み込む傾向が大きく、革新直後の作品では部位の種類は増えるが作品数が少なくなり、晩年の作品で再度植物の部位を多く詠み込むようになった理由に、次の四つが考えられる。

- ① 写生の対象を印象明瞭にする方法として歌材の配合によっていたこと
- ② 植物を観察する際の視線が上下していること
- ③ 晩年では作品に自己の死が意識されていること
- ④ 晩年の子規の視覚能力の限界があったと考えられること

明治三十年以前から三三年までの期間において植物の集まりを表す植物語彙を使用する傾向が強く、大規模な植物の集まりが詠まれなくなった晩年（明治三四、三五年）では、植物の集まりを表す植物語彙を使用する傾向が弱くなった理由に、庭の景色をそのままに詠む「庭前即景」の歌風が確立したこと、子規が病気で寝たきりになったことで子規の世界の範囲が「病牀六尺」へと限られたことが考えられる。

革新前（明治三十年以前）から晩年へと年が下って行くに従って、植物によって生起した自然現象が起きた空間を詠むことが少なくなり、最晩年では全く詠まれなくなった理由について、次の三つが考えられる。

一つは、趣味ある配合になるよう歌材の取捨選択を行ったことである。

二つは、「庭前即景」の歌風と「病牀六尺」の世界になったことで配合を作ることが難しくなったことである。

三つは、病気のため明治三三年までに詠まれていた「涼しさ」に対する「美」が詠まれなくなったことである。

最後に本章での調査結果に基づき、植物語彙に対する短歌への写生について次にまとめる。

革新前（明治三十年以前）から革新後（明治三一〜三三年）の二つの期間での変化には、子規の短歌革新の実践によるものが大きかった。

まず、明治三十一年以降に、写生（俳句革新で既に俳句に取り入れられたもの）を短歌に取り入れたことで、歌材を印象明瞭にするために、「配合」という方法を用いていたということである。それは植物の部位を詳細に描く方法ではなかったということから、植物の部位を歌に詠むことが減ったことに現れたと考えた。

また子規が短歌革新で主張したことの一つに「歌材の拡大」があるが、その影響から歌に詠まれる植物の部位の種

類は増加した。また「植物による陰―陰の中にあるもの」の配合の内、「陰の中にあるもの」として人間や人工物について積極的に用いる姿勢が三三年までみられるようになったことも、「歌材の拡大」の影響と言える。

革新後から晩年への変化には、子規の病状悪化によるところが大きい。

まず歌に詠む植物の部位が「花」に偏ったことについて、晩年の作品の多くが自己の死が意識されていることと、晩年の子規の視覚能力の限界があったと考えられる。

また、「庭前即景」の歌風が確立した後に、子規の世界が「病牀六尺」へと限られたことで、大規模な植物の集まりを歌に詠まなくなったり、「植物による陰―陰の中にあるもの」の配合を作ることが難しくなり、明治三三年までに詠まっていた「涼しさ」に対する「美」が詠まれなくなったのも、病気によるものではないかと考える。

植物に対する感覚表現の期間ごとの変化によって、子規の短歌に詠む植物の取捨選択の傾向として、次の内容が挙げられる。

植物語彙に対する感覚表現について、短歌革新後の作品にも古歌の影響が見られるものもあるが、総じて古歌の表現の踏襲を行っていない作品が多くなる。古歌の表現から脱却することが出来る植物は、短歌革新以降にも詠まれ、自己の境遇と重ねることが出来る身近な植物が晩年まで詠まれる傾向が見られる。

例えば「卯の花」は古歌の表現の影響が強く見られ、且つ子規自身の「卯の花」に対する表現は白さの強調のみと限られたものである。それに対して「山吹」や「梅」など、短歌革新前で古歌の影響を強く受けていても様々な表現をとることができる植物は、明治三十一年以降も詠まれていく。

また、短歌革新前は歌ことばとして植物に付けられた意味の利用が見られる傾向が強く、革新後は期間を下るに従いその傾向が弱まってゆく。

「梅」や「菊」は子規の庭にあり、咲く・散る（枯れる）といった変化が見られるものであり、「松」「杉」と異なり花が鑑賞の対象となり、自己の境遇に重ねやすい植物といえるが、晩年に使用例が殆ど見られない。これは「梅」「菊」に対する賀の植物としての意識が強いためと考えられる。これと同様であるのが「桜」である。

「松」と「杉」は子規にとって他の花が鑑賞対象となる植物と比べ、作品の主とならず他のものの場所や位置を示す役割を担う傾向が見られる。そのため明治三三年までは詠まれる作品数は多いが、晩年の作品で自己に投影しやすい植物ではなく、また鑑賞の対象として詠まれることが無くなったのではないか。

また明治三四年以降の子規は、歌材を実生活のものに求める傾向が強く、それが「牡丹」や「堇」など庭に有る植物や枕元の植物が、晩年多く使用されていることに繋がっている結果である。

最後に本稿では扱わないが、子規短歌では、「松」「杉」の例のように、短歌革新前も後も見立てや掛詞が少ないことが指摘できる。例えば散っている「梅」を「雪」に見立てたり、「松」と「待つ」、「杉」と「過ぐ」を掛ける例は子規短歌に見られない。

## 注

注1 植物の種類の分類には、次の資料を参考にした。

『新装改訂 マイペディア』 (平凡社 一九九五年八月)

『短歌俳句植物表現辞典』 (大岡信監修 遊子館 二〇〇二年四月)

『古典植物辞典』 (松田修 講談社 二〇〇九年八月)

注2 『短歌俳句植物表現辞典』一六四頁より抜粋した。

注3 『短歌俳句植物表現辞典』三六四頁より抜粋した。

注4 『明治文学研究2 正岡子規』(藤川忠治 山海堂出版 一九三三年九月) 五二二頁より抜粋した。

注5 根岸の子規庵の庭に植えられていた植物について、次の資料を参考にする。

### 「子規庵配置図」

右の資料は、子規庵で配布されているものである。配置図は松山市立子規記念館発行の冊子より転載されたものである。

### 「子規庵小園の変遷」(服部勉、古山道太監修 東京農業大学)

右の資料は子規遺品展(二〇〇九年九月一日から九月三十日 於子規庵)での協賛展示である。

注6 『子規全集』第七卷(正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年七月) 二三〜二五頁収録「再び歌よみに與ふる書」より抜

粋した。「再び歌よみに與ふる書」に次の内容が見られる。( ) は私に補ったものである。

…只之(古今集)を眞似るをのみ藝とする後世の奴こそ氣の知れぬ奴には候なれ。それも十年か二十年の事なら兎も



角も二百年たつても三百年たつても其糟粕を嘗めて居る不見識に驚き入候。…

注7 『正岡子規の短歌の世界―『竹乃里歌』の成立と本質―』（今西幹一 有精堂出版 一九九〇年一月）五八頁より抜粋した。

注8 今西幹一『正岡子規の短歌の世界―『竹乃里歌』の成立と本質―』（二二八頁より抜粋した）。

注9 『表現に生きる 正岡子規』（長谷川孝士 新樹社 二〇〇七年九月）一五六―一五七頁より抜粋した。なお、引用箇所の内容は、私が補ったものである。

注10 明治三一年五月三日に新聞「日本」に発表された「人々に答ふ（十二）」（講談社版『子規全集』第七卷八〇―八二頁収録）に次の内容が見られる。

…されば歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりと謂ふて何の故障も見ず歌と俳句とは只詩形を異にするのみ。…

注11 今西幹一『正岡子規の短歌の世界―『竹乃里歌』の成立と本質―』（一二〇―一二四頁より抜粋した）。

注12 今西氏が引用した歌と同一の物であるが、今西氏は「人住まぬいくさのあとの崩れ家杏の花の咲きて散りけり」という形で引用している。これは、自筆稿本に「けるかな」の所に「散りけり」が併記されているためである。

注13 『子規と周辺の人々』（和田茂樹編 愛媛文化双書刊行会 一九八三年八月初版 一九九三年九月増補版）一五三頁より抜粋した。当該文の執筆者である蒲地文雄氏は、晩年に目の痛みを子規が訴えていたことや眼鏡を掛けて新聞を読んでいたことにも触れた上で、引用した箇所のような主張をしている。

注14 今西幹一『正岡子規の短歌の世界―『竹乃里歌』の成立と本質―』（一八八頁より抜粋した）。

注15 今西幹一『正岡子規の短歌の世界―『竹乃里歌』の成立と本質―』（二二六頁より抜粋した）。

注 16 明治三三年四月二十一日の作に「庭前即景」という題で次の連作がある。歌の通し番号は省略した。

山吹は南垣根に菜の花は東堺に咲き向ひけり

かな網の大鳥籠に木を植ゑてほつ枝下枝に鶉飛びわたる

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

汽車の音の走り過ぎたる垣の外の萌ゆる梢に煙うづまく

杉垣をあさり青菜の花をふみ松へ飛びたる四十雀二羽

一うねの青菜の花の咲き満つる小庭の空に鳶舞ふ春日

くれなゐの若菜ひろがる鉢植の牡丹の蕾いまだなかりけり

春雨をふくめる空の薄曇山吹の花の枝も動かず

家主の植ゑておきたる我庭の背低若松若緑立つ

百草の萌えいつる庭のかたはらの松の木陰に菜の花咲きぬ

注 17 「病床六尺」は、明治三五年五月五日から新聞『日本』に掲載されたものである。その第一回（五月五日）の冒頭で次のよ

うに、子規は述べている。（講談社版『子規全集』第十一卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年四月）二二二頁より抜粋）なお、旧字体は新字体で表記した。

病床六尺、これが我世界である。しかも此六尺の病床が余には広過ぎるのである。僅かに手を延ばして畳に触れる事はあるが、蒲団の外へ迄足を延ばして体をくつろぐ事も出来ない。…

注 18 「叙事文」『子規全集』第一四卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七六年一月）二四八頁）より抜粋。なお、旧字体のほとんどは新字体で表記した。

注 19 「十たび歌よみに與ふる書」（講談社版『子規全集』第七卷 五十頁）より抜粋した。

注 20 『子規歌論の展開』（有田静昭 八木書店 一九八四年四月）二五頁より抜粋した。

注 21 随筆「赤」は明治三二年五月十日の『ホトトギス』第二卷第八號に発表されたものである。引用は講談社版『子規全集』第十二卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年十月）収録のものを使用した。引用箇所は全集の二九六頁である。

注 22 『歌ことば歌枕大辞典』『藤』の項（三八一～三八二頁）より抜粋したものである。

注 23 『歌ことば歌枕大辞典』『早苗』の項（七六四～七六五頁）より抜粋した。

注 24 『歌ことば歌枕大辞典』『藤』の項（三八一～三八二頁）より次の指摘が見られる。

…藤の花は古くは水辺に咲く姿が好まれたらしく、「多祜の浦の底さへにほふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため」（万葉集・卷一九・四二〇〇・四二二四・縄麻呂）のように水面に映るさまを詠じ、「藤」に「淵」を掛けることが多かった。…

注 25 『歌ことば歌枕大辞典』『牡丹』の項（七八八頁）より抜粋した。

注 26 『歌ことば歌枕大辞典』『藤』の項（三八一～三八二頁）より次の指摘が見られる。

…「藤」そのものよりも、その風になびく姿を波に見立てた「藤波」の語で詠まれる例が圧倒的に多い。…

注 27 『子規全集』第十一卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年四月）収録「仰臥漫録 二」より抜粋。引用箇所は全集

五〇三〜五〇四頁。

注 28 『歌ことば歌枕大辞典』『竹』の項（五〇五〜五〇六頁）と「竹の葉」の項（五〇七頁）より

注 29 『王朝文化辞典―万葉から江戸まで―』（山口明穂・鈴木日出男編 朝倉書店 二〇〇八年十一月）

注 30 『子規全集』第七卷 三四ページより抜粋した。

注 31 『歌ことば歌枕大辞典』『梅』の項（二六〇〜二六一頁）より抜粋した。

注 32 『歌ことば歌枕大辞典』『梅』の項（二六〇〜二六一頁）より抜粋した。

注 33 『歌ことば歌枕大辞典』『松』の項（八〇四〜八〇五頁）より抜粋した。

注 34 講談社版『子規全集』十一卷 一七三頁より抜粋した。

注 35 『正岡子規』（岡井隆 筑摩書房 一九八二年四月）二五四〜二五五頁より抜粋した。

注 36 『歌ことば歌枕大辞典』『桜』の項（三二六〜三二七頁）より抜粋

注 37 子規が明治三十一年に発表した「五たび歌よみに與ふる書」の内容に次のものがある。『子規全集』第七卷 歌論 選歌（講談社 一九七五年七月一八日）三四ページより抜粋した。

：「花の句」などいふも大方は嘘なり、櫻などには格別の句は無之、「梅の句」でも古今以後の歌よみの詠むやうに匂ひ不申候。

注 38 『歌ことば歌枕大辞典』（「杉」の項（四五三頁））より抜粋した。

注 39 「五たび歌よみに與ふる書」（『子規全集』第七卷 三三三頁）より抜粋。

注 40 「五たび歌よみに與ふる書」『子規全集』第七卷 三三三頁）より抜粋。

注 41 『歌ことば歌枕大辞典』「散る」の項（五五九頁）より抜粋。

注 42 「五たび歌よみに與ふる書」『子規全集』第七卷 三三三頁）より抜粋

注 43 講談社版『子規全集』第十一巻収録「病牀六尺」（八月七日の記事、全集三四四頁）の引用である。

本章は次に基づいたものである。

「正岡子規自筆『竹乃里歌』の植物語彙について―詠まれた植物の種類と時期―」

『東京女子大学日本文学』第一〇七号（二〇一一年）

「正岡子規自筆『竹乃里歌』短歌の植物語彙について―詠まれた植物の部位、集まり、空間を視点として―」

（東京女子大学紀要『論集』第六十二巻二号 二〇一二年三月）

## 第二章 天文語彙について

### 第一節 はじめに

天文（氣象と天体）は、植物と同様に子規の生涯通して身近にあったものの一つと考えられる。実際に明治三四年九月五日の日記<sup>注1</sup>には天氣が記録されている。

九月五日 雨 夕方遠雷／朝 粥三碗 佃煮 瓜ノ漬物／晝 メジノサシミ 粥四碗 焼茄子 梨二ツ／間食

梨一ツ 紅茶一杯 菓子パン數個／夕 鶏肉 卵二ツ 粥三碗餘 煮茄子／若<sup>わか</sup>和<sup>か</sup>布<sup>め</sup>二杯酢カケ（／は改行）

外出がほぼ不可能になり病床にあった子規の環境は、縁側に出ず寝たきりになっても、天体の様子や外の氣象は分かるものであった。それは、明治三二年に子規の病室に硝子窓が取り付けられた為である。ガラス窓から外の様子を詠んだ作品の例を二首挙げる。

ガラス戸ノ外ハ《月》アカシ森ノ上ニ白雲長クタナビケル見ユ  
（一七九〇・三三年）

鏡ナすガラス張窓影透きて上野の森に《雪》つもる見ゆ  
（一三七七・三三年）

本章では天文語彙の中の、「雪」などの氣象を表す語彙（以降、氣象語彙）と、「月」などの天体を表す語彙（以降、天体語彙）を見てゆく。

## 第二節 天文語彙の使用実態

### 第一項 気象の種類

次の表に、気象語彙の種類ごと（例「雨」「風」など）に分類し、期間ごとの作品数をまとめる。

気象語彙 1		明治 30年 以前	明治 31年	明治 32年	明治 33年	明治 34年	明治 35年	計
雨	雨	11	12	5	20	8		56
	五月雨	12	12		7			31
	春雨	3	11	3	7	3		27
	夕立	6	7	1				14
	村雨	2	2	1	2			7
	時雨	1		4				5
	夕立の雨	1	3					4
	小雨	1	1		1			3
	神雨				2			2
	櫻の雨				2			2
	篠突く雨	1			1			2
	春の雨	1			1			2
	時雨の雨			1				1
	長雨				1			1
	叢時雨	1						1
霞	霞	2	1	0	1	0	0	4
	玉霞	1	0	0	0	0	0	1
雷	鳴神	0	8	0	0	0	0	8
	稲妻	1	3	0	0	0	0	4
	いかづち	0	1	0	1	0	0	2
	神鳴	0	1	0	0	0	0	1
陽炎	陽炎	0	0	0	2	0	0	2
	絲遊	0	1	0	0	0	0	1
霞	霞	5	1	1				7
	霞のきぬ	1						1
	霞のころも	1						1
	霞の底	1						1
	春霞			1				1
	夕霞		1					1
風	秋風	5	5	1	2			13
	秋の初風	1	5		1			7
	朝嵐		1					1
	朝風		1					1
	愛宕風		1					1
	嵐	4	1	2	2			10
	息吹嵐						1	1
	上野嵐		1					1
	沖つ風		1					1
	沖つ波風	1						1
	風	32	27	4	19		1	83
	風の色	1						1
	風の音		2					2
	風の宮		1					1
	川風	1						1
	神風		2					2
	枯山嵐	2						2
	北風		1				1	2
	北山嵐			1				1
	木枯らし	3			1			4



気象語彙 2		明治 30年 以前	明治 31年	明治 32年	明治 33年	明治 34年	明治 35年	計
風 (続 き)	木枯らしの風	1						1
	東風風		1					1
	下風		2		1			3
	春風(しゅんぷう)		1					1
	筑波根風		1					1
	波風	1						1
	西風	1	2					3
	根風	1	1					2
	野分		5	1	1			7
	野分の風		1					1
	春風	4	4	2				10
	比枝山風		1					1
	東風				1			1
	日和風				1			1
	松風	4						4
	松の嵐		1					1
	松の下風	1						1
	南風		1					1
	妙義風	1						1
	山嵐	1						1
	山嵐風			1				1
	山風	1						1
	夕風	1	3		1			5
	夕の風	1						1
	夜嵐		2		1			3
	夜半の嵐	1						1
霧	霧	5			1			6
	朝霧	1						1
雲	雲	13	9	1	3			26
	白雲	5	1		2			8
	雲の峰		7					7
	雲間	1	1					2
	雲井	1			1			2
	天雲				1			1
	薄色雲				1			1
	雲の梯			1				1
	雲の峰の上		1					1
	黒雲		1					1
	五月雨の雲		1					1
	紫雲		1					1
	夏雲		1					1
	夏雲の峰		1					1
	花の白雲				1			1
	紫の雲		1					1
	夕立の雲	1						1
虹	虹	1						1
雹	雹	0	0	0	1	0	0	1
霰	霰	0	1	0	0	0	0	1

氣象語彙  
三

気象語彙 3		明治 30年 以前	明治 31年	明治 32年	明治 33年	明治 34年	明治 35年	計
雪	雪	20	14	2	12		2	50
	白雪	6			1			7
	吹雪		2					2
	深雪		1					1
	雪の中				1			1
	雪の深山		1					1
	雪雪崩		1					1
	雪催い	1						1
天気	晴れ	1	1	7				9
	日和			4				4
	曇り				1	1		2
	晴れ間	2						2
	秋晴れ		1					1
	朝晴れ			1				1
	雨上がり		1					1
	薄曇り				1			1
	薄花曇り				1			1
	櫻曇り				1			1
	霜解け				1			1
	梅雨晴れ			1				1
	天気			1				1
	菜の花曇り				1			1
	旱				1			1
夕曇り				1			1	

気象語彙の異なり語数は全体で一二一語であり、期間ごとの異なり語数は次の通りである。

明治三十年以前…五三語 五月雨・霰・霞のきぬ・虹・白雲など

明治三十一年 …六二語 春雨・鳴神・雲・秋晴れ・雪など

明治三十二年 …二三語 村雨・霞・嵐・曇・雹など

明治三十三年 …四三語 秋風・木枯し・靄・天雲・雪など

明治三十四年 …三語 雨・春雨・曇り

明治三十五年 …四語 風・北風・息吹風・雪

右の結果より、明治三十一年に異なり語数が大きく増加していることが分かる。明治三十一年の短歌革新の際に唱えた「用語の拡大」の実践の影響が見られる。明治三十一年の気象語彙は、前期間と比べ、気象に時間や空間、状態等の意味が付随されているもの（例えば「朝風」や「樅の下風」など）の種類の多い。しかし、明治三十二年に異なり語数は大きく減少し以降も減少傾向であるので、明治三十一年の増加は一時的なものであったといえる。

気象語彙を詠んだ作品数は次の通りである。【 】内に各期間の全作品数とそれに対する気象語彙を詠んだ作品数の割合を挙げる。

明治三十年以前…一七三首 【五七六首】 30.0 %

明治三十一年 …一七八首 【六九一首】 25.8 %

明治三十二年 …四七首 【三六八首】 12.8 %

明治三三年	…一九首	【六四五首 18.4 %】
明治三四年	…十四首	【八九首 15.7 %】
明治三五年	…五首	【六三首 7.9 %】

明治三二年にガラス窓が設置されたことで外の様子を室内からでも見るようになったことに加え、明治三四年以降の日記に天気が記録されていることから、亡くなるまで子規は気象に意識を向けることは多かったと考えられる。しかし右の結果は、期間を下るに従い気象語彙を短歌に詠むことが少なくなってゆく傾向を表している。

子規が文学に取り入れた写生理論について、松井貴子氏による次の指摘<sup>注2</sup>がある。

子規が不折に学んで美術から文学へ取り込んだ写生は、次の五点に要約できる。

- ① 写生する材料は身近なところでも無限に発見することができる。
- ② 作品中に描くものを取捨選択し、不要なものを削除する。
- ③ 取捨選択した材料を構成（結構布置）し、作品に仕上げる。
- ④ 作品の中心となるものに焦点を合わせ、作者の主意を表現する。

⑤ 形や色、明暗（光線の具合）、遠近（位置関係）を正確に表現する。

期間を下るに従い短歌に気象語彙を詠むことが少なくなるのは、この写生理論の②の点、「描くものを取捨選択」する過程で、気象語彙が「削除」されるようになったためと考えられる。

そこで、どのような気象語彙が「削除」されるようになったのか検討してゆく。

先の表より、期間を下ってゆくに従って、「春雨」のように時間などの意味を含んだ気象語彙でなく、「雨」のように気象そのものだけを端的に表現した語彙を使用する傾向が強くなっていることが分かる。左に気象そのものだけを端的に表現した語彙数（異なり語数）を挙げる。（ ）内には各期間の気象語彙の全異なり語数に対する割合である。

明治三十年以前	…十二語（22.6 %）
明治三十一年	…十三語（20.96 %）
明治三十二年	…七語（30.4 %）
明治三十三年	…十一語（25.6 %）
明治三十四年	…一語（33.3 %）
明治三十五年	…二語（50 %）

このように、「雨」など気象そのものだけを端的に表した語彙の使用が、明治三十二年を境に増加する傾向が見られ、明治三四年以降はより多くなっている。一つの語彙で多くの情報を表す方法から、他の語や表現で情報を補う方法を採るようになったためであろうか。例えば次の明治三十二年の「春雨」の例では、その語自体で「春の雨」であると判断できる。明治三四年の「くれなゐの」の歌の「雨」は、「くれなゐの牡丹」と共に詠まれていることで、「雨」が「春の雨」であると判断できる。

門並に柳植ゑたる家つゞき 《春雨》 細く燕飛ぶなり

（一〇四五・三二年）

くれなゐの牡丹の花におほひたるやふれ小傘に 《雨》 のしきふる

（拾遺四三〇・三四年）

## 第二項 天体の種類

天体を表す語彙を太陽、月、星の種類ごとに分類し、期間ごとに作品例を挙げたものが、次頁の表である。

表より、太陽は六期間通して使用例を見ることができるが、月は明治三四年まで、星は明治三三年までの使用であることが分かる。明治三三年までは天体を詠んだ作品が複数見られ、特に月の例が多く見られるが、明治三四年以降で天体を詠んだ例は次の四首のみであり、晩年は天体を歌材にすることは殆どなくなっている。

下蔭ノ草花惜ミ《日》ヲ蔽フ松ガ枝伐ラン家主怒ルトモ  
(拾遺四四二・三四年)

我庭ノ三モト松伐リアハレ深キ千草ノ花ニ《日》ノ照ルヲ見ン  
(拾遺四四三・三四年)

春されば梅の花咲く《日》にうとき我枕への梅も花咲く  
(拾遺四六七・三五年)

ガラス戸におし照る《月》の清き夜は待たずしもあらず山ほととぎす  
(拾遺四二三・三四年)

右の晩年の四首を見ると「日ヲ蔽フ」「日ノ照ル」「日にうとき」「おし照る月」といった太陽や月の光の表現であり、天体そのものとしての太陽と月(例「朝日さしのぼる」「月宿る」等)は詠まれていない。

明治三四年以降に天体が詠まれることが少なくなっているのは、作歌数の影響の他に、天体を、実際に観察する機会が減ったためと考えられる。後述するが天体の詠まれ方は、「(日が)上る」など動きを伴った表現がされる傾向がある。しかし天体の動きを表現することは、紀行文や日記などで外出先の記録を残すときに多く見られるものである。

明治三四年以降で天体そのものを歌に詠むことが無くなったのは、実生活で外出が不可能となったことと関係しているのではないか。

## 天体語彙

天体語彙		明治 30年 以前	明治 31年	明治 32年	明治 33年	明治 34年	明治 35年	計
日 (太陽)	日	3	15	3	1	2	1	25
	朝日	4	3	2	2			11
	入日	1	2					3
	夕日		3					3
	秋の日		1					1
	朝日子				1			1
	初日			1				1
	春の日				1			1
	春日		1					1
	冬の日				1			1
	横日			1				1
月	月	35	22	15	15	1		88
	有明の月	5						5
	春の夜の月		3		1			4
	三日月		1	1	1			3
	月の面	1	1					2
	二十日の月	2						2
	秋の夜の月	1						1
	薄月				1			1
	朧月	1						1
	眞如の月		1					1
	月の都		1					1
	月人男				1			1
	月宿る	1						1
	夏の月			1				1
	夏の夜の月			1				1
	春の月	1						1
	水海の月		1					1
	望月			1				1
	夕月		1					1
星	星	7	1	1	8			17
	天の川		2	1				3
	星の都		1		1			2
	夕星		1	1				2
	明星		1					1
	牛飼い星				1			1
	機織り姫				1			1
	母星				1			1
	北斗				1			1
	星合		1					1
	星の少女				1			1
	夜這ひ星	1						1

## 第三項 古典和歌との対応

これまで天文語彙の中の気象語彙と天体語彙について見てきた。これらの気象語彙と天体語彙の種類が古来頻繁に

使用されているものであるのか期間ごとに見てゆく。左に古来頻繁に使用された種類数を挙げる。(一)内は各期間の天文(気象・天体)の全種類数である。なお「天気」については「晴れ」と「曇り」に分けている。

明治三十年以前…十七種類(十七種類)

明治三一年 …十六種類(十七種類)

明治三一年の天体と気象の種類は、次の「霽」の一種類を除き全て古来頻繁に使用されているものである。

《霽》深くこめたる庭に下り立ちて朝の手すさひに杜若剪る

(三三九・三一年)

明治三二年 …十三種類(十三種類)

明治三三年 …十六種類(十七種類)

明治三三年の天体と気象の種類は、次の「霽」の一首類を除き全て古来頻繁に使用されているものである。

うらゝかにガラスを照す春の日にはかに曇り《霽》ふり来る

(一五七八・三三年)

明治三四年 …五種類(五種類)

明治三五年 …四種類(四種類)

天体と気象の種類では、植物の種類で見られたような、古歌の題材から外れる歌材の積極的使用が見られない。

これは、太陽や月といった天体や、月影や風雨といった天体や気象による自然現象が、代や中古と近代の間に、それらの存在の有無の変化が殆どないことと、種類数が限られていることに起因しているのではないか。天文語彙は、短



歌革新を境にした子規自身の「用語の區域」の拡大の実践が現れ難い分野のものであると言える。

### 第三節 天文語彙の表現方法

#### 第一項 気象の感覚表現

気象語彙に対する感覚表現が見られる作品数をまとめたものが、次頁の資料（気象・感覚）である。なお複合感覚表現の場合はそれぞれの感覚表現の作品数にも含める。例えば視覚と聴覚の複合感覚表現の場合は、視覚表現の見られる作品数と聴覚表現の見られる作品数の両項目に分類している。

		視覚 表現	聴覚 表現	触覚 表現	嗅覚 表現	複合 感覚 表現				視覚 表現	聴覚 表現	触覚 表現	嗅覚 表現	複合 感覚 表現
風	明治30年以前	32	8	18	3	9		霧	明治30年以前	7	0	0	0	0
	明治31年	41	9	11	0	8			明治31年	(作品例なし)				
	明治32年	5	0	0	0	0			明治32年	(作品例なし)				
	明治33年	28	2	7	1	7			明治33年	1	0	0	0	0
	明治34年	(作品例なし)							明治34年	(作品例なし)				
	明治35年	0	0	1	0	0			明治35年	(作品例なし)				
雨	明治30年以前	26	1	5	0	6		曇り	明治30年以前	(作品例なし)				
	明治31年	34	0	5	0	0			明治31年	(作品例なし)				
	明治32年	11	0	4	0	1			明治32年	(作品例なし)				
	明治33年	32	1	4	0	5			明治33年	6	0	0	0	0
	明治34年	10	0	1	0	1			明治34年	1	0	0	0	0
	明治35年	(作品例なし)							明治35年	(作品例なし)				
雪	明治30年以前	25	0	0	0	0		虹	明治30年以前	1	0	0	0	0
	明治31年	17	0	1	0	0			明治31年	(作品例なし)				
	明治32年	2	0	0	0	0			明治32年	(作品例なし)				
	明治33年	14	1	0	0	1			明治33年	(作品例なし)				
	明治34年	(作品例なし)							明治34年	(作品例なし)				
	明治35年	1	0	0	0	0			明治35年	(作品例なし)				
雲	明治30年以前	18	0	0	0	0		晴れ	明治30年以前	(作品例なし)				
	明治31年	22	0	0	0	0			明治31年	1	0	0	0	0
	明治32年	1	0	0	0	0			明治32年	8	0	0	0	0
	明治33年	5	0	0	0	0			明治33年	(作品例なし)				
	明治34年	(作品例なし)							明治34年	(作品例なし)				
	明治35年	(作品例なし)							明治35年	(作品例なし)				
霞	明治30年以前	3	2	0	0	2		電	明治30年以前	(作品例なし)				
	明治31年	1	1	0	0	1			明治31年	(作品例なし)				
	明治32年	(作品例なし)							明治32年	(作品例なし)				
	明治33年	1	1	0	0	1			明治33年	1	0	0	0	0
	明治34年	(作品例なし)							明治34年	(作品例なし)				
	明治35年	(作品例なし)							明治35年	(作品例なし)				
雷	明治30年以前	1	0	0	0	0		靄	明治30年以前	(作品例なし)				
	明治31年	9	9	0	0	6			明治31年	1	0	0	0	0
	明治32年	(作品例なし)							明治32年	(作品例なし)				
	明治33年	0	1	0	0	0			明治33年	(作品例なし)				
	明治34年	(作品例なし)							明治34年	(作品例なし)				
	明治35年	(作品例なし)							明治35年	(作品例なし)				
陽炎	明治30年以前	(作品例なし)												
	明治31年	1	0	0	0	0								
	明治32年	(作品例なし)												
	明治33年	2	0	0	0	0								
	明治34年	(作品例なし)												
	明治35年	(作品例なし)												
霞	明治30年以前	8	0	0	0	0								
	明治31年	(感覚表現のみられる作品例なし)												
	明治32年	2	0	0	0	0								
	明治33年	(作品例なし)												
	明治34年	(作品例なし)												
	明治35年	(作品例なし)												

資料（気象・感覚）より、概して各期間通して視覚表現の使用が多いことが分かる。また聴覚表現と触覚表現、嗅覚表現の使用も見られるが、そのほとんどが明治三三年までのものである。

視覚表現の使用が多いことについて、子規の写生理論が影響していると考えられる。前述の松井貴子氏の要約の五項目、「⑤形や色、明暗（光線の具合）、遠近（位置関係）を正確に表現する」という写生の方法は、視覚表現の分類基準の一つ、「対象物の『状態』を表すもの」に当てはまる。

明治三十年以前は短歌に写生の方法を取り入れることを発表する前であり、明治三十一年は理論の実践の期間で子規自身の短歌のあり方の模索が色濃い時期である。そのような期間を経て自らの短歌のあり方が確立し始める、明治三二、三三年以降から「形や色、明暗（光線の具合）、遠近（位置関係）を正確に表現する」ことが徹底され始めたのであろうか。次の「提灯の」の歌では町の明るさと森の暗さが表され、「咲く花の」の歌では花の雲の色と、花の雲のある位置、花の雲が靡いている形が表されている。

提灯の山なす町を歩き過ぎて上野の森は暗く淋しき

（一三一八・三二年）

咲く花の薄色雲は吾妻橋ゆ梅若丸の塚になひけり

（一六四七・三三年）

また、次の子規の論<sup>注3</sup>も、視覚表現が短歌に多くなることについての原因を表していると考えられる。

元來人の五官の中にて視官と嗅官とを比較すれば視官の刺撃せらるること多きは論をまたず。梅を見たる時に色と香といずれが強く刺撃するかといえば色の方強きが常なり。ゆえに「梅白し」といえばそれより香の連想多少起れどもただ「梅かをる」とばかりにては今梅を見て居るところと受け取れずしてかえって梅の花は見て居らで

薫のみ聞ゆる場合なるべし。

このように、子規は視覚表現が嗅覚表現を補うことが可能であるとしている。子規短歌の例の中で視覚表現が触覚表現と聴覚表現も補いうる例が見られる。視覚表現には傍線を附した。

酒店を叩けども起きずすゝり泣く賤の童に《雪》ふりしきる

(四五四・三二年)

天人が湯あみの盥かへしけん此里はかり《夕立》のふる

(七一二・三一年)

「酒店を」の歌の「雪」は、「雪」が冷たいものであるという書き手と読み手の共通認識から、「雪」の冷たさ（触覚表現）も歌から受け取れる。「天人が」の歌の「夕立」は、「夕立」が激しく降るものという共通認識から、「夕立」の音（聴覚表現）も受け取れる。

このように作者と読み手の対象物に対する共通認識によって、視覚表現が触覚表現や聴覚表現の役割も果たすことが可能である。子規は「元來人の五官の中にて視官と嗅官とを比較すれば視官の刺撃せらるること多きは論をまたず。」としているが、触覚と聴覚に対しても視覚の方が「強く刺撃する」と考えられる。

子規は、視覚表現が、嗅覚に限らず、触覚や聴覚の表現も「連想」させ得るとも考えていたのではないか。そのために、視覚表現の使用が多いという結果に繋がったと考えられるのではないか。

子規が香りを詠む例は明治三五年まで見られ、その作品の多くが次の二首のように香りを主題としている。

黒石の炭やく煙風をいたみわろき香放ち我家に入る

(一七八五・三三年)

小包を開きて見れば花菫その香にほひてしをれてもあらず

(拾遺四七九・三五年)

子規の「元來人の五官の中にて…」の論は落合直文の作品「わづらへる鶴の鳥屋みてわれ立てば小雨ふりきぬ梅かを朝」<sup>注4</sup>に対する批判である。実際に子規の作品に自身の批判の実践が見られる。次に梅花の歌の例を挙げる。

いつのよの庭のかたみそ賤か家の垣ねつゝきに匂ふ《梅か》

(二四五・二六年)

柵橋に駒立てをれば薄月夜《梅か》遠く匂ふ夕暮

(二七六・二六年)

明治三十年以前の期間では、「匂ふ梅が」<sup>5</sup>「梅が遠く匂ふ」と梅の香りを詠んだ歌が見られるが、明治三十一年以降は次の歌以外で梅の香りを詠んだ歌は見られない。左の歌では「梅の花は見て居らで薫のみ聞ゆる場合」が歌われており、古歌を下敷きにした内容となっている。

うは玉の闇に《梅か香》聞え來て躬恒か歌に似たる夜半かも

(一四五二・三三年)

梅の香りについて、子規の明治三十一年の次の批判<sup>注6</sup>の影響もあると考えられる。

「露の落つる音」とか「梅の月が匂ふ」とかいふ事をいふて樂む歌よみが多く候へども是等も面白からぬ嘘に候。

總て嘘といふものは一二度は善けれどたび／＼詠まれては面白き嘘も面白からず相成申候。況して面白からぬ嘘

はいふ迄も無く候。「露の音」「月の匂」「風の色」などは最早十分なれば今後の歌には再び現れぬやう致したく候。

「花の匂」などいふも大方は嘘なり、…「梅闇に匂ふ」とこれだけで済むことを三十一文字に引きのばしたる御

苦勞加減は恐れ入つた者なれどこれも此頃には珍らしき者として許すべく候はんに、あはれ歌人よ「闇に梅匂ふ」

の趣向は最早打どめに被成ては如何かや。

以下本節では、氣象語彙の中で特に作品数の多い「風」と「雨」、「雪」、「雲」と天体語彙を扱う。

それぞれの気象語彙に対する感覚表現には、次のような特徴が表れていた。

「風」、「雨」、「雪」、「雲」は視覚で捉えられる気象であり、実際共通して視覚表現が多く用いられている。

「雨」と「雪」は明治三四年以降でも視覚表現が使用されていた一方で、「雲」の動きは、病状が悪化した明治三二年から詠まれなくなっていた。また、植物の動きによって視覚できる「風」も、「庭前即景」の歌風が確立している明治三四年から詠まれなくなっていた。聴覚表現や触覚表現、嗅覚表現の例も見られるが、明治三四年以降、視覚表現に収束していく傾向であった。

聴覚で捉えることのできる気象は、「風」と「雨」、「雪」であるが、「風」と「雨」、「雪」は明治三四年以降に聴覚表現が使用されなくなっている。触覚で捉えることのできる気象は、「風」と「雨」、「雪」であるが、「雨」と「風」、「雪」の触覚表現は明治三四年以降にほとんど見られなくなっている。

このような感覚表現の特徴について、以降具体的に見てゆく。

### 三――「風」の感覚表現

「風が吹く」「風が荒る」の「吹く」「荒る」は、「風」の動きや状態を表しており視覚表現に分類されるものであるが、「風」そのものは目に見えないものである。そこで「風」に対する感覚表現について、序章で挙げた感覚表現の基準に加え、次のような認定基準を用いた。

「風」によって動くものと共に「吹く」などの語が詠まれている場合は視覚表現とする。

夕されは波うちこゆる荒磯の蘆のふし葉に《秋風》ぞ吹く

(五二七・三二年)

つゝみある身のさかしらに遠く来てそざるに寒き藤の《下風》

(拾遺三一九・三三年)

「夕されは」の「歌の秋風」は「蘆のふし葉」に「吹く」とあり、葉が風によつて揺れていると判断でき、風を視覚表現で表しているとする。また「つゝみある」の歌では「吹く」などの語は使用されていないが、「藤」という風に吹かれていると判断できる植物（風によつて動くもの）が詠まれているので、「夕されは」の歌と同様に視覚表現とする。但し「風」が植物などを吹いている、もしくは吹いていたことが前提でもその表現がない場合は、視覚表現としない。

水上は嵐吹くらし大井川に紅葉おしわけて筏さすなり

(拾遺二三五・二八年)

名残なく野分は晴れて倒れ伏す萩に朝日の胡蝶飛ぶなり

(一二一三・三二年)

「水上は」の歌では「嵐」によつて「紅葉」が吹き散らされていることが前提であるが、直接そのような表現が用いられていないので視覚表現としない。「名残なく」の歌では「野分」が「萩」を吹き倒したことが分かるが、「野分」が「萩」を吹き倒している表現がないので視覚表現としない。

「吹く」などの語と共に「風」が吹いている時の状況の触覚表現がある場合や、他の表現から触覚で「吹く」を捉えていると判断できるものを触覚表現とする。

こきもせて帆をふく風に舟人の水掬ひつゝ夕涼かな

(拾遺四九・二二年)

君が着る羅紗の衣手をさをあらみな吹きすさみそから山嵐

(二八二・二七年)

「こきのせて」の歌では「夕涼」とあり、「吹く風」は触覚で捉えられていると判断できるので触覚表現とする。「君

が着る」の歌では箴が粗いことを理由に「な吹きすさみそ」としているので、「吹く」を触覚で捉えていると判断し触覚表現とする。

「風」が吹くことで音が立てられる、もしくは音が運ばれることを表している場合は聴覚表現とする。

秋風の吹けば砧の聲すなり薄にくるゝ原の一つ家

(二〇四・二四年)

風わたる賤か檐端の葱草螢なひきて風鈴の鳴る

(六八五・三一年)

右の二首は、「秋風」によって「砧の聲」が聞えたり、「風」が吹いたことで「風鈴の鳴る」という結果が生まれているので、聴覚表現とする。

「風」の中に匂いが含まれること、匂いが運ばれることを表している場合は嗅覚表現とする。

《風》にたに匂ひを残せ梅の花ちりての後も人かとはなん

(二三三・二五年)

黒石の炭やく煙《風》をいたみわろき香放ち我家に入る

(二七八五・三三年)

「風にたに」の「風」には梅花の匂いが含まれることが望まれており嗅覚表現とする。「黒石の」の「風」は煙の匂いを家の中に運んでいるので嗅覚表現とする。

この基準により、例えば左の短歌の「風」の感覚表現は次のようになる。

むら雨窓をあくれば我庵の園生の竹に《風》わたる也

(二二・十八年)

「むら雨」の歌の「風」は、「竹」（風に動かされるもの）と共に詠まれているので「わたる」は視覚表現となる。竹に風が吹いていることと窓を開けていることから、「風」を聴覚と触覚で捉えていると判断できるが、「風」の音や触



感を表す語彙や表現がないので、聴覚表現・触覚表現としない。

「風」に対する感覚表現を詠んだ作品数は次の通りである。( ) 内に「風」を詠んだ全作品数を挙げる。

明治三十年以前…五二首 (六九首)

明治三一年 …五三首 (七五首)

明治三二年 …五首 (十二首)

明治三三年 …三〇首 (三一首)

明治三四年 …なし

明治三五年 …一首 (三首)

「風」に対する感覚表現について、期間ごとの特徴を見てゆく。

### 明治三十年以前

明治三十年以前の「風」に対する感覚表現は、**視覚表現**、**聴覚表現**、**嗅覚表現**、**触覚表現**、**複合感覚表現**(視覚＋聴覚・視覚＋触覚・聴覚＋触覚)である。作品例を抄出し、( ) 内に各感覚表現の見られる作品数を挙げる。(以降同様にする)

#### 視覚表現 (三二首)

むら萩の末こす《風》に散る露をしはし下葉にとめてしかな

(拾遺七三・二一年)

ちる花をまたふきあぐる《春風》はむかしの枝にかへすとすらん

(一五〇・二四年)

みちのくの《夕風》あれていつる月にこかね花ちる沖つ白波

(二六二・二六年)

### 聴覚表現(八首)

海神も恐るゝ君か船路には灘の《波風》しづかなるらん

(九五・十九年)

《秋風》の吹けば砧の聲すなり薄にくるゝ原の一つ家

(二〇四・二四年)

《風》あるゝ伊勢の浦わの濱荻の枯れて音なき冬は來にけり

(三一三・二八年)

### 嗅覚表現(三首)

花かとは見れと吹く《風》かほりなし遠山の端にかゝる白雲

(一三二・二三年)

やまふきのさきそめしより賤の女のやつれ衣にかほる《春風》

(一四三・二四年)

《風》にたに匂ひを残せ梅の花ちりての後も人かとはなん

(二三三・二五年)

### 触覚表現(十八首)

もくつたく蚊遣の煙見へされは夏とはしらし磯の《松風》

(十六・十八年)

さなきたに《夕の風》は涼しきを櫓の梢に月も出けり

(拾遺五二・二二年)

焼太刀を抜きもち見れば水無月の《風》冷かに龍立昇る

(二八一・二七年)

### 複合感覚表現 視覚+聴覚(五首)

《風》そよく隅田のあしのふしの間に夏の夜あけて鶏やなくらん

(拾遺六三・二二年)

松にふく夜半の《風》の音たえて梢にのこる有明の月

(二六三・二六年)

吳竹に《風》吹き入るゝ音す也はつかの月の今か出つらん

(三〇八・二八年)

**複合感覺表現 視覚＋聴覚 (三首)**

見渡せばはるかの沖のもろ舟の帆にふく《風》ぞ涼しかりける

(一二〇・二〇年)

こきもせて帆をふく《風》に舟人の水掬ひつゝ夕涼かな

(拾遺四九・二二年)

昨日まですゝしといひしあしの葉の《風》身にしみて秋やたつらむ

(拾遺六八・二二年)

**複合感覺表現 聴覚＋触覚 (一首)**

いにしへの書よむ窓に《松風》の音聞くのみもすゝしかりけり

(一三七・二三三年)

明治三十年以前の作品の「風」に対する感覺表現は、視覚表現と聴覚表現に偏っているといえる。

**明治三十一年**

明治三十一年の「風」に対する感覺表現は**視覚表現、聴覚表現、触覚表現、複合感覺表現**(視覚＋聴覚・視覚＋触覚)が見られる。

**視覚表現 (四一首)**

《風》吹けば蘆の花散る難波潟夕汐満ちて鶴低く飛ぶ

(五二五・三一年)

麥の葉に《風》吹きわたる旅心菅笠の上に雲雀鳴くなり

(五八七・三一年)

白砂に松葉吹き散る水無月の《風》緑なり住吉の宮

(八七二・三二年)

### 聴覚表現（九首）

夜をこめて《比枝山風》音なり瀬田の螢や吹き盡すらむ

(六八六・三二年)

聞きなれし《松の風》の音ならばこそあながま瓢あながまの世や

(八九六・三二年)

夜もすからさわぐ《野分》の音絶えて雨戸あくれば垣なかりけり

(九八五・三二年)

### 触覚表現（十一首）

野の空の夕暮寒み《風》荒れて武藏の雲雀下總に落つ

(五八一・三二年)

麥畑に巢立ちしあへぬ子雲雀の《夕風》寒く親や呼ぶらん

(五八五・三二年)

繪を掛けて夏を静かに観ずれば《風》冬の如く雪壁に満つ

(九七六・三二年)

### 複合感覚表現 視覚＋聴覚（二首）

岡こえて利根川近み《風》そよぐ麥の葉末に白帆行くなり

(五九八・三二年)

《風》わたる賤か檐端の葱草螢なひきて風鈴の鳴る

(六八五・三二年)

### 複合感覚表現 視覚＋触覚（六首）

折々は不二の《根風》雪を吹きて春まだ寒し武藏野の原

(三八三・三二年)

夏衣まだぬぎあへぬ旅人の袖吹きかへす《秋の初風》

(七五九・三二年)

壁の畫を涼しき《風》の動かして林の雪の散るかと思ふ

(九七五・三二年)

明治三一年の作品の「風」に対する感覚表現は、視覚表現に偏っている。触覚表現もやや多く使用されているが、片寄り方は、前期間の場合よりも小さくなっている。

### 明治三二年

明治三二年の「風」に対する感覚表現は**視覚表現**（五首）のみが見られる。

群れ走る蘆毛月毛の駒の尾に《春風》吹きて御代しつかなり

（二〇八〇・三二年）

蟬の鳴く森の梢に《風》過ぎて松葉杉葉のはら／＼と落つ

（二一八七・三二年）

むら雨にぬれし佛の御手の上に紅葉ふき亂す《山おろし》の《風》

（二二九五・三二年）

明治三二年の作品の「風」に対する感覚表現は、視覚表現のみであり、明治三一年までの流れから見ると、視覚表現に収束したといえる。

### 明治三三年

明治三三年の「風」に対する感覚表現は**視覚表現**、**聴覚表現**、**触覚表現**、**複合感覚表現**（視覚＋聴覚・視覚＋触覚・視覚＋聴覚＋触覚）が見られる。

#### 視覚表現（二八首）

アリナシノ《風》カ過ギケン椎ノ葉ノ若葉三葉四葉動キテヌ

（一八四〇・三三年）

《風》フク闇ノイサリ火亂レツ、黒戸ノ沖ニ鯛釣ルヲ

(一八九一・三三年)

「晝寢の日面會の日と分ちけり」の紙吹き返す《秋の初風》

(拾遺三四四・三三年)

### 聴覚表現(二首)

ガラス戸ニ音スル夜ノ《風》荒レテ庭木ノ梢ユレサワグ見ユ

(一八四一・三三年)

川下る舟に乗る夜の《風》寒み萩の葉さやぎ月傾きぬ

(二七五三・三三年)

### 触覚表現(七首)

武藏野の《こからし》しぬぎ旅行きし昔の笠を部屋に掛けたり

(一三五一・三三年)

瓶にさす梅はちれゝど庭にある梅の木咲かず《風》寒みかも

(一四五六・三三年)

ウガヒスト夜ノ衣ヲ脱ギモアヘズ端居ノ《風》ノ秋チカヅキヌ

(一八七四・三三年)

### 嗅覚表現(一首)

黒石の炭やく煙《風》をいたみわろき香放ち我家に入る

(一七八五・三三年)

### 複合感覚表現 視覚＋聴覚(一首)

ガラス戸ニ音スル夜ノ《風》荒レテ庭木ノ梢ユレサワグ見ユ

(一八四一・三三年)

### 複合感覚表現 視覚＋触覚(四首)

まだ浅き春をこもりしガラス戸に寒き《風》の松を吹く見ゆ

(一五三二・三三年)

冬寒き《風》松か枝を吹くなへに木陰の菊は色あせにけり

(一九一五・三三年)

つゝみある身のさかしらに遠く来てそゞろに寒き藤の《下風》

(拾遺三一九・三三年)

**複合感覚表現 視覚＋嗅覚 (一首)**

黒石の炭やく煙《風》をいたみわろき香放ち我家に入る

(一七八五・三三年)

**複合感覚表現 視覚＋聴覚＋触覚 (一首)**

川下る舟に乗る夜の《風》寒み萩の葉さやぎ月傾きぬ

(一七五三・三三年)

明治三二年までの期間で視覚表現に収束したようであったが、明治三三年では再び聴覚表現と触覚表現が用いられている。しかし視覚表現に大きく偏っている。明治三三年までの作品では「風」が多く詠まれており、「風」に対する感覚表現は視覚表現が多く見られた。

**明治三四年**

「風」を詠んだ作品が見られない。また、明治三四年以降では「風」がほとんど詠まれなくなっている。

**明治三五年**

明治三五年の「風」に対する感覚表現は**触覚表現** (一首) のみが見られる。

年のはの《北風》さむみくれなゐの梅のつぼみのちひさきろかも

(拾遺四五七・三五年)

明治三五年では触覚表現のみが見られ、これまで多用されていた視覚表現がなくなっている。「風」に対する感覚表

現が触覚表現に収束したようであるが、例数が一例であるので、そのようには結論付け難い。また明治三十年以前からの流れを見ると、視覚表現に収束する傾向が強いといえるのではないか。

以下、「風」の感覚表現の特徴を記述する。

明治三四年以降に、視覚表現が詠まれなくなったことについて、「庭前即景」の歌風が確立し、実際に見ることのできる植物が限られたものとなったために、新しい趣向を作ることができなかったためでもあったのではないかと考えられる。また風の影響を受けない枕辺の植物が詠まれるようになり、「風」が植物と詠まれる機会が減ったことも影響しているのではないか。

明治三四以降に聴覚表現が用いられないことについて、後述の「雨」でも同様であったことから、明治三四年以降の子規が気象による音を歌材としなかった所に、子規短歌の表現法の特徴の一つがあるといえる。

「風」の触覚表現については、次の変化を見ることが出来る。

明治三十年以前の作品では、子規は「風」を涼しいものとする例が多かった。しかし、明治三一年になると、「風」を寒いものとする例の方が多くなり、三三年では「風」を涼しいものではなく、寒いものとして表現されるようになる。明治三五年には「風」を触覚で捉えた表現が詠まれた作品が一首見られるが、それも「風」の寒さが歌われている。

明治三四年、三五年は作られた短歌の数が少ないと言うこともあるが、明治三四年以降の子規にとって寒い対象である「風」は、歌に詠まれることが少なくなったと考えられる。以下例示する。



あへきつゝ行きかふ人をよそにみてこゝは涼しき《松の下風》

(一八三・二四年)

行きくれし眞葛が原の《風》寒み鶉啼くなり人も通はず

(五二六・三二年)

瓶にさす梅はちれゝど庭にある梅の木咲かず《風》寒みかも

(一四五六・三三年)

年のはの《北風》さむみくれなゐの梅のつぼみのちひさきろかも

(拾遺四五七・三五年)

### 三――二 「雨」の感覺表現

「雨」に対する感覺表現を詠んだ作品数は次の通りである。(一)内に「雨」を詠んだ全作品数を挙げる。

明治三十年以前……二六首(三八首)

明治三十一年……三九首(四五首)

明治三二年……十四首(十六首)

明治三三年……三二首(四二首)

明治三四年……十首(十一首)

明治三五年……なし

「雨」に対する感覺表現は次のように推移する。

明治三十年以前

明治三十年以前の「雨」に対する感覚表現は**視覚表現**、**聴覚表現**、**触覚表現**、**複合感覚表現**（視覚＋聴覚・視覚＋触覚）が見られる。

視覚表現（二六首）

《時雨》ふる冬としなれは木枯のふくとも見えす木の葉ちる也

（六二・十八年）

《五月雨》に四方のなかもなかりけり堤をゆるする隈田の川波

（拾遺三八・二二年）

鶯のねくらやぬれんくれ竹の根岸の里に《春雨》そふる

（二二二・二五年）

聴覚表現（一首）

夜をこめて窓うつ《雨》は心せよ夢にも花のうつろふと見ん

（二二一・二五年）

触覚表現（五首）

あふ坂の關路をやがてこえ行けば又袖ぬらす土山の《あめ》

（一六七・二四年）

かざしたる花のうつり香したゝりてすげのをがさにそぼつ《春雨》

（拾遺二〇六・二四年）

いかめしく身ごしらへした雨合羽《篠つく雨》は屁とも思はず

（拾遺二一八・二四年）

複合感覚表現 視覚＋聴覚（一首）

夜をこめて窓うつ《雨》は心せよ夢にも花のうつろふと見ん

（二二一・二五年）

「窓うつ」に「雨」の動き（視覚表現）と、「雨」の音が立つこと（聴覚表現）が表されているとした。

複合感覚表現 視覚＋触覚（五首）

ゑかくともかゝるけしきはゑのしまの《雨》にぬれにし衣そいとをし

（拾遺六五・二二年）

からかさに人目の關はへだつれとぬれても見たき《春の雨》かな

（拾遺一八七・二三三年）

あふ坂の關路をやがてこえ行けば又袖ぬらす土山の《あめ》

（一六七・二四年）

「あふ坂の」の「土山のあめ」は、「土山に降るあめ」であるとし、視覚表現と判断した。

明治三十年以前の作品の「雨」に対する感覚表現は、触覚表現が多く見られるも視覚表現に偏っているといえる。

明治三十一年

明治三十一年の「雨」に対する感覚表現は**視覚表現**、**触覚表現**が見られる。

視覚表現（三四首）

日は落ちぬ《雨》はふりいでぬ飯たきて妻待つらんぞ馬うちて行け

（四〇六・三二年）

美しき鳥飛び去つて暮れぬ日の《春雨》細し青柳の門

（五七〇・三二年）

西晴れて白帆むれ行海原の入日にそゞぐ《夕立の雨》

（七一三・三二年）

触覚表現（五首）

《雨》乾く薄紅梅の夕日影又照り返すカナリヤの籠

（四三三・三二年）

一むらの葉廣柏に風過ぎて《夕立》寒し白川の關

（七一〇・三二年）

照りつゞく土用の空の《雨》かれて雲の峰わく雲の峰の上

(七三四・三二年)

明治三一年では、明治三十年以前で見られた、聴覚表現や複合感覚表現が見られなくなっている。また視覚表現への偏りが大きくなっている。

## 明治三二年

明治三二年の「雨」に対する感覚表現は**視覚表現**、**聴覚表現**、**複合感覚表現**(視覚＋聴覚)が見られる。

### 視覚表現(十一首)

門並に柳植多たる家つゞき《春雨》細く燕飛ぶなり

(一〇四五・三二年)

目をさまし見れば二日の《雨》晴れてしめりし庭に日の照るうれし

(一〇九一・三二年)

夏の日の旅行く人の影たえて那須野の原に《夕立》のふる

(一一一九・三二年)

### 聴覚表現(四首)

《雨》になく庭の鶯そぼぬれて羽はたきあへず枝移りする

(一〇四一・三二年)

《むら雨》にぬれし佛の御手の上に紅葉ふき亂す山おろしの風

(一二九五・三二年)

夜を深み戀の遠道犬吠えて《時雨》からかさ袂ぬれけり

(一三二三・三二年)

### 複合感覚表現 視覚＋聴覚(二首)

目をさまし見れば二日の《雨》晴れてしめりし庭に日の照るうれし

(一〇九一・三二年)

明治三二年の作品の「雨」に対する感覚表現は視覚表現に偏っているが、明治三一年までの期間と比べると偏りは小さくなっている。

### 明治三三年

明治三三年の「雨」に対する感覚表現は**視覚表現**、**聴覚表現**、**触覚表現**、**複合感覚表現**（視覚＋聴覚・視覚＋触覚）が見られる。

#### 視覚表現（三二首）

櫻さく下道行けは《小雨》ふる花の雫の傘の上に落つ

（二五一六・三三年）

草枕旅路さふしくふる《雨》に葦咲く野を行きし時の蓑

（二五三〇・三三年）

古里の御寺見めぐる永き日の菜の花曇《雨》となりけり

（二七三六・三三年）

#### 聴覚表現（一首）

歌をよみにつどひし人の歸る夜半を花を催す《雨》瀧の如し

（二五八二・三三年）

#### 触覚表現（四首）

《さみたれ》にぬれてもうゝるさをとめの笠の雫のしげくしおもほゆ

（一三五五・三三年）

《春雨》のしのふか岡にぬれてさく櫻をいつる傘の上の花

（一五一〇・三三年）

《雨》もなき早の庭の焼土にこがれて立てる撫子の花

（拾遺三四八・三三年）

**複合感覚表現 視覚＋聴覚（一首）**

歌をよみにつどひし人の歸る夜半を花を催す《雨》瀧の如し

（一五八二・三三年）

「歌をよみに」の歌の「雨」は「瀧」のように勢いよく降り、「瀧」のように雨音がとどろいてしていると判断した。

**複合感覚表現 視覚＋触覚（四首）**

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに《春雨》のふる

（一六九六・三三年）

《さみたれ》にぬれてもうゝるさをとめの笠の雫のしげくしおもほゆ

（一三五五・三三年）

《春雨》のしのふか岡にぬれてさく櫻をいつる傘の上の花

（一五一〇・三三年）

明治三三年の作品の「雨」に対する感覚表現は、再び視覚表現に大きく偏るようになっていく。

**明治三四年**

明治三四年の「雨」に対する感覚表現は**視覚表現**、**触覚表現**、**複合感覚表現**（視覚＋触覚）が見られる。

**視覚表現（十首）**

春の日の《雨》しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

（拾遺三八〇・三四年）

《春雨》のけならべ降れば葉がくれに黄色乏しき山吹の花

（拾遺三八二・三四年）

《雨》そぐ庭のかたへに傘さして立てる牡丹は美人の如し

（拾遺四三七・三四年）

**触覚表現（一首）**

賤か家の貧しき庭に濡れて立つ《雨》の牡丹よ傘まゐらせん

(拾遺四三八・三四年)

**複合感覚表現 視覚＋触覚（一首）**

賤か家の貧しき庭に濡れて立つ《雨》の牡丹よ傘まゐらせん

(拾遺四三八・三四年)

右の「雨」は牡丹に降る雨であるので、「雨の牡丹」を視覚表現とする。

明治三四年の作品の「雨」に対する視覚表現は、明治三三年までの期間よりもより増加している。

**明治三五年**

明治三五年では「雨」を詠んだ作品は見られない。

このように、「雨」に対する感覚表現は、期間を下るに従い視覚表現は偏ってゆく傾向が見られる。しかし子規の世が「病牀六尺」となっても、硝子越しに庭に降る雨を視覚で捉えることができ、且つ「風」とは異なり「雨」単独で視覚で捉えることのできる「雨」が、明治三四年以降に詠まれることが少なくなったことには、次に示すように子規が「雨」に対して良い印象を持っていなかったことも影響していると考えられる。次に明治三五年の「病牀六尺」の記事の一部を二つ挙げる<sup>注6</sup>。

七十九

暑き日は暑きに苦しみ雨の日は雨に苦しみいたづらに長き日を書も讀までぼんやりとあればはては心もだえ息せ

まり手を動かし聲を放ち物ぐるはしきまになりぬるもよしなしや。

八十六

○このごろはモルヒネを飲んでから写生をやるのが何よりの楽しみとなっている。きょうは相変らずの雨天に頭がもやもやしてたまらん。（本文では右傍に○が打たれているが、印字上・とした）

同様に聴覚で雨を捉えることも可能である。しかし、聴覚によって「雨」が表現されている作品は、明治三四年以降には見られない。それは、「風」の場合を含めると、子規短歌の表現法の特徴であると考えられる。

三一―三 「雪」の感覚表現

「雪」に対する感覚表現を詠んだ作品数は次の通りである。（）内に「雪」を詠んだ全作品数を挙げる。

明治三十年以前…二五首（二七首）

明治三十一年 …十八首（十九首）

明治三十二年 …二首（二首）

明治三十三年 …十四首（十四首）

明治三十四年 …なし

明治三十五年 …一首（二首）



## 明治三十年以前

明治三十年以前の「雪」に対する感覚表現は**視覚表現のみ**（二五首）が見られる。

川すゝみ風ふくかたを打見れはふしのたかねに《雪》そのこれる

（拾遺四八・二二年）

きゆる間のなくてや《雪》のつもるらん日よりも高き富士の高ねは

（一七四・二四年）

大海原ふりさけ見れはふしのねの《雪》よりあくる日の本の空

（二六七・二六年）

明治三十年以前の作品の「雪」に対する感覚表現は、視覚表現のみである。

## 明治三十一年

明治三十一年の「雪」に対する感覚表現は**視覚表現、触覚表現**が見られる。

### 視覚表現（十七首）

北うけて《雪》また残る竹藪の藪陰寒し梅五六本

（五九六・三二年）

旅人の往來も絶えて又六が門の杉葉に《吹雪》散るなり

（七七七・三二年）

繪を掛けて夏を靜かに觀ずれば風冬の如く《雪》壁に満つ

（九七六・三二年）

### 触覚表現（一首）

遼東の《雪》踏む夢や覺めつらん月に嘶く聲のかなしき

（八〇五・三二年）

明治三十一年の作品の「雪」に対する感覚表現に触覚表現が一首見られるが、視覚表現の使用に大きく偏っている。

明治三十一年に触覚表現が用いられたのは、子規自身の唱えた歌材の拡大の実践の影響の可能性もあるが、例が一首であることと、明治三十二年以降に全く使用されていないことから、判断することはできない。

## 明治三十二年

明治三十二年の「雪」に対する感覚表現は**視覚表現のみ**（二首）が見られる。

春風に立ちいでゝ見れば上野や黒髪山に《雪》残る見ゆ（一〇三九・三二年）

國境わが越え來れば八重山の頂の峰に《雪》そ残れる（一〇四〇・三二年）

明治三十二年の作品の「雪」に対する感覚表現は、再び視覚表現のみとなっている。

## 明治三十三年

明治三十三年の「雪」に対する感覚表現は**視覚表現、聴覚表現、複合感覚表現**（視覚＋聴覚）が見られる。

### 視覚表現（十四首）

鏡なすガラス張窓影透きて上野の森に《雪》つもる見ゆ（一三七七・三三年）

《雪》見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて《雪》見えずけり（一四二二・三三年）

山川を埋めてふれる《雪》の中に咲ける牡丹の花只一つ（一五三九・三三年）

### 聴覚表現（一首）

朝日さす森の下道我が行けばほつ枝下枝の《雪》落つる音

(一四三二・三三年)

### 複合感覚表現 視覚＋聴覚(一首)

朝日さす森の下道我が行けばほつ枝下枝の《雪》落つる音

(一四三二・三三年)

「朝日さす」の歌の「落つる」が「雪」の動きを表し、「音」が「雪」の立てる音を表しているとする。

明治三年の作品の「雪」に対する感覚表現に、聴覚表現が一首見られるが、視覚表現に使用が偏っているといえる。また、「雪」に対する聴覚表現が、明治三四年以降使用されなかったのは、「風」や「雨」と同様に、気象による音を詠まないことが明治三四年以降の子規短歌の特徴の一つだとも考えられる。しかし、明治三三年までに詠まれた聴覚表現が一首であることから、子規短歌の特徴がここに現れたとは判断しがたい。

### 明治三四年

明治三四年に「雪」を詠んだ例は見られない。

### 明治三五年

明治三五年の「雪」に対する感覚表現は**視覚表現のみ**(一首)が見られる。

わか庭にさく梅の花《雪》なから折りてかさゝん人もあらなくに

(拾遺四五三・三五年)

「雪なから」より雪が積もったままと判断でき、「雪なから」を視覚表現とする。

「雪」を捉えることのできると考えられる感覚は、視覚と聴覚、触覚である。しかし、子規短歌に用いられた「雪」に対する感覚表現のほぼすべてが視覚表現であり、わずかに聴覚表現と触覚表現が一首ずつ見られた。各期間通して視覚表現に偏っている結果であった。

明治三三年まではまとまった作品数が見られるが、それ以降は作品数が大きく減少するという点では、「風」と「雨」の場合と共通している。「雪」と「風」、「雨」で共通していることは、寒さをもたらすということである。

「風」は前述したとおり、期間が下ってゆくに従い「風」の「涼しさ」から「寒さ」を詠む傾向が強くなり、「風」の「寒さ」が詠まれるようになった明治三四年、三五年の二年間では、「風」を詠んだ作品数が少なくなっている。

また、「雨」は「雪」や「風」と比べ作品数の減少の幅は小さいが、明治三四年に詠まれた「雨」は、時雨などではなく、「柔らかく暖かい印象を与える」<sup>注14</sup>春の雨である。（明治三五年には「雨」を詠んだ短歌がない。）

気象による「寒さ」が歌材になりにくいという点は、明治三四年、三五年の子規短歌の特徴の一つであると考えられる。

### 三――四 「雲」の感覚表現

「雲」に対する感覚表現を詠んだ作品数は次の通りである。（ ）内に「雲」を詠んだ全作品数を挙げる。

明治三十年以前：十八首（二十首）

明治三一年 ……二二首（二五首）

明治三二年	…	一首	(一首)
明治三三年	…	五首	(八首)
明治三四年	…	なし	
明治三五年	…	なし	

明治三四、三五年を除く、**全ての期間**において「雲」に対する感覚表現は、**視覚表現のみ**である。

御佛のいとも尊とし紅の《雲》か櫻の花のうてなか  
(二七四・二七年)

丈六の佛の御手のたなそこに《雲》立のほる五月雨の空  
(二八九・二七年)

榛の木に烏芽を噛む頃なれや《雲》山を出でゝ人烟をうつ  
(四五三・三一年)

煩惱の心を掩ふ《雲間》より眞如の月はあらはれにけり  
(七八六・三一年)

八百萬千萬神のいでたゝす《雲》の旅路はにぎはしきかも  
(二一九・三二年)

岡の上に天凌き立つ御佛の御肩にかゝる《花の白雲》  
(二六四五・三三年)

《白雲》ノ深クコモレルニ荒ノ山ヨリ落ツル七十二瀧  
(二八三四・三三年)

我手形紙ニオシツケ見テアレド《雲》モ起ラズタゞ人ニシテ  
(二八九六・三三年)

右の例より、実際の「雲」を詠む例の他に、「御佛の」と「煩惱の」、「百萬の」、「我手形」の歌のように現実の気象ではない実在しない「雲」を詠む例が見られる。また「白雲ノ」の歌のように、記憶上のものと考えられる「雲」が

詠まれる例も見られる。一方で次の二首のように、病床から見た「雲」を詠む例も見られる。

仰むけに竹の簀の子に打臥して背ひや／＼と《雲》の行くを見る

(八四八・三二年)

ガラス戸ノ外ハ月アカシ森ノ上ニ《白雲》長クタナビケル見ユ

(二七九〇・三三年)

しかし明治三二年以降、このような囑目による「雲」も含め、「雲」を詠んだ作品数が大きく減少している。その理由として次のことが考えられる。

地表で認識できる「風」や「雨」と「雪」とは異なり、「雲」は空にあるものであるため、視線を上によびないと見ることのできないもの、室内で寝た状態では観察しづらいものであると考えられる。よって病状が悪化し外出の機会が減った明治三二年以降に、「雲」を見て作品に詠むことが難しかったのではないだろうか。

また、「雲」が明治三四年以降詠まれていないのは、明治三四年に目を遮ぎるような位置にへちま棚が設置されたためではないだろうか。糸瓜棚によって仰向けの姿勢から認識できる空への視界が狭まったために、「雲」を詠むことがなくなったのではないだろうか。

### 三―一―五 気象の感覚表現について

気象の感覚表現について、次のことが明らかになった。

視線が地表近くであつても認識することができる、「風」と「雨」、「雪」は明治三四年以降も視覚表現が使用されている。視線を上にする必要のある「雲」は、病状が悪化した明治三二年から詠まれることが少なくなっている。

気象の感覚表現では、概して視覚表現に偏っていた。聴覚表現や触覚表現、嗅覚表現の例を見ることができたが、明治三四年以降は視覚表現に収束していく傾向である。

聴覚で捉えることのできる気象は、「雨」、「風」、「雪」であるが、「雨」と「風」は明治三四年以降に聴覚表現が使用されなくなる。聴覚表現が子規短歌で使用されなくなる傾向は、次の喜田重行氏の指摘<sup>注7</sup>と異なる結果である。次の引用の傍線は私に附したものである。

二十三年の子規に、「目の役を耳にゆづるや揚雲雀」という句がある。…だがこの句、否応なしにやがて訪れる目と耳の生理的・物理的拘束状況を不思議なくらい暗示しているのだ。目も耳も病床に固定され、ときに耳が目の役割をしなければならぬという特異な状況の中で、子規晩年の表現世界がひらかれていくことにあらためて思いいたるのである。たとえば、「いくたびも雪の深さを尋ねけり」（29年）という有名な句。枕べの目のとどこかぬところで雪のふりつもってゆく気配を全身で感じているのだが、気配はまず耳に伝わってきた筈である。それを平明な語法のうちに詠みあげたところに、以後死ぬまで子規固有のものとなる枕頭の目と耳の、表現上の位置が確立しているのを読みとることができる。総身を耳にしてそば立てるような緊張と感動は、その後しだいに深まっていく。それは床上の眼の「写生」に先駆しているかのようにであった。…目を床上わずか寸余の高さに拘束されている子規にあつて、耳はときに目以上の事実をとらえている。

このように、病床の子規にとって聴覚は重要な役割をもっており、実際気象以外の音声は明治三四年以降の短歌に詠まれている。作品例を抄出する。

我病みていの寝らえぬに《ほとゝぎす》鳴きて過ぎぬか聲遠くとも

(拾遺四二四・三四年)

わか病める枕邊近く咲く梅に《鶯》な<sup>な</sup>かばうれしけむかも

(拾遺四六〇・三五年)

それにもかかわらず、気象に対する聴覚表現が明治三四年以降にほとんど使用されなくなっている。それは子規短歌の特徴の一つと考える、気象の「寒さ」が歌材になりづらいことが影響していると考ええる。

「風」と「雨」の音は、明治三四年以降の子規にとって「涼しさ」よりも「寒さ」など荒涼感を感じさせることが多かったのではないだろうか。明治三年の「風」と「雨」の聴覚表現を次に挙げる。

川下る舟に乗る夜の《風》寒み荻の葉さやぎ月傾きぬ

(一七五三・三三年)

ガラス戸ニ音スル夜ノ《風》荒レテ庭木ノ梢ユレサワグ見ユ

(一八四一・三三年)

歌をよみにつどひし人の歸る夜半を花を催す《雨》瀧の如し

(一五八二・三三年)

聴覚表現も明治三四年以降での使用は「風」と「雨」に一首ずつ見られるのみであった。聴覚表現と同様に、子規にとって「風」と「雪」が「寒さ」の対象となり、歌材になりづらかったという特徴が見られる結果となっている。

喜田重行氏の指摘するように、子規にとって「写生」の際に聴覚が重要な役割をもっていたが、短歌に気象を詠み込む際には聴覚表現は多用されていない。

## 第二項 天体の感覚表現

天体語彙の使用状況を、気象語彙と同様に五感による感覚表現の点から調査する。天体は気象よりも室内から現象



を捉えづらいものである。そこで子規の行動範囲や視覚範囲の狭まりを視点に検証する。そのため、天体語彙の感覚表現では、次の子規の病歴に基づいて調査を行う。

子規の行動範囲の狭まりについて、明治三五年五月二六日の「病牀六尺」に自身による記述がある<sup>注8</sup>。

○病に寝てより既に六七年、車に載せられて一年に兩三度出ることも一昨年以來全く出来なくなりて、ずん／＼と變つて東京の有様は僅かに新聞で讀み、來る人に聞くばかりのことで、何を見たいと思ふても最早我が力に及ばなくなつた。：

また明治三五年では「病牀六尺、これが我世界である。」<sup>注9</sup>と表現されるほどに、子規の行動範囲は狭まっている。子規の視覚範囲の狭まりについて、明治三二年十二月に子規の寝ている部屋の南側にガラス窓が設置され、窓を開けることなく室内から庭を見ることが出来るようになるも、三四年に子規が臥せていた部屋の縁側近くに、糸瓜棚が設置された。その為、それ以降室内から外への子規の視界は、上方の一部が糸瓜棚や糸瓜に遮られるようになったと考えられる。

子規の行動と視覚範囲の狭まりとの対応を見るため、子規の病歴によって明治三五年までの期間を区切る。子規の病歴については、次の文献を参考にする。

『松山市立子規記念博物館総合案内』

(松山市立子規記念博物館編集 松山市立子規記念博物館友の会 二〇〇五年十一月)

『正岡子規の研究下』

(松井利彦 明治書院 一九七六年六月)

子規の病歴を独自に次の四期に分類する。

一期 一八六七～一八八七年（慶応三年～明治二十年） 子規～二十歳

この期間は喀血前の期間である。

二期 一八八八～一八九四年（明治二一～二七年） 子規二一～二七歳

明治二一年八月の鎌倉旅行の途中で初めて喀血し、翌年五月は喀血が一週間続くが、子規が旅行することができた期間でもある。

三期 一八九五～一八九九年（明治二八～三二年） 子規二八～三二歳

明治二八年の金州従軍後、神戸病院への入院、須磨療養所での療養がある。療養後は松山に帰省する。松山から広島、須磨、大阪、奈良を巡り東京へ戻ったのが、子規の最後の旅行となる。明治二九年三月に脊椎カリエスのための手術を受け、以降も数回施される。腰痛の激しさや病状の篤さに苦しむことがあるが、人力車で上野や神田、板橋、赤羽など自宅近辺への外出はできた期間である。

四期 一九〇〇～一九〇二年（明治三三～三五年） 子規三三～三五歳

人力車での外出ができなくなり、また庭に下りることもままならない期間である。最後の外出と考えられるのは明治三三年六月三日の麓宅の園遊歌会への出席である。明治三五年九月十九日深夜に永眠する。

### 三―二―「日」の感覚表現

子規短歌に詠まれている日（太陽）の感覚表現は**視覚表現**のみである。病歴によって分けた四期間の各例数は次の通りである。なお「日」や「入日」など太陽を表す天体語彙自体も「光影」を表す視覚表現としている。

一期…作品例なし

二期…二首

三期…十八首

四期…一首

右の結果より、天体としての太陽を詠むことは、三期が突出して多いといえる。三期（明治二八―三一年）の短歌の作品数は一一―三首であり、他の期間（一期…一五四首、二期…三六八首、四期…七九七首）よりも作品数が多いことが影響していると考えられるが、次のことも考えられる。

三期の間には、子規が短歌革新を唱えた明治三一年が含まれている。明治三一年の太陽を表す天体語彙を詠んだ作品は十四首である。明治三一年の短歌革新の主張の一つに、趣向を多様なものにするために題材を拡大することが挙げられている。

二期に詠まれている太陽を表す天体語彙は「日」「朝日」「入日」であるが、三期では「日」「朝日」に加え「夕日」「春日」も詠まれている。「夕日」は明治三二年から見られる語であり、太陽光を表す語彙を含めても夕日や夕日の光（夕映え）「夕日影」は明治三一年から複数使用されている。

明治三十一年に天体としての太陽が多く詠まれたのには、天体としての太陽の詠み方が豊かになったことが考えられる。天体としての太陽の詠み方の変化を具体的に見てゆく。次に明治三十一年の作品例を三首挙げる。

飼ひおきし籠の雀を放ちやれば連翹散りて《日》落ちんとす

(三六七・三二年)

菜の花に《日》は傾きて夕雲雀しきりに落る市川の里

(五〇三・三二年)

雲雀鳴く空に星消え月落ちて一筋赤く《日》上らんとす

(五七九・三二年)

明治三十一年の作品では、「(日) 上ら(んとす)」といった上昇の動きだけでなく、「(日) 落ち(んとす)」「(日は) 傾き(て)」といった太陽が沈む動きも表現されている。

次の明治三十年以前の作品での太陽の動きは、「(朝日) さしのぼる」「(旭) のぼる(かた)」といった、上昇の動きが表されている。次に明治三十年以前の太陽を表す天体語彙を詠んだ作品全てを挙げる。

きゆる間のなくてや雪のつもるらん《日》よりも高き富士の高ねは

(一七四・二四年)

いつはあれといつこはあれと日の本の春はつくばゆ《朝日》さしのぼる

(二〇九・二五年)

朝霧のおほに見えたるふじのねの《旭》のぼるかたゆ晴渡るらん

(三一・二八年)

《朝日》うつるこがねの波にむれ遊ぶ龜かと見えて八洲浮ぶなり

(拾遺二三四・二八年)

先行研究で指摘されている通り、子規は自らの理論の実践を行っている。左に今西幹一氏の指摘を挙げる<sup>注10</sup>。

…理論の上に実践を重ねて、実作と相俟って理論を開陳して、子規による和歌の活性、或いは蘇生への試みは果されようとした。明治三十一年の上半期である。…

この理論に対する実践が、太陽を表す天体語彙の短歌への使用に現れているといえる。

明治三十一年の短歌革新に唱えた理論の実践によって、三期の太陽を表す天体語彙が比較的多く詠まれるようになったが、四期では次の一首のみとなっている。

うつせみのひつきを送る人絶えて谷中の森に《日》は傾きぬ

(一三七八・三三年)

また明治三十四年以降には太陽を表す天体語彙は詠まれていない。明治三四、三五年の太陽を表す語彙を詠んだ作品は三首見られるが、何れも太陽光を表している。太陽光は地表で認識できるものである。

下蔭ノ草花惜ミ《日》ヲ蔽フ松ガ枝伐ラン家主怒ルトモ

(拾遺四四二・三四年)

我庭ノ三モト松伐リアハレ深キ草ノ花ニ《日》ノ照ルヲ見ン

(拾遺四四三・三四年)

春されば梅の花咲く《日》にうとき我枕への梅も花咲く

(拾遺四六七・三五年)

「下蔭ノ」の歌の「日」は、松の枝によって遮られることで松の根元は陰になっていることから、太陽光を表していると考えられる。「我庭ノ」の歌の「日」は照っているものであるから、太陽光を表していると判断できる。「春されば」の歌では、「日にうとき」とあることから、室内である子規の枕辺に十分な光が入っていないと考えられ、「日」は太陽光を表しているといえる。

明治三四年以降の短歌では太陽を表す天体語彙が詠まなくなっている。その理由を次のように考える。

明治三十年以前では太陽の上昇の動きが詠まれ、三十一年で新たに太陽の下降の動きが詠まれているが、四期では太陽の動きが詠まなくなっている。太陽の動きの描写は「時間を含みたる趣向」であると考えられる。子規は短歌の

特徴として、明治三二年に次の考えを述べている<sup>注11</sup>。

○歌は全く空間的の趣向を詠まんよりは少しく時間を含みたる趣向を詠むに適せるが如し

田子の浦ゆうち出でゝ見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける（赤人）

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ（實朝）

これ等は明かに時間を含みたる者なり。

わかの浦に潮満ちくれば渚をなみ蘆邊をさしてたづ鳴きわたる（赤人）

大海の磯もとゞろによる波のわれてくだけて裂けて散るかも（實朝）

此の二首は前の二首の如く長き時間を含まねど、潮満ちくるといふにも多少の時間あり、鳴きわたるといふにも飛びつゝある間だけの時間あり、われて碎けて裂けて散るといふも波の働きを時間的順序に現はしたるなり。

右の子規の主張によれば、太陽の動きの描写が、明治三四年以降の子規の短歌に対する考えに反するものではないはずである。それが四期では一首のみとなっているのは、太陽の動きによって時間を表現する方法が、外出がほぼ不可能となった期間の作品にそぐわなかった為ではないだろうか。太陽の動きの表現は日記よりも紀行文に多く見ることが出来る。

### 三―二―二 紀行文・日記に見られる「日」

次に子規の行動や生活に即していると考えた紀行文と日記<sup>注12</sup>に見られる、「夕日も傾く」<sup>注13</sup>のような、天体として

の太陽を表す語と太陽の動きを表す語が一緒に表現されている例の出現数をまとめる。( )内は天体としての太陽を表す語彙の出現数である。

紀行文【二期】…八例(二六例)、紀行文【三期】…三例(五例)、

日記【二期】…〇例(一例)、日記【三期】…〇例(七例)、日記【四期】…〇例(五例)

太陽を表す語彙と太陽の動きを表す語彙が一緒に表現されている例の数は多くないが、太陽の動きで時間を表現する方法は、旅先や外出先の記録である紀行文に多く使用される傾向があるといえる。日々の生活の記録である日記には、太陽の動きによる時間の表現は見られない。夕方を表す例として、紀行文と日記の例を一例ずつ挙げる。傍線は私に附した。

紀行文の例「四月大盡(草稿)」注14

…夕日傾く頃に大磯につきぬ…

日記の例「瀬祭書屋日記」(十月八日の記事)注15

微雨時至、潮聲搖家。薄暮携犬至海濱小亭觀波。

一ツづゝ波音ふくる夜長哉寒

紀行文や日記といった旅先をはじめとした外出先の記録に多いといえる、太陽の動きによる時間の表現が、四期の短歌作品に少なくなつたのは、四期の子規の生活が外出のほぼ不可能であつた状態であつたことに影響しているのではないか。

また、子規が天体としての太陽を詠んだ短歌作品で、場所が作品内で提示されているものは十五首で見られる。

その中で子規の家の外を表すものは、地名では「谷中（の森）」「市川の里」「筑波」「富士（の嶺）」「富士（の高嶺）」「長安」、地形では「海原」「森」「桑の林」である。二期と三期の作品には「市川の里」や「筑波」、「富士」「長安」「海原」といった根岸から遠い地域が見られるが、四期は「谷中の森」と子規に身近な場所が詠まれている。四期では、外出の機会がほとんど無くなった為に特定の場所にある太陽を詠む機会が減少したのではないか。

以上の二点より、明治三十一年（三期）に天体としての太陽を詠むことが増えたが、四期に太陽を詠み込むことが大きく減少したところに、子規の行動範囲の狭まりの影響が見られると考えられる。太陽の使用については、糸瓜棚設置による空への視界の狭まりの影響は殆どないと考ええる。糸瓜棚に遮られる高さにある太陽（高度の高い位置にある太陽）を直視することは、ほとんど不可能であると考えられるためである。

### 三―二―三 月の感覚表現

子規短歌に詠まれている月を表す天体語彙の感覚表現には、視覚表現と触覚表現が見られる。触覚表現の例は全て視覚表現との複合感覚表現となっている。

月の視覚表現の各期間の例数は次の通りである。なお「月」や「有明の月」など月を表す天体語彙自体が「光影」を表す視覚表現である。よって視覚表現の各期間の作品数が、月を表す天体語彙を詠んだ作品数に相当する。

視覚表現



一期…十首 二期…二四首 三期…五二首 四期…二〇首

#### 触覚表現

一期…一首 二期…一首 三期…二首 四期…なし

月を表す天体語彙を詠んだ作品数は一期から三期にかけて増加しているが、各期間の全短歌の作品数（一期…一五四首、二期…三六八首、三期…一一一三首、四期…七九七首）に対する割合は次の通りである。左に挙げた各期間の、月を表す天体語彙の使用された作品数の割合を見ると、一期から四期にかけて減少していることが分かる。特に四期の作品では、月を表す天体語彙の短歌への使用が特に少ないことが分かる。

一期…6.5% 二期…6.5% 三期…4.7% 四期…2.5%

太陽の場合は明治三一年（三期）に、短歌の題材の拡大に伴う作品数の増加が見られる。しかし月の場合には、作品数は増加しているものの、天体としての月を詠む傾向は小さくなっている。そこで、明治三一年における題材の拡大の有無について見てゆく。

#### 明治三十年以前

天体としての月を表している語彙は次の通りである。（ ）内は作品数である。

月（36）・有明の月（5）・二十日の月（2）・朧月（1）・春の月（1）・秋の夜の月（1）・月の面（1）

なお、「月宿る」（一首に使用）は「月」を用いた熟語であるので、「月」の作品数に入れている。

## 明治三一年

天体としての月を表している語彙は次の通りである。

月(22)・春の夜の月(3)・三日月(1)・夕月(1)・真如の月(1)・水海の月(1)・月の面(1)・月の都(1)

明治三十年以前と三一年の語彙を比較すると、「月」という語を多用する点が共通している。また「有明の月」が明治三十年以前ではやや多く見られるが、三一年では使用されなくなり、三二年以降の作品にも見られない。

最も天体としての月を詠む傾向が小さい**四期**の作品の場合は、次の通りである。

月(16)・薄月(1)・三日月(1)・春の夜の月(1)・月人男(1)

明治三十年以前と三一年と比べ、天体としての月を表す語の異なり語数にも大きな変化は現れず、また「月」という語を多用する点も共通している。

使用する語彙の種類の多さ(少なさ)によって、天体としての月を多く詠む傾向が強く(弱く)なるという関係は見られないといえる。また語彙の種類において、明治三二年の短歌革新の際に題材の拡大として、短歌に詠み込む月の種類を増やしたとも考え難い結果である。また、「有明の月」が明治三十年以前に比較的多く使用される語であったのが、三一年以降の作品に見られなくなっている。

このような明治三十年以前では比較的多く使用されている語彙が、三一年を境にほとんど使用されなくなる例は、他にもいくつか見ることができる。例えば「卯の花」は明治三十年以前に六首詠まれていたが三一年以降詠まれず、「戀」

は明治三十年以前で十一首詠まれていたが三一年以降は三一年の一首のみであるという例がある。

### 三―二―四 「月」の視覚表現

語彙の点では、明治三十年以前と三一年の間に題材の拡大を見ることが出来なかった。また、太陽と同様の天体の動きの表現の点での、題材の拡大も見ることが出来ない。

明治三十年以前の月の動きは、次の例のような上昇、下降、停止、残留が見られる。動きを表す箇所には傍線を附す。

庭もせの草木の影も短くてはや中空にのほる《月》かな  
(五七・十八年)

漁火の數そふ見れば須磨の浦やうしろの山に《月》落ちけらし  
(三一〇・二八年)

《月》やとる《川邊に夏はなかりけり月やすゝしき水やすゝしき  
(一八七・二四年)

君來ぬと見し手枕のゆめさめて櫻に残る《有明の月》  
(二七九・二七年)

明治三一年では、上昇と下降、横(の動きが見られる。横の動きは明治三一年に初めて見られるが、例数は一首のみであり、三二年以降にも例を見ることが出来ない)ので、題材の拡大とは判断しがたい。

後夜の鐘三笠の山に《月》出てゝ南大門前雄鹿群れて行く  
(三五二・三一年)

時鳥鳴く山の端に《月》落ちて塔ほの見ゆる明方の杜  
(六五三・三一年)

おも楫の船は南に進むらん《月》は左になりにつけるかな  
(三七五・三一年)

明治三二年では上昇の動きのみであり、三三年は上昇と下降の動きが見られる。

荒磯邊の假屋の闇に涼み居れば大きなる《月》海より出でけり

(一一五四・三二年)

紅ノ花ミテル野ニ《月》出デ、神ノ子ガ吹ククダノ音聞ユ

(一八六〇・三三年)

川下る舟に乗る夜の風寒み荻の葉さやぎ《月》傾きぬ

(一七五三・三三年)

明治三四年以降は天体としての月を詠んだ作品例が見られない。明治三四年以降に月が詠まれた作品は次の一首が見られる。次の歌の「月」はガラス戸に照っているので、天体としての月ではなく、月光を表していると判断する。

ガラス戸におし照る《月》の清き夜は待たずしもあらず山ほとゝぎす

(拾遺四二三・三四年)

明治三一年以降に、月の動きの描写の面での題材の拡大がほとんど見られないことについて、明治三一年(三期)の子規にとつての月は、動きによって時間の推移を表現する題材ではなかったためではないかと考える。

### 三―二―六 紀行文・日記の「月」

太陽の場合と同様に紀行文と日記において、天体としての月を表す語彙と月の動きを表す語彙が一緒に表現されている例の出現数を次に挙げる。調査資料は太陽の項目でのものと同じであり、( )内は天体としての月を表す語彙の出現数である。

紀行文【二期】…一一例(九〇例)、紀行文【三期】…二例(七例)、

日記【二期】…五例(二五例)、日記【三期】…〇例(二三例)、日記【四期】…〇例(十七例)

明治三一年を含む三期には、月の動きを表す表現は次の例<sup>注16</sup>のみである。動きを表す箇所は傍線を私に附す。

…車をかへせば今戸のともし火近くつらなりて今しも入<sup>レ</sup>りなんとする三日月のいと大きなるが駒形堂に掛<sup>レ</sup>れる、  
動きの表現のない天体としての月の表現は、次のような景物の一つとしての表現となるのではないか。紀行文と日記  
の月の動きを表していない月の表現の例を一例ずつ挙げる。該当箇所は傍線を私に附す。

紀行文の例「はて知らずの記」<sup>注17</sup>（明治二六年八月十九日「日本」発表）

…涼風萬斛夏を忘るゝの頃明月一輪秋正に半なるの時兩公の幽魂手を握つて此處に遊觀彷徨するや必せり。

日記の例「瀨祭書屋日記」<sup>注18</sup>（十月六日の記事）

登小邱。伐木爲杖。月已在海上。

十六夜や出て後何の事もなし

明治三二年では、「歌は全く空間的の趣向を詠まんよりは少しく時間を含みたる趣向を詠むに適せる」と、子規は短歌  
に対して考えていたが、前年では次のように考えている<sup>注19</sup>。

…歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりと謂ふて何の故障も見ず歌と俳句とは只詩形を異にするのみ。

俳句に対しては、明治三二年に次の考えを述べている<sup>注20</sup>。

○俳句にては全く空間的なる趣向を詠むに易く、時間を詠むに適せず。…

子規の短歌の月の動きが表現されている作品数は次の通りである。（一）内は天体としての月を表す語彙が使用された  
作品数である。

一期 …二首 (十首)

二期 …十三首 (二四首)

三期 …十一首 (五二首)

四期 …六首 (二〇首)

三期の天体としての月を詠んだ短歌では、月の動きが表現される傾向が弱くなっている。これは「歌は俳句の長さ者」と考え、短歌に「空間的な趣向」を詠み込もうとした結果ではないだろうか。

四期では月の動きが表現される傾向が強まっているが、天体としての月を詠んだ作品数が少なくなっている。これは明治三二年(三期の終り)に「歌は全く空間的な趣向を詠まんよりは少しく時間を含みたる趣向を詠むに適せる」と短歌に対する考えが変わったことで、短歌では月の動きを詠む傾向が強まったと考える。しかし紀行文と日記に見られるように、月を景物の一つとして表現するようになったことが、三期と四期の子規の短歌においての月の表現方法にも影響を与えたのではないだろうか。月に対する表現方法と短歌に対する考え方が不一致となったために、四期の天体としての月を詠んだ作品数が大きく減少したのではないだろうか。

また、糸瓜棚の設置による空への視界の狭まりの影響について、四期に天体としての月を詠んだ短歌作品の減少に、ほとんど影響はなかったのではないかと考える。一つに、糸瓜棚の状態から糸瓜棚越しにでも月を観ることは可能であると考えられる。実際九月二十一日の「仰臥漫録」に次の記述がある<sup>注21</sup>。

…九日ノ月絲瓜棚ニアリ

四期の天体としての月を詠んだ作品数は、三期と比べ大きく減少しているが、太陽と比べ比較的多くの用例が見られる。その理由として次のことが考えられる。

一つには子規は太陽よりも月の方に興味があつたと考えられる。短歌としての作品だけでなく、旅先や生活の記録である紀行文や日記でも、天体としての月を記述している例の出現数の方が多い。

二つに、四期の月を表す天体語彙を詠んだ作品は、歌の舞台が家から離れた場所となっている例が多く見られることが挙げられる。次の例は家から遠い場所が詠まれた歌の例の一部である。

加茂川ノ大ソリ橋ノ橋玉ニ《三日月》落チテ牛若アラズ

(一八七八・三三年)

豎川ノ茅場ノ庵ニ君着カバ二十日ノ《月》イ野ヲ出デヌラム

(拾遺二九三・三三年)

「加茂川」や「豎川」「野」といった、根岸から離れた土地や子規庵から見えない自然物が詠まれている作品は、四期では九首見られる。月を表す天体語彙と具体的な場所を表す語彙が一緒に詠まれている、四期の作品は十二首見られることから、子規にとって身近にない場所を詠んだ作品は多いといえる。

なお、前年の明治三二年の作品にも、次の二首のように回想や想像で詠まれた例は多く見られる。

荒磯邊の假屋の闇に涼み居れば大きな《月》海より出でけり

(一三一七・三二年)

晝のごと四條河原を照しつるともし火消えぬ《月》空にあり

(拾遺二六四・三二年)

三期と四期の境となっている明治三二、三三年の作品では、根岸から離れた土地や子規庵から見えない自然物が詠まれる例が多く見られる。そのため、三期と四期は、太陽の場合よりも月を詠んだ作品が多く見られたと考えられる。

家の中や縁側から月を観ている状況が複数詠まれていることも、明治三二、三三年の特徴である。次に例を挙げる。

遠方に花火の音の聞ゆなり端居に更くる夏の夜の《月》

(一一四九・三二年)

ガラス戸ノ外ニ据エタル鳥籠ノブリキノ屋根ニ《月》映ル見ユ

(二七八九・三三年)

明治三一年までの間では、このような例は次の一首のみである。

庭もせの草木の影も短くてはや中空にのほる《月》かな

(五七・十八年)

明治三二、三三年に、家や室内から月を鑑賞する作品が比較的多く見られるようになったのには、子規の行動範囲の狭まりの影響が見られるといえる。しかし明治三三年までに家から観た月について、様々な趣向で作歌した為、三年以降に新しい趣向で詠むことが難しくなったのではないか。明治三二年と三三年の例を挙げる。

《月》ひとり端居し居ればたまさかに一聲蟬の枝移りする

(一一八五・三二年)

《望月》のたれる面わの絹團扇君に贈らくは螢うてとぞ

(一一九〇・三二年)

銀泥のさびてかがやく《三日月》の古画の下に菊只二輪

(一二〇五・三二年)

ガラス戸ノ外ニ据エタル鳥籠ノブリキノ屋根ニ《月》映ル見ユ

(二七八九・三三年)

夜ノ床ニ寐ナガラ見ユルガラス戸ノ外アキラカニ《月》フケワタル

(二七九二・三三年)

小庇ニカクレテ《月》ノ見エザルヲ一目ヲ見ントキザレド見エズ

(二七九三・三三年)

照ル《月》ノ位置カハリケム鳥籠ノ屋根ニ映リシ影ナクナリヌ

(二七九五・三三年)

一人で月を鑑賞していることや、形を表すのに月を用いること、絵画の月を詠むこと、屋根に映った月を詠んだもの、



室内から月を見ること、見えない月を詠むこと、月の動きによって時間の流れを詠むことのように、様々な月が詠まれている。

このように、明治三四年以降に家から見た月を新しい趣向で詠むことは難しかったと考えられるが、子規にとって月は回想や想像で詠みやすい題材でもあったと考えられる。回想や想像でも月を詠むことが少なくなったのには、前述の通り月に対する表現方法と短歌に対する考え方の不一致があったためでないか。

### 三―二―七 「月」の触覚表現

月の触覚表現について、子規の短歌では月を「涼し」という語で表現している。「涼し」には「ほどよく冷やかである」「つめたい」等のほかに、「物のさまがさわやかである」、「言葉や動作がはつきりしていてすがすがしい」、「心がさわやかである」、「目もとがはつきりしている」、「いさぎよい」、「潔白である」、「厳然としている」、「興のないさま」といった意味もある<sup>注22</sup>。様々な意味を持つ「涼し」を「ほどよく冷やかである」又は「つめたい」の意味で捉え触覚表現としたのは、次の理由からである。月の触覚表現が見られるとした作品を挙げる。

ましてしはし小舟さをさすわたしもり涼しき《月》の影やくたかむ (五・十七年)

月やとる川邊に夏はなかりけり《月》やすゝしき水やすゝしき (一八七・二十四年)

夏の夜の《月》をすゞしみひとり居る裸に露の置く思ひあり (一一五〇・三二年)

信濃路や人の到らぬ山の上にひとり涼しき《月》を見るかな (一一五二・三二年)

「まてしはし」の歌には「河夏月」と題が付され、「月やどる」の歌には「水邊夏月」が付けられている。「夏の夜の」と「信濃路や」の歌は「夏月」と題の付された作品群八首の中の二首である。題より四首に詠まれている月が夏の月であることが分かる。夏の月について『歌ことば歌枕大辞典』では次のように述べられている<sup>注23</sup>。

…夏の月は五月雨の雨間をぬって、「庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな」（新古今集・夏・二六七・頼政）と清涼感をもたらす。

「まてしはし」の歌では「小舟さをさす」とあり、夏の川の上といった涼しい場所を想起させる表現と共に用いられ、「月やとる」の歌では「夏はなかりけり」と涼しい川辺の状況の表現と一緒に用いられている。夏の「月」には、これらの涼しさの表現を強調する役割があるのではないかと考える。また「夏の夜の」と「信濃路や」の歌のある作品群に次に二首があり、この二首の「月」は、涼しむ行為によって得られている涼しさのイメージを、より鮮やかなものになっているのではないか。

浪速津は家居をしげみ庭をなみ涼みする人屋根の上の《月》

（一一五一・三二年）

荒磯邊の假屋の闇に涼み居れば大きな《月》海より出でけり

（一一五四・三二年）

同じ作品群で且つ人の涼む行為が共通のテーマとなっていることから、「夏の夜の」と「信濃路や」の歌の「月」の表現にも触覚表現としての「涼し」の意味が含まれていると考える。

月の触覚表現は四期間通して決して多く詠まれる表現ではないという結果であったが、次の明治三十一年の主張<sup>注24</sup>がされた後に作品例が見られることは注目できる。

…「露の落つる音」とか「梅の月が匂ふ」とかいふ事をいふて樂む歌よみが多く候へども是等も面白からぬ嘘に候。總て嘘といふものは一二度は善けれどたびく詠まれては面白き嘘も面白からず相成申候。況して面白からぬ嘘はいふ迄も無く候。「露の音」「月の匂」「風の色」などは最早十分なれば今後の歌には再び現れぬやう致したく候。「花の匂」などいふも大方は嘘なり、…

この主張では月の嗅覚表現について言及しているが、月の触覚表現も同様のことが言えるのではないだろうか。実際の月光は、観る人に直接涼しさを感じさせるのではなく、月の色などから涼しさを感じさせるのではないだろうか。月に対する触覚表現は、「面白からぬ嘘」に含まれるものであるといえる。明治三二年に月の嗅覚表現が見られるのは、子規にとって月は古典の意識を引きずりやすい題材であつたためではないだろうか。子規の古典の意識が見られる作品例を次に挙げる。

玉飾る高殿更けてたき物の匂に曇る《春の夜の月》

(一五三四・三三年)

右の歌は、霞んでいる春の月が詠まれている。春の月の詠み方について、『歌ことば歌枕大辞典』では次のように述べられている<sup>注25</sup>。

…朧に霞む春の月は、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」(古今集・恋五・七四七・業平)など、人なつかしさをかきたてるような、切ない光を投げかける。

「玉飾る」の歌は「艶麗體」と題が付けられている歌群の一首であり、「玉飾る」「高殿」「たき物」といった、読み手に王朝時代を思い起こさせるような語と共に詠まれていることから、この「春の夜の月」の光は昔を偲ばせるよう

な、昔の人に対する恋しさを感じさせるものではないか。

一方で、前述の主張通り「面白からぬ嘘」を排除しようとする例も見られる。例えば月の触覚表現が見られる「まてしはし」「月やとる」の歌は、明治三十一年に自筆稿本で上から墨で抹消されており、「夏の夜の」の歌は「日本」に発表される際に「月をすゞしみ」が「月をさやけみ」と変更されている。

月を涼しさをもたらすものとして詠むことは古来のものであり、明治三十二年の子規の短歌作品にこのような例が見られるのは、子規の古典への意識が現れた結果ではないかと考えられる。また、子規にとって月は古典の影響が表れやすい題材であったのではないだろうか。

### 三―二―八 星の視覚表現

子規短歌に詠まれている星の感覚表現は視覚表現のみである。各期間の例数は次の通りである。「星」や「天の川」など星を表す天体語彙自体が「光影」を表す視覚表現である。

一期 ……二首

二期 ……四首

三期 ……十一首

四期 ……十二首

星を表す天体語彙を歌に詠むことは、四期が最も多くなっている。四期が最も多いのは、明治三十三年に次の「星」

と題の付された十首の連作が作られたことが影響しているといえる。明治三四年以降は天体としての星を表す語彙は全く詠まれていない。

左に挙げた各期間の、各期間の全短歌の作品数（一期…一五四首、二期…三六八首、三期…一一一三首、四期…七九七首）に対する、星を表す天体語彙の使用された作品数の割合を見ると、一期から三期にかけて減少していることが分かる。

一期…	1.3 %
二期…	1.1 %
三期…	1.0 %
四期…	1.5 %

太陽の場合は明治三一年（三期）に、短歌の題材の拡大に伴う作品数の増加が見られる。しかし月の場合と同様に、作品数は増加しているものの、天体としての星を詠む傾向は小さくなっている。そこで、明治三一年においての題材の拡大の有無について見てゆく。

### 明治三十年以前

天体としての星を表している語彙は次の通りである。（ ）内は作品数である。

星（7）・夜這星（1）

## 明治三十一年

天体としての星を表している語彙は次の通りである。

天の川（2）・星（1）・明星（1）・夕星（1）・星の都（1）・星合（1）

明治三十年以前と三十一年の語彙を比較すると、三十一年に星を表す語彙の種類が多くなっていることがわかる。また明治三十年以前では「星」と具体的な星を指していない語が多いが、三十一年では特定の星を詠むことがやや多くなっている。

最も天体としての星を詠む傾向が大きい**四期**の作品の場合は、次の通りである。異なり語数が最も多くなっている。

星（8）・北斗（1）・牛飼星（1）・機織姫（1）・母星（1）・星の都（1）・星の少女（1）

使用する語彙の種類の高さと、天体としての星を多く詠む傾向の強さが、一致した結果となっている。また語彙の種類において、明治三十一年の短歌革新の際に題材の拡大として、短歌に詠み込む星の種類を増やしたといえる結果である。

明治三十三年（四期）で多く詠まれた星が、三四年以降全く詠まれないことについて、次の二つが考えられる。

一つに、明治三四年の「星」の連作で様々な趣向の星の短歌が作られたことで、三四年以降に新しい趣向を作るのが難しかったのではないかということである。次に「星」の連作十首を挙げる。

眞砂ナス數ナキ《星》ノ其中ニ吾ニ向ヒテ光ル《星》アリ

（一八八〇・三三年）

タラチネノ母ガナリタル《母星》ノ子ヲ思フ光吾ヲ照セリ

(一八八一・三三年)

玉水ノ零絶エタル檐ノ端ニ《星》カ、ヤキテ長雨ハレヌ

(一八八二・三三年)

久方ノ雲ノ柱ニツル絲ノ結び目解ケテ《星》落チ來ル

(一八八三・三三年)

空ハカル臺ノ上ニ登リ立ツ我ヲメクリテ《星》カ、ヤケリ

(一八八四・三三年)

天地ニ月人男照リ透リ《星》ノ少女《ノカクレテ見エズ

(一八八五・三三年)

久方ノ《星》ノ光ノ清キ夜ニソコトモ知ラズ鷺鳴キワタル

(一八八六・三三年)

草ツ、ミ病ノ床ニ寐カヘレバガラス戸ノ外ニ《星》一ツ見ユ

(一八八七・三三年)

久方ノ空ヲハナレテ光リツ、飛ビ行ク《星》ノユクヘ知ラスモ

(一八八八・三三年)

ヌバ玉ノ《牛飼星》ト白ユフノ《機織姫》トケフコヒワタル

(一八八九・三三年)

この明治三三年の連作において、様々な趣向が用いられている。現実的な星、月と星の擬人法、満天の星が、一つの星に焦点が当てられたもの、家から星を覗いていると判断できるもの、外から覗いていると判断できるものが見られる。このように明治三三年の子規にとって、天体としての星は様々な趣向で、また星と共に詠む題材を近辺のものや場所に限定せずに詠むことのできる題材であったといえる。そのような題材である星が、明治三四年以降に詠まれなくなるのは、新しい趣向を求めることが出来なかったためではないかと考える。また明治三十年以前に複数用いられる趣向を避ける例も見られる。次の歌では、海上の灯りと星の類似を歌っており、このような趣向は複数見られる。

天つ空青海原も一つにてつらなる《星》かいさりする火か

(二四一・二六年)

しかし、明治三十一年以降の作品では、「天つ空」の歌のような趣向は全く見られない。海上の星を詠む例は次の一首だが、海上の灯りとの類似は詠まれていない。

眞北さし八百日八汐路行く船の帆桁の上に《北斗》を仰ぐ

(一七五四・三三年)

子規の短歌作品では、月と比べて星が題材となることは少なく、紀行文や日記でも、天体としての星の記述は少ない。左に紀行文と日記に見られる、天体としての星を表す語彙の出現数を挙げる。

紀行文【二期】…三例、紀行文【三期】…〇例

日記【二期】…〇例、日記【三期】…九例、日記【四期】…一例

三期の日記に見られる九例のうち五例は俳句であり、明治三十年八月八日の句会の題に想起されてのものであると判断できる。このように、短歌の作品数と紀行文と日記における星の出現数を考えると、子規の星に対する興味はあまり強くなかったと考えられる。

あまり興味の強くなかったと考えられる題材を、想像や回想で様々に詠むことは難しく、連作の後の明治三四年に星を詠んだ作品が見られなくなったのではないか。

また、明治三四年に糸瓜棚が設置されたことも影響していると考えられる。糸瓜棚の隙間から星を見ることは可能である。しかし、当時の子規の視力では室内から糸瓜棚越しに、月と比べ小さい光である星を観察することは困難だったのではないだろうか。例えば明治三四年九月十六日の「仰臥漫録」では次の記述<sup>注26</sup>がある。



…週報俳句檢閲ノ際一息ニ急イデ見了ル爲目痛クナリ昨日ナドハ新聞ヲ讀メバ目痛ミ明ケラレズ因テ今朝　ハ新聞ヲ見ズ少シバカリ律ニ讀マス：

このように様々な趣向を明治三三年に詠んだため、また元々子規の星に対する興味が薄いことと、部屋から星を観察することが困難であつたことも加え、三四年以降に星に関する新しい趣向を得ることが難しくなつたと考えられる。その結果、明治三四年以降に星を詠んだ作品が見られなくなつたのではないだろうか。

子規短歌に詠まれた天体（日、月、星）の使用実態を、感覺表現の視点から見てきた。短歌見られる天体語彙の變化が、子規の行動範囲と視覚範囲の狭まりと、どのように関わっているのかについて次にまとめる。

子規短歌に詠まれた日（太陽）は、視覚表現のみが見られる。視覚表現の一つである天体の動きに着目したところ、次のことが言える。明治三一年の短歌革新の理論の實踐に伴い、三期は太陽を表す天体語彙を詠むことが多くなつてゐる。また、太陽の動きで時間を表現することは、主に外出先でのものであり、行動範囲の狭まつた四期では太陽の動きを表現することがほとんど無くなつた。その為、天体としての太陽を歌に詠むこともほとんど無くなつてゐる。なお空を見上げずとも認識できる太陽光は、四期の作品にも複数見ることができると言える。

子規の短歌に詠まれた月には、視覚表現の他に、例数が僅かであるが觸覚表現との複合感覺表現が見られる。太陽の場合とは異なり、明治三一年の短歌革新での題材の拡大の影響は見られない。月に対する興味は他の天体と比べ強いが、短歌作品において月を詠んだ作品数の減少が見られるのは、明治三二年の子規の短歌に対する考え方と、月に

対する表現方法が一致しなかった為ではないかと考えられる。月の触覚表現については、夏の月に「涼し」という表現を使用したところに、子規が古典の意識を引きずっていたことが現れている。また子規にとって、月が古典の影響を受けやすい題材であったと言える。

子規の短歌に詠まれた星は、視覚表現のみである。太陽の場合と同様に、明治三十一年の短歌革新の影響は見られ、星を表し語彙の種類が増加している。明治三四年以降に星を詠んだ作品が見られなくなったのには、様々な趣向を明治三十三年に詠んだことが影響していると考えられる。また子規の星に対する興味が薄いことと、部屋から星を観察することが困難であったことも影響していると考えられる。

#### 第四節 与謝野鉄幹との比較

鉄幹短歌から天文語彙を、子規短歌での分類を参考に抽出し分類する。

鉄幹短歌に見られる天文語彙には「雨」や「入日」、「虹」、「天地」等がある。左に例を挙げる。

わが立てるすがたもさびし秋くさに《入日》うすれて《雨》ふらんとす (鉄幹子・一二六)

立つ《虹》のかしこ天城の朝の岩二人うつくし浪を出でし今 (新派和歌大要・二七五)

《天地》にあこがれやりしわがこゝろあつめてよりて恋の緒にする (うもれ木・十六)

鉄幹短歌の天文語彙の中で、気象を表すものに分類される語彙(気象語彙)と天体を表すものに分類される語彙(天体語彙)について以降見てゆく。

鉄幹短歌の全一四六二首の中、四七八首に天文語彙が詠み込まれており、鉄幹短歌全体の中の約33%を占めている。子規短歌での天文語彙を詠んだ作品が八〇四首であり、子規短歌全二四三二首に対して約33%であるので、子規の天文を歌材にする傾向は、鉄幹短歌に見られる通り、他の歌人とはほぼ同程度と言える。

## 第一項 気象語彙の使用実態

鉄幹短歌に詠まれる「雨」「雲」などの気象の種類は、子規短歌に見られるものと殆ど同様の内容である。鉄幹短歌に詠まれ子規短歌に詠まれていない気象は「霽」であり、鉄幹短歌では次の一首に使用例が見られる。

梅にふる東大門の《うすみぞれ》被衣かつぎの人を牛に載せしか

(うもれ木・五一)

子規短歌に詠まれ鉄幹短歌には詠まれていない気象の例も見られる。次の子規短歌の例に見られるような、「霽」を表す気象語彙と、「曇り」「晴れ」といった天気を表す気象語彙である。

うらゝかにガラスを照す春の日にはかに曇り《霽》ふり来る

(一五七八・三三年)

久方の《曇り》拂ひて朝日子のうらゝに照す山吹の花

(一七三五・三三年)

臥しながら雨戸あけさせ朝日照る上野の森の《晴》をよろこぶ

(一〇八七・三二年)

鉄幹短歌で「曇り」や「晴れ」といった天気を表す際は、次のように動詞の「曇る」「晴る」を用いている。

ほとゝぎす村雨《はれ》し上嵯峨の竹の宵月恋にはあらぬよ

(新派和歌大要・五〇)

《曇る》らし船なかへして磯にねて松の雨をもひと夜きかずや

(新派和歌大要・一九五)

以降、鉄幹短歌に使用されている気象語彙を具体的に見てゆく。

鉄幹短歌を初出年に基づき、子規短歌での期間に合わせて分類する。各期間の鉄幹短歌に見られる気象語彙を、「雨」や「風」など気象の種類ごとに分けて挙げる。気象語彙が使用されている作品数を（ ）内に示す。作品数が一首の場合は数値を省略する。

### 明治三十年以前 気象語彙が詠まれた作品数…一二八首

明治三十年以前が初出の鉄幹短歌には、次の九種類の気象が詠まれている。

「雨」を表す気象語彙…雨（8）・小夜時雨・時雨（5）・春雨（2）・村雨（5）・むら時雨・夕立（3）・夕立の雨

「霰」を表す気象語彙…霰

「霞」を表す気象語彙…霞（3）・夕霞

「風」を表す気象語彙…秋風（9）・秋の風（5）・秋の初風・秋の夕風・朝風・嵐（11）・大嵐の風・風（16）・

風の音（2）・韓山嵐（2）・木枯し・木枯しの風（2）・越の山風・春風（5）・春の夕風・

松風・松の嵐（2）・山嵐の風（2）・山風（3）・夕嵐（2）・夕風（4）

「雷」を表す気象語彙…いかづち・いなづま

「霧」を表す気象語彙…秋霧・霧・狭霧・夜霧

「雲」を表す気象語彙…天雲・浮雲・雲（7）・雲の中・白雲（2）

「虹」を表す気象語彙：夕虹

「雪」を表す気象語彙：白雪（4）・初雪・雪（17）・雪の花・雪間

左に各種類の気象を詠んだ鉄幹短歌の例を一首ずつ挙げる。

《風》さむし、駒の立つ髪、日は落ちて、夕霜みゆる、那須の篠原。

宿もなし。《夕虹》きえて、道塚の、石の仏に、しぐれ降るなり。

孔舎衛坂、ながすね彦が、射向ひし、矢じりのこして、降る《霰》かな。

里川の、ふたもと柳、かげ瘦せて、《霧》にしめれる、有明の月。

《しら雪》は、幾重もつもれ。《雪》に寝て、燃ゆるところを、しばし抑へむ。

七重八重、こえてこし路の、八重山も、みれば一重の、《かすみ》なりけり。

かりそめにねぶれる龍の巖となりて猶も《雲》よぶ夢や見るらむ

わが立てるすがたもさびし秋くさに入日うすれて《雨》ふらんとす

《いかづち》のしたにおくともおどろかぬ我も君には砕けつるかな

（東西南北・六五）

（東西南北・一三六）

（東西南北・二二一）

（天地玄黄・十五）

（天地玄黄・四一）

（天地玄黄・一二三）

（鉄幹子・一）

（鉄幹子・一二六）

（紫・二九〇）

明治三十年以前が初出年の鉄幹短歌に見られる気象の種類は、同期間に作られた子規短歌に詠まれている気象の種類と殆ど重複している。前述した「晴れ」などの気象を表す気象語彙が鉄幹短歌に見られない点のみが、子規短歌と異なっている。

鉄幹短歌に使用されている「風」を表す気象語彙について、「秋風」や「嵐」といった秋に吹く風、または強く吹く風を表すものが多く見られる。この傾向は以降の期間とも共通している。この鉄幹短歌の「風」の特徴は、子規短歌では気象語彙「風」の使用に大きく偏る傾向であることと、異なる結果である。

右に挙げた「雷」の鉄幹短歌の例では、「いかづち」による影響として「おどろか（ぬ）」「砕け（つる）」が詠まれており、「雷」の音や衝撃による威力に鉄幹は目を向けていると言える。一方で子規は次の歌のように「雷」の色といった視覚で捉える情報を表現している。

はれなからてる《稻妻》は月のいろといつれまさと光あらそふ

（拾遺五七・二二年）

このような「雷」に対する表現の違いは、以降の期間にも見られる。また「雷」に限らず、「雨」や「風」を表す気象語彙に対する感覚表現にも、鉄幹短歌と子規短歌の違いが見られる。

### 明治三一年 気象語彙が詠まれた作品数…二五首

明治三一年が初出の鉄幹短歌には、次の五種類の気象が詠まれている。

「雨」を表す気象語彙…秋の雨・雨（2）・小雨（2）

「風」を表す気象語彙…朝風・秋風（2）・秋の風・嵐（2）・風（2）・木枯し（2）・松風（2）・山風・夕風

「雷」を表す気象語彙…稲妻

「雲」を表す気象語彙…雲・雲の下・夕雲の上

「雪」を表す気象語彙：雪（3）・雪の雫・雪間

明治三十一年が初出年の鉄幹短歌に詠まれている気象の種類は右の五種類と減少している。これは当期間が初出年の鉄幹短歌の作品数全体が少ないことが影響している。

明治三十一年に詠まれた子規短歌で見られる気象の種類に「靄」と「陽炎」がある。鉄幹短歌では、「靄」は明治三十一年が初出年の作品で、「陽炎」は明治三十一年が初出年の作品で初めて使用される。「靄」は古歌で頻繁に使用される気象ではなく、子規は明治三十一年の自身の唱えた短歌革新の実践として、「靄」という気象語彙を新たに歌材として用いたと考えられる。しかし、子規が「靄」を短歌に詠む例は次の一首のみであり、子規が「靄」を歌材として確立したとは言えない。

《靄》深くこめたる庭に下り立ちて朝の手すさひに杜若剪る

（三三九・三十一年）

それに対し、鉄幹は気象語彙「靄」を短歌の題材として詠み続けている。明治三十三年、三十四年が初出年の鉄幹短歌に複数の例を見ることが出来る。左に明治三十三年と三十四年が初出年の鉄幹短歌の例を一首ずつ挙げる。

花売の小車涼しをくるま《あさ靄》に菖蒲ひと車載せて門行くあやめ

（紫・二二八）

唄きよう朝溪くだる棹の子をまぎれさせつよ竹に淡き《靄》あさたし

（新派和歌大要・一〇二）

「陽炎」は古歌に多くの例を見ることが出来る題材であるが、子規短歌と鉄幹短歌では殆ど詠まれず、両者共に「陽炎」は歌材として使用していない。

## 明治三二年 気象語彙が詠まれた作品数…三一首

明治三二年が初出の鉄幹短歌には、次の八種類の気象が詠まれている。

「雨」を表す気象語彙…秋の雨・雨（4）・小雨（2）・春雨（2）

「陽炎」を表す気象語彙…かぎろひ

「霞」を表す気象語彙…霞

「風」を表す気象語彙…秋風（2）・朝北風・大嵐の風・風（4）・春風（2）・春の初風・松風

「雷」を表す気象語彙…いかづち（2）

「霧」を表す気象語彙…霧

「雲」を表す気象語彙…青雲・雲（2）

「雪」を表す気象語彙…雪（5）・雪の達磨

明治三二年が初出年の鉄幹短歌に見られる気象語彙の中で、特徴的であるのが「青雲」「雪の達磨」である。鉄幹短歌での例も次の二首と少ないが、青い「雲」や、雪だるまといった「雪」遊びによって作られたものは子規短歌に見られないものである。

うめもどき珠につなげて兄ぎみの《雪の達磨》にいざまゐらす

（鉄幹子・十五）

《あをぐも》の彼世は知らずここにありて我ぞ先づ聴く君が秘め歌

（新派和歌大要・一七四）



子規短歌での「雲」の色について、「黒雲」「白雲」「紫雲」の他に、次の例での遠目に見た花の集まりの比喻としての「紅の雲」が見られる。

御佛のいとも尊とし紅の《雲》か櫻の花のうてなか

(二七四・二七年)

鉄幹短歌では、「紅の雲」の例は見られないが、右の他の色(「黒」「白」「紫」)の例は見られる。またこの三色以外に次の色(「黄」「緑(真榊色)」「藍」)の雲が詠まれている。

紫の《黄雲》にうつるしばらくは雲となづくな高き高き思

(紫・九八)

《雲》ひとむら真榊いろのかなた畝傍三千年の大和に入りぬ

(うもれ木・八〇)

《雲》藍に山紺青の奈良びより歌うて寄りし梅の二月堂

(うもれ木・八三)

鉄幹短歌で詠まれている「雪」で出来たものの例に、「雪の達磨」以外では次の「雪の兎」の一例が見られる。

をとうとの《雪のうさぎ》にまなこつくと南天とりし岡崎の庭

(紫・一三〇)

鉄幹短歌での「雪」による造形物を詠んだ例数は僅かだが、子規短歌での「雪」は、次の「サク／＼ト」の歌のようなかき氷の比喻を除き、次の「折リは」や「繪を掛けて」の短歌のように自然の状態のものが詠まれている。

サク／＼ト削レル氷粉ヲナシテビードロ皿ニ《雪》ツモリケリ

(二八五二・三三年)

折リは不二の根風《雪》を吹きて春まだ寒し武藏野の原

(三八三・三一年)

繪を掛けて夏を靜かに觀ずれば風冬の如く《雪》壁に滿つ

(九七六・三一年)

## 明治三三年 気象語彙が詠まれた作品数…三〇首

明治三三年が初出の鉄幹短歌には、次の六種類の気象が詠まれている。

「雨」を表す気象語彙…雨（3）・雨の音・夕立（2）

「風」を表す気象語彙…秋風（6）・風・神風・北山風・木枯し・松風・松の風

「雷」を表す気象語彙…いかづち

「雲」を表す気象語彙…秋の雲・黄雲・雲（2）・黒雲・夕の雲

「靄」を表す気象語彙…朝靄（2）

「雪」を表す気象語彙…白雪・雪（5）・雪の兔・雪の雫

明治三三年が初出の鉄幹短歌に用いられている気象語彙に「雨の音」がある。次の短歌のように、雨音を詠む例は子規短歌にも見られるが、その数は二首である。左に一首例を挙げる。雨音の表現と判断する箇所には傍線を付す。

歌をよみにつどひし人の歸る夜半を花を催す《雨》瀧の如し

（一五八二・三三年）

次項で詳しく示すが、次の鉄幹短歌の二首のように、鉄幹が短歌に雨音を表す例は、子規短歌と比べて多く見られる。雨音と判断する箇所に傍線を付す。

ははそ葉を、《時雨》のたたく、心地して、秋にまざるる、蟬のこゑかな。

（東西南北・七七）

都にてねがふところもありしかど松葉が谷に《雨の音》きく

（鉄幹子・三〇六）

また左の明治三四年が初出年の鉄幹短歌に、「雨の香」という気象語彙がある。

薦の花に《雨の香》さむき堂のひと夜ひと夜の我に尼の君泣く

(新派和歌大要・二二)

雨の香りを詠んだ例は子規短歌には見られないものである。子規短歌では雨を表現する場合、視覚表現や触覚表現を用いることが殆どである。

### 明治三四年 気象語彙が詠まれた作品数：四七首

明治三四年が初出の鉄幹短歌には、次の八種類の気象が詠まれている。

「雨」を表す気象語彙：雨（5）・雨の香・小雨・時雨・村雨

「霞」を表す気象語彙：霞（2）

「風」を表す気象語彙：秋風（5）・風（2）・野分（2）

「雷」を表す気象語彙：稲妻（2）

「雲」を表す気象語彙：秋の雲・朝の雲・雲（3）・嫉み雲（2）・夕雲（2）

「虹」を表す気象語彙：朝の虹・小虹・虹（3）・虹の被衣（2）・夕の虹

「靄」を表す気象語彙：朝の靄・靄（2）

「雪」を表す気象語彙：春の雪・雪（7）

明治三四年が初出年の鉄幹短歌に詠まれている気象語彙について、「虹」を表す気象語彙の増加に注目する。

次の例のように、鉄幹短歌での「虹」は、抒情的な表現としての側面が強い例が多く見られる。

野には花そらにみちては虹と知る美しい君か恋のためいき

(うもれ木・九)

人ぞおごる今宵快樂の夢のほひこき紫の虹のおもひ子

(うもれ木・二四)

子規短歌で「虹」を詠んだ作品は次の一首のみであるが、写実的な表現となっている。

夕立の雨にけふりて近江かた瀬田の長橋《虹》とこそ見れ

(十一・十八年)

### 明治三五年 気象語彙が詠まれた作品数…十四首

明治三五年が初出の鉄幹短歌には、次の七種類の気象が詠まれている。

「雨」を表す気象語彙…雨(2)・松の雨

「風」を表す気象語彙…風・春風(2)

「霧」を表す気象語彙…霧

「雲」を表す気象語彙…雲(2)

「虹」を表す気象語彙…虹(3)

「霰」を表す気象語彙…薄霰

「雪」を表す気象語彙…白雪

明治三五年が初出の鉄幹短歌に使用されている気象語彙について、「風」を表す気象語彙が「風」と「春風」のみとなっている点に注目する。これまでの期間が初出年の作品では、「秋風」など秋の風や「嵐」など激しい風を表す気象語彙が多いのが、明治三五年の鉄幹短歌では使用されていない。

「風」を表す気象語彙の詠まれている、明治三五年が初出年の鉄幹短歌は次の三首である。

牛放てば木の芽の《風》のやはらかに袂に青き大那須が原  
(うもれ木・十九)

青柳はゑにしあればぞ撫でにける《春かぜ》石も花のさかじか  
(うもれ木・一〇二)

《春かぜ》に百の錦の車たまへ載せて帰らむ子らのまばゆき  
(うもれ木・一四二)

これまでの鉄幹短歌に多く見られる、「山かぜ」など激しい風と「秋かぜ」など秋の風を詠んだ例を抄出する。

わが駒も、一こゑなきぬ。高嶺より、桜ふき捲く、《山おろしの風》。  
(東西南北・二〇)

露霜に、枯れても葛は、《秋かぜ》の、むかしのうらみ、忘れかぬらむ。  
(東西南北・六四)

神杉のこずゑゆらぎて《山かぜ》に天狗くる夜の月ふけわたる  
(鉄幹子・七八)

なき親のかたみと思へばいまさらに《秋の風》にもあてじと思ふ  
(鉄幹子・一八五)

おもへきみ霜をおぼゆる《秋かぜ》に蘇土をこえて更に西する  
(鉄幹子・二八一)

右に挙げた「山かぜ」や「秋かぜ」の例より、次の表現の傾向が見られる。

鉄幹短歌では「山かぜ」や「山おろしの風」など激しい風を詠む作品では、人里離れた場所(歌例の傍線部)を詠む傾向が見られる。また「秋かぜ」「秋の風」など秋の風を詠む作品では、寂しさ(「枯れても」「なき親のかたみ」「霜

をおぼゆる」「蘇士をこえて」や、故人など昔のこと（「むかしのうらみ」「なき親」）を想起する傾向が見られる。  
明治三五年が初出年の鉄幹短歌では、他の期間の作品と比べこのような作品を詠むことが少なくなっている。

## 第二項 天体語彙の使用実態

気象語彙の場合と同様に、鉄幹短歌を初出年に基づいて分類する。以降、各期間の鉄幹短歌に見られる天体語彙を、天体の種類ごと（「日」「月」「星」）に分けて示す。（ ）内は作品数である。作品数が一首の場合は数値を省略する。

### 明治三十年以前

「日」を表す天体語彙…朝日（2）・入日（3）・日

「月」を表す天体語彙…秋の夜の月（2）・有明（2）・有明の月（3）・磯回の月・小島の月・月（43）・春の夜の月・

一夜の月・夜半の月

「星」を表す天体語彙…星

明治三十年以前が初出年の鉄幹短歌に使用されている天体語彙の例を抄出する。「日」「月」「星」の例を一首ずつ挙げる。

野をゆけば、朝露きよし。すたれたる、あだのとりでに、《月》なほ残る。

（東西南北・四二）

霜ばしら、《朝日》にをれて、稲ぐきの、立てるもさむし。岡崎の里

（東西南北・七四）

わが船の、けぶりの末に、《星》見えて、夕汐たかし。天草の灘。

（天地玄黄・一一〇）

子規短歌と同様に、天文語彙は「月」を表すものに偏っている。

子規短歌と異なる点は、鉄幹短歌では「朝日」を詠む例が右に挙げた一首のみであり、以降は、次の短歌に見られる

「入日」など夕日を表すものに偏ってゆく点である。

《入日》さす、すすきまじりの、小松原、されしかうべに、鳥なくなり。

（東西南北・一三九）

## 明治三一年

「日」を表す天体語彙…日

「月」を表す天体語彙…秋の夜の月・海の月・月（12）・月の都・月花・夏の月・夏の夜の月・昼の月・望月・夕月・

夜明けの月

「星」を表す天体語彙の使用例は見られない。

明治三一年が初出年の鉄幹短歌の天体語彙は、左の一首を除き、全て「月」を表すものである。

手をあげて《日》を招きしもあやしまず今は山さへ抜きてのけたる

（新派和歌大要・一二五）

## 明治三二年

「日」を表す天体語彙…春日（2）・日・日の御座

「月」を表す天体語彙…秋の夜の月・有明の月・月（8）月の御座・春の夜の月

「星」を表す天体語彙…明星・天の川・星

明治三二年が初出年の鉄幹短歌の天体表現を用いた作品を、左に抄出する。

うらうらと山の《日》かすむ苔の戸に白き雄鹿の花唧みくる

（鉄幹子・六六）

原町の鴨脚の老木さむき夜に成りけむ君が《明星》の歌

（新派和歌大要・一七二）

よき人のかざしの珠やぬけいでし祇園の花の《春の夜の月》

（新派和歌大要・一九三）

鉄幹短歌では、明治三二年が初出年の作品で、「明星」や「天の川」といった特定の星を示す天体語彙が見られるようになる。子規短歌では、次の例のように、明治三一年にそのような「星」を表す天体語彙を用いている。

山寂莫寶塔の鈴音もなし杉の梢に冴ゆる《あか星》

（七八七・三二年）

寐静まる里のともし火皆消えて《天の川》白し竹藪の上に

（五一六・三二年）

## 明治三三年

「月」を表す天体語彙…秋の夜の月・夕月



「星」を表す天体語彙…星（5）・星の数・星の子・星の世

「日」を表す天体語彙の使用例は見られない。

明治三三年が初出年の鉄幹短歌では、「星」を表す天体語彙の使用が多くなる。その殆どが次の四首のように抒情的な表現となっている。

《星の子》のふたり別れて千とせへてたまたま逢へる今日にやはあらぬ

（鉄幹子・二四六）

後の世も君と抱きて地に泣かんあまりに清し《星の世》の恋

（鉄幹子・二四七）

君なくば《星の数》にも成らん身の口紅さすよ芙蓉かざすよ

（鉄幹子・二五一）

わが恋を人に問はれてこころにもあらぬかなたの《星》仰ぎ見し

（紫・一八六）

## 明治三四年

「日」を表す天体語彙…入日（4）・春の入日（2）

「月」を表す天体語彙…秋の夜の月・薄月・江の月・月（6）・野の月・昼の月・宵月（2）

「星」を表す天体語彙…星（5）

明治三四年が初出年の鉄幹短歌に使用されている天文語彙の例を抄出して挙げる。

いだかれて見たる御国の名は秘めむ《星》<sup>あか</sup>紅かりき百合白かりき

（紫・七六）

ここ室津となりの船の私語や雁低うして《月》ほそき潮  
もみぢ葉に塔の《入目》よ何の寺さびしや鐘の水渡りくる

（新派和歌大要・八九）  
（新派和歌大要・二三一）

右に挙げた三首のように、鉄幹短歌に見られる天体語彙は六期を通して、人の営みを表すものと共に詠まれ、抒情的な表現となる例が多い。特に「星」を表す天体語彙は、殆どが恋歌での使用である。

## 明治三五年

「日」を表す天体語彙…東初日

「月」を表す天体語彙…月・宵月

「星」を表す天体語彙…星

天体語彙の詠まれている明治三五年が初出の鉄幹短歌は、次の四首である。

むらさきに《東初日》のながるゝよ若水人と詩を驕りの春

（うもれ木・一二六）

江のあなた《月》は落ちての闇の船昨日水戸に手燭よびし子

（新派和歌大要・二七九）

《宵月》に米つく音の家いづこ薄の小川すゑ遠白き

（新派和歌大要・二七一）

《星》は空に恋はわれらにまばゆけれやゝ似しものゝ地なる火の山

（うもれ木・十四）

明治三五年の鉄幹短歌では、これまでの期間では「日」と「星」と比べ多く詠まれる「月」の使用が減少している。明治三五年での「月」の詠まれ方を見ると、右に挙げた「江のあなた」の短歌と「宵月に」の短歌二首では、「手燭（よぶ）」「米つく」といった生活に密着した表現と共に詠まれている。このように生活に密着した表現と共に「月」が詠まれる例は、明治三二年から顕著に見られる。明治三二年から三四年の鉄幹短歌の中から、このような「月」の詠まれ方が見られる作品の例を抄出する。生活に密着した表現と判断する箇所には傍線を付す。

林檎りんしきッて葡萄ぶどうつんで妹いもかへりきぬ《月》さす脊戸せどに竹をなでてをれば

（鉄幹子・四九）

近江たまためより玉繭たまご買ひにこし人もまじりて踊る《秋の夜の月》

（鉄幹子・二一四）

《宵月》にうすものたたむ宇治の楼十九の夏の瘦のすぎずや

（新派和歌大要・五四）

明治三一年までの鉄幹短歌にも右の三首のような「月」の詠まれ方が見える例もあるが、次の三首のように風流なものとしての「月」の例や、抒情的な表現や浪漫的な表現と共に詠まれる例の方が多く見られる。

山松に、すみのぼりたる、《月》見れば、我も浮世は、恋しかりけり。

（東西南北・一七六）

かりそめの、雲がくれぞと、知りながら、入りにし《月》を、猶なげくかな。

（天地玄黄・六〇）

《月》もよし一夜を千夜にかたらはむ花の胡蝶の夢の世の中

（新派和歌大要・一四八）

「星」を恋歌の題材にする傾向が強まったように、「月」も風流なもの、抒情的なもの、浪漫的なものとする傾向が弱まったのではないか。そのため、鉄幹短歌で「月」が詠まれることが減少したのではないかと考える。

### 第三項 氣象語彙と天体語彙の表現方法

子規短歌では、「風」「雨」「雪」「雲」「雷」を表す氣象語彙と、「日」「月」「星」を表す天体語彙について、それぞれの語彙に対する感覺表現を調査したところ、視覺表現に大きく偏っている結果であった。

鉄幹短歌に見られる天文語彙に対する感覺表現について、「風」「雨」「雪」「雲」「雷」「日」「月」「星」を中心にみてゆくと、次の点が子規短歌と大きく異なっている。

一つに、鉄幹短歌での「雨」「風」「雪」を表す氣象語彙に対する感覺表現について、視覺表現が多く見られるも、聴覚表現、觸覚表現も、子規短歌と比べ多く見られる点である。次に聴覚表現と觸覚表現の例を抄出する。

聴覚表現の例（聴覚表現とする箇所傍線を付す）

《風の音》に、おどろかされて、益荒男の、夢やすからぬ、秋は来にけり。

（東西南北・八七）

わが歌を月にうたへば《風》出でて吼えんとすなり獅子の大巖

（鉄幹子・一一二）

いくとせかおなじ枕にききなれてさびしと《雨》をおぼさざりけん

（鉄幹子・一五一）

都にてねがふところもありしかど松葉が谷に《雨の音》きく

（鉄幹子・三〇六）

紅梅のこぼれし花を頬にあててなどかは泣きて《小雨》ふる朝

（新派和歌大要・一三六）

世の上をおもひまどひてなげくときしばしきて聞く磯の《松風》

（新派和歌大要・一六三）

曇るらし船なかへして磯にねて松の《雨》をもひと夜きかずや

（新派和歌大要・一九五）

触覚表現の例（触覚表現とする箇所<sup>二</sup>重傍線を付す）

《風》さむし、駒の立つ髪、日は落ちて、夕霜みゆる、那須の篠原。

（東西南北・六五）

塗鞆<sup>ぬりさや</sup>の、中さへしめる、《春雨》に、太刀の刃口<sup>はぐち</sup>も、花の香ぞする。

（東西南北・一六六）

入日さす、薄まじりの、小松原、《夕かぜ》さむし。宿はなくして。

（東西南北・二一九）

《ありあけ》のひかり涼しき山の井に梧の葉そよぎ露ちらんとす

（鉄幹子・六）

竹に染めし人の絵の具はうすかりき嵯峨の《入日》はさて寒かりき

（紫・二二）

住の江の御田の植女の花笠はあれども松の《小雨》にぬれぬ

（紫・一二二）

また次のような嗅覚表現も僅かに見ることができる。嗅覚表現の箇所<sup>二</sup>波線を付す。

なにとなき草の香のせてうかぶ《風》まてな行方は我もその西

（新派和歌大要・一二五）

これらの例のように、視覚表現以外の感覚表現を用いた気象語彙は、次の視覚表現のみの作品と比べ、読者の感情により強く訴えるものとなっている。視覚表現の箇所<sup>二</sup>傍線を付す。

このあした、都大路は、《雨》はれて、花見車の、音きしるなり。

（東西南北・一八一）

みだれ立つ荒岩の上に浪かけて驚なく磯を吹く《あらし》かな

（新派和歌大要・一九一）

子規短歌と比べ、鉄幹短歌に視覚表現以外の感覚表現が多く見られるのは、鉄幹短歌が抒情的な表現を採っている作品が多いことと関係していると言える。

また次の三首のように、子規短歌に見られない表現が鉄幹短歌に見られる。

船の上に、《月》のなみだの、おつるよと、思へば<sup>かい</sup>櫂の、しづくなりけり。

(天地玄黄・一三〇)

竹に染めし人の絵の具はうすかりき嵯峨の《入日》はさて寒かりき

(紫・二二)

《月》もよし一夜を千夜にかたらはむ花の胡蝶の夢の世の中

(新派和歌大要・一四八)

右の「船の上に」の短歌では「月のなみだ」と「月」を擬人法で表現しており、「月もよし」の短歌では「よし」と「月」に対する感情が詠まれ、「竹に染めし」の短歌では「日（入日）」の光に対する触覚表現が見られる。「日」の光に対する触覚表現はこの一首のみであるが、「月」の擬人法による表現と「月」に対する感情の表現は複数の作品に詠まれている。これらの三点は子規短歌と異なる点である。

子規短歌に見られ、鉄幹短歌に見られない表現もある。「雷」を詠んだ子規短歌では、次の短歌のように「雷」を擬人法で表現する作品が多いが、鉄幹短歌には見られない。

《鳴神》の落ちしてふ杉の迹見ればあわてふためきて掻き上りけむ

(七二八・三二年)

また明治三三年までの子規短歌では天体の動きを表す語が、天体語彙と共に詠まれる例が多く見られるが、鉄幹短歌ではそのような例は少ない。

## 第五節 まとめ

本章では天文語彙の中の氣象語彙と天体語彙について見てきた。

子規短歌の氣象語彙の使用実態について次の内容が明らかになった。

明治三十一年の短歌革新の実践が、短歌に使用される気象語彙の語数に現われている。しかし気象語彙を詠むことは少なくなっている。

明治三十一年の作品の気象語彙は、「朝風」や「樅の下風」といった気象に時間や空間、状態等の意味が付随されているものが多いが、以降の期間の作品ではこのような語彙は減少傾向となる。「春雨」といった一語でどのような気象であるのかを表すのではなく、他の語彙を組み合わせることで（例えば「牡丹」と組み合わせると春の雨を示す）気象の情報を表す傾向となっている。

天文語彙の使用実態について次の内容が明らかになった。

天文語彙について、明治三十一年の用語の拡大に伴う題材の拡大は殆ど見られない。僅かに夕日をやや積極的に使用されるようになる点と、星の種類がやや多様になる点が見られる。明治三四年以降は殆ど天体語彙を短歌に詠むことが無くなる。

鉄幹短歌に見られる天文語彙と比べても、歌材を拡大させる時期の子規短歌に見られる天文語彙は多いとは言えない。子規短歌には「晴れ」など天気を表す天文語彙の例が見られ鉄幹短歌には見られない、鉄幹短歌には「雲」が詠まれているが子規短歌には詠まれていないといった僅かな差異は見られるが、両者の短歌に詠まれる天文語彙は殆ど類似していると言える。

天文語彙の中の気象語彙と天体語彙について具体的に見たところ、次のことが明らかになった。

子規短歌では、気象語彙と天体語彙は、植物語彙ほど明治三十一年を境にした題材の拡大は顕著ではない。また明治

三一年以降に新しく歌材とした気象や天体を見ても、植物語彙のような古歌の題材から外れる歌材の積極的使用が見られない。これは「日」や「月」といった天体や、月影や風雨といった天体や気象による自然現象について、古代以来近代までその存在が不変であったことに起因していると考ええる。天文語彙は、短歌革新を境にした子規自身の「用語の區域」の拡大の実践が現れ難い分野のものであると言える。

気象語彙と天体語彙では、歌の材料の取捨選択の「捨」の面を見ることができる。

時間など様々な情報を含んだ気象語彙（春雨など）や天体の他に、作歌当時の実生活や子規の短歌観に合わないもの、例えば寒さを感じさせる気象（風など）や気象現象（風や雨の音など）、外出先で表現することの多い天体の動きは歌に詠み込まないようになってゆく。

また気象語彙と天体語彙に対する感覚表現を見ると、鉄幹短歌と比べ、子規短歌は視覚表現に偏っている。これは子規が短歌革新の際に写生を短歌に取り入れ実践したこと、子規は嗅覚表現などが視覚表現で補え得るとしていることと関係していると言える。

また、鉄幹短歌では「月」に対する詠み手の感情が共に詠まれる例が見られるが、子規短歌には見られない。この点についても、子規の短歌に対する写生の姿勢を見ることができる。

子規短歌の気象語彙と天体語彙に対する感覚表現が、鉄幹短歌と比べ視覚表現に大きく偏っているのには、以上の子規自身の主張と実践によるものと言える。



注

- 注1 『子規全集』第十一卷（講談社 一九七五年四月十八日）収録「仰臥漫録」より抜粋（全集三九三頁）した。
- 注2 松井貴子「子規と写生画と中村不折」（『国文学 解釈と教材の研究』第四九卷四号（學燈社 二〇〇四年三月十日発行）
- 注3 「墨汁一滴」三月二十八日の記事より抜粋。当文章は講談社版『子規全集』第十一卷 一五〇頁に収録されている。
- 注4 「墨汁一滴」三月二十八日の記事より抜粋。歌は講談社版『子規全集』第十一卷 一四八頁より引用した。
- 注5 『子規全集』第七卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年七月十八日）収録「五たび歌よみに與ふる書」より抜粋（全集三二〇三四頁）した。
- 注6 七十九の記事は七月三十日のものである。講談社版『子規全集』第十一卷 三三三頁より抜粋した。
- 注7 八十六の記事は八月六日のものである。講談社版『子規全集』第十一卷 三四三頁より抜粋した。
- 注8 『子規点描』（喜田重行 青葉図書 一九九六年七月二七日）二二八～二二二頁より抜粋した。
- 注9 講談社版『子規全集』第十一卷 二五二頁より抜粋した。
- 注10 五月五日発表の「病牀六尺」の冒頭より抜粋。（講談社版『子規全集』第十一卷 四二四頁）
- 注11 『正岡子規の短歌の世界―『竹乃里歌』の成立と本質―』（今西幹一 有精堂 一九九〇年）六四頁より抜粋した。
- 注12 八月二日発表の「歌話」より抜粋。（子規全集『子規全集』第七卷 一六八～一六九頁）
- 調査対象とした紀行文は次のものである。一期から四期に分けて挙げる。調査対象の紀行文は『子規全集』第十三卷正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七六年九月二十日）に収録されているものである。

一期…なし

二期…「水戸紀行」「水戸紀行裏 四月大盡」「しやくられの記」「かくれみの」「山路の秋」「かけはしの記」

「大磯の月見」「大磯に引綱を見る記」「旅の旅の旅」「第六回文科大學遠足會の記」「日光の紅葉」「高尾紀行」「鎌倉一見の記」「はて知らずの記」「三方旅行」「發句を拾ふの記」「上野紀行」「そごろありき」「王子紀行」

「閒遊半日」「總武鐵道」

三期…「散策集」「夕涼み」「道灌山」「本郷まで」「小石川まで」

四期…「龜戸まで」

調査対象とした日記は次のものである。一期から四期に分けて挙げる。なお「仰臥漫録」以外の日記は、『子規全集』第十卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七六年一月二十日）に収録されているものである。

一期…なし

二期…「癩祭書屋日記」

三期…「病牀手記」

四期…「病牀讀書日記」「斷片」「病牀の芍藥」「仰臥漫録」

なお講談社版『子規全集』第十四卷には日記として、「病床日誌」「手記」「果物帖」「草花帖」「玩具帖」が分類されているが、次の理由のため調査対象から外した。

「病床日誌」は元は子規を看病した人によるものであるため、「手記」は年次不明であるため、「果物帖」「草花帖」「玩

具帖」は画帳としての性格が強いと判断したためである。

注 13 明治二六年九月十日発表「はて知らずの記」の次の一文より抜粋。（講談社版『子規全集』第十三巻 五六二頁）

…處々に數百の牛のむれをちらして二人三人の牛飼を見るは夕日も傾くにいづくに歸るらんと覺束なし。…

注 14 講談社版『子規全集』第十三巻 四一四頁より抜粋した。

注 15 講談社版『子規全集』第十三巻 二九八頁より抜粋した。

注 16 明治三一年八月八日発表「夕涼み」より抜粋。『子規全集第十三巻 小説紀行』五六二頁）

注 17 講談社版『子規全集』第十三巻 五四六頁より抜粋した。

注 18 講談社版『子規全集』第十四巻 二九七頁より抜粋した。

注 19 明治三一年五月三日発表「人々に答ふ」より抜粋。（講談社版『子規全集』第七巻 八〇頁）

注 20 八月二日発表の「歌話」より抜粋。（講談社版『子規全集』第七巻 一六九頁）

注 21 講談社版『子規全集』第十一巻 四三二頁より抜粋した。

注 22 『日本国語大辞典』第十一巻（日本大辞典刊行会編 小学館 一九七四年）「涼しい」の項（四一九～四二〇頁）より抜粋した。

注 23 『歌ことば歌枕大辞典』五六一頁の「月」の項目より抜粋した。

注 24 「五たび歌よみに與ふる書」より抜粋。（『子規全集第七巻 歌論 選歌』三二～三四頁）

注 25 『歌ことば歌枕大辞典』五六一頁の「月」の項目より抜粋した。

注 26 講談社版『子規全集』第十一卷 四一六頁より抜粋した。

本章は次に基づいたものである。

「正岡子規自筆『竹乃里歌』短歌の氣象語彙について―感覺表現を視点にして―」

（東京女子大学紀要『論集』第六十三卷一号 二〇一二年九月）

「正岡子規自筆『竹乃里歌』短歌の天体について―太陽・月・星の感覺表現を視点にして―」

（東京女子大学紀要『論集』第六十四卷一号 二〇一三年九月）

## 第三章 地名語彙について

### 第一節 はじめに

植物と天文は終世子規にとって身近な題材の一つであった。しかし地名は子規の病状の変化によって、身近な題材ではなくなる。子規の病状が悪化するに従い外出の機会が減ってゆくためである。子規が旅行することができたのは明治二八年<sup>注1</sup>までであり、「用語の區域」の拡大を唱えた明治三十一年は、人力車での外出は可能であっても、遠地への旅行は不可能であった。

そこで明治三十一年の「用語の區域」の拡大の実践と子規短歌にみられる地名の使用実態を調査する。子規短歌にみられる地名語彙（地理語彙の一分野）の使用実態について、地名が多く見られると考えられる、子規の手による紀行文<sup>注2</sup>の地名との比較を通して見てゆく。

### 第二節 地名語彙の使用実態

#### 第一項 地名の属する地域

#### 二――一―― 子規短歌の地名語彙

子規短歌に詠まれた地名語彙は次の通りである。地域ごとに独自に分類し、五十音順に語を挙げた。

伊予（愛媛）…愛媛県の地名

伊佐庭・石鎚の山・伊豫・與居島・道後・高浜・新居・二名・松山・三津

東京…東京都の地名

赤阪・赤羽根・秋葉・浅草・浅草川・飛鳥・飛鳥山・愛宕・荒川・芋阪・牛島・上野・上野山・嬉しの森・

江戸・御茶ノ水・音無の川邊・大江戸・大森・霞が關・金杉・鐘の淵・蒲田・神田・龜戸・木下川・小金井・

御殿山・駒形・櫻が岡・品川・不忍・不忍池・忍ヶ岡・巢鴨・洲崎・隅田<sup>（すだ）</sup>・隅田<sup>（すみだ）</sup>・隅田川・道灌山・立川・

多摩・玉川・千代田・寺島・寺島村・東京・豊島・中の郷・根岸・深川・本庄・待乳・待乳山・松葉が谷・

丸の内・三河島・三橋・向島・谷中・谷中路・吉原・鎧の渡・兩國

北海道…北海道の地名

蝦夷・北蝦夷

東北…東北地方の地名

安達太良・岩手・笠島・金峯山・信夫・鹽竈・白河・末の松山・千賀・出羽・富山・吹浦・松嶋・陸奥<sup>（みちのく）</sup>・

陸奥<sup>（むつ）</sup>・最上・最上川・山形・雄嶋

関東…東京以外の関東地方の地名

赤城・足柄・蘆の海水・綾瀬川・伊香保・市川・稻村が崎・裏見・江ノ島・大洗・大磯・大山・上野・鏡が浦・

葛飾・鎌倉・鎌倉山・上つ毛・上つ總・上總・黒髮山・黒戸・華嚴の瀧・小余綾・相模・三條・鳴立つ沢・

下野・下總・秩父・筑波・筑波嶺・戸田・利根・利根川・中川・那須野・習志野・男體・箱根・箱根路・榛名・

常陸・二荒(ふたあ)・二荒山・二子の山・二荒(ふた)・武蔵・武蔵野・睦岡・睦岡村・妙義・結城・横濱

甲信越…山梨、長野、新潟の地名

甲斐・木曾・木曾山・越・越路山・信濃・信濃路・白坂・諏訪・富士・富士山・夕富士

中部…甲信越を除く中部地方の地名

栗手・伊豆・清見潟・佐夜の中山・白坂・駿河路・滑の川・白山・富士・富士山・三保・養老の瀧・夕富士

京都…京都府の地名

宇治・宇治川・音羽の瀧・大内山・大原・大堰川・紙屋川・賀茂・賀茂川・北野・京・清水・四條河原・高尾・

鳥部山・比叡・廣澤・八瀬・山城

奈良…奈良県の地名

香具山・春日野・春日山・葛城・月が瀬・奈良・初瀬・三笠・三吉野・三輪・大和・吉野

近畿…京都・奈良以外の近畿地方の地名

明石・淡路・逢阪・逢阪山・近江・近江潟・近江路・伊勢・神戸・紀伊・こり須磨・櫻井・志賀・鈴鹿・須磨・

隅田河原・住江・住吉・瀬田・高砂・竹生嶋・津・中濱・灘・難波・難波江・難波潟・難波津・涙川・涙の川・

鳩照る海・播州・比巴・比巴湖・比良・普陀落・三上山・湊川邊・山崎・山田潟・八尾・淀川・和歌の浦・

度会・小倉山・尾上

中国（山陽）…瀬戸内側の中国地方の地名

安芸・厳島・吉備・敷名が濱・宮島

中国（山陰）…日本海側の中国地方の地名

出雲

四国…愛媛以外の四国地方の地名

阿波・讃岐・四國・多度津・八島潟

九州…九州地方の地名

日向・火の國・宮崎

日本…日本の国名を表すもの

敷島・豊葦原の瑞穂の國・日本・日の本・八洲・大和

アジア…日本以外のアジアの地名（含国名）

アムール・エヴェレスト・江東・唐・唐國・唐山・漢・北印度・黄の河・金州・黄河・華山・高麗・三崎・支那・上海・晋・シンガポール・震旦・秦淮・赤壁・高砂・高砂島・長安・天竺・中つ國・新高山・ヒマラヤ・ヒリピン・フォルモサ・渤・明・唐土・モンゴル・揚子・洛陽・遼東・廬山

欧米…欧米の地名（含国名）

アメリカ・おロシア・スエス・スペイン・パリ・パリス・フランス



架空…架空の地名

エデン・鬼が島・小人島

場所が特定できない「上野ロ」「権現の森」「忍の岡」「玉川」「鷲の御山」は、調査対象から外している。

右に挙げた語彙を使用した短歌の期間ごとの作品数を次に挙げる。( ) 内の数値は、各期間に作られた全ての作品数に対する、地名を詠んだ作品数の割合である。／の下の作品数は各期間のすべての作品数である。割合の小数第二位以下は四捨五入した(以降の割合も同様とする)。

明治三十年以前…	一六八首／五七六首 (29.2%)	紀行文…二七作品 (上京前…一、喀血前…六、喀血後…二〇)
明治三十一年…	一五八首／六九一首 (22.9%)	紀行文…一作品
明治三十二年…	七三首／三六八首 (19.8%)	紀行文…三作品
明治三十三年…	一四三首／六四五首 (22.2%)	紀行文…一作品
明治三十四年…	十七首／八九首 (19.1%)	紀行文…なし
明治三十五年…	十五首／六三首 (23.8%)	紀行文…なし

短歌革新前である明治三十年以前が、地名を短歌に詠み込む傾向が最も高くなっている。明治二十八年まで子規は旅行することができ、明治二十八年までの地名を詠んだ作品数は一六七首であるので、旅行が可能であった期間に多く地名が短歌に詠まれているといえる。

明治三十一年と明治三十二年は人力車での外出が可能であったが、明治三十年以前と比べ地名を詠むことが少なくなっている。

明治三十三年六月三日の麓宅の園遊歌会への出席が最後の外出となり、それ以降の子規は外出が不可能であった。明治三十三年も、明治三十年以前と比べ地名を詠むことが少なくなっているが、外出が可能であった期間である明治三十一年とは割合がほぼ同じである。

明治三四年までの短歌作品では、地名を詠む傾向が緩やかに減少しているが、明治三五年では地名を詠んだ作品が比較的多く見られる結果である。但し、明治三五年の十五首の内八首が、「碧梧桐赤羽根につくしつみにと再び出てゆく」と題の付された十三首の中の作品であり、明治三四年までの減少傾向から増加傾向へと変わったとは言いがたい。子規短歌に地名が詠まれる傾向は、期間を下ってゆくに従い概ね緩やかに減少しているといえる。

子規短歌に見られる地名の異なり語数と延べ語数を、期間と地域ごとにまとめたものが、次の表である。

表の M 30 は明治三十年以前、M 31 は明治三十一年、M 32 は明治三十三年、M 33 は明治三三年、M 34 は明治三四年、M 35 は明治三五年を表す。「異」は異なり語数、「延」は延べ語数を表す。

表より、明治三十一年に短歌に詠まれる東京とアジアの地名が大きく増加したことが分かる。子規は明治十六年に上

		M30	M31	M32	M33	M34	M35	計
伊予 (愛媛)	異	5	4	1	4	0	0	14
	延	10	5	1	7	0	0	23
東京	異	19	30	12	27	2	1	91
	延	40	48	14	51	3	8	164
北海道	異	1	1	0	1	0	0	3
	延	1	2	0	1	0	0	4
東北	異	7	7	3	5	4	4	30
	延	11	7	4	5	12	4	43
関東	異	23	21	13	17	2	4	80
	延	31	31	19	30	7	4	122
中部・ 甲信越	異	10	9	4	8	0	0	31
	延	29	22	4	13	0	0	68
京都	異	8	11	4	3	1	0	27
	延	11	12	4	4	1	0	32
奈良	異	2	4	4	5	1	1	17
	延	5	4	7	5	1	1	23
近畿	異	28	13	6	5	0	1	53
	延	38	24	8	5	0	1	76
中国 (山陽)	異	2	1	1	2	0	0	6
	延	3	1	3	4	0	0	11
中国 (山陰)	異	0	0	1	0	0	0	1
	延	0	0	1	0	0	0	1
四国	異	3	2	0	1	0	0	6
	延	3	3	0	1	0	0	7
九州	異	0	0	2	1	0	0	3
	延	0	0	3	1	0	0	4
日本	異	4	3	2	2	0	0	11
	延	9	8	2	7	0	0	26
アジア	異	5	19	7	14	0	0	45
	延	7	21	12	28	0	0	68
欧米	異	0	1	2	5	0	0	8
	延	0	1	2	7	0	0	10
架空	異	0	1	2	0	0	0	3
	延	0	1	2	0	0	0	3
計	異	117	127	64	100	10	11	
	延	198	190	86	169	24	18	

京し、明治二八年に中国（アジア）へ実訪している。東北や関東、中部・甲信越、京都、奈良の地名の異なり語数や延べ語数に大きな差は見られない。これらの土地を旅行したのも明治二八年までである。

## 二―一―二 短歌革新後の短歌の地名語彙

明治三年に初めて短歌に使用される地名を挙げる。また歌枕となっている地名には傍線を附す<sup>注3</sup>。

伊予（愛媛）…伊佐庭・石鎚の山

東京…赤坂・浅草川・飛鳥・荒川・上野・江戸・御茶ノ水・大江戸・霞が関・神田・御殿山・品川・

不忍・忍が岡・多摩・寺島村・東京・三河島・谷中・吉原・鎧の渡・兩國

東北…笠島・金華山・鹽竈・末の松山・千賀・陸奥<sup>むつ</sup>

関東…蘆の水海・伊香保・市川・大磯・上野・鎌倉・下總・戸田・利根・利根川・箱根路・榛名・二荒<sup>ふたじ</sup>・

武蔵

甲信越…木曾山・越・諏訪・夕富士

中部…清見潟・白山・夕富士

奈良…春日山・三笠・大和

京都…大原・紙屋川・賀茂川・北野・京・四條河原・鳥部の山・廣澤・山城

近畿…淡路・近江路・住吉・難波・難波潟・普陀落・播州・山崎・淀川・度会

中国（山陽）…宮嶋

四国 ……四國

日本 ……豐葦原の瑞穂の國

アジア ……エヴェレスト・江東・漠・北印度・黄の河・金州・黄河・華山・三崎・上海・晋・震旦・長安・

天竺・中つ國・新高山・洛陽・遼東

欧米 ……お露西亜

架空 ……鬼が島

明治三十一年に初めて使用された地名語彙九五語（異なり語数）である。明治三十一年に使用される全ての地名語彙の異なり語数が一二七語であるので、新しい題材としての地名の積極的な取り入れをすることができる。

明治三十一年に初めて使用された地名語彙の中、二二語が「上野」など東京の地名語彙であり、十八語が「金州」などアジアの地名語彙である。次いで「鎌倉」など関東の地名語彙が十四語である。明治三十年以前に見られない欧米と架空の地名語彙は、明治三十一年になって「お露西亜」「鬼が島」と一語ずつ見られるようになる。

関東の地名語彙の異なり語数と延べ語数に、明治三十年以前と三十一年の間に大きな差は見られない。それは「赤城」「常陸」など明治三十年以前に詠まれている地名語彙が、三一年以降に詠まれなくなる例が見られることによるものである。明治三十年以前に見られる関東の地名語彙二三語（異なり語数）の中で、十三語が三一年以降に詠まれなくなっている。

明治三十一年に初めて使用された地名語彙の中で、歌枕となっている地名語彙は「三笠」など二四語であり、愛媛、東京、中国（山陽）、四国、日本、欧米、架空には歌枕となっているものは見られない。

関東の地名語彙で歌枕となっているものは、十四語中二語（14.3%）、アジアの地名語彙で歌枕となっている地名語彙は十八語中二語（11.1%）であり、歌枕となっている地名語彙の増加は少ない。

東北と中部・甲信越の地名語彙で歌枕となっている地名はそれぞれ六語中三語（50%）、京都の地名語彙で歌枕となっている地名は九語中五語（55.6%）、奈良の地名語彙で歌枕となっているものは三語中二語（66.7%）、近畿の地名語彙で歌枕となっているものは十語中七語（70%）であり、歌枕となっている地名語彙の増加が多く見られる。

子規は明治三十一年に積極的に新しい地名語彙を詠み、そのような語は歌枕によらない「笠島」「鎌倉」「金州」といった東北、関東、アジアといった明治二八年までに訪れた土地が多いことが分かる。

この傾向は明治三十三年まで見られる。

明治三二、三十三年のそれぞれの年で初めて短歌に使用される地名語彙を挙げる。歌枕となっている地名語彙には傍線を附す。

伊予（愛媛）…道後・新居・二名

東京 …愛宕・芋坂・上野山・音無川邊・大森・金杉・蒲田・龜戸・木下川・小金井・櫻が岡・巢鴨・

道灌山・豎川・玉川・千代田・豊島・本庄・丸の内・三橋・谷中路

北海道 …北蝦夷

東北	…岩手・富山・最上・山形
関東	…足柄・稲村が崎・大山・葛飾・鎌倉山・黒髪山・黒戸・華嚴の瀧・三條・筑波嶺・二荒山・松葉が谷・横浜
甲信越	…信濃路・白坂
中部	…白坂・駿河路・滑川・三保
京都	…比叡・八瀬
奈良	…春日野・葛城・月が瀬・三吉野・三輪・吉野
近畿	…紀伊・津・浪速津・湊河邊・八尾・小倉山・尾上
中国（山陽）	…吉備・敷名が濱
中国（山陰）	…出雲
四国	…阿波
九州	…日向・火の國・宮崎
日本	…日本
アジア	…アムール・唐國・高麗・支那・シンガポール・秦淮・赤壁・高砂・高砂島・ヒリピン・フォルモサ・明・モンゴル・揚子・廬山
欧米	…アメリカ・スエス・スペイン・パリ・パリス・フランス

明治三二、三三年で新しく使用される地名語彙の異なり語数は九三語である。明治三二年と明治三三年の短歌に見られる地名語彙の異なり語数が一五一語（明治三二年の全て地名語彙の異なり語数が六四語、三三年の全ての地名語彙の異なり語数一〇〇語）であるので、大半が新しく使用されるようになった地名語彙であると言える。明治三十一年の作品で初めて使用されるようになった地名語彙（異なり語数九五語）の、同年の作品に見られる全ての地名語彙（異なり語数一二七語）に対する割合が74.8%であったのに、明治三二、三三年の作品で初めて使用されるようになった地名語彙（異なり語数九三語）の、同二期間に見られる全ての地名語彙（異なり語数一五一語）に対する割合は61.6%である。短歌革新直後よりも割合は減少しているが、新しい題材としての地名を積極的に取り入れる姿勢は見られるといえる。

明治三二、三三年の短歌で初めて使用される地名語彙（異なり語数九三語）の中で、東京が二一語、アジアが十五語、関東が十三語である。明治三十一年で初めて一語が見られるようになる欧米の地名語彙は、明治三二、三三年では六語見られる。

明治三十一年に見られた東京と関東、アジアの地名を新しい題材として積極的に用いる姿勢が明治三二年、三三年でも見られる。また欧米の地名も他の期間と比べ多く見られる。明治三二、三三年の短歌では題材の拡大の範囲が広まったといえる。

明治三二、三三年の短歌で初めて使用される地名語彙（異なり語数九三語）の中で、歌枕となっているものは二〇



語であり21.7%を占めている。明治三一年では、初めて使用される地名語彙（異なり語数九五語）の中で、歌枕となっているもの（異なり語数二四語）は25.3%を占めている。明治三二、三三年は、短歌革新直後よりも歌枕に拠らない題材の拡大が、明治三一年よりもやや見られるといえる。これは関西や東北の地名を新しく使用する傾向が、明治三一年の場合よりも小さくなっていることや、「シンガポール」「アメリカ」など欧米などのカタカナ表記される地名語彙を積極的に詠んでいることが影響していると考えられる。

明治三一年で初めて見られる地名語彙では、明治二八年までに訪れた土地が多く見られ、明治三二、三三年も亀戸や華厳の滝など旅行先の地名が多く見られる。

明治三三年までの作品では、旅行した土地を題材にした作品が多く見られる。次に木曾を題材にした作品の例を挙げる。木曾へは明治二四年に旅行している。

むかしたれ雲のゆきゝのあとつけてわたしそめけん《木曾》のかけはし

（拾遺二一四・二四年）

檜の木山杉山越えて薦の這ふ《木曾》のかけ橋今見つるかも

（七五一・三一年）

蠶飼する《木曾》の山里五月來て桑の實赤し鳴くほとゝきす

（一〇九九・三二年）

義仲が兎を狩りて遊びけん《木曾》の深山は檜生ひたり

（一三八八・三三年）

「檜の木山」「蠶飼する」「義仲が」の作品のように、明治三一年から三三年の作品では、実際に旅行した年よりも後に当地を題材にした例が多く見られる。

加えて明治三二、三三年では、特にアジアや欧米の地名で、次のような他者の旅先が複数見られるようになる。

《秦淮》の秋の柳の秋寒みから人さびて詩を詠まんかも

(一二二六・三二年)

《ふらんす》のはりに行く繪師送らんと晝をかきにけり牛くひにけり

(一三七三・三三年)

《フォルモサ》の《高砂島》に君行かば島人さびてバナ、くふらん

(二六二〇・三三年)

「秦淮の」の歌は「種竹山人の支那漫遊を送る」とある十首の中の一首である。「ふらんすの」の歌は「默語氏の送別會を庵に開きて」のものであり、「フォルモサの」の歌は「臺灣に行く人を送る」のものである。

明治三二、三三年の短歌は、三一年から引き続き東京と関東、アジアの地名を新しい題材として積極的に用いる姿勢が見られる。また子規の旅行先だけでなく「フランス」など知人の旅行先を詠むことも多く見られるようになり、その影響かアジアと欧米の地名の内容が豊かになっている。

明治三四年以降の作品で初めて使用される地名語彙は次の十語である。歌枕となっている地名には傍線を附す。

東京 … 赤羽根

東北 … 安達太良・出羽

関東 … 上つ總・上總・睦岡・睦岡村・結城

奈良 … 香具山

近畿 … 近江

明治三四年以降の短歌の地名語彙は異なり語数二十語（「陸奥」の一語が明治三四年と三五年度の両方に見られる）であるので、半数が三四年以降に新しく詠まれた地名語彙である。

明治三四年以降で初めて使用される地名語彙の中で、歌枕となっているものは六語（出羽・上つ總・上總・結城・香具山・近江）であり60%を占めている。これまで増加が著しかった東京とアジア、欧米の地名語彙はほとんど見られなくなっている。

明治三四年以降の短歌で初めて使用されるようになる地名語彙は歌枕となつて多いが、意識的に歌枕を増やしたとは考えられない。子規の歌枕となつている地名語彙の詠み方は、次の例のように人物紹介や贈り物など他者の行動に基づくものがほとんどである。

《上ツフサ》陸岡村ニ生レタルワラビガ知ラヌゲン／＼ノ花

（拾遺四九八・三五年）

《かみふさ》の山の杉きりみやこべの茅場の町に茶室つくるも

（拾遺四五八・三五年）

下總の《結城》の里ゆ送り來し春の鶉をくはん齒もがも

（拾遺四一三・三四年）

《香具山》に鏡鑄し時の金くそはほつまの神となりそこねけむ

（拾遺五〇五・三五年）

《近江》のやいふきおろしにさらしたる米の粉たひし君し戀しも

（拾遺五〇〇・三五年）

子規短歌の上總（上つ總、上總）は、「上ツフサ」の歌では蕨真（蕨真一郎）の人物説明の役割であり、「かみふさ」の方は歌より子規の行動ではないものと分かる。

子規短歌の結城は三首に詠まれている。三首全てが「下總の」の歌のように贈り物に対する作品であり、知人の行動によって作られたものである。

子規短歌の香具山は「嘲諸兄歌」と題のある五首の中の一首であり、これも知人の人物紹介に基づくものである。

子規短歌の近江は「近江日野なる鈴木ふさ子より寒晒粉を贈りこしければ」とあるものであり、知人の行動（贈り物）による作品である。

出羽について、出羽は子規の旅先の地名であるが短歌ではその光景が詠まれていない。

《出羽》に行きし吾旅傘の柄はぬけて今か牡丹の雨ふせき傘

（拾遺四三二・三四年）

この「出羽に行きし」の歌は「牡丹」と題のある十一首の中の一首である。子規の旅先である出羽の光景は詠まれておらず、出羽は牡丹にかぶせている傘の説明をしている。

明治三四年以降の短歌で初めて使用されるようになる地名語彙は歌枕となっているものが多いが、意識的に歌枕を増やしたとは考えられない。歌枕としての景勝を詠むのではなく、子規の身近な人や出来事に基づいて詠む例が増えている。

明治三四年以降の短歌で初めて使用される他の地名語彙（赤羽根、安達太良、睦岡村、睦岡）でも、子規の身近な人や出来事に基づいて詠まれている。

《赤羽根》のつゝみに生ふるつく／＼しのひにけらしもつむ人なしに

（拾遺四八二・三五年）

みちのくの《あたゝら》眞綿肌につけ寒きゆふへは君し思ほゆ

（拾遺三六一・三四年）

上ツフサ《睦岡村》ニ生レタルワラビガ知ラヌゲン／＼ノ花

（拾遺四九八・三五年）

《睦岡》のわらびおとゞは水たまる池田のあそのみ末なるべし

（拾遺五〇四・三五年）

「赤羽根の」の作品は、碧梧桐が赤羽根へ土筆を摘みに行くことを受けての作品群のものである。赤羽根を詠んだ

作品全てがその作品群のものである。

「みちのくの」の作品は、真綿を貰ったことへの御礼のものである。安達太良は子規の旅行先の地名であるが、景色は詠まれおらず、「真綿」の説明となっている。

「上ツフサ」と「睦岡の」の二首のように、子規短歌での睦岡は蕨真の人物説明となっている。

明治三四年以降も地名語彙の題材の拡大は見る事ができる。それは人物説明や他者の行動に基づいたものであり、歌枕を積極的に使用するようになったのではない。これは明治三二、三三年に知人の旅行先を詠むことが複数見られるようになったことから繋がっていると考えられる。

子規自身の記憶に基づいた地名語彙の例も見られるが例数は少ない。次に二首の例を挙げる。

去年の春《龜戸》に藤を見しことを今藤を見て思ひいでつも  
(拾遺三六九・三四年)

この藤は早く咲きたり《龜井戸》の藤咲かまくは十日まり後  
(拾遺三七一・三四年)

明治三一年から三三年の作品では、旅先の地名語彙を実際の旅より後年に詠む例は多く見られるが、明治三四年以降の作品では少なくなっている。

## 第二項 紀行文との差異

紀行文に出てくる地名について、次のような文から採録することができる。地名が確認できる文例を一部挙げる。

(一) 内に引用の紀行文名、全集の巻数(○で囲んである)、頁数を挙げる。地名の箇所傍線を附した。

① 出発・到着・通過・滞在の地点

…日くるゝ頃より小舟一艘をかりて辛崎へと志す…

〔しやくらの記〕 ⑬ 四五一頁

…八日大阪を發し神戸より新八幡丸に乗る

〔しやくらの記〕 ⑬ 四三八頁

…國府津小田原は一生懸命にかけぬけてはや箱根路へかゝれば…

〔旅の旅の旅〕 ⑬ 四九四頁

…廣瀨川に沿ふて溯る。…

〔はて知らずの記〕 ⑬ 五五二頁

② 事物などの存在・所属する場所

武藏野の月草より出でゝ草に入らばこそ。…

〔大磯の月見〕 ⑬ 四八六頁

…奥州地方は賤民普通に胡瓜を生にてかちる事恰も眞桑瓜を食ふが如し。…

〔はて知らずの記〕 ⑬ 五四一頁

③ 思考や行動の対象

…今年は日光の紅葉狩にと思ひ付きぬ。…

〔日光の紅葉〕 ⑬ 五一五頁

…蓋し日蓮は弘法に比して更に俗なるものから其抱負の大なるに至ては豊公と肩を比ぶべく或はいふ彼は外國に

志ありたりと…

〔閒遊半日〕 ⑬ 六〇三頁

④ 名所、歴史的な土地であることの説明がされている地名

…福島の郭外小さき山一つよこたはれり。これなん信夫山といふ名所にて其の側に公園の設けありと聞きしかば  
そのことなくそゞろありきす。…

〔はて知らずの記〕 ⑬ 五三九頁

…途中葛の松原を過ぐ。世の中の人にはくずの松原といはるゝ身こそうれしかりけれと古歌に詠みし處なり。…

（「はて知らずの記」⑬五四一頁）

⑤自然描写の見られる地名

…谷中の墓地を行くにこゝかしこの山茶花紅さざんくわに咲きて低き銀杏の黄葉と照りあへる、夕日のさまもいとはなやかに心ありげなり。…

（「小石川まで」⑬六三五頁）

⑥人事描写がされている地名

…蒲田村の道傍に整列せる一隊の幼男幼女は小學校の生徒なるべし…

（「閒遊半日」⑬六〇二頁）

⑦その他の描写が見られる地名

…本所の町はづれ早や少しく都離れて原の中にかた許りの家新らへしゝく場内の人まばらに田舎めきたるが多し…

（「總武鐵道」⑬六〇五頁）

⑧景色・景物の説明（文中では訪れていない）

…彼の洋々として千里に流れ富峰を鏡中に涵し筑波を畫裡に寫し江東は櫻樹十里に連なり江西は樓閣千戸を接す、

（「三方旅行」⑬五七七頁）

⑨子規の空想の地名

…こゝもかしこも別荘だらけにて此處は五十年後の地圖には別荘町といふ處になるべし

（「水戸紀行裏四日大盡」⑬四二〇頁）

⑩地理的な位置関係の説明

…行きくつてつまる處を唐岬からかいの瀧、其隣の谷間を白猪しらみの瀧といふ…

（「山路の秋」⑬四七〇頁）

⑪心理的な位置関係の説明

…昔は鴨緑江に水かはんと言ひ長白山に旗を翻さんといふこと…遠きあたりとこそ思ひしが今は一字不通の匹夫匹婦も旅順平壤を隣のやうに覺えて蝦夷よりも琉球よりも近き心地ぞする…

（「總武鐵道」⑬六〇五頁）

⑫台詞中のもの

「斯の模様では支那も最う到底かなひますまい 旅順口さへ取れば大丈夫です 觀音嶺を取つたやうなものですから、…」

（「閒遊半日」⑬五九九頁\*汽車で乗り合わせた乗客のもの）

中には芝居風のものも見られる

…主婦ツレ「御前に候 して「我このたび關東より下向したるは。……して「有がたや羽衣の實物を見たり。…山嶺島嶼孤雲の外にみちくつて。ケットーのくれなゐは蘇命路の山をうつして。緑は波に浮嶋か。…三保の松原うき嶋か雲の。足高やまやふしのたかね。…」

（「しやくられの記」⑬四三〇～四三二頁\*羽衣の松について江尻の宿の主人に尋ね案内してもらつた内容）

⑬人物の説明

…船の中にて石井八萬次朗氏に邂逅したるはこよなくうれしく其故を問へば故郷（嵯峨）より肥後五箇莊などを經て薩摩に至り日向の細島より此船に乗りしといふ…

（「しやくられの記」⑬四四八～四四九頁）



⑭比較・伝聞・知識によるもの

…四五十間の高さの巖のいくつともなくかんなのごとつらなり立てるはげにめづらしきながめなり ある人の耶馬溪にもまされりといふはまことか (「しやくらの記」⑬四四六頁)

…中につきて五箇荘あたりに米のなきこと筑後と細嶋とにバサルトの六角柱あること其他霧嶋櫻嶋の火山の模様などお手の物だけに面白く聞こえし。…

(「しやくらの記」⑬四四九頁 \*「バサルト」の傍線は本文にあるもの)

…此城出来し後白河二所の關は廢せられたりといふ…

(「はて知らずの記」⑬五三四頁)

⑮遠くの景色として

…つぐの朝三井寺にうつるに湖山一望の中にありて閨の中より猶全景を見得べし…石山瀬田粟津は右の山にかくれて見えず比良堅田辛崎の松は左のかたにおぼろげに望むべし… (「しやくらの記」⑬四五二頁)

⑯子規自身の引用文

拜啓仕候一昨夜はわざ／＼三津迄御送別被下奉萬謝候 平穩丸は夜半に三津へ着船、…時間は損する食ふた者は出す 問屋では金を使ふ 誠に／＼大損を致し候 御一笑可被下候

血にあらぬ小間物までも吐き出して大損かけたと子規啼く (「上京紀行」⑩二六八頁)

このように子規の紀行文に見られる地名は、必ずしも子規が訪れた土地のものでないことが分かる。

子規の紀行文に見られる地名は次の通りである。地域の分類は前出のものと同様である。中国地方については紀行文に山陰の地名語彙が見られないので、「中国」と一つにまとめる。

### 伊予（愛媛）

天山川・石手川・今出・今出村・今治・伊豫・伊豫全國・大洲地方・河の内・唐岬の瀧・九谷等・久保田・久萬町・久萬山・久萬山岩屋杯・來島・來島瀬戸・鷺谷・重信川・白猪の瀧・大街道・道後・竹の宮・竹谷・立花口・玉川町・土井田・中の川・新居濱・畑中村・波止濱・東山・保免・松枝町・松山・松山邊・松山地方・松山停車場・三坂・御崎・三津・三津港・御幸寺山・森松・由利嶋・余戸・吉敷・和氣・井門・惠原

### 東京

赤羽根・浅草・飛鳥山・飛鳥山下・荒川・池上・池上道・板橋街道・一宮・今戸・入谷・鷺横町・牛島・上野・上野停車場・江戸川・小笠原嶋・奥街道・音無川・大嶋・金杉・蒲田・蒲田村・龜戸・木下川・神田・金助町・切通坂・小金井位・乞食坂・五條邊・小向井・猿樂町・品川・不忍池畔・忍川・新阪・新宿・新橋・新橋停車場・墨江・墨陀・隅田川・墨水・摺鉢山・浅間・千住・千住街道・道灌山・高幡・高尾山・瀧の川・狸横町・田端停車場・玉川・寺島近傍・東京・東臺山下・西新井・日本堤・根岸・根岸邊・八王子・原町・日野驛・深川・府中・本郷・本郷臺・本所・待乳山・三河島・三橋・箕輪・向島・向島邊・谷中・兩國・連雀町・六郷村・王子

### 北海道

蝦夷

## 東北

奥羽・奥州・奥州地方・秋田・浅香沼・浅香の沼・愛宕山・安達太良・安達太良山・安達が原・阿武隈川・愛子・荒瀬・青葉山・石脇・市川村・岩切停車場・岩代・岩手・岩沼・飯坂・飯坂温泉・今市・浮嶋・羽州街道・大石田・大久保・大須郷・大曲・笠島・河童淵・金浦・龜島・寒風山・舊白河領・清川・金華山・葛の松原・桑折・黒澤尻・観音寺・御所野・郡山・酒田・象潟・作並温泉・信夫・信夫山・鹽竈・鹽越・鹽越村・鹽手村・白河・白河驛・神宮寺・神宮寺山・須賀川・杉名畑・摺上川・末の松山・仙臺・仙臺市・仙臺停車場・仙人澤・大黒島・武隈・楯が崎・楯岡・玉川・月星島・躑躅が岡・鳥海・鳥海山・手樽村・出羽・天童・東北・戸島・富山・二所の關・二本松町・白水・橋本・八郎・八郎潟・八郎湖・東根・東根村・毘沙門島・一日市・平澤・廣瀬川・福浦島・福島・福島縣下・福島町・福原・吹浦・古口・古雪川・蛇島・蓬萊島・本合海・本庄・盲鼻・籬が島・増田・松島・松原・眞山・道川・陸奥・水澤・南杉田・宮澤の渡し・最上・最上川・本宮・本山・矢立峠・山形・遊佐・湯田・湯殿山・湯野・米澤・陸羽・六郷・和賀川・若松・雄島

(みちのく)

## 関東

赤城・旭嶽・蘆の湖・吾妻・安房・安孫子驛・石橋山・石岡・磯濱・磯部・磯部停車場・市川・稻吉・祝町・茨城縣・印旛沼・牛久・牛久驛・宇都宮・上市・浦賀・浦和・江の浦・江ノ島・大洗・大磯・大多喜・大宮・上野・二州・鏡が浦・鏡の灣・霞ヶ浦・片倉・神奈川・金澤・川口・川崎・川崎驛・鎌倉・上町・烏川・含滿・行徳・霧積・錦鶏山・熊谷・關東・観音崎・華嚴・華嚴の瀧・化粧井・化粧坂・小磯・鴻の巣・鴻の臺・国府津・小金

驛・滹沱河・小幡・高麗山・小湊・古餘呂伎・金洞山・相模・相模路・相模灘・佐倉・櫻川・鳴立澤・酒酒井・  
下町・七里の濱・鹽原・下市・下野・下總・上州・常州・常州邊・白雲山・洲崎・仙波湖・仙波沼・草加・相州・  
大谷川・高崎・竹原・館山・秩父山中・千葉・千葉縣・千葉街・中禪寺湖・長者林・筑波・筑波山・土浦・  
土浦町・鶴ヶ岡・鶴見・照ヶ崎・東海道・東海道筋・戸塚・利根川・富山・取手・那珂川・中貫・中村・長柄山・  
長岡・那古・那須野・七浦・成田・男體・日光・日光町・日光停車場・女體・根府川近邊・鋸山・野嶋崎・箱根・  
箱根驛・箱根街道・箱根路・長谷・花水川・花水川位・榛名・板東太郎・常陸・常陸邊・平磯・吹上・二子山・  
藤澤・藤代・船橋・房州・房總・保多・程ヶ谷・幕張停車場・松戸・松戸驛・丸山・馬渡・馬渡驛・水戸・水戸  
街道・水戸上市・水戸地方・武蔵・武蔵野・武州・武相房州・妙義・妙義町・元箱根・唐原・野州・由比・  
由比が濱・湯元・淘綾・横川・横須賀・四街道・六郷川・小倉山・小田原

## 甲信越

上松・稻荷山・碓氷・越後・川中島・甲州・輕井澤・輕井澤峠・木曾・木曾川・木曾路・木曾停車場・越・犀河・  
西湖・信州・須原・洗馬・妻籠・直江津・奈良井・寐覺の里・野尻・笛吹嶺・福島・富士・富士山・北越・松本・  
三留野・宮の越・本山・藪原

## 中部

麻生・熱海・伊豆・伊豆山・江尻・遠州濱・大垣・鏡の池・櫻澤・篠井・關が原・立峠・巴が淵・鳥居嶺・  
名古屋・南條・葦山・初島・馬場峠・馬場嶺・原新田・富士・富士山・伏見・富峰・馬籠・三島・亂橋・美濃路・

三保・三保が崎・三穂の松原・養老・養老の瀧・養老の瀑布・山崎・山科・山吹が淵・餘戸村

#### 京都

桂川・祇園・京・京都・清水・嵯峨・東區・東山・伏見

#### 奈良

飛鳥

#### 近畿

明石・淡路島・粟津・逢坂山・近江・近江富士・生田の森・石山・伊勢・一の谷・梅田・大阪・大津・神戸・堅田・辛崎・北村・草津驛・五箇莊・五箇莊邊・國府村・國分村・三宮・須磨・瀬田・長等山・難波・布引の雌瀑・布引瀑・馬場・兵庫・兵庫港・比良・福原・舞子が濱・三上山・蜈蚣山・桃山・和田

#### 中国

足高山・周防・瀬戸・津山・播磨洋・播山・播州・播州洋・三坂・三坂山麓・三田尻

#### 四国

興居島・多度津・土佐・南海・丸龜・八島・由良山

#### 九州

霧嶋・櫻嶋・薩摩・筑後・八面山・日向・肥後・細島・松浦潟・耶馬溪・琉球

日本

神州・日本・日本中

アジア

威海内・鴨綠江・支那・大明・平壤・并州・蒙古・旅順・旅順口

欧米

アメリカ・欧州・泰西・ローマ

架空

月島・錦島・別荘町・雪島

場所の特定が出来なかった「鴉溪」「尻瀧」「長白山」「處山」「猶川」「富見」は調査対象から外した。

次の表に、子規の紀行文に見られる地名の異なり語数と延べ語数を、前出の表と同様にまとめる。

		M30	M31	M32	M33	計
伊予 (愛媛)	異	50	0	0	0	50
	延	89	0	0	0	89
東京	異	64	12	12	3	91
	延	134	14	15	3	166
北海道	異	1	0	0	0	1
	延	1	0	0	0	1
東北	異	131	0	0	0	131
	延	216	0	0	0	216
関東	異	175	0	1	0	176
	延	311	0	1	0	312
甲信越	異	33	0	0	0	33
	延	54	0	0	0	54
中部	異	39	1	0	0	40
	延	59	1	0	0	60
京都	異	9	0	0	0	9
	延	13	0	0	0	13
奈良	異	1	0	0	0	1
	延	1	0	0	0	1
近畿	異	39	0	0	0	39
	延	73	0	0	0	73
中国	異	11	0	0	0	11
	延	12	0	0	0	12
四国	異	7	0	0	0	7
	延	16	0	0	0	16
九州	異	11	0	0	0	11
	延	12	0	0	0	12
日本	異	3	0	0	0	3
	延	4	0	0	0	4
アジア	異	9	0	0	0	9
	延	11	0	0	0	11
欧米	異	4	0	0	0	4
	延	4	0	0	0	4
架空	異	4	0	0	0	4
	延	5	0	0	0	5
計	異	586	13	13	3	
	延	1004	13	16	3	

紀行文では東北と関東が特に多く、愛媛、東京と中部、近畿もやや多くなっている。短歌と比べると、長期間の旅行先である東北や、旅行の始点や終点となる伊予と東京、繰り返し訪れる関東の地名語彙が多く見られる。子規の旅行の期間や回数と紀行文に見られる地名語彙との関係は、短歌の場合よりも密接であるといえる。

紀行文にみられるように、特に東京と関東は短歌革新前の時期から身近な地名であったが、短歌に積極的に詠まれるようになるのは明治三十一年の短歌革新以降である。紀行文ではよく見られる愛媛の地名は、短歌革新以降に積極的に使用されているとは言えない。

紀行文に見られる地名語彙を次の四つに独自に分類する。

自然物名                   …信天山・三上山・相模灘・松浦潟・墨江・花水川・中禅寺湖・華厳の滝・養老の瀑布など

交通施設名               …相模路・東海道・千住街道・水戸街道・安孫子驛・磯部停車場・宮澤の渡・三津港など

国名、地方名、都道府県名

…奥州・東北・北越・水戸地方・相模・神奈川・秋田・千葉縣・武相房州・欧州・泰西など

市町村などの名前…松山地方・仙臺市・大街道・八王子・連雀町・六郷村・狸横町・八軒家・羅馬・別荘町など

紀行文で最も多く見られるのは市町村などの名前であり、異なり語数は三三〇語である。紀行文に見られる地名語彙全体（異なり語数六〇六語）の54.5%を占めている。次いで多く見られるのは自然物名の一七五語（異なり語数）であり、全体の28.9%を占める。国名、都道府県名は六五語で10.7%を占め、最も少ないのが交通施設名は三六語であり全体の5.9%である。

紀行文では旅の目的地の他に通過した土地、目にした土地も記録しているため、市町村レベルの地名が多数見られる結果であったと考えられる。

短歌に見られる地名語彙を、前述の紀行文の地名語彙の四項目に従い分類する。結果は次の通りである。全体の異なり語数は三一四語である。

自然物名                   …鳥部山・難波潟・最上川・蘆の水海・養老の瀧・江ノ島・エヴェレストなど   一〇四語（33.1%）



交通施設名 ……谷中路・鎧の渡・箱根路・信濃路・駿河路・近江路

六語（1.9 %）

国名、地方名、都道府県名

……日の本・江戸・大江戸・出羽・陸奥・東京・山形・漢・アメリカなど

七一語（22.6 %）

市町村などの名前……二名・根岸・白河・大洗・北野・丸の内・金州・江東・上海・パリなど

一三三語（42.4 %）

紀行文の場合と比較すると短歌の方が、国名、都道府県名と自然物名が多くなっている。市町村などの名前は短歌の中でも最も多く使用されているが、紀行文の場合と比べると少なくなっている。交通施設名は紀行文でも少ないが、短歌ではさらに少なくなっている。

伊予（愛媛）と東京の短歌と紀行文に見られる地名語彙の相違の例を次にあげる。

伊予（愛媛）の地名（短歌）

自然物名

……石鎚の山

交通施設名

……なし

国名、地方名、都道府県名……伊豫

市町村などの名前……伊佐庭・道後・高浜・新居・二名・松山・三津

伊予（愛媛）の地名（紀行文）

自然物名

……天山川・石手川・唐岬の瀧・久萬山・久萬山岩屋杯・來島・來島瀬戸・重信川・白猪の瀧・

波止濱・御幸寺山・由利嶋

交通施設名

…松山停車場・三津港

国名、地方名、都道府県名

…伊豫・伊豫全國

市町村などの名前…今出・今出村・今治・大洲地方・河の内・九谷等・久保田・久萬町・鷺谷・大街道・道後・

竹の宮・竹谷・立花口・玉川町・土井田・中の川・新居濱・畑中村・八軒家・東山・保免・

松枝町・松山・松山邊・松山地方・三坂・御崎・三津・惠原・森松・余戸・吉敷・和氣・

井門

短歌に見られる地名（東京）

自然物名

…浅草川・飛鳥・飛鳥山・荒川・上野山・嬉しの森・音無の川・鐘の淵・木下川・不忍池・

（すみだ）

（すみだ）

隅田・隅田・隅田川・道灌山・玉川・待乳・待乳山

交通施設名

…谷中路・鎧の渡

国名、地方名、都道府県名

…江戸・大江戸・東京

市町村などの名前…赤阪・赤羽根・秋葉・浅草・愛宕・芋坂・牛島・上野・御茶ノ水・大森・霞が関・金杉・

紀行文に見られる地名（東京）

蒲田・神田・亀戸・神田・小金井・御殿山・駒形・桜が岡・品川・不忍・忍が岡・巣鴨・  
洲崎・立川・多摩・千代田・寺島・寺島村・豊島・中の郷・根岸・深川・本庄・丸の内・  
三河島・三橋・向島・谷中・吉原・両国

自然物名

…飛鳥山・飛鳥山下・荒川・江戸川・小笠原嶋・音無川・大嶋・龜戸・木下川・不忍池畔・  
忍川・墨江・墨陀・隅田川・墨水・擦鉢山・道灌山・高尾山・瀧の川・玉川・東臺山下・  
猶川・待乳山

交通施設名

…池上道・板橋街道・上野停車場・奥街道・新橋停車場・千住街道・田端停車場・日野驛  
国名、地名、都道府県名…東京

市町村などの名前…赤羽根・淺草・池上・一の宮・今戸・入谷・鶯横町・牛島・上野・金杉・金助町・蒲田村・

神田・切通坂・小金井位・乞食坂・五條邊・猿樂町・品川・新宿・新橋・淺間・千住・

高幡・狸横町・寺島近傍・新阪・西新井・日本堤・根岸・根岸邊・原町・深川・府中・本郷・

本郷臺・本所・三河島・箕輪・三橋・向島・向島邊・谷中・兩國・連雀町・六郷村・

王子

短歌と紀行文の伊予（愛媛）と東京の地名を比べると、短歌では交通施設名と市町村などの名前の減少を見ることが  
できる。特に愛媛の場合では、短歌での交通施設名と市町村などの名前の減少がより顕著に見られる。

短歌が紀行文よりも国名、都道府県名が多くみられたのは、外国の地名によるところが大きいといえる。

アジア・欧米の地名（短歌）

自然物名                   …アムール・エヴェレスト・唐山・黄の河・黄河・華山・新高山・ヒマラヤ・揚子・廬山

交通施設名               …なし

国名、地方名           …唐・唐国・漢・北印度・高麗・支那・晋・シンガポール・震旦・高砂・高砂島・天竺・

中つ国・ヒリピン・フオルモサ・普陀落・明・唐土・モンゴル・アメリカ・おロシア・

スエス・スパニア・フランス

市町村などの名前…江東・金州・三崎・上海・秦淮・赤壁・長安・渤・洛陽・遼東・パリ・パリス

アジア・欧米の地名（紀行文）

自然物名                   …鴨緑江

交通施設名               …なし

国名、地方名           …支那・大明・蒙古・アメリカ・欧州・泰西

市町村などの名前…威海内・旅順口・平壤・并州・旅順・ローマ

紀行文と比べ、短歌の地名語彙に交通施設名と市町村などの名前が少ないことについて、次のことが考えられる。

一つに、紀行文に記録される短歌は一二四首見られるが、その中で地名が詠まれているものは三八首である。これ

は紀行文中で場所を特定し且つ短歌でも場所を特定することを、子規があまり行わなかった為と考えられる。

例えば「はて知らずの記」で次の描写<sup>注4</sup>がある。

日暮れなんとして古口に着く。下流難所あれば夜舟危しとてこゝに泊るなり。…

九日早起舟に上る。暁霧濛々夜未だ明けず。

すむ人のありとしられて山の上に

朝霧ふかく残るともし火

短歌では場所は特定されていないが、前の文章で古口での作品であることが分かる。紀行文で市町村などの名前を記録しても、それを短歌に表すことがほとんど見られない。地名が詠まれている紀行文中の短歌三八首の内、八首のみが市町村名などの名前が用いられている。ほとんどが次の歌のように自然物名を詠み込んでいる。

山との錦のきぬにつゝまれてお白粉つけり雪の《ふし山》

(拾遺一四三・二二年)

下つけの《なすの》ゝ原の草むらに覺束なしや撫子の花

(二四八・二六年)

心なき月はしらしな《松嶋》にこよひ許りの旅寐也とも

(二五六・二六年)

晝にもならず歌にもならず《武藏野》は只はろく／＼に山なしにて

(一二四六・三二年)

二つに、紀行文での市町村名の多くに「鶯横町」などの地名が見られるが、これらの地名は国名や都道府県名よりも現地以外の人には馴染みのないものではないだろうか。このような地名が紀行文に見られるのは、子規が目的地の途中で通過した土地や宿泊した土地も紀行文に記録されていることが大きな要因である。短歌にも市町村名は多く見られるが、紀行文のものよりも、現地の人以外に分りやすい地名語彙が多いのではないか。

三つに「上野停車場」といった駅名や「三津港」といった港名、「板橋街道」といった「く街道」の形の語彙は短歌に詠まれていない。またこのような地名語彙であらわされる地名は、市町村レベルのものであるので、二つ目と同じ理由が考えられる。

明治三十一年以降、子規短歌において「用語の區域」の拡大が見られるが、このように現地の人以外の読み手にとって分かりづらい地名は、積極的に用いることはしていないと言える。また短歌革新以降も、交通施設名も「信濃路」など「く路」の形が多く、「く驛」「く停車場」「く港」「く街道」の形がないといった使い分けが見られる。この使い分けは後述の短歌では日本の地名を和語で表現し、漢語での表現を避ける傾向があることと繋がっている。

ここまで、短歌と紀行文の間に交通施設名の使い分けがあることを指摘した。同様の例を日本の旧国名の表現に見ることができる。短歌では日本の地名を漢語で表現する例は一例のみである。

敦盛の墓弔へば花もなし春風春雨《播州》に入る

(五六九・三十一年)

紀行文には複数見ることができる。紀行文で「奥州」や「常州邊」といった「く州」と日本の地名を表現した例は次のものである。(一)内に短歌に見られる対応する地名を挙げる。

東北…羽州街道(出羽)・奥州(陸奥)・奥州地方(陸奥)

関東…上野二州(上野・下野)・上州(上野)・常州(常陸)・常州邊(常陸)・相州(相模)・房州・武州(武蔵)・

武相房州(武蔵・相模)・野州(上野・下野)

甲信越…甲州（甲斐）・信州（信濃）

中部…遠州濱

山陽…播州・播州洋

日本…神州（日本）

アジア…并州

欧米…欧州

明治三十一年以降、子規は漢語・洋語で表現される題材も広く求めているが、日本の地名を短歌に詠む際に漢語での表現にすることは殆ど行わなかったといえる。この点に子規の短歌と紀行文の地名語彙の使い分けが見られると言える。

明治三十一年で子規は、短歌の題材を広く求める際に、和語以外の言葉も用いることができると唱えている。この主張の実践の現れとして、明治三十一年に漢語で表される中国の地名（支那など）の積極的な使用が見られ、次いで三三年にカタカナで表記される地名（モンゴルやフランスなど）の複数使用が見られる。

明治三十年以前の短歌では、使用された中国の国名を表す語の中で、「唐」「唐土」「唐山」が和語である。

見わたせは《もろこし》かけて舟もなし霞につゞく渤海原

（二九〇・二八年）

明治三十一年以降の短歌では、「唐國」「中つ國」など和語も見られるが、「金州」「三崎」

「支那」「震旦」「遼東」と漢語による地名が見られるようになる。

《中つ國》の民と生れて黄の河の澄めらん御代に逢はでやまめや

(九五五・三二年)

詩に名ある種竹山人《支那》に行くとき歌もて送る竹の里人

(一二二〇・三三年)

子規は次の歌のように明治三十年以前の作品でも金州を題材にした作品は四首見られるが、いずれも題に「金州」と記して短歌の中では、漢語である「金州」を用いていない。

#### 金州城にて

から山の風すさふなり故さとの隅田の櫻今か散るらん

(二九一・二八年)

この変化は、短歌の題材として和語以外にも求めることが出来るという、子規の主張の實踐が現れていると言える。この主張により、日本の地名以外の土地も和語以外に求めることができるようになり、中国の地名(川名)である「黒竜江」を「アムール」とロシア語で表現したり、「ふらんす」「はり」など洋語で表現される欧米の土地も歌材にすることができるようになったのではないか。

《アムール》の川の川原のさゝれ石をひりひてよせし君をおもほゆ

(一四〇六・三三年)

《ふらんす》の《はり》に行く繪師送らんと畫をかきにけり牛くひにけり

(一三七三・三三年)

このように明治三一年から三三年では、様々な地名が積極的に詠まれているが、明治三四、三五年になると詠まれる地名の種類は縮小している。

その理由は前述のとおり、題材の拡大によつて短歌に詠む地名を選択するのではなく、この期間の子規が他者の行動や人物説明に基づいていたことによるものと考えられる。



### 第三節 地名語彙の表現方法

明治三十一年以降（特に明治三十一年から明治三十三年）の短歌の特徴として、歌枕によらない地名が増加していることを見てきた。そこで子規短歌に見られる地名の詠まれ方について、明治三十年以前と三十一年の間にどのような変化が見られるのか、歌枕としての用法で共に詠まれる語<sup>注5</sup>の有無を中心に見てゆく。

子規が詠んだ地名は、各地域で最も多く使用された中で、歌枕となっている地名語彙（隅田川・蝦夷・陸奥・武蔵野・木曾・富士・宇治・賀茂・奈良・須磨・日の本）とする<sup>注6</sup>。

隅田川（隅田も含む） ∴ 「月」・「都鳥」・「住み」・「澄み」<sup>注7</sup>

蝦夷 ∴ 「月」・「波」・「えゝぞ（否定の呼応）」

陸奥（みちのく） ∴ 福島県、宮城県、岩手県、青森県の地名<sup>注8</sup>

武蔵野 ∴ 「風」・「薄」・「袖」・「月」・「露」・「紫（紫草）」・「雪」

木曾 ∴ 「麻衣」・「橋」・「文」・「雪」・「架く」・「渡る」

富士（富士山も含む） ∴ 「風」・「雲」・「煙」・「空」・「月」・「雪」・「消ゆ」・「立つ」

宇治 ∴ 「網代」・「波」・「憂し」

賀茂（加茂川も含む） ∴ 賀茂の祭に関連する語（「葵」「社」など）・「霞」・「霞む」

奈良 ∴ 「青丹よし」・「ゝの都」<sup>注9</sup>

須磨 ∴ 「明石」・「海人」・「漁火」・「月」・「寝」

日本の本 …「唐」「震旦」「遼東」も含む<sup>注10</sup>  
子規は歌枕となっている地名語彙を詠んでいるが、伝統的な短歌で歌枕と共に詠まれる語彙を必ずしも用いていない。右に挙げた歌枕と、歌枕と共に詠まれる語彙について、子規短歌で実際に見られる組み合わせは、次のものである。

「隅田川」と「月」・「隅田川」と「澄み」

「陸奥」と岩手県の地名・「陸奥」と宮城県の地名

「武蔵野」と「風」・「武蔵野」と「薄」・「武蔵野」と「袖」・「武蔵野」と「月」・「武蔵野」と「露」

「武蔵野」と「雪」

「木曾」と「橋」・「木曾」と「雪」

「富士」と「風」・「富士」と「煙」・「富士」と「空」・「富士」と「雪」・「富士」と「消ゆ」

「宇治」と「網代」・「宇治」と「波」・「宇治」と「憂し」

「賀茂」と賀茂の祭に関連する語

「奈良」と「青丹よし」・「奈良」と「ゝの都」

「須磨」と「海人」・「須磨」と「漁火」・「須磨」と「月」・「須磨」と「寝」

「日の本」と「唐」

右の組み合わせが詠まれた作品の数は、次の通りである。

明治三十年以前：三九首（調査対象の十一語のいずれかが詠まれた作品数、全六九首に対して 56.5 %を占める）

明治三十一年以降は三七首（調査対象の十一語のいずれかが詠まれた作品数、全九五首に対して 38.9 %を占める）

明治三十一年以降の作品では、伝統的な和歌の用法での「隅田川」と一緒に「都鳥」が詠まれるといった、古くからの用法の傾向が低くなっている。

また、明治三十一年以降の歌枕を詠んだ子規短歌に、古歌で歌枕と共に多く詠まれる題材が詠まれる例が見られるが、そのような例の中に、歌枕としての用法から外れたものを見ることが出来る。次に一部の例を挙げる。例の該当する語に傍線を附した（以降も同様とする）。

《すま》の浦に旅寐しをれば夏衣うら吹きかへす秋の初風

（三〇四・二八年）

足たゝば大和山城うちめぐり《須磨》の浦わに晝寐せましを

（九二四・三十一年）

歌枕としての「須磨」は「寝」と一緒に詠まれるものである。明治三十年以前の作品では「旅寐」であったのが、三十一年の作品だと「晝寐」と、睡眠の種類が異なっている。「旅寐」との組み合わせは古歌に見られるが、「晝寐」との組み合わせは古歌に見ることが出来ない<sup>注11</sup>。

名にしあふ《すみたの川》は濁れども濁らぬ御代の花ぞかふばし

（八一・十八年）

春の日の御空曇りて《隅田川》櫻の影はうつらさりけり

（一六六四・三三年）

明治三十年以前の歌のように「隅田川」の川水に澄濁表現が掛けられるが、明治三十三年の場合は、濁りの表現（「曇り」）の対象が川水ではなく「御空」であり、歌枕としての用法から外れているといえる。

木をひしぎ巖を碎く響きして《木曾》の深山は雪なたれせり

(五九四・三二年)

「木曾」は「雪の中の困難な旅路を詠んだ作品が多い」<sup>注12</sup>とされており、右の作品でも雪の木曾の様子が詠まれているが、古歌では右の子規短歌に見られるような「雪なたれ」の音や響きを詠んだ例が見られない<sup>注13</sup>。

青丹よし《奈良》の都に着きにけり牡鹿鳴てふ《奈良》の都に

(三二二・二八年)

青丹よし《奈良》の都の御佛を見に行く人に汽車で逢ひにけり

(一二七一・三二年)

「奈良」に「青丹よし」が冠することが多く、子規短歌でも明治三十年以前と三十一年以降共に、「青丹よし奈良」と詠まれている例がほとんどである（明治三十一年の一首と三四年の一首は「青丹よし」を用いていない）。しかし明治三年の作品の方は、漢語である「汽車」が使用され、「青丹よし奈良」に感じられる古典的な雰囲気一首全体のものとなっていない。

見れはた々尾花風吹く《むさしの》の月入る方や限りなるらん

(三〇七・二八年)

《武蔵野》の冬枯芒婆とに化けず梟に化けて人に賣られけり

(四三九・三二年)

明治三十年以前の例のように薄は武蔵野の景物の一つとして用いられるが、三十一年の作品では薄に対する描写もされている。

から山に春風吹けば《日のもと》の冬の半に似たる頃哉

(二九六・二八年)

遼東のた々かひやみて《日の本》の春の夜に似る海棠の月

(五四〇・三二年)

天竺も震旦も知らず《日の本》の釋迦の産屋のうつくしくこそ

(六九八・三二年)

明治三十年以前の作品では「日の本」に対して「唐（国）」を用いているが、三一年以降になると唐の都市名（遼東）や唐の別名（震旦）も使用されるようになる。

また明治三一年以降、「天竺も」の歌や次の歌のように唐以外の地名（天竺・フランス）も使用されるようになる。

フランスのパリス少女は《日の本》の扇手に持ち君を待つらん  
(一六二一・三三年)

このように明治三一年以降の作品の歌枕の表現では、古典的な方法を踏まえつつもそれから脱却した用法を見ることが出来る。

歌枕の用法として決められた語を使用しつつも、その表現が古典的なものから外れていると判断できる例の見える作品数は、明治三十年以前では二首（対象の六九首に対し2.9%）、三一年以降では十二首（対象の九五首に対し12.6%）である。なおこの作品数には、「フランスの」の歌のような「日の本」と「唐」以外の地名の組み合わせが見られる作品数については反映していない。

明治三十年以前でも、次のように歌枕の用法として決められた語を共に詠み込まず、地名語彙が古典的な表現をとっていない例が見られる。一部の例を挙げる。

長橋で都の《富士》を見てあれば蜈蚣のやうに氣車の行く也  
(拾遺一六一・二三三年)

たいらなる《富士》のいたゞき 近づけば一ツのものが三ツとなりけり  
(拾遺一七六・二三三年)

ヒマラヤがやつてきたとまけぬ也敵にうしろを見せぬ《ふし山》  
(拾遺一九五・二三三年)

右の三首では、三上山を「都の富士」と表現すること、富士を合わせる景物に「氣車」といった文明の利器を用い

ること、富士山の頂上の形の表現、富士山を日本の代表するものとしての表現が行われている。

富士山を日本の代表するものとしての表現は近世から見られるものであるが<sup>注12</sup>、それ以外の表現は古歌（短歌）に見ることのできないものである。

明治三十一年以降の作品の表現で、明治三十年以前の子規短歌に見られる表現と同じ例を見ることができる。

人の目にかゝるもうしや《牛嶋》にいもと我とのすみか定めん

（拾遺一〇九・二二年）

《あはの國》のあはなく久に《むつの國》のむつたまあへる君をこひにけり

（一五四七・三三年）

「宇治」を「憂し」と掛けて使用するなどの表現は歌枕としての用法に見られる。「人の目に」の歌では歌枕となっていない「牛嶋」に対しても歌枕的な用法をとっている。「あはの國」の歌も「阿波」と「会ふ」、「陸奥」と「睦」が掛けられており、「人の目に」の歌と同様の表現である。

このように、短歌での歌枕の表現の変化が明治三十一年を境に完全に変化するとは言えないが、本稿では次の傾向を見ることができる。

子規短歌の地名の詠まれ方について、明治三十一年以降になると歌枕の用法に従った語彙を地名語彙と一緒に詠む傾向が低くなり、また歌枕の用法としての語を使用する際は古典的な方法に掬われない用法をとるようになっていく。

#### 第四節 与謝野鉄幹との比較

##### 第一項 鉄幹短歌の地名語彙

鉄幹短歌で地名語彙が詠まれた作品は二九一首であり、鉄幹短歌全体（一四六二首）の中の20%を占めている。子規短歌での地名語彙を詠んだ作品は五七四首であり、子規短歌全体（二四三二首）の中で23.6%であることから、子規短歌で地名語彙を詠むことはやや多いと言える。

鉄幹短歌に見られる地名語彙の異なり語数は、地域が特定できないものを含め一六四語である。それに対して、子規短歌に見られる地名語彙の異なり語数は、鉄幹より歌数が多いこともあり、地域が特定できないものも含め三二八語である。子規短歌で地名語彙を詠んだ作品数が多いこともあるが、子規は鉄幹よりも多くの地名語彙を短歌に詠み込んでいると言える。

鉄幹短歌に見られる地名語彙には、子規短歌に見られる、愛媛県の地名を分類する「伊予」と架空の地名を分類する「架空」の地名は見られない。鉄幹短歌の地名語彙が分類される地域は次のものである。地域名と共に歌例を一首ずつ挙げる。

東京 … 東京都の地名 隅田川など

《隅田川》、花やちるらむ。漕ぐ船の、苔に色ある、夕あらしかな。

（東西南北・十五）

北海道 … 北海道の地名 旭川など

《旭川》にしら魚のぼる春のくれ酔ひたる人を車に載せぬ

（紫・四七）

東北 …… 東北地方の地名 信夫（福島県の旧郡名）

戦ひし、むかし《しのぶ》の、くさ枕、その世は夢と、吹くあらし哉。

（東西南北・一二八）

関東 …… 東京以外の関東地方の地名 鎌倉など

《鎌倉》はちさくはかなき夢の跡よまた頼朝の脊を拊つな君

（紫・二〇）

甲信越 …… 山梨、長野、新潟の地名 佐渡など

《佐渡》によき牡丹の夏の歌の宿ふるき帝を夢に見まつらむ

（うもれ木・一五九）

中部 …… 甲信越を除く中部地方の地名 宇津など

薦の葉の、しづくはらひて、飯もらむ。夕立はるる、《宇津》の山ごえ。

（天地玄黄・一〇六）

京都 …… 京都府の地名 祇園など

よき人のかざしの珠やぬけいでし《祇園》の花の春の夜の月

（新派和歌大要・一九三）

奈良 …… 奈良県の地名 畝傍、大和など

雲ひとむら真榊いろのかなた《畝傍》三千年の《大和》に入りぬ

（うもれ木・八〇）

近畿 …… 京都・奈良以外の近畿地方の地名 五十鈴の河など

神風の《五十鈴の河》に髪あらひ歌よみし子を見んよしもなし

（鉄幹子・二九七）

中国（山陽） …… 瀬戸内側の中国地方の地名 宮島など

あかつきに、啼きつる鹿の、あとならむ。紅葉ちりしく、《宮島》の山。

（東西南北・一一七）



中国（山陰）…日本海側の中国地方の地名 袖師の浦

あだに寄する、《袖師の浦》の、夕浪に、ぬるるはやすし。如何に干すべき。

（東西南北・八〇）

四国…愛媛以外の四国地方の地名 阿波など

幾松の、こずゑに《阿波》の、海見えて、船一つ行く。秋霧の上を。

（天地玄黄・三六）

九州…九州地方の地名 天草など

わが船の、けぶりの末に、星見えて、夕汐たかし。《天草》の灘。

（天地玄黄・一一〇）

日本…日本の国名を表すもの 日の本など

恋といふも未だつくさず人と我とあたらしくしぬ《日の本》の歌

（紫・三〇）

アジア…日本以外のアジアの地名（含国名） 韓など

四たびわれ《から》のみやこをおとづれて国のなげきの数つくしける

（鉄幹子・一三七）

欧米…欧米の地名（含国名） シカゴなど

《シカゴ》へは、まづ送らまく、思ふかな。富士のしら雪、みよし野の花。

（東西南北・一一九）

鉄幹短歌に詠まれた地名語彙を次に挙げる。子規短歌での分類を参考に、地域ごとに独自に分類し、五十音順に語を挙げた。地名語彙の下の一（一）内に、該当語彙の使用されている作品数を示し、歌枕となっているものには傍線を付す。

伊予(愛媛)

例が見られない

東京 (異なり語数 八語 延べ語数 十一語)

上野山(2)・上根岸・新坂・隅田川・隅田河原・千鳥が淵(2)・道灌山・根岸(2)

北海道 (異なり語数 二語 延べ語数 六語)

旭川(5)・千島

東北 (異なり語数 一語 延べ語数 一語)

信夫

関東 (異なり語数 十四語 延べ語数 三二語)

浅間・江の島・大那須が原・鎌倉(2)・鎌倉山・那須(2)・箱根・箱根八里・二子山・松葉が谷・水戸・

妙義・武蔵(6)・武蔵野(11)

甲信越 (異なり語数 二二語 延べ語数 四一語)

浅間・碓氷・越後(3)・小木・海府村・加茂の古湖・北越後・越・越路・小諸・佐久(3)・佐渡(2)・

佐渡が島山・小木曾山・更級・信濃(3)・信濃川・千曲川・千曲の河／千隈の河(2)・富士(15)・

富士川・真野・三越路・

中部 (異なり語数 十四語 延べ語数 三二語)

天城・宇津・興津(2)・笠縫ひの里・位山・中山・沼津・富士(15)・藤井村・富士川・若狭(2)・若狭路  
京都 (異なり語数 一八語 延べ語数 五八語)

天の橋立・宇治(2)・太秦(2)・大原・岡崎(6)・巨椋の池・上嵯峨・加茂川(2)・加茂の川・衣笠の山・  
祇園・京(24)・清滝(2)・嵯峨(7)・四條河原・西加茂(2)・東の山(2)・伏見

奈良 (異なり語数 一二語 延べ語数 二二語)

生駒・鶯の塚(2)・畝傍・春日(4)・葛城(2)・立田・月が瀬・奈良(3)・奈良び・三吉野(3)・  
三輪の山・大和(2)

近畿 (異なり語数 二三語 延べ語数 四三語)

伊賀山・五十鈴の河・和泉(3)・近江(4)・河内(2)・紀(3)・紀伊(5)・孔舎衛坂・蜷川・須磨・  
(くさえざか)

住の江(2)・高師・高野山<sup>たかのやま</sup>(3)・天王寺・那智(4)・浪速／浪華(3)・浪速江・野路の玉川・浜寺・湊川・  
室津・比良・玲人町

中国(山陽) (異なり語数 十語 延べ語数 十語)

吉備(3)・吉備津・吉備の中山・周防・玉の浦回・備後・福山・瓶井<sup>(みかい)</sup>・操の山・宮島(3)

中国(山陰) (異なり語数 一語 延べ語数 一語)

袖師の浦

四国 (異なり語数 三語 延べ語数 四語)

阿波・高松・鳴門(2)

九州 (異なり語数 四語 延べ語数 四語)

天草・鬼界が島・佐世保・筑紫

日本 (異なり語数 四語 延べ語数 十語)

大八洲国・日本・日の本(4)・大和(4)

アジア (異なり語数 二四語 延べ語数 五八語)

アジア・威海衛・韓(22)・韓國・韓野・韓山(7)・百濟野(2)・くやをの村・吳・黄河・高麗野・崑崙(3)・

支那(4)・秦・楚・蘇州・太沽・通州・天津・平城・北京(2)・蒙古・遼東・廬山(2)

欧米 (異なり語数 八語 延べ語数 十一語)

浦塩斯德(2)・シカゴ・西辺利亞(2)・蘇士(2)・独逸・仏蘭西・らいんの河・露西亜

架空

例が見られない

場所が特定できない「原町」は、調査対象から外している。

《原町》の鴨脚いであの老木おいきさむき夜に成りけむ君が明星あかほしの歌

(新派和歌大要・一七二)

鉄幹短歌の地名語彙の中で、異なり語数九〇語（場所の特定できる一六三語の<sup>55.2</sup>%）が歌枕となっているものである。子規短歌の地名語彙の中で歌枕となっているものは、異なり語数一六三語であり、子規短歌の場所の特定できる地名語彙三一二語の約<sup>52.1</sup>%である。子規短歌の方が、歌枕となっている地名語彙を詠むことがやや少ないと言える。歌枕となっている地名語彙（場所が特定できるもののみ）の期間別の異なり語数は、次の通りである。

左の数値について、明治三十年以前の子規短歌の場合、歌枕となっている地名語彙の異なり語数が八〇語であり、これは明治三十年以前の子規短歌に見られる地名語彙一一六語に対して<sup>68.96</sup>%を占めている。

明治三十年以前の鉄幹短歌では、歌枕となっている地名語彙の異なり語数は三二語であり、明治三十年以前の鉄幹短歌に使用されている地名語彙四七語に対して約<sup>68.1</sup>%を占めている。以降の期間についても同様の数値を示す。

明治三十年以前	子規 八〇語	（一一六語の <sup>68.96</sup> %）	鉄幹 三二語	（四七語の <sup>68.1</sup> %）
明治三一年	子規 七〇語	（一二七語の <sup>55.1</sup> %）	鉄幹 十四語	（二五語の <sup>56</sup> %）
明治三二年	子規 三七語	（六四語の <sup>57.8</sup> %）	鉄幹 九語	（十八語の <sup>50</sup> %）
明治三三年	子規 四五語	（一〇〇語の <sup>45</sup> %）	鉄幹 十二語	（三二語の <sup>37.5</sup> %）
明治三四年	子規 六語	（十語の <sup>60</sup> %）	鉄幹 二九語	（四九語の <sup>59.2</sup> %）
明治三五年	子規 八語	（十一語の <sup>72.7</sup> %）	鉄幹 二四語	（四五語の <sup>53.3</sup> %）

各期間の歌枕となっている地名語彙の使用状態を見ると、鉄幹短歌の方が歌枕となっている地名語彙の使用が少ないと言える。六期間通しての地名語彙の異なり語数での結果と異なるのは、子規短歌の方が、歌枕となっている地名

語彙を用いた作品が複数の期間に見られる傾向が強いためである。

例えば「江の島」は子規短歌と鉄幹短歌の両方に見られる地名語彙であるが、次のように、子規短歌では明治三十年以前と三年の二首に使用されており、鉄幹短歌では明治三五年の一首に使用されている。左の三首の例について、一首目と二首目が子規短歌であり、三首目が鉄幹短歌である。

ゑかくともかゝるけしきは《ゑのしま》の雨にぬれにし衣そいとをし

(拾遺六五・二一年)

《江の島》へ通ふ海原路絶えてみちくる春の汐の上の雨

(一五一三・三三年)

灯ともして得たる歌なき神の巖窟君《江の島》はただ恋に引け

(新派和歌大要・二七四)

右の「江の島」について、六期通した子規短歌の地名語彙の異なり語数では一語となるが、各期間の地名語彙の異なり語数では、明治三十年以前と明治三三年にそれぞれ一語ずつとなる。

このような歌枕となっている地名語彙の中で、明治三十年以前、三一年、三二年、三三年、三四年、三五年のいずれかの複数の期間の作品に使用されている語彙の異なり語数は次の通りである。

子規短歌 五三語 (歌枕となっている地名語彙全一六三語の中の約33%)

鉄幹短歌 二二語 (歌枕となっている地名語彙全九〇語の中の約24%)

子規短歌は、短歌革新宣言の明治三一年を境に、歌枕ではない地名語彙の使用を増やしているが、歌枕となっている地名語彙を継続して使用する傾向が、鉄幹短歌と比べて強いと言える。

鉄幹短歌でも明治三一年で歌枕となっている地名語彙の使用の減少が見られる。子規短歌と鉄幹短歌での、歌枕で

はない地名語彙の使用が積極的になる時期はほぼ同時期と言える。

子規短歌と鉄幹短歌の両方で、明治三十一年に歌枕ではない地名語彙の使用が多くなるが、その内容は異なる。

子規短歌の地名語彙について、明治三十一年に歌材の拡大が見られ、その拡大の際に新しく使用されるものに、次の二つの内容が見られる。

一つに、歌枕になっていない地名が多く分類される、東京や関東、アジアなどを表す地名語彙の増加である。二つに、歌枕になっている地名が多く分類される、京都や奈良、近畿を表す地名語彙の増加である。

鉄幹短歌での、明治三十一年に初めて詠まれる地名語彙は次のものである。

東京…千鳥が淵・道灌山

北海道…千島

関東…二子山

京都…天の橋立・加茂の川・衣笠の山

近畿…紀・高野山・那智・浜寺・湊川  
(たかのやま)

中国(山陽)…吉備津・周防・瓶井  
(みかい)

九州…鬼界が島

日本…大八洲国

アジア…秦・楚・廬山

鉄幹短歌の地名語彙の中で明治三十一年に初めて使用されるものは、京都と近畿、山陽、アジアの地名を表す地名語彙がやや多いと言える。

子規短歌での明治三十一年に初めて短歌に用いる地名語彙では、東京や関東の地名を表す地名語彙の大きな増加が見られる。また鉄幹短歌に殆ど見られない東北の地名を表す地名語彙の増加も見られる。

明治三十一年に鉄幹短歌と子規短歌の両方で、アジアの地名を表す地名語彙の使用の増加が見られるが、鉄幹短歌では「秦」「楚」「廬山」といった中国の地名のみであるのに対し、子規短歌では「エヴェレスト」「北インジャ」「新高山」といった中国以外の地名が見られる。

明治三十一年での地名語彙の増加に見られるように、鉄幹短歌では京都や近畿など西日本やアジア（特に現在の韓国）の地名を表す地名語彙が、子規短歌と比べ多く使用される傾向である。

鉄幹の明治三十五年までの生活の場所は、岡崎（京都）、鹿児島、大阪、岡山、山口、東京、京城（韓国）である。この鉄幹の生活の場と鉄幹短歌に多く見られる地名語彙の地域は殆ど一致する。次に岡崎、鹿児島、大阪、岡山、山口、東京、京城の地名を表す地名語彙を詠んだ鉄幹短歌の例を挙げる。

《韓》<sup>から</sup>にして、いかでか死なむ。われ死なば、をのこの歌ぞ、また廃れなむ。

（東西南北・九六）

あさましく《周防》の国の鬼といふ野辺のけぶりになりませるか

（鉄幹子・一六七）

をとうとの雪のうさぎにまなこつくと南天<sup>なんてん</sup>とりし《岡崎》の庭

（紫・一三〇）

それまことかふたり《備後》の《福山》に去年の暮より花かざし売る

（紫・二一八）



夕潮にくろきもとどり洗はせて《鬼界が島》に夏の月みる

(紫・二四八)

春あさき《道灌山》の一つ茶屋に餅くふ書生袴つけたり

(新派和歌大要・一四四)

塔見ゆる菜たねの末は藤井寺と母がをしへし《河内》にや有らぬ

(うもれ木・七六)

子規短歌に見られる地名語彙も、鉄幹短歌と同様に生活の場や実際に訪れた地を多く詠んでいる。鉄幹と子規の生  
活や旅行地の違いが、短歌に詠まれる地名語彙の違いに結びついていると言える。

しかし、「東京」については鉄幹も生活の場であった地域であるが、「東京」の地名を表す地名語彙を詠んだ例は、  
次の十一首である。

さきにほふ、《千鳥が淵》の、山ざくら、春のふかさは、知られざりけり。

(東西南北・十五)

《隅田川》、花やちるらむ。漕ぐ船の、苔に色ある、夕あらしかな。

(東西南北・十六)

見えざりし、御寺も見えて、《上野山》、あとさへのこす、木枯のかぜ。

(東西南北・一七〇)

みやこには、霜やおくらむ。《上野山》、あとさへのこす、木枯のかぜ。

(東西南北・一七一)

世がたりを、またも重ねむ。鴨のなく、《根岸》の里の、雪の夕暮。

(天地玄黄・十八)

おぼろ夜を、あづま少女に、したはれて、《隅田河原》の、花を見るかな。

(天地玄黄・一一八)

《新坂》の白馬うまし雪の日を、一貫五百わが願ひ足る

(鉄幹子・七〇)

君がすむかどはまよはず《上根岸》あかき桜のひとと咲く家

(鉄幹子・八〇)

月をまちて渚はなれし船ふたつ《千鳥が淵》に夏の水みる

(紫・二四六)

春あさき《道灌山》の一つ茶屋に餅くふ書生袴つけたり

(新派和歌大要・一四四)

この水の《根岸》<sup>ねぎし</sup>へつづく柳の戸つがひの鷺鳥暮れて帰らぬ

(うもれ木・二〇)

「新坂の」「君がすむ」「春あさき」の三首以外の作品には、鉄幹が生活している場であることを思わせる表現(該当箇所)に傍線を付す)が見られない。次に挙げる例のように、「東京」の地名語彙が詠まれる子規短歌には、鉄幹短歌と比べて、子規の生活の場であることを想起させる表現(歌例に傍線を付す)が多く見られる。

隣にも豆腐の煮ゆる音すなり《根岸の里》の五月雨の頃

(二二五・二五年)

《東京》は春まだ寒き雛祭梅のさかりに桃の花を賣る

(五五六・三二年)

臥しながら雨戸あけさせ朝日照る《上野の森》の晴をよろこぶ

(二〇八七・三二年)

櫻さく《隅田》の堤人をしげみ白鬚までは行かで歸りぬ

(一六四三・三三年)

鉄幹短歌と比較して、子規短歌の地名語彙の特徴の一つとして、「東京」の地名語彙の詠み方が日常の身の生活に即した表現をとる傾向が強いことが言える。

また、鉄幹短歌と比べ、子規短歌では実際に訪れたことのない地名も詠む傾向がやや強く見られる。次の例のように子規短歌では知人の行動や見聞きしたことを受けての作品が、鉄幹短歌と比べて多く見られることも特徴の一つであると言える。

足たゝば《北インヂヤ》の《ヒマラヤ》の《エヴェレスト》なる雪くはましを

(九二一・三一年)

ふらんすの《はり》に行く繪師送らんと晝をかきにけり牛くひにけり

(一三七三・三三年)

《ヒリピン》の都さわけりしかれともそこもひすてゝからに行く君

(一六一五・三三年)

あづま菊いけて置きけり《火の國》に住みける君の歸りくるかね

(拾遺三五九・三三年)

明治三三年で子規短歌と鉄幹短歌の両方で、歌枕となる地名語彙の使用が他の期間と比べ少なくなっている。この点についての理由は不明である。

## 第二項 地名語彙の表現方法

鉄幹短歌での地名語彙の表現方法では、子規短歌の場合と同様に見てゆく。鉄幹短歌では、「隅田川」「武蔵野」「木曾」「富士」「宇治」「賀茂」「奈良」「須磨」「日の本」について見てゆく。前節で扱った「蝦夷」と「陸奥」について、鉄幹短歌では歌枕となっている地名語彙が見られないので省略する。

「隅田川」「武蔵野」「木曾」「富士」「宇治」「賀茂」「奈良」「須磨」「日の本」のいずれかが詠まれている鉄幹短歌は三八首である。その中で、古歌での歌枕の用法として、歌枕と共に古歌で多く詠まれる題材も詠み込まれている作品は七首である。調査対象である三八首の内、約18.4%を占めている。

短歌革新発表以降の明治三一年以降の子規短歌の場合、調査対象九五首中の三七首であり、作品数の割合は鉄幹短歌の場合よりも高い。子規短歌の方が、鉄幹短歌と比べ、地名語彙の表現には古典的な語彙を利用する傾向が強い。

例えば、鉄幹短歌では「奈良」を詠んだ例は次の四首と少ないが、「奈良」を導く枕詞の使用が見られない。「青丹よし」以外にも、鉄幹短歌には枕詞の使用が見られない。

立田たつたこえてわか紫の藤の《奈良》あやにく歌の在原ありはらならぬ

雲藍あゐに山紺青こんじやうの《奈良び》より歌うて倚りし梅にぐわつたうの二月堂

梅の《奈良》こだい古代雲がたわかむらさき七重の袖の人見るものか

夜かぐらの鞆鼓かづこつめたき梅の《奈良》まじりて歌の紀氏が子や無き

子規短歌では「奈良」を導くのに「青丹よし」といった枕詞の使用が見られる。

短歌革新発表以降の子規短歌でも、歌枕と一緒に、古歌で歌枕と共に多く詠まれる語彙や題材も詠まれる例が見られる。その際に古歌には例が見られない表現を用いる傾向も見られる。例えば、「青丹よし」を用いて「奈良」を導いているが、同じ作品内で「汽車」という漢語を歌材として詠んでいる。

青丹よし《奈良の都》の御佛を見に行く人に汽車で逢ひにけり

(一二七一・三二年)

また子規短歌では、地名語彙の例ではないが、古典での用法から外れる枕詞の使用がされている例も見られる。両首とも「アメリカ人」と「天(あめ)」、「山本君」と「山」を掛けており、掛詞の方法が子規の作歌の姿勢に残っている点も見ることができる。

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも

(八〇八・三二年)

足引の山本君は處しらず歌まはしおきぬ岡君のもとへ

(拾遺二六一・三二年)

明治三十一年以降の子規短歌では、古典的な題材を古典から外れた方法で用いる例を見ることが出来る。

このような、歌材の組み合わせが古典的なものであっても、表現が古典的なものから外れる例は鉄幹短歌にも見る

ことが出来る。

鉄幹短歌で、古歌で歌枕と共に多く詠まれる題材、語彙が詠み込まれている地名語彙は、「富士」のみである。次に挙げるように、鉄幹短歌での「富士」は「雪」と共に詠むことが多く、他には「月」「風」「雲」が見られる。

《富士》の山、のぼりもはてぬ、しら雲は、麓の峰の、さくらなりけり。  
(東西南北・十三)

《富士》の根の、神代の雪に、臥とす見て、さむれば《富士》の、麓なりけり。  
(東西南北・三三)

歌おもふ、人のこころに、くらべ見む。雪にそびゆる、《富士》の神山。  
(東西南北・一二四)

《富士》くろく、水海しろき、月の夜に、琵琶の音さえて、船一つ出づ。  
(天地玄黄・十)

人の子の、ふかき恨も、つもるかな。母の見まさぬ、《富士》のしら雪。  
(天地玄黄・三五)

《富士》の根は神代の雪に瘦せ瘦せて我等を吹く大あらしの風  
(新派和歌大要・一六一)

一たびは《富士》の雪をもてらしけむこまの都のもち月のかげ  
(新派和歌大要・二六一)

右の鉄幹短歌での「富士」の表現で古歌に例が見られるものは、一首目の「富士の山」での表現である。「富士」と「雲」、「白雲」と「桜」の組み合わせはそれぞれ古典的なものであり、且つ類似した短歌が松平定信の家集『三草集』に見られる。

《ふじ》のねにたちものぼらぬしらくもはふもとの山のさくらなりけり  
(三草集・一〇七)

また五首目の「人の子の」に見られるような、積雪に「恨み」を重ねる表現と、「富士」と「雪」を組み合わせる表現はそれぞれ古典的なものである。ただし「富士」と「雪」と「恨み」を組み合わせる例は古歌に例が見られない。

他の五首に見られる次の「富士」の表現は古歌には例が見られないもの、又は殆ど見られないものである。

二首目「富士の根の」の短歌での、「富士」に神代からの「雪」があるという表現は殆ど古歌には見られない。

三首目「歌おもふ」の短歌での「雪」の中に聳えたつ「富士」の表現や、「富士」の高さと志の高さを重ねる表現は共に古歌に例が見られない。

四首目「富士くろく」での短歌に見られる、「富士」の色を黒いとすることと、「富士」と湖を対比させる表現は古歌に例が見られない。「富士」と共に詠まれる自然の地形は「田子の浦」など海が多い。

六首目「一たびは」での短歌に見られるような、外国の地で日本の象徴として思い浮かべる対象としての「富士」は、古歌には見られない。国家に対する意識の表れている作品に「富士」が詠まれる例が、江戸時代の歌人である烏丸光広の次の短歌に見られるが、鉄幹短歌のように望郷の念を詠んだ作品の例は見られない。

雪もいまみるや高麗人日本やもろこしまでのふじの高根に

(黄葉和歌集・一五五三)

以上のように、子規短歌で見られる、古典的な歌材の組み合わせを短歌に詠む際に表現を古歌に見られないものを用いることは、鉄幹短歌にも見られる方法である。

鉄幹短歌で古典的な歌材の組み合わせが見られない地名語彙について、「隅田川」「武蔵野」「宇治」「日の本」について、見てゆく。

まず「隅田川」について、鉄幹短歌では次の二首に使用例が見られる。

《隅田川》、花やちるらむ。漕ぐ船の、苔に色ある、夕あらしかな。

(東西南北・十六)

おぼろ夜を、あづま少女<sup>をとめ</sup>に、したはれて、《隅田河原》の、花を見るかな。

(天地玄黄・一一八)

鉄幹短歌での「隅田川」は花の名所として詠まれている。花の名所としての「隅田川」は古歌にも例が見られ、特に江戸時代の作品が多い。左の例は江戸時代の作品例である。

《すみだ河》つつみのさくら人ならば笠きせましをみのかさましを

(うけらが花・二〇四)

子規短歌での「隅田川」も桜の名所として詠まれる作品が多いが、次の例のように、短歌革新発表前でも、桜の名所以外の場所として詠んでいる。

五月雨はいたくなふりそ《墨田川》水の濁らはいかゝおよかん

(拾遺四五・二二年)

家ゝにふする蚊遣なひきあひ《墨田の川》に夕けふりたつ

(拾遺五〇・二二年)

風そよく《隅田》のあしのふしの間に夏の夜あけて鶏やなくらん

(拾遺六三・二二年)

短歌革新前の子規にとって「隅田川」は、花の名所だけではなく、生活の場として認識されており、且つ歌材となっていることが明らかである。但し、明治三十年以前の子規短歌で、桜の名所以外として詠まれている「隅田川」の例は全て自筆稿本「竹乃里歌」に記録されていないものであり、子規にとって作品としての出来は良くないと判断されたと考えられるものである。

子規が「隅田川」を生活に密着した場であると認識していることが現れている作品に、次の一首が挙げられる。

《から山》の風すさふなり故さとの隅田の櫻今か散るらん

(二九一・二八年)

子規は従軍記者として渡海しているが、その先で故郷を思い出すことを詠った短歌は右の一首であり、故郷として

思い浮かべているのは「隅田川」である。

対して鉄幹短歌では、外国の地「こまの都」で故郷の象徴としての「富士」を詠んでいる。

一たびは《富士》の雪をもてらしけむこまの都のもち月のかげ

（新派和歌大要・二六二）

鉄幹も京城へ訪れる前に上京しているが、「韓」から故郷を思い出す際に「隅田川」などの東京の地名を思い浮かべている短歌の例は見られない。

この子規と鉄幹の「東京」を故郷とする思いの違いが、前項で挙げたように、子規の方が鉄幹よりも「東京」を短歌に詠むことが多く見られるという結果に繋がっている。子規の方が東京を故郷とする意識が強いのは、子規と鉄幹の在京の時間の差によるものと考えられる。また、鉄幹短歌に見られる「東京」の地名の殆どが歌枕となっている場所を表すものであるのも、明治三五年までの鉄幹にとって「東京」は故郷であるという意識が子規よりも薄かったためではないだろうか。

次に「武蔵野」について、鉄幹短歌では次の作品例のように、秋の「武蔵野」を詠む傾向が強い。

《武さし野》に竹椽つけし片びさし槐樹えんじゆふたもと秋の富士濃き

（新派和歌大要・四九）

《武蔵野》に乱れ興ふたりがる秋の鬢草さきにちの小虹枕おごる人

（新派和歌大要・七四）

《武蔵野》に友を迎ふる秋の二人君知る世ぞと瘦を掩はぬ

（新派和歌大要・七六）

《武蔵野》に乱れ興ふたりがる秋の鬢人よこの朝なに花つまむ

（新派和歌大要・二七三）

鉄幹短歌では、前述の「隅田川」が桜の名所として、即ち春の「隅田川」が詠まれる傾向が強いのと同様に、「武蔵



野」を歌材にする際は秋の「武蔵野」を詠む傾向が強い。子規短歌でも秋や冬の「武蔵野」を詠んだ例が多く見られるが、次の作品では春の「武蔵野」が詠まれている。

《武蔵野》に春風吹けば荒川の戸田の渡に人ぞ群れける

(四八六・三一年)

鉄幹短歌では、「隅田川」や「武蔵野」の例のように、短歌に詠まれる際に特定の季節のものとなる例は、「東京」や「関東」の地名語彙の方が他の地域の地名語彙よりも多く見られる。例えば「中部」の地名語彙「富士」では、新春、春、夏、秋の「富士」が詠まれている。

《富士》の山、のぼりもはてぬ、しら雲は、麓の峰の、さくらなりけり。

(東西南北・十三)

犬つれてみづいろのきぬ人うつくし麦の穂末に遠き《富士》みる

(うもれ木・五二)

童女がわか水まゐる《富士》のふもと沼津に明けし年の朝月夜

(うもれ木・六九)

夕ばえの信濃に近う低き《富士》夏の面杵や碧の千曲川

(うもれ木・一四七)

他にも生まれ故郷の「岡崎」では、季節に春と秋、冬が見られる。

霜ばしら、朝日にをれて、稲ぐきの、立てるもさむし。《岡崎》の里

(東西南北・七四)

をとうとの雪のうさぎにまなこつくと南天とりし《岡崎》の庭

(紫・一三〇)

溝にそひて紅梅おほきわが《岡崎》或は母の猶いますべし

(うもれ木・九五)

子規短歌では、鉄幹短歌と比べ、「東京」と「関東」の地名語彙を歌材とすること、またそれを様々に表現しているといえる。

子規よりも鉄幹の方が身近であったと考えられる地域である、「京都」の地名語彙の一つである「宇治」について、子規短歌では明治三十年以前の作品には、次のように古典的な表現が用いられている。短歌革新以降の子規短歌では、左の二首のような古典的な表現を用いた「宇治」を詠んだ例は見られなくなる。

よわたりは中々うしや《宇治川》にいく夜こほれるあしろもる袖

(七七・十八年)

夜をこめて網代木による音もなし氷りやすらん《宇治》の川波

(七八・十八年)

鉄幹短歌では、「宇治」を詠んだ例は次の二首である。

《宇治》の水に人の染めたる夏の集わぶればこそそのほそき眉筆

(新派和歌大要・六九)

ものゝあはれ歌に知る身や世にもろきわれ頼政の《宇治》を悲む

(うもれ木・九一)

右の一首目の初出年は明治三四年であり、二首目の初出年は明治三五年である。二首ともに「憂し」と「宇治」を掛けたり、「網代木」など古典的な題材を用いる表現はされていない。

最後に鉄幹短歌の「日の本」について、次の四首が詠まれている。

《日の本》の、桜のあらし、吹きにけり。千里の海の、花のしら浪。

(東西南北・二二)

《日の本》に妻子をおきて国のため犠牲となりたる杉山書記生

(鉄幹子・一九九)

《日の本》のさくらをとこは仏蘭西の薔薇の優男と銃なめて打つ

(鉄幹子・二九六)

恋といふも未だつくさず人と我とあたらしくしぬ《日の本》の歌

(紫・三〇)

鉄幹短歌での「日の本」を詠んだ右の四首について、一首目では「桜」と共に詠まれ且つ「千里の海」と、日本に

対する国家の意識を感じさせる作品と言える。二首目と三首目では戦中の内容となっている。四首目も「日の本の歌」と他国の詩歌と明確に区別する表現がされており、やや鉄幹の国家に対する意識を感じさせる内容と考えられる。

子規短歌も「日の本」を詠んだ作品では、次のように、子規の国家に対する意識を感じさせる内容が殆どとなっている。

一枝はから國人に見せてましわが《日のもと》の花の櫻を

(二九三・二八年)

山毎に緑うるほひ家毎に花咲かせたる《日の本》うれし

(四二〇・三一年)

《日の本》のますらたけをが太刀佩きてから討ちに行く首途ゆゝしも

(一〇七五・三二年)

フランスのパリス少女は《日の本》の扇手に持ち君を待つらん

(一六二一・三三年)

「日の本」を詠み込んだ作品は、子規短歌と鉄幹短歌のどちらの作品でも、詠み手の国家に対する意識を感じさせる内容となっている。「日の本」を詠んだ作品数は子規短歌では十八首見られ、鉄幹短歌と比べ多い作品数である。これは子規自身のジャーナリストとしての経験によるものが大きいと考えられる。

## 第五節 まとめ

子規短歌に使用された地名語彙について、明治三十一年の短歌革新の主張の実践である「用語の區域」の拡大の点から見てきた。その結果、次のような「用語の區域」の拡大を見ることができる。

地名語彙の拡大は明治三五年まで見られるが、拡大の仕方は明治三十一年と明治三二、三三年、明治三四年以降でそ

れぞれ特徴が見られる。

明治三十一年では「上野」「鎌倉」「洛陽」といった東京と関東とアジアの地名語彙の増加が著しく、これらの語彙は歌枕ではないものが多い。また明治二八年までに訪れたことのある地名（特に東京と関東、中国（唐）の地名）も増加している。これら地名は、明治三十年以前の子規がほとんど歌材として認識されておらず、三十一年の短歌革新の実践で歌に詠み込まれるようになったために増加したと考えられる。

特に東京と関東の地名の増加は、子規短歌の特徴であるといえる。子規短歌では、東北から甲信越、中部の地名語彙の使用が積極的である。

明治三二、三三年も、「龜戸」「稻村が崎」「ヒリピン」といった歌枕でない東京と関東とアジアの地名語彙の増加が見られる。

子規の旅先の地名語彙を題材にした作品も多く見ることができる。明治三十一年と異なる点は、アジアと欧米の地名の範囲がより広くなったことである。これは、知人の旅行先を詠むことも多く見られるようになっていたことが関係していると考えられる。

明治三四年以降でも地名語彙の増加を見ることができるが、内容は東京やアジアなど外国の地名語彙が少なくなり、「結城」「香具山」といった歌枕となっている地名が半数以上である。しかしこの期間の子規が積極的に歌枕を使用するようになったとは考えられない。明治三二、三三年で見られる知人の旅行先を詠むことの増加の延長で、この期間の子規は他者の行動や人物説明に基づいて地名語彙を使用する傾向が強く見られる。この傾向は、子規自身の旅先を

詠む傾向よりも強く見られる。この他者に基づいた地名語彙が歌枕となつてゐる地名と一致することが多かった為に、歌枕となつてゐる地名が多く見られ、東京や外国の地名語彙が少なくなつたといえる。

明治三一年以降の歌枕となつた地名の詠み方も、明治三十年以前のもものと比べ、歌枕の用法によつて定められた語を一緒に詠む傾向が低くなる。短歌革新発表を境に、歌枕と共に詠む題材の選択が古典的なものから脱却してゆく。

また子規短歌では、歌枕と古歌で歌枕と共に多く詠まれる題材の組み合わせを詠む際には、古典的な方法を踏まえつつもそれには捉われない用法も見られる。

「用語の區域」の拡大の実践の一つの現れとして、「唐（から）」を「震旦」とするといった中国の国名を漢語で表現することも挙げられる。また「アムール」などカタカナで表現される地名も用いられるようになつてゐる。特にカタカナで表現される地名は明治三三年に多い。その理由の一つとして、明治三一年の「用語の區域」の拡大の実践で漢語の地名を多用したことで、カタカナで表される地名も使用する事ができるようになつたためと考える。

紀行文に見られる地名語彙と比較すると、短歌では村名など現地の人以外の読み手にとって分かりづらい地名語彙を使用する傾向が少ないこと、「〴〵驛」「〴〵停車場」「〴〵港」「〴〵街道」といった形の交通施設名の使用が見られないことが明らかになつた。また日本の地名を漢語で表現することはほとんど見られず、日本の地名は日本の名称で詠む傾向が強いことが、短歌に見られる地名語彙の特徴である。

子規短歌を鉄幹短歌と比較すると、次の内容が明らかにになる。

子規短歌での地名語彙は、鉄幹短歌と比べ、古歌に拠らないものがやや多い。子規短歌では東京と関東の地名語彙

の使用が積極的であり、その表現方法も鉄幹短歌と比べ、多様なものとなっている。また、「日の本」といった国家に対する意識を表現する地名語彙の使用が多い。これは子規の新聞記者としての経験によるものではないだろうか。

歌枕となる地名語彙の詠み方では、歌枕と共に詠む題材の選択が、鉄幹短歌と比べ古典的と言える。また、古典的な題材の組み合わせを行った際に、表現を古歌に拠らないものとする方法が見られるが、これは鉄幹短歌にも見られるものである。

それに対して鉄幹短歌では、次のような特徴が見られる。

鉄幹短歌では甲信越・中部以西の地名語彙が多く見られる。子規短歌での地名語彙の表す地域が、東北から中部の東日本であることと異なっているのは、鉄幹と子規の生活の場や旅行先の違いによるところが大きいと言える。

また鉄幹短歌の方が、子規短歌と比べ、歌枕を短歌に詠む際に、歌枕と組み合わせられる題材の選択が古典的でない。子規短歌に見られる、古典的な組み合わせであっても、古歌に拠らない表現をとる方法は、鉄幹短歌にも見ることが出来る。

# 注

注1 子規の旅行先と時期について、『松山市立子規記念博物館総合案内』（松山市立子規記念博物館編 松山市立子規記念博物館

友の会 二〇〇五年十一月）四五頁を参考にした。子規の旅行先と時期は次の通りである（時期の早い順）。

松山〓久万（明治十四年七月）・

東京〓松山（明治二十三年七、八月）・

松山〓大洲（明治十五年夏）・

松山〓久万（明治二十三年八月）・

松山〓東京（明治十六年六月）・

東京〓野島崎、保田（明治二十四年三月）・

東京〓松山（明治十八年七、八月）・

東京〓長野〓松山〓東京（明治二十四年六、七、八月）・

松山〓宮島（明治十八年夏）・

松山〓川内（明治二十四年八月）・

東京〓神奈川（明治十八年九月）・

東京〓大山（明治二十四年十月）・

東京〓日光〓伊香保（明治十九年七月）・

東京〓熊谷（明治二十四年十一月）・

東京〓松山（明治二十年七、八月）・

東京〓狭山、所沢（明治二十五年四月）・

東京〓鎌倉（明治二十一年八月）・

東京〓松山（明治二十五年七、八月）・

東京〓水戸（明治二十二年四月）・

東京〓箱根、修善寺（明治二十五年十月）・

東京〓松山（明治二十二年七、八、九月）・

東京〓日光（明治二十五年十月）・

東京〓大磯（明治二十二年十一月）・

東京〓妙義山（明治二十五年十一月）・

東京〓松山（明治二十二年十一、十二月、明治二十三年一月）・

東京〓神戸（明治二十五年十一月）・

東京ゝ八王子（明治二五年十二月）・  
東京ゝ鎌倉（明治二六年三月）・  
東京ゝ仙台、秋田（明治二六年七月）・  
東京ゝ王子（明治二六年九月）・  
東京ゝ王子（明治二七年三月）・  
東京ゝ王子（明治二七年八月）・  
東京ゝ川崎（明治二七年十一月）・  
東京ゝ佐倉（明治二七年十二月）・  
東京ゝ松山ゝ宇品ゝ金州ゝ神戸（明治二八年三月）・  
須磨ゝ松山（明治二八年八月）・  
松山、奈良ゝ東京（明治二八年十月）



注2 本章で扱う紀行文は以下のものである。

次の三作品は『子規全集』第十卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七五年五月）に収録されている。

「彌次喜多」の底本は自筆本の国立国会図書館蔵「筆まか勢第一編」に収録されているものである。

「鎌倉行」の底本は自筆本の国立国会図書館蔵「筆まか勢第一編」に収録されているものである。

「上京紀行」の底本は自筆本の国立国会図書館蔵「筆任勢第二編」に収録されているものである。

次の二七作品は『子規全集』第十三卷（正岡忠三郎編集代表 講談社 一九七六年九月二十日）に収録されている。

「水戸紀行」の底本は天理図書館蔵の自筆稿本である。

「水戸紀行裏四日大盡」の底本は天理図書館蔵の自筆稿本である。

「しやくらの記」の底本は天理図書館蔵の自筆稿本である。

「かくれみの」の底本はアルス版『子規全集』第八卷（大正十三年十二月）所収のものである。

「山路の秋」の底本は「はせを影」第二號（明治二四年九月五日）初出本文である。

「かけはしの記」の底本は『増補再版獺祭書屋俳話』（明治二八年九月五日）収録のものである。初出のものから省かれた地名も採録した。

「大磯の月見」の底本は松山正宗寺蔵の原本である。

「大磯に引綱を見る記」の底本は松山正宗寺蔵の原本である。

「旅の旅の旅」の底本は前出の『増補再版獺祭書屋俳話』収録のものである。初出のものから省かれた地名も採録した。

「第六回文科大學遠足會の記」の底本は影印復刻本の『文科大學妙義紀行』（赤城書房 昭和二十二年九月）の本文である。

「日光の紅葉」の底本は明治二十五年十一月一日「日本」に発表されたものである。

「高尾紀行」の底本は前出の『増補再版獺祭書屋俳話』収録のものである。初出のものから省かれた地名も採録した。

「鎌倉一見の記」の底本は前出の『増補再版獺祭書屋俳話』収録のものである。初出のものから省かれた地名も採録した。

「はて知らずの記」の底本は前出の『増補再版獺祭書屋俳話』収録のものである。初出のものから省かれた地名も採録した。

「三方旅行」の底本は明治二十六年九月二六、二七、二九日の「日本」に発表されたものである。

「發句を拾ふの記」の底本は明治二十七年三月二四日「小日本」に発表されたものである。

「上野紀行」の底本は明治二十七年七月二二日「日本」に発表されたものである。

「そごろありき」の底本は明治二十七年八月四日「日本」に発表されたものである。

「王子紀行」の底本は明治二十七年八月二八日「日本」に発表されたものである。

「閒遊半日」の底本は明治二十七年十一月四、五日「日本」に発表されたものである。

「總武鐵道」の底本は明治二十七年十二月三十日「日本」に発表されたものである。

「散策集」の底本は、子規・漱石・極堂生誕百年祭実行委員会発行（編纂和田茂樹・解説越智二良）の「散策集」（一九六

六年九月十七日）である。

「夕涼み」の底本は明治三十二年八月八日「日本」に発表されたものである。

「道灌山」の底本は明治三十二年十月二、九日「日本」に発表されたものである。

「本郷まで」の底本は明治三十二年十二月十九日「日本」に発表されたものである。

「小石川まで」の底本は明治三十二年十二月二十五日「日本」に発表されたものである。

「龜戸まで」の底本は明治三十三年五月十七日「日本」に発表されたものである。

注 3

『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳、馬場あき子編 角川書店 一九九九年発行）の見出し語に記載されているものを基準に、古くから詠まれている土地であると判断した。判断方法は次の通りである。

①『歌ことば歌枕大辞典』の見出し語となっている土地、又はその土地と同じ場所を表すものを、古くから詠まれている土地と認定する。

例えば「唐」「唐土」の場合、「唐」「唐土」は見出し語となっているので、古くから詠まれている土地と認定する。「支那」や「中つ國」、「震旦」は見出し語ではないが、「唐」「唐土」と同様に中国の呼称であり、同じ土地を表しているので、古くから詠まれている土地と認定する。ただし「漢」「晋」は中国の特定の時期の国名であるので、「唐」などと区別する。

②「信濃路」のように熟語の一部に、『歌ことば歌枕大辞典』の見出し語となっている土地やそれと同じ場所を表すもの（この場合は「信濃」が含まれているものがある場合も、古くから詠まれている土地と認定する。

注 4

講談社版『子規全集』第十三巻収録の「はて知らずの記」より抜粋

注 5

歌枕としての用法で共に詠まれている語としたのは、次の①②のいずれかを満たすものとした。

①『歌ことば歌枕大辞典』の各歌枕の項目で紹介されているもの

②『和歌の歌枕・地名大辞典』（吉原栄徳　おうふう　二〇〇八年五月二十日）の各歌枕の項目の「用法」で紹介されているもの

注6 「唐」はアジアの地域の中で最も多く使用され、且つ歌枕となっているが、歌枕としての用法で一緒に使用される語に該当するものを、『歌ことば歌枕大辞典』と『和歌の歌枕・地名大辞典』のどちらにも見ることができなかったので省いた。

注7 隅田川と一緒に使用される語として、濁の表現を入れたのは、「澄め」と密接に関連するものと考えたからである。

隅田川を詠んだ古歌に「出羽なるあねはの関のすみだ河流れても見む水や濁ると」(『和歌の歌枕・地名大辞典』九二九頁より抜粋)があり、又「濁らぬ」という表現が「隅田川」と共に用いている例も古歌に見ることが出来る為、澄の表現と濁の表現は表裏一体のものと判断した。

注8 『和歌の歌枕・地名大辞典』の「陸奥」の項目(頁)で次のように解説されている。ルビを省略して引用する。

…「陸奥」のエリアに属する「信夫・安達…(中略)…松島」などの地名を詠むことが多い。…

注9 『和歌の歌枕・地名大辞典』の「奈良」の項目(六五三頁)の次の解説から、奈良の古都としての表現として「奈良の(都)」を採った。

…平安遷都後には、奈良は古都となり南都とも呼ばれた。「ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり」(古今集・春下・九〇・平城天皇)のように、廃都となり…

注10 『和歌の歌枕・地名大辞典』の「日の本」の項目(七四三頁)の次の解説から、「唐」を表すものとして「唐」の付く熟語や

「唐」の地名も採った。

…「日の本」の語は「唐」を強く意識しての語でもある。…

注11 古歌に見られる組み合わせかどうかの判定は、次の資料を用いて行った。

『新編国歌大観CD-ROM版 ver. 2』『新編国歌大観』編集委員会 角川書店 二〇〇三年六月五日

注12 『歌ことば歌枕大辞典』の「木曾」の項目（二八〇頁）より抜粋。

注13 古歌に見られる組み合わせかどうかの判定について、『新編国歌大観CD-ROM版 ver. 2』を用いて行った。

注14 『歌ことば歌枕大辞典』の「富士」の項目に（七五八頁）に次の記述がある。

…近世に入って日本の古典文学が研究対象となるとともに、富士山がその影響のもとに詠まれるようになる。

…なかでも契沖は「詠富士山百首和歌」を試みて、富士山を讃えた。「空にみつ大和島根に二つなき宝となれる

ふじの柴山」はその巻頭歌、「もろこしに山祭りする山よりもふじの煙ぞ上に立ちける」はその巻軸の歌である。

この二首を見るだけでも、富士を霊峰として誇ろうとする国粹主義と もいえる精神の働いていることが窺える。

…

本章は次の投稿論文を基にしたものである。

「正岡子規自筆『竹乃里歌』短歌の地名語彙について―明治三一年前後の比較を通して―」

（東京女子大学紀要『論集』第六十四巻二号 二〇一四年三月）

## 第四部 人間語彙論

### 第一章 人物語彙論

#### 第一節 人物語彙の使用実態

##### 第一項 はじめに

本章では子規短歌での人物語彙の使用実態を明らかにする。

六期通しての人物語彙の使用された作品数と全作品数に対する割合は左の通りであり、植物語彙の使用された作品数と割合に次いで多い。

八九五首（全作品数の36.8％）

各期間の人物語彙を使用した作品数は次の通りである。

明治三十年以前	… 一一〇首（当期間の19.1％）
明治三十一年	… 三一三首（当期間の45.3％）
明治三十二年	… 一六三首（当期間の44.3％）
明治三十三年	… 二五七首（当期間の39.8％）
明治三十四年	… 二九首（当期間の32.6％）

明治三五年 …… 二三首（当期間の36.5%）

人物語彙の使用は、短歌革新発表の明治三一年を境に大きく増加している。また明治三一年を頂点にして以降は緩やかな減少が見られるが、没年である明治三五年まで人物語彙の使用は多く見られる。

## 第二項 意味分野ごとの分類

各期間の子規短歌に使用された人物語彙を、意味分野ごとに分類する。意味分野の項目は次の資料を参考にして独自に作成したものである。

『角川類語新辞典』（大野晋、浜西正人 角川学芸出版 一九八一年一月）

『三省堂類語新辞典』（三省堂 二〇〇五年十一月）

項目は、次の二二項目を設ける。

人間

「人」「醜人」等人間そのものを表し、性別や老若、関係、所属、貴賤、職業が明らかでない語彙を分類する。

男

「雅男」など男性を表し、老若、関係、所属、貴賤、職業が明らかでないものを分類する。

女

「別品」など女性を表し、老若、関係、所属、貴賤、職業が明らかでないものを分類する。

老若（老）

「翁」「姥」など老人を表すものを分類する。

老若（若）

「若人」「少年」「少女」など若人を表すものを分類する。  
（おとめ）

親族

「親」「妻」など親族関係を表すものを分類する。

仲間

「妹」「家主」など親族を除いた人間関係を表すものを分類する。

住民・民族

「里人」「唐國人」など特定の地域の住民・民族を表すものを分類する。

貴賤（貴）

「皇<sup>（すめらみかど）</sup>帝」「貴<sup>（うまひと）</sup>人」など皇族や貴族（役人を除く）を表すものを分類する。

貴賤（賤）

「乞食」「賤の女」など賤しい身分の人を表すものを分類する。

傷病・死

「蹇男」「亡き友」など怪我人や病人、故人を表すものを分類する。



職業（生産）

「蟹」<sup>（かぬち）</sup>「鍛冶」<sup>（かぬち）</sup>「舟人」など生産的な職業（運輸・交通を含む）に従事する人を表すものを分類する。

職業（役人）

「大宮人」「司」など官公庁の仕事に従事する人を表すものを分類する。

職業（軍人）

「武士」<sup>（もののむ）</sup>「軍」<sup>（いくさ）</sup>など軍人や軍隊を表すものを分類する。

職業（サービス）

「化学者」「歌詠み」「傾城」など生産に直接携わらない職業（役人・軍人・使用人・宗教家を除く）に従事する人を表すものを分類する。

職業（使用人）

「奴」「傘持ち」「乳母」など使用人を表すものを分類する。

職業（宗教）

「上人」「法の王」など宗教家を表すものを分類する。

無職

「戯れ男」といった無職である人を表すものを分類する。

学生

「書生」「女學生徒」といった学生を表すものを分類する。

泥棒

「盗人」といった泥棒を表すものを分類する。

神仏

「神」「鬼」など神仏を表すものを分類する。

人名

「秀眞」「ガリバー」「佐保姫」など人名（架空のものや神仏名を含む）を分類する。

各期間に見られる人間語彙を右の項目ごとに挙げる。使用例の見られない項目名は省略する。「都少女」などのように、複数の項目（「都少女」の場合は、「老若（若）」と「住民・民族」）に分類したものもある。また各項目（「人」「男」「女」「人名」を除く）に分類される語彙は、先に「たね本」で「人倫」に分類されるものを挙げ、後に「女流」に分類されるものを挙げている。「人名」の例は、「牛若」「釋迦」「ガリバー」など著名なもの、「左千夫」など子規の知人名、「常規」など自身の名前、「二郎」など著名な名前でも子規の知人名でもないものの順に挙げている。

明治三十年以前

人間

國の柱・人・人の目・者・諸人・奴等・世の人

女

別品

老若（若）

少女子  
（おとめ）

親族

愛し子・親・父母・子・妻子  
（かぞいろ）（つまこ）

妻

仲間

庵の主・聞き人・師・友・花の友・客・連  
（まれびと）

妹・吾妹子

住民・民族

唐國人・住む人・旅人

貴賤（貴）

皇帝

貴賤（賤）

賤・賤が庵・賤が家

賤の女

職業（生産）

蚕・市人・樵夫・薬師ら・工屋・舟人・渡し守

職業（役人）

關守・宮人

職業（軍人）

兵

職業（サービス）

化學者

職業（宗教）

行脚

学生

書生

神仏

荒神・海神・餓鬼・神・神さぶ・神の宮居・道祖神・御神

人名

足利・梅若・大伴・喜撰・黃帝・小町・金比羅様・五右衛門・咲耶木花・咲耶姫・蟬丸・紂王・新田・佐保姫・業平

菊池・仙湖

常規・野暮流・正岡

## 明治三一年

人間

主・似非人・此畜生・民・人・皆・者・善き人・世の人

男

蕨狩り男・益荒男・男

女

狂女・女

老若（老）

翁・爺婆・老翁

姥・媼・婆

老若（若）

髻髪子・髻髪等・子（大人の対の意）・子等・兒達・美少年・若人・童部・男の子

撫子少女・フランス少女・女子（めこ）・女の童・少女・少女子

親族

家（家庭の意）・大御親・子・舅・子孫・背子・父・亡き親・人の子・孫・愛子（まなこ）・御子

姑・妻・亡き母・母・古妻・娘・孀（やもめ）

仲間

思ひ者・思ふ人・君（敬称）・キヤツチャ―・心の友・子弟・同姓・友・亡き友・同胞（はらから）・昔の友  
妹・妹許

住民・民族

アイノ・アメリカ人・蝦夷の人・神田男・國民（くにたみ）・國人・胡人・里人・旅人・外つ國人・  
フランス少女・故郷人・都人・大和の人

貴賤（貴）

現つ神・貴人・貴人・大君・君・君が代・君の國・日の御子  
御料

貴賤（賤）

乞食・乞食の子・賤・賤が庵・賤が伏屋・賤が家・賤の童

傷病・死

亡き親・亡き友・亡き母・昔女

職業（生産）

商人・蟹・蟹が里・蟹の子・筏師・市人・牛飼・牛飼ども・菊作り・小鍛冶・旅商人・辻占賣・問屋・納豆賣・賣  
ト先生・船の人・船引き

職業（役人）

大臣・大宮人・官人・少將の君・代官殿・鷹匠・司・司人・宮人

職業（軍人）

軍・武士

職業（サービス）

歌詠み人・里長・戯れ歌詠み・看取り人

傾城・小傾城・看とり女・湯月少女

職業（使用人）

奴

乳母・端  
（はした）

職業（宗教）

子順禮・上人・順禮の子・祝り等

無職

戯れ男

泥棒

盗人

神仏

天つ神・天つ御神・天の神・産土・鬼・神・神さぶ・神の御前・神の宮居・神の御代・聖霊・鎮守・天人・

鳴神・鳴神の子・火の神・佛・佛の寺・皇御神・御神・産の神・物の怪・八百萬の神・男餓鬼

天つ少女・神少女・玉津嶋姫・女餓鬼

人名



敦盛・天照・蒲殿・寒山・釈迦・業平・日蓮・灰原・伯樂・豐干・不動明王・桃太郎・李白・淵明

金岡

三郎・二郎・太郎

## 明治三二年

人間

主・現し佛・民・人・皆・者・善き人

男

男・益荒猛男

老若（老）

婆<sup>(は)</sup>

老若（若）

子（大人の対の意味）・子等・里の子・孤児<sup>(みなしこ)</sup>・村の子  
都少女・少女

親族

家（家庭の意）・家の寶・親・子・垂乳根・父・妻君・妻子等・遠つ御祖・蚤の夫婦・伋・御祖・御子・婿

妻・花嫁・母・娘

仲間

思ひ者・君(敬称)・師・先生・敵・同胞・友・亡き友・  
妹・妾・吾妹子(やから)

住民・民族

蝦夷(えみし)・オロシヤ國人・唐人・旅人

都少女

貴賤(貴)

貴人(うまひと)・大君・君・君が代・公達・君達・  
姫君(すめらぎ)・皇(すめらぎ)・天皇(すめらぎ)・尊(みこと)・男君

貴賤(賤)

賤・賤が家

傷病・死

蹇男・古人・亡き友

職業(生産)

蛭・飴売・鋳物師・鍛冶(かぬじ)・狩人・獵男・御者・蠶飼・駒飼・畑主・花賣・船乗り・書商人・佛作り

職業（役人）

朝臣・一人の人・大臣・司人等

職業（軍人）

軍・戦の君・大御軍・將軍・征夷大將軍・兵

職業（サービス）

歌の主・歌人・歌詠み・繪師

浮れ女・玉乗り女

職業（使用人）

傘持ち・僕（しもべ）

職業（宗教）

似非法師等・法師・法師等

尼君

神仏

悪魔・あぶりの神・天つ麻羅・阿弥陀・戦の神・稻荷・瘡守・神・詩の神・千萬神・火の神・平和の神・佛・佛の  
力・御佛・産の神・薬王菩薩・男神

龍田女神・マドンナ・女神

人名

赤人・入彦・ガリバー・観音菩薩・金時・楠木正成・項羽・釈迦・範頼・人丸・源実朝・ミラー・耶蘇・頼家・ラ  
フェル・劉邦

香取氏・虚子・種竹山人・秀眞・秀眞子・本田種竹・正ちゃん・山本君・岡君

竹の里人

明治三三年

人間

己も己も・醜人・猩々・善男善女・某・徒人・年祝ぎ人・民・人・御民・皆・諸人・善き人

男

島田男・月人男・益荒猛男・益荒男・雅男

女

美人・女

老若（老）

翁さび

媼

老若（若）

嬰兒・子等・少年・若人・童<sup>（わらべ）</sup>・童部

唐の少女・美し少女・早少女・白玉少女・少女<sup>（しょうじょ）</sup>・浪花少女・パリス少女・振袖少女・星の少女・女<sup>（め）</sup>の子・少女・少女子

親族

吾子・家（家庭）・親・子・背子・垂乳根・遠つ御祖・人の親・父母・御祖・我が子

妻・母・妻<sup>（め）</sup>

仲間

主<sup>（うから）</sup>・族・君（敬称）・客・友・家主

妹・吾妹・吾妹子

住民・民族

アイヌ益荒男・イギリス人・唐の少女・唐人・島人・浪花少女・パリス少女・都俳優・明の人・村人・山人

貴賤（貴）

貴人<sup>（あてひと）</sup>・貴人<sup>（うまひと）</sup>・大君・君・公達<sup>（きみたち）</sup>・天皇・帝・尊・皇子の尊・宮

大御女

貴賤（賤）

傍居・賤が伏屋・賤が家・賤の藁屋

傷病・死

(いにしえ)

古人・昔の人

職業(生産)

蟹・牛飼・馬人・氷屋・陶物作り・匠・旅商人・虎飼い人・花賣・船長

職業(役人)

司等・火消等・右の大臣・宮人・陸奥の守・尾張の守

職業(軍人)

東武士・戦の君・武者・武士

職業(サービス)

歌人・歌詠み・歌人・詩人・茶博士・使等(使節の意)・庭守・日本新聞社・俳人・都俳優・俳優・俳優人・

悪歌詠み・繪描き・繪師

禿・藝者・女郎・半玉

職業(使用人)

御奴

職業（宗教）

法の王

学生

女學生徒

泥棒

盗人

神仏

稻荷・歌の神・産土・鬼・神・神の子・神の御前・幸いの神・皇の神・天狗・遠つ神・物の怪・山の御神・

海神の神

天つ少女・機織姫

人名

阿弥陀・牛若・梅若丸・軻遇突智・寒山・観音・観世音菩薩・鞠場の園・西行・實方・拾得・蘇氏・田安宗武・達磨・陳元賛・那須與一・日蓮大菩薩・パツパポウロ・秀吉・平賀元義・豊干・蕪村の集・藤綱・躬恒・元義・義仲・

盧舎那佛

浅井・一五坊・格堂・虚子・左千夫・茂春・鼠骨・節・高濱・潮音・巴子・抱一・原千代子・不可得・不折・麓・

瓢亭・秀眞・まさ子

竹の里人

佐兵衛・山城屋市兵衛

明治三四年

人間

人

女

美人

老若（若）

嬰兒・子（大人の対の意）・善き子・童

真少女

親族

愛し子・親・孝子・孝の子・子・垂乳根・愛子

母

仲間

家主



貴賤（貴）

（うまひと）  
貴人・京の御門・奈良の御門

貴賤（賤）

賤が家・賤の男さぶ

職業（生産）

商人・文配り人

職業（役人）

大宮人

職業（サービス）

歌詠み人

神仏

障の神

人名

佐保姫

節

明治三五年

人間

人

女

女等

親族

妻

仲間

友

妹

住民・民族

江戸つ子

貴賤（貴）

貴人・大君・君・尊  
（うまひと）

職業（生産）

蜚

職業（役人）

朝臣・かつを大臣・小宿禰・宿禰・連<sup>（むらじ）</sup>

職業（サービス）

茶博士・御歌詠み

職業（使用人）

使・御奴

神仏

神

人名

池田

桐の舎・左千夫・秀眞・森田・蕨・蕨大臣・岡

以上の意味分野別の人物語彙の各期間の異なり語数をまとめたものが次の表である。

表の上段の「M 30前」は明治三十年以前、「M 31」は明治三十二年を表し、以降の期間も同様の表記としている。

左列に項目名、また各項目（「人」「男」「女」「人名」を除く）で「人倫」と「女流」に分けている。「人名」では、

著名な名前（「著名」）、子規の知人（「知人」）、著名でもなく子規の知人でもない（「一般」）、子規自身の名前（「自分」）

人間」について、明治三十年以前では性別や老若、貴賤などの意味が付加されていない「人間」を表すものを使用す

		M30前	M31	M32	M33	M34	M35
人間		7	9	7	13	1	1
男			3	2	5		
女		1	2		2	1	1
老若(老)	人倫		3		1		
	女流		3	1	1		
老若(若)	人倫		9	5	6	4	
	女流	1	6	2	12	1	
親族	人倫	5	12	14	11	7	
	女流	1	7	4	3	1	1
仲間	人倫	7	11	9	6	1	1
	女流	2	2	3	3		1
住民・民族	人倫	3	13	4	8		1
	女流		1	1	3		
貴賤(貴)	人倫	1	8	10	10	3	4
	女流		1	1	1		
貴賤(賤)	人倫	3	7	2	4	2	
	女流	1					
傷病・死	人倫		2	3	2		
	女流		2				
職業(生産)	人倫	7	17	14	10	2	1
	女流						
職業(役人)	人倫	2	9	4	6	1	5
	女流						
職業(軍人)	人倫	1	2	6	4		
	女流						
職業(サービス)	人倫	1	4	4	15	1	2
	女流		4	2	4		
職業(使用人)	人倫		1	2	1		2
	女流		2				
職業(宗教)	人倫	1	4	3	1		
	女流			1			
無職	人倫		1				
	女流						
学生	人倫	1					
	女流				1		
泥棒	人倫		1		1		
	女流						
神仏	人倫	8	24	18	14	1	1
	女流		4	3	2		
人名	著名	15	14	16	27	1	1
	知人	2	1	9	19	1	7
	一般		3		2		
	自分	3		1	1		

の四項目に分けている。

る傾向が、他の期間と比べ高いといえる。内容は「人」「諸人」などの「人」と、「者」、「奴等」といった「奴」、「國の柱」の四種と言える。

明治三一年になると性別や老若、貴賤などの意味を付加した複合語が使用される傾向が高くなり、明治三四年以降では「人間」に分類されるものの使用が殆ど見られなくなる。

明治三一年の「人間」に分類されるものの内容は、「主」や「此畜生」の「畜生」、「民」、「皆」といった明治三十年以前で見られない内容の使用が見られる。

明治三二年では「現し佛」が新しく使用されているが、殆どが明治三一年の語彙と重複している。

明治三三年では「善男善女」や「猩々」など新しく見られる内容もあるが、明治三一年との重複は五例（「民」「人」「皆」「諸人」「善き人」）見られ、また「善男善女」と「善き人」、「御民」と「民」といった類義語を含めると、明治三三年の「人間」に分類される語彙の大半が明治三一年との重複となる。

明治三四年以降では、「人」のみの使用となる。

明治三一年から明治三三年に「人間」に分類される語彙の内容の広がりが見られるが、その拡大は明治三二、三三年では小さいものとなっている。この意味分野で、子規の「用語の區域」の拡大に伴う歌の材料の拡大は行われ難かったといえる。人間語彙の子規の歌材の拡大では、「人」や「男」「少女」といった「人間」や「男」「女」に分類されるような性別、老若、貴賤など様々な意味が付加されていない語彙に、多様な意味を付加させた複合語を使用するようになることが確認できる。

**男・女**」について、明治三十年以前では「美人」の一例のみであったのが、明治三一年では「益荒男」や「狂女」といった例が見られ、歌材の拡大を見ることができる。明治三一年から三三年では、「益荒男」「雅男」「美人」などといった、どのような男性或いは女性であるのかを示した熟語が多く、子規の歌材の拡大の一つの特徴を見ることが出来る。しかし明治三一年では一例であるが「狂女」とマイナスの内容を付された語彙の使用が見られるが、明治三二年以降はこのような例は見られない。子規の短歌の題材の取捨選択を見ることが出来る。

**「老若（老）」**について、使用例が見られるのは明治三二年から明治三三年である。歌の題材の拡大の影響が明らかに現れている。明治三二年では「爺婆」といった口語的な表現が用いられているが、明治三三年では「翁さび」の「翁」と「媼」のみとなっている。また晩年では、老人を明示する言葉を歌の題材にしていない。この項目でも子規の歌材の拡大と取捨選択を見ることが出来る。

**「老若（若）」**について、使用例が多く見られるのは明治三一年から明治三三年である。また明治三四年も作歌数に比べやや多い使用である。

**「親族」・「仲間」**は共に人間関係を表すものである。この人間関係を表すものは、明治三二年に使用が増加し、以降は減少傾向となっている。

明治三十年以前の作品で表される人間関係は、親族（「愛し子」「父母」「妻」など）、仲間（「師」などの師弟関係、「友」など友人関係、「妹」など恋人関係、「庵の主」「客」といった主客関係）など多様な関係を見ることが出来る。

明治三一年の作品で表される人間関係は、明治三十年以前の場合とほぼ同様であるが、「親族」に「舅」や「子孫」

などの範囲の拡大や、「仲間」での「思ひ者」など表現が広がりが見られる。明治三二、三三年も多様な人間関係の語彙が見られるが、明治三四年の作品では「親族」では「母」や「孝の子」といった親子関係、「仲間」では貸借関係（「家主」）のみとなり、短歌に詠まれる人間関係が狭まっている。明治三五年の作品では「親族」は夫婦関係（「妻」）、「仲間」は友人関係（「友」）、恋人関係（「妹」）と種類は見られるが、語彙は明治三三年までに見られた「妻君」や「花の友」といった熟語の形ではなく、「妻」や「友」といった基本的な形のみが使用されている。

晩年での複合語の使用が少なくなることについて、「人間」や「男」「女」の項目について同様の結果である。子規の短歌の題材の拡大では複合語の使用が多くなっているが、晩年では複合語ではなく「人」や「妻」といった単語の形が多くなっている。

「住民・民族」について、明治三十年以前では「唐國人」「住む人」「旅人」の三例であり、外国人を表すものは「唐國人」の一例である。

明治三一年になると外国人を表すものは、中国人を表すもの以外に、欧米人（「アメリカ人」）も使用されるようになる。外国人以外でも「神田男」「里人」「都人」など人の所属する地域の広がりを見せている。またアイヌ民族を表すものも見られる。

明治三二、三三年の作品にも欧米人（「オロシヤ國人」「イギリス人」）が使用され、外国人以外でも明治三三年では、「浪花少女」「山人」など人の所属する地域が比較的豊かである。

明治三四四年以降になると、「住民・民族」の使用例が殆ど見られなくなる。

「貴賤（貴）」について、明治三一年に使用が大きく増加している。特に増加しているものは「大君」や「天皇」など天皇を表すものである。天皇を表す語彙は明治三五年まで使用が見られる。「貴人」も次の二首で明治三五年まで使用されているが技巧的な使用であり、右の三首目の「大君」のように事実の提示としての使用ではない。

《うま人》もけふのもちひを白かねのうつはに盛らずかしは葉に巻く

（拾遺四〇六・三四年）

つくしこは《うま人》なれや紅に染めたる梅を絹傘にせる

（拾遺四六一・三五年）

《大君》のみことかしこみあら玉のとしのはしめに梅の花さく

（拾遺四四九・三五年）

「貴賤（賤）」について、明治三一年で、他の期間と比べやや使用例が多い。

「貴賤（賤）」に分類される語彙の殆どが「賤」や「賤が家」、「賤の女」など「賤」で表現されるものであり、「賤」以外を表すものには、明治三一年で初めて使用される「乞食」「乞食の子」、明治三三年で初めて使用される「傍居」の三語のみである。「貴賤（賤）」に分類される語彙例が見られない明治三五年を除き、全ての期間で「賤」で表現されている。

明治三一年に「貴賤（賤）」を詠む例をやや増やし、また「貴賤（賤）」を表す語彙の内容を僅かに広げている。しかしこの試みは、「貴賤（賤）」が歌の材料になり難く、且つ「賤」以外の語（乞食や傍居）は「歌の詞」にならないとする結果になっている。

「傷病・死」について、「亡き母」など故人や「足萎え男」といった病人を短歌に詠み始めているのは、明治三一年からである。例数は多くなく、また詠まれる期間が明治三一年から三三年までと限られているが、子規の短歌革新の歌



の題材の拡大の影響が見られる分野である。

「職業（生産）」について、短歌革新で短歌の題材の拡大の影響が現れている分野である。特に「辻占賣」や「鋳物師」「氷屋」など、陸上で商業活動を行っている人の種類が多くなっている。しかし明治三五年になると「蟹」といった水辺（子規の生活圏外）で商業活動を行っている人を詠むようになっていく。

「職業（役人）」について、明治三二年に使用の増加が見られ、明治三四年まで使用例を複数見ることが出来る。役人の内容は「朝臣」など前近代的な役職名のみが見られ、総理大臣など近代に入ってから作られた役職名は短歌に使用されていない。現在の役人は「官人」といった表現である。晩年の作品では、「森田の宿禰」といった知人名に役職名を付したのも見られる。

「職業（軍人）」について、使用されるのが多いのは明治三二年と三三年である。明治三一年で短歌の題材の拡大の影響は殆ど見られない。当時の実際の軍人を詠む例よりも絵画や物語の描写や、過去の人物を詠むものの方が多い。

「職業（サービス）」について、明治三二年に使用の増加が見られるが、最も使用例が多く見られるのは明治三三年である。明治三三年には「詩人」といった文学者や「繪師」といった芸術家が多く見られる。芸術家を積極的に詠むようになっていくのは明治三二年からである。明治三一年で増加した主な内容は、「傾城」といった遊女を表すものである。また晩年まで使用例が見られる文学者を表すものを歌に詠み始めたのも、明治三一年からである。

「職業（使用人）」について、ここに分類したものは貴族の下で働く人物である。使用人の短歌への使用は、貴族の使用の高さと比べると少ないものである。

「職業（宗教）」について、明治三十一年に使用がやや増加しているが、他の項目と比べると少ない。宗教家の種類は様々であり、「法師」など仏教関係者、「祝り等」といった神道関係者、「法の王」といったキリスト教関係者が見られる。「無職・学生・泥棒」について、この三項目に分類される人間語彙は殆ど見られない。

「神仏」について、明治三十二年の作品で使用が大きく増加している。またその内容も、明治三十年以前では「御神」など神を表すものや「龍田女神」「道祖神」など具体的な神仏名が殆どで、「餓鬼」の一例のみが神や仏を表すものではない。明治三十一年になると、「天つ神」など神そのものを表す語彙の種類が拡大し、また神や仏以外を表す「聖霊」「天人」「物の怪」などが複数見られるようになる。明治三十二年以降は「神仏」の使用が減少傾向であるが、明治三二、三三年の「神仏」の内容は依然多様であると言える。明治三二年では「人名」の神仏名より、この期間のみであるが、「マドンナ」「耶蘇」といった欧米の神が見られる。明治三四年以降になると「神仏」は殆ど詠まれなくなり、「神」「障の神」のみと内容が限定されたものとなる。

「人名」について、明治三十年以前から三三年までの期間で多く見られる。特に明治三三年では、著名人の名前と子規の知人名の増加が顕著である。知人名は次の二首のように、当時の日常をそのまま詠んだ作品に多く見られる。

《茂春》、《節》、《一五坊》、《不可得》、四つの玉飛びてあたりて碎けて散りぬ  
(一八二二・三三年)

《飄亭》と《鼠骨》と《虚子》と君と我と鄙鯨くはん十四日夕  
(拾遺二九六・三三年)

明治三五年の作品も知人名が比較的多く見られるが、晩年の子規短歌の題材が、身近なところに拠るものが多いことと関係していると考えられる。

春ことにたらの木芽をおくりくる結城の《たかし》あれは忘れず

(拾遺四四七・三四年)

睦岡の《わらびおとゞ》は水たまる池田のあそのみ末なるべし

(拾遺五〇四・三五年)

意味分野別の項目としていないが、「女流」に分類される語彙について次のことが言える。

「女流」について、明治三十年以前では六語（「妹」「賤の女」「妻」「別品」「吾妹子」「少女子」）であるが、明治三二年になると三三語（「姥」「撫子少女」「女の童」など）の使用が見られる。明治三二年では十七語（「婆」「花嫁」など）、明治三三年では二九語（「大御女」「天つ少女」など）と、明治三一年から三三年までの間で使用例の多さを見ること出来る。明治三四年では三語（「母」「美人」「真少女」）となり、明治三五年も三語（「妻」「母」「女等」）の使用となる。

「女流」の語彙で特徴的であるのが、老若や美醜の意味を含むものが多いことである。特に明治三一年から三四年までの作品に多くの使用例が見られる。次に老若と美醜の意味を含んだ「女流」の語彙を挙げる。

老…姥・媼・婆（ば）・婆・古妻・孀

若…天つ少女・神少女・禿・唐の少女・美し少女・小傾城・早少女・女學生徒・白玉少女・少女（せうじよ）・撫子

少女・浪花少女・花嫁・パリス少女・半玉・フランス少女・振袖少女・星の少女・真少女・都少女・

娘・女子・女の子・女の童・湯月少女・少女・少女子

美…禿・美し少女・傾城・藝者・小傾城・女郎・白玉少女・半玉・別品・美人

醜…女餓鬼

老若や美醜を含んだ語彙は三九語見られ、「女流」の語彙（六九語）の大半を占めている。これは「人倫」（全三三二語）に分類される語彙の中で老若・美醜の意味を含んだものが三八語（「爺婆」「美少年」「醜人」など）であることと比べると、非常に多いと言える。

老若・美醜の意味を含んだ「女流」の語彙を積極的に使用し始めたのは、明治三十一年からである。また明治三十年以前の作品の「女流」の語彙には、直接に老若・美醜の表現がされていない。例えば次の歌では「佐保姫」に老若・美醜の表現がなされていない。

たちそめし霞のきぬは《佐保姫》が春さればとてつくるにやあらん

（一二二・二一年）

明治三十一年から三四年で、子規は短歌に女性を詠む際、老若・美醜の情報を積極的に表していると言える。特に老と醜の女性とは明治三十一年で初めて使用されるものであり、以降の期間では殆ど見られなくなることから、子規は老と醜の女性は歌の材料としなかったと言える。

### 第三項 古歌との対応

子規短歌に使用されている人物語彙も、異なり語数と作品数の両方で明治三十一年での増加を見ることができる。

そこで明治三十一年以降の各期間で新出の人物語彙が、古歌で頻繁に使用されているものであるのかを見てゆく。次に分類した人物語彙と異なり語数を挙げる。

明治三一年で初めて使用される人物語彙：一七〇語（当期間の人物語彙全一九〇語に対して 89.5 %）

古歌で頻繁に使用されているもの：四四語

現つ神・商人・蟹が里・天つ少女・蟹の子・天照・主・筏師・家：家庭・妹許・蝦夷の人・翁・鬼・大君・  
大宮人・神の御前・神の御代・君・君：敬称・君が代・君の國・子：子供・子等・里人・賤が伏屋・背子・民・  
父・鳴神・盗人・母・祝り等・人の子・船の人・佛・佛の寺・孫・益荒男・御子・都人・産の神・武士・奴・男・  
少女・女

古歌で頻繁に使用されているもの以外：一二六語

アイノ・貴人・敦盛・天つ御神・天つ神・天人・天の神・蟹の子・アメリカ人・軍・牛飼・牛飼ども・歌詠み人・  
髻髪等・髻髪子・貴人（うまひと）・姥・産土・似非人・媼・大御親・思ひ者・思ふ人・金岡・蒲殿・神少女・禿・  
寒山・神田男・菊作り・キヤツチャー・狂女・國民・國人・官人・傾城・小鍛冶・心の友・小傾城・子順禮・  
胡人・乞食・乞食の子・御料・此畜生・里長・三郎・戯れ歌詠み・舅・姑・賤の童・子孫・子弟・釈迦・  
順禮の子・上人・聖靈・二郎・少將の君・皇御神・代官殿・大臣・鷹匠・蕨狩り男・旅商人・玉津嶋姫・太郎・  
戯れ男・兒達・爺婆・鎮守・司・司人・辻占賣・同姓・徳川・外つ國人・問屋・亡き親・亡き友・亡き母・納豆  
賣・撫子少女・鳴神の子・日蓮・灰原・賣卜先生・伯樂・端・婆・同胞・美少年・人の子・火の神・日の御子・  
豊干・不動明王・船引き・フランス少女・故郷人・古妻・愛子・看取り人・看とり女・皆・昔女・昔の友・娘・  
女餓鬼・女子・乳母・女の童・物の怪・桃太郎・八百萬の神・大和の人・孀・湯月少女・善き人・李白・若人・

童部・淵明・男餓鬼・老翁・男の子

明治三二年で初めて使用される人物語彙…一〇八語（当期間の人物語彙全一四九語に対して72.5%）

古歌で頻繁に使用されているもの…十三語

阿彌陀・家の寶・蝦夷・皇・天皇（すめらぎ）・龍田女神・垂乳根・妻君・佛の力・益荒猛男・御祖・御佛・男君

古歌で頻繁に使用されているもの以外…九五語

赤人・惡魔・朝臣・蹇男・あぶりの神・尼君・飴売・戦の君・戦の神・一の人・稻荷・古人・入彦・鑄物師・浮れ女歌の主・歌人・歌詠み・繪師・似非法師ら・大御軍・岡君・男神・オロシヤ國人・蠶飼・瘡守・傘持ち・鍛冶（かぬち）・香取氏・唐人・獵男・ガリバー・狩人・君達・金時・楠木正成・現し佛・項羽・駒飼・妻子等・里の子・詩の神・僕・將軍・征夷大將軍・先生・千萬神・族（やから）・竹の里人・玉乗り女・賴家・司人等・兵・敵・天つ麻羅・遠つ御祖・蚤の夫婦・畑主・花賣・花嫁・婆（ば）・範賴・秀眞・秀眞子・人丸・姫君・伏・船乗り・書商人・平和の神・法師・法師等・佛作り・本田種竹・正ちゃん・マドンナ・尊・孤兒・源実朝・都少女・ミラー・觀音菩薩・婿・村の子・妾・女神・藥王菩薩・耶蘇・山本君・ラフエル・劉邦・虚子・御者・公達・種竹山人・阿弥陀・蝦夷（えみし）・垂乳根・家の寶・男君・御祖・皇（すめらぎ）・天皇（すめらぎ）・龍田女神・妻君・佛の力・御佛・益荒猛男

明治三三年で初めて使用される人物語彙：一三五語（当期間の人物語彙全一九七語に対して 68.5 %）

古歌で頻繁に使用されているもの：十七語

御民・己も己も・賤の藁屋・少女（せうじよ）・父母・月人男・妻（め）・益荒猛り男・嬰兒・宮・御奴・昔の人・武者・山人・海神の神・吾妹翁さび

古歌で頻繁に使用されているもの以外：一一八語

アイヌ益荒男・浅井・家主・イギリス人・一五坊・馬人・梅若丸・繪描き・大御女・尾張の守・女の子・女學生徒・抱一・格堂・上方人・神の子・唐の少女・唐の益荒男・客・藝者・氷屋・西行・幸いの神・左千夫・潮音・茂春・詩人・島田男・島人・狸々・女郎・白玉少女・陶物作り・皇の神・善男善女・族・傍居・高濱・匠・徒人・田安宗武・達磨・茶博士・司等・使等・天狗・遠つ神・年祝ぎ人・巴子・虎飼い人・那須與一・某・浪花少女・日蓮大菩薩・日本新聞社・庭守・鼠骨・俳人・俳優・俳優人・機織姫・パツパポウロ・早少女・原千代子・パリス少女・半玉・東武士・火消等・瓢亭・美人・美し少女・秀吉・人の親・平賀元義・拾得・不折・不可得・節・藤綱・蕪村の集・船長・麓・振袖少女・古人・法の王・星の少女・まさ子・實方・帝・右の大臣・皇子の尊・躬恒・醜人・都俳優・雅男・觀音・觀世音菩薩・明の人・陸奥の守・村人・山城屋市兵衛・山の御神・義仲・蘇氏・盧舍那佛・我が子・吾子・童（わらべ）・悪歌詠み・歌の神・歌人（かじん）・鞠塙の園・牛若・元義・佐兵衛・少年・陳元賛・軻遇突智

明治三四年で初めて使用される人物語彙…十二語（当期間の人物語彙全二八語に対して42.9％）

古歌で頻繁に使用されているもの…一語

佐保姫

古歌で頻繁に使用されているもの以外…十一語

京の御門・孝の子・障の神・賤の男さぶ・奈良の御門・真少女・善き子・童・孝子・文配り人・家主（やぬし）

明治三五年で初めて使用される人物語彙…十四語（当期間の人物語彙全二九語に対して48.3％）

古歌で頻繁に使用されているもの…一語

（め）  
女等

古歌で頻繁に使用されているもの以外…十三語

池田・江戸つ子・岡・かつを大臣・桐の舎・小宿禰・宿禰・使・御歌詠み・連（むらじ）・森田・蕨・蕨大臣

明治三十一年から三十三年の各期間の人物語彙の大半が、それぞれの期間で初めて使用されるものであり、短歌革新発表前のものを継続して使用することが非常に少ない。また明治三十一年で初出の人物語彙は多いが、それらの語彙が明治三十二年以降に使用されることが少なく、以降の期間の場合も同様である。

明治三四年と三五年の作品で使用されている人物語彙の約半分が、それぞれの期間で初出となっているものである。



各期間で採録できる初出の語彙の数は、調査対象の期間が下ってゆくに従い少なくなってゆくことを考慮すると、この二期間の初出の人物語彙の数は多いと言える。

子規は、短歌革新以降晩年まで、新しい人物語彙の題材を求め続けていると言える。また各期間で新しく使用した人物語彙は、以降の期間の作品で繰り返し使用されることが少ない。

多くの期間で使用され、使用例数も多く見られるものは次の通りである。左に六期通しての使用例数が五以上であり、且つ四期間に使用されている人物語彙を挙げる。使用頻度の高い順に例を挙げる。

人・神・妹・友・子・蟹・君・妻・賤が家・貴人・母・親  
(うまひと)

右の「貴人」以外が『歌枕大辞典』の見出し語となっているものであり、また「世の人」や「吾妹子」のような複合語ではないものが殆どである。子規は古歌に頻繁に使用されたもの以外の人物語彙や複合語の形で人物語彙を歌の材料として積極的に求めているが、繰り返し使用するものは古歌に頻繁に使用されているもの、複合語の形でないものである。

古歌で頻繁に使用されている人物語彙が、明治三十一年以降に多くの使用例を見ることができ、一方で短歌革新以降使用されなくなってゆくものも見られる。その例を次に挙げる。

一つに、明治期には存在していない職業人である「関守」である。明治三十年以前の関守を詠んだ作品は次の二首である。いずれも「關守あらねとも」「關もりの招くやそれときて見れば」と関守自身が詠まれた作品ではない。

おさまれる御代に《關守》あらねとも濱の千鳥の聲ぞきこゆる

(拾遺七・十七年)

《關もり》の招くやそれときて見れば尾花か末に風渡る也

(二三八・二五年)

古歌に頻繁に使用されており、且つ明治期にも存在している職業人の例に「舟人」がある。「舟人」など船員を詠んだ例は短歌革新後の作品にも見られる。次に例を挙げる

こきもせて帆をふく風に《舟人》の水掬ひつゝ夕涼かな

(拾遺四九・二二年)

淀川の堤を上る《舟引》の足もなゝめに春雨のふる

(五六八・三二年)

アメリカの《船のり》ミラー横濱に人を殺すといふ事何なり

(一二五六・三二年)

《船長》の船部屋狭み姿見の鏡の前に薔薇の鉢置けり

(一七五二・三三年)

右の船員の例では、先の「関守」と異なり、船員自身が詠まれている例が多い。また「船長の」の例では船長自身は読まれていないが、事実の提示としての役割である。

明治期には存在していない職業に従事する人の例は短歌革新以降の作品にも見られるが、これらの職業は『歌ことば歌枕大辞典』の見出し語には見られないものである。次に一部の例を挙げる。左の三首では、人物そのものが詠まれている例と事実の提示の役割のものである。

春の夜のおほとのおふら参らする《少將の君》はねびまさりたり

(三七二・三一年)

明の人陳元賛が傳へたる《尾張の守》のお庭焼のもひ

(一四四〇・三三年)

橘の小島が崎のかなたよりいかけ引きかけ《武者》二騎来る

(一八〇二・三三年)

短歌革新以降使用されなくなってゆくものの二つ目として、特定の神仏名が詠まれることが、明治三四年以降ほと

んど見られなくなることである。これは前項の表の「神仏」の段の作品数の変化にも表れている。明治三十四年以降に見られる神仏名は、次の「佐保神」のみである。また詠み方も明治三十年以前では「佐保姫」とし、神が実態をもっているような表現（神が衣を作る、または着る）となっている。明治三四年の例は季節の象徴として詠まれている。

たちそめし霞のきぬは《佐保姫》が春さればとてつくるにやあらん  
(一二二・二二年)

心しもなきものなから《佐保姫》のまことうれしき春のよそほひ  
(拾遺二〇三・二四年)

《佐保神》の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに  
(拾遺三八三・三四年)

## 第二節 人物語彙の表現方法

使用頻度の最も高い、人物語彙「人」に対して使用されている感覚表現を見てゆく。

「人」に対して用いられている感覚表現の殆どが、次の例に見られるように、視覚表現である。視覚表現の箇所に傍線を付す。

いくさ過ぎて《人》なき村を來て見れば鵲すくふ道のへの木に  
(六二三・三二年)

潮あみに群れ來し《人》は歸りけり秋風強き荒磯の松  
(七三〇・三二年)

右の二首での例のような視覚表現、「(人) なき」といった「人」の存在の有無を表すものと、「群れ來し」「歸りけり」のような、「人」の動作を表すものが、「人」に対する視覚表現に多く見られるものである。

子規短歌での「人」に対する感覚表現には、聴覚表現も見られる。「問ふ」や「泣く」といった音声を伴う行動を表

すものと、「聲」といった音声を表す語の使用が見られる。左に例を挙げる。聴覚表現の箇所には二重傍線を付す。

名たにとふ 《人》こそなけれ世の中にまがふかたなきふしの高ねは

(一七五・二四年)

昔見し面影もあらず衰へて鏡の 《人》のほろくと泣く

(五一〇・三二年)

《人》あまたのゝしる聲の近つきて檜葉の森より檜葉擔ひ出づ

(一二四五・三二年)

右の子規短歌の「人」に対する聴覚表現の例の、「名たにとふ」と「昔見し」の二首は、「人」に対する視覚表現と聴覚表現の複合感覚表現が用いられている。視覚表現に傍線、聴覚表現に二重傍線を付す。(以降同様とする。)

名たにとふ 《人》こそなけれ世の中にまがふかたなきふしの高ねは

(一七五・二四年)

昔見し面影もあらず衰へて鏡の 《人》のほろくと泣く

(五一〇・三二年)

「人」に対する感覚表現は、視覚表現と聴覚表現、視覚表現と聴覚表現の複合感覚表現である。触覚表現、嗅覚表現、味覚表現の使用は見られない。

以降、各期間の「人」に対する感覚表現の変化を見てゆく。

### 明治三十年以前

明治三十年以前の子規短歌で「人」が詠まれている作品の数は、三五首である。この三五首の中で、

視覚表現が用いられているのは二八首

聴覚表現が用いられているのは三首。

聴覚表現が見られる作品では、「人」に対する感覚表現は、視覚表現と聴覚表現の複合感覚表現となっている。

視覚表現の例を次に抄出する。

動きを表すもの

波の面にうかへる宮の影見れは海の下ゆく《人》もありけり

(二九・十八年)

かくまてに高くも《人》のあがるなりいかで我名もあがらざるべき

(九二・十九年)

向しま花さくころに來る《人》のひまなく物を思ひける哉

(拾遺一〇一・二一年)

朝な／＼鶯來鳴く窓の内に何物語《人》のよむらん

(二七五・二七年)

状態を表すもの

よろ／＼とよろめく《人》かよろこんでよろふといふやよふろうの瀧

(拾遺一五八・二三年)

《人》もなき木の下かげの春深み花ちりかゝるかひの黒駒

(一四九・二四年)

いくさにぞ《人》は死にするから山の熱き許りも我たへなくに

(三〇八・二八年)

視覚行為を表すもの

あへきつゝ行きかふ《人》をよそにみてこゝは涼しき松の下風

(一八三・二四年)

明治三十年以前の子規短歌での「人」に対する視覚表現は、右に挙げたような、動きを表すもの、状態を表すもの、視覚行為を表すものの三種類が見られる。以降の期間では、視覚行為を表すものが見られなくなる。

聴覚表現について、明治三十年以前の子規短歌では次の三首に見られる。

時鳥なきつと《人》のつたへきて同じ初音をまたもきく哉

(一六九・二四年)

名たにとふ《人》こそなけれ世の中にまがふかたなきふしの高ねは

(一七五・二四年)

信濃なる木曾の旅路を《人》問はゞたゞ白雲のたつとこたへよ

(拾遺二二〇・二四年)

右の三首での「つたへきて」「とふ」「問は」は、「人」に対する視覚表現(動きを表すもの)でもあり、視覚表現と聴覚表現の複合感覚表現となっている。

明治三十年以前の子規短歌では、「人」に対する聴覚表現は「伝へ(来)」「問ふ」である。この「人」に対する聴覚表現は、以降の期間の子規短歌では殆ど使用されていない。

## 明治三十一年

明治三十一年の子規短歌で「人」が詠まれている作品の数は、六三首である。この六三首の中で、

視覚表現が用いられているのは五七首

聴覚表現が用いられているのは 四首

視覚表現の例を次に抄出する。

動きを表すもの

とばり垂れて閨より《人》は起き出でず牡丹の花に朝日さすなり

(三四一・三二年)

店先を鷹据ゑて《人》の通るらん鳥屋の鳥の鳴きさわぐなり

(三九二・三二年)

子を思ふ峯のましらの鳴く聲に旅行く《人》の袖ぞぬれける

(四〇八・三二年)

城中の千戸の杏花咲きて關帝廟下《人》市をなす

(四四二・三二年)

榛の木に烏芽を嚙む頃なれや雲山を出で、《人》畑をうつ

(四五三・三二年)

武藏野に春風吹けば荒川の戸田の渡に《人》ぞ群れける

(四八六・三二年)

状態を表すもの

秋の夜を呼べど宿直の《人》寐ねてともし火あふつ物襲ふめり

(三三六・三二年)

《人》住まぬいくさのあとの崩れ家杏の花の咲きてけるかな

(三四〇・三二年)

昔見し面影もあらず衰へて鏡の《人》のほろ／＼と泣く

(五一〇・三二年)

笠買ふて都出て行く《人》多し雲雀鳴く頃木瓜開く頃

(五八三・三二年)

九つの《人》九つのあらそひにベースボールの今日も暮れけり

(八一・三二年)

明治三年の子規短歌での「人」に対する視覚表現は、右に挙げたような、動きを表すもの、状態を表すものの二種類が見られる。明治三十年以前の場合と比べ、視覚表現の種類は減少しているが、視覚表現で表される「人」の動きや状態の内容は豊かになっている。例えば前掲の作品の内、次の八首の表現に見られる。

起床就寝の表現

とばり垂れて閨より《人》は起き出でず牡丹の花に朝日さすなり

(三四一・三二年)

秋の夜を呼べど宿直の《人》寐ねてともし火あふつ物襲ふめり

(三三六・三二年)

「旅行く」といった旅行の表現

子を思ふ峯のましらの鳴く聲に旅行く《人》の袖ぞぬれける  
生業のための行為の表現

(四〇八・三二年)

城中の千戸の杏花咲きて關帝廟下《人》市をなす

(四四二・三二年)

榛の木に烏芽を噛む頃なれや雲山を出でゝ《人》畑をうつ  
集まりの表現

(四五三・三二年)

武藏野に春風吹けば荒川の戸田の渡に《人》ぞ群れける  
居住の表現

(四八六・三二年)

《人》住まぬいくさのあとの崩れ家杏の花の咲きてけるかな  
容姿の表現

(三四〇・三二年)

昔見し面影もあらず衰へて鏡の《人》のほろゝと泣く  
人数の表現

(五一〇・三二年)

九つの《人》九つのあらずひにベースボールの今日も暮れけり  
聴覚表現について、明治三年の子規短歌では次の四首に見られる。

(八一・三二年)

紅梅の酒屋てふ酒屋紅梅の酒てふ酒を賣ると《人》のいふ

(四二六・三二年)

昔見し面影もあらず衰へて鏡の《人》のほろゝと泣く

(五一〇・三二年)

釘打ちし恨や長く残るらん夜なゝ杉の泣くと《人》のいふ

(五六一・三二年)



さりながら君ひとり行け女あらは軍弱しと《人》もこそいへ

(九七一・三二年)

明治三年の子規短歌での「人」に対する聴覚表現は「言ふ」と「泣く」である。「言ふ」「泣く」は、以降の期間の「人」に対する聴覚表現にも見られるものである。

## 明治三年

明治三年の子規短歌で「人」が詠まれている作品の数は、四〇首である。この四〇首の中で

視覚表現が用いられているのは三七首

聴覚表現が用いられているのは三首

視覚表現の例を次に抄出する。

色を表すもの

岡の上に黒き《人》立ち天の川敵の陣屋に傾くところ

(二〇二三・三二年)

動きを表すもの

うま人の裾濃のよそひ駒たてゝ遠くに《人》の琴弾くところ

(二〇二六・三二年)

我庵に《人》集まりて歌詠めは鉢の莖に日は傾きぬ

(二〇七二・三二年)

朝晴に花賣る《人》を呼び入れて緋桃を買はず連翹を買ふ

(二〇九五・三二年)

夏の日の旅行く《人》の影たえて那須野の原に夕立のふる

(二一一九・三二年)

芋阪の團子賣る店にぎはひて團子くふ《人》團子もむ《人》

(一二六〇・三二年)

《人》去りて上野の山は暮れにけり茶店の旗に櫻ちる鐘

(拾遺二五七・三二年)

状態を表すもの

カナリヤの轉り高し鳥彼れも《人》わが如く晴を喜ぶ

(一〇九七・三二年)

夏の月の涼しく照す舟の中に氷を嚼んで《人》二人あり

(一一五六・三二年)

いたく瘦せし《人》の姿よ今更になんちを憐む足なへ男

(一一六五・三二年)

吾ながら同じ《人》とは思はれず鬢結ひしあり笠きたるあり

(一一七一・三二年)

アメリカの船のりミラー横濱に《人》を殺すといふ事何なり

(一二五六・三二年)

こもりくの初瀬の雄鹿鳴く聲にこもりの《人》の涙落ちにき

(一二七九・三二年)

明治三二年の子規短歌の「人」に対する視覚表現は、次のように、明治三十年以前と明治三二年に見られる表現を  
見ることが出来る。前掲の例から次の表現を挙げられる。

集まりを表すもの

我庵に《人》集まりて歌詠めは鉢の莖に日は傾きぬ

(一〇七二・三二年)

生業による行動を表すもの

朝晴に花賣る《人》を呼び入れて緋桃を買はず連翹を買ふ

(一〇九五・三二年)

行き来を表すもの

夏の日の旅行く《人》の影たえて那須野の原に夕立のふる

(一一一九・三二年)

《人》去りて上野の山は暮れにけり茶店の旗に櫻ちる鐘

(拾遺二五七・三二年)

人数を表すもの

夏の月の涼しく照す舟の中に氷を嚼んで《人》二人あり

(一一五六・三二年)

容姿を表すもの

いたく瘦せし《人》の姿よ今更になんちを憐む足なへ男

(一一六五・三二年)

吾ながら同じ《人》とは思はれず鬘結ひしあり笠きたるあり

(一一七一・三二年)

明治三二年の子規短歌での「人」に対する視覚表現で、明治三二年までの子規短歌に用いられていないものも見られる。前掲の歌例より次の内容が挙げられる。

色の表現

岡の上に黒き《人》立ち天の川敵の陣屋に傾くところ

(一〇二三・三二年)

活動の表現

うま人の裾濃のよそひ駒たてゝ遠くに《人》の琴弾くところ

(一〇二六・三二年)

飲食の表現

芋阪の團子賣る店にぎはひて團子くふ《人》團子もむ《人》

(一二六〇・三二年)

感情による身体の変化の表現

カナリヤの囀り高し鳥彼れも《人》わが如く晴を喜ぶ

(一〇九七・三二年)

こもりくの初瀬の雄鹿鳴く聲にこもりの《人》の涙落ちにき

(一二七九・三二年)

犯罪行為・犯罪被害の表現

アメリカの船のりミラー横濱に《人》を殺すといふ事何なり

(一二五六・三二年)

右に挙げた視覚表現の中で、色の表現と演奏の活動表現は、以降の期間の子規短歌に見られない表現である。

聴覚表現について、明治三二年の子規短歌では次の三首に見られる。

我家の家の寶を《人》問はゞ秀眞が鑄たる茶托五枚あり

(一一二八・三二年)

《人》あまたのゝしる聲の近つきて檜葉の森より檜葉擔ひ出づ

(一二四五・三二年)

馬ほこる玉の車を指さして一の人ぞと《人》のいふなり

(一三三一・三二年)

明治三二年の子規短歌での「人」に対する聴覚表現は「問ふ」「聲」「言ふ」である。「人」に対する聴覚表現「問ふ」は、以降の期間での子規短歌には用いられない。

### 明治三三年

明治三三年の子規短歌で「人」が詠まれている作品の数は、五八首である。この五八首の中で

視覚表現が用いられているのは五四首

聴覚表現が用いられているのは 三首

視覚表現の例を次に抄出する。

動きを表すもの

もろこしのからの畫を見る思ひあり驢にのる《人》笠の上の雪

(一三五八・三三年)

分れたる森の小道にゝみて《人》も來るやとひとり待ちけり

(一三八六・三三年)

いにしへのかしこき《人》はゐの子飼ひてゐの子の賣りて富を得にけり

(一四三六・三三年)

句つくり今日來ぬ《人》は牛島の花の茶店に餅くひ居らん

(一五八七・三三年)

白玉ノ氷フクミテ大船ニ炭タク《人》ノ熱サヲ思フ

(一八四八・三三年)

大き硯小さ硯を打ち並べ目ぶみ書く《人》疾書き徐書く

(一九〇二・三三年)

状態を表すもの

菅笠の小笠かふりて下總の市路を行けと知る《人》もなし

(一三五〇・三三年)

うつせみのひつきを送る《人》絶えて谷中の森に日は傾きぬ

(一三七八・三三年)

森深み山鳥啼きてたまゝに《人》に逢ふさへ淋しかりけり

(一三八五・三三年)

《人》取りてくらひきといふぬす人の住みにし跡の山陰の森

(一三九五・三三年)

《人》にして鳥にありせば駿河路や三保の磯邊の松に巣くはな

(一四〇七・三三年)

たらちねのうなる遊びの古雛の紅あせて《人》老いにけり

(一四七三・三三年)

明治三三年の子規短歌の「人」に対する視覚表現は、次のように、これまでの期間の作品に見られる表現を多く見

ることが出来る。例として前掲の作品から次の表現を挙げる。

往来を表すもの

分れたる森の小道にイみて《人》も來<sup>ル</sup>やとひとり待ちけり

(一三八六・三三年)

生業による行為を表すもの

いにしへのかしこき《人》はゐの子飼ひてゐの子の賣<sup>ル</sup>りて富を得にけり

(一四三六・三三年)

白玉ノ氷フクミテ大船ニ炭<sup>タ</sup>ク《人》ノ熱サヲ思フ

(一八四八・三三年)

飲食を表すもの

句つくり<sup>ク</sup>に今日來ぬ《人》は牛島の花の茶店に餅<sup>モ</sup>くひ居らん

(一五八七・三三年)

読み書きを表すもの

大き硯小<sup>コ</sup>さ硯を打ち並べ日ぶみ書<sup>ク</sup>《人》疾書<sup>トカ</sup>き徐書<sup>オソカ</sup>く

(一九〇二・三三年)

存在の有無を表すもの

菅笠の小笠かふりて下總の市路を行けと知る《人》もなし

(一三五〇・三三年)

うつせみのひつきを送る《人》絶<sup>ツ</sup>えて谷中の森に日は傾きぬ

(一三七八・三三年)

犯罪行為・犯罪行為の被害を表すもの

《人》取りてくらひきといふぬす人の住みにし跡の山陰の森

(一三九五・三三年)

容姿を表すもの

たらちねのうなゐ遊びの古雛の紅あせて《人》老いにけり

(一四七三・三三年)

明治三年の子規短歌での「人」に対する視覚表現で、これまでの期間の子規短歌に用いられていないものも見られる。前掲の歌例より次の内容が挙げられる。

動物に乗ることを表すもの

もろこしのからの晝を見る思ひあり驢にのる《人》笠の上の雪

(一三五八・三三年)

人と会うことを表すもの

森深み山鳥啼きてたまゝに《人》に逢ふさへ淋しかりけり

(一三八五・三三年)

人であることを表すもの

《人》にして鳥にありせば駿河路や三保の磯邊の松に巣くはな

(一四〇七・三三年)

明治三一年から明治三三年までの子規短歌の「人」に対する視覚表現は多様なものであるが、以降の期間の作品では作品数の減少もあり、これらの内容の殆どが見られなくなる。

**聴覚表現**について、明治三年の子規短歌では次の三首に見られる。

春の夜の網代の車きしらせて牛追ふ《人》の聲おほる也

(一五〇七・三三年)

豆の事をグンバ（軍馬）といふと《人》に聞きし人屋の豆のグンバ喰ふらむ

(一五七二・三三年)

ますらををくはし少女によそほひて情の多き《人》を泣かしむ

(一六八五・三三年)

明治三年の子規短歌での「人」に対する聴覚表現は「聲（おぼる也）」「（人に）聞きし」「（人を）泣かしむ」である。右の聴覚表現の

二首目は「人」が「豆の事をグンバといふ」ことを話しており、また三首目は「人」が泣かされているので、「人」に対する聴覚表現（音声を伴う行為）が見られる作品であると判断する。

明治三四年以降の子規短歌では、「人」に対する聴覚表現が一例のみとなる。

## 明治三四年

明治三四年の子規短歌で「人」が詠まれている作品の数は、五首である。この五首の中で

視覚表現が用いられているのは四首

聴覚表現が用いられているのは一首

視覚表現の例を全て挙げる。

菅の根の永き一日を飯もくはず知る《人》も来ずくらしかねつも

（拾遺四一四・三四年）

龍岡に家居る《人》はほとゝぎす聞きつといふに我は聞かぬに

（拾遺四一五・三四年）

夕くれのくもりかしこみあらかしめ牡丹の花に傘立つる《人》

（拾遺四三三・三四年）

夕顔の實の太けくに墨黒に目鼻をかゝば《人》とならんかも

（拾遺四四四・三四年）

右の一首目「（人も）来ず」と二首目「居る」と四首目「（人と）ならん」は、「人」の状態を表している。三首目の



「傘立つる」は「人」の動きを表している。

これまでの期間の作品に見られる表現は、「來ず」といった往来を表すもの、「居る」といった存在を表すもの、「(人と)ならん」といった人であることを表すものである。

明治三三年までの視覚表現の内容に見られないものは、「傘立つる」である。明治三五年の子規短歌では、この「牡丹の花に」傘立つる」の表現のように、植物に関連させる「人」に対する視覚表現が大半になる。

聴覚表現について、明治三四年の子規短歌では次の一首に見られる。

龍岡に家居る《人》はほとゝぎす聞きつといふに我は聞かぬに

(拾遺四一五・三四年)

## 明治三五年

明治三五年の子規短歌で「人」が詠まれている作品の数は、五首である。この五首の中で

視覚表現が用いられているのは四首

視覚表現以外の感覚表現は使用されていない。

視覚表現の例を全て挙げる。

わか庭にさく梅の花雪なから折りてかさゝん《人》もあらなくに

(拾遺四五三・三五年)

まそ鏡直目に見ねと花葦つみておくりし《人》し戀しも

(拾遺四八一・三五年)

赤羽根のつゝみに生ふるつくくしのひにけらしもつむ《人》なしに

(拾遺四八二・三五年)

赤羽根の茅草の中のつくくし老いほうけゝりはむ《人》なしに

(拾遺四八三・三五年)

右の一首目「折りてかさゝん」と二首目「つみておくりし」、三首目「つむ」と四首目「はむ」は、「人」の動きを表している。一首目の「(人も) あらなくに」と三首目「(人) なしに」、四首目「(人) なしに」は「人」の存在の有無を表している。

全て、植物に対する「人」の動きが詠まれている。その動きについて、「折りて翳す」「摘む」はこれまでの期間には見られないものである。

子規短歌の「人」に対する感覚表現は殆ど視覚表現であり、子規短歌の特徴として指摘できる。子規が短歌に写生の方法を取り入れたことの実践が視覚表現に見られる。「人」に対する視覚表現で特に多いのが、「人」の動きや「人」の存在の有無の表現である。

左に、「人」に対して用いられている視覚表現、聴覚表現の見られる作品数を、各期間ごとに挙げる。作品数の下の

(一) 内の割合は、各期間の「人」を詠んだ作品数(明治三十年以前…三五首、明治三十一年…六三首、明治三二年…四〇首、明治三三年…五八首、明治三四年…五首、明治三五年…五首)に対する割合(小数点第二位以下四捨五入)である。なお、各期間の「人」を詠んだ作品の中で視覚表現と聴覚表現のどちらも見られないもの、又は視覚表現と聴覚表現のどちらも見られるものがあるので、必ずしも視覚表現と聴覚表現の割合の和が百にならない。

明治三十年以前	…視覚表現	二八首 (80%)	聴覚表現	三首 (8.6%)
明治三十一年	…視覚表現	五七首 (90.5%)	聴覚表現	四首 (6.3%)
明治三十二年	…視覚表現	三七首 (92.5%)	聴覚表現	三首 (7.5%)
明治三十三年	…視覚表現	五四首 (93.1%)	聴覚表現	三首 (5.2%)
明治三十四年	…視覚表現	四首 (80%)	聴覚表現	一首 (20%)
明治三十五年	…視覚表現	四首 (80%)	聴覚表現	〇首 (0%)

明治三四年と明治三五年は、「人」を詠んだ作品数全体が少ないため、聴覚表現が見られる作品数や感覚表現の見られない作品数の割合の数値が大きく出ている。聴覚表現の用いられている作品数を見ると、期間を下るに従い使用傾向が小さくなっている。また視覚表現の使用は増加傾向であると言える。

後述の鉄幹短歌で多く見られる「人」の容姿の表現が殆ど見られないことも、子規短歌の特徴の一つと言える。

六期通しての子規短歌の「人」に対する感覚表現の変化について、明治三十一年の短歌革新発表を境に、「人」に対する視覚表現の内容がより多様になっている。明治三四年以降の晩年では、多様な「人」の表現から、植物に対しての「人」の動きの表現へと内容が限られてゆく。

### 第三節 与謝野鉄幹との比較

#### 第一項 鉄幹の人物語彙の使用状態

人物語彙が詠まれている鉄幹短歌は六八六首であり、鉄幹短歌全体（二四六二首）の中、約47%を占めている。子規短歌での人物語彙を詠んだ作品は八九五首であり、子規短歌全体（二四三二首）の中で約37%であることから、鉄幹短歌の方が子規短歌よりも人物語彙を詠むことが多いと言える。

鉄幹短歌に見られる人物語彙は次の通りである。

前節での子規短歌の人物語彙の分類項目を参考に、意味分野ごとに独自に分類する。語彙の下の（ ）内は延べ語数である。

人間：性別や老若等を表さない人物語彙

主（4）・君（敬称）（3）・客・小生・徒人（2）・智慧の子・亡き人・後人・他人（<sup>ひと</sup>2）・人（214）・人の道・人の世・昔の人（4）・諸人・善き人（2）・世の人（4）

「人間」の項目に分類される人物語彙について、人物語彙「人」を詠む例が非常に多いことが明らかである。「人」の延べ語数は、他の項目に分類される人物語彙の延べ語数と比べても、非常に大きい数値である。

男

男（7）・男の子（11）・桜男・三十男・三十男の子・健児等（2）・七尺男・益荒男（11）・雅男／風流男（4）・雅男の君・猛者・優男（2）

女

妹(12)・怨女・女・手弱女(2)・乱れ髪の君(2)・吾妹子

「男」と「女」にそれぞれ分類される人物語彙を比べると、「男」を表すものの方が「女」を表すものよりも多く詠まれる傾向であると言える。

老若(老)

老・翁(4)・爺・橘の翁・老師(2)

老若(若)

海人の子・悪戯坊主・愛し児・餓鬼・韓の児・吉備の子・京の子・子(65)・越の子・子等(11)・

支那の子(2)・兒子／稚児(2)・童(3)・童部

東少女・少女(9)・少女子(6)・韓の少女・木曾少女・若尼(2)・童女

「老若(老)」と「老若(若)」に分類される人物語彙を比べると、老人よりも若人の方が歌の題材にされる傾向が強いと言える。また「少女」の形の人物語彙の数は、子規短歌と比べて少ない。

鉄幹短歌では特に「子」の使用が多く見られる。鉄幹短歌の「子」を詠んだものには、大人に対する子供の意味のものと、人を表すものの二通りが見られる。「子」を詠んでいる鉄幹短歌を二首挙げる。

ともすれば国をわすれてあさましく《子ら》を憶ふと君の泣きける

(鉄幹子・一四六)

《子ら》つれて岡崎去ると日記にありわれよその春七つの童

(紫・八八)

われ男の子意気の《子》名の《子》つるぎの《子》詩の《子》恋の《子》あゝもだえの《子》 (紫・一)

右の一首目と二首目の「子ら」は親族の子供、または幼少の子供と考えられる。三首目では、「われ」とあることから「子」は詠み手（鉄幹）を指すと考えられる。この短歌の初出は明治三四年であるので、当時の鉄幹は幼少の子供ではないので、この作品での「子」は幼少の子供や親族関係における子供とは言えないものである。

子規短歌での「子」は、次の短歌のように、幼少の子供を想起させる作品での使用となっている。

やぶ入の女なるらし《子》を負ひて風持ちて野の小道行く (三六九・三二年)

#### 親族

兄(2)・兄弟達・兄君・兄達・生みの親・弟・親(27)・釈迦の子・舅・末の子・父(4)・夫・中の子・亡き親(3)・二世の夫・人の親・人の子(8)・一人子(3)・二親・星の子・御親

姉(3)・家刀自・妹(2)・叔母君・垂乳根(5)・妻(8)・妻君・妻子・刀自・母(26)・愛娘・御母・娘・我

#### 妻

#### 仲間

思ひ子・思ふ人(2)・義和団・師(11)・師の君(2)・祖師・民・敵・敵中・友(29)・名付け親・教の親・同胞(2)・御民・御弟子(4)・皆・昔の友・老師(2)

#### 住民・民族

愛奴が子等・蝦夷・近江の人(2)・小木の子・唐子(2)・韓の児・韓人(2)・吉備の子・京の子・

越の子・支那の子(2)・都の人(2)・日本男児／大和男子(3)

東少女・韓の少女・木曾少女

貴賤(貴)

大人(敬称)・王(2)・大君(3)・大臣・北の帝(2)・君(君主)・こきし等・帝(4)・御子・親王・

南の御末(2)・宮人(3)

姫が上・姫君

貴賤(賤)

乞児等・賤が家

「貴賤(貴)」と「貴賤(賤)」に分類される人物語彙を比べると、「貴賤(貴)」の方が「貴賤(賤)」よりも歌の材料にされていると言える。子規短歌と比べ、その傾向が強く見られる。

鉄幹短歌に見られる「貴賤(賤)」は次の二首のみである。

《賤が家》<sup>かたみ</sup>の、山吹さけり。あるじには、歌よむほどの、<sup>をとめこ</sup>少女子もがな。  
(東西南北・三七)

《乞児ら》<sup>かたみ</sup>が、着すてし野辺の、朽ちむしろ、朽ち目よりさへ、さくすみれかな。  
(東西南北・三八)

傷病・死

亡き親(3)・亡き人

鉄幹短歌では故人を詠んではいるが、傷病人を歌の材料とはしていない。

職業（生産）

蚕（2）・海人の子・牛飼・越商人・船子（2）・牧人

市女・植女

職業（役人）

大宮人（2）・郡守・関守・令

采女

職業（軍人）

軍・旗手・総督・中尉・武士・御軍（2）

職業（サービス）

歌の君（2）・歌人（2）・絵師の君・追分上手・詩人・博士（3）・薬師

妓（2）

職業（使用人）

御使い・夕使ひ

職業（宗教）

和尚・御僧・上人・禪師・僧（6）・道士・聖・法師・御僧（2）

尼（2）・尼君（2）・尼の君・優婆塞・陀羅尼・若尼（2）



「職業」を表す人物語彙について、次の内容が指摘できる。

鉄幹短歌ではまた、「職業（生産）」を詠んだ作品が、次の二首のように、「蟹／海人」や「船子」といった古来頻繁に使用されている人物語彙が比較的多く見られる<sup>注1</sup>。

二夜ねて、《蟹》のこころに、なりにけり。松間のあらし、浪の上の月。  
ふたよ

（東西南北・八八）

蓼あかう千隈の河の北に長き《船子》われらも佐久にとどまらむ  
ちくま ふなこ さく

（うもれ木・五六）

これは、子規短歌では「納豆賣」など様々な職業に従事する人を歌材にしていることと対照的と言える。

学生

書生

泥棒

賊（2）・盗人

神仏

浅間の神・歌の神・妖怪・縁の神・男鬼（2）・男神・鬼（7）・鬼神・神（28）・神の世・芸の神・

金剛神（2）・死の御神・天狗（2）・二十五菩薩・野の神・萩の神（2）・不動・菩薩（2）・仏（9）・

魔（2）・御神（3）・御仏（3）・八百万の神・夜叉・妖・霊・海神

女鬼（2）

人名

有常・在原・王朗・大谷光瑩・大町桂月・大矢正修・憶良・紀氏・行基・去来・窪田通治・実方・始皇・

釈迦（3）・釈迦牟尼・酒骨（2）・聖武・菅原・杉山書記生・鷹森寅吉・竹の里人・橘の翁・達磨・太郎作・ダ

ンテ・津太郎・鉄幹・鉄南・伴の八十雄・ながすね彦・業平・成美・日蓮・信綱・信綱の大人・ハイネ・真淵・

弥陀（2）・文殊・紋十郎・家持・弥彦・山田寒山・頼朝・頼政・劉玲・劉朗

玉瀾・小督・小春・小町・咲子のおもと・翡翠（4）・芙蓉（2）・マリヤ・蓮月

「神仏」と「人名」に分類される人物語彙を見ると、多様な「神仏」と「人名」が詠まれていることが明らかである。

これも子規短歌と同様であるが、鉄幹短歌では、例えば次の短歌での「浅間の神」のように、「の神」という形で特定の神を表している。

《浅間の神》<sup>かみ</sup>富士を招<sup>せう</sup>ずる<sup>いはどこ</sup>巖<sup>めうぎ</sup>榻と妙義千とせに天聳<sup>あまそへ</sup>りたつ

（うもれ木・一四三）

子規短歌では次の作品のように、神の名前を詠み込む例が数首に見られる。

しきしまにさくやこの花《さくや姫》空に花さく富士の芝山

（一七六・二四年）

また、鉄幹短歌に見られる人名について、鉄幹自身の名前（「鉄幹」）、鉄幹の知人名（「翡翠」など）、明治期の日本人の名前（「杉山書記生」など）、江戸時代までの日本の人物名（「憶良」・「真淵」など）、外国の人物名（「始皇」「釈迦」「ダンテ」など）、仏や菩薩の名前（「文殊」など）が見られる。次に鉄幹短歌の例を抄出する。

《家持》<sup>やかもち</sup>も《真淵》<sup>まぶち</sup>も知らぬ韓山<sup>からやま</sup>をわれにまかせて歌よめよとや

日の本に妻子<sup>つまこ</sup>をおきて国のため犠牲<sup>にぎ</sup>となりたる《杉山書記生》

《鉄幹》が旅する錢<sup>ぜに</sup>にことかきて心にもあらぬ唱歌集売る

《釈迦》<sup>みちとせ</sup>いにてこゝに三千載釈迦の子は《釈迦》の屍を食ひものにする

その世にもわれに似し歌あらばこそ人よ《始皇》を愚かと云ふな

もろともに往<sup>い</sup>なんと云ふを心ならずおきて我がこし韓<sup>から</sup>の妓<sup>ぎ</sup>《翡翠》<sup>ひすゐ</sup>

《文殊》出でて我と対する樽念<sup>たるねぶつ</sup>仏《達磨》夜すがら酒盃<sup>さかづき</sup>おかぬ

西にしてはわかき《ダンテ》がやさまみに一たび沁<sup>し</sup>みしおもかげの君

しら梅に《憶良》<sup>をくら</sup>たゝへし遠里<sup>をほざと</sup>小野十五の我の春帰<sup>を</sup>りこぬ

明治三十年以前が初出である鉄幹短歌での「人名」は、「橘の翁」「ながすね彦」「伴の八十雄」「真淵」の四語であり、全て日本の古人である。明治三十一年が初出の鉄幹短歌に「ハイネ」の一例が見られるが、鉄幹の知人名など「人名」の内容が豊かになり始めるのは明治三二年からである。

子規短歌では、明治三十年以前の作品から子規の知人名など様々な「人名」が見られ、明治三二年に大きく「人名」の使用や内容が増加している。「人名」を歌材として積極的に使用する姿勢の始まりは、鉄幹と子規はほぼ同時期であると言える。

(鉄幹子・二八)

(鉄幹子・一九九)

(鉄幹子・二八二)

(鉄幹子・三〇二)

(紫・八七)

(紫・二二九)

(新派和歌大要・九三)

(うもれ木・四)

(うもれ木・七八)

「女」「老若（老）」「老若（若）」などの複数の項目にそれぞれ分類される、女流を表す人物語彙について、次の内容を指摘することが出来る。

鉄幹短歌では、子規短歌に見られるような「媼」「眞少女」「白玉少女」「女餓鬼」といった、老若美醜の意味を付随させている女流の人物語彙の使用が少ない。鉄幹短歌に見られる、老若美醜の意味が含まれている女流の人物語彙は次の通りである。なお老女を表す人物語彙は例が見られない。

若…東少女・少女・少女子・韓の少女・木曾少女・若尼・童女

美…妓

醜…女鬼

鉄幹短歌では老若美醜の意味を含んだ女流の人物語彙の使用が、子規短歌と比べ少ないと言える。

## 第二項 鉄幹の人物語彙の表現方法

鉄幹短歌には、人物語彙「人」を用いた作品が二一首見られる。その中に見られる感覚表現と、それぞれの感覚表現が用いられている作品数は、次の通りである。

視覚表現…一三四首

聴覚表現…二七首

嗅覚表現…一首

視覚表現の判定について、序章に挙げたものに加え次の基準を定める。

次の二首のような、人の思考活動や感情表現については視覚表現としない。

戈まくら、親おもふ《人》の、夢をのみ、からやま韓山おろし、吹かずもあらなむ。

(東西南北・五二)

立つ名をばいかにぞ人の厭ふらむもどかれてこそあはれなりけん

(新派和歌大要・一五五)

但し、次のように思考や感情が表情や言動に現れると考えられるものは、視覚表現とする。

《人》はただ、あはれと笑みて、やみぬとも、言はであるべき、事ならなくに (天地玄黄・十六)

鉄幹短歌では「人」に対する嗅覚表現が、次の一首に見ることが出来る。嗅覚表現の箇所には波線を付す。

まことそれすみれは天のあめにほひなり教へて《人》の髪かみにのぼさむ

(紫・二九六)

右の作品では「すみれ」の「にほひ」が「人」の「髪」にあると考えられる。

次に、鉄幹短歌の「人」に対する感覚表現の例を、作品の初出年の期間ごとに抄出する。

#### 明治三十年以前

##### 視覚表現：三五首

動きを表すもの

世に出でし、《人》は帰るを、わすれけむ。むなしき谷に、啼くほととぎす

(東西南北・五)

駒ながら、笛ふく《人》や、誰ならむ。おぼろ月夜の、梅の下道。

(東西南北・六一)

大かたの、筆とる《人》に、ならはねば、へつらふわざも、知らぬ我かな。

(天地玄黄・六八)

忘れても左たもとの詩の旧稿ほごに今の博士の肩を打つな《人》

(新派和歌大要・一一二)

状態を表すもの

花ひとつ、緑の葉より、萌え出でぬ。恋しりそむる、《人》に見せばや。

(東西南北・二)

桃さくら、都は春に、なりてより、山には帰る、《人》なかりけり。

(東西南北・一三二)

《人》はただ、あはれと笑みて、やみぬとも、言はであるべき、事ならなくに。

(天地玄黄・十六)

視覚行為を表すもの

家刀いへとじ自よいたくなわびそやまとにて相見し《人》はつつがなかりき

(鉄幹子・一四五)

明治三十年以前の鉄幹短歌では、次の内容の視覚表現が見られる。

行き来の表現(「帰る」)、文化的活動の表現(「筆とる」・「笛吹く」、誰かに対する行為の表現(「博士の肩を打つ」、存在を表す表現(「なかり」)、感情によるもの(「笑みて」、他者による行為を受ける対象(「人」に見せ)、視覚行為を表すもの(「相見し」)である。

聴覚表現：六首

からくくと、笑ふも世には、憚りぬ。泣きなばいかに、《人》の咎めむ。

(東西南北・三)

益荒夫の、おもひ立ちたる、旅なれば、泣きてとどむる、《人》なかりけり。

(東西南北・九四)

なに故に、ふみはよむやと、こころみに、ききなば《人》の、いかが答へむ。

(東西南北・一四二)

思はずば、忘れはてても、ありぬべし。そしるも《人》の、なさけなるらむ。

(東西南北・二〇四)

明治三十年以前の鉄幹短歌での「人」に対する聴覚表現には、「咎む」「からく」との短歌、「泣く」「益荒夫の」の短歌、「答ふ」「なに故に」の短歌、「そしる」「思はずは」の短歌が見られる。

複合感覚表現（視覚表現と聴覚表現）…六首（視覚表現に一重傍線、聴覚表現に二重傍線を付す）

歌よめば、甲斐ある御代の、本意なれや。やがても《人》の、そしるなりけり。

(東西南北・二二六)

あめつちの、鬼神こそは、かたからめ。いかで《人》をも、泣かせしてがな。

(天地玄黄・一三二)

明治三十年以前の、「人」に対する聴覚表現を詠んだ鉄幹短歌六首には、「人」に対する視覚表現も見られる。

明治三十一年

視覚表現…十首

動きを表すもの

みほとけのきよきひかりよ死出の山かちゆく《人》にさはりあらすな

(鉄幹子・一六五)

紅筆に恋の歌かく《人》ぞ多き世を救ふ筆は君に望まむ

(新派和歌大要・一八二)

わが歌の古反ぞと知りて裂きもやらぬなさけある《人》それをのこならず

(紫・二八七)

状態を表すもの

うらやまし沖の船よぶ海人の子よ我は喚ぶべき《人》なかりけり

(鉄幹子・五七)

みほとけのきよきひかりよ死出の山かちゆく《人》にさはりあらすな

(鉄幹子・一六五)

わが歌の糸にのらぬをいぶかりぬ紅き<sup>あか</sup>釵<sup>かざし</sup>の花のごとき《人》

(鉄幹子・二五)

<sup>べにふで</sup>紅筆に恋の歌かく《人》ぞ多<sup>おほ</sup>き世を救ふ筆は君に望まむ

(新派和歌大要・一八二)

視覚行為を表すもの

家にあるますみの鏡われならでうつさん《人》はなくなりにつり

(鉄幹子・一八六)

明治三一年の鉄幹短歌の「人」に対する視覚表現は、次の内容である。

行き来の表現（「かちゆく」、文化的活動を表すもの（「歌かく」、動作を表すもの（「裂きもやらぬ」、存在の有無を表すもの（「なかり」、容姿や様子を表すもの（「さはりあらすな」・「花のごとき」、人数を表すもの（「多き」、視覚行為を表すもの（「うつさん」）が挙げられる。

以降の期間の鉄幹短歌では、「人」に対して容姿や様子の表現をする傾向が、子規短歌よりも強く見られる。この傾向は明治三一年からのものであると言える。

聴覚表現…二首

うるはしき姿に《人》のものを云ふ<sup>をとめ</sup>鸚鵡は鳥か君は少女なり

(新派和歌大要・一二九)

あはれ知る《人》にとはるる<sup>をとめ</sup>思<sup>おも</sup>ひてねざめうれしき天つかりがね

(紫・二六一)

また右の二首は視覚表現（動きの表現「云ふ」「問ふ」）との複合感覚表現でもある。



明治三二年

視覚表現：四首

動きを表すもの

紐紅きうぐひす籠に見初めけん《人》の玉手を米かしがする

(紫・二二三)

竹を植ゑて翁と《人》によばれんもくちをし未だ君が髪黒き

(紫・一六八)

状態を表すもの

紐紅きうぐひす籠に見初めけん《人》の玉手を米かしがする

(紫・二二三)

山門に《人》を送れば夜はふけぬ天の川しろし二人立つ影

(鉄幹子・四四)

任はてて帰る総督うらやまし《人》を殺して君が名なりぬ

(鉄幹子・九四)

明治三二年の鉄幹短歌の「人」に対する視覚表現の内容は、次の通りである。

動きを表すもの（「米かしがする」・「呼ばれん」）、容姿を表すもの（「玉手」）、他者による行為を受ける対象を表すもの（「人」を送れば）、犯罪行為の被害を表すもの（「人を」殺して）である。

聴覚表現：一首

竹を植ゑて翁と《人》によばれんもくちをし未だ君が髪黒き

(紫・一六八)

右の作品には「人」に対する視覚表現（動きを表す「呼ぶ」も用いられており、視覚表現と聴覚表現の複合感覚表現である）。

明治三三年

視覚表現：十九首

動きを表すもの

もみぢ葉を誰の血潮といひさして古井の水をうかがひし《人》

友ひとり棄てん惜しさに慚はぢよとて打ちし拳こぶしを《人》とかく云ふ

近江より玉蘭たまらん買ひにこし《人》もまじりて踊る秋の夜の月

状態を表すもの

わが歌を悪しと云ふ《人》世にあるにあしたうれしき夕さびしき

むらさきの組緒くみゆらゆら花笠の紅きがなかに頬髭ほひげある《人》

屠蘇そすこしすぎぬと云ひてわがかけし羽織はおりのしたの《人》うつくしき

同宿あひやどに窪田通治の歌をめでて泣く《人》みたり浪速江の秋

《人》ふたりましてろきつばさ生なふと見し百合の園生の夢なつかしき

創てを負ひて担架たんかのうへに子を笑わらみぬ嗚呼ああわざはひや《人》を殺す道

視覚行為を表すもの

同宿あひやどに窪田通治の歌をめでて泣く《人》みたり浪速江の秋

明治三三年の鉄幹短歌に見られる視覚表現の内容は、次の通りである。

(紫・一四二)

(紫・二三四)

(鉄幹子・二二四)

(紫・一五六)

(鉄幹子・九五)

(紫・八九)

(紫・一三八)

(紫・一二八)

(鉄幹子・二六六)

(紫・一三八)

行き来の表現（「うかがひ」）、動きを表す表現（「云ふ」）、生業行為を表すもの（「買ひにこし」）、存在の有無を表すもの（「ある」）、容姿や様子の表現（「頬髯ある」・「羽織のした」）「うつくしき」、感情によるもの（「泣く」）、人数（「ふたり」）、犯罪行為の被害を表すもの（「人を」殺す）、視覚行為を表すもの（「見」）である。

聴覚表現：七首

磯に立つ一人は声のうつくしきそれよその《人》うすき月夜に

（鉄幹子・二五七）

同宿に窪田通治の歌をめでて泣く《人》みたり浪速江の秋

（紫・一三八）

もみぢ葉を誰の血潮といひさして古井の水をうかがひし《人》

（紫・一四二）

友ひとり棄てん惜しさに慚ちよとて打ちし拳を《人》とかく云ふ

（紫・二三四）

明治三年の鉄幹短歌に見られる「人」に対する聴覚表現には、次のものが見られる。

「磯に立つ」の作品では「磯に立つ一人」の「声」についての描写がある。この「磯に立つ一人」は同作の「（その人）」と同一と考えられるので、「声のうつくしき」は「人」に対する聴覚表現と判断する。

他にも「泣く」、「いひさす」、「云ふ」といった音声に伴う行為が表現されている。

複合感覚表現（視覚表現と聴覚表現）：七首（視覚表現の箇所と聴覚表現の箇所が同一箇所である。該当箇所に傍

線を付す）

わが歌を悪しと云ふ《人》世にあるにあしたうれしき夕さびしき

（紫・一五六）

わが恋を《人》に問はれてこころにもあらぬかなたの星仰ぎ見し

（紫・一八六）

わが涙わが手にうけて泣くだにも《人》とかく云ふ世の常の恋

(紫・二〇一)

明治三年の鉄幹短歌の「人」に対する聴覚表現が用いられている七首は、視覚表現と聴覚表現の複合感覚表現が見られる作品である。

明治三四年

視覚表現…五九首

動きを表すもの

たどるべき明日もたぬ子に《人》ねたし紀伊の名所を語りてすぎぬ

(紫・五四)

鶴折るになれし《人》やとわらはれて春のゆふべを殿ぬけ出でし

(紫・一七〇)

詩集手に豆の葉ならす《人》ふたり紀伊の霞は和泉より濃き

(うもれ木・二二)

新しき冠たまはり《人》を載せて西七百里蘇州へわたる

(紫・一〇)

近江より玉繭買ひにこし《人》もまじりて踊る秋の夜の月

(鉄幹子・四七)

状態を表すもの

かきさしの絵絹の《ひと》の袖に消えぬ宵の絵皿のほのじろき蛇

(新派和歌大要・九六)

金の間に昼のうまいの春の《人》孔雀しづかに彩羽つくろへ

(新派和歌大要・六三)

犬つれてみづいろのきぬ《人》うつくし麦の穂末に遠き富士みる

(うもれ木・五二)

みやしま

宮島の神のとびらに歌も染めず筑紫へゆくを《人》のなげきし

(紫・四〇)

手をあげて魔を打たんには我れのあり《人》よ袂のかけにほほゑめ

(紫・三二〇)

あかき灯にあなたおとなしの《人》のむれ樽に誦せずや恋の題目

(新派和歌大要・二四二)

《人》ふたりそれいつの春酒を載せてらいんの河に長き歌成らむ

(紫・二四五)

雲を見ず生駒葛城ただ青きこの日なにか《人》を咀はむ

(紫・十三)

視覚行為を表すもの

ゆかしさを夜の木犀に仮りし《人》さかしと見つれ憎くしも無き

(うもれ木・一二七)

明治三四年の鉄幹短歌での「人」に対する視覚表現には、次の内容が見られる。

行き来の表現（「すぎぬ」）、文化的活動を表すもの（「鶴折る」）、動きを表すもの（「豆の葉ならす」）、乗降を表すもの（「載せて」）、起床就寝を表すもの（「昼のうまい」）、生業による行為を表すもの（「買ひにこし」）、容姿や様子を表すもの（「かきさしの絵絹の（ひと）・「みづいろきぬ」「うつくし」）、感情による身体の変化を表すもの（「なげき」・「ほほゑめ」）、人数を表すもの（「むれ」・「ふたり」）、他者による行為を受ける対象であることを示すもの（「人」を）咀はむ」、視覚行為を表すもの（「見つれ」）である。

聴覚表現…十首

そのあした紅の袖口裂きし子を《人》はねたまであはれと泣きぬ

(紫・三一)

たどるべき明日もたぬ子に《人》ねたし紀伊の名所を語りてすぎぬ

(紫・五四)

たはぶれと罵る《人》に悔あらむ今日のこころに恋をさだむな

(紫・九六)

《人》のいふ牡丹はつひに地の花とそれおもしろし諸手にだかむ

(紫・二九八)

わか葦に江を二十里のくだりぶね《人》平壤のなまり藹たき

(うもれ木・一四〇)

明治三四年の鉄幹短歌の「人」に対する聴覚表現では、「泣く」、「語る」、「罵る」、「云ふ」といった音声に伴う活動を表す語が見られる。「わか葦に」の短歌では、「人」の「なまり」について「藹たき」と表現されている。

嗅覚表現…一首

まことそれすみれは天のほひなり教へて《人》の髪にのぼさむ

(紫・二九六)

右の嗅覚表現の一首は、「人」に対する視覚表現、葦の香りのする「髪」である状態の表現が見られる。この作品は視覚表現と嗅覚表現の複合感覚表現の見られる作品である。

複合感覚表現（視覚表現と聴覚表現）…九首（視覚表現の箇所と聴覚表現の箇所が同一箇所である。該当箇所に傍

線を付す）

賊の火の紫竹を焼きし夜のみだれ手綱に泣けるあわただしの《人》

(新派和歌大要・九九)

その世にもわれに似し歌あらばこそ《人》よ始皇を愚かと云ふな

(紫・八七)

云はぬをばつよしと云ふはわれ知らず泣けな狂へと《人》のをしへし

(紫・三〇四)

明治三四年の鉄幹短歌で「人」に対する聴覚表現が用いられている十首の中で、次の一首を除いた九首では、「人」に対する視覚表現と聴覚表現の複合感覚表現が見られる。

わか葦に江を二十里のくだりぶね《人》平壤のなまり藹たき

(うもれ木・一四〇)

明治三五年

視覚表現：七首

動きを表すもの

白雪に薬師たふとし北越後米山《人》を去る式千尺

(うもれ木・一四九)

武蔵野に乱れ興がる秋の鬢《人》よこの朝なに花つまむ

(新派和歌大要・二七三)

状態を表すもの

朝の庭に姫向日葵の名を笑みぬ歌には二十眉をさなの《人》

(新派和歌大要・二八一)

梅にふる東大門のうすみぞれ被衣の《人》を牛に載せしか

(うもれ木・五一)

今日見つれ草野を西へむつまじき二つの傘に母を泣く《人》

(新派和歌大要・二七七)

口疾にも昨日か《人》を罵りしあなや己れが髪に燃ゆる火

(うもれ木・一〇八)

視覚行為を表すもの

梅の奈良古代雲がたわかむらさき七重の袖の《人》見るものか

(うもれ木・八五)

明治三五年の鉄幹短歌の「人」に対する視覚表現の内容には、次のものが見られる。

行き来の表現（「去る」）、動きの表現（「花つまむ」）、容姿や様子を表すもの（「眉をさな」「被衣（の人）」）、感情

による身体の変化を表すもの（「泣く」）、他者による行為を受ける対象であることを表すもの（「人（を）罵りし」）、視覚行為を表すもの（「見る」）である。

聴覚表現：一首

今日見つれ草野を西へむつまじき二つの傘に母を泣く《人》

（新派和歌大要・二七七）

右の作品は「人」に対する視覚表現（感情による「人」の身体の状態を表す「泣く」）も用いられており、視覚表現と聴覚表現の複合感覚表現となっている。

以上、鉄幹短歌での「人」に対する感覚表現を見て来た。

鉄幹短歌での「人」に対する感覚表現の特徴について、次の内容が挙げられる。

鉄幹短歌では、子規短歌よりも、「人」に対する感覚表現に聴覚表現を用いることが多いことが明らかである。

左に鉄幹短歌と子規短歌の「人」を詠んだ作品の中で、視覚表現、聴覚表現、嗅覚表現が用いられている作品数を挙げる。作品数の下の（ ）内の割合は、それぞれの「人」を詠んだ全作品数（鉄幹短歌では二二一首、子規短歌では二〇六首）に対する、各感覚表現を用いた作品数の割合（小数点第二位以下を四捨五入）である。

鉄幹短歌：視覚表現 一三四首（63.5%） 聴覚表現 二七首（12.7%） 嗅覚表現 一首（0.5%）

子規短歌：視覚表現 一八四首（89.3%） 聴覚表現 十四首（6.8%） 嗅覚表現 〇首（0%）

鉄幹短歌では「人」を表現する際に聴覚表現を用いることが、「人」を詠んだ鉄幹短歌二二一首の中の約12%を占め、



子規短歌の場合の約1.8倍である。子規短歌に視覚表現が多いのは、子規が写生の方法を短歌に用いたためであり、そこが鉄幹短歌との異なる点である。

また子規短歌と比べ、「人」を表現する際に感覚表現を用いることがやや少ないと言える。これは次の例のように、「人」が短歌に詠まれる際に、視覚などで捉えられない思考活動の表現（「忘れ」や感情の表現（「さびしさ」「恋せ」）、「人」に対する詠み手の評価（「あさまし」）などが用いられていることが、子規短歌よりも多く見られるためである。

わがやどに秋の扇はなかりけり《人》はその名や忘れたりけん

（鉄幹子・二六）

世の中に親なき《人》のさびしさをけふは我身になげかるゝかな

（鉄幹子・一六二）

人しれず恋ひぬる我に人しれず《人》も恋せば見てなぐさめむ

（うもれ木・一二八）

山の井に瘦せしわが頬をうつしてはあさまし《人》を猶うらみける

（鉄幹子・一〇九）

鉄幹短歌の「人」に対する感覚表現の特徴として、次のような「人」の容姿や様子に関する表現（「うつくしき」「老ゆる」「被衣（の）人」）が多数見られることも挙げられる。これは子規短歌では「人」の容姿の表現が少ないことと対照的な結果である。

屠蘇すこしすぎぬと云ひてわがかけし羽織のしたの《人》うつくしき

（紫・八九）

花のまへに《人》はみすみす老ゆるものこの春の日もまた夕なり

（紫・二九七）

梅にふる東大門とうだいもんのうすみぞれ被衣かつぎの《人》を牛に載せしか

（うもれ木・五一）

また、「人」に対する感覚表現の内容について、鉄幹短歌の方が早い時期から、やや豊富に見られる。例えば子規短

歌では、「喜ぶ」といった感情によつて身体に現れる「人」の状態の表現は、明治三二年の作品から見られる。

カナリヤの囀り高し鳥彼れも《人》わが如く晴を喜ぶ

(一〇九七・三二年)

対する鉄幹短歌では、初出年が明治三十年の次の作品に見ることができる。

《人》はただ、あはれと笑みて、やみぬとも、言はであるべき、事ならなくに。

(天地玄黄・十六)

鉄幹短歌では「人」に対する感覚表現は、次の例のように、行き来の表現や容姿や様子を表すものなど、明治三五年まで豊かな内容である。これは晩年の子規短歌で「人」に対する感覚表現の内容が狭まっていくことと異なる結果である。

梅の奈良古代雲がたわかむらさき七重の袖の《人》人見るものか

(うもれ木・八五)

白雪に薬師たふとし北越後米山《人》を去る式千尺

(うもれ木・一四九)

聴覚表現についても、鉄幹短歌の方が多様な表現が見られる。例えば、鉄幹短歌に用いられている「人」に対する聴覚表現「誘る」「教ふ」といった音声を伴う行動を表すもの、訛りについて「藹たし」と表現することなどは、子規短歌には見られない表現である。

思はずば、忘れはてても、ありぬべし。そしるも《人》の、なさけなるらむ。

(東西南北・二〇四)

云はぬをばつよしと云ふはわれ知らず泣けな狂へと《人》のをしへし

(紫・三〇四)

わか葦に江を二十里のくだりぶね《人》平壤のなまり藹たき

(うもれ木・一四〇)

鉄幹短歌に使用されておらず、子規短歌に用いられている「人」に対する感覚表現も幾つか見られる。次の子規短

歌三首の例のように、「人」の色を表すもの（「黒き」）、「人」の飲食行為を表すもの（「餅くひ」）、「人」であることを表すもの（「人にして」）等が挙げられる。

岡の上に黒き《人》立ち天の川敵の陣屋に傾くところ

（一〇二三・三二年）

句つくり至今日來ぬ《人》は牛島の花の茶店に餅くひ居らん

（一五八七・三三年）

《人》にして鳥にありせば駿河路や三保の磯邊の松に巣くはな

（二四〇七・三三年）

しかし、これらの表現は子規短歌でも例数が少ないものであり、概して鉄幹短歌の方が「人」に対する感覚表現が豊かであると言える。

#### 第四節 まとめ

子規短歌での人物語彙の使用実態について、短歌革新発表のあった明治三十一年を境にした大きな増加が見られ、明治三十四年以降の晩年の作品でも多く用いられている。以下、子規短歌の人物語彙の使用実態についてまとめていく。

明治三十一年での、自身が発表した短歌革新の実践による歌材の拡大は、人物語彙にも見ることができる。明治三十一年を境に、次の内容の人物語彙が積極的に詠まれるようになった。

一、複合語で表される人物語彙

明治三十年以前では、「人」などといった、語彙そのものに性別、老若、貴賤等の情報が含まれていないものの使

用が多く見られる。それが明治三一年では「フランス少女」「若人」「賤の童」など複合語の人物語彙が大きく増加する。明治三三年まで複合語の人物語彙の使用が多く見られる。

## 二、老人を表す人物語彙

「翁」や「媼」といった老人を表す人物語彙は、明治三一年から明治三三年までの期間の作品に見られる。老人を表す人物語彙は、短歌革新で歌材を広げる際に詠まれるようになり、晩年に歌材が身近な内容に狭まる際に用いられなくなる語彙である。

## 三、若人を表す人物語彙

明治三十年以前の子規短歌にも使用例が見られるが、多く使用されるのは明治三一年からである。若人を表す人物語彙は、老人を表す人物語彙と異なり、明治三四年の短歌でも積極的に用いられている。

## 四、国内の地域、又は外国の人を表す人物語彙

明治三十年以前の子規短歌の、詠まれている外国人を表す人物語彙は「唐國人」といった中国人のみである。また、「都人」など国内の特定の地域に属する人を表す人物語彙の使用が見られない。

明治三一年になると、中国人以外に「アメリカ人」が詠まれるようになり、「神田男」「都人」など国内の特定の地域に属する人も詠まれるようになる。この外国人や国内の特定の地域に属する人を表す人物語彙の使用の拡大は明治三三年まで見られる。

明治三四年以降は、作歌数の減少が見られることと作歌の契機が身近な物事に拠る傾向が強くなることから、こ

のような人物語彙の使用が殆ど見られなくなる。

#### 五、傷病人や故人を表す人物語彙

例数は少ないが、子規短歌では明治三十一年に初めて詠まれたものである。明治三十三年まで使用されている。

#### 六、職業に従事している人を表す人物語彙

特に、「辻占賣」「鑄物師」「氷屋」など陸上で商業活動を行っている人、「朝臣」といった前近代の官職名、「戯れ歌詠み」「湯月少女」といった文人、サービス業に従事する人について、明治三十一年を境にした増加が見られる。歌材の拡大、古典和歌から脱却した歌材の選択を見ることができる。

明治三四年以降は使用例が少なくなる。

#### 七、神仏を表す人物語彙

明治三十年以前の子規短歌では「神」や「龍田女神」など神を表すものが殆どであるのが、明治三十一年では「聖霊」「天人」「物の怪」など神以外の神仏を表すものの内容が豊かになる。明治三二年から明治三十三年では神仏を詠む傾向が小さくなるが、神仏を表す人物語彙の内容は豊かである。また「マドンナ」「耶蘇」といった欧米の神の名前が明治三二年に見られる。

明治三四年以降の子規短歌は、神仏を表す人物語彙の使用が殆ど無くなる。

#### 八、様々な女性を表す人物語彙

明治三十一年から明治三十三年までの子規短歌では、「撫子少女」「婆」など女性を表す人物語彙の内容が多様である。

また、「姥」「美人」といった老若や美醜の意味を含む複合語が、明治三一年から明治三四年までの子規短歌に多く見られる。但し老と醜の女性については、明治三一年以降では歌の材料としていない。

子規短歌で明治三一年を境にした歌材の拡大の実践が見られる一方で、明治三一年を境に歌材から外れる人物語彙が見られる。その例として「關守」が挙げられる。「關守」は古来頻繁に使用されている人物語彙であり、且つ前近代の職業従事者を表すものである。これは歌材の拡大と共に古いものを捨てている例であることを示す。

しかし、古来頻繁に使用されてるものや前近代の職業を表すものを、子規が短歌革新の実践で詠まなくなるとは言えない。なぜなら、古来頻繁に使用されている人物語彙である「舟人」や、前近代の呼称である「少將の君」「武者」なども明治三一年以降の子規短歌に詠まれている。

明治三四年以降になると、歌材とする人物語彙の内容が狭まってゆく。次の例のように身近な出来事や伝聞によって得た情報によって選ばれた人物語彙の使用が多くなる。一首目は伊藤左千夫宛ての書簡に記された作品であり、二首目には「左千夫」「(左千夫の)朝臣」といった知人名と知人名に付けられた官職名が詠まれている。

《いとし子》の《まな子》のつゝみひまあらば牡丹見に來と文書きおくる

(拾遺四二五・三四年)

樂燒のすゑものやかば弓矢取る《左千夫》の《朝臣》か面かたを取れ

(拾遺五〇一・三五年)

また神仏名を詠み込むことも、明治三四年以降の子規短歌では殆ど見られなくなる。またその詠み方にも変化が見られる。次に「佐保姫」の例二首を挙げる。明治三十年以前では「佐保姫」が実態をもっているような表現であったのが、明治三四年の作品での「佐保姫」は春の象徴としての表現である。

たちそめし霞のきぬは《佐保姫》が春さればとてつくるにやあらん

(一二二・二二年)

《佐保神》の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

(拾遺三八三・三四年)

子規短歌に使用されている人物語彙には、他にも次の内容のものが見られる。

人名について、六期間通して多様な人名が詠まれている。明治三十年以前の子規短歌に既に多様な内容が見られる。著名人の名前や知人名は明治三年に増加が見られる。知人名は明治五年の子規短歌にも積極的な使用が見られる。

「賤」を表す人物語彙について、六期間通して使用例は多くないが、明治三年の子規短歌では七首に用いられている。明治三年から明治四年まで、「賤」を表す人物語彙の使用例が見られる。次に例を二首挙げる。

酒店を叩けども起きずすゝり泣く《賤の童》に雪ふりしきる

(四五四・三二年)

箱根路の關屋の跡をとめくれば《賤の童》か薄刈るなり

(四八三・三二年)

子規の、「賤」の人にも目を向ける視線をここに見ることができる。

また子規は、賤を表す際は、「賤」の語で表す傾向が見られる。明治三年に「乞食の子」、明治三年に「傍居」を詠む例が見られるが、その例数は、「乞食の子」は二例、「傍居」は一例と少ない。

「戯れ男」「書生」「女學生徒」「盗人」といった、無職・学生・泥棒を表す人物語彙も、六期間通して使用例が少ないものの、子規の人物語彙に見られることは特徴の一つである。

「親」や「妹」など親族や仲間を表す人物語彙について、明治三十年以前から多様な例が見られる分野の人物語彙

である。明治三十一年から明治三十三年ではより豊かな内容となる。明治三十四年以降では使用することが少なくなる。

子規短歌に見られる人物語彙について、次の内容も指摘することが出来る。

明治三十一年、明治三十二年、明治三十三年の各期間の子規短歌に用いられている人物語彙について、その大半がそれぞれの期間の作品で初めて使用されているものである。例えば明治三十一年の人物語彙には「姥」や「少女」が見られるが、この二語は明治三十年以前の子規短歌には見られないものである。明治三十二年の人物語彙には「歌詠み」「垂乳根」が見られるが、この二語は明治三十一年までの子規短歌には使用例が無いものである。このような人物語彙が、明治三一年から明治三十三年までの人物語彙の大半を占めている。またこれらの人物語彙が以降の期間の作品に継続して用いられることは少ない。

明治三十年以前に用いられている人物語彙が、継続して用いられている例も非常に少ない。例えば、「荒神」や「化學者」は明治三十年以前の子規短歌に用いられているが、明治三十一年以降の作品には詠まれていない。

明治三十四年以降は人物語彙の内容が「左千夫」や「秀眞」など身近な人物を示すものへと狭まりが見られるが、明治三十一年から晩年までの間で、子規は様々な複合語の形で人物語彙を詠んでおり題材を広く求め続けていると言える。

子規が多く使用する傾向が見られる人物語彙は、「人」「神」など古来頻繁に使用されているもの、また複合語となっていないものである。子規が積極的に拡大した人物語彙の題材は、古歌に頻繁に使用されたもの以外であり、且つ



複合語の形である。しかし、繰り返し使用される人物語彙は「人」や「妹」といった、古歌に頻繁に使用されているもの、または複合語の形でないものである。

子規短歌の人物語彙に対する表現方法について、最も使用例数の多い「人」に対する感覚表現を見て来た。その結果、次の内容が明らかになった。

「人」に対して用いられている感覚表現の殆どが視覚表現である。特に「人」の存在の有無の表現と、「人」の動作の表現が多く用いられている。子規短歌での「人」に対する感覚表現には聴覚表現も見られるが、後述の鉄幹短歌と比べると、その使用は少ない。また期間を下るに従い、「人」に対する視覚表現の使用が多くなり、聴覚表現の使用が少なくなる傾向が見られる。

子規短歌での「人」に対する感覚表現の内容は、明治三十一年から明治三十三年の期間では多様なものであるが、明治三四年以降は、「土筆摘む」などの植物に対する「人」の行動を表すものへと偏ってゆく。

子規短歌での人物語彙の特徴と、後述の鉄幹短歌の人物語彙の特徴と比較すると、子規短歌の方が人物語彙の内容は豊富であるが、人物語彙「人」に対する表現は鉄幹短歌の方が豊富であることを指摘することが出来る。

子規短歌では、「人」の容姿や様子、感情による身体の変化を殆ど詠まれていない。それは、子規短歌では、「人」そのもののみが主題になることが、鉄幹と比べて少ないためと考えられる。次に、子規短歌の四首の例を挙げる。

なくはかりいひ出んこともなみた川《人》のみるめの多き世なれば

（拾遺一二五・十八年）

尋ね來し古きわたりの柳陰《人》無き舟に螢飛ぶなり

(六八七・三二年)

岡の上に黒き《人》立ち天の川敵の陣屋に傾くところ

(一〇二三・三二年)

《人》にして鳥にありせは富士のねの清き月夜にみ空かけらな

(一四〇八・三三年)

一首目では恋路を妨げるものとしての「人」が詠まれており、二首目では「舟」に誰もいない状態であることの説明として「人無き」と詠まれている。三首目では地上の「人」と空の「天の川」の組み合わせとなり、「人」のみが主題とはなっていない。四首目では「富士のねの清き月夜にみ空かけらな」という願望が主題となっている。

一首の殆どが「人」に対する説明がなされている作品も見られるが、次の子規短歌のように、「人」の言動を記すことで表現している。

常伏に伏せる足なへわがためにガラス戸張りし《人》よさちあれ

(一四二六・三二年)

右の例では「人」は、「常伏に伏せる足なへわがためにガラス戸張りし」人である。これを親切や情けある「人」とすると主観的な表現であるが、言動をそのまま表現することで客観的に「人」を説明している。このような子規の客観的な表現は、次の歌論<sup>注2</sup>の実践と言える。

…和歌俳句の如き短き者には主観的佳句よりも客観的佳句多しと信じ居候へば客観に重きを置くといふも此處の事を意味すると見れば差支無之候。…

次のような例外も見られるが、概して子規短歌での人物語彙の表現には、人物の容姿や感情による身体の変化の表現が少ないと言える。

「少女」を詠んだ作品では、「少女」に対して容姿の表現を用いる例が、「少女」の動きなどを表現する例よりも多く見られる。次に例を二首挙げる。容姿の表現の箇所には傍線を付す。

撫し子の花賣る《をとめ》なでしこの花にぞ似たる《なでしこをとめ》

(五〇四・三二年)

夏避くる出湯の宿に我居れば百合活けに來る《をとめ》かほよし

(一一八〇・三二年)

但し、このように容姿の表現が、動きなどの他の表現よりも多く見られる人物語彙は少ない。

子規短歌との比較対象として、鉄幹短歌についても見て来た。鉄幹短歌では、子規短歌と比べて人物語彙を詠む傾向が強く見られる。

鉄幹短歌に見られ、子規短歌には見られない人物語彙の特徴は、次の通りである。

一、人物語彙「子」の意味について、幼少の者や親子関係の子供を指す意味の他に、人を表す意味での使用が見られること。

二、賤よりも貴人を詠む傾向が、子規短歌の場合と比べ強いこと。賤を詠む例は鉄幹短歌では少ない。

三、傷病人は歌の材料としていない。

四、生産業に従事する人を表す人物語彙について、「蟹」や「船子」といった古来頻繁に使用されている内容が、比較的多く見られること。

五、特定の神を表す際、神の名前を詠むのではなく、「浅間の神」など「〴〵の神」の形を用いることが多いこと。

Ⅵ、老若・美醜の意味を含んだ女性を表す人物語彙が少ないこと。また「姥」などの老女を表す人物語彙の使用例が見られないこと。

右に挙げた鉄幹短歌の人物語彙の特徴と、子規短歌での人物語彙の特徴を比べると、子規短歌の方が詠み込む人物語彙の内容は豊富であると言える。

鉄幹短歌での人物語彙の表現方法について、子規短歌の場合と同様に、「人」に対する感覚表現について見て来た。鉄幹短歌でも、人物語彙「人」の使用例は非常に多く見られる。

鉄幹短歌での「人」に対する感覚表現には、視覚表現と聴覚表現と嗅覚表現が見られる。特に聴覚表現の使用について、「泣く」「云ふ」「罵る」など音声の伴う行為を表すものの例が多く、子規短歌と比べて多く聴覚表現が見られることが特徴的である。

鉄幹短歌での「人」に対する視覚表現の特徴について、鉄幹の方が短歌の中で人物の容姿や状態を詳細に描写していることが挙げられる。次に例を一首挙げる。

屠蘇すこしすぎぬと云ひてわがかけし羽織のしたの《人》うつくしき

(紫・八九)

また、次の鉄幹短歌に用いられている「笑む」といった、「人」の感情による身体の変化を表現する例も、子規短歌と比べ多く見られる。

手力雄われぞと笑みし地の《人》の恋のひかりの朝を見しや歌

たちからを

(新派和歌大要・八六)

鉄幹短歌では右の内容以外にも、子規短歌に用いられている多様な「人」に対する視覚表現を見ることが出来る。  
またそのような視覚表現は、鉄幹短歌では明治三五年の作品まで見られる。

鉄幹短歌での「人」に対する感覚表現について、次の二首の例のような「人」の思考活動の表現や感情の表現、「人」に対する詠み手の評価など、感覚表現が見られない例も子規短歌よりも多く見られる。

人しれず恋ひぬる我に人しれず《人》も恋せば見てなぐさめむ

(うもれ木・一二八)

ながらへば、《人》のつらさも、なほるやと、惜しからぬ身を、なほ惜むかな。

(天地玄黄・二二二)

秀でたる《人》にとこそは祈りけれ仏の身にもなりにけるかな

(鉄幹子・一〇七)

## 注

注1 『歌ことば歌枕大辞典』(久保田淳、馬場あき子編 角川書店 一九九九年発行)の見出しに、「海人」と「舟人」がそれぞれ見られる。

注2 『子規全集』第六巻 歌論選歌(正岡忠三郎編集代表 講談社)収録の「六たび歌よみに與ふる書」(全集三五〇三八頁)より抜粋。

## 結章

正岡子規の短歌の語彙の使用実態の特徴と変化について、次の内容を明らかにしてきた。

### 第一部

ここでは、「器物語彙」「宮室語彙」「服装語彙」「人事語彙」「自然物語彙」「動物語彙」について見てきた。

**明治三十年以前**では、「玉梓／玉章」や「戀」など古来頻繁に使用されている語彙が多く使用される傾向である。

**明治三十一年**を境に、「人事語彙」を除き、短歌に詠む題材の内容の拡大を見ることができる。「人事語彙」が、明治三十一年での題材の拡大から外れているのには、子規が「人事」は詩歌に詠みたい題材としていることによるものと考えられる。

人工物を表す語彙（器物語彙、宮室語彙、服装語彙）と「動物語彙」については、次の変化が見られる。

**明治三十一年**での題材の拡大の際に、古来頻繁に使用されているものではない内容のものを求める姿勢が見られる。

例えば動物語彙では、明治三十年以前では殆ど例の見られない、「鮎」といった「魚類」、「龍」といった「爬蟲類其他」、「蠅」といった「蟲類」が詠まれるようになることが挙げられる。また、古典和歌では馬は「駒」、蛙は「かはづ」と詠まれているが、明治三十一年の子規短歌では、「馬」と「青蛙」を詠み込んでいる。

「自然物語彙」では、**明治三十一年**を境にして、子規の行動範囲の狭まりが使用される語彙に現れている。「海」や「波

／浪」といった海に関する内容よりも、「山」など陸のものの方が多く詠まれるようになる。

**明治三十一年**の子規短歌での表現についても、古典的な表現からの脱却が見られる。例えば「蟲」の詠み方について、

**明治三十年以前**では「秋に鳴く虫」を詠んでおり、「蟲」をこの意味で用いるのは歌ことばとしての用法通りと言える。

それが明治三十一年以降では、次の例のように歌ことばとしてではない「蟲」を用いるようになる。

糞蠅は《屎蟲》を笑ひ《屎蟲》は糞蠅そしる世にこそありけれ  
(九〇八・三十一年)

人を刺す《蟲》をかしこみからへ行く君が首途に草はなむけす  
(一二二五・三十一年)

窓の外の《蟲》さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし  
(一四二三・三十三年)

また次の「都鳥」のように、古典と類似した状況であることを題材にするという方法も見られる。

嘴と足と赤きといひし業平の昔おもほゆる《都鳥》かも  
(四〇九・三十一年)

但し後者の表現は、子規短歌全体において殆ど確認することのできないものである。

**明治三二年と明治三三年**では、人工物を表す語彙（器物語彙、宮室語彙、服装語彙）以外の語彙は、歌材とされる傾向

が弱くなつてゆく。但し動物語彙については、例えば蝸牛や象などといった、古来頻繁に使用されるものではなく、且つこれまでの期間の子規短歌に例が見られない語彙の使用が見られ、題材の拡大の姿勢を見ることができるといえる。

この期間に詠まれている、人工物を表す語彙（器物語彙、宮室語彙、服装語彙）、人事語彙は、「ガラス戸」や「病の床／病の牀」、「歌」、「病」といった、当時の子規にとつて身近な内容が多く詠まれている。また動物語彙では、「鶴」といった子規にとつて身近ではないと考えられる動物が詠まれなくなり始める。自然物語彙は、明治三十一年から継続

して「山」「森／杜」などの陸のものを歌材として選ぶ傾向が見られる。

**明治三四年以降**になると、人工物を表す語彙（器物語彙、宮室語彙、服装語彙）、人事語彙、自然物語彙、動物語彙が詠まれることが減少する。また、子規に身近な内容が歌材として選択される傾向が強まる。

この晩年の時期の「人事語彙」について、次の子規短歌の特徴を指摘することができる。

子規は明治三一年を境に、「戀」など心の状態を表す語彙と「身」や「別れ」といった境遇を表す語彙の使用の減少が見られる。それが晩年になると、例数は多くないが、子規の境遇が詠まれている作品が見られるようになる。その詠み方は、「我身」等の人事語彙を用いずに自らの境遇を表現するもので、子規短歌の特徴と言えるものである。

**明治三四年以降**の「動物語彙」について、次の特徴を指摘することができる。子規は鳥や虫の声に強い興味を持っているが、それが短歌に反映することは殆ど見られない。「蟲」については前述の通り、明治三二年を境に「蟲」の音が詠まれることがなくなっている。鳥については、鶯や時鳥など短歌で鳴き声を詠む傾向の強い鳥が晩年まで詠まれており、その作品では鳴き声や鳴いている鳥が詠まれることが殆どである。しかし「動物語彙」全体が詠まれることが少なく、鳥についても題材となっている作品数は少ない。しかし、後述の「植物語彙」や「天文語彙」、「人物語彙」では視覚による表現に偏っており、子規短歌全体でも写生の方法を用いているために視覚表現が多く見られることから、この鳥の表現方法は例外的なものと言える。



## 第二部

短歌に用いられる外来語について見てきた。本稿での外来語とは漢語と欧米語としている。また子規短歌との比較対象として、直文短歌、鉄幹短歌、晶子短歌を用いている。

子規短歌に使用されている漢語について、次の特徴が明らかになった。

**明治三十一年**で、子規短歌での漢語使用は積極的なものとなる。明治三十一年になると短歌の題材の拡大に伴う漢語使用の拡大が見られ、それは同時代の鉄幹や晶子と同様に、伝統的な和歌と比べて多いものである。また、明治三十一年に歌の題材を漢語で表されるものにまで広げたことで、晩年に歌材が身近な物へ狭まった際でも歌の題材をある程度確保することができたと考えられる。例えば晩年の子規の身近にあったもので歌材となっている「鉢植」の「鉢」は漢語である。

子規短歌の漢語について、その内容を次の三点から見てきた。意味分野、古歌との対応、多字漢語である。

漢語で表す意味分野について、明治三十一年から明治三十三年の間では、生活に根差した身近なものへと題材を広げている。

**明治三十年以前**では日常生活から離れた内容（紂王や黄帝など）を表すことが多い。

**明治三十一年**から明治三十三年では、「納豆賣」などといった日常生活に即したような身近な内容や、「銭」といった生活に密着した商い関係の内容、「墨繪」といった文学・芸術関係の内容、「歌書」など子規の周辺にあるものが増える。特に明治三十三年では子規の身の回りの物が多くなる。「銭」といった生活に密着した商い関係の漢語は、直文短歌

や鉄幹短歌、晶子短歌には例が見られない。このような漢語の使用は子規の特徴と言える。

**明治三四年**になると、短歌に使用される漢語が、子規の身邊のものである「牡丹」や「繪」、子規の知人を表す「茶博士」、新聞からの伝聞のものである「孝子」などのような、子規の身近なものや身近なものに起因したものへ狭まっ  
てゆく。

また**明治三四年以降**の子規短歌では、「茶博士」や「鉢植」など漢語で表される、身近な物や人を詠んでいる。しかし「秋海棠」や「木瓜」といった根岸の子規庵の庭にある漢語で表される植物については、殆ど詠まれていない。「梅」「土筆」など和語で表される植物の例が多く、明治三十一年に多数詠まれた「紅梅」という表現が、次の二首のように和語での表現になっている。「紅梅」の言い換えの表現の箇所に傍線を付す。

紅のこそめと見しも梅の花さきの盛りは色薄かりけり

（拾遺四六五・三五年）

ふふめりし梅咲にけりさけれども紅の色薄くしなりけり

（拾遺四六六・三五年）

**明治三四年以降**の漢語で詠まれる題材の違いについて、明治三二年から明治三三年までの短歌への漢語使用を通して、子規は短歌に詠む漢語について次の傾向を得たと考えられる。

一つに、人物又は人工物に関するもの（「人物」「器物」「宮室」「人事」）を漢語で詠みやすいこと、又は漢語で表される人物又は人工物に関するものは歌に詠みやすいことである。

二つに、自然に関するもの（「動物」「植物」「天文」「自然物」）に関するものは漢語で表し難いこと、又は漢語で表される自然に関するものは歌材に成り難いことである。

子規は、植物を始めとした自然物について、漢語の形で短歌への表現することにあまり適していないとしたのではないかと考える。

子規短歌の漢語について、江戸時代までの和歌に使用されたもの以外に、次の三つの性質の漢語の使用が見られる。一つに、古歌では作品の題材ではあるが和歌中では漢語で表されないものである。例えば古歌では、「野店月」と題が付された和歌に次のものが見られるが、和歌本文では「野原のいほ」と表現が変わっている例が見られる。

なほざりの野原のいほの秋風にあれまくしらずすめる月影

（白川殿七百首）

二つに、古歌では作品の題材となるが和歌中には表されないものである。例えば古歌では、「碁盤」が詞書の中に明記されているが、和歌本文では次の作品のように、「碁盤」を表す表現が見られない例が見られる。

をのえのくちむもしらず君が世のつきんかぎりはうちこころみよ

三つに、古歌中にも古歌の詞書にも使用例が見られない漢語、即ち和歌の題材になっていないものである。例えば子規短歌では「鐵棒」が詠まれているが、古歌には「鐵棒」の例は見られない。

このように子規は、古典では和歌本文中に詠まれない形のもの、作品の前提となるも和歌本文中の題材にならないもの、作品の題材にならないものと、短歌に詠み込む題材を拡大させている。古歌では、漢語を和歌本文中に詠むことは少なく、和語や雅語を歌中に使用することが多い。それに対して子規は、和語や雅語に限定せずに、漢語を始めとした外来語を歌に積極的に詠んでいる。ここに子規の近代人の一つの言語意識が表れている。

子規短歌に見られる多字漢語について、積極的に多字漢語が使用されるのは明治三十一年から明治三十三年までである。

多字漢語で表される内容は、明治三十一年では「金州城外」や「如是我聞」等といった漢詩文の句を短歌にそのまま題材にしたものが見られる。明治三二年と明治三三年では「藥王菩薩」や「善男善女」等といった神仏名など宗教関係のものが多くなる。また次の短歌のように、短歌の音数律から外れる、八音以上の漢語の使用も明治三十一年から三三年までの期間の作品に見られる。

《天津橋上》繁華の子等の見えしより《天津橋下》春の水青し

(三五八・三十一年)

子規短歌の欧米語について、次の使用実態の変化が見られる。

**明治三十一年**に、欧米語の使用が積極的になる。

**明治三十三年**に欧米語の使用が最も多くなる。

**明治三十四年以降**の子規短歌では、欧米語使用は減少傾向となるが、直文短歌や鉄幹短歌、晶子短歌よりも欧米語の使用傾向が強い。

子規が短歌へ欧米語を積極的に使用する時期も、鉄幹や晶子よりも早く開始されている。このことから、当時での欧米語の短歌への使用の面では、子規短歌は急進的な位置にあったと考えられる。

子規短歌での欧米語の意味分野について、直文短歌、鉄幹短歌、晶子短歌よりも多様な内容となっている。子規短歌の欧米語には、直文短歌と鉄幹短歌、晶子短歌には見られない、宮室（ガラス窓など）、服装（シャツ）、動物（カナリヤ）、植物（チンノレアの花）、飲食（バナナなど）、無形（ページ）を表すものが詠まれている。

子規短歌の欧米語は、明治三十一年にその内容の拡大が見られる。明治三十三年になると詠まれる欧米語が、「ガラス」

や「カステラ」など子規の身近なものや出来事に起因したものが多くなる。明治三四年になるとさらに身近なものへと狭まってゆくのは漢語の場合と同様である。

欧米語の地名が積極的に詠まれるようになるのは、明治三二年と明治三三年である。明治三十一年に漢語の地名を先に積極的に詠み、その後で漢語の地名の使用と並行して、洋語の地名の積極的使用を行ったと考えられる。

欧米語の詠まれ方について、子規短歌では次の例のように、事実の提示や、写実的描写の一環として使用されることが多い。

《ビードロ》の《ガラス戸》すかし向ひ家の棟の花咲ける見ゆ

(一四二一・三三年)

鉄幹や晶子短歌の欧米語の多くが、次の例のように、抒情的、空想的描写の一環として使用されていることと対照的である。

ふところに《ハイネ》の詩あり泣きながら百尺の巖に海の月みる

(紫・二九四)

花にそむき《ダビデ》の歌を誦せむにはあまりに若き我身とぞ思ふ

(みだれ髪・三六八)

次に、直文短歌と鉄幹短歌、晶子短歌の外来語の特徴について、次の内容を指摘することができる。

直文短歌について、子規短歌と比べ外来語を短歌に使用することが少ない。

漢語について、短歌に詠まれる内容は限られたものであり、「更衣」といった王朝時代を連想させるもの、「卒塔婆」といった仏教関係のもの、「銀杏」や「菊」などと限られた種類の植物に偏っている。子規短歌の漢語は、「伯樂」「納豆賣」といった人名や商人名や、「二輪挿し」「新聞」といった子規の持ち物、「鐵線」や「木瓜」など多様な植物が見

られ、この点でも子規短歌と異なっている。

欧米語の使用程度は低く、内容も「アジア」「シベリヤ」「フランス」といった「地名」のみである。

鉄幹短歌の外来語について、漢語の短歌への使用は、明治三十年以前から見られる。また、漢語の内容も同時期の子規よりも豊富である。よって、子規よりも漢語の短歌への積極的使用が早く開始されたと言える。

漢語の内容も豊富である。特に「阿弥陀仏」や「聖書」など宗教的なものと、「詩人」や「絵筆」など芸術・文芸に関するものが多く見られる。また「野砲」といった武器を表すものも複数例見られる。子規短歌では、武器を表すものは「銃」の一例のみである。

鉄幹短歌では多字漢語は、明治三二年のみに見られ、明治三四年のような漢語を短歌に詠む傾向が高い時期でも、音数律から外れるような漢語の使用をほとんど行っていない。これは子規短歌で、明治三一年から三三年の間に多字漢語を複数例見られることと異なっている。多字漢語の内容は、「二十一吉」といった数字や「十六羅漢」といった仏教関係や数字を用いたものが多く、後述の晶子短歌と共通した特徴である。

欧米語について、直文や晶子よりも多く使用しているが、短歌への洋語の積極的な使用は子規よりも遅く、内容も限られている。

晶子短歌での外来語について、漢語は多く見られるが、欧米語は殆ど見られない。

晶子短歌に使用されている漢語は鉄幹の影響が強く見られる。鉄幹短歌の漢語に見られる宗教関係の漢語や、芸術・文芸関係の漢語の使用への偏りがより顕著になっている。但し鉄幹短歌に見られる、日常生活で見られる商いに関する

もの、武器を表すもの、近代文明の機器を表す外来語の使用は見られない。

多字漢語についても鉄幹短歌の特徴と一致している。

欧米語は使用例が少なく、内容も「ダビデ」や「チチアン」といった人物のみである。

### 第三部

ここでは、自然語彙の中の、「植物語彙」と「天文語彙」と「地名語彙」について見てきた。

「植物語彙」について、次の内容が明らかになった。

**明治三十一年**の短歌革新の実践として、短歌に詠む植物の種類を大きく増加させている。古来のものに囚われ新しい題材の拡大を積極的に行ったこと、古来頻繁に使用された題材を使用する際は、その題材を表現する方法を変化させて陳腐な趣向にならないようにした可能性があることも指摘できる。また、鉄幹短歌の植物語彙と比較より、広く求めた植物の内容は、古歌や同時代の他の歌人の影響は強くないと言えるものである。

**明治三十二年と明治三十三年**では、明治三十一年での急進的な題材の拡大の影響もあってか、新しい題材を広げつても前期間までに使用された題材を引き継ぐ傾向が強く見られる。表現については、明治三十三年の作品では、題材の用法が多角的になっている。

**明治三十四年以降**では、明治三十一年から明治三十三年で題材として拡大した植物で庭にないものなどは、殆ど使用されなくなる。これは子規が境遇を詠む際に、「自己の深处の生命」と重なる対象として、身近な植物の方が適しているとしたためと考えられる。

**明治三五年**では、子規の視界が遠景よりも近景を観察する方に適するようになった為か、庭の植物よりも枕元の植物を多く詠む傾向がみられる。明治三五年の歌風が「田園回帰」へ変化したことによって、想像上で植物を詠む傾向も見られる。

植物語彙には、「葉」などの植物の部位、「森」などの植物の集まり、「葉陰」など植物によつて作られた空間を表す語彙が含まれている。これらの語彙について、次の内容が明らかになった。

**明治三十一年以降**に、植物の部位を歌に詠むことが減っている。これは、写生（俳句革新で既に俳句に取り入れられたもの）を短歌に取り入れたことで、歌材を印象明瞭にするために、「配合」という方法を用いており、それは植物の部位を詳細に描く方法ではなかったためと考えられる。

また子規が短歌革新で主張したことの一つに「歌材の拡大」があるが、その影響から歌に詠まれる植物の部位の種類は増加している。また「植物による陰―陰の中にあるもの」の配合の内、「陰の中にあるもの」として人間や人工物について積極的に用いる姿勢が三三年までみられる。これも「歌材の拡大」の影響と言える。この「植物による陰―陰の中にあるもの」の配合は、鉄幹短歌には殆ど例がなく、子規短歌の表現の特徴と言える。

革新後から晩年への変化には、次の内容が見られるが、これは子規の病状悪化によるところが大きい。

**晩年**では歌に詠む植物の部位が「花」に偏っている。これは晩年の作品の多くが自己の死が意識されていることと、晩年の子規の視覚能力の限界があったためと考えられる。

「森」などの大規模な植物の集まりを表す植物語彙の使用が見られなくなる。これは、「庭前即景」の歌風が確立し



た後に、子規の世界が「病牀六尺」へと限られたことによると考えられる。

また、植物によって生起した空間（陰）が詠まれることも少なくなっている。これは、「植物による陰—陰の中にあるもの」の配合を作ることが難しくなったこと、明治三三年までに詠まれていた「涼しき」に対する「美」が詠まれなくなったことが考えられる。

植物語彙に対する表現について、感覚表現の面から見てきた。その結果次の内容を指摘することができる。

まず、視覚表現を用いる傾向が強いことが挙げられる。これは子規が明治三年の短歌革新の際に、花の香りを詠むことについて批判したこと、写生の方法を短歌に用いていることが関係している。

植物語彙に対する感覚表現について、短歌革新後の作品にも古歌の影響が見られるものもあるが、総じて古歌の表現の踏襲を行っていない作品が多くなる。「山吹」や「梅」など子規が古歌の表現から脱却することが出来た植物は、短歌革新以降にも詠まれている。また自己の境遇と重ねることが出来る身近な植物が晩年まで詠まれる傾向が見られる。但し、庭にある植物でも「梅」や「菊」など歌ことばとしての用法に賀の意味が付されているものや、「松」や「杉」といった、花が鑑賞対象ではなく他の題材の場所や位置を示す役割となる傾向の強い植物は、晩年の作品で子規自身の投影の対象とはならない。

最後に本稿では扱わないが、子規短歌では短歌革新前後も、「松」と「待つ」、「杉」と「過ぐ」などの掛詞や、「花」を「雪」に譬えるといった見立てが少ないことが指摘できる。この植物名を利用した掛詞を用いないという、明治三一年以降の実践は、当時の中で特徴的であったと考えられるものである。鉄幹短歌では複数例に見ることがで

きるからである。

鉄幹短歌の植物語彙について、子規短歌と比べて植物を歌材にする傾向は小さい。また歌材としている植物の種類も子規よりも少ない。よって子規は同時代の新派の歌人である鉄幹と比べ、植物に短歌の題材を求める姿勢が強く、多様な植物を歌材としていえると言える。但し、明治三十年以前の時点では、鉄幹短歌の方が、古来頻繁に使用されているものではない多様な植物を詠んでいる。また植物の部位についても、子規短歌よりもやや多様である。

また鉄幹短歌では子規短歌と比べ、植物の集まりを表すものと植物によって生起した空間（陰）を表すものの使用が少ない。

鉄幹短歌での植物語彙に対する感覚表現について、子規短歌と異なり、花の香りを詠んだ作品が複数例見られる。また、鉄幹短歌では植物によって生起した空間（陰）を表す語彙が殆どないため、植物を詠んだ短歌に見られる色の組み合わせに、次の子規短歌の例のような「藪陰」「松の木陰」と「梅」「菜の花」といった暗色と明色（花の色）の組み合わせは少ない。

北うけて雪また残る竹藪の藪陰寒し梅五六本

（五九六・三一年）

百草の萌えいづる庭のかたはらの松の木陰に菜の花咲きぬ

（一七〇三・三三年）

鉄幹短歌では、次の「草餅」と「柳」と「彼岸ざくら」ように明色同士の組み合わせが多く見られる。

草餅に柳をそへて文にいふ都は彼岸ざくらなるべし

（新派和歌大要・一四一）

また鉄幹短歌には、次の例のような「しら梅」の「しら（白）」と動詞の「知る」の未然形「知ら」の掛詞が用いら

れている例が複数見られる。

春をわれ《しら梅》の花に恨ありなどか風情の君に及ばぬ

(紫・四三)

「天文語彙」について、本稿では「天文語彙」の中の一分野である、「気象語彙」と「天体語彙」について見てきた。「天文語彙」の中の「気象語彙」と「天体語彙」について、次のことが明らかになった。

子規短歌では、「気象語彙」と「天体語彙」は、「植物語彙」ほど明治三十一年を境にした題材の拡大は顕著に見ることができない。また明治三十一年以降に新しく歌材とした気象や天体を見ても、「植物語彙」のような古歌の題材から外れる歌材の積極的使用が見られない。これは「日」や「月」といった天体や、月影や風雨といった天体や気象による自然現象について、古代のものの近代のものもその存在は不変であったことに起因していると考えられる。天文語彙は、短歌革新を境にした子規自身の「用語の區域」の拡大の実践が現れ難い分野のものであると言える。

「気象語彙」と「天体語彙」では、次の歌の材料の取捨選択の「捨」の面を見ることができ。

時間など様々な情報を含んだ「気象語彙」(春雨など)や天体の他に、作歌当時の実生活や子規の短歌観に合わないもの、例えば寒さを感じさせる気象(風など)や気象現象(風や雨の音など)、外出先で表現することの多い天体の動きは歌に詠み込まないようになってゆく。時間など様々な情報を含んだ「気象語彙」については、晩年では次の例のように、他の題材との組み合わせで表現するようになっていく。

賤か家の貧しき庭に濡れて立つ《雨》の牡丹よ傘まゐらせん

(拾遺四三八・三四年)

また「氣象語彙」と「天体語彙」に対する感覚表現を見ると、鉄幹短歌と比べ、子規短歌は視覚表現に偏っている。これは子規が短歌革新の際に写生を短歌に取り入れ実践したこと、子規は嗅覚表現などが視覚表現で補え得るとしていることが影響している。また、鉄幹短歌に見られる「月」に対する詠み手の感情の表現も見られないことも、子規短歌の特徴と言える。

子規短歌の「天体語彙」に対する視覚表現には、子規の行動範囲の狭まりとの関わりを見ることができる。人力車で外出することができた時期までの短歌には天体の動きが詠まれているが、明治三四年以降では殆ど例が見られなくなる。天体の動きの描写は主に紀行文に見られるものであり、外出先の表現と言えるものである。

鉄幹短歌での氣象語彙と天体語彙について、内容は子規短歌と殆ど同様であるが、子規よりも星の種類が少ない。表現の面では子規短歌と異なっており、天体語彙を詠んだ作品が抒情的なものとなっている。

《星》は空に恋はわれらにまばゆけれやゝ似しものゝ地なる火の山

(うもれ木・十四)

「地名語彙」について次の内容を指摘することができる。

**明治三十一年**の短歌革新の主張の実践である「用語の區域」の拡大のを見ることができる。題材を広く求める姿勢は、明治三五年まで見られる。

明治三十一年では「上野」「鎌倉」「洛陽」といった東京と関東とアジアの地名語彙の増加が著しい。これらの語彙は歌枕ではないものが多い。また明治二十八年までに訪れたことのある地名の増加も見られる。これら地名は、明治三十

年以前の子規がほとんど歌材として認識されておらず、短歌革新の実践で歌に詠み込まれるようになったと言える。

特に東京と関東の地名の増加は、子規短歌の特徴であるといえる。子規短歌では、東北から甲信越、中部の地名語彙の使用が、鉄幹短歌と比べ積極的である。

**明治三二年、明治三三年**も歌枕でない東京と関東とアジアの地名語彙の増加が見られる。子規の旅先の地名語彙を題材にした作品の他に、知人の旅行先を詠んだ作品も多く見られる。そのため、アジアと欧米の地名の範囲がより広くなっている。

**明治三四年以降**でも地名語彙の増加を見ることができ、内容は東京やアジアなど外国の地名語彙が少なくなり、「結城」「香具山」といった歌枕となっている地名が半数以上となる。この期間の子規は他者の行動や人物説明に基づいて地名語彙を使用する傾向が強く見られる。この傾向は、子規自身の旅先を詠む傾向よりも強く見られる。他者に基づいた地名語彙が歌枕となっている地名と一致することが多かった為に、歌枕となっている地名が多く見られ、東京や外国の地名語彙が少なくなったと考えられる。

また、子規短歌の地名語彙全体の特徴として、村名など現地の人以外の読み手にとって分かりづらい地名語彙を使用する傾向が少ないこと、「〽驛」「〽停車場」「〽港」「〽街道」といった形の交通施設名の使用が見られないことが明らかにになった。また日本の地名を漢語で表現することはほとんど見られず、日本の地名は日本の名称で詠む傾向が強いことも、短歌に見られる地名語彙の特徴である。

鉄幹短歌との比較を通して、次の特徴が明らかになった。

子規短歌での地名語彙は、鉄幹短歌と比べ、古歌に拠らないものがやや多い。子規短歌では東京と関東の地名語彙の使用が積極的であり、その表現方法も鉄幹短歌と比べ多様である。また「日の本」といった国家に対する意識を表現する地名語彙の使用が多く見られることも特徴の一つである。これは子規の新聞記者としての経験によるものではないかと考える。

「地名語彙」の表現方法について、歌枕としての詠み方の有無について見てきた。

**明治三十一年以降**について、明治三十年以前のもものと比べ、歌枕の用法によって定められた語と一緒に詠む傾向が低くなる。短歌革新発表を境に、歌枕と共に詠む題材の選択が古典的なものから脱却してゆく。

歌枕となる地名語彙の詠み方では、歌枕と共に詠む題材の選択が、鉄幹短歌と比べ古典的と言える。また、古典的な題材の組み合わせを行った際に、表現を古歌に拠らないものとする方法が見られるが、これは鉄幹短歌にも見られるものである。

鉄幹短歌の地名語彙では、次のような特徴が見られる。

鉄幹短歌では甲信越・中部以西の地名語彙が多く見られる。子規短歌での地名語彙の表す地域が、東北から中部の東日本であることと異なっているのは、鉄幹と子規の生活の場や旅行先の違いによるところが大きいと言える。

また鉄幹短歌の方が、子規短歌と比べ、歌枕を短歌に詠む際に、歌枕と組み合わせられる題材の選択が古典的でない。子規短歌に見られる、古典的な組み合わせであっても、古歌に拠らない表現をとる方法は、鉄幹短歌にも見ることが出来る。

#### 第四部

ここでは、人間語彙について見て来た。

子規短歌での「人物語彙」の使用実態について、次の内容を指摘することができる。

**短歌革新発表のあった明治三十一年**を境に、人物語彙の大きな増加が見られる。ここで増加した人物語彙は、明治三四年以降の晩年の作品でも多く用いられている。

明治三十一年に大きく増加した人物語彙は、「フランス少女」など複合語で表されるもの、「翁」など老人を表すもの、「少女」など若人を表すもの、「都人」「アメリカ人」など国内の地域、又は外国の人を表すもの、「蹇」「亡き人」など傷病人や故人を表すもの、「辻占賣」など職業に従事している人、「天人」「物の怪」など神仏を表すもの、「撫子少女」など様々な女性を表すものである。

このように人物語彙の拡大が見られる一方で、「關守」など明治三十一年を境に歌材から外れる人物語彙も見られる。しかしその基準は現時点では不明である。

**明治三四年以降**になると、歌材とする人物語彙の内容が狭まってゆく。「左千夫」などのように身近な出来事や伝聞によって得た情報によって選ばれた人物語彙の使用が多くなる。

子規短歌に使用されている人物語彙には、他にも次の内容のものが見られる。

人名について、六期間通して多様な人名が詠まれている。明治三十年以前の子規短歌に既に多様な内容が見られる。

著名人の名前や知人名は明治三三年に増加が見られる。知人名は明治三五年の子規短歌にも積極的な使用が見られる。特に子規短歌の人物語彙の特徴として、「賤」を表すもの、無職・学生・泥棒を表すもの、老若美醜の情報が含まれる女性を表す複合語の使用が挙げられる。

子規短歌に見られる人物語彙について、次の内容も指摘することが出来る。

明治三一年、明治三二年、明治三三年の各期間の子規短歌に用いられている人物語彙について、その大半がそれぞれの期間の作品で初めて使用されているものである。このような人物語彙が継続して用いられることは少ない。明治三十年以前に用いられている人物語彙も継続して用いられている例も非常に少ない。

**明治三四年以降**は人物語彙の内容が「左千夫」や「秀眞」など身近な人物を示すものへと狭まりが見られるが、明治三一年から晩年までの間で、子規は様々な複合語の形で人物語彙を詠んでおり題材を広く求め続けていると言える。子規が多く使用する傾向が見られる人物語彙は、「人」「神」など古来頻繁に使用されているもの、また複合語となっていないものである。子規が積極的に拡大した人物語彙の題材は、古歌に頻繁に使用されたもの以外であり、且つ複合語の形である。しかし、繰り返し使用される人物語彙は「人」や「妹」といった、古歌に頻繁に使用されているもの、または複合語の形でないものである。

子規短歌の人物語彙に対する表現方法について、最も使用例数の多い「人」に対する感覚表現を見てきた。その結果、次の内容を指摘することができる。

「人」に対して用いられている感覚表現の殆どが視覚表現である。特に「人」の存在の有無の表現と、「人」の動作



の表現が多く用いられている。子規短歌での「人」に対する感覚表現には聴覚表現も見られるが、後述の鉄幹短歌と比べると、その使用は少ない。また期間を下るに従い、「人」に対する視覚表現の使用が多くなり、聴覚表現の使用が少なくなる傾向が見られる。

子規短歌での人物語彙の特徴と、後述の鉄幹短歌の人物語彙の特徴と比較すると、子規短歌の方が人物語彙の内容は豊富であるが、人物語彙「人」に対する表現は鉄幹短歌の方が豊富であることを指摘することが出来る。

子規短歌では、「人」の容姿や様子、感情による身体の変化を殆ど詠まれていない。それは、子規短歌では、「人」そのもののみが主題になることが、鉄幹と比べて少ないためと考えられる。

但し例外も見られる。「少女」を詠んだ作品では、「少女」に対して容姿の表現を用いる例が、「少女」の動きなどを表現する例よりも多く見られる。

子規短歌との比較対象として、鉄幹短歌についても見てきた。鉄幹短歌では、子規短歌と比べて人物語彙を詠む傾向が強く見られる。

鉄幹短歌に見られ、子規短歌には見られない人物語彙には、人を表す「子」の使用が挙げられる。また、賤よりも貴人を詠む傾向が、子規短歌の場合と比べ強いことや、傷病人は歌の材料としていないことも指摘できる。特定の神の名前を詠むことや、老若・美醜の意味を含んだ女性を表す人物語彙の使用の少なさと、老女を表す語彙の使用のなさも指摘できる。また、生産業に従事する人について、「蛭」や「船子」といった古来頻繁に使用されている内容が、比較的多く見られることも特徴の一つである。

右に挙げた鉄幹短歌の人物語彙の特徴と、子規短歌での人物語彙の特徴を比べると、子規短歌の方が詠み込む人物語彙の内容は豊富であると言える。

鉄幹短歌での人物語彙の表現方法について、子規短歌の場合と同様に、「人」に対する感覚表現について見て来た。鉄幹短歌でも、人物語彙「人」の使用例は非常に多く見られる。

鉄幹短歌での「人」に対する感覚表現には、視覚表現と聴覚表現と嗅覚表現が見られる。特に聴覚表現の使用について、「泣く」「云ふ」「罵る」など音声の伴う行為を表すものの例が多く、子規短歌と比べて多く聴覚表現が見られることが特徴的である。

鉄幹短歌での「人」に対する視覚表現の特徴について、鉄幹の方が短歌の中で人物の容姿や状態を詳細に描写していることが挙げられる。

また、「笑む」といった、「人」の感情による身体の変化を表現する例も、子規短歌と比べ多く見られる。

鉄幹短歌では他にも、子規短歌に用いられている多様な「人」に対する視覚表現を見ることが出来る。またそのような視覚表現は、鉄幹短歌では明治三五年の作品まで見られる。

鉄幹短歌での「人」に対する感覚表現について、次の二首の例のような「人」の思考活動の表現や感情の表現、「人」に対する詠み手の評価など、感覚表現が見られない例も子規短歌よりも多く見られる。

人しれず恋ひぬる我に人しれず《人》も恋せば見てなぐさめむ

(うもれ木・一二八)

ながらへば、《人》のつらさも、なほるやと、惜しからぬ身を、なほ惜むかな。

(天地玄黄・一二二)

秀でたる《人》にとこそは祈りけれ仏の身にもなりにけるかな

(鉄幹子・一〇七)

以上、子規短歌の語彙の使用実態について見てきた。子規の語彙の取捨選択について、次の傾向を見ることができ  
る。

明治三十一年では、人事語彙を除き、短歌の題材の拡大が見られる。明治三四年以降では子規にとって身近な内容の語彙へと使用が狭まっていく傾向が見られる。

明治三十一年の歌材の拡大で、新たに短歌に詠まれるようになるものや、積極的に詠まれるようになるものは、次の内容の語彙であることが多い。

一つは、外来語や「馬」「牡丹」など古典和歌では、殆ど使用されない形の語彙である。

もう一つは、「躑躅」や「上野」、「納豆賣」といった古来頻繁に使用される語彙ではないものである。これらの語彙の多くは晩年まで継続して用いられることが少ない。

明治三十一年を境に短歌に使用されなくなる、又は詠まれることが減少する語彙には、次のものが見られる。

「卯の花」や「白梅」など、明治三十年以前での作品で古典的な表現でしか詠んでいない語彙である。明治三十年以前の「卯の花」と「白梅」の詠まれ方は、全て花の白さ表現したものである。共に詠まれる題材も「霞」や「月」や「雪」と古歌に多く見られる組み合わせである。「卯の花」は明治三二年以降に歌材となることはなく、「白梅」は明治三十一年以降では一首に詠まれるのみとなる。

古典的な題材でも、題材の組み合わせなど新しい趣向を用いることができる語彙は、明治三一年以降の作品にも使用される傾向が高い。例えば「梅」は、明治三十年以前の作品で、鉢植えの梅といった古歌に殆ど例の見られない詠まれ方がされている例を見ることができる。「梅」は明治三一年以降の作品で多く用いられている。

また、子規の行動範囲の変化も、語彙の取捨選択と関係している。これは、「森」などの植物語彙の植物の集まりを表す語彙、「木曾」などの特に旅先を表す地名語彙や、「海」といった根岸の近くでない自然物を表す自然物語彙の減少に現れている。

子規の短歌の表現方法については、写生の反映としての視覚表現が非常に多く見られることが特徴として挙げられる。この特徴には次の二つが関係している。

一つに、子規の写生の実践である。

二つに、視覚による情報が、聴覚や嗅覚などの他の感覚による情報を補うという子規の考えである。例えば「梅咲く」と、読者に「梅」に対する視覚の情報「咲く」を短歌の中で提示することで、読者に「梅」の香りを連想させるといった表現方法を用いている。詠み手と読者に「梅」に香りがあるという共通の認識があることで、全てを短歌の中で明示しなくとも、視覚表現以外の感覚表現を読者に伝えることができる。また、子規は短歌に感情を述べることを「蛇足」と批判している。例えば次の作品では、「常伏に伏せる足なへわがためにガラス戸張りし」といった「人の行動を示している。

常伏に伏せる足なへわがためにガラス戸張りし人よさちあれ

(一四二六・三一年)

右の短歌に詠まれている「人」について、「親切」といった詠み手の感情を含んだ表現を用いず、「人」の行動の情報から、読者には「人」が親切な人であることが伝わる。

このように題材の状態や人の言動などといった事実を客観的に描写し、そこで示す情報により読者に連想を促すといった表現を、子規は多く用いていると言える。そのため、子規短歌に見られる語彙には視覚表現を表すものが、他の感覚表現を表すものよりも多く見られる。

## 附章 子規の分類語彙一覧

次頁より、子規短歌に見られる名詞を意味分野ごとに分類した一覧を挙げる。一覧の数値は該当の語彙が詠まれている作品数である。また、明治三十年以前、明治三十一年、明治三二年、明治三三年、明治三四年、明治三五年の六期間に分けている。

人物	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
あいぬますらを(アイヌ益荒男)				1			1
あいの(アイノ)		1					1
あかひと(赤人)			2				2
あきつかみ(現神)		1					1
あきひと(商人)		1			1		2
あくま(悪魔)			1				1
あこ(吾子)				1			1
あさい(浅井)				1			1
あしかが(足利)	1						1
あしなへをとこ(寢男)			1				1
あそん(朝臣)			1			2	3
あづまものふ(東武士)				1			1
あつもり(敦盛)		1					1
あてひと(貴人)		1		1			2
あぶりのかみ(荒神)			1				1
あま(蟹)	4	2	3	1		1	11
あまがさと(蟹里)		1					1
あまぎみ(尼君)			1				1
あまつかみ(天神)		1					1
あまつまら(天麻羅)			1				1
あまつみかみ(天御神)		1					1
あまつをとめ(天少女)		1		3			4
あまてらす(天照)		1					1
あまのかみ(天神)		1					1
あまのこ(蟹子)		3					3
あまひと(天人)		1					1
あみだ(阿弥陀)			1	1			2
あめうり(飴売)			1				1
あめりかじん(アメリカ人)		1					1
あらがみ(荒神)	1						1
あるじ(主)		2	1	2			5
あんぎや(行脚)	1						1
いかだし(筏師)		1					1
いぎりすじん(イギリス人)				1			1
いくさ(軍)		2	1				3
いくさのかみ(戦神)			1				1
いくさのきみ(戦君)			1	1			2
いけだ(池田)						1	1
いちごばう(一五坊)				1			1
いちのひと(一人)			1				1
いちひと(市人)	1	1					2
いとしご(愛子)	1				1		2
いなり(稲荷)			1	1			2
いにしへひと(古人)			1				1
ふるひと(古人)				1			1
いへ(家)…家庭		1	2	1			4
いへのたから(家寶)			1				1
いほのあるじ(庵主)	1						1

人物  
一

	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
いも(妹)	6	8	4	10		1	29
いもがり(妹許)		1					1
いりひこ(入彦)			1				1
うかれめ(浮女)			1				1
うしかひ(牛飼)		2		1			3
うしかひども(牛飼共)		1					1
うしわか(牛若)				1			1
うたのあるじ(歌主)			1				1
うたのかみ(歌神)				1			1
うたびと(歌人)			2	1			3
うたよみ(歌詠)			2	1			3
うたよみひと(歌詠人)		1			1		2
うつしほとけ(現佛)			1				1
うなゐこ(髻髪子)		2					2
うなゐら(髻髪等)		1					1
うば(姥)		4					4
うば(乳母)		1					1
うぶすな(産土)		1		1			2
うまひと(貴人)		2	1	2	1	1	7
うまひと(馬人)				1			1
うみがみ(海神)	1						1
うめわか(梅若)	1						1
うめわかまる(梅若丸)				1			1
えせひと(似非人)		1					1
えせほふしら(似非法師等)			1				1
えぞのひと(蝦夷人)		1					1
えどつこ(江戸子)						1	1
えみし(蝦夷)			1				1
ゑんめい(淵明)		1					1
おうな(唄)		3		2			5
おほおみ(大臣)		1	2				3
おほみいくさ(大御軍)			1				1
おほみおや(大御親)		1					1
おきな(翁)		6					6
おに(鬼)		4		1			5
おのおの(己)				1			1
おはりのかみ(尾張守)				1			1
おほきみ(大君)		4	2	4		1	11
おほとも(大伴)	1						1
おほみめ(大御女)				2			2
おほみやひと(大宮人)		2			1		3
おもふひと(思人)		2					2
おもひもの(思者)		1	1				2
おや(親)	2		1	1	1		5
おろしやくにひと(オロシヤ國人)			1				1
かうし(孝子)					5		5
かうのこ(孝子)					1		1
かぐつち(軻遇突智)				1			1
かくだう(格堂)				1			1



	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
がき(餓鬼)	1						1
かさもち(傘持)			1				1
かさもり(瘡守)			1				1
かじん(歌人)				1			1
かぞいろ(父母)	1						1
かたゐ(傍居)				1			1
かつをおとど(鯉大臣)						1	1
かとりし(香取氏)			1				1
かなをか(金岡)		1					1
かぬち(鍛冶)			1				1
がまどの(蒲殿)		1					1
かみ(神)	2	16	7	12		1	38
かみがたひと(上方人)				1			1
かみさぶ(神)	1	1					2
かみのおまへ(神御前)		1		1			2
かみのこ(神子)				1			1
かみのみやゐ(神宮居)	1	1					2
かみのみよ(神御代)		1					1
かみをとめ(神少女)		1					1
かむろ(禿)		1		1			2
からくにびと(唐国人)	1						1
からのますらを(唐益荒男)				1			1
からのをとめ(唐の少女)				1			1
からひと(唐人)			1	1			2
がりばー(ガリバー)			1				1
かりひと(狩人)			3				3
かりを(獵男)			1				1
かんざん(寒山)		1		2			3
かんだをとこ(神田男)		1					1
きぎひと(聞人)	1						1
きくうのその(鞠塙園)				1			1
きくち(菊池)	1						1
きくつくり(菊作)		1					1
きこり(樵夫)	1						1
きせん(喜撰)	1						1
きみ(君)		5	2	3		1	11
きみ(君)…敬称		2	2	2			6
きみがよ(君代)		2	1				3
きみのくに(君國)		1					1
きやく(客)				1			1
きやつちやー(キヤツチヤー)		1					1
きようじよ(狂女)		1					1
きよし(虚子)			1	1			2
ぎよしや(御者)			1				1
きりのや(桐舎)						1	1
きんだち(公達)			1	1			2
きみたち(君達)			1				1
きむとき(金時)			1				1
くすのきまさしげ(楠木正成)			1				1

	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	
くにたみ(國民)		1					1
くにのはしら(國柱)	1						1
くにひと(國人)		1					1
くはしをとめ(美少女)				1			1
くわがくしや(化學者)	1						1
みやひと(宮人)	1	1		1			3
くわんにん(官人)		1					1
くわんぜのんぼさつ(觀世音菩薩)				1			1
くわんのん(觀音)				2			2
くわんのんぼさつ(觀音菩薩)			1				1
げいしや(藝者)				1			1
けいせい(傾城)		2					2
きやうのみかど(京御門)					1		1
こ(子)	2	5	3	3	3		16
こ(子)…子供		2	2		2		6
こう(項羽)			1				1
こうてい(黃帝)	1						1
ごえもん(五右衛門)	1						1
こがひ(蠶飼)			1				1
こかじ(小鍛冶)		1					1
こけいせい(小傾城)		1					1
こころのとも(心友)		1					1
こじき(乞食)		1					1
こじきのこ(乞食子)		2					2
こじゆんれい(子順禮)		1					1
こじん(胡人)		1					1
こすくね(小宿禰)						1	1
こほりや(氷屋)				2			2
こまかひ(駒飼)			1				1
こまち(小町)	1						1
こら(子等)		3	1	1			5
ごれう(御料)		1					1
こんちくしょう(此畜生)		1					1
こむびらさま(金比羅様)	1						1
さいぎよう(西行)				1			1
さいしら(妻子等)			1				1
さくやこのはな(咲耶木花)	1						1
さくやひめ(咲耶姫)	1						1
さちを(左千夫)				5		2	7
さちはひのかみ(幸神)				1			1
さとおさ(里長)		1					1
さとのこ(里子)			1				1
さとびと(里人)		1					1
さねかた(實方)				1			1
さはりのかみ(障神)					1		1
さぶろう(三郎)		1					1
さべゑ(佐兵衛)				1			1
さほひめ(佐保姫)	2						2
さほがみ(佐保神)					1		1

	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
ざれうたよみ(戯歌詠)		1					1
さをとめ(早少女)				1			1
し(師)	1		1				2
しうと(舅)		1					1
しこひと(醜人)				1			1
じじば(爺婆)		1					1
しじん(詩人)				1			1
しそん(子孫)		1					1
しづ(賤)	1	2	2				5
しづかいほ(賤庵)	1	1					2
しづがふせや(賤伏屋)		3		1			4
しづがや(賤家)	3	2	1	1	1		8
じつとく(拾得)				2			2
しづのめ(賤女)	1						1
しづのわらや(賤藁屋)				1			1
しづのわらは(賤童)		2					2
しづのをさぶ(賤男)					1		1
してい(子弟)		1					1
しのかみ(詩神)			1				1
しまだをとこ(島田男)				1			1
しまひと(島人)				1			1
しもべ(僕)			1				1
シャウグン(將軍)			1				1
しやか(釈迦)		1	1				2
しうとめ(姑)		1					1
しゅちくさんじん(種竹山人)			1				1
じゅんれいのこ(順禮の子)		1					1
しやうじやう(猩々)				1			1
しやうにん(上人)		1					1
ぢよがくせいと(女學生徒)				1			1
しよせい(書生)	1						1
ぢよろう(女郎)				1			1
しらたまをとめ(白玉少女)				1			1
じろう(二郎)		1					1
すくね(宿禰)						1	1
すむひと(住人)	1						1
すめらのかみ(皇神)				1			1
すめらみかど(皇帝)	1						1
すめらみかみ(皇御神)		1					1
すめろぎ(天皇)			2	2			4
すめらぎ(皇)			1				1
すゑものつくり(陶物作)				1			1
せいいたいしやうぐん(征夷大將軍)			1				1
せうしやうのきみ(少將君)		1					1
せいいれい(聖靈)		2					2
せうじよ(少女)				1			1
せうねん(少年)				1			1
せきもり(關守)	2						2
せこ(背子)		1		1			2

	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
せみまる(蟬丸)	1						1
せんこ(仙湖)	1						1
せんせい(先生)			2				2
ぜんなんぜんによ(善男善女)				1			1
そうじ(蘇氏)				1			1
そこつ(鼠骨)				1			1
それがし(某)				1			1
だいくわんどの(代官殿)		1					1
だうそじん(道祖神)	1						1
たかし(節)				1	3		4
たかじょう(鷹匠)		1					1
たかはま(高濱)				1			1
たくみ(匠)				1			1
たくみや(工屋)	1						1
たけがりをとこ(蕁狩男)		1					1
たけのさとびと(竹里人)			1	2			3
ただひと(徒人)				1			1
たつためがみ(龍田女神)			1				1
たはれを(戯男)		1					1
たびあきびと(旅商人)		1		1			2
たびびと(旅人)	2	11	1				14
たまつしまひめ(玉津嶋姫)		1					1
たまのりをんな(玉乗女)			1				1
たみ(民)		2	1	2			5
たやすむねたけ(田安宗武)				1			1
たらちね(垂乳根)			2	1	2		5
だるま(達磨)				1			1
たろう(太郎)		1					1
ちうわう(紂王)	1						1
ちごだち(兒達)		1					1
ちち(父)		3	1				4
ちやはかせ(茶博士)				3		1	4
ちようおん(潮音)				1			1
ちよろづのかみ(千萬神)			1				1
ちんげんびん(陳元賓)				1			1
ちんじゆ(鎮守)		1					1
つかさ(司)		1					1
つかさびと(司人)		1					1
つかさひとら(司人等)			1				1
つかさら(司等)				2			2
つかひ(使)						1	1
つかひら(使等)				1			1
つきひとをとこ(月人男)				1			1
つちうらうり(辻占賣)		1					1
つねのり(常規)	1						1
つはもの(兵)			2				2
つま(妻)	1	3	2	2		1	9
つまぎみ(妻君)			1				1
つまこ(妻子)	1						1

	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
てき(敵)			1				1
てんぐ(天狗)				1			1
どうせい(同姓)		1					1
とくがは(徳川)		2					2
としほぎびと(年祝人)				1			1
とつくにひと(外國人)		3					3
とほつかみ(遠神)				1			1
とほつみおや(遠御祖)			1	1			2
とも(友)	2	4	6	3		1	16
ともこ(巴子)				1			1
とらかひひと(虎飼)人				1			1
とんや(問屋)		1					1
なきおや(亡親)		1					1
なきとも(亡友)		2	2				4
なきはは(亡母)		1					1
なすのよいち(那須與一)				1			1
なつとうり(納豆賣)		1					1
なでしこをとめ(撫子少女)		1					1
なにはをとめ(浪花少女)				1			1
ならのみかど(奈良御門)					1		1
なりひら(業平)	2	1					3
なるかみ(鳴神)		5					5
なるかみのこ(鳴神子)		3					3
にちれん(日蓮)		1					1
にちれんだいぼさつ(日蓮大菩薩)				1			1
につた(新田)	1						1
にはもり(庭守)				1			1
にほんしんぶんしや(日本新聞社)				1			1
ぬすひと(盗人)		1		3			4
のぼる(野暮流)	1						1
のみのふうふ(蚤夫婦)			1				1
のりより(範頼)			1				1
ば(婆)			1				1
はいじん(俳人)				1			1
はいばら(灰原)		1					1
ばいぼくせんせい(賣ト先生)		1					1
はくらく(伯樂)		1					1
はした(端)		1					1
はたおりひめ(機織姫)				1			1
はたぬし(畑主)			1				1
ばつばろう(バツバポウロ)				1			1
はなうり(花賣)			1	1			2
はなのとも(花友)	1						1
はなよめ(花嫁)			1				1
はは(母)		2	2	2	1		7
ばば(婆)		1					1
はふりら(祝等)		1					1
はらから(同胞)		1	1				2
はらちよこ(原千代子)				1			1

	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
ぱりすをとめ(パリス少女)				1			1
はんぎよく(半玉)				1			1
ひけしら(火消等)				1			1
びじん(美人)				1	1		2
びせうねん(美少年)		1					1
ひでよし(秀吉)				1			1
ひと(人)	35	63	40	58	5	5	206
ひとのおや(人親)				1			1
人の子		1					1
ひとのめ(人目)	1						1
ひとまる(人丸)			2				2
ひのかみ(火神)		1	1				2
ひのみこ(日御子)		2					2
ひめぎみ(姫君)			1				1
ひょうてい(瓢亭)				1			1
ひらがもとよし(平賀元義)				1			1
ふ(伏)			2				2
ふかとく(不可得)				1			1
ふかん(豊干)		1		1			2
ふじつな(藤綱)				1			1
ふせつ(不折)				3			3
ぶそんのしふ(蕪村集)				1			1
ふうみようわう(不動明王)		1					1
ふなおさ(船長)				1			1
ふなのり(船乗)			1				1
ふなひき(船引)		1					1
ふなびと(舟人)	1						1
ふねのひと(船人)		1					1
ふぼ(父母)				1			1
ふみあきびと(書商人)			1				1
ふみくばりひと(文配人)					1		1
ふもと(麓)				1			1
ふらんすをとめ(フランス少女)		1					1
ふりそでをとめ(振袖少女)				1			1
ふるさとびと(故郷人)		2					2
ふるつま(古妻)		1					1
へい(兵)	1						1
へいわのかみ(平和神)			1				1
ぺつびん(別品)	1						1
ほういつ(抱一)				1			1
ほしのをとめ(星少女)				1			1
ほしゆん(茂春)				1			1
ほつま(秀眞)			2	2		1	5
ほつまこ(秀眞子)			1				1
ほとけ(佛)		4	3				7
ほとけづくり(佛作)			2				2
ほとけのちから(佛力)			1				1
ほとけのてら(佛寺)		1					1
ほふし(法師)			1				1

	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
ほふしら(法師等)			1				1
ほふのわう(法王)				1			1
ほんだしゆちく(本田種竹)			1				1
まご(孫)		1					1
まさをか(正岡)	1						1
まさこ(正子)				1			1
しょうちゃん(正)			1				1
ますらたけりを(益荒猛男)				1			1
ますらたけを(益荒猛男)			1				1
ますらを(益荒男)		1		1			2
まどんな(マドンナ)			1				1
まなご(愛子)		1			1		2
まれびと(客)	1						1
まをとめ(真少女)					1		1
みうたよみ(御歌詠)						1	1
みおや(御祖)			1	1			2
みかど(帝)				1			1
みかみ(御神)	1	1					2
みぎのおとど(右大臣)				1			1
みこ(御子)		1	2				3
みこと(尊)			2	1		2	5
みこのみこと(皇子尊)				2			2
みたみ(御民)				1			1
みつね(躬恒)				1			1
みどりご(嬰兒)				1	1		2
みとりびと(看取人)		1					1
みとりめ(看女)		1					1
みな(皆)		2	1	1			4
みなしご(孤児)			1				1
みなもとのさねとも(源実朝)			1				1
みほとけ(御佛)			1				1
みや(宮)				1			1
みやこびと(都人)		1					1
みやこわざをぎ(都俳優)				1			1
みやこをとめ(都少女)			1				1
みやつこ(御奴)				2		1	3
みやびを(雅男)				2			2
みらー(ミラー)			1				1
みんのひと(明人)				1			1
むかしのとも(昔友)		1					1
むかしのひと(昔人)				2			2
むかしをんな(昔女)		1					1
むこ(婿)			1				1
むしや(武者)				1			1
むすぶのかみ(産神)		1	1				2
むすめ(娘)		4	1				5
むつのかみ(陸奥守)				1			1
むらじ(連)						1	1
むらのこ(村子)			1				1

	明治30 年以前	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	計
むらびと(村人)				1			1
め(妻)				2			2
めがき(女饑鬼)		1					1
めかけ(妾)			1				1
めがみ(女神)			1				1
めこ(女子)		1					1
めのこ(女子)				1			1
めのわらは(女童)		2					2
もとよし(元義)				1			1
もの(者)	1	6	1				8
もののけ(物怪)		2		1			3
もののふ(武士)		6		5			11
ももたろう(桃太郎)		1					1
もりた(森田)						1	1
もろひと(諸人)	1			2			3
やよろづのかみ(八百萬神)		1					1
うから(族)				2			2
やから(族)			1				1
くすしら(薬師等)	1						1
やくわうぼさつ(薬王菩薩)			1				1
やそ(耶蘇)			1				1
やつこ(奴)		1					1
やつら(奴等)	1						1
やぬし(家主)				1	2		3
いへぬし(家主)				1			1
やましろやいちべえ(山城屋市兵衛)				1			1
やまとのひと(大和人)		1					1
やまのみかみ(山御神)				1			1
やまひと(山人)				1			1
やまもとくん(山本君)			1				1
やもめ(嬢)		2					2
ゆづきをとめ(湯月少女)		1					1
よきこ(善子)					1		1
よきひと(善人)		1	1	1			3
よしなか(義仲)				1			1
よのひと(世人)	3	2					5
よりにいへ(頼家)			1				1
らふえる(ラフェル)			1				1
りうはう(劉邦)			1				1
りはく(李白)		1					1
るしやなぶつ(盧舍那佛)				1			1
れん(連)	1						1
わがこ(我子)				1			1
わかひと(若人)		1		1			2
わぎも(吾妹)				1			1
わぎもこ(吾妹子)	1		2	4			7
わざをぎ(俳優)				3			3
わざをぎひと(俳優人)				1			1
わたしもり(渡守)	1						1



人物  
十一

[illegible]

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかがみ(赤紙)				1			1
あかだま(赤玉)				1			1
あさなは(麻縄)				1			1
あさのから(麻殻)		1					1
あしだかつくえ(足高机)				1			1
あじろぎ(網代木)	1						1
あじろのくるま(網代車)				1			1
あづさゆみ(梓弓)	2						2
あふぎ(扇)	2			2			4
あふぎのかぜ(扇風)	1						1
あぶら(油)				1			1
あぶらゑ(油畫)			1				1
あみ(網)		1	2				3
あやめ(菖蒲)…材料		2			1		3
あられがま(霰釜)				1			1
あをけぶり(青煙)				1			1
あをだたみ(青畳)				2			2
あをほこ(青鉾)				1			1
あんどん(行燈)				1			1
いかう(衣桁)				1			1
いかだ(筏)	3						3
いがた(鑄形)			3				3
いかのぼり(烏賊幟)		1					1
いくちまき(幾千巻)			1				1
いくよろづまき(幾万巻)			1				1
いさりび(漁火)	2			1			3
いしずり(石摺)				1			1
いしぶみ(石文)		1		1			2
いた(板)		1					1
いちりんざし(一輪挿)				1			1
いづもあをだま(出雲青玉)				1			1
いでぶね(出船)	1						1
いと(絲)	2	1		2			5
いとのを(絲緒)				2			2
いへのたから(家寶)			1				1
いへみやげ(家土産)	1						1
いははた(五百機)		1					1
いまだすゑもの(今度陶物)				1			1
いもの(鑄物)			2				2
いれもの(入物)		1					1
いん(印)		1					1
うす(白)		2					2
うすのね(白音)		1					1
うすぶすま(薄衾)			1				1
うすやうのへ(薄様上)		1					1
うたたま(歌玉)				7			7
うたぶくろ(歌袋)				1			1
うちは(團扇)		5					5

	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
うちはのかぜ(團扇風)		1					1
うつし糸(写絵)	1			1			1
うつは(器)			1	1	1		3
うでわ(腕輪)				1			1
うぶゆ(産湯)		5					5
うめのはち(梅鉢)				1			1
うらふね(浦舟)			1				1
え(柄)					1		1
えどのひな(江戸雛)		1					1
おきつかい(沖櫓)	1						1
おきもの(置物)			1		1		2
おくりび(送火)	1	1					2
おくりもの(贈物)			2				2
おしろい(白粉)	2	1					3
おてがみ(御手紙)	1						1
おにはやき(御庭焼)				1			1
おほさかつき(大盃)			1				1
おほづつ(大筒)	2						2
おほとのおぶら(大殿油)		1					1
おほとりかご(大鳥籠)				2			2
おほふね(大船)				1			1
おほを(大緒)		1					1
おもかた(面型)						1	1
おもちや(玩具)				1			1
かい(櫓)	1						1
かう(香)				1			1
かがみ(鏡)	2	1		3		1	7
かがり(篝)		1					1
かがりび(篝火)		1					1
かご(駕籠)			1				1
かご(籠)	1	3	1		1		6
かさ(傘)		1		1	6		8
かざし(挿)				1			1
かさのへ(傘上)				2			2
かしよ(歌書)				1			1
かた(型・形)				1			1
かた(像)				1			1
かたな(刀)			1				1
かたみ(形見)…品物			1		1		2
かたみ(筐)	2						2
かたわぐるま(片輪車)		1					1
かぢ(楫・柁)		1					1
かぢのおと(楫音)				1			1
かなあみ(金網)				4			4
かなくそ(金屎)						1	1
かなぼう(鉄棒)		1					1
かね(鐘)	1		1	1			3
かねのね(鐘音)	2						2
かは(皮)				1			1

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
かはふね(川舟)		1					1
かはほりがさ(蝙蝠傘)					1		1
かばん(鞆)		1					1
かぶと(兜)…置物		1					1
かぶら(蕪)				1			1
かべのゑ(壁畫)		1					1
かま(鎌)			1				1
かま(釜・竈)		1		2			3
かみ(紙)			2	4			6
かみののぼり(紙幟)		1					1
かみのぼり(紙幟)		2					2
かめ(瓶)		1		4	3		8
かや(蚊帳)		1					1
かや(萱)…材料				1			1
かやのへ(蚊帳上)	1						1
かやり(蚊遣)	2						2
からかさ(傘・唐傘)	1	2	2	1			6
からかね(唐金)				1			1
がらす(ガラス)				6	1		7
がらすうつは(ガラス器)						1	1
がらすのいた(ガラス板)				1			1
がらすのまど(ガラス窓)				2			2
がらすばり(ガラス張)				1			1
からのゑ(唐畫)				1			1
かんばん(看板)			1				1
き(木)…木材・バットのこと			1				1
きしや(汽車)	1	4	2	3		3	13
きしやのね(汽車音)				1			1
きせん(喜撰・汽船)	1						1
きだま(黄玉)				1			1
きぬちは(絹團扇)		2	1				3
きぬがさ(絹傘)				1		1	2
きね(杵)		1					1
きむ(金)			1				1
きむち(金地)		1					1
きやうのひな(京雛)		1					1
きやら(伽羅)		1		1			2
きりひをけ(桐火桶)			1				1
ぎんち(銀地)		1					1
ぎんでい(銀泥)…絵の具			1				1
くぎ(釘)		1					1
くぎつけばこ(釘付箱)				1			1
くすだま(藥玉)		1		1			2
くだ(管)			1				1
くだのね(管音)				1			1
くつ(靴)	1						1
くづ(屑)				1			1
くにだから(國寶)				1			1
くは(鉞)		3					3

器物  
四

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
くまで(熊手)			1				1
くら(鞍)	1						1
くらしのかは(鞍鹿皮)				1			1
くるま(車)	1	17	6	4	3		31
くるま(駕)				1			1
くるまのうへ(車上)			1				1
くれたけのつゑ(呉竹杖)	1						1
くろがね(鉄・黒金)		1		7			8
くわうこくのふだ(廣告札)			1				1
くわん(鐘)				1			1
けぶり(煙・烟)	7	4		7			18
けん(劍)		1					1
こか(胡笳)		1					1
こがさ(古傘)				1			1
こがさかくれ(小傘隠)					1		1
こがね(黄金)	1	2		2			5
こがねのたち(黄金太刀)		1					1
こがねのとの(黄金殿)				2			2
こかめ(小瓶)				4			4
こしかけ(腰掛)		1					1
こづえ(小机)				1			1
こづつみ(小包)						1	1
こと(琴)	1	3	1	1			6
ことのね(琴音)	1						1
こなは(小縄)					1		1
こばた(小旗)		1					1
こばち(小鉢)				1			1
ごばん(碁盤)		1					1
こひ(鯉)		1		1			2
こひのふきぬき(鯉吹貫)				1			1
こぶくろ(小袋)						1	1
こぶすま(小衾)				1			1
こぶね(小舟)	2						2
こまもの(小間物)	3						3
こむびらまる(金比羅丸)	1						1
ごやのかね(後夜の鐘)		1					1
こよみ(暦)	1						1
こよりはなび(紙縋花火)		1					1
さい(賽)	1						1
ざう(像)				2			2
さうし(草子)		1					1
さかづき(盃)			1				1
さみのね(三味音)			1				1
さら(皿)	1			3			4
さを(棹・竿)		1					1
さんご(珊瑚)	1						1
しがのしほがま(千賀塩竈)		1				1	2
しかのまき(鹿卷)			2				2
しがらみ(柵)	1						1

器物  
五

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
しきもの(敷物)			1				1
じしよ(字書)				1			1
じてんしや(自轉車)		1					1
しとだる(四斗樽)	1						1
しのふくろ(詩囊)			1				1
しばのと(柴戸)	1	1					2
しばぶね(柴舟)	1						1
しほがま(鹽竈)		1					1
しほやのけぶり(鹽屋烟)				1			1
しめ(注連・標)		1		1			2
しやう(笙)			1				1
じやうきせん(丈鬼船)	1						1
しやうぶ(菖蒲)…材料		1					1
しやうぶゆ(菖蒲湯)		1					1
しやしん(寫眞)	1		2	2			5
じやのめからかさ(蛇目唐傘)				1			1
しやりん(車輪)			1				1
じゆう(銃)			2				2
しらいと(白絲)				1			1
しらたま(白玉)	2			11			13
しらぬの(白布)		1					1
しらほ(白帆)	6	5	1	1			13
しらゆふ(白木綿)	1			1			2
しろがね(銀・白金)				1	1		2
しろかめ(白瓶)				1			1
しをり(栞)	1						1
しんぶん(新聞)			1	5			6
すいばん(水盤)			1	1			2
すいれん(翠簾)		1					1
すがたみ(姿見)				1			1
すげ(菅)…材料	4						4
すごも(寶薦)			1				1
すごものうへ(寶薦上)			1				1
すず(鈴)		1					1
すずのね(鈴音)		3					3
すずみぶね(涼船)	1						1
すずり(硯)		1		4		1	6
すずりのいし(硯石)				1			1
すずりのうみ(硯海)				3			3
すずりのはこ(硯箱)				1			1
すずりのみづ(硯水)		1					1
すずりばこ(硯箱)		1					1
すだれ(簾)		2					2
すのこ(簀子)		1					1
すみ(炭)				1			1
すみだはら(炭俵)		1					1
すみのふね(墨舟)				1			1
すみゑ(墨繪)		1		1			2
すゑもの(陶物)			1	2		1	4

器物  
六

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
せきかう(石膏)				1			1
ぜに(錢)		1		1			2
そめわた(染綿)				1			1
そらのけぶり(空煙)				1			1
だい(臺)				1			1
たいこ(太鼓)		6					6
だいのうへ(臺上)				1			1
だいぶつ(大佛)		1	1	1			3
たいまつ(松明)				1			1
だいいびな(内裏雛)		1					1
たかかめ(高瓶)				1			1
たかに(高荷)		1					1
たから(寶)		1		1			2
たきもの(焚物)		1		2			3
たくなは(桲縄)		1		1			2
たくぶすま(袴袷)			1				1
たけざを(竹竿)		1					1
たけのこ(筍)…材料		1					1
たけのすのこ(竹簀子)		1					1
たこ(風・紙鳶)		1		3			4
たち(太刀)		1	1	2			4
たづな(手綱)	1						1
たな(棚)					1		1
たなしこぶね(棚無小舟)				1			1
たびがさ(旅傘)					1		1
たぼはさみ(鬚挿)				1			1
たま(球)		2	3				5
たま(玉)	3	4	6	16			29
たまぐし(玉串)				1			1
たますだれ(玉簾)	1						1
たまづさ(玉章・玉梓)	6		1	1			8
たまのうてな(玉臺)			1				1
たまのかんざし(玉簪)				1			1
たまのくるま(玉車)			2				2
たまのとの(玉殿)		1					1
たまのね(玉音)				1			1
たまのみや(玉宮)				1			1
たまのみやみ(玉宮居)				3			3
たまのをぐし(玉小櫛)				1			1
たより(便)	1						1
たらひ(盥)		1					1
たる(樽)				1			1
ちやうちん(提灯)		1	1	1			3
ちやたく(茶托)			1	2			3
ちやのわん(茶碗)						1	1
ちやわん(茶碗)	1			2			2
ちり(塵)	1	1		1			3
ちりのよ(塵世)		1					1
づ(圖)		1	1	4			6

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
づあん(圖案)				1			1
つきがたうち(月形團扇)				1			1
つくえのうへ(几上・机上)				2			2
つくりばな(作花)				1			1
つげのをぐし(黄楊小櫛)			1				1
つち(槌)		2	1				3
つちがた(土型)				4			4
つちひとがた(土人型)				1			1
つつ(筒)		1					1
つつのね(筒音)	1	1					2
つつみ(包)			1				1
つねぼとけ(常佛)			1				1
つぼ(壺)				1			1
つゆのしらたま(露白玉)				1			1
つり(釣)…釣りの道具		1					1
つりかうろ(釣香爐)				3			3
つりかご(釣籠)				1			1
つりぶね(釣舟)	1			1			2
つる(絃)		1					1
つるぎ(劍)		1	1	1			3
つるべ(釣瓶)	1						1
つゑ(杖)	1				1		2
て(手)…取っ手				1			1
てあらひみず(手洗水)			1				1
てうづばち(手水鉢)		1					1
てーぶる(テーブル)				1			1
てがみ(手紙)		1		1			2
てをけ(手桶)		1					1
とうろう(灯籠)		2					2
とぐら(鳥栖)				1			1
とくり(徳利)				1			1
としほぎなは(年祝縄)				1			1
とばつつ(トバツツ)				1			1
とばり(帳)		1		2			3
とべやき(砥部焼)				1			1
とも(舳)				2			2
ともしび(灯火)	5	5	3	7			20
とや(鳥屋)				1			1
どら(銅鑼)				1			1
とりかご(鳥籠)		1		5			6
ながぶみ(長文)				1			1
なは(縄)			1	1			2
なみ(波)…人工のもの		2					2
なみたつ(波立)…人工のもの				1			1
にしきのふね(錦船)		1					1
にんぎやう(人形)				1			1
のぼり(幟)		1	1	1			3
のりあひこぶね(乗合小舟)				1			1
のりそだがき(海苔亀朶垣)			1				1



器物  
八

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
のりのともしび(法灯)		1					1
はいしょ(俳書)				1			1
ばいぶるのへ(バイブル上)			1				1
ぼう(棒)				1			1
はうき(箒)				1			1
ぼうず(坊主)…人形				1			1
はうちは(羽團扇)		1					1
はうちは(葉團扇)		1					1
はうらく(炮烙)		1					1
はこ(箱)	1						1
はこには(函庭・箱庭)		1	1				2
ばしや(馬車)		1	1				2
はた(旗)		2	1	2			5
はた(機)				1			1
はだかほとけ(裸佛)			1				1
はたのへ(旗上)			1				1
はち(鉢)	1	2	2	5			10
はないけ(花活)		1	1				2
はなかめ(花瓶)				2			2
はなぐるま(花車)				1			1
はなのゑ(花繪)				1			1
はなび(花火)		2					2
はなびのおと(花火音)			1				1
はなみぐるま(花見車)		1					1
はひ(灰)			1				1
はやがね(早鐘)				1			1
はり(針)				1			1
はりこづくり(張子作)				1			1
ひ(火)	3	4	1	4		1	13
ひ(灯)			1	1			2
びーどろ(ビードロ)				5			5
びーどろざら(ビードロ皿)				1			1
ひさご(瓢)		2					2
ひしやく(柄杓)		1					1
ひつぎ(柩)		1	1	2			4
ひとがた(人形・人型)			1	2			3
ひとつひ(一火)				1			1
ひな(雛)		4					4
ひのはた(日旗)				1			1
ひばち(火鉢)				1			1
ひひな(雛)				1			1
ひぶみ(日文)				4			4
ふうりん(風鈴)		1					1
ふえ(笛)	1		1				2
ふえのね(笛音)		3		1			4
ふえふきびな(笛吹雛)		1					1
ふさ(總)		1					1
ふじのけぶり(富士煙)	1						1
ふじのゑ(富士畫)		1					1

器物  
九

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ふすま(襖)		1					1
ふすま(衾)				2			2
ふせぎがさ(防傘)					1		1
ぶそんのしふ(蕪村集)				1			1
ふで(筆)				4		1	5
ふで(筆)…描かれたもの		1					1
ふでのちから(筆力)				1			1
ふとふで(太筆)				1			1
ふとふでのほ(太筆穂)				1			1
ふとん(蒲團)	1						1
ふね(舟・船)	13	13	2	9			37
ふねのなか(舟中・船中)		1	1				2
ふねのひと(船人)		1					1
ふねのへ(船上)	1						1
ふみ(文・書)	7	5	6	8	3		29
ぶりき(ブリキ)				1			1
ふるがさ(古笠)	1						1
ふるはち(古鉢)				2			2
ふるびな(古雛)				1			1
ふるひひな(古雛)		1					1
ふるふで(古筆)				1			1
ふるゑ(古畫・古繪)			1	1			2
ふろしき(風呂敷)			1				1
ページ(ページ)				1			1
ペーす(ペース)		2					2
へさき(舳)		1					1
べに(紅粉)		2					2
ほ(帆)	2						2
ぼう(棒)				1			1
ぼーる(ボール)		1					1
ほかげ(火影)	1						1
ほぐし(火串)		1					1
ほげたのうへ(帆桁上)				1			1
ほこ(矛・戈・鉾)		3					3
ほこり(埃)		2	1	1			4
ほだし(絆)…縄		1					1
ほづな(帆綱)				1			1
ほとけ(佛)…仏像	1	2	7	3			13
ほとけのまへ(佛前)			1				1
ほね(骨)…串				1			1
ほのほ(炎)		1		1			2
ほばしらのへ(帆檣上)	1	1					2
ほむら(焰)		1					1
ほろ(幌)				1			1
ぼん(盆)	1			1			2
ほんばこのへ(本箱上)			1				1
ぼんぼり(雪洞)				2			2
まかぢ(眞楫)				1			1
まがね(真金)		1		3			4

器物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
まきのと(真木戸)	1						1
まきもの(巻物)				1			1
まくら(枕)	2	1	1				4
まくらがみ(枕上)		1					1
まくらべ(枕邊)		1		4		4	9
ましば(真柴)…材料	1						1
またま(真玉)			1			1	2
まとひ(纏)		1					1
まほ(真帆)	1						1
まわた(真綿)					1		1
みくるま(御車)		1					1
みすず(御鈴)		1					1
みづ(水)…人工		2	2	3		1	8
みづいれ(水入)		1					1
みづうちは(水團扇)		1					1
みづぐるま(水車)	1	1					2
みづばちのへ(水鉢上)		1					1
みづひき(水引)			1				1
みつるぎ(御劍)				1			1
みてぐら(幣)		1					1
みのかさ(蓑笠)				1			1
みはた(御旗)		1					1
みふね(御舟)		1		3			4
みほとけ(御佛)…仏像	3	2	1	3			9
みみわ(耳輪)				1			1
みやげ(土産)				1			1
むしろ(筵・蓆)		2		2			4
むしろほ(筵帆)				1			1
むしろほのへ(筵帆上)		1					1
むなぎ(棟木)…材木			1				1
めがね(眼鏡)	1			2			3
めしぐるま(召車)		2					2
もくづ(藻屑)	1						1
もたひ(甕)		1					1
もちのへ(臈上)		1					1
もの(物)…物質	3			2			5
ものほしざを(物干竿)				1			1
もひ(椀)				1			1
もろこしのふね(唐土船)	1						1
もろふね(諸船・諸舟)	3			1			3
や(矢)				1			1
やおもて(矢面)		1					1
やきたち(焼太刀)	1						1
やだて(矢立)	1						1
やつづみ(八鼓)		1					1
やぶれこがさ(破小傘)					1		1
やりのほ(槍穂)		1					1
ゆつつまぐし(湯津爪櫛)				1			1
ゆふけぶり(夕煙)	1						1

[illegible]

宮室	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかのゐ(閼迦井)				1			1
あきいへ(明家)		1					1
あきや(明家)			1				1
あけのいがき(朱忌垣)		1					1
あけのおばしま(朱欄)				1			1
あさどこ(朝牀)			1				1
あしがき(葦垣)			1				1
あづまばし(吾妻橋)	1			1			2
あづまや(東屋)		1					1
あつもりづか(敦盛塚)	1						1
あばらや(荒屋)	1						1
あまど(雨戸)		1	1	1			3
あをかき(青垣)				1			1
あをだたみ(青疊)				2			2
いがき(忌垣)			1				1
いけ(池)	1		2	3			6
いけがき(生垣)			1				1
いしがき(石垣)			1				1
いしのとりゐ(石鳥居)		1		1			2
いすずのみや(五十鈴宮)		2					2
いせのみやしろ(伊勢御社)		1					1
いそや(磯家)	1						1
いたど(板戸)	1						1
いたべい(板塀)		1					1
いちや(市屋)				1			1
いつきしまみや(厳島宮)		1					1
いなり(稻荷)		1		1			2
いへ(家)	3	12	11	5	1		32
いへいへ(家)	1						1
いへごと(家毎)	1	1					2
いへつづき(家続)			1				1
いへのあと(家跡)				1			1
いへゐ(家居)		1	2				3
いほ(庵)	2	5	1	11	1	1	21
いほのあるじ(庵主)	1						1
いまり(庵)	1	2	2	1			6
いもや(芋屋)			1				1
いらか(薨)		1	2				3
うちぼり(内濠)		1					1
うてな(台・臺)		2	1	1			4
うぶや(産屋)		1					1
うまや(馬屋)		1					1
うらぐち(裏口)					1		1
うらど(裏戸)					1		1
うらとぐち(裏戸口)		1					1
えむ(檐)		1					1
えむのは(檐端)	1						1
えんがは(椽側)				1			1

宮室  
一

	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
えんさき(椽先)		1					1
おながや(御長屋)		1					1
おなじまど(同窓)				1			1
おぼしま(欄)				1			1
おほしろ(大城)		1					1
おほそりばし(大反橋)				1			1
おほでら(大寺)		1					1
おほみけどころ(大御食所)			1				1
おほみや(大宮)			1				1
おほみやどころ(大宮處)		1	1				2
おまし(御座)				1			1
かうし(格子)				1			1
かき(垣)	2	4	1	1	1		9
かきつ(垣内)				1			1
かきつづき(垣続)		1					1
かきね(垣根)	1	4	2		1		8
かきねつづき(垣根続)	1						1
かきのうち(垣内)			1				1
かきのと(垣外)		1		1			2
がくかう(學校)		1					1
がくやうろうじやう(岳陽樓上)			1				1
かぜのみや(風宮)		1					1
かたをりど(片折戸)		1					1
かぢや(鍛冶屋)		1					1
かど(門)	3	7	3	5			18
かどがまへ(門構)		1					1
かどぐち(門口)		3					3
かどなみ(門並)			1				1
かどべ(門邊)	1			1			2
かなめがき(要垣)		1	1				2
かはや(厠)		1					1
かはやど(厠戸)			1				1
かはら(瓦)				2			2
かべ(壁)		1	1	2			4
かべのへ(壁上)				1			1
かべのゑ(壁畫)		1					1
かまど(竈)				1			1
かみのみやみ(神宮居)		1					1
かみはし(神橋)				1			1
かめのゐ(龜井)	1						1
かものやしろ(加茂社)	1	1					2
がらすど(ガラス戸)				20	4		24
がらすのまど(ガラス窓)				2			2
がらすばりまど(ガラス張窓)				1			1
がらすまど(ガラス窓)				1			1
かりごや(假小屋)		1		1			2
かりのすまひ(仮住居)	1						1
かりや(假屋)			1				1
きざはし(階)		1					1

宮室	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
きざはしのへ(階上)				1			1
きそのかけはし(木曾架橋)	1	1					2
きど(木戸)					1		1
ぎぼしのうへ(擬寶珠上)			1				1
きやうざう(經藏)			1				1
くさのいほ(草庵)	1						1
くさのいまり(草庵)			2				2
くさのと(草戸)	2	3		2			7
くさのや(草家・草家)	2	1					3
くずれいへ(崩家)		1					1
くものかけはし(雲梯)			1				1
くもゐ(雲井・雲居)…宮中		1					1
くりや(厨)		1					1
くるわ(廓)	1						1
くわんていべうか(關帝廟下)		1					1
こいへ(小家)		1		1			2
こがねのとの(黄金殿)				2			2
ごちうのたふ(五重塔)		1					1
ごてん(御殿)				1			1
こびさし(小庇)				1			1
こほりみせ(氷店)			1				1
こほりや(氷屋)				1			1
こまど(小窓)		1					1
こみせ(小店)				1			1
こや(小屋)		1				1	2
これうりや(小料理屋)		1					1
さかみせ(酒店)		1					1
さかや(酒屋)		2					2
さくばし(柵橋)	1						1
さじき(栈敷)				1			1
さとでら(里寺)			1				1
さむがい(三階)			1				1
したいほ(下庵)		1					1
しづがいまり(賤庵)		1					1
しづがふせや(賤伏屋)		2		1			3
しづがや(賤家)	3	2	1	1	1		8
しばのと(柴戸)	1	1					2
じふけんだな(十軒店)		1					1
しほやのけぶり(鹽屋烟)				1			1
しやうじ(障子)			1				1
しやうや(庄屋)		1					1
しゆぜんじ(修善寺)		1					1
しょうろう(鐘樓)		1					1
しらかはのせき(白河關)	1	1					2
しろ(城)		2					2
すぎがき(杉垣)		1	3	2			6
すぎかきね(杉垣根)		1					1
すまひ(住居)	2		1				3
すみか(住处)	2						2

宮室  
四

宮室	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
すみどころ(栖所)			1				1
すみよしのみや(住吉宮)		1					1
せきや(關屋)		1					1
せたのながはし(瀬田長橋)	1						1
せど(背戸)		2					2
そとぼり(外濠)		1					1
そりはし(反橋)				1			1
たかどの(高殿)	2	4	1	2			9
たけがき(竹垣)					1		1
たたみ(畳)				1			1
たたみのうへ(畳上)			1		1		2
たてもの(建物)			1				1
たびのやど(旅宿)				1			1
たふ(塔)		1		1			2
たまのとの(玉殿)		1					1
たまのみや(玉宮)				1			1
たまのみやみ(玉宮居)				3			3
たるき(椽・垂木)		1		2			3
だん(壇)			2				2
だんごや(團子屋)				1			1
ちぎ(千木)		1					1
ちやしつ(茶室)						1	1
ちやみせ(茶店)		1	1	2			4
ちやや(茶屋)		3	2	1			6
ちよだのみや(千代田宮)				1			1
ちんや(陣屋)			1				1
つつみ(堤)	2	1		1		2	6
つつみづつ(筒井筒)		1					1
つるのま(鶴間)	1						1
てら(寺)		2		1			3
てらこや(寺子屋)		1					1
てんしんけうか(天津橋下)		1					1
てんしんけうじやう(天津橋上)		1					1
と(戸)	1	2	1				4
とこ(床・牀)	3	2		1			6
とこのべ(床邊)				1			1
とこのま(床間)		1					1
とこべ(床邊)			1				1
となりや(隣家)		1					1
とまのへ(苔上)	1						1
とりで(砦)		1		1			2
とりでのうへ(砦上)				1			1
とりや(鳥屋)		1					1
とりゐ(鳥居)				1			1
なががき(中垣)		1					1
ながはし(長橋)	1						1
ながや(長屋)			1				1
なむだいもんまへ(南大門前)		1					1
にひむろ(新室)			2				2



宮室	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ねや(閨)	1	2		4			7
ねやのなか(閨中)			1				1
のき(軒)		1	1				2
のきのは(軒端・檐端)	1	1		1			3
のきば(軒端・檐端)	2	6	1	3			12
のぢやや(野茶屋)		1					1
のでら(野寺)		1					1
のやしろ(野社)		1					1
はかのいし(墓石)			1				1
はし(橋)		2		4			6
はしいた(橋板)		1					1
はしたま(橋玉)				1			1
はしのたもと(橋袂)			1				1
はしら(柱・橋)	1	2		1			4
はたごや(旅籠屋)		1					1
はちまんのみや(八幡宮)				1			1
はなみち(花道)		1		1			2
はなれや(離屋)				1			1
はにふのこや(埴生小屋)		1					1
はひり(這入)…入口				1			1
はまびのみや(濱辺宮)				1			1
ひ(碑)				1			1
ひうがのみや(日向宮)			1				1
ひとつや(一家)	3	1					4
ひとや(人屋)				16			16
ふすま(襖)		1					1
ふせいほ(伏廬)		1					1
ふせや(伏家・伏屋)	2	3					5
ふたへのはし(二重橋)		1					1
ふたへのみはし(二重御橋)			1				1
ふなべや(船部屋)				1			1
ふるいへ(古家)			1	1			2
ふるしろ(古城)		1					1
ふるでら(古寺)		1	1	2			4
ふるやかた(古館)		1					1
へい(塀)		2		2			4
へいのへ(塀上)				1			1
へや(部屋)				2			2
ほうたふ(寶塔)		1					1
ほこら(祠)			1	1			2
ほとけのてら(佛寺)		1					1
まがき(籬)	1						1
まきのと(真木戸)	1						1
まど(窓)	9	3	2	4	1		19
まどのうち(窓内)	1			2			3
まどのと(窓外)			1	3			4
まどのとのも(窓外面)	1						1
みかど(御門)			1				1
みきのもと(御城下)				1			1

[illegible]

服装	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかぞめ(赤染)				1			1
あかも(赤裳)			1				1
あきのにしき(秋錦)	1						1
あげまき(総角)		1					1
あまがつば(雨合羽)	1						1
い(衣)			1				1
いれずみ(入墨)			1				1
うすおり(薄織)				1			1
うすもの(薄物)		2					2
うぶぎ(産衣)		1					1
えり(襟)		1					1
おび(帯)	1						1
おほみもすそ(大御裳裾)			1				1
かがふり(冠)				2			2
かくしど(隠所)…ポケットか				1			1
かさ(笠)		2	1	8			11
かさのは(笠端)		1					1
かさのへ(笠上)				1			1
かすみのきぬ(霞衣)	1						1
かすみのころも(霞衣)	1						1
かぶと(兜)			1				1
かりぎぬすがた(狩衣姿)			1				1
きぬ(衣)	1	2		1			4
きぬ(絹)		1					1
きぬうら(衣裏)				1			1
きむらん(錦襦)				1			1
くつ(靴)	1						1
げた(下駄)				1			1
こがさ(小笠)				1			1
こぞめ(濃染)						1	1
ころも(衣)	1	3	1				5
ころもで(衣手)	1			1			2
ころものそで(衣袖)			1				1
さつまげた(薩摩下駄)					1		1
したぎ(下著)				1			1
しばみごろも(潮浴衣)		1					1
しやつ(襦衣)			1				1
しらも(白裳)		1					1
すげがさ(菅笠)				1			1
すげがさのへ(菅笠上)		1					1
すそ(裾濃)			1				1
すみぞめ(墨染)	1						1
すりごろも(摺衣)	1						1
そで(袖)	7	4			1		12
そでのつゆ(袖露)	1						1
そめもの(染物)		1					1
たび(足袋)				1			1
たびごろも(旅衣)	3						3

	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
たびなれごろも(旅馴衣)				1			1
たもと(袂)	2		2	1			5
たもとのうへ(袂上)	1						1
つづれ(綴)	1						1
ときぎぬ(解衣)		1					1
どんす(緞子)				1			1
ながすそ(長裾)			1				1
なつぎ(夏著)				1			1
なつごろも(夏衣)	1	2					3
にしき(錦)	2						2
にしきのきぬ(錦衣)	2						2
ぬの(布)	1			1			2
ぬひ(縫)				1			1
はながさ(花笠)	1						1
はなぎぬ(花衣)	1						1
はなぞめ(花染)		1					1
はなのにしき(花錦)	1						1
はれごろも(晴衣)			1				1
ひだ(襷)			3				3
ひとはなごろも(一花衣)	1						1
ひとへぎぬ(単衣)		1					1
ふたの(二布)	1						1
ふるがさ(古笠)	1						1
ふるみの(古蓑)	1						1
みづいろきぬ(水色衣)				1			1
みづら(各髪)				1			1
みの(蓑)				1			1
みのかさ(蓑笠)				1			1
みもすそ(御裳裾)				1			1
むつき(襦袢)		1					1
もみちのにしき(紅葉錦)	1						1
やうふく(洋服)			1				1
やつれごろも(褌衣)	1						1
やほひだ(八百襷)			1				1
やれごろも(破衣)	1						1
よそひ(装)			1				1
よそほひ(装)	1						1
よるのころも(夜衣)		1		1			2
よろひ(鎧)		1					1
よろひのそで(鎧袖)				1			1
らしや(羅紗)	1						1
わらち(草鞋)		1		1			2
をがさ(小笠)	3						3
をばなのそで(尾花袖)	2						2

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あい(哀)	1						1
あい(愛)	1						1
あがきのおと(足掻音)				1			1
あく(悪)	1						1
あさげ(朝餉)		1					1
あさね(朝寝)				1			1
あしなへ(足痺)		2	3	2			7
あそび(遊)	1	1	1				3
あだ(仇)	1						1
あづまくだり(東下)		1					1
あなにく(憎)				1			1
あはれ(哀)	1	8	8	1	2		20
あふせ(逢瀬)	1						1
あまつつみ(雨障)				1			1
あまのいさり(海女漁)	1						1
あまやどり(雨宿)				1			1
あめがした(天下)	2						2
あめのした(天下)		1					1
あやにくに(生憎)	1						1
あらそひ(争)		1					1
ありがた(有難)	2						2
いかり(怒)			1				1
いぎりすことば(イギリス言葉)				1			1
いくさ(軍)	2	6	1	3			12
いくさのかみ(戦神)			1				1
いくさのきみ(軍君)			1	1			2
いくさのなか(戦中)			1				1
いけじき(生喰)				1			1
いさかひごと(諍事)			1				1
いさり(漁)	2						2
いさを(功・勲)				2			2
いさをし(勲)	1						1
いそぎよみ(急読)	1						1
いた(痛)			1				1
いたづき(病・労)	1	1	3	4	2		11
いちだいき(一代記)		1					1
いつかのせちゑ(五日節會)		1					1
いとうしやう(一等賞)	1						1
いつはりごと(偽事)				1			1
いこしへぶり(古振)		1					1
いねがて(寝)	1						1
いのち(命)	1	7	1	3	2		14
いのらく(祈)			1				1
いはく(曰)				2			2
いはひごと(祝言)				1			1
いはふらく(祝)		1					1
いびき(鼾)		2					2
いぶき(息吹)		1		1			2

	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
いや(嫌・厭)			1	1			2
いやいや(嫌嫌)				1			1
うがひ(嗽)				1			1
うき(憂)	1						1
うきな(浮名)	2						2
うきふし(憂節)	1						1
うきみ(憂身)				1			1
うきよ(浮世・憂世)	5	1					6
うごき(動)		1					1
うさ(憂)	1			1			2
うしほあみ(潮浴)		1					1
うそ(嘘)				1			1
うた(歌)		8	15	22	2	2	49
うたがたり(歌語)				1			1
うたぐわい(歌會)				1			1
うたげ(宴)			1	3			4
うたたね(転寝)	3	1		1			5
うたたまいくさ(歌玉戦)				1			1
うたのかみ(歌神)				1			1
うたのくわい(歌會)					1		1
うたのぬし(歌主)			1				1
うたのみち(歌道)		1					1
うたひ(謡)				1			1
うちならひ(打習)		1					1
うちばへ(打延)		1					1
うつうつ(鬱々)				1			1
うつつ(現)	2		1	1			4
うつぬき(全抜)					1		1
うなみあそび(髻遊)				1			1
うまい(熟寐)				1			1
うめみ(梅見)			1				1
うらみ(恨)	3	1					4
うらめぐり(浦巡)	1						1
うれしのもり(嬉森)	1						1
うれひ(愁)	1						1
うれひ(患)						1	1
えいぐわものがたり(榮華物語)			1				1
えき(易)	1						1
えにし(縁)	1						1
えらみうた(撰歌)			1				1
えん(宴)		1					1
えんにち(縁日)		1					1
おいのみ(老身)	1						1
おいぼれごゑ(老聲)		1					1
おき(起)				1			1
おきなさび(翁)				1			1
おくらく(贈)			1				1
おとづれ(訪)		1					1
おほきいさを(大勲)			1				1

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
おほきつかさ(大司)				1			1
おほぞん(大損)	1						1
おほみこと(大御言)				1			1
おほわらひ(大笑)	1						1
おむも(御喪)		1					1
おもかぢ(面楯)		1					1
おもしろ(面白)		1		1			2
おもひ(思)	10		2	2			14
おもひがは(思川)		1					1
おもひたゆ(思絶)	1						1
おもひのたけ(思丈)	1						1
おもひます(思増)	1						1
およづれ(妖)			1				1
おろか(愚)	1						1
かいしん(改新)	1						1
かいまみ(垣間見)			1				1
かうのこ(孝子)					1		1
かがくぜんしよ(歌學全書)				1			1
かきの(描)				1			1
がくかう(學校)				1			1
がくわ(學課)				1			1
がくのね(樂音)				1			1
かぐら(神樂)			1				1
かしこさ(畏)		1		1			2
かずとり(數取)	1						1
かずとり(數取)	1						1
かたみ(形見)	2		1				3
かたみ(肩身)			1				1
かため(固)				1			1
かどで(首途・門出)			3				3
かなしさ(悲)		1					1
かなしみ(悲)	1						1
かぬち(鍛冶)			1				1
かはすずみ(川涼)	1						1
かひ(甲斐)	2						2
かぶき(歌舞伎)				1			1
かへりみ(願)			1	1			2
かへるさ(歸)				1			1
かみちから(神力)				1			1
かみのみよ(神御代)		1					1
かみわざ(神業)				2			2
からうた(唐歌)		1		1			2
かり(借)				1			1
かり(獵・刈)			1				1
かりぎぬすがた(狩衣姿)			1				1
かりずまひ(仮住居)	1						1
かりね(仮寝)	1						1
かりのうきよ(仮憂世)	1						1
かりのすまひ(仮住居)	1						1

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
かん(癩)			1				1
かんしやく(癩癩)	1						1
かんだまつり(神田祭)				1			1
き(歸)	1						1
き(喜)	1						1
きぬぎぬ(衣衣)				1			1
きぬた(砧)	3	1	1				5
きのこがり(蕈狩)		3					3
きみがよ(君代)		3	1				4
きむくわいしふ(金槐集)			1				1
きも(肝)				1			1
きもだま(肝玉)				1			1
きやう(経)		2					2
きやうか(狂歌)	1						1
きよもと(清元)			1				1
く(句)				1			1
くい(句意)				1			1
くぐつしほ(傀芝居)				1			1
くさかめ(草刈)		1					1
くさまくら(草枕)	1						1
くすしさ(奇)		1					1
くたびれ(草臥)				1			1
くだまき(管巻)				1			1
くち(口)	1						1
くづくり(句作)				1			1
くにのまつり(國祭)				1			1
くはだて(企)			1				1
くひのこし(喰殘)		1					1
くらべ(比)	1						1
くるしみ(苦)			1				1
くろやき(黒焼)	1						1
くわい(會)				1			1
くわじ(火事)				1			1
げんじものがたり(源氏物語)			1				1
こうぎ(講義)				1			1
こがひ(蠶飼)…動作			1				1
ごくらく(極樂)	1						1
ごくらくじやうど(極樂浄土)				1			1
こくりよく(國力)…雑誌名				2			2
こちす(心地)	3		1				4
こころ(心)	11	2	3	4		1	21
こころあるごと(心有毎)	1						1
こころいそぎ(心急)	1						1
こころのそこ(心底)	1						1
こころのとも(心友)		1					1
こころばかり(心許)		1					1
こころをこむ(心込)				1			1
こしばゐ(小芝居)				1			1
こたへ(答)	1						1



人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
こだま(木霊・木玉・鈺)		1					1
こてまねき(小手招)				1			1
ことだま(言霊)	1						1
ことつて(言伝)		1					1
ことのは(言葉)	4						4
ことわり(理)	1					1	2
こひ(戀)	11						11
こひぢ(戀路)	3						3
こひのとほみち(戀遠道)			1				1
こひのみち(戀道)	4						4
こひのやま(戀山)	1						1
こひのやまち(戀山路)	4						4
こもり(籠)			1				1
ごりようゐ(御稜威)			1				1
ごゐ(五位)				2			2
こゑ(聲)	2	13	2	4			21
さいをうがうま		1					1
さかしら(賢)	1			1			2
さきがけ(先駆)				1			1
さきのよ(先世)	1						1
さくらのえん(櫻宴)		1					1
さくらみ(櫻見)				1			1
さち(幸)				2			2
さまたげ(妨)	1						1
さみ(三味)			2				2
さみしさ(淋)	1						1
さむまい(三昧)		1					1
さらものがたり(皿物語)				1			1
し(死)	1						1
し(詩)		1	5	2			8
じ(字)				1			1
じいう(自由)	1						1
しおき(仕置)			1				1
しこ(醜)				1			1
しなさだめ(品定)		1					1
しのかみ(詩神)			1				1
しのふくろ(詩囊)			1				1
しばゐ(芝居)		1	1	2			4
じふじ(十字)				1			1
しほあみ(潮浴)		2					2
しもおほひ(霜覆)				1			1
じやう(情)				1			1
じやうぶつ(成佛)			1				1
しやく(酌)	1						1
しやくきむ(借金)	1						1
しやせい(寫生)			2	1			3
しらせ(知)				1			1
しるし(印・徴・標)				1			1
しゐ(四位)				1			1

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
じんきよ(腎虚)	1						1
じんしやく(人爵)	1						1
しんによのつき(眞如月)		1					1
すさみ(遊)				1			1
すずみ(涼)			1				1
すばなし(素話)				1			1
すまのまき(須磨巻)			1				1
すゑのよ(末世)					1		1
せい(生)	1						1
せいたう(政黨)	1						1
せかい(世界)	1						1
せつぼふ(説法)			1				1
せんか(撰歌)			1				1
そか(楚歌)		1					1
そひね(添寝)	1						1
そらだき(空薫)				1			1
そらなきごと(空泣事)				1			1
だい(代)				1			1
だい(題)					1	2	3
たいさう(體操)				1			1
だいじ(大事)				1			1
だいじだいひ(大慈大悲)				1			1
たきやう(炊様)			1				1
たくみ(企)				1			1
たくみ(巧)			1				1
たくみ(匠)			1				1
たすけ(助)	1						1
たたかひ(戦)	1	1					2
たちから(手力)		1					1
たづものがたり(田鶴物語)			1				1
だてくらべ(伊達比)	1						1
たのしげ(楽氣)	1						1
たのしさ(樂)			1				1
たび(旅)		4	2	2			8
たびごろ(旅心)		1					1
たびね(旅寝)	5		1				6
たびのそら(旅空)	1						1
たびのやど(旅宿)				1			1
たびまくら(旅枕)		1					1
たふと(尊)			1				1
たま(魂)		2	1				3
たまぐら(手枕)	1	1		1			3
たまのを(玉緒)	1						1
たむけ(手向)				1			1
たより(便)	1						1
たより(頼)	1						1
ちかひ(誓)	1						1
ぢかめ(直目)						1	1
ちぎり(契)			1				1

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ちやのうた(茶歌)				1			1
ちやのゆ(茶湯)				1			1
ちりのよ(塵世)		1					1
つかさ(官・司)…官職		1					1
つがふ(都合)	1						1
つきあひ(付合)				1			1
つきみ(月見)	1						1
つくりものがたり(作物語)			1				1
つじうら(辻占)		1					1
づつうす(頭痛)		1					1
つつが(恙)			1				1
つつみ(障)					1		1
つつみ(慎)				1			1
つどひ(集)					1		1
つねみたま(常御魂)				1			1
つみ(罪)	1			2			3
つり(釣)		1					1
つれづれ(徒然)			1				1
て(手)…腕前		1					1
であひ(出合)		1					1
てかず(手敷)				1			1
てがた(手形)				1			1
てすさび(手遊)		1					1
てづくね(手捏)				1			1
てなみ(手並)	1						1
てならひ(手習)		1					1
てなれ(手馴)				1			1
てん(天)…崇める対象		1					1
てんか(天下)	1						1
てんじやうてんげ(天上天下)		1					1
てんらんくわい(展覧會)			1				1
ど(怒)	1						1
とこずれ(床擦)			1				1
とこぶせ(常伏・常臥)				2			2
とこやみ(常病)				1			1
とこよ(常世)				1			1
とし(年)…年齢			1				1
とどろき(轟)				1			1
とのみ(宿直)		1					1
とはあるき(遠歩)				1			1
とみ(富)				1			1
な(名)	1		4	2	1		8
なか(仲)	1						1
ながい(長寐)				1			1
ながめ(眺)…行動				1			1
なきたま(亡魂)	1	1					2
なきな(無名)	1						1
なぐさめ(慰)			1				1
なげき(嘆)	2						2

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
なにものがたり(何物語)	1						1
なみだがは(涙川)	1						1
なみだのかは(涙川)	1						1
なむあみだ(南無阿弥陀)			1				1
ならくのそこ(奈落底)			1				1
ならひ(習)	1						1
なり(業)				1			1
なりはひ(生業)			1	1			2
にぎはひ(賑)			1				1
にくさ(憎)	1	1					2
にひとしのうた(新年歌)				1			1
にふじやく(入寂)		1					1
にほん(日本)…新聞の名				1			1
によげがもん(如是我聞)		1					1
ねがひ(願)	1						1
ねぎごと(禰宜事)		1					1
ねぎめ(寢覚・寐覚)	2						2
ねむぶつ(念佛)		2					2
ねむり(眠)	1						1
のちのよ(後世)	2			2			4
のり(法)		1		1			2
のりのともしび(法灯)		1					1
のりのみち(法道)			1				1
のりのをしへ(法教)			2				2
はいがふ(配合)			1				1
はいく(俳句)		1					1
はぐらんくわい(博覽會)	1						1
はこがき(箱書)				1			1
はしゐ(端居)			1	1			2
はぢ(恥)				1			1
はちうゑ(鉢植・鉢栽)		1		3		2	6
はなし(話)				3			3
はなみ(花見)	1						1
はなむけ(贐)			1				1
はるのころ(春心)	1						1
はんくわ(繁華)		1					1
び(美)			1				1
ひとごころ(人心)	1						1
ひとのめ(人目)	1						1
ひとめ(一目)				1			1
ひとめ(人目)	2						2
ひとめのせき(人目關)	1						1
ひともじ(一文字)				1			1
ひとりね(独寝)	2						2
ひなまつり(雛祭)		4					4
びやうき(病氣)	1						1
ひるね(晝寐)		5					5
ひるものがたり(蛭物語)				1			1
びん(便)	1						1

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ふじのうた(富士歌)		1					1
ふじのからうた(富士唐歌)		1					1
ふちのうた(藤歌)					1		1
ふつき(富貴)				1			1
ふで(筆)…書かれたもの			1	1			2
ふでのちから(筆力)				1			1
ふなで(船出)	1						1
ふみ(文・書)…学問など		1	2	1			4
ふみのみち(文道)		1	1				2
ふゆごもり(冬籠)				1			1
ふゆよそひ(冬装)		1					1
ぶんしやう(文章)				1			1
ペーすぼーる(ベースボール)		5					5
ぼいむ(母音)	1						1
ほうしや(奉捨)		1					1
ほちから(穂力)				1			1
ほつくのくわい(發句會)				1			1
ほとけのちから(佛力)			1				1
ほとけのみち(佛道)		1					1
ほふのわう(法王)				1			1
ほまれ(誉)	2						2
ぼんなう(煩惱)		1					1
ぼんをどり(盆踊)		1					1
まがごと(枉言)			1				1
まがつみ(禍罪)	1						1
まきがり(巻狩)			1				1
まごころ(眞心)	2						2
まこと(誠・眞)	1						1
まことのみち(眞道)	1						1
まさきく(眞幸)		1					1
またのな(又名)			1				1
まつらく(祭)				1			1
まつり(祭)		1	1				2
まどろみ(微睡)	1						1
まなびのみち(学道)	1						1
まなびのわざ(學業)		1		1			2
まりうた(鞠歌)	1						1
まんえふ(萬葉)…万葉集				1			1
まんぷく(満腹)	1						1
み(身)	7			3			10
みいくさ(御戦・御軍)				1			1
みうた(御歌)		1				1	2
みうつし(御遷)				1			1
みくらみ(御位)				1			1
みごしらへ(身拵)	1						1
みこと(御言)				1			1
みしろし(御驛)				1			1
みたま(御魂)		1	1	2			4
みだれごころ(亂心)		1					1

人事	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
みちしるべ(道標)						1	1
みつぎ(貢)		1					1
みづき(水莖)	1		1				2
みづきのあと(水莖跡)	1						1
みづくみ(水汲)					1		1
みのうへ(身の上)	1						1
みめぐり(三巡)	1						1
みゆき(御幸)				1			1
みよ(御代・御世)	3	3	3	1	1		11
みらく(見)				1		2	3
みるめ(見目)	1						1
むかしがたり(昔語)			1				1
むかしのこと(昔事)			1				1
むかしばなし(昔話)		1					1
むかばら(向腹)			1				1
むくい(報)				1			1
むしぼし(蟲干)			1				1
むすび(結)				1			1
むつたま(睦魂)				1			1
むね(胸)…心	2						2
むらしばゐ(村芝居)		1					1
めぐみ(恵)	2		1	2			5
めんくわいのひ(面會日)				1			1
も(喪)		1					1
もじ(文字)				1			1
もてなし(持成)			1				1
ものおそれ(物恐)		1					1
ものがたり(物語)		1	1				2
もろごゑ(諸聲)				1			1
やきしるし(焼印)		1					1
やく(厄)				1			1
やどり(宿)	3	2	2				7
やぶいり(藪入)		1					1
やまがたしんぶん(山形新聞)				1			1
やまひ(病)		4	5	5	2		16
やまひのどこ(病牀・病床)		1	5	9	1	1	17
やまぶきのうた(山吹歌)					1		1
やまぶみ(山踏)		1					1
ゆあみ(湯浴)		1					1
ゆきき(行來・往來)	2				1		3
ゆふがほのまき(夕顔巻)				1			1
ゆふすずみ(夕涼)	4						4
ゆめ(夢)	16	21	5	2			44
ゆめぢ(夢路)		1					1
ゆるし(許)		1					1
よ(世・代)	12	14	5	7		1	39
よく(慾)	1						1
よけく(善)		1					1
よごと(吉事)				1			1

人事 十一

[illegible]

動物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あうむ(鸚鵡)				1			1
あしたづ(蘆田鶴)	1						1
あひる(家鴨)				1			1
あゆ(鮎)		1					1
あゆこ(鮎子)		1					1
あらくま(荒熊)	1		1				2
あらたか(荒鷹)	1	1					2
あり(蟻)		2					2
あをがへる(青蛙)		1					1
あをどり(青鳥)				1			1
あをばへ(青蠅)		1					1
いなすずめ(稻雀)		1					1
いぬ(犬)	2	2	2				6
いるか(海豚)		1					1
うぐひす(鶯)	6	4	4	2		1	17
うさぎ(兎)		1		1			2
うし(牛)	1	3		8	1	1	14
うしのこ(牛子)				1			1
うしのしり(牛尻)		1					1
うしのち(牛乳)			1	1			2
うづら(鶉)		1	1	3			5
うま(馬)	1	2	4	5			12
うまのを(馬尾)		1					1
うろくづ(鱗)	1						1
うを(魚)	1	1					2
おほかみ(狼)		5					5
おほとり(大鳥)				1			1
おむま(御馬)		1					1
おもとのみやうぶ(御許命婦)			1				1
おやうし(親牛)				1			1
か(蚊)		2		1			3
かうもり(蝙蝠)		1					1
かげろふ(蜻蛉)		1		1			2
かささぎ(鵲)		2					2
かざりうま(飾馬)			1				1
かたつむり(蝸牛)			1				1
かなりあ(金糸雀)		1	3	1			5
かのこ(鹿の子)		1					1
かはづ(蛙)		1					1
かはほり(蝙蝠)				1			1
かひ(貝)		1					1
かひこ(蠶)		3	1				4
かひどり(飼鳥)				1			1
かめ(龜)	1		1	1			3
かもめ(鷗)				1			1
かもめのむれ(鷗群)				1			1
からす(鴉・烏)		3	2	3			8
からすのこ(烏子)		1					1

動物  
一



動物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
からすのす(鳥巢)		1					1
からねこ(唐猫)			1				1
かり(雁)	1	2	1				4
かりがね(雁音)	1	1					2
かりがね(雁金)	4	1	1				6
かんこどり(閑古鳥)		1					1
きぎしめ(雉女)		1					1
きぎす(雉)			1				1
きじ(雉)		2	1				3
きじこ(雉子)		1					1
きつね(狐)	1						1
きつねのだいわう(狐大王)				1			1
きむぎよ(金魚)		1	1				2
くじやく(孔雀)				4			4
くそはへ(糞蠅)		1					1
くそむし(屎蟲)		2					2
くちなは(蛇)			1				1
くぢら(鯨)		1					1
くひな(水鶏)	3						3
くま(熊)	3	1					4
くらしし(鞍鹿)				1			1
くらししのかは(鞍鹿皮)				1			1
くろこま(黒駒)	1	1					2
けだもの(獣)		1		3			4
けもの(獣)	3						3
こぐま(子熊)			1				1
こざる(子猿)		2					2
こてふ(胡蝶)			1				1
ことひのうし(特牛)		1					1
ことり(小鳥)	2			3			5
こねこ(小猫)				1			1
こひ(鯉)	1	1					2
こひばり(子雲雀)		1					1
こぶな(小鮒)		1					1
こま(駒)	7	1	1	1			10
こまのを(駒尾)			1				1
ぞう(象)			2				2
さぎ(鷺)		1	2	1			4
さる(猿)	2	3					5
さるひこ(猿彦)		1					1
さをしか(牡鹿・小男鹿)		1	2				3
しか(鹿)		1	7				8
しぎ(鳴)	2						2
しこくざる(四国猿)		2					2
しこくのさる(四國猿)		2					2
しし(獅子)		2	1				3
しじふから(四十雀)		1		1			2
しでのたをさ(死出田長)…時鳥	1						1
じやくし(雀子)		1					1

動物  
二

動物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
しらうを(白魚)		2					2
す(巢)		9					9
すずむしのね(鈴蟲音)	1						1
すずめ(雀)		4		1			5
すずめのこ(雀子)		2					2
すずめのす(雀巢)		1					1
せみ(蟬)	1	6	10				17
せみのね(蟬音)	1						1
たか(鷹)	1	8	1	1			11
たすずめ(田雀)					1		1
たづ(鶴)	1	6	4				11
たつ(龍)	1	2	2	1			6
たつのあらうま(龍荒馬)				1			1
たつのま(龍馬)	1						1
たつのみやこ(龍都)			1				1
たづむら(鶴群)		1					1
たぬき(狸)		3					3
たひ(鯛)				1			1
ちどり(千鳥)	2			1			3
つきげ(月毛)…月毛の馬		1					1
つばくらめ(燕)		1					1
つばめ(燕)		3	1	1			5
ておひのしし(手負猪)		1					1
てふ(蝶)		2	3	1	1		7
てふのは(蝶羽)				1			1
てふのゆめ(蝶夢)	1						1
どちやう(泥鰌)		1	1				2
とび(鳶)		1		3			4
とびのこ(鳶子)		1					1
とびのす(鳶巢)		1					1
とびのね(鳶音)						1	1
とぶとり(飛鳥)	2		1	2			5
とほやまどり(遠山鳥)		1					1
とも(友)…犬の友		1					1
ともしか(友鹿)	1						1
ともむれすずめ(友群雀)	1						1
とら(虎・寅)	2	1		1			4
とらのこ(虎子)			1				1
とり(鳥)	3	8	8	19	2		40
とり(酉・鶏)	2	2	1				5
とりのあと(鳥跡)	1						1
とりのくち(鶏口)		1					1
とりのね(鳥音)				1			1
にはとり(鶏)		1					1
にひくはまゆ(新桑繭)				1			1
ねぐら(埒)	1						1
ねこ(猫)		1	1	1			3
はしたか(鷹)	1						1
はたのさもの(鰯狹物)			1				1

動物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
はつかり(初雁)	1						1
はと(鳩)		1					1
はとのす(鳩巢)		1					1
ははうし(母牛)				1			1
はへ(蠅)		10		1			11
はまのちどり(濱千鳥)	1						1
はるこま(春駒)	1						1
はるどり(春鳥)				1			1
ひぐらし(蝸)		2					2
ひつじ(羊)				1			1
ひづめ(蹄)		1					1
ひは(鵺)				2			2
ひばり(雲雀)	1	14	2	1			18
ひる(蛭)				1			1
ふぐ(河豚)	1						1
ふくろふ(梟)		1	1				2
ふせゐ(伏猪)	1						1
ぶた(豚)				1			1
ぶちいぬ(斑犬)		1					1
ふるほととぎす(古時鳥)				1			1
へびども(蛇共)			1				1
ぼうふら(子子)				1			1
ほたる(螢)	4	8	2				14
ほととぎす(時鳥・郭公・子規)	12	12	1	10	9		44
ま(馬)			2				2
ましら(猿)		1					1
まなく(馬鳴)	1						1
みづとり(水鳥)	2		1				3
みやこどり(都鳥)	5	1					6
むかで(蜈蚣)	1						1
むし(蟲)	3		1	1			5
むしのね(蟲音)	1						1
むらかり(群雁)	1						1
むらとり(群鳥)	2						2
めじか(雌鹿)			1	1			2
めだか(目高)		1	1				2
もず(百舌)		1					1
もろこま(諸駒)				1			1
もろとり(諸鳥)		1		1			2
やまどり(山鳥)	1			1			2
やまほととぎす(山時鳥・山郭公)	3	3		1	1		8
やもり(家守)		1					1
ゆふひばり(夕雲雀)	2	1					3
ろば(驢馬)		1		1			2
わし(鷲)		1					1
わしのす(鷲巢)		1					1
ゐのこ(猪子)				1			1
ゐのしし(猪)				2			2
を(尾)	1						1

動物  
四

[illegible]

動物  
五

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかつばき(赤椿)						1	1
あかばら(赤薔薇)				1			1
あかひとくさ(赤人草)			1				1
あかゆりのはな(赤百合花)			1				1
あきくさ(秋草)			1				1
あきくさのはな(秋草花)		1					1
あきくさばな(秋草花)					1		1
あさ(麻)		1					1
あさがほ(朝顔)	2	2		1			5
あさがほのなへ(朝顔苗)		1					1
あさぢがはら(浅茅原)	1						1
あざみ(薊)		1		1			2
あし(蘆)	1						1
あしがき(葦垣)			1				1
あしのは(蘆葉)	1						1
あしのはな(蘆花)		2					2
あしのふしば(蘆伏葉)		1					1
あしべ(芦辺)	1						1
あしまくれ(蘆間隠)	1						1
あだくさ(徒草)		1					1
あたごのもり(愛宕森)				2			2
あぢさゐ(紫陽花)			1				1
あぢさゐのはな(紫陽花花)	1						1
あづまぎく(東菊)				1			1
あふひ(葵)		1	1				2
あやめ(菖蒲)	1				1		2
あをかき(青垣)				1			1
あをがきやま(青垣山)			1				1
あをざり(青桐)		1					1
あをくさ(青草)				1			1
あをた(青田)		1					1
あをな(青菜)				3			3
あをなのはな(青菜花)				1			1
あをば(青葉)	2	1					3
あをひとくさ(青人草)			1				1
あをまつ(青松)				1			1
あをむぎ(青麥)		1					1
あをめ(青芽)				1			1
あをやぎ(青柳)		2		1			3
あをやま(青山)		1	1				2
あんず(杏)		1					1
あんずのはな(杏花)		1					1
いぐち(猪口)		1					1
いけがき(生垣)			1				1
いちご(苺・覆盆子)		1					1
いちはつ(鳶尾)					1		1
いちやうのおいき(銀杏老木)				1			1
いちりんばら(一輪薔薇)				1			1

植物  
一

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
いとはぎ(絲萩)	2						2
いとやなぎ(絲柳)			1				1
いね(稻)		4					4
いばら(茨・笹)			1	2			3
いほえ(五百枝)		1					1
いも(芋)		1	1				2
うすこうばい(薄紅梅)		1					1
うすもみぢ(薄紅葉)	1						1
うてな(臺)				1			1
うのはな(卯花)	6						6
うばざくら(姥櫻)	1						1
うはば(上葉)				1			1
うばら(茨)		2					2
うへのもり(上野森)		1	2	3			6
うめ(梅)	4	10	5	20		12	51
うめがえ(梅枝)	2						2
うめがか(梅香)	2			1			3
うめなへ(梅苗)		1					1
うめのあをば(梅青葉)		1					1
うめのき(梅木)				1			1
うめのこのま(梅木間)				1			1
うめのはち(梅鉢)				1			1
うめのはな(梅花)	1	2		2		9	14
うめのはやし(梅林)				3			3
うめばやし(梅林)			1				1
うものはたけ(芋畠)			1				1
うらば(末葉)				1			1
うらわかば(若葉)		1					1
うり(瓜)		2					2
うれしのもり(嬉森)	1						1
うゑき(植木)		1		1			2
えだ(枝)	2	4	1	3	1		11
えだごと(枝毎)		1		1			2
えのき(榎)		1					1
おいき(老木)		1		1			2
おいぐちざくら(老朽櫻)				1			1
おいざくら(老櫻)		1					1
おいまつ(老松)	1						1
おしろいのはな(白粉花)		1	1				2
おちくさ(落草)		1					1
おちつばき(落椿)		1					1
おちば(落葉)			1				1
おどろ(棘)		1					1
おにゆりのはな(鬼百合花)			1				1
おほざくら(大櫻)		1					1
おほまつたけ(大松茸)		1					1
かいだう(海棠)		2		1			3
かいだうのはな(海棠花)		1					1
かうじのはな(柑子花)		1					1

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
かうほね(河骨)	1		1				2
かうほねのはな(河骨花)		2					2
かき(柿)			1				1
かきぎく(笹菊)		1					1
かきつばた(杜若・燕子花)		2	1	1			4
かきのたね(柿種)			1				1
かく(核)		1					1
かくのこのみ(香菓)				1			1
かし(櫨)				1			1
かしのき(櫨木)	1			1			2
かなめがき(要垣)		1	1				2
かへで(楓)	1	1	3	1			6
かまつか(鎌柄)		1	2				3
かむすぎ(神杉)		2					2
かやぐさ(茅草)						1	1
からくさ(唐草)				1			1
からすり(烏瓜)			1				1
からなでしこ(唐撫子)		1					1
からもも(唐桃)				1			1
かりも(刈藻)		1					1
かれき(枯木)	1						1
かれくさ(枯草)	1						1
かれしば(枯芝)		1					1
かれやま(枯山)		1					1
かんちく(寒竹)		1					1
かんりむ(寒林)		1					1
き(木・樹)	3	7	3	5			18
きぎく(黄菊)		1		2			3
ききやう(桔梗)		1					1
きく(菊)		4	4	3			11
きくなへばた(菊苗畑)		1					1
きくのね(菊根)		1					1
きくのはな(菊花)				6			6
きちかうのはな(桔梗花)		1					1
きのえだ(木枝)				1			1
きのかげ(木影)				1			1
きのこ(木子)		4					4
きのした(木下)	1						1
きのすゑ(木末)		1					1
きのもと(木下)			1				1
きりのこずゑ(桐木末)		1					1
くさ(草)	4	5	5	2			16
くさき(草木)	1		2	1			4
くさぎ(臭木)			1				1
くさのは(草葉)	1						1
くさばな(草花)				1	1	1	3
くさまがくれ(草間隠)	1						1
くさむす(草生)				1			1
くさむら(草群・草村)	2	1	1				4

植物  
四

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
くさむらがくれ(草群隠)	1						1
くさもゆ(草萌)			1				1
くちなし(梔)	1			1			2
くにはやし(國林)				1			1
くぬぎはら(橡原)		1					1
くは(桑)		1	1				2
くはのた(桑田)		1					1
くはのはやし(桑林)		2					2
くはのみ(桑實)			1				1
くはばた(桑畑)			1				1
くりはら(栗原)		1					1
くれたけ(呉竹)	3	1		2			6
くれなゐのは(紅葉)			1				1
くろたけ(黒草)		1					1
ぐわりうばいのその(臥龍梅園)				1			1
くわんとうのはな(款冬花)	1						1
けいとう(鶏頭)		1	1				2
けいとうのはな(雞頭花)			1				1
けやき(槻)		1					1
げんげ(紫雲英)			1				1
げんげん(翹搖・紫雲英)		2		1			3
げんげんのはな(紫雲花)						1	1
こうばい(紅梅)		14					14
こうめ(小梅)				1			1
こうめのさと(小梅里)	1						1
こえだ(小枝)		1					1
こがくれ(木隠)		1					1
こかげ(木陰)	2			4			6
こがねはな(黄金花)	2						2
こぐさ(小草)		1					1
こぐさがくれ(小草隠)		1					1
こけ(苔)			1				1
こけのした(苔下)		1					1
こけむす(苔生)	2	1					3
こざくら(小櫻)		1		1			2
こざくらさう(小櫻草)				1			1
こずゑ(梢)	2	1	3	6			12
こだち(木立)	1			2			3
ことぶきさう(寿草)				1			1
このくれ(木暗)		1					1
このくれしげ(木暗繁)		1					1
このしたかげ(木下陰)	2						2
このは(木葉)	1		2				3
このま(樹間)	1						1
こひくさ(戀草)			1				1
こまつ(小松)		1	1				2
こまつがえだ(小松枝)				1			1
こまつな(小松菜)				1			1
こまつのえだ(小松枝)				1			1



植物  
五

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
こまつばら(小松原)			1				1
ごんげんのもり(権現森)				1			1
さうび(薔薇)					1		1
さかさば(榊葉)	1						1
さくら(櫻)	11	9	4	22			46
さくらのあめ(櫻雨)				2			2
さくらのうへ(櫻上)		1					1
さくらのえん(櫻宴)		1					1
さくらはな(櫻花)	1	1		1	1		4
さくらばな(櫻花)	3	2		3			8
ささのは(笹葉)	1						1
ささはな(小花)				1			1
さざんくわ(山茶花)			2				2
さざんくわのはな(山茶花)			2				2
さちくさ(幸草)				2			2
さなへ(早苗)		1					1
さるすべり(百日紅)			1				1
さんせう(山椒)				1			1
しうかいだう(秋海棠)		1	1				2
しうかいだうのはな(秋海棠花)			1				1
しげみ(茂)		1	1				2
しげやま(繁山)		1					1
しげりは(茂葉)				1			1
しこくさ(醜草)		1					1
したえ(下枝)	1			2			3
したくさ(下草)		1	2	2			5
したば(下葉)	1						1
しぬのめ(篠群)				2			2
しのすすき(篠薄)	1						1
しののをすすき(篠小薄)	1						1
しのぶぐさ(荳草)		1					1
しばやま(芝山)	1						1
しひのえだ(椎枝)		1					1
しひのおいき(椎老樹)		1					1
しひのき(椎木)		1	1				2
しひのこずゑ(椎梢)				1			1
しひのは(椎葉)		1		1	1		3
しやうぶ(菖蒲)			1	1			2
しやくやく(芍薬)		1		1			2
しやくやくのその(芍薬園)		1					1
じゆせいばい(壽星梅)				1			1
しゆろ(棕櫚)		1					1
しゆろのはな(櫻欄花)		1					1
しらうめ(白梅)	3	1					4
しらぎく(白菊)	1	1		1			3
しらゆりのはな(白百合花)			1				1
しろばら(白薔薇)				1			1
すいせん(水仙)		1		2			3
すいせんのはな(水仙花)				1			1

植物  
六

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
すがはら(菅原)			1				1
すぎ(杉)	1	5		5		1	12
すぎがき(杉垣)		1	3	2			6
すぎかきね(杉垣根)		1					1
すぎのき(杉木)		1					1
すぎのこずゑ(杉木末・杉梢)		2		2			4
すぎのこのま(杉木間)				1			1
すぎのしたかげ(杉下陰)		1					1
すぎのはやし(杉林)			1	2			3
すぎのへ(杉上)		1					1
すぎば(杉葉)		1	1				2
すぎむら(杉群)		1		1			2
すぎやま(杉山)		1					1
すげ(菅)	4						4
すすき(薄・芒)	3	3	1				7
すみれ(堇)	1	3	1	2		3	10
すみれのはな(堇花)			1			4	5
せり(芹)		2	1				3
そなれまつ(磯馴松)	1	1					2
そばのはたけ(蕎麥畠)				1			1
そらまめ(空豆)		1					1
たうなす(唐茄子)		1					1
たかき(高木)			1				1
たけ(竹)	1	3	1	2			7
たけのは(竹葉)	1						1
たけむら(竹群)				1			1
たけむらかげ(竹群陰)				1			1
たけやぶ(竹藪)		1	2				3
たけやぶのへ(竹藪上)		1					1
たちえ(立枝)		1		1			2
たちばな(橘)		3		2			5
たつき(立木)	1						1
たでたでのな(蓼蓼花)						1	1
たね(種)					1		1
たままつ(玉松)				1			1
たまも(玉藻)						1	1
たれは(垂葉)				1			1
たんぽぽ(蒲公英)		2					2
ちぐさ(千草)			1		1		2
ちくさのはな(千種花)			1				1
ちばな(千花)				1			1
ちやたけ(茶藨)		1					1
ちやばたけ(茶畠)			1				1
ちんちやうのはな(沈丁花)				1			1
ちんのれやのはな(チンノレヤ花)						1	1
つが(樗)		1					1
つくし(土筆)						1	1
つくしご(土筆子)						1	1
つくづくし(土筆)						11	11

植物  
七

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
つた(蔦)		3					3
つつじ(躑躅)		5	1	1			7
つつじのはな(躑躅花)		1					1
つばき(椿)		2	2	4			8
つばきのはな(椿花)		2					2
つぼみ(苔・薔)		3			1	1	5
つまくれなゐ(爪紅)				1			1
つまなし(妻梨)			1				1
つまなしのはな(妻梨花)	1			1			2
つゆくさ(露草)			1				1
てつせんのはな(鐵線花)			1				1
とうがん(冬瓜)			1				1
とがりば(尖葉)				1			1
ときはぎ(常磐木)				1			1
ときはのまつ(常磐松)	1						1
とくさ(木賊)				1			1
とほやまざくら(遠山桜)	1						1
ながふさ(長房)					1		1
なし(梨)		1					1
なつぎく(夏菊)		1					1
なつぐさ(夏草・夏艸)	1	2					3
なつくは(夏桑)		1					1
なつだいたい(夏橙)				1			1
なづな(薺)				1			1
なつの(夏野)	1			1			1
なつめ(藟)		1					1
なつやま(夏山)	2			1			3
なでしこ(撫子)	3	3					6
なでしこのはな(撫子花)	1	1	1	1			4
ななくさ(七草)					1		1
なにばな(何花)			1				1
なのはな(菜花)	1	4		3			8
なばた(菜畑)		1					1
なへ(苗)		1					1
ならのこずゑ(檜梢)		1					1
ならのはやし(檜林)				1			1
ならのみ(檜實)				1			1
ならばやし(檜林)				1			1
にこぐさ(和草)				1			1
にはき(庭木)		1		1			2
にはざくら(庭櫻)				1			1
にはのき(庭木)				1			1
にほひすみれ(香堇・匂堇)						1	1
にほひば(匂葉)				1			1
ね(根)			1	1			2
ねぎ(葱)				1			1
ねぎばた(葱畑)				1			1
ねぎし(根差)…根	1						1
ねぜり(根芹)				1			1

植物  
八

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ねむのはな(合歡花)			1				1
は(葉)	1		2	4	1		8
ばいゑん(梅園)		1		1			2
はがくれ(葉隠)	1	2			1		4
はかげ(葉陰)	1						1
はぎ(萩)	1	6	3	1			11
はぎがえ(萩枝)	1						1
はぎのはな(萩花)	1	1	1				3
はぎのめ(萩芽)			1	1	1		3
はくばい(白梅)		1					1
はげいとう(葉鶏頭)		1					1
はごと(葉毎)				3			3
はさき(葉先)				1			1
はす(蓮)		2					2
はすのはな(蓮花)		1					1
はすゑ(葉末)		1					1
ばせう(芭蕉)		2					2
はたけ(葉竹)		1					1
はちうゑざくら(鉢栽櫻)		1					1
はちす(蓮)	1						1
はちすのはな(蓮花)		1					1
はちすば(蓮葉)	1						1
はちべゑがざくら(八兵衛櫻)		1					1
はつはな(初花)	1						1
はな(花)	37	26	6	47	10	2	128
はなあやめだ(花菖蒲田)				1			1
はなかきつばた(花杜若)	1						1
はなさいづ(花咲出)	1				1		2
はなさく(花咲)	4	14	8	12		1	39
はなすみれ(花堇)		1				5	6
ばなな(甘蕉)		1					1
はなの(花野)		2					2
はなのうてな(花台)	1						1
はなのうへ(花上)	2						2
はなのおほきみ(花王)				1			1
はなのか(花香)	1						1
はなのかげ(花影)	1						1
はなのさかめ(花盛)	1		1	1			3
はなのしづく(花雫)	1			2			3
はなのしらくも(花白雲)				1			1
はなのつゆ(花露)		1					1
はなのとも(花友)	1						1
はなのやし(花林)				1			1
はなのへ(花上)		1					1
はなのゑ(花繪)				1			1
はなびら(花弁)				2			2
はなみ(葉並)				1			1
ははそ(柞)	1						1
はひえ(延枝)				1			1

植物  
九

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
はびろかしは(葉廣柏)	1	1			1		3
はびろさわらび(葉廣早蕨)			1				1
はままつ(濱松)				1			1
はまをぎ(濱荻)	1						1
はやし(林)		1		1			2
ばら(薔薇)			2	1			3
ばらのあかはな(薔薇赤花)		1					1
ばらのか(薔薇香)				1			1
ばらのはな(薔薇花)		1		2			3
ばらのめ(薔薇芽)		1		1			2
はり(榛)		2					2
はり(針)…とげ				1			1
はりのき(榛木)		1					1
はるくさ(春草)	1						1
はるはな(春花)			1	1			2
ひあふぎのはな(檜扇花)			1				1
ひとえ(一枝)		1					1
ひとえだ(一枝)	1	2		1			4
ひとへざくら(一重櫻)				1			1
ひとむらあやめ(一群菖蒲)		1					1
ひとむらすすき(一群薄)		1					1
ひともとやなぎ(一本柳)		1					1
ひのき(檜)				1			1
ひのきば(檜葉)			1				1
ひのきやま(檜木山)		1					1
びは(枇杷)				1			1
びはのこなへ(枇杷小苗)		1					1
びはのつぼみ(枇杷蕾)			1				1
ひめまつ(姫松)	1						1
ひめゆりのはな(姫百合花)			1				1
ひもも(緋桃)			1				1
ひやくにちさう(百日草)		1					1
ひるがほ(晝顔)		1					1
ひるてるぐさ(晝照草)		1	1				2
ふきのはな(薔花)				1			1
ふし(節)	1						1
ふしのま(節間)	1						1
ふたば(二葉)	1	1					2
ふぢ(藤)		2		8	3		13
ふぢなみ(藤波)				5	4		9
ふぢなみのはな(藤波花)				5	1		6
ふぢのうた(藤歌)					1		1
ふぢのすゑはな(藤末花)				2			2
ふぢのはな(藤花)				4			4
ふぢのはなぶさ(藤花房)				2	3		5
ふとえだ(太枝)				1			1
ふゆがれすすき(冬枯芒)		1					1
ふよう(芙蓉)			1				1
ふるえのき(古榎)		1					1

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ふるくさのね(古草根)		1					1
ふるすぎ(古杉)				1			1
ふるは(古葉)	1						1
ふるはぎ(古萩)		1					1
ふるはな(古花)				1			1
ふるやなぎ(古柳)		1					1
へそ(臍)		1					1
べにたけ(紅蕈)		1					1
ほ(穂)		2					2
ぼけ(木瓜)		1					1
ぼたん(牡丹)		1	2	9	7		19
ぼたんのつぼみ(牡丹蕾)				1			1
ぼたんのはな(牡丹花)		1	6	7	9		23
ほつえ(上枝)				2			2
ほむぎ(穂麥)		1					1
まこも(真菰)		1					1
まこもがくれ(真菰隠)	1						1
まつ(松)	5	6	5	4	2		22
まつがえ(松枝)	1			4	1		6
まつかげ(松蔭)	1						1
まつのあらし(松嵐)		1					1
まつのえ(松枝)	1						1
まつのき(松木)				1			1
まつのこかげ(松木陰)				2			2
まつのこずゑ(松木末・松梢)	2		3	1			6
まつのこのま(松木間)				2			2
まつのしたかげ(松下陰)	1	1					2
まつのしたかげ(松下風)	1						1
まつのしたみち(松下道)	1						1
まつのね(松根)	1						1
まつのは(松葉)				6			6
まつのはごと(松葉毎)				1			1
まつのはやし(松林)				1			1
まつのよはひ(松齡)	1						1
まつば(松葉)		2	1				3
まつばがだに(松葉谷)				1			1
まつばのはり(松葉針)				1			1
まばらしらうめ(疎白梅)				1			1
まめ(豆)				2			2
み(實)	1	1	1	2			5
みそはぎのはな(禊萩花)				1			1
みちしば(道芝)	1						1
みつば(三葉)	1			1			1
みどり(緑)…新芽		1					1
みどりのかげ(緑蔭)				1			1
みもとまつ(三本松)					1		1
みやまぎ(深山木)		1					1
みるめ(海松)	1						1
むぎ(麥)	2	7		2			11

植物	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
むぎのは(麦葉)		1					1
むぎのはたけ(麦畠)		1					1
むぎばた(麦畑)		1					1
むぎふ(麦生)			1	1			2
むぐらふ(菰生)		1					1
むらはぎ(群萩)	1						1
め(芽)		3		2			5
めだち(芽立)					1		1
も(藻)	1						1
もみ(樅)		1					1
もみぢ(紅葉)	6	3	4	1			14
もみちがだに(紅葉谷)			1				1
もみちのえだ(紅葉枝)			1				1
もみちのこずゑ(紅葉梢)			1				1
もみちのにしき(紅葉錦)	1						1
もみちば(紅葉葉)	1			1			2
もみのこずゑ(樅梢)	1						1
もみのしたかげ(樅下陰)		1					1
もも(桃)	1	8	2	1			12
ももくさ(百草)	1			1			2
ももすみれ(百葎)						1	1
もものしたかげ(桃下陰)		1					1
もものしたみち(桃下道)	1						1
もものはな(桃花)		5					5
もものはやし(桃林)		1		1			2
もものはな(百花)				1			1
もり(森・杜)	5	7	6	17			35
もりのしたみち(森下道)		1		2			3
もりのへ(森上)			1	2			3
もろえだ(諸枝)					1		1
やせわらび(瘦蕨)			1				1
やなかのもり(谷中森)		2		1			3
やなぎ(柳)	1	10	4	5			20
やなぎかげ(柳陰)		1					1
やなぎのえだ(柳枝)			2				2
やぶかうじ(藪柑子)				1			1
やぶかげ(藪陰)		1					1
やまざくら(山櫻)		1					1
やまざくらばな(山桜花)	1						1
やまとなでしこ(大和撫子)	1						1
やまとのいも(大和芋)						1	1
やまぶき(山吹)	4	1	1	4	1	1	12
やまぶきのうた(山吹歌)					1		1
やまぶきのはな(山吹花)	2	2		2	11		17
ゆふがほ(夕顔)	1	2			2		5
ゆふがほのなへ(夕顔苗)		1					1
ゆり(百合)			2				2
ゆりのはな(百合花)			2				2
よざくら(夜櫻)	1						1

植物  
十二

[illegible]



天文	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかほし(明星)		1					1
あきかぜ(秋風)	5	5	1	2			13
あきのはつかぜ(秋初風)	1	5		1			7
あきのひ(秋日)		1					1
あきのみそら(秋御空)			1				1
あきのよのつき(秋夜月)	1						1
あきばれ(秋晴)		1					1
あさあらし(朝嵐)		1					1
あさかげ(朝陰)			1				1
あさかぜ(朝風)		1					1
あさぎり(朝霧)	1						1
あさぞら(朝空)				1			1
あさつゆ(朝露)			1				1
あさばれ(朝晴)			1				1
あさひ(旭・朝日)	4	3	2	2			11
あさひご(朝日子)				1			1
あしまかくれ(蘆間隠)	1						1
あたごおろし(愛宕嵐)		1					1
あまぐも(天雲)				1			1
あまだれ(雨垂)					1		1
あまつ(天津)	1						1
あまつそら(天空)	1						1
あまつひかげ(天津日影)	1						1
あまのがは(天川)		2	1				3
あめ(雨)	11	12	5	20	8		56
あめ(天)			2	2			4
あめあがり(雨上)		1					1
あめつち(天地)		1		4	1		6
あらし(嵐)	4	1	2	2			10
あられ(霰)	2	1		1			4
ありあけのつき(有明月)	5						5
あをぞら(青空)		1	1	1			3
いかづち(雷)		1		1			2
いしかげ(石陰)				1			1
いとゆふ(絲遊)		1					1
いなづま(稲妻)	1	3					4
いふきおろし(息吹嵐)						1	1
いりひ(入日)	1	2					3
うしかひぼし(牛飼星)				1			1
うすいろぐも(薄色雲)				1			1
うすぐもり(薄雲)				1			1
うすつき(薄月)				1			1
うすつきのかさ(薄月暈)				1			1
うすつきよ(薄月夜)	1	2		1			4
うすはなぐもり(薄花曇)				1			1
うへのおろし(上野嵐)		1					1
おきつかぜ(沖風)		1					1
おきつなみかぜ(沖浪風)	1						1

天文	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
おくつゆの(置露)				3			3
おぼぞら(大空)	1						1
おぼろづき(朧月)	1						1
おぼろづきよ(朧月夜)				1			1
おぼろよ(朧夜)		1					1
かげ(陰・影)	10	7	2	6			10
かげ(影)	1	4	1	5			11
かげろひ(陽炎・蜻蛉)				2			2
かすみ(霞)	5	1	1				7
かすみのきぬ(霞衣)	1						1
かすみのころも(霞衣)	1						1
かすみのそこ(霞底)	1						1
かぜ(風)	32	27	4	19		1	83
かぜのいろ(風色)	1						1
かぜのおと(風音)		2					2
かぜのみや(風宮)		1					1
かたやまかげ(片山陰)		1	1				2
かはかぜ(川風)	1						1
かみあめ(神雨)				2			2
かみかぜ(神風)		2					2
かみなり(神鳴)		1					1
からやまおろし(枯山風)	2						2
きたかぜ(北風)		1				1	2
きたやまおろし(北山風)			1				1
きのかげ(木影)				1			1
きり(霧)	5			1			6
くさがくれ(草間隠)	1						1
くさむらがくれ(草群隠)	1						1
くも(雲)	13	9	1	3			26
くものかけはし(雲梯)			1				1
くものへ(雲上)		1					1
くものみね(雲峰)		7					7
くものみねのへ(雲峰上)		1					1
くもま(雲間)	1	1					2
くもり(曇り)				1	1		2
くもゐ(雲井)	1	1					2
くもゐ(雲井)…雲	1			1			2
くろくも(黒雲)		1					1
こがくれ(木隠)		1					1
こかげ(木陰)	2			6			8
こがさくれ(小傘隠)					1		1
こがらし(木枯)	3			1			4
こがらしのかぜ(木枯風)	1						1
こぐさくれ(小草隠)		1					1
こさめ(小雨)	1	1		1			3
こじまくれ(小嶋隠)	1						1
こちかぜ(東風)		1					1
このしたかげ(木下陰)	2						2
さくらぐもり(櫻曇)				1			1

天文	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
さくらのあめ(櫻雨)				2			2
さみだれ(五月雨)	12	12		7			31
さみだれのくも(五月雨雲)		1					1
しうん(紫雲)		1					1
しぐれ(時雨)	1		4				5
しぐれのあめ(時雨雨)			1				1
したかげ(下陰・下蔭)	2	7		1	1		11
したかげ(下風)		2		1			3
したつゆ(下露)	2						2
しづく(雫)	1	1	1	3			6
しのつくあめ(篠突雨)	1			1			2
しも(霜)	4	3	3	1		1	12
しもどけ(霜解)				1			1
しもばしら(霜柱)		1					1
しゅんぷう(春風)		1					1
しよろ(松露)				2			2
しらくも(白雲)	5	1		2			8
しらつゆ(白露)	2			4			6
しらゆき(白雪)	6			1			7
しんによのつき(眞如月)		1					1
すきかげ(透影)				1			1
そでのつゆ(袖の露)	1						1
そら(空)	18	16	7	8			49
そらのけぶり(空煙)				1			1
そらのまなか(空真中)			1				1
たびのそら(旅空)	1						1
たまあられ(玉霰)	1						1
ちつゆ(千露)				1			1
つき(月)	35	22	15	15	1		88
つきあかり(月明)		1					1
つきかげ(月影)	7		1	1			9
つきのおもて(月面)	1	1					2
つきのかけ(月影)	3						3
つきのひかり(月光)	2		2				4
つきのみやこ(月都)		1					1
つきひととおこ(月人男)				1			1
つきやどる(月宿)	1						1
つきよ(月夜)		1	1	6			8
つくばねおろし(筑波根風)		1					1
つゆ(梅雨)		1					1
つゆ(露)	8	2	2	5			17
つゆのしらたま(露白玉)				1			1
つゆのたま(露玉)	1						1
つゆばれ(梅雨晴)			1				1
てんき(天氣)			1				1
ながあめ(長雨)				1			1
なかぞら(中空)	1						1
なつぐも(夏雲)		1					1
なつぐものみね(夏雲峰)		1					1

天文	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
なつのつき(夏月)			1				1
なつのよのつき(夏夜月)			1				1
なのはなぐもり(菜花曇)				1			1
なみかぜ(波風)	1						1
なみだのつゆ(涙露)	1						1
なるかみ(鳴神)		8					8
にじ(虹)	1						1
にしかぜ(西風)	1	2					3
ねおろし(根風)	1	1					2
のわき(野分)		5	1	1			7
のわきのかぜ(野分風)		1					1
はがくれ(葉隠)	2	2			1		5
はかげ(葉陰)	1						1
はたおりひめ(機織姫)				1			1
はつかのつき(二十日月)	2						2
はつひ(初日)			1				1
はなのしづく(花雪)	1			2			3
はなのしらくも(花白雲)				1			1
はなのつゆ(花露)		1					1
ははぼし(母星)				1			1
はるがすみ(春霞)			1				1
はるかぜ(春風)	4	4	2				10
はるさめ(春雨)	3	11	3	7	3		27
はるのあめ(春雨)	1			1			2
はるのつき(春月)	1						1
はるのひ(春日)				1			1
はるのよのつき(春夜月)		3		1			4
はるひ(春日)		1					1
はれ(晴)	1	1	7				9
はれま(晴間)	2						2
ひ(日)	3	15	3	1	2	1	25
ひえやまおろし(比枝山嵐)		1					1
ひかげ(日影)	1						1
ひがしかぜ(東風)				1			1
ひでり(旱)				1			1
ひなた(日向)		2	1				3
ひむかひ(日向)				1			1
ひよう(雹)				1			1
ひより(日和)			4				4
ひよりかぜ(日和風)				1			1
ふぶき(吹雪)		2					2
ふゆのひ(冬日)				1			1
ほくと(北斗)				1			1
ほし(星)	7	1	1	8			17
ほしあひ(星合)		1					1
ほしのみやこ(星都)		1		1			2
ほしのをとめ(星少女)				1			1
まこみがくれ(真菰隠)	1						1
まつかげ(松蔭)	1						1

天文	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
まつかぜ(松風)	4						4
まつのあらし(松嵐)		1					1
まつのしたかぜ(松下風)	1						1
まひむかひ(眞日向)		1					1
みかづき(三日月)		1	1	1			3
みそら(御空・美空)				3			3
みづみのつき(水海月)		1					1
みどりのかげ(緑蔭)				1			1
みなみかぜ(南風)		1					1
みゆき(深雪)		1					1
むらさきのくも(紫雲)		1					1
むらさめ(村雨)	2	2	1	2			7
むらしぐれ(叢時雨)	1						1
めうぎおろし(妙義嵐)	1						1
もちづき(望月)			1				1
もちのよ(望夜)		1					1
もや(霧)		1					1
やなぎかげ(柳陰)		1					1
やぶかげ(藪陰)		1					1
やまおろし(山嵐)	1						1
やまおろしのかぜ(山嵐風)			1				1
やまかげ(山陰)		3	1	4			8
やまかげ(山影)	1						1
やまかぜ(山風)	1						1
ゆき(雪)	20	14	2	12		2	50
ゆきなだれ(雪雪崩)		1					1
ゆきのなか(雪中)				1			1
ゆきのみやま(雪深山)		1					1
ゆきもよひ(雪催)	1						1
ゆふがすみ(夕霞)		1					1
ゆふかぜ(夕風)	1	3		1			5
ゆふぐもり(夕曇)				1			1
ゆふだち(夕立)	6	7	1				14
ゆふだちのあめ(夕立雨)	1	3					4
ゆふだちのくも(夕立雲)	1						1
ゆふづき(夕月)		1					1
ゆふづつ(夕星)		1	1				2
ゆふばへ(夕榮)		1		1			2
ゆふひ(夕日)		3					3
ゆふひかげ(夕日影)		2		1			3
ゆふべのかぜ(夕風)	1						1
よあらし(夜嵐)		2		1			3
よこひ(横日)			1				1
よぞら(夜空)			1				1
よはのあらし(夜半嵐)	1						1
よばひぼし(夜這星)	1						1
わかばかくれ(若葉隠)		1					1
わかばかげ(若葉陰)		1					1

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あかぎのやま(赤城山)	1						1
あかさか(赤阪)		1					1
あかしのうみ(明石海)	1						1
あかしのうら(明石浦)	1						1
あかつち(赤土)			1				1
あかばね(赤羽根)						8	8
あき(安芸)	1						1
あきのた(秋田)		1					1
あきば(秋葉)	2						2
あげしほ(上汐)		2					2
あさくさ(浅草)	2	1		1			4
あさくさがは(浅草川)		1					1
あさせ(浅瀬)		1	1				2
あさちがはら(浅茅原)	1						1
あさやま(浅山)		1					1
あしがら(足柄)				1			1
あしのみづうみ(蘆ノ水海・蘆ノ湖)		1					1
あすか(飛鳥)		1					1
あすかやま(飛鳥山)	1						1
あぜ(畔)		2					2
あたごもり(愛宕森)				2			2
あだたら(安達太良)					1		1
あづまぢ(東路)				2			2
あつもりづか(敦盛塚)	1						1
あはぢ(淡路)		1					1
あはでのうら(栗手浦)	1						1
あはのくに(阿波國)				1			1
あふさか(逢坂)	1						1
あふさかやま(逢阪山)	1						1
あふみ(近江)						1	1
あふみがた(近江潟)	1						1
あふみぢ(近江路)		1					1
あまがさと(蟹里)		1					1
あまつかみ(天神)		1					1
あまつみかみ(天御神)		1					1
あまのかはら(天河原)	2						2
あむーる(アムール)				1			1
あめつち(天地)		1		4	1		6
あめのかみ(天神)		1					1
あめりか(アメリカ)			1				1
あやせがは(綾瀬川)	1						1
あらいそ(荒磯)		3		1			4
あらいそへた(荒磯端)				1			1
あらうみ(荒海)	1						1
あらかは(荒川)		1					1
あらさは(荒澤)	1						1
あらつち(粗土)			1				1
あらはた(荒畑)			1				1

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ありそへ(荒磯邊)			1	1			2
あわ(泡)	3						3
あをうなばら(青海原)	1	1					2
あをがきやま(青垣山)			1				1
あをた(青田)		1					1
あをに(青土・青丹)				1			1
あをやま(青山)		1	1				2
あをやま(青山)…地名		1					1
いかほ(伊香保)		1					1
いくさか(幾坂)	1						1
いけ(池)…自然の池	2	1	1	1			5
いけのべ(池邊)				1			1
いこく(異國)						1	1
いささがは(細小川)	1						1
いさには(伊佐庭)		1					1
いし(石)	1	2	2	1			6
いしかげ(石陰)				1			1
いしづちのやま(石鎚山)		1					1
いしのとりゐ(石鳥居)		1		1			2
いしぼり(石壕)		1					1
いせ(伊勢)		1					1
いせのうらわ(伊勢浦廻)	1						1
いせのみやしろ(伊勢御社)		1					1
いそ(磯)	5		2	1			8
いそべ(磯邊)				1			1
いそわ(磯回)		1					1
いち(市)		6		2		1	9
いちかは(市川)				1			1
いちかはのさと(市川里)		1					1
いちぢ(市路)				1			1
いちなか(市中)		2	1				3
いちをなす(市成)		1					1
いづ(伊豆)	1						1
いつくしま(巖島)	2						2
いづのうみ(伊豆海)	1						1
いづのをんせん(伊豆温泉)			1				1
いづみ(泉)	1						1
いづも(出雲)			1				1
いでゆ(出湯)	2		2				4
いなむらがさき(稲村崎)				1			1
いは(岩)	5	2		1			8
いはがき(岩垣)				1			1
いはて(岩手)			1		3		4
いはてのせき(岩手關)					1		1
いはのへ(岩上)		1	1	1			3
いはほ(巖)	2	1					3
いはま(岩間)		1					1
いはや(岩屋・窟)			1	1			2
いもさか(芋阪)			1				1

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
いよのいでゆ(伊豫出湯)	1			1			2
いよのくに(伊豫國)		1					1
いよのふたな(伊豫二名)				2			2
いよのゆ(伊豫湯)		1					1
うしじま(牛島)	2			1			3
うしほ(潮)	2						2
うたかた(泡沫)	1						1
うち(宇治)	1						1
うちがは(宇治川)	1			2			3
うつしやま(寫山)	1						1
うなばら(海原)	3	3		3			9
うへの(上野)		5		4	1		10
うへののもり(上野森)		1	2	3			6
うへののやま(上野山)			1	2			3
うへののをか(上野岡)				1			1
うへのやま(上野山)				2			2
うへのろ(上野)				1			1
うまやぢ(驛路)		1		1			2
うみ(海)	11	3	4	2		1	21
うみづら(海面)	1						1
うみのそこ(海底)			1				1
うみのへ(海上)		1					1
うみのまうへ(海眞上)	1						1
うみび(海傍)				1			1
うみべ(海邊)		1					1
うめのはやし(梅林)				3			3
うめばやし(梅林)			1				1
うものはたけ(芋畠)			1				1
うら(浦)	1						1
うらなみ(浦波)	1	2		1			4
うらはた(裏畑)		1					1
うらまち(裏町)				1			1
うらみ()…滝の名前	1						1
うれしのもり(嬉森)	1						1
え(江)				1			1
えぞ(蝦夷)	1	1					2
えぞのひと(蝦夷人)		1					1
えでんのその(エデン園)			1				1
えど(江戸)		1					1
えどのひな(江戸雛)		1					1
えどのみやこ(江戸都)				1			1
えのかみ(江上)		1					1
えのしま(江島)	1			1			2
えぶえれすと(エヴエレスト)		1					1
おき(沖)	3	1		2			6
おきつかい(沖權)	1						
おきつかぜ(沖風)		1					
おきつしらなみ(沖白波)	2						2
おきつなみかぜ(沖浪風)	1						1



地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
おきべ(沖邊)	1						1
おくつき(奥城)		1		3			4
おくつきどころ(奥津城所)				1			1
おくやま(奥山)		3					3
おくやまみち(奥山路)			1				1
おちやのみづ(御茶ノ水)		1					1
おとなしのかはべ(音無河辺)			1				1
おとほのたき(音羽滝)	1						
おどろ(棘)		1					1
おにかしま(鬼島)		1					1
おには(御庭)			1				1
おにはべ(御庭邊)			1				1
おほか(御墓)		2					2
おほいそ(大磯)		2	1				3
おほうちやま(大内山)	2						2
おほうなばら(大海原)	4	2					6
おほうみ(大海)	1						1
おほえど(大江戸)		1					1
おほぢ(大路)		1	2				3
おほなみ(大浪)				1			1
おほの(大野)		1					1
おほはら(大原)		2	1				3
おほみち(大道)		1					1
おほもり(大森)			1	1			2
おほやま(大山)			1				1
おほみがは(大井川)	3	1					4
おもひがは(思川)		1					1
おろしや(露西亜)		1					1
おんせん(温泉)		1					1
かいじやう(海上)	1						1
かうつけ(上野)		1	1				2
かうとう(江東)		1					1
かうべのさと(神戸里)	1						1
かがみがうら(鏡浦)	1						1
かぐやま(香具山)						1	1
がけ(崖)		1	1				2
かざしほ(風潮)				1			1
かさじま(笠島)		1					1
かすがの(春日野)			2				2
かすがやま(春日山)		1					1
かすみがせき(霞關)		1					1
かた(潟)	1						1
かたつち(堅土)				1			1
かたまち(片町)		1					1
かたやまかげ(片山陰)		1	1				2
かつしか(葛飾)				1			1
かづらぎ(葛城)				1			1
かどかは(門川)		3					3
かなすぎ(金杉)			1				1

地理  
四

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
かねのふち(鐘淵)	1						1
かは(川)	2	3	3	2			10
かはかみ(川上)		3					3
かはぐち(川口)…河口の意		1					1
かはなみ(川波)	3						3
かはのは(川端)	1						1
かはべ(河邊)	3	2					5
かはみづ(川水)	2	3					5
かはら(川原・河原)				1			1
かひ(甲斐)	1	1					2
かへりぢ(帰路)	1	1	1				3
かまくら(鎌倉)		1	3	7			11
かまぐらのさと(鎌倉里)				1			1
かまぐらやま(鎌倉山)				1			1
かまた(蒲田)				1			1
かみつけ(上毛)	1			1			2
かみつせ(上瀬)				1			1
かみつふさ(上總)						1	1
かみふさ(上總)						1	1
かみやがは(紙屋川)		1					1
かむだ(神田)		1					1
かめぬど(龜井戸・龜戸)				2	2		4
かもがは(鴨河・加茂川)		1		1			2
かものかはら(加茂河原)			1				1
かもん(加茂社)	1	1					2
かやば(茅場)				2		1	3
かよひち(通路)			1				1
から(唐)	1		6	5			12
からくに(唐國)			1	1			2
からのますらを(唐益荒男)				1			1
からのゑ(唐畫)				1			1
からのをとめ(唐少女)				1			1
からやま(唐山)	3			2			5
かれやま(枯山)		1					1
かん(漢)		1					1
かんりむ(寒林)		1					1
きい(紀伊)				1			1
きくうのその(鞠塙園)				1			1
きくち(菊池・聞地)…掛け言葉	1						1
きくなへばた(菊苗畑)		1					1
きし(岸)	2	1					3
きしべ(岸邊)				1			1
きそ(木曾)	2						2
きそのおくやま(木曾奥山)				1			1
きそのかけはし(木曾掛橋)	1	1					2
きそのみやま(木曾深山)		1		1			2
きそのやまざと(木曾山里)			1				1
きそやま(木曾山)		1		1			2
きたいんぢや(北印度)		1					1

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
きたえぞ(北蝦夷)				1			1
きたの(北野)		1					1
きたのみやこ(北都)			1				1
きねがは(木下川)				1			1
きのかは(黄河)		1					1
きび(吉備)				1			1
きびのくに(吉備國)				1			1
きみのくに(君國)		1					1
きむくわざん(金華山)		1					1
きむしう(金州)		1					1
きやうのひな(京雛)		1					1
きやうのみかど(京御門)					1		1
きよみがた(清見潟)		1					1
きよみづ(清水)	1						1
くさいち(草市)				1			1
くに(國)	3	11	3	1			18
くにざかひ(國境)			1				1
くにのと(國外)				1			1
くにのはじめ(國初)				1			1
くにのはしら(國柱)	1						1
くにのはやし(國林)				1			1
くにのまつり(國祭)				1			1
くにやま(國山)				1			1
くぬぎはら(橡原)		1					1
くぬち(國內)			1				1
くはのた(桑田)		1					1
くはのはやし(桑林)		2					2
くはばた(桑畑)			1				1
くぼた(窪田)		1					1
くりはら(栗原)		1					1
くろいし(黒石)				1			1
くろかみやま(黒髪山)			1				1
くろど(黒戸)				1			1
くわうが(黄河)		1					1
くわうや(曠野)		1					1
くわざん(華山)		1					1
ぐわりうばいのその(臥龍梅園)				1			1
けごんのたき(華嚴瀧)				1			1
こいけ(小池)		1					1
こいしみち(小石道)			1				1
こいそ(小磯)		1					1
こうち(小路)		1					1
こうめのさと(小梅里)	1						1
こうゑん(公園)			1				1
こがねのなみ(黄金波)	1						1
こがねゐ(小金井)				2			2
こくど(國土)			1				1
こけしみづ(苔清水)	1	1					2
ごごしま(興居島)	1						1

地理  
六

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
こさか(小坂)			1				1
こし(越)		1					1
こしちやま(越路山)	1						1
こじま(小嶋・小島)	1	1		1			3
こじまがくれ(小嶋隠)	1						1
こそん(孤村)		1					1
こつせん(元山)			1				1
こつれい(元嶺)			1				1
ごてんやま(御殿山)		1					1
こには(小庭)		1	3	1			5
こひぢ(戀路)	1						1
こひとじま(小人島)			1				1
こひのとほみち(戀遠道)			1				1
こひのみち(戀道)	4						4
こひのやま(戀山)	1						1
こひのやまち(戀山路)	3						3
こほり(氷)		3	2	1			6
こま(高麗)				2			2
こまがた(駒形)	1						1
こまがたのへ(駒形上)		1					1
こまち(小町)	1						1
こまつばら(小松原)			1				1
こみち(小道・小路)		5	2	2			9
こむら(小村)		1					1
こゆるぎ(小余綾)	1						1
ごんげんのもり(權現森)				1			1
さか(坂・阪)			3				3
さがみのうみ(相模海)	1						1
さがみのみ(相模海)			1				1
さき(崎)				1			1
さくらがを(桜岡)				2			2
さくらみのさと(櫻井里)	1						1
さざれいし(細石)				1			1
さと(里)	4	13	2	1	1		21
さとかは(里川)		2					2
さとのこ(里子)			1				1
さにはべ(狭庭邊)				4	2		6
さぬき(讃岐)	1	1					2
さは(澤)	1	1					2
さむざき(三崎)		1					1
さむじふろくほう(三十六峰)		1					1
さむでう(三條)			1				1
さよのなかやま(佐夜中山)	1						1
しがのうら(志賀浦)	1						1
しきしま(敷島)	1						1
しきながはま(敷名濱)				2			2
しげやま(繁山)		1					1
しこくのさる(四國猿)		2					2
したみち(下道)		1	1	1			3

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
したゆくみづ(下行水)	1						1
しちじふにたき(七十二瀧)				1			1
しづく(雫)	1						1
しでうがはら(四條河原)		1	1				2
しな(支那)			1				1
しながは(品川)		1		1			2
しなの(信濃)	1			1			2
しなのぢ(信濃路)			1				1
しなののくに(信濃國)				1			1
しのばず(不忍)…不忍池		1	1				2
しのばずのいけ(不忍池)	2	1					3
しのぶがをか(忍ヶ岡)		2	1	2			5
しのぶのさと(忍里)	1						1
しのぶのをか(忍岡)	1						1
しばやま(芝山)	1						1
しば(潮・汐)		4				1	5
しばあみどころ(潮浴處)		3					3
しばぢ(潮路・汐路)				1			1
しばのへ(汐上)				1			1
しばをやく(鹽焼)				1			1
しま(嶋・島)	1	1	1	1			4
しまのうらわ(島浦曲)			1				1
しまべ(島邊)				1			1
しまやま(島山・嶋山)	2	1					3
しみづ(清水)	1						1
しめぢがはら(標茅原)			1				1
しもつけ(下野)	1	1	1	1			4
しもつせ(下瀬)				1			1
しもふさ(下總)		1		1	4		6
じやうか(城下)		1					1
じやうがい(城外)		1					1
じやうちう(城中)		1					1
しやくやくのその(芍薬園)		1					1
しやんはい(上海)		1					1
しゆんすい(春水)		1					1
しらいとのたき(白糸瀧)	1						1
しらかは(白河)	1						1
しらかはのせき(白河關)	1	1					2
しらさか(白坂)				1			1
しらすな(白砂)		1					1
しらなみ(白浪・白波)	3	1					4
しん(晋)		1					1
しんがぼーる(シンガポール)				1			1
しんたん(震旦)		1					1
しんわい(秦淮)			1				1
すえす(スエス)				1			1
すがはら(菅原)			1				1
すがも(巢鴨)				1			1
すぎのはやし(杉林)			1	2			3

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
すぎやま(杉山)		1					1
すさき(洲崎)	1			1			2
すずかのやま(鈴鹿山)	1						1
すずみどころ(涼処)		1					1
すそだ(裾田)		1					1
すその(裾野)				1			1
すそのがはら(裾野原)			1				1
すそやま(裾山)		1	1				2
すそわ(裾回)		1					1
すだ(隅田)	2						2
すな(砂)		1		1			2
すは(諏訪)		2					2
すばにあ(スパニア)				1			1
すま(須磨)	1	3	1	1			6
すまのうみ(須磨海)	1						1
すまのうら(須磨浦)	7	3					10
すまのうらわ(須磨浦廻)		2					2
すみだ(隅田・墨田・角田)	4	1		1			6
すみだがは(隅田川・墨田川・角田川)	7	2		1			10
すみだがはら(隅田河原)	1						1
すみだのかは(隅田川・墨田川・角田川)	5	2					7
すみのえ(住江)	1						1
すみよし(住吉)		1		1			2
すみよしのみや(住吉宮)		1					1
するがぢ(駿河路)				1			1
すゑのまつやま(末松山)		1	1				2
せ(瀬)		1					1
せきぢ(關路)	2						2
せきへき(赤壁)			1				1
せた(瀬田)		2					2
せたのながはし(瀬田長橋)	1						1
せつしやうせき(殺生石)		1					1
せと(瀬戸)		1					1
せとはた(背戸畑)		1					1
その(園)		2	1	6			9
そのふ(園生)	2						2
そばのはたけ(蕎麥畠)				1			1
そはみち(岨道)		1					1
た(田)		1					1
だうわんやまのへ(道灌山上)			1				1
だうご(道後)				1			1
たかさご(高砂)	2		2	1			5
たかさご(高砂)…台湾				1			1
たかさごじま(高砂島)…台湾				1			1
たかはま(高濱)	1			1			2
たかを(高尾)	1						1
たき(瀧)	6	2		6			14
たきがは(滝川)	1						1
たきつせ(瀧瀬)				1			1

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
たつのみやこ(龍都)			1				1
たてかは(立川・堅川)				7			7
たどつ(多度津)	1						1
たなか(田中)			1				1
たに(谷)	2						2
たにがは(谷川)			1				1
たにま(谷間)	2						2
たびち(旅路)	2		1	1			4
たま(多摩)		1	1				2
たまがは(玉河・玉川)	1	1		1			3
たまみづ(玉水)				1			1
たみづ(田水)				1			1
たゐ(田居)		1					1
たゐなか(田井中)				2			2
ち(地)				1			1
ちがのしほがま(千賀鹽竈)		1				1	2
ちくぶしま(竹生嶋)	1						1
ちちぶ(秩父)	1						1
ちまた(巷・衢)	2	1		2			5
ちやうあん(長安)		1					1
ちやばたけ(茶臼)			1				1
ちよだのみや(千代田宮)				1			1
つか(塚)		1		1			2
つきがせ(月瀬)			1				1
つきのみやこ(月都)		1					1
つくば(筑波)	1		1				2
つくばね(筑波嶺)			1				1
つくばのやま(筑波山)		1					1
つち(土)		1	2	5			8
つちくれ(土塊)				1		1	2
つちやま(土山)	1						1
つづらをり(葛折)	1						1
つのくに(津國)			1				1
つぶて(礫)…小石		1					1
では(出羽)					1		1
てらしま(寺島)	1						1
てらしまむら(寺島村)		1					1
てん(天)				1			1
てんちく(天竺)		2					2
とうきやう(東京)		1					1
としまのをか(豊島岡)			1				1
とだ(戸田)		1					1
とだのわたし(戸田渡)		1					1
とつくに(外國)				2			2
となりのさと(隣里)		1					1
となりのむら(隣村)		1		1			2
とね(利根)		1					1
とねがは(利根川)		1					1
とほざと(遠里)	1			1			2

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
とほうすみ(遠海)				1			1
とほやま(遠山)	3	1					4
とみやま(富山)				1			1
とよあしはらのみづほのくに(豊葦原瑞穂國)		2					2
とりべのやま(鳥部山)		1					1
どろ(泥)			2				2
なかつくに(中國)		1					1
なかのさと(中郷)	1						1
なかはまのさと(中濱里)	1						1
なかみち(中道)		1					1
なぎさ(渚)	1						1
なすの(那須野)		1					1
なすののはら(那須野原)	2		1				3
なだ(灘)	1						1
なつの(夏野)	1			1			2
なつやま(夏山)	2			1			3
などころ(名所)		1		1			2
なには(難波)		1					1
なにはえ(浪速江)	1						1
なにはがた(難波潟)		1					1
なにはづ(浪速津)			1				1
なばた(菜畑)		1					1
なみ(波・浪)	8	8	1	6			23
なみかぜ(波風・浪風)	1						1
なみだがは(涙川)	1						1
なみたつ(波立・浪立)	3	1					4
なみだのかは(涙川)	1						1
なみち(波路)	1						1
なみのね(波音)	2						2
なみのへ(波上)	1						1
なみのも(波面)	1						1
なむたい(男體)	1						1
なめりのかは(滑川)				1			1
なら(奈良)			2	1			3
ならしののはら(習志野原)	1						1
ならのはやし(檜林)				1			1
ならのまち(奈良町)		1					1
ならのみかど(奈良御門)					1		1
ならのみやこ(奈良都)	2		1				3
ならばやし(檜林)				1			1
にごりえ(濁江)	1						1
には(庭)	8	19	22	25	4	2	80
にはたづみ(潦)				1			1
にはなか(庭中)			1	1			2
にはのうち(庭内)			1				1
にはのおもて(庭面)			1				1
にはのも(庭面)	1						1
にはもせ(庭面狭)	3	1					4
にひたかやま(新高山)		1		1			2



地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
にほん(日本)			1				1
によたい(女體)	1						1
にみのこほり(新居郡)			1				1
ね(峰・嶺)			1				1
ねぎし(根岸)		2		1			3
ねぎしのさと(根岸里)	2	3		2			7
ねぎばた(葱畑)				1			1
の(野)	1	10	3	5		1	20
のがは(野川)	1	1	2				4
のずゑ(野末)		2					2
のぢ(野路)	1			1			2
のなか(野中)				1			1
ののかは(野川)			2				2
ののすゑ(野末)		1					1
ののなか(野中)			1	1			2
ののみち(野道)	1	1		1			3
のべ(野邊)	1					1	2
のみち(野道)		1					1
のやま(野山)	1						1
のら(野良)		1					1
のをやく(野焼)		1					1
ば(場)		1					1
ばいゑん(梅園)		1		1			1
はか(墓)		2	2	1			5
はかのいし(墓石)			1				1
はかはら(墓原)		1		1			2
はかべ(墓邊)				1			1
はくさん(白山)		1					1
はくひよう(薄氷)			1				1
はこね(箱根)	1	2					3
はこねぢ(箱根路)		1					1
はこねのななゆ(箱根七湯)		1					1
はこねのやま(箱根山)		1					1
はた(畑)		6	1	1			8
はたけ(畑・畠)		1		1			2
はたのなか(畑中)		1					1
はたのへ(畑上)				1			1
はつせ(初瀬)	1		1				2
はなあやめだ(花菖蒲田)				1			1
はなの(花野)		2					2
はなのはやし(花林)				1			1
はにつち(埴土)				1			1
はにふ(埴生)			1				1
はま(濱)	1	1					2
はまのちどり(濱千鳥)	1						1
はまのまさご(濱眞砂)				1			1
はまびのみや(濱辺宮)				1			1
はまべ(濱邊)	1		1				2
はやし(林)		1		1			2

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
はやせ(早瀬)	1			1			2
はやま(端山)		1					1
はら(原)	1	1		1			3
はらなか(原中)		1					1
ばり(バリ)				1			1
ばりす(パリス)				1			1
はるなのやま(榛名山)		1					1
はるのの(春野)	2						2
はるのみづ(春水)		4					4
ばんこく(萬國)	1						1
ばんしう(播州)		1					1
ひうがのくに(日向國)			1				1
ひうがのみや(日向宮)			1				1
ひえ(比叡)				1			1
ひがしのうみ(東海)		1					1
ひとむら(一村)		1					1
ひな(鄙)		1	4	1			6
ひのきやま(檜木山)		1					1
ひのくに(火國)				1			1
ひのもと(日本)	6	5	1	5			17
びは(比巴)	1						1
びはこ(比巴湖)	1						1
ひまらや(ヒマラヤ)	1	1					2
ひら(比良)	1						1
ひりびん(ヒリピン)				1			1
ひろさは(廣澤)		1					1
ひろには(廣庭)				1			1
ひろば(廣場)			1				1
ふおるもさ(フオルモサ)				1			1
ふかがは(深川)	1						1
ふくらのおき(吹浦沖)	1						1
ふじ(富士・不盡)	6	8	1	1			16
ふじのうた(富士歌)		1					1
ふじのからうた(富士唐歌)		1					1
ふじのけぶり(富士煙)	1						1
ふじのたかね(富士高嶺)	4	1					5
ふじのね(富士嶺・不盡根)	4	3		3			10
ふじのゑ(富士畫)		1					1
ふじやま(富士山・不盡山)	3						3
ふたあら(二荒)		1		7			8
ふたあらはやま(二荒山)	1						1
ふたあらやま(二荒山)				1			1
ふたごはやま(二子山)	1	1					2
ふたら(二荒)		1		1			2
ふだらく(普陀落)		1					1
ふたらのやま(二荒山)		1					1
ふち(淵)		1	1	2			4
ぶつしつ(物質)	1						1
ふなぢ(船路)	2	1		1			4

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ふみど(踏所)				1			1
ふみどころ(踏所)				1			1
ふもと(麓)		1					1
ふゆた(冬田)		1					1
ふらんす(仏蘭西)			1	3			4
ふるいけ(古池)				1			1
ふるかは(古川)		1	2				3
ふるくに(古國)				1			1
ふるさと(故郷・古里)	8	9	3	3		2	25
ふるさは(古澤)		1					1
ふるぞの(古園)		2					2
ふるには(古庭)		3		1			3
へな(埴)			1				1
へなつち(粘土)			1				1
ほしのみやこ(星都)		1		1			2
ほそみち(細道)	1		1				2
ぼつ(渤)	1						1
ほんじやう(本庄)				1			1
まき(牧)		1					1
まきば(牧場)			1				1
まくずがはら(眞葛原)		1					1
まさご(眞砂)	1			1			2
まさごぢ(眞砂路)		1					1
ましみづ(眞清水)	2						2
まち(町)		1	1	1		1	4
まつしま(松島・松嶋)	4			1		1	6
まつち(待乳)	1	1					2
まつちのやま(待乳山)	1						1
まつちやま(待乳山)	1						1
まつのしたみち(松下道)	1						1
まつのはやし(松林)				1			1
まつばがだに(松葉谷)				1			1
まつばら(松原)		1	1				2
まつやま(松山)	3	1					4
まよひち(迷路)			1				1
まるのうち(丸内)			1				1
みあがた(御県)				1			1
みいけ(御池)				1			1
みかさのやま(三笠山)		1					1
みかはじま(三河島)		1					1
みかみやま(三上山)	1						1
みぎは(水際)				3			3
みくに(御國)	1			1			2
みさき(岬)	1						1
みささぎ(陵)			2				2
みぞ(溝)				1			1
みその(御園)		1					1
みそのふ(御園生)		2	2				4
みたに(深谷)				1			1

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
みち(路・道)	6	6	2	2	1	3	20
みちしほ(満潮)			1				1
みちのく(陸奥)	1		2		6	1	10
みちのべ(路邊)	2	7	3	4			16
みづ(水)	13	7	2	3		3	28
みつ(三津)	3						3
みづうみ(水海)		1					1
みづうみのつき(水海月)		1					1
みつがはま(三津濱)	1						1
みづのながれ(水流)			1				1
みづのへ(水上)		1	1				2
みづのも(水面)	1						1
みづべ(水邊)	1						1
みつまた(三叉)	1						1
みなかみ(水上)	4						4
みなと(港)	1						1
みなとがはべ(港川邊)			1				1
みなみのみ(南海)				1			1
みね(峯・峰)	4	5					9
みはか(御墓)				1			1
みはし(三橋)				1			1
みほ(三保)				1			1
みやこ(都・京)	7	11	2	4	1	1	26
みやこおぼち(都大路)		2					2
みやこぢ(都路)		2		1			3
みやこぢ(都地)	1						1
みやこはづれ(都外)			1				1
みやこべ(都邊)	1	5		3	1	1	11
みやざき(宮崎)			1				1
みやじま(宮嶋・宮島)		1	3				4
みやま(深山)	1	3					4
みやまち(深山路)	1	1					2
みよしの(三吉野)				1			1
みわ(三輪)				1			1
みんのひと(明人)				1			1
むかつを(向尾)				2			2
むかふじま(向島)	1	2					3
むぎのはたけ(麥畠)		1					1
むぎばた(麥畑)		1					1
むぎふ(麥生)			1				1
むぐらふ(律生)		1					1
むさし(武藏)		1					1
むさしの(武蔵野)	8	3	5	1			17
むさしののほら(武蔵野原)		2	1				3
むつ(陸奥)		1					1
むつのくに(陸奥國)				1			1
むつをか(陸岡)						1	1
むつをかむら(陸岡村)						1	1
むら(村)		4					4

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
むらつづき(村続)		1					1
むらのこ(村子)			1				1
めうぎ(妙義)	1						1
もがみ(最上)				1			1
もがみがは(最上川)	1						1
もしほ(藻塩・藻汐)	1	1					2
もとほり(元堀)				1			1
もみちがだに(紅葉谷)			1				1
もものしたみち(桃下道)	1						1
もものはやし(桃林)		1		1			2
もり(森・杜)	5	7	6	17			35
もりのしたみち(森下道)		1		2			3
もりのへ(森上)			1	2			3
もろこし(唐土)	1			5			6
もんごる(モンゴル)			1				1
やうすのかは(揚子川)				1			1
やうらうのたき(養老瀧)	1						1
やけつち(焼土)				1			1
やしほぢ(八汐路)				2			2
やしま(八洲)	1						1
やしまがた(八島潟)	1						1
やすらひどころ(休處)				1			1
やせ(八瀬)			1				1
やちまた(八衢)				1			1
やなか(谷中)		1					1
やなかち(谷中路)				1			1
やなかのもり(谷中森)		2		1			3
やなかのをか(谷中岡)				1			1
やへのしほぢ(八重潮路)	1	1					2
やへやま(八重山)			1				1
やま(山)	22	25	13	8	1	2	71
やまかゞ(山陰)		3	1	4			8
やまかゞ(山影)	1						1
やまがた(山形)				1			1
やまかは(山川)				2			2
やまごと(山毎)		1					1
やまざき(山崎)		1					1
やまざと(山里)	3	5	1				9
やましたみち(山下道)		1					1
やましろ(山城)		1					1
やまだがた(山田瀉)	1						1
やまぢ(山路)	3						3
やまと(大和)	1	1		2			4
やまとのくに(大和國)		1					1
やまなか(山中)		1					1
やまのいけ(山池)				1			1
やまのいただき(山頂)		1					1
やまのうへ(山上)	1						1
やまのおく(山奥)	2	1	2				5

地理	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
やまのかひ(山峡)		1					1
やまのは(山端)	4	2					6
やまのへ(山上)	1		1				2
やまのべ(山邊)				1			1
やまのみ(山井)				1			1
やまみち(山道)		1		1			2
やまもと(山下)	1	1					2
やまもとむら(山本村)		1					1
やまやま(山山)	3		1				4
ゆきげ(雪解)…雪解け水				1			1
ゆきのみやま(雪深山)		1					1
ゆだま(湯玉)			1				1
ゆふき(結城)					2		2
ゆふきのさと(結城里)					1		1
ゆふしほ(夕汐)		2					2
ゆふなみ(夕浪)		1					1
ゆふふじ(夕富士)		1					1
よこはま(横濱)			1				1
よしののやま(吉野山)				1			1
よしはら(吉原)		1	1	1			3
よどがは(淀川)		1					1
よもぎふ(蓬生)			1	3			4
よろひのわたし(鎧渡)		1					1
らくくわすいめん(落花水面)				1			1
らくくわうすい(落花流水)		1					1
らくやう(洛陽)		1					1
りやうごく(兩國)		2					2
れうとう(遼東)		2					2
ろざん(廬山)			1				1
ろし(路次)				1			1
ろぢ(路地)			1				1
わかのうち(和歌浦)	1						1
わかばのはら(若葉原)		1					1
わしのみやま(鷲御山)			1				1
わたつみ(海神)…海	1		1				2
わたらひ(度会)		1					1
わたり(渡)		3	1				4
みなか(田舎)		1					1
みなかぢ(田舎路)		1	1				2
をか(岡・陸)	1	2	3	1			7
かをぞひ(岡沿)		1					1
かのへ(岡上)			1	1			2
かのべ(岡邊)		1					1
かは(小河・小川)	1			1			2
かをべ(岡邊)	1		1				2
をがみ(尾上)	1						1
をぐらやま(小倉山)				1			1
をじまのうら(雄嶋浦)	1						1
をだ(小田)					1		1



飲食	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あけのこはいひ(赤強飯)				1			1
あさげ(朝餉)		1					1
あさちや(朝茶)				1			1
あつもの(羹)			1				1
あべかはもち(安倍川餅)			1				1
いちご(苺・覆盆子)				2			2
いも(芋)			1				1
いわし(鰯)			1				1
いわしのかしら(鰯頭)				1			1
うし(牛)			2	2			4
うしのち(牛乳)			1	1			2
うすちや(薄茶)				1			1
うづら(鶉)					1		1
うまさけ(旨酒)			1	1			2
うまち(旨乳)				1			1
うみのさち(海幸)		1					1
うり(瓜)		1					1
うを(魚)			1				1
えさ(餌)		1					1
えびざけ(蝦酒)				1			1
かき(柿)	4		3				7
かきのみ(柿實)	1						1
かしはのもちひ(柏餅)					2		2
かしはば(柏葉)…食材					4		4
かしはもち(柏餅)					3		3
かすてら(カステラ)				1			1
かたみ(片身)			1				1
かつをぶし(鯉節)			1				1
かて(糎)			1				1
かに(蟹)				1			1
から(豆腐糟)		1					1
からざけ(唐酒)				1			1
かれいひ(乾飯)		1					1
ぎうにく(牛肉)	1						1
きのみ(木實)		1					1
きのめ(木芽)				1			1
きびだんご(黍團子)		1					1
ぎをんばう(祇園坊)			1				1
くさもち(草餅)		1					1
くすり(薬)		3	1	1			5
くだもの(菓物)		1					1
ぐみのみ(茱萸實)…収穫されている		1					1
くもつ(供物)		1					1
くろめし(黒飯)				1			1
くわし(菓子)				1			1
ぐんば(軍馬)				1			1
こごめ(粉米)		1					1
こはめし(強飯/強飯)						1	1



飲食  
二

飲食	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
こほり(氷)			1	3			4
こほりのみづ(氷水)				1			1
こほりみづ(氷水)		1		1			2
こぼれな(零菜)		1					1
こめ(米)	1	1	1				3
こめのこ(米粉)						1	1
さかなのうへ(肴上)				1			1
さくらのもちひ(櫻餅)	1						1
さけ(酒)	1	7		2			10
ささ(酒)	1						1
さわらび(早蕨)				1			1
しほ(鹽)				1			1
しめぢ(占地)		1					1
しらうを(白魚)						1	1
しろざけ(白酒)		1					1
す(酢)						1	1
すずき(鱸)		1					1
たうきび(唐黍)		1					1
たけのこずし(筍鮓)				1			1
たこ(蛸)		2					2
たちばな(橘)					1		1
たづ(鶴)				1			1
たま(玉)…団子				1			1
たら(櫛)				1			1
たらきのめ(櫛木芽)					1		1
だんご(團子)			1	2			3
ちち(乳)		1		1			2
ちや(茶)		2	1	8			11
ちやのうた(茶歌)				1			1
ちやのわん(茶碗)						1	1
ちやめし(茶飯)			1				1
つくいも(仏薯)						1	1
つくづくし(土筆)						2	2
とうふ(豆腐)	1	1					2
とそ(屠蘇)				2			2
どちやう(泥鰌)			2				2
とよみき(豊御酒)				1			1
とろろ(薯蕷)						1	1
なし(梨)			2				2
なすび(茄子)		1					1
なつだいたい(夏橙)				1			1
なます(膾)		1					1
なみのはな(浪花)…食塩				1			1
にへ(饗)				1			1
ねぎ(葱)			1				1
はこべ(繁縷)			1				1
はこめし(筍飯)				1			1
はすゑ(葉末)						1	1
はたのさもの(鱸狭物)			1				1

飲食  
三[illegible]

色彩	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あい(藍)				1			1
あか(赤)				1			1
あかがみ(赤紙)				1			1
あかぞめ(赤染)				1			1
あかだま(赤玉)				1			1
あかつち(赤土)			1				1
あかつばき(赤椿)						1	1
あかばら(赤薔薇)				1			1
あかふ(赤斑)				1			1
あかも(赤裳)			1				1
あかゆりのはな(赤百合花)			1				1
あけのいがき(朱忌垣)		1					1
あけのおばしま(朱欄)				1			1
あけのこはいひ(赤強飯)				1			1
あしげ(蘆毛)			1				1
あを(青)				1			1
あをいろ(青色)				1			1
あをうなばら(青海原)	1	1					2
あをかき(青垣)				1			1
あをかきやま(青垣山)			1				1
あをがへる(青蛙)		1					1
あをくさ(青草)				1			1
あをけぶり(青煙)				1			1
あをぞら(青空)		1	1	1			3
あをた(青田)		1					1
あをだたみ(青疊)				2			2
あをどり(青鳥)				1			1
あをな(青菜)				3			3
あをなのはな(青菜花)				1			1
あをに(青土・青丹)				1			1
あをば(青葉)	2	1					3
あをばへ(青蠅)		1					1
あをほこ(青銚)				1			1
あをまつ(青松)				1			1
あをむぎ(青麥)		1					1
あをめ(青芽)				1			1
あをやぎ(青柳)		2		1			3
あをやま(青山)		1	1				1
いづもあをだま(出雲青玉)				1			1
いろ(色)	5		2	5	1	3	16
いろあす(色褪)				1			1
いろいろ(色色)	1			1			2
いろそふ(色添)	1						1
いろづく(色付)	1						1
いろどる(彩)				1			1
いろなし(色無)			1				1
いろふかし(色深)					1		1
うすいろ(薄色)		1		2			3

色彩	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
うすいろぐも(薄色雲)				1			1
うすくれなゐ(薄紅)				1			1
うすこうばい(薄紅梅)		1					1
うすむらさき(薄紫)		1		1			2
うすもみぢ(薄紅葉)	1						1
うめのあをば(梅青葉)		1					1
おきつしらなみ(沖白波)	2						2
き(黄)		1					1
きいろ(黄色)					1	1	2
きぎく(黄菊)		1		2			3
きだま(黄玉)				1			1
きむ(金)			1				1
きむぢ(金地)		1					1
ぎんぢ(銀地)		1					1
ぎんでい(銀泥)…絵の具			1				1
くれなゐ(紅)	3	10	8	18	5	4	48
くれなゐのいろ(紅色)				1		1	2
くれなゐのは(紅葉)			1				1
くろいし(黒石)				1			1
くろかみ(黒髪)	1			1			2
くろくび(黒首)	1						1
くろくも(黒雲)		1					1
くろげ(黒毛)				1			1
くろこ(黒子)		1					1
くろこま(黒駒)	1	1					2
こうばい(紅梅)		14					14
こがね(黄金)	2	2		3			7
こがねのたち(黄金太刀)		1					1
こがねのなみ(黄金波)	1						1
こがねはな(黄金花)	2						2
こきむらさき(濃紫)				1			1
しうん(紫雲)		1					1
しぶいろ(澁色)				1			1
しらいと(白絲)				1			1
しらいと(白絲瀧)	1						1
しらうめ(白梅)	3	1					4
しらうを(白魚)		2					2
しらぎく(白菊)	1	1		1			3
しらくも(白雲)	5	1		2			8
しらすな(白砂)		1					1
しらたま(白玉)	2			11			13
しらつゆ(白露)	2			4			6
しらなみ(白波・白浪)	3	1					4
しらぬの(白布)		1					1
しらひげ(白鬚)	1	1		1			3
しらふ(白斑)		1		1			2
しらほ(白帆)	6	4	1	1			12
しらみ(白)				1			1
しらも(白裳)		1					1

色彩	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
しらゆき(白雪)	6			1			7
しらゆふ(白木綿)	1			1			2
しらゆりのはな(白百合花)			1				1
しろ(白)		1					1
しろがね(銀・白金)		1		1	1		3
しろかめ(白瓶)				1			1
しろたへ(白妙)					1		1
しろばら(白薔薇)				1			1
すいれん(翠簾)		1					1
すみ(墨)				1			1
すみぐろ(墨黒)					1		1
すみぞめ(墨染)	1						1
せいせい(青青)		1					1
ちちのいろ(乳色)				1			1
つきげ(月毛)		2	1				3
つゆのしらたま(露白玉)				1			1
とばつつ(トバツツ)				1			1
に(丹)				1			1
にぬり(丹塗)				1			1
にびいろ(鈍色)		1					1
はくぎん(白銀)				1			1
はくばい(白梅)		1					1
はなのしらくも(花白雲)				1			1
はなむらさき(花紫)						1	1
ばらのあかはな(薔薇赤花)		1					1
ひ(緋)		1					1
ひといろ(一色)	1						1
ひもも(緋桃)			1				1
ふかみどり(深緑)	1						1
ぶちいぬ(斑犬)		1					1
べに(紅)			1				1
まあか(眞赤)				1			1
まぐろ(眞黒)				1			1
ましらふ(眞白斑)				1			1
ましろ(眞白)		1		3			4
まそほ(眞緒)…赤色				1			1
まつしろ(眞白)		2					2
まばらしらうめ(疎白梅)				1			1
みついろきぬ(水色衣)				1			1
みどり(緑)	4	4	1	1	1		11
みどりたつ(緑立)		1		1			2
みどりのかげ(緑蔭)				1			1
むらさき(紫)	2	3	2	6	3	2	18
むらさきのくも(紫雲)		1					1
もえぎ(萌黄)				1			1
もみち(紅葉)	6	3	4	1			14
もみちがだに(紅葉谷)			1				1
もみちのえだ(紅葉枝)			1				1
もみちのこずゑ(紅葉梢)			1				1

[illegible]

色彩  
四

肢 体	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あげまき(総角)		1					1
あし(足)		5	1	3	1		10
あしげ(茸毛)			1				1
あしたつ(足立)		8					8
あしなへ(足癢)		2	3	2			7
あしのした(足下)	1						1
あせ(汗)		1					1
あたま(頭)	1	1	1	2			5
あたまのうへ(頭上)		1					1
いたづき(病・労)	1	1	3	4	2		10
いのち(命)	1	7	3	3	2		16
いれずみ(入墨)			1				1
いわしのかしら(鰯頭)				1			1
うきみ(憂身)				1			1
うしのしり(牛尻)		1					1
うつしめ(映目)				1			1
うつろあたま(虚頭)				1			1
うなじね(項根)		1					1
うまのを(馬尾)		1					1
うろくづ(鱗)			1				1
うをのめ(魚目)			1				1
おいのみ(老身)	1						1
おとがひ(頤)			2				2
おのがみ(己身)			1				1
おもかげ(面影)	3	4					7
おもわ(面輪)			1				1
かさ(瘡)			1				1
かしら(頭)	1						1
かた(肩)			1				1
かたかほ(片顔)				1			1
かばね(屍)		1		1			2
かほ(顔)	2	3		5	1		6
かほのへ(顔上)		1					1
かほばせ(顔)		1					1
かほよし(顔佳)			1				1
くぐそ(黄尿)				1			1
くそ(糞・尿)		1					1
くそのへ(尿上)		1					1
くち(口)	1		1	1			3
くちそそぐ(口漱)		1					1
くちびる(唇)		1					1
くび(首)		1	1	2			4
くろかみ(黒髪)	1			1			2
くろくび(黒首)	1						1
くろげ(黒毛)				1			1
け(毛)		1					1
けずね(毛臍)				1			1
こし(腰)				1			1

	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
こしほね(腰骨)				1			1
こぶし(拳)		2					2
こまのを(駒尾)			1				1
しだりを(垂尾)		1		1			2
しらひげ(白鬚)	1	1		1			3
しり(尻)		2		1			3
じんきよ(腎虚)	1						1
せ(背)		1	1				2
せのうへ(背上)		1					1
たつのあぎと(龍顎)				1			1
たてがみ(立髪・鬣)	1	1		1			3
たなそこ(手底)	1						1
たぼ(髻)				1			1
たまのを(玉緒)	1						1
ち(血)	1			2			3
ぢかめ(直目)						1	1
ちしほ(血潮)	3						3
ちのあめ(血雨)	1			1			2
ちのなみだ(血涙)			1				1
つきげ(月毛)		1	1				2
づつうず(頭痛)		1					1
つつが(恙)			1				1
つば(唾)		1					1
つばさ(翅)		1					1
つめ(爪)		1					1
つら(面)				1			1
つらのかは(面皮)				1			1
て(手)	2	6	5	7		3	23
てのなか(手中)		1					1
てのひら(掌)		1					1
てふのは(蝶羽)				1			1
てをひく(手引)	1						1
とりのくち(鶏口)		1					1
ながを(長尾)		1					1
なみだ(涙)	2		2	1			5
なみだがは(涙川)	1						1
なみだのかは(涙川)	1						1
なみだのつゆ(涙露)	1						1
なむたい(男體)	1						1
によたい(女體)	1						1
ねくたれがみ(寝腐髪)		1					1
ねつ(熱)			2	1	1		4
のど(喉)	1						1
は(齒)					1		1
はぎ(脛)		1					1
はし(嘴)		1					1
はだ(肌)					1		1
はだか(裸)		1	1				2
はな(鼻)	1		1				2



肢体  
三

[illegible]

時令	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あき(秋)	14	9	5	2			30
あきたつ(秋立)	2						2
あきのか(秋香)		1					1
あきのた(秋田)		1					1
あきのにしき(秋錦)	1						1
あきのはつかぜ(秋初風)	1	5		1			7
あきのひ(秋日)		1					1
あきのひとよ(秋一夜)	1						1
あきのみそら(秋御空)			1				1
あきのゆふぐれ(秋夕暮)	1						1
あきのゆふべ(秋夕)			1				1
あきのよ(秋夜)	3	1		1			5
あきのよのつき(秋夜月)	1						1
あきふかし(秋深)		1					1
あくるひ(明日)			1				1
あけがた(明方)	1	2		1			4
あけくれ(明暮)	1						1
あけぼの(曙)	2			1			3
あさ(朝)	1	6	1	6			14
あさて(明後日)	1						1
あさまだき(朝)	1						1
あした(朝)		1		1			2
あす(明日)	5	1	1	2	1		10
あめあがり(雨上)		1					1
ありあけ(有明)	1						1
ありあけのつき(有明月)	5						5
あるとき(或時)				1			1
あるひ(或日)				1			1
いくとせ(幾年)	1		1		1		3
いくももとせ(幾百年)			1				1
いくよ(幾夜)	1						1
いつか(五日)				1	1		2
いつかのせちゑ(五日節會)		1					1
いにしへ(古)	1	3	1	5	2		12
いほひ(五百日)		1					1
いま(今)	23	9	7	7	4		50
いまさら(今更)			1				1
いまは(今)	1						1
いままで(今迄)	1						1
うすづきよ(薄月夜)	1	2		1			4
うち(内)…時間的位置					1		1
うづき(四月)			1	1			2
うまのとき(馬時)				1			1
えんにち(縁日)		1					1
おひるすぎ(御晝過)			1				1
おぼろづきよ(朧月夜)				1			1
おぼろよ(朧夜)		1					1
かへるさ(歸)				1			1

時令  
一

時令	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
かみよ(神代)	3			1			4
かんだまつり(神田祭)				1			1
きぬぎぬ(後朝)				1			1
きのふ(昨日)	5	4		4			13
くにははじめ(國始)				1			1
くにのまつり(國祭)				1			1
くれ(暮)	1		1				2
けさ(今朝)	1						1
けふ(今日)	15	11	7	9	6	1	49
けふのひ(今日日)		1		1			2
ごぐわついつか(五月五日)				1			1
ごぐわつついたち(五月一日)				1			1
ごご(午後)			1				1
ここのか(九日)				1			1
こぞ(去年)					2		2
ことし(今年)	1	1		1	2		5
このごろ(此頃)		1		2			3
ごやのかね(後夜の鐘)		1					1
こよひ(今宵)	6	2	1	1			10
さいさいねんねん(歳々年々)		1					1
さつき(五月)		1	1				2
さみだれどき(五月雨時)			1				1
さよふく(小夜更)		1		3			4
しとせまへ(四年前)			1				1
じふよか(十四日)				1			1
じふよつか(十四日)			1				1
そのむかし(其昔)			1				1
たなばた(七夕)	1	1					2
つき(月)…太陽暦の区分					1		1
つきづき(月々)				1			1
つきひ(月日)	3						3
つきよ(月夜)		1	1	6			8
つごもり(晦)				1			1
つねのとき(常時)				1			1
つゆ(梅雨)…雨期		1					1
てんちやうせつ(天長節)		1					1
てんびやう(天平)			1				1
とき(時)	3	5	4	8	1	2	23
ときなし(時無)	2						2
とし(年)		6	2	5		2	15
としどし(年々)				1			1
としのうち(年内)	1						1
としのくれ(年暮)	1						1
としのこなた(年此方)	1						1
としのは(年端)						2	2
としのはじめ(年始)			3	2	1	4	10
としのよ(年夜)				1			1
どう(土用)		1					1
あかつき(暁)	2	2	3	5			12

時令	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
とよのあき(豊秋)				1			1
とをか(十日)				1			1
とをかあまり(十日余)				1			1
ながきひ(永日)		6	1	2			9
なかば(半)…時間的位置	1						1
なつ(夏)	19	8	2	4			33
なつのつき(夏月)			1				1
なつのひ(夏日)	2	5	1				8
なつのは(夏夜)	2		2				4
なつのはのつき(夏夜月)			1				1
なぬか(七日)		1		1			2
にひとし(新年)				2		1	3
にひとしのうた(新年歌)				1			1
ねんねんさいさい(年々歳々)		1					1
のち(後)	4		1	1	1		7
のちのひ(後日)	1						1
のちのは(後世)	2			2			4
はじめ(始・初)	1	1	2				4
はつか(二十日)				1			1
はつかあまり(二十日余)				1			1
はつはる(初春)				1			1
はつふゆ(初冬)			1				1
はつは(初夜)		1					1
はなざかり(花盛)		1					1
はなのさかり(花盛)	1		1	1			3
はる(春)	15	16	5	7	6	2	51
はるあさし(春浅)			1				1
はるごと(春毎)					1		1
はるさむみ(春寒)		1					1
はるさる(春去)	1					1	2
はるたつ(春立)	2			2			4
はるのあけぼの(春曙)		1					1
はるのあさ(春朝)			1				1
はるのあめ(春雨)	1						1
はるのこころ(春心)	1						1
はるのつき(春月)	1						1
はるのは(春野)	2						2
はるのひ(春日)	1			4	1		6
はるのみづ(春水)		4					4
はるのゆふべ(春夕)		1		1			2
はるのは(春夜)	1	4	1	10			16
はるのはのつき(春夜月)		3		1			4
はるひ(春日)		1		2			3
はるふかみ(春深)	1						1
はるゆく(春行)		1					1
ひ(日)…時間的区分	10	16	10	13	3	1	53
ひがん(彼岸)			1				1
ひぐらし(日暮)		1					1
ひなまつり(雛祭)		1					1

時  
令  
  
四

時令	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ひので(日出)	1						1
ひる(昼・晝)	3	3	2	1			9
ひるなか(晝中)		1					1
ひるねのひ(晝寢日)				1			1
ふつか(二日)				1			1
ふゆ(冬)	4	2	1	2			11
ふゆのひ(冬日)				1			1
ぼんのつき(盆月)		1					1
みか(三日)			1				1
みつか(三日)		1					1
みとせまへ(三年前)						1	1
みなづき(水無月)	2	1					3
むかし(昔)	12	23	8	3	4		50
むかしのこと(昔事)			1				1
むかしのとも(昔友)		1					1
むかしのひと(昔人)				2			2
むかしむかし(昔昔)		1					1
めんくわいのひ(面會日)				1			1
もちのよ(望夜)		1					1
ゆあみどき(湯浴時)		1					1
ゆふ(夕)					1		1
ゆふぐれ(夕暮)	2	4			1		7
ゆふさる(夕去)	1		1				2
ゆふべ(夕)	1	5	2	4	1		13
ゆふべのかぜ(夕風)	1						1
ゆふまぐれ(夕間暮)		1					1
よ(夜)	5	13	4	10	1		33
よくだち(夜降)				1			1
よごと(夜毎)	1	1					2
よごろ(夜頃)	1						1
よのどこ(夜床)				1			1
よは(夜半)	4	5	1	2			12
よはのあらし(夜半嵐)	1						1
よひ(宵)				1			1
よひのま(宵間)	1						1
よふく(夜深)		1					1
よべ(昨夜)				1			1
よべのま(昨夜間)				1			1
よる(夜)	3	3	2	2			10
よるのころも(夜衣)				1			1
よをこむ(夜込)	5	3		2			10
をととひ(一昨日)				1			1
をりふし(折節)			1				1
をりをり(折折)		1					1

数字	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あきのひとよ(秋一夜)	1						1
あまた(数多)			2	1			3
いくさか(幾坂)	1						1
いくたび(幾度)		1					1
いくちまき(幾千巻)			1				1
いくとせ(幾年)	1		1		1		3
いくへ(幾重)	1						1
いくもとせ(幾百年)			1				1
いくよ(幾夜)	1						1
いくよろづまき(幾万巻)			1				1
いそ(五十)	1						1
いちじ(一字)			1				1
いちのひと(一人)			1				1
いちり(一里)			1				1
いちりん(一輪)				2			2
いちりんばら(一輪薔薇)				1			1
いつか(五日)				1	1		2
いつかのせちゑ(五日節會)		1					1
いつつ(五個)	1	1					2
いっとしやう(一等賞)	1						1
いほえ(五百枝)		1					1
いほはた(五百機)		1					1
いほひ(五百日)		1					1
いほへ(五百重)	1						1
うづき(四月)			1	1			2
かず(數)	1	1		2			4
くじふく(九十九)		1					1
ごくわついつか(五月五日)				1			1
ごくわつついたち(五月一日)				1			1
ここのか(九日)				1			1
ここのたび(九度)			1				1
ここのつ(九個)	1	2					3
ここのへ(九重)		1	2	1	1		5
ごじふねん(五十年)		1					1
ごしやく(五尺)		1					1
ごせ(五畝)		1					1
ごたん(五反)		1					1
ごちうのたふ(五重塔)		1					1
ごまい(五枚)			1				1
ごまんびき(五萬匹)		1					1
ごろくほん(五六本)		1					1
ごぬ(五位)				1			1
さつき(五月)		1	1				2
さむがい(三階)			1				1
さむじふろくほう(三十六峰)		1					1
さむすん(三寸)		1					1
さむぜん(三千)		2		1			3
さむぜんがう(三千號)				1			1

数字  
一

数字	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
さむぜんにち(三千日)				1			1
さむぜんぶん(三千文)				1			1
さむそう(三層)		1					1
しごにん(四五人)			1				1
しごまい(四五枚)				1			1
しじふり(四十里)	1						1
しちじふにたき(七十二瀧)				1			1
しちにん(七人)		1					1
しとせ(四年)			1				1
しとせまへ(四年前)			1				1
しとだる(四斗樽)	1						1
じふけんだな(十軒店)		1					1
じふじ(十字)				1			1
じふば(十把)				1			1
じふはちじかん(十八時間)	1						1
じふまん(十萬)		1	1				2
じふよか(十四日)				1			1
じふよつか(十四日)			1				1
しゐ(四位)				1			1
せんこ(千戸)		1					1
せんねん(千年)	1						1
せんまん(千萬)			1				1
せんり(千里)				1			1
だいいち(第一)			1				1
ただひとり(只一人)		1					1
ちぐさ(千草)			1		1		2
ちくさのはな(千種花)			1				1
ちさと(千里)	1		1		1		3
ちぢ(千千)	1						1
ちつゆ(千露)				1			1
ちとせ(千年・千歳)		2					2
ちばな(千花)				1			1
ちひら(千枚)				1			1
ちひろ(千尋)		1					1
ちもと(千本)	1						1
ぢやうろく(丈六)	1						1
ちよ(千夜)	1						1
ちよ(千代)	4	3	1				8
ちよろづかみ(千萬神)			1				1
ととせ(十年)			1				1
とひら(十枚)				1			1
とへはたへ(十重二十重)	1						1
とを(十)		1					1
とをか(十日)				1			1
とをかあまり(十日余)				2			2
とをかまり(十日余)				1	1		2
とをまり(十余)		1					1
とをまりいつつ(十余五)	1						1
なな(七)				1			1

数字	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ななくさ(七草)					1		1
ななたび(七度)			1				1
ななつ(七個)	1						1
ななとせ(七年)		1					1
ななよ(七夜)		1					1
なぬか(七日)		1		1			2
にかい(二階)			1				1
にき(二騎)				1			1
にさむずん(二三寸)			1				1
にしやく(二尺)		1		1			2
にぢやうごしやく(二丈五尺)				1			1
にのこゑ(二聲)	1						1
には(二羽)				1			1
にまい(二枚)			1				1
にりん(二輪)			1				1
はこねのななゆ(箱根七湯)		1					1
はたちあまりやつ(二十余八)			1				1
はたとせ(二十年)	2						2
はつか(二十日)				1			1
はつかあまり(二十日余)				1			1
はつかのつき(二十日月)	2						2
ばんこく(萬國)	1						1
ひかず(日數)	1						1
ひといろ(一色)	1						1
ひとつね(一畝)				1			1
ひとえ(一枝)		1					1
ひとえだ(一枝)	2	2		1		1	6
ひとこゑ(一聲)	4	3	1	1	1		10
ひとさか(一尺)				1			1
ひとすぢ(一筋)		1					1
ひとたび(一度)	1		1			1	3
ひとつ(一個)	12		2	2	1		17
ひとつひ(一火)				1			1
ひとつや(一家)	3	1					4
ひとつら(一連)	1						1
ひとはなごろも(一花衣)	1						1
ひとひ(一日)					1		1
ひとひら(一枚)				2			2
ひとふさ(一房)					1		1
ひとむら(一村)		1					1
ひとむら(一群)		1					1
ひとむらあやめ(一群菖蒲)		1					1
ひとむらすuki(一群薄)		1					1
ひとむれ(一群)		1					1
ひとめ(一目)				1			1
ひともじ(一文字)				1			1
ひともと(一本)	1						1
ひともとやなぎ(一本柳)		1					1
ひとよ(一夜)	2	2					4



数字	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ひとり(一人・獨)	3	17	8	4	1		33
ひとわん(一椀)				1			1
ひとをけ(一桶)		1					1
ひのかず(日數)	1						1
ひやく(百)		1					1
ひやくあまり(百余)				1			1
ひやくねん(百年)				1			1
ひやくばかり(百許)				1			1
ひやくまん(百萬)		1	1				2
ふたかみへ(二抱)			1				1
ふたたび(再)		3	1	3	1	1	9
ふたつ(二個)	5	3	2	4	1		15
ふたば(二葉)	1	1					2
ふたひら(二片)				1			1
ふたふさ(二房)				1			1
ふたへ(二重)	1						1
ふたむら(二群)				1			1
ふたり(二人)		1	5	4	2	1	13
ふつか(二日)				1			1
ほうぢやう(方丈)				1			1
みかみへ(三抱)		1	1				2
みそとせ(三十年)		1					1
みたび(三度)	1						1
みたり(三人)			1				1
みつ(三個)	2	2		1			5
みつか(三日)		1					1
みつば(三葉)	1			1			2
みとせ(三年)		1	1	2			4
みとせまへ(三年前)						1	1
みひとつ(身一)	1						1
みへ(三重)	1						1
みもとまつ(三本松)					1		1
みもととせ(三百年)				1			1
むそ(六十)	1						1
むつ(六個)	1	2					3
むひら(六片)				1			1
もも(百)		1					1
ももたらず(百足)				1			1
もちたび(百千度)				1			1
もちふみ(百千文)				1			1
ももとせ(百年・百歳)		2					2
ももひろ(百尋)				1			1
ももやそ(百八十)				1			1
やぐるま(八車)		1					1
やしほぢ(八汐路)				2			2
やしま(八洲)	1						1
やそ(八十)				1			1
やちとせ(八千歳)		1					1
やちひろ(八千尋)			1				1

[illegible]

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
あがき(足掻)…馬の動作	1						1
あがきのおと(足掻音)				1			1
あかるさ(明)	1						1
あきのか(秋香)		1					1
あけやう(開様)	1						1
あさかげ(朝陰)			1				1
あしのした(足下)	1						1
あしべ(芦辺)	1						1
あしまがくれ(蘆間隠)	1						1
あたひ(價)				1			1
あたひなし(價無)				1			1
あたまのうへ(頭上)		1					1
あたり(辺)		2	1	1			4
あちはひ(味)			1				1
あつさ(厚)	1						1
あつさ(暑・熱)	5	2		1			8
あづま(東)		1					1
あと(後)	6	2	2				10
あと(跡・迹)	9	6	2	3		1	21
あとかた(跡方)	1						1
あとかた(跡型)				1			1
あな(穴)			1	1			2
あはひ(間)	2		1				3
あひおひ(相生)	1						1
あふぎのかぜ(扇風)	1						1
あまつつみ(雨障)		1					1
あまつひかげ(天津日影)	1						1
あまり(余)	1						1
あゆみ(歩)…馬の動作	1						1
あらいそへた(荒磯端)				1			1
あらだて(粗建)			1				1
ありし(在)				1			1
ありそへ(荒磯邊)			1	1			2
ありたけ(有丈)	1						1
いかつ(嚴)		1					1
いき(粋)			1				1
いきほひ(勢)…水の勢い	1						1
いくさのなか(戦中)			1				1
いけのべ(池邊)				1			1
いしかげ(石陰)				1			1
いせのうらわ(伊勢浦廻)	1						1
いそべ(磯邊)				1			1
いそわ(磯回)		1					1
いただき(頂)	2	4	1				7
いち(位置)				1			1
いちなか(市中)		2	1				3
いとまなみ(暇無)			1				1
いな(否)		1					1

	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
いぬみ(戌亥)			1				1
いはのへ(岩上)		1	1	1			3
いはま(岩間)		1					1
いびき(軒)		1					1
いびきのうへ(軒上)				1			1
いへのあと(家跡)				1			1
いもがり(妹許)		1					1
いろか(色香)	1						1
うきね(浮寝)	1						1
うごき(動)…鳥居の動き		1					1
うしとら(丑寅)		1					1
うしろ(後)	3	3	1				7
うすのね(臼音)		1					1
うすやうのへ(薄様上)		1					1
うち(内)		1	2	4			7
うちと(内外)		1					1
うちはのかぜ(團扇風)		1					1
うつむけ(俯)…花の状態		1					1
うつりが(移香)	1						1
うなじね(項根)		1					1
うへ(上)	4	3	2	3	3		15
うまさ(旨)	2						2
うみづら(海面)	1						1
うみのそこ(海底)			1				1
うみのへ(海上)		1					1
うみのまうへ(海眞上)	1						1
うみび(海傍)				1			1
うみべ(海邊)		1					1
うめがか(梅香)	2			1			3
うめのこのま(梅木間)				1			1
うら(裏)		1					1
うら(末)	1						1
うらみ(恨)…花の感情	1						1
うららか(麗)	1						1
うれ(末)		1					1
えだうつり(枝移)…動物の動作			2				2
えのかみ(江上)		1					1
えむのは(檐端)	1						1
えれきとる(エレキトル)？			1				1
えんさき(椽先)		1					1
おきべ(沖邊)	1						1
おく(奥)	2	3	2	3			10
おしかたむけ(押傾)？				1			1
おと(音)	12	14	3	5			34
おとなし(音無)	1						1
おとなしのかはべ(音無河邊)			1				1
おにはべ(御庭邊)			1				1
おひすゑ(生末)					1		1
おほかた(大方)		1					1

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
おほき(大)				1			1
おほみまへ(大御前)				1			1
おほやけ(公)		1		2		1	4
おまへ(御前)		1		1			2
おもて(表)		1					1
おもとのみやうぶ(御許命婦)			1				1
おもひ(思)…鹿のもの			1				1
おや(親)…鳥類の親	1	2					3
か(香)		1		2	1	4	8
かい(解)				1			1
かいじやう(海上)	1						1
かいと(垣外)				1			1
かきつ(垣内)				1			1
かきね(垣根)	1	4					5
かきのうち(垣内)			1				1
かきのと(垣外)		1		1			2
かぎり(限)	8	1	1				10
かく(香)					1		1
かくやうろうじやう(岳陽樓上)			1				1
かげ(陰)	3	2	1	3			10
かげ(影)	6	5	1	6			18
かげ(影)…光	1	3	1	3			8
かさは(笠端)		1					1
かさのへ(笠上)				1			1
かさのへ(傘上)				2			2
かすみのそこ(霞底)	1						1
かぜ(風)…人工のもの		1					1
かた(方)	8	1	1				10
かた(型・形)				1			1
かたがは(片側)		1					1
かたち(形)			1				1
かたてり(片照)		1					1
かたなびき(方靡)	1						1
かたはら(傍・側)		1	3	6			10
かたへ(片方・方辺)	1			1	2		4
かたやまかげ(片山陰)		1	1				2
かたより(片寄)	1						1
かぢのおと(楫音)				1			1
かどぐち(門口)		3					3
かどべ(門邊)	1			1			2
かねのね(鐘音)	2						2
かはかみ(川上)		3					3
かはぐち(川口)		1					1
かはのは(川端)	1						1
かはべ(河邊)	3	2					5
かはり(代)	1						1
かべのへ(壁上)				1			1
かほのへ(顔上)		1					1
かみ(上)	2			1			3

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
かみさぶ(神)	1	1					2
かみのおまへ(神御前)		1		1			2
かやのへ(蚊帳上)	1						1
から(空)		1					1
がり(許)			1	3			4
かりがね(雁・雁金・雁音)	1	1					2
かりそめ(仮初)			1				1
かりのな(仮名)…鳥の名前	1						1
かをり(香)	1						1
きざはしのへ(階上)				1			1
きしかた(來方)			1				1
きしべ(岸邊)				1			1
きしやのね(汽車音)				1			1
きた(北)		3	1				4
きたのみやこ(北都)			1				1
きつねのだいわう(狐大王)				1			1
きのかげ(木影)				1			1
きのした(木下)	1						1
きのすゑ(木末)		1					1
きのもと(木下)			1				1
きはみ(極)				4	2		6
ぎぼしのうへ(擬寶珠上)			1				1
きみ(君)…獣に対するもの	1						1
きりのこずゑ(桐木末)		1					1
くうき(空気)			1				1
くさぐさ(種種)	1			2			3
くさまがくれ(草間隠)	1						1
くさむらがくれ(草群隠)	1						1
くそのへ(屎上)		1					1
くだのね(管音)				1			1
くにのと(國外)				1			1
くぬち(國內)			1				1
くま(隈)		1			1		2
くまなし(隈無)	2						2
くまなし(隈無)	1						1
くものへ(雲上)		1					1
くものみねのへ(雲峰上)		1					1
くもま(雲間)	1	1					2
くもり(曇)…天気ではない				1	1		2
くらさ(暗)	1						1
くるまのうへ(車上)			1				1
くわんていべうか(關帝廟下)		1					1
けしき(景色)	2	4		1			7
こ(子)…動物の子供	2	3	3	3			11
こがくれ(木隠)		1					1
こかげ(木陰)	2			4			6
こがさくれ(小傘隠)					1		1
こぐさがくれ(小草隠)		1					1
こけのした(苔下)		1					1

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
こころ(心)・・・人間以外のもの	8						8
こころあるごと(心有毎)	1						1
こころのそこ(心底)	1						1
こころばかり(心許)		1					1
こじまがくれ(小嶋隠)	1						1
こずゑ(梢)	2	1	3	6			12
こだま(木霊・木玉・餅)	2		1				3
こと(事)	15	6	4	3	1	1	30
ことごと(事事)	1						1
ことのね(琴音)	1						1
ことのほか(殊外)				1			1
こともなし(事無)	1						1
こな(粉)				1			1
このくれ(木暗)		1					1
このくれしげ(木暗繁)		1					1
このしたかげ(木下陰)	2						2
このま(樹間)	1						1
このもかのも(此面彼面)	1						1
こひ(戀)・・・鹿のもの		1					1
こまがたのへ(駒形上)		1					1
こまごま(細細)	1						1
こめ(こ(米粉)						1	1
ころ(頃)	7	9	1	2			19
こゑ(聲)・・・人声以外	36	5		1	4		46
こんとん(混沌)	1			1			2
ざ(坐)・・・座る場所		1		1			2
さかなのうへ(肴上)				1			1
さかはぎ(逆剥)					1		1
さかひ(境・堺)		1					1
さかり(盛)	1	2	1	2		1	7
さき(咲)			1			1	2
さき(先)	3			2			5
さきをおふ(先追)		1					1
さくらのうへ(櫻上)		1					1
さけらく(咲)				1			1
さしなみ(差並)		1					1
さにはべ(狭庭邊)				4	2		6
さびしさ(淋)・・・人間のでない		2					2
さぶしら(淋等)・・・雀の様子					1		1
さへづり(轉)			1				1
さま(様)	2	6					8
さまざま(様様)	1	1					2
さみのね(三味音)			1				1
さむさ(寒)				3			3
さやけさ(清)		1					1
しいう(雌雄)		1		1			2
した(下)	1	2	1	5			9
したかげ(下陰)	1	3		1	1		6
したやみ(下闇)				1			1

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
しにぎは(死際)	1						1
しひのこずゑ(椎梢)				1			1
しほのへ(汐上)				1			1
しまのうらわ(島浦廻)			1				1
しまべ(島邊)				1			1
しも(下)				1			1
しもがれ(霜枯)	1						1
じやうか(城下)		1					1
じやうぐわい(城外)		1					1
じやうちう(城中)		1					1
じやくまく(寂莫)		1					1
しるし(印・徴・標)	3				1		4
すがた(姿)	3		2	1			6
すぎかきね(杉垣根)		1					1
すぎのこずゑ(杉木末・杉梢)		2		2			4
すぎのこのま(杉木間)				1			1
すぎのしたかげ(杉下陰)		1					1
すぎのへ(杉上)		1					1
すきま(隙間)	1			1			2
すくな(少)	1						1
すげがさのへ(菅笠上)		1					1
すごものうへ(簀薦上)			1				1
すずしさ(涼)	3		1				4
すずのね(鈴音)	3						3
すずむしのね(鈴蟲音)	1						1
すそ(裾)…末端部分		1					1
すそわ(裾回)		1					1
すだち(巢立)		1					1
すべ(術)						2	2
すべなし(術無)			1				1
すまのうらわ(須磨浦廻)		2					2
すみ(隅)		3	1	1			5
すゑ(末)	2	1	1				4
すゑのよ(末世)					1		1
せつな(刹那)		1					1
せのうへ(背上)		1					1
せみのね(蟬音)	1						1
せん(線)			1				1
そきへ(退方)					1		1
そくへ(退方・側辺)				4			4
そこ(底)	2	1					3
そと(外)			1	5			6
そば(側)		1					1
そらのまなか(空真中)			1				1
だいのうへ(臺上)				1			1
だうわんやまのへ(道灌山上)			1				1
たえま(絶間)	2						2
たぐひ(類)		1					1
たけむらかげ(竹群陰)				1			1



無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
たけやぶのへ(竹藪上)		1					1
ただなか(直中)			1				1
たたみのうへ(畳上)			1		1		2
たなか(田中)			1				1
たにま(谷間)	2						2
たね(種)…源	3		1				4
たび(度)		1					1
たびごと(度毎)	1						1
たましき(玉敷)				1			1
たますき(玉透)						1	1
たまだれ(玉垂)		1		1			2
たまのね(玉音)				1			1
ため(爲)		4	3	4	1	2	14
ためし(例)		1	1				2
たもとのうへ(袂上)	1						1
たより(頼)	1						1
だるま(達磨)…豆の丸い様子				1			1
たゐなか(田井中)				2			2
ちから(力)…人力でない	3			1			4
ちげ(地下)			1				1
ちらく(散)			1				1
ちらまく(散)(連語)			1				1
ちりがた(散方)…散り際					1		1
つかのま(束間)	1						1
つがひ(番)				1			1
つぎ(次)			1	1			2
つきあかり(月明)		1					1
つきかげ(月影)	7		1	1			9
つきのおもて(月面)	1	1					2
つきのかげ(月影)	3						3
つきのひかり(月光)	2		2				4
つくえのうへ(几上・机上)				2			2
つつのね(筒音)	1	1					2
つどひ(集)…蠅の集まり				1			1
つね(常)		1		1			2
つま(妻)…動物の妻			2	1			3
てき(敵)…動物のもの	1						1
てのなか(手中)		1					1
てふのゆめ(蝶夢)	1						1
てんじやうてんげ(天上天下)		1					1
てんしんけうか(天津橋下)		1					1
てんしんけうじやう(天津橋上)		1					1
と(外)		2	1	5			8
ときは(常磐)	1						1
とこしへ(常)	2						2
とこのべ(床邊)				1			1
とこべ(床邊)			1				1
ところ(處)…空間的位置			1	1			2
ところ(處)…時間的位置			13	1			14

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ところどころ(處々)		1	1				2
とちう(途中)				1			1
とづくにだね(外國種)						1	1
とどろき(轟)				1			1
となり(隣)	1	2		3			6
となりのさと(隣里)		1					1
となりのむら(隣村)		1		1			2
とのも(外面)				6	1		7
とびのね(鶯音)						1	1
とほ(遠)				1			1
とほね(遠音)	1	1		1			3
とまのへ(苔上)	1						1
とも(友)…鳥の友			1		1		2
ともくづれ(共崩)		1					1
ともずり(共擦)	1						1
ともずれ(共擦)	1						1
ともに(共)	3	1	5	3			12
とりでのうへ(砦上)				1			1
とりのあと(鳥跡)	1						1
とりのね(鳥音)				1			1
とをを(撓)		1					1
な(名)…人間以外のもの	6	2	1	2			11
なか(中)	5	3	1	2		2	13
なかくぼ(中窪)				1			1
ながけく(長)				1			1
ながさ(永・長)		2		1			3
なかば(半)		2					2
ながめ(眺)	2			1			3
なから(半)			1				1
ながれ(流)	1	3	3	3			10
なぐさめがほ(慰顔)→植物のもの					1		1
なごり(名残)	2	3					5
なごりなし(名残無)			1				1
ななめ(斜)		4					4
なに(何)	5	1	3	3			12
なみのね(浪音)	2						2
なみのへ(波上)	1						1
なみのも(波面)	1						1
なむだいもんまへ(南大門前)		1					1
ならくのそこ(奈落底)			1				1
ならのこずゑ(檣梢)		1					1
なりはひ(生業)…蟻のもの		1					1
にし(西)	1	3		1			5
にしかた(西方)		1					1
にはなか(庭中)			1	1			2
にはのうち(庭内)			1				1
にはのおもて(庭面)			1				1
にはのも(庭面)	1						1
にはもせ(庭面狭)	3	1					4

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
にひこゑ(新聲)	1						1
にほひ(匂)	1	1		1			3
ね(音)	1	2					3
ねたみがほ(妬顔)…植物のもの					1		1
ねやのなか(闇中)			1				1
ねをなく(音鳴)	1						1
のきのは(軒端・檐端)	1	1		1			3
のきば(軒端・檐端)	2	6	1	3			12
のずゑ(野末)		2					2
のなか(野中)				1			1
ののすゑ(野末)		1					1
ののなか(野中)			1	1			2
のべ(野邊)	1					1	2
は(端)	1						1
ばいぶるのへ(バイブル上)			1				1
はう(方)		1					1
はがくれ(葉隠)	1	2			1		4
はかげ(葉陰)	1						1
はかべ(墓邊)				1			1
はさき(葉先)				1			1
はし(端)		1					1
はしのたもと(橋袂)			1				1
はすがた(蓮型)				1			1
はすゑ(葉末)		1				1	2
はたのなか(畑中)		1					1
はたのへ(旗上)			1				1
はたのへ(畑上)				1			1
はつね(初音)	2						2
はて(果)	1						1
はなのうへ(花上)	1						1
はなのか(花香)	1						1
はなのかげ(花影)	1						1
はなのへ(花上)		1					1
はなびのおと(花火音)			1				1
はは(母)…雀の母		1					1
はばたき(羽撃)		1					1
はまびのみや(濱辺宮)				1			1
はまべ(濱邊)	1		1				2
はやざき(早咲)		1					1
はらなか(原中)		1					1
ばらのか(薔薇香)				1			1
はるか(遙)	1						1
はれま(晴間)	1						1
はわけ(葉分)	1						1
ひ(非)				1			1
ひかげ(日影)	1						1
ひがし(東)	1	1		2			4
ひがしきかひ(東堺)				1			1
ひがしのうみ(東海)		1					1

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
ひかり(光)	2	1	2	7			12
ひだり(左)		1	1	2			4
ひびき(響)	1	2					3
ひま(暇)	2			4	1		7
ひま(隙)	2	1					3
ひむかし(東)		1					1
ひろまへ(廣前)			1	3			4
ひんだり(左)		1					1
ぶうちやうきう(武運長久) ?		1					1
ふえのね(笛音)		3		1			4
ふしのま(節間)	1						1
ふち(縁)					1		1
ふとけく(太)					1		1
ふねのなか(舟中・船中)		1	1				2
ふねのへ(船上)	1						1
ふゆがれ(冬枯)			1				1
ふゆざれ(冬曝)			1				1
へ(上)		1					1
へいのへ(塀上)				1			1
へいをん(平穩)	1						1
へり(縁)				1			1
へんげ(變化)		1					1
ほか(外)	2						2
ほかげ(火影)	1						1
ほげたのうへ(帆桁上)				1			1
ほしのひかり(星光)				1			1
ほど(程)	3	1					4
ほとけのまへ(佛前)			1				1
ほとり(畔・辺)		3				1	4
ほばしらのへ(帆檣上)	1	1					2
ほら(洞)				1			1
ほんばこのへ(本箱上)			1				1
ま(間)	3	1					4
まきた(眞北)				1			1
まくぼ(眞窪)				1			1
まくら(枕)…頭の方	2						2
まくらがみ(枕上)		1					1
まくらべ(枕邊)		1		4		4	9
まこと(誠・眞)…眞実	2	2	1		1		6
まこもがくれ(眞孤隠)	1						1
まさかり(眞盛)				1			1
まさき(眞先)			1				1
またのな(又名)…植物のもの			1				1
まつかぜ(松蔭)	1						1
まつこのかぜ(松木陰)				2			2
まつこのずゑ(松木末)	2		3	1			6
まつこのま(松木間)				2			2
まつのしたかぜ(松下陰)	1	1					2
まつのよはひ(松齡)	1						1

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
まどのうち(窓内)	1			2			3
まどのと(窓外)			1	3			4
まどのも(窓外面)	1						1
まなし(間無)	1						1
まひむき(眞日向)				1			1
まへ(前)	1	1	1	2			5
まま(儘)	2						2
まれ(稀)	1						1
みあしのした(御足下)			1				1
みぎ(右)			1	1			2
みきのもと(御城下)				1			1
みこと(尊・命)…蠅に対するもの				1			1
みさを(操)	1						1
みすがた(御姿)		2					2
みすゑ(御末)						1	1
みせさき(店先)		1					1
みだれ(亂)	1						1
みちのべ(路邊)	2	7	3	4			16
みづかさ(水嵩)		1		2			3
みづきき(水莖跡)	1						1
みづのながれ(水流)			1				1
みづのへ(水上)		1	1				2
みづのも(水面)	1						1
みづばちのへ(水鉢上)		1					1
みづべ(水邊)	1						1
みてのへ(御手上)			1				1
みどりのかげ(緑蔭)				1			1
みなかみ(水上)	4						4
みなとがはべ(湊川邊)			1				1
みなみ(南)		2		1			3
みなみのみ(南海)				1			1
みまへ(御前)				1			1
みやこはづれ(都外)			1				1
みやこべ(都邊)	1	4		3	1	1	10
むかひ(向)			1				1
むしのね(蟲音)	1						1
むしろほのへ(筵帆上)		1					1
むすび(結)	1						1
むすびめ(結目)				1			1
むねのへ(棟上)		1					1
むらだち(群立)	1			1			1
むらむら(群群)				1			1
むれ(群)		1					1
め(妻)…猫の妻		1					1
めしのへ(飯上)		1					1
めのした(眼下)			1				1
もちのへ(麴上)		1					1
もと(下・許)			1				1
もと(下・本)	3	2	2	2			9

無形名詞	30年以前	31年	32年	33年	34年	35年	計
もと(元)		1	1				2
もとあら(本荒)		1					1
もの(物)…物質でない	28	5	3	2	2	1	41
もみちのこずゑ(紅葉梢)			1				1
もみのこずゑ(樅梢)	1						1
もみのしたかげ(樅下陰)		1					1
もものしたかげ(桃下陰)		1					1
もやう(模様)				1			1
もりのへ(森上)			1	2			3
もろもろ(諸々)	1	1	1				3
やう(様)	2						2
やおもて(矢面)		1					1
やかげ(家陰)			1				1
やどり(宿)…蝶のもの		1					1
やなぎかげ(柳陰)		1					1
やねのへ(屋根上)			1				1
やのうち(家内)						1	1
やぶかげ(藪陰)		1					1
やまかげ(山陰)		3	1	4			8
やまかげ(山影)	1						1
やまなか(山中)		1					1
やまのいただき(山頂)		1					1
やまのうへ(山上)	1						1
やまのおく(山奥)	2	1	2				5
やまのかひ(山峡)		1					1
やまのは(山端)	4	2					6
やまのへ(山上)	1		1				2
やまのべ(山邊)				1			1
やまもと(山下)	1	1					2
やまわかれ(山別)…鳥の動作		1					1
やみ(闇)	1	1	2	6			10
ゆくかた(行方)	1						1
ゆくすゑ(行末)	1						1
ゆくて(行手)		1					1
ゆくへ(行方)	2	1		2			5
ゆふひかげ(夕日影)		2		1			3
ゆふやみ(夕闇)	1	1					2
ゆゑ(故)				1			1
よこ(横)	1						1
よこさま(横様)		1					1
よぎらのへ(夜櫻上)		1					1
よそ(余所)	2						2
よのなか(世中)	6	8	3	1	3		21
よも(四方)	1		1				2
らくくわすいめん(落花水面)				1			1
りうがた(龍形)				1			1
わ(輪)			1				1
わかばがくれ(若葉隠)		1					1
わかばかげ(若葉陰)		1					1

[illegible]

## 謝辞

本書は、約八年に渡り取り組んできた正岡子規の短歌の語彙研究を基に、博士号取得申請論文として纏めたものである。

本書を書くにあたり、多くの方々のご指導と励ましを頂いた。

指導ならびに主査の労をお取り下さった金子彰先生、審査にあたって研究へのご助言を下さいました坪内稔典先生、大久保喬樹先生、今井久代先生に改めて深謝申し上げたい。

最後に、大学院の同じ研究室にてお世話になった先輩後輩、またいつも見守り支えてくれている家族に、心から感謝申し上げる。

二〇一四年十一月

石井 翔子